昭和五年三月廿五日印刷
昭和五年四月一日發行

國譯一切經　阿含部　五

不許複製

編輯兼發行者　岩野眞雄
東京市芝區芝公園地七號地一番

印刷者　渡邊通夫
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

印刷所　日進舍
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

發行所
東京市芝區芝公園地七號地一番
大東出版社
振替東京一九四七一番
電話芝（三二）〇一四一〇六番番

製本所　　關角製本所

中阿含經卷第四十

これを比丘一百歳命存し、百歳數・時數・歳時數・月數・半月數・月半月數・晝數・夜數・晝夜數・食數・障礙數・食障礙數と謂ふ。比丘、若し尊師弟子の爲にする所有り、大慈哀を起し憐念愍傷し、義及び饒益を求め、安隱快樂を求むるは、我今已に作しぬ。汝、亦當に作すべし。無事處・山林・樹下・空・安靜處に至りて燕坐思惟し、放逸を得ること勿れ。懃加精進して後悔あらしむること莫れ。こはこれ我の教勅なり。これ我が訓誨なり』と。佛説是の如し。彼の諸の比丘佛の所説を聞きて歡喜奉行しぬ。

じ、或は燄摩天に生じ、或は兜率哆天に生じ、或は化樂天に生じ、或は他化樂天に生じぬ。我梵世の法を說きし時、諸の弟子等設し法を具足し奉行せる者有れば、四梵室を修し欲を捨離し、彼命終り已りて梵天に生ずるを得ぬ。我その時に於てこの念を作しぬ「我應に弟子等と同じく倶に後世に至りて共に一處に生ずべからず。我今寧ろ更に增上慈を修し、增上慈を修し已りて命終りて晃昱天中に生ずるを得べしと」。我後時に於て更に增上慈を修し、增上慈を修し已りて命終りて晃昱天中に生ずるを得ぬ。我その時に於て及び諸の弟子學道虛しからず大果報を得ぬ。我その時に於て自ら饒益し亦他を饒益し、多人を饒益し世間を愍傷し、天の爲人の爲、義及び饒益を求め、安隱快樂を求めぬ。我その時に於て法を說きて究竟に至らず、白淨を究竟せず、梵行を究竟せず、梵行を究竟し訖らざりき。我その時に於て生老病死・啼哭・憂慼を離れず、亦未だ一切の苦を脫するを得る能はざりき。比丘、我今出世し如來・無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師・號佛衆祐なり。我今自ら饒益し亦他を饒益し、多人を饒益し、世間を愍傷し、天の爲人の爲義及び饒益を求め安隱快樂を求め、我今法を說きて究竟に至るを得、白淨を究竟し、梵行を究竟し、梵行を究竟し訖る。我今已に生老病死・啼哭・憂慼を離れ、我今已に一切の苦を脫するを得たり。比丘、若し正說有れば、人命極めて少くして要ず後世に至る。應に善事を行ずべし、應に梵行を行ずべし。生じて死せざる無しと」。比丘、今これ正說なり。所以者何。今若し長壽有りて遠く百歲に至り或は小しく過ぐる者、若し長壽者有りて命存三百時なり。春時百・夏時百・冬時百なり。これ命存千二百月・春四百月・夏四百・冬四百なり。命存千二百月は、命二千四百半月、春八百・夏八百・冬八百なり。命存二千四百半月は、三萬六千晝夜、春萬二千・夏萬二千・冬萬二千なり。命存三萬六千晝夜は七萬二千食、及び障礙及び母乳なり。障礙有るに於て、苦しみて食せず、瞋りて食せず、病みて食せず、事有りて食せず、行來して食せず、王間に至りて食せず、齋日に食せず、得ざれば食せず。

爲に法を説く「摩納磨、我心慈と倶にして一方に遍滿し成就して遊び、是の如く二・三・四方・四維・上下一切に普周く心慈と倶にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。是の如く悲・喜［亦然り］。心捨と倶にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。摩納磨、汝等亦當に心慈と倶にして一方に遍滿し成就して遊び、是の如く二・三・四方・四維・上下、一切に普周く心慈と倶にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊び、是の如く悲・喜［亦然り］。心捨と倶にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶべしと」。是の如く尊師阿蘭那弟子の爲に法を説く。また次に尊師阿蘭那弟子の爲に梵世の法を説く。若し尊師阿蘭那爲に梵世の法を説く時、[六]諸の弟子等法を具足し奉行せざる者有れば、彼命終り已りて或は四王天に生じ、或は三十三天に生じ、或は燄摩天に生じ、或は兜瑟哆天に生じ、或は化樂天に生じ、或は他化樂天に生ず。若し尊師阿蘭那爲に梵世の法を説く時、諸の弟子等設し法を具足し奉行する者有れば、四梵室を修し欲を捨離し、彼命終り已りて梵天に生ずるを得。その時尊師阿蘭那而もこの念を作す「我應に弟子等と同じく倶に後世に至りて共に一處に生ずべからず。我今寧ろ更に增上慈を修し、增上慈を修し已り命終りて[七]晃昱天中に生ずるを得べしと」。尊師阿蘭那則ち後時に於て更に增上慈を修し、增上慈を修し已りて命終りて晃昱天中に生ずるを得。尊師阿蘭那及び諸の弟子學道虚しからず大果報を得。比丘、意に於て云何。昔時尊師阿蘭那は異人なりと謂ふや。この念を作すこと莫れ。所以者何。比丘當に知るべし。即ちこれ我なり。我その時に於て尊師阿蘭那と名づけ、我その時に於て無量百千の弟子有り、我その時に於て諸の弟子の爲に梵世の法を説きし時、諸の弟子等法を具足し奉行せざる者有れば、彼命終り已りて或は四王天に生じ、或は三十三天に生

【六】二巻「七日經」の末段を見よ。

【七】晃昱天(Ābhassara deva)。通常「光音天」と呼び、新譯に「極光淨天」と譯せるもの。

牛を牽きて殺すが如く甚だ得難しと爲し、至少少味にして大苦災患あり、災患甚だ多しと」。是の如く尊師阿蘭那弟子の爲に法を說く。また次に尊師阿蘭那弟子の爲に法を說く「摩尊磨、猶ほ機織その行緯に隨ひて成るに近づき、訖るに近づくが如し。是の如く摩納磨、人命は機織訖るが如く甚だ得難しと爲し、至少少味にして大苦災患あり、災尊甚だ多しと」。是の如く尊師阿蘭那弟子の爲に法を說く。また次に尊師阿蘭那弟子の爲に法を說く「摩納磨、猶ほ山水瀑漲し流疾く多く漂ふ所有り水流速かに駛せて須臾も停る無きが如し。是の如く摩納磨、人壽行き逕かに去りて一時も住ること無し。是の如く摩納磨、人命は駛水の流るゝが如く甚だ得難しと爲し、至少少味にして大苦災患あり、災患甚だ多しと」。是の如く尊師阿蘭那弟子の爲に法を說く。また次に尊師阿蘭那弟子の爲に法を說く「摩納磨、猶ほ夜闇に杖を以て地に投じ、或は頭を下にして地に墮し、或は頭を上にして地に墮し、或はまた臥して墮し、或は淨處に墮し、或は不淨處に墮すが如し。是の如く摩納磨、衆生無明の覆ふ所と爲り、愛の繫ぐ所と爲り、或は泥犂に生じ、或は畜生に生じ、或は餓鬼に生じ、或は天上に生じ、或は人間に生ず。是の如く摩納磨、人命は闇に杖もて地に投ずるが如く甚だ得難しと爲し、至少少味にして大苦災患あり、災患甚だ多しと」。是の如く尊師阿蘭那弟子の爲に法を說く。また次に尊師阿蘭那弟子の爲に法を說く「摩納磨、我世に於て貪伺を斷除し心諍有ること無く、他の財物、諸の生活の具を見て貪伺を起して我が得ならしめんと欲せず。我貪伺に於てその心を淨除す。是の如く瞋恚・睡眠・調悔「亦然り」。我世に於て疑を斷じ惑を度し、諸の善法に於て猶豫有ること無く、我疑惑に於てその心を淨除す。摩納磨、汝等世に於て亦當に貪伺を斷除し、心諍有ること無く、他の財物、諸の生活の具を見て貪伺を起して我が得ならしめんと欲せず、汝貪伺に於てその心を淨除すべし。是の如く瞋恚・睡眠・調悔「亦然り」。汝世に於て疑を斷じ惑を度し、諸の善法に於て猶豫有ること無かれと。」是の如く尊師阿蘭那弟子の爲に法を說く。また次に尊師阿蘭那弟子の

是の如く尊師阿蘭那弟子の爲に法を説く。また次に尊師阿蘭那弟子の爲に法を説き「摩納磨、猶ほ朝露渧の草上に在るが如し。日出づれば則ち消え、暫く有りて久しからず。是の如く摩納磨、人命は朝露の如く甚だ得難しと爲し、至少少味にして大苦災患あり、災患甚だ多しと」。是の如く尊師阿蘭那弟子の爲に法を説く。また次に尊師阿蘭那弟子の爲に法を説き「摩納磨、猶ほ大雨時に渧水泡と成りて或は生じ或は滅するがごとし。是の如く摩納磨、人命は泡の如く甚だ得難しと爲し、至少少味にして大苦災患あり、災患甚だ多しと」。是の如く尊師阿蘭那弟子の爲に法を説く。また次に尊師阿蘭那弟子の爲に法を説き「摩納磨、猶ほ杖を以て水中に投著し還出づること至りて速かなるがごとし。是の如く摩納磨、人命は杖を水に投じ出づること速かなるが如く甚だ得難しと爲し、至少少味にして大苦災患あり、災患甚だ多しと」。是の如く尊師阿蘭那弟子の爲に法を説く。また次に尊師阿蘭那弟子の爲に法を説き「摩納磨、猶ほ[五]新瓦杅水に投じて卽ち出し風熱中に著くに乾燥すること至りて速かなるがごとし。是の如く摩納磨、人命は新瓦杅水に漬すも速かに燥くが如く甚だ得難しと爲し至少少味にして大苦災患あり、災患甚だ多しと」。是の如く尊師阿蘭那弟子の爲に法を説く。また次に尊師阿蘭那弟子の爲に法を説く「摩納磨、猶ほ小段肉を大釜水中に著け、下に熾に火然せば速かに消盡し得る如し。是の如く摩納磨、人命は肉の消ゆるが如く甚だ得難しと爲し、至少少味にして大苦災患あり、災患甚だ多しと」。是の如く尊師阿蘭那弟子の爲に法を説く。また次に尊師阿蘭那弟子の爲に法を説く「摩納磨、猶ほ賊を縛し送りて標下に至りて殺すがごとし。その擧足に隨ひて歩歩死に趣き、歩歩命盡に趣く。是の如く摩納磨、人命は賊縛せられ標下に送りて殺さるゝが如く甚だ得難しと爲し、至少少味にして大苦災患あり、災患甚だ多しと」。是の如く尊師阿蘭那弟子の爲に法を説く。また次に尊師阿蘭那弟子の爲に法を説く「摩納磨、猶ほ屠兒牛を牽きて子を殺すが如し。その擧足に隨ひて歩歩死に趣き、歩歩命盡に趣く。是の如く摩納磨、人命は

【五】新瓦杅。新しき土製の水飲器。或は盂に作る、飯器なり。

人命極めて少くして要ず後世に至る。應に善事を作すべし、應に梵行を行ずべし。生じて死せざる無し。然るに今世の人法行に於て、義行に於て、善行に於て、妙行に於て無爲にして求むる無し。我寧ろ鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして學道すべしと」。ここに於て梵志阿蘭那若干國の衆多の摩納磨の所に往至し而も彼に語げて曰く「諸の摩納磨、我靜處に獨住し燕坐して思惟し、心にこの念を作しぬ、甚だ奇なり、甚だ奇なり。人命極めて少くして要ず後世に至る。應に善事を作すべし、應に梵行を行ずべし。生じて死せざる無し。然るに今世の人法行に於て、義行に於て、善行に於て妙行に於て無爲にして求むる無し。我今寧ろ鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして學道すべし。諸の摩納磨、我今鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして學道せんと欲す。汝等當に何等を作すべきやと」。彼の若干國の衆多の摩納磨白して曰く「尊師、我等の知る所皆師恩を蒙る。若し尊師鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして學道すれば、我等亦當に鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして彼の尊師に從ひて出家學道すべしと」。ここに於て梵志阿蘭那則ち後時に於て鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道す。彼の若干國の衆多の摩納磨も亦鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして彼の尊師梵志阿蘭那に從ひて出家學道す。これを尊師阿蘭那と爲し、これを尊師阿蘭那の弟子の名號生ずと爲す。その時尊師阿蘭那弟子の爲に法を說き「諸の摩納磨、甚だ奇なり、甚だ奇なり。人命極めて少くして要ず後世に至る。應に善事を作すべし、應に梵行を行ずべし。生じて死せざる無し。然るに今世の人、法行に於て、義行に於て、善行に於て、妙行に於て無爲にして求むる無しと」。その時尊師阿蘭那弟子の爲に法を說き「諸の摩納磨、甚だ奇なり、甚だ奇なり。人命極めて少くして要ず後世に至る。應に善事を作すべし、應に梵行を行ずべし。生じて死せざる無し。然るに今世の人、法行に於て、義行に於て、善行に於て、妙行に於て無爲にして求むる無しと」。

くして要ず後世に至る。應に善事を作すべし。應に梵行を行ずべし。生じて死せざる無し。然るに今世の人法行に於て、義行に於て、善行に於て、妙行に於て無爲にして求むる無しと」。世尊、我等共にこの事を論じこの事を以ての故に講堂に集坐す』と世尊歎じて曰はく『善き哉、善き哉、比丘、謂く汝この說を作す「諸賢、甚だ奇なり、甚だ奇なり。人命極めて少くして要ず後世に至る。應に善事を作すべし。應に梵行を行ずべし。生じて死せざる無し。然るに今世の人法行に於て、義行に於て、善行に於て、妙行に於て無爲にして求むる無しと。」所以者何。我亦是の如く說く、「甚だ奇なり、甚だ奇なり。人命極めて少くして要ず後世に至る。應に善事を作すべし、應に梵行を行ずべし。生じて死せざる無し。然るに今世の人法行に於て、義行に於て、善行に於て、妙行に於て無爲にして求むる無しと。」所以者何。乃ち過去世の時、衆生有りて壽八萬歲なり。比丘、人壽八萬歲の時この閻浮洲極大豐樂にして饒く財珍寶あり、村邑相近くして鷄の一飛の如し。比丘、人壽八萬歲の時女年五百にして乃ち當に出嫁すべし。比丘、人壽八萬歲の時、唯是の如き病有り。謂く寒・熱・大・小便・欲・不食・老にして更に餘患無し。比丘、人壽八萬歲の時、王有り、[二]拘牢婆と名づけ轉輪王爲り、聰明にして智慧あり、四種の軍有りて天下を整御し己に由りて自在、如法の法王にして七寶を成就す。彼の七寶は輪寶・象寶・馬寶・珠寶・女寶・居士寶・主兵臣寶、これを謂ひて七と爲す。千子具足し顏貌端正、勇猛無爲にして能く他の衆を伏し、必ず當にこの一切の地乃至大海を統領すべし。刀杖を以てせず、法を以て教令して安隱を得しむ。比丘、拘牢婆王に梵志有りて[三]阿蘭那大長者と名づく。父母の擧ぐる所と爲り生を受くること清淨にして、乃至七世の父母種族を絕たず、生生惡無く、博聞總持にして、四典經を誦過し、深く因緣・正文・戲・五句說に達す。比丘、梵志阿蘭那、無量百千の[四]摩納磨有り。梵志阿蘭那無量百千の摩納磨の爲に一無事處に住して經書を教學す。その時梵志阿蘭那靜處に獨住し燕坐して思惟し、心に是の念を作す「甚だ奇なり、甚だ奇なり。

【二】拘牢婆（Koravya）。三一卷「賴吒惒羅經」に出づ。

【三】阿蘭那（Araka）。

【四】摩納磨（Mānava）。婆羅門の青年をいふ。

卽ちまた問ひて曰く『瞿曇、忍辱溫良何の依住する所ぞ』。世尊答へて曰はく『忍辱溫良は涅槃に依りて住す』。梵志卽ちまた問ひて曰く『瞿曇、涅槃何の依住する所ぞ』。世尊告げて曰はく『梵志の意欲無窮の事に依る。汝今我より問を受くること無邊なり。然るに涅槃は依住する所無し。但涅槃は滅訖なり、涅槃を最と爲す。梵志、この義を以ての故に我に從ひて梵行を行ぜよ』。梵志白して曰く『世尊、我已に知る。善逝、我已に解す。世尊、我今自ら佛・法及び比丘衆に歸す。唯願はくは世尊、我を受けて優婆塞と爲したまへ。今日より始めて終身自ら歸し乃ち命盡くるに至らん』。佛說是の如し。阿伽羅訶那梵志佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百六十、[一]阿蘭那經第九

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時諸の比丘中食後に於て講堂に集坐し、是の如き事を論じぬ、「諸賢、甚だ奇なり、甚だ奇なり、人命極めて少くして要ず後世に至る。應に善事を作すべし。應に梵行を行ずべし。生じて死せざるは無し。然るに今世の人法行に於て、義行に於て、善行に於て、妙行に於て無爲にして求むる無しと」。彼の時世尊晝行處に在りて淨き天耳の人[耳]に出過せるを以て諸の比丘中食後に於て講堂に集坐し是の如き事を論じ、「諸賢、甚だ奇なり、甚だ奇なり。人命極めて少くして要ず後世に至る。應に善事を作すべし、應に梵行を行ずべし。生じて死せざるは無し。然るに今世の人法行に於て、義行に於て、善行に於て、妙行に於て無爲にして求むる無しと[論ずるを]聞きたまひぬ。世尊聞き已りて則ち晡時に於て燕坐より起ち講堂に往詣し、比丘衆の前に在りて座を敷きて而も坐し諸の比丘に問ひたまはく『汝[等]何事を論じ、何等を以ての故に講堂に集坐するや』。時に諸の比丘白して曰く『世尊、我等衆の比丘中食後に於て講堂に集坐し是の如き事を論ず、「諸賢、甚だ奇なり、甚だ奇なり。人命極めて少

【一】A. iv. 136.

中後に彷徉して佛の所に往詣し共に相問訊し却きて一面に坐し白して曰く『瞿曇、問ふ所有らんと欲す。聽きて乃ち敢へて陳ぶるや』。世尊告げて曰はく『汝の問ふ所を恣にせよ。梵志即便ち問ひて曰く『瞿曇、梵志の經典何の依住する所ぞ』。世尊答へて曰はく『梵志の經典人に依りて住す』。梵志即ちまた問ひて曰く『瞿曇、人何の依住する所ぞ』。世尊答へて曰はく『人は稻麥に依りて住す』。梵志即ちまた問ひて曰く『瞿曇、稻麥何の依住する所ぞ』。世尊答へて曰はく『稻麥は地に依りて住す』。梵志即ちまた問ひて曰く『瞿曇、地何の依住する所ぞ』。世尊答へて曰はく『地は水に依りて住す』。梵志即ちまた問ひて曰く『瞿曇、水何の依住する所ぞ』。世尊答へて曰はく『水は風に依りて住す』。梵志即ちまた問ひて曰く『瞿曇、風何の依住する所ぞ』。世尊答へて曰はく『風は空に依りて住す』。梵志即ちまた問ひて曰く『瞿曇、空何の依住する所ぞ』。世尊答へて曰はく『空は依る所無し。但日月に因るが故に虛空有り』。梵志即ちまた問ひて曰く『瞿曇、日月何の依住する所ぞ』。世尊答へて曰はく『日月は[一]四天王に依りて住す』。梵志即ちまた問ひて曰く『瞿曇、四天王何の依住する所ぞ』。世尊答へて曰はく『四天王は三十三天に依りて住す』。梵志即ちまた問ひて曰く『瞿曇、三十三天何の依住する所ぞ』。世尊答へて曰はく『三十三天は焰摩天に依りて住す』。梵志即ちまた問ひて曰く『瞿曇、焰摩天何の依住する所ぞ』。世尊答へて曰はく『焰摩天は兜瑟哆天に依りて住す』。梵志即ちまた問ひて曰く『瞿曇、兜瑟哆天何の依住する所ぞ』。世尊答へて曰はく『兜瑟哆天は化樂天に依りて住す』。梵志即ちまた問ひて曰く『瞿曇、化樂天何の依住する所ぞ』。世尊答へて曰はく『化樂天は他化樂天に依りて住す』。梵志即ちまた問ひて曰く『瞿曇、他化樂天何の依住する所ぞ』。世尊答へて曰はく『他化樂天は梵世に依りて住す』。梵志即ちまた問ひて曰く『瞿曇、梵世何の依住する所ぞ』。世尊答へて曰はく『梵世は大梵に依りて住す』。梵志即ちまた問ひて曰く『瞿曇、大梵何の依住する所ぞ』。世尊答へて曰はく『大梵は[二]忍辱溫良に依りて住す』。梵志

【一】四天王以下の諸天に就ては二卷「七日經」註〔一九〕以下を見よ。

【二】忍辱溫良は多分 Khanti-soracca, gentleness and forbearance に當るか。

乞し、如法にして不如法に非ず。云何が不如法なる。田作に非ず治生に非ず、書に非ず算に非ず、數に非ず印に非ず、手筆に非ず文章に非ず、經に非ず詩に非ず、刀杖を以てするに非ず、王に從事するに非ず。如法に求乞し財物を求乞して、師を供養し財物を布施し已りて自ら妻を求むるが爲に、如法にして不如法に非ず。云何が不如法なる。梵志是の如き意ならず、[即ち]梵志女に向ひて更に相愛し攝し合會せしめんと。彼梵志女に趣き、不梵志女に非ず、亦刹利女にあらず、懷姙[の女]にあらず、產生[の女]にあらず。頭那、何等を以ての故に梵志懷姙[の女]に趣かざるや。彼の男及び女人をして不淨の婬と名づけしむること莫れとて、この故に梵志懷姙[の女]に趣かず。頭那、何等を以ての故に梵志產生[の女]に趣かざるや。彼の男及び女人をして不淨の恚と名づけしむること莫れとて、この故に梵志產生[の女]に趣かず。頭那、彼趣向する所財物の爲ならず、憍傲の爲ならず、莊嚴の爲ならず、玫飾の爲ならず、但子の爲の故なり。彼子を生じ已りて王相應事・賊相應事・邪道想應事を作し、是の如き說を作す、梵志應に一切の事を作すべし。梵志これを以て染著せず、亦穢汚せず。猶ほ火の淨も亦燒き不淨も亦燒くが若如し。梵志應に一切の事を作すべからず。梵志これを以て染著せず、亦穢汚せず。頭那、是の如く梵志梵志旃荼羅なり。頭那、この五種の梵志、汝誰に似ると爲すや』。頭那白して曰く『瞿曇、この最後の梵志旃荼羅と說く者、我尙ほ及ばず。況やまた餘をや。世尊、我已に知る。善逝、我已に解す。世尊、我今自ら佛・法及び比丘衆に歸す。唯願はくは世尊、我を受けて優婆塞と爲したまへ。今日より始めて終身自ら歸し乃ち命盡くるに至らん』。佛說是の如し。頭那梵志佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百五十九、阿伽羅訶那經第八

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時阿伽羅訶那梵志

ること莫れとて。この故に梵志產生「の女」に趣かず。頭那、彼趣向する所、財物の爲ならず、憍慠の爲ならず、莊嚴の爲ならず、玫餝の爲ならず、但子の爲の故なり。彼子を生じ已りて若し故の梵志の要誓・處所・界障有れば、彼に住し彼を持して彼を越えず。頭那、是の如く梵志界を越えず。頭那、(4)云何が梵志界を越ゆと爲すや。若し梵志有りて父母の擧ぐる所と爲り、生を受くること淸淨にして、乃至七世の父母種族を絕たず、生生惡無く、彼四十八年童子の梵行を行じ、經書を得、典經を誦習せんと欲し、彼經書を得、典經を誦習し已りて師を供養せんが爲に財物を求乞し、如法にして不如法に非ず。云何が不如法なる。田作に非ず治生に非ず、書に非ず算に非ず、數に非ず印に非ず、手筆に非ず文章に非ず、經に非ず詩に非ず、刀杖を以てするに非ず、王に從事するに非ず。如法に求乞し財物を求乞して、師を供養し財物を布施し已りて、自ら妻を求むるが爲に如法にして不如法に非ず。云何が不如法なる。梵志是の如き意ならず、[卽ち]梵志女に向ひて更に相愛し相攝し合會せしめんと。彼梵志女に趣き、不梵志の女に非ず、亦刹利の女に非ず、懷妊「の女」にあらず、產生「の女」にあらず。頭那、何等を以ての故に、梵志懷妊「の女」に趣かざるや。頭那、何等を以ての故に梵志產生「の女」に趣かざるや。彼の男及以び女人をして不淨の恚と名づけしむること莫れとて、この故に梵志懷妊「の女」に趣かず。彼の男及以び女人をして不淨の婬と名づけしむること莫れとて、この故に梵志產生「の女」に趣かず。頭那、彼趣向する所、財物の爲ならず、憍慠の爲ならず、莊嚴の爲ならず、玫餝の爲ならず、但子の爲の故なり。彼子を生じ已りて若し故の梵志の要誓・處所・界障有れば、彼に住止せず、彼を受持せず、すなはち彼を越ゆ。頭那、是の如く梵志界を越ゆと名づく。頭那、(5)云何が梵志、梵志旃荼羅なりや。若し梵志有りて父母の擧ぐる所と爲り、生を受くること淸淨にして乃至七世の父母種族を絕たず、生生惡無く、彼四十八年童子の梵行を行じ、經書を得、典經を誦習せんと欲し、彼經書を得、典經を誦習し已りて師を供養せんが爲に財物を求

【六】巴利文「彼のその婆羅門婦は欲のためならず、戲のためならず、樂のためならず、婆羅門の婆羅門婦は子［を得ん］がためなり」。
【七】「彼は妻と共に棲み、その兒の愛を求めて、家の生活を營み、家より出でゝ得度することをなさず、古への婆羅門の限界の內に止まりてそれを越ゆることなし」。
（4）梵志越ㇾ界。
（5）梵志旃荼羅。

遊ぶ。是の如く悲・喜［亦然り］。心捨と俱にして、結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。頭那、是の如く梵志猶ほ梵の如し。頭那、(2)云何が梵志天に似如するや。若し梵志有りて父母の擧ぐる所と爲り、生を受くること清淨にして、乃至七世の父母種族を絶たず、生生惡無く、彼四十八年童子の梵行を行じ、經書を得、典經を誦習せんと欲す。彼經書を得、典經を誦習し已りて師を供養せんが爲に財物を求乞し、如法にして不如法に非ず。云何が不如法なる。田作に非ず治生に非ず、書に非ず算に非ず、數に非ず印に非ず、手筆に非ず文章に非ず、經に非ず詩に非ず、刀杖を以てするに非ず、王に從事するに非ず。如法に求乞し財物を求乞して、師を供養し財物を布施し已りて、身妙行・口・意妙行を行じ已りて、彼これに因緣して身壞れ命終りて必ず善處に昇り天中に上生す。頭那、是の如く梵志天に似如す。頭那、(3)云何が梵志界を越えざるや。若し梵志有りて父母の擧ぐる所と爲り、生を受くること清淨にして、乃至七世の父母種族を絶たず、生生惡無く、彼四十八年童子の梵行を行じ、經書を得、典經を誦習せんと欲す。彼經書を得、典經を誦習し已りて、師を供養せんが爲に財物を求乞し如法にして不如法に非ず。云何が不如法なる。田作に非ず治生に非ず、書に非ず算に非ず、數に非ず印に非ず、手筆に非ず文章に非ず、經に非ず詩に非ず、刀杖を以てするに非ず、王に從事するに非ず。如法に求乞し財物を求乞して、師を供養し財物を布施し已りて、自ら妻を求むる爲に如法にして不如法に非ず。云何が不如法なる。梵志是の如き意ならず、［即ち］梵志女に向ひて更に相愛し相攝し合會せしめんと。彼梵志女に趣き、不梵志女に非ず、亦刹利女に非ず、懷妊［の女に非］ず產生［の女に非］ず。頭那、何等を以ての故に梵志懷妊［の女］に趣くに非ざるや。彼の男及以び女人をして不淨の婬と名づけしむること莫れとて。この故に梵志懷妊［の女］に趣くに非ず。頭那、何等を以ての故に梵志產生［の女］に趣くに非ざるや。彼の男及以び女人をして不淨の恚と名づけしむ

(2)梵志似如天。

(3)梵志不ㇾ越ㇾ界。

し正しく梵志と稱說する有れば、父母の擧ぐる所と爲り、生を受くること淸淨にして、乃至七世の父母種族を絕たず、生生惡無く、博聞總持にして〔三〕四典經を誦過し、深く因緣・正文・戲・五句說に達す。瞿曇、正しく梵志と稱說する者、卽ちこれ我なり。所以者何。我父母の擧ぐる所と爲り、生を受くること淸淨にして乃至七世の父母種族を絕たず、生生惡無く、博聞總持にして四典經を誦過し、深く因緣・正文・戲・五句說に達す』。世尊告げて曰はく『頭那、我今汝に問ふ。解する所に隨ひて答へよ。頭那、意に於て云何。若し昔梵志有りて壽終り命過ぎ、經書を誦持し經書を流布し典經を諷習す、所謂〔四〕夜吒・婆摩・婆摩提婆・毘奢蜜哆邏・夜陀揵尼・應疑羅娑・婆私吒・迦葉・婆羅婆・婆和なり。謂く〔五〕この五種の梵志を施設す。梵志有り猶ほ梵の如く、梵志有り天に似如たり、梵志有り界を越えず、梵志有り界を越え、梵志有り旃荼羅第五なり。頭那、この五種の梵志、汝誰に似ると爲すや』。頭那白して曰く『瞿曇、略してこの義を說き、廣く分別せず。我知る能はず。唯願はくは沙門瞿曇、善く說きて我をして義を知らしめよ』。世尊告げて曰はく『頭那、諦かに聽け善くこれを思念せよ。我當に汝が爲に廣く分別して說くべし』。頭那白して曰く『唯然り瞿曇』。頭那梵志敎を受けて而も聽きぬ。佛言はく『頭那、(1)云何が梵志猶ほ梵の如きや。若し梵志有りて父母の擧ぐる所と爲り生を受くること淸淨にして、乃至七世の父母種族を絕たず、生生惡無く、彼四十八年童子の梵行を行じ經書を得、典經を誦習せんと欲す。彼經書を得、典經を誦習し已りて師を供養せんが爲に、財物を求乞し、如法にして不如法に非ず。云何が不如法なる。田作に非ず、治生に非ず、書に非ず算に非ず、數に非ず印に非ず、手筆に非ず文章に非ず、經に非ず詩に非ず、刀杖を以てするに非ず、王に從事するに非ず。如法に求乞し、財物を求乞して、師を供養し財物を布施し已りて、心慈と倶にして一方に遍滿し成就して遊び、是の如く二・三・四方・四維・上下、一切に普周く心慈と倶にして、結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して

【三】一二卷「鞞婆陵耆經」註〔四〕を見よ。

【四】三八卷「鸚鵡經」に出づ。

【五】巴利文「彼等はこれ等五種の婆羅門(=梵志)〔あること〕を說けり、〔謂く〕梵に等しき、天に等しき、〔婆羅門の〕界內なる、界を破れる、梵志旃陀羅は第五なり」。

(1)梵志猶如レ梵。

を作證し明達しぬ。(7)[一〇]また次に梵志、我已に是の如き定心を得、清淨にして穢無く煩無く、柔軟にして善く住し不動心を得、漏盡智通を學び作證し、我この苦の如眞を知り、この苦の習を知り、この苦の滅を知り、この苦滅道の如眞を知り、この漏の如眞を知り、この漏の習を知り、この漏の滅を知り、この漏滅道の如眞を知り、是の如く知り、是の如く見、欲漏心解脫し、有漏・無明漏心解脫し、解脫し已りてすなはち解脫を知り、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ、更に有を受けずと如眞を知る。これを我その時後夜にこの第三明達を得と謂ひ、本放逸無きを以て遠離に樂住し修行精勤し、謂く無智滅して而も智生じ、闇壞れて而も明成り、無明滅して而も明生じ、謂く漏盡智を作證し明達しぬ。(8)[一一]また次に梵志、若し正說する有りて而も不癡の法を說けば、衆生世に生じて、一切の衆生最勝にして苦樂の覆ふ所と爲らず。當に知るべし、正說する者卽ちこれ我なり。所以者何。我不癡の法を說き、衆生世に生じて、一切の衆生最勝にして苦樂の覆ふ所と爲らず』。ここに於て鞞蘭若梵志卽便ち杖を捨て佛足を稽首し世尊に白して曰く『世尊を第一と爲す、世尊を大と爲す、世尊を最と爲す、世尊を勝と爲す、世尊を等と爲す、世尊を不等と爲す、世尊與に等しく等しき無く、世尊障無く、世尊讐人無し。世尊、我今自ら佛・法及び比丘衆に歸す。唯願はくは世尊、我を受けて優婆塞と爲したまへ。今日より始めて終身自ら歸し乃ち命盡くるに至らん』。佛說是の如し。鞞蘭若梵志及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百五十八、[一]頭那經第七

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時[二]頭那梵志中後に彷徉して佛の所に往詣し、共に相問訊し却きて一面に坐しぬ。世尊問ひて曰はく『頭那、若し汝はこれ梵志なりやと問ふ有れば、汝梵志にして汝自ら稱說するや』。梵志頭那答へて曰く『瞿曇、若

【一〇】漏盡智通。

【一一】不癡結。

【一】A. iii. 223.

【二】頭那(Dona)。

て涅槃に昇らしむ。(4)また次に梵志、我樂滅し苦滅し、喜憂は本已に滅して不苦・不樂・捨あり念あり清淨にして第四禪に逮り成就して遊びぬ。これを我その時第四增上心を獲と謂ひ、卽ち現法に於て安樂居を得、易くして[得]、難からずして得、樂住して怖無く、安隱快樂にして涅槃に昇らしむ。(5)[八]また次に梵志、我已に是の如き定心を得、清淨にして穢無く煩無く柔軟にして善く住し不動心を得、憶宿命智通を覺りて作證しぬ。我行有り相貌有り、本無量の昔經歷せる所を憶ふに、謂く一生・二生・百生・千生・成劫・敗劫・無量の成敗劫なり。彼の衆生某と名づけ、彼昔更に歷ぬ。我曾て彼に生じ、是の如き姓、是の如き字にして、是の如く生じ是の如く飮食し、是の如く苦樂を受け、是の如く長壽し是の如く久しく住し是の如く壽訖り、此に死して彼に生じ、彼に死して此に生じ、我生じて此に在り、是の如き姓、是の如き字にして是の如く生じ是の如く飮食し、是の如く苦樂を受け、是の如く長壽し是の如く久しく住し是の如く壽訖りぬと。これを我その時初夜にこの第一明達を得と謂ひ、本放逸無きを以て遠離に樂住し、修行し精勤し、謂く無智滅して而も智生じ、闇壞れて而も明成り、無明滅して而も明生じ、謂く憶宿命智を作證し明達しぬ。(6)[九]また次に梵志、我已に是の如き定心を得、清淨にして穢無く煩無く、柔軟にして善く住し不動心を得、生死智通を學び作證し、我清淨の天眼の人[眼]を出過せるを以て、この衆生の死時生時、好色惡色、妙と不妙と、善處及び不善處に往來するを見、この衆生の所作業に隨ひてその如眞を見、若しこの衆生身惡[行]・口・意惡行を成就し、聖人を誹謗し、邪見にして邪見業を成就すれば、彼これに因緣して身壞れ、命終りて必ず惡處に至り地獄の中に生ぜん。若しこの衆生身妙行・口・意妙行を成就し、聖人を誹謗せず、正見にして正見業を成就すれば、彼これに因緣して身壞れ、命終りて必ず善處に昇り天中に上生ぜんと[見る]。これを我その時中夜にこの第二明達を得と謂ひ、本放逸無きを以て遠離に樂住し修行精勤し、謂く無智滅して而も智生じ、闇壞れて而も明成り、無明滅して而も明生じ、謂く生死智

【八】憶宿命智通。

【九】生死智通。

曰はく『梵志、事有りて我をして胎に入らざらしめ、然も汝の言の如くならず。若し沙門・梵志有りて當來の胎床、智を斷じ絶滅して根を拔き、終にまた生ぜざれば、我彼胎に入らずと說く。如來當來の胎床、智を斷じ絶滅して根を拔き終にまた生ぜず。この故に我をして胎に入らざらしむ。これを事有りて我をして胎に入らざらしめ、然も汝が言の如くならずと謂ふ。梵志、我この衆生の無明の來、無明の樂、無明の覆、無明の卵の裹む所に於て、我先づ法を觀じ、我衆生に於て最も第一と爲す。猶鷄の卵を生むがごとし。或は十或は十二、時に隨ひて念じ、時に隨ひて覆ひ、時に隨ひて暖め、時に隨ひて擁護す。彼その後に於て鷄設し放逸なれば、中に於て鷄子有りて或は口嘴を以て、或は足爪を以てその卵を啄破して安隱に自ら出づ。彼鷄子に於て最も第一と爲す。我亦是の如し。この衆生の無明の來、無明の樂、無明の覆、無明の卵の裹む所に於て我先づ法を觀じ、我衆生に於て最も第一と爲す。梵志、我高草を持ちて覺樹に往詣し、草を樹下に布き尼師檀を敷きて結加趺坐し、正坐を破らず、要ず漏盡に至る。我正坐を破らず要ず漏盡に至り、我正坐し已りて(1)欲を離れ惡不善の法を離れ、覺有り觀有り、離より生ずる喜と樂と「あり」、初禪に逮り成就して遊びぬ。これを我その時第一增上心を獲と謂ひ、即ち現法に於て安樂居を得、易くして「得」、難からずして得、樂住して怖無く、安隱快樂にして涅槃に昇らしむ。(2)また次に梵志、我覺・觀已に息み內靜・一心にして覺無く觀無く、定より生ずる喜と樂と「あり」、第二禪に逮り成就して遊びぬ。これを我その時第二增上心を獲と謂ひ、即ち現法に於て安樂居を得、易くして「得」、難からずして得、樂住して怖無く、安隱快樂にして涅槃に昇らしむ。(3)また次に梵志、我喜欲より離れ捨・無求にして遊び、正念・正智にして而も身に樂を覺ぶ。謂く「彼の」聖の說く所の(聖)所捨・念・樂住・空あり、第三禪に逮り成就して遊びぬ。これを我その時第三增上心を獲と謂ひ、即ち現法に於て安樂居を得、易くして「得」、難からずして得、樂住して怖無く、安隱快樂にし

【七】以下四禪を說く、一卷「晝度樹經」及註〔八〕以下參照。

卷の第四十

梵志品

百五十七、黃蘆園經第六

我が聞きしこと是の如し。ある時佛[1]鞞蘭若に遊び[2]黃蘆園中に在しぬ。その時鞞蘭若梵志年耆宿老にして壽將に過ぎんと欲し、命盡くるに至るに垂んとし、年百二十にして杖を拄へて而も行き、中後に彷徉して佛の所に往詣し、共に相問訊し佛前に在るに當りて杖に倚りて而も立ち白して曰く『瞿曇、我聞くに沙門瞿曇、年幼に極めて少く、新に出家して學び、若し名德の沙門梵志有りて親しく自ら來詣するも、而も禮敬せず亦尊重せず、坐より起たず請して坐せしめずと。瞿曇、この事大に不可と爲す』。世尊告げて曰はく『梵志、我初めより天及び魔・梵・沙門・梵志、人より天に至るまで、謂く自ら來詣して能く如來をして禮敬・尊重して而も坐より起ち請して坐せしめしむる者を見ず。梵志、若し來詣して如來をして禮敬・尊重して而も坐より起ち請して坐せしめしめんと欲する者有れば、彼の人必ず當に頭破れて七分すべし』。梵志また白しぬ[4]『瞿曇は無味なり』。世尊告げて曰はく『梵志、事有りて我をして無味ならしめ、然も汝の言の如くならず。若し色味・聲味・香味・觸味有れば、彼の如來、智を斷じ絕滅して根を拔き終にまた生ぜず。これを事有りて我をして無味ならしめ、然も汝の言の如くならずと謂ふ』。梵志また白しぬ[5]『瞿曇、恐怖無し』。世尊告げて曰はく『梵志、事有りて我をして恐怖無からしめ、然も汝の言の如くならず。若し色の恐怖・聲・香・味・觸の恐怖有れば、彼の如來智を斷じ絕滅して根を拔き、終にまた生ぜず。これを事有りて我をして恐怖無からしめ、然も汝の言の如くならずと謂ふ』。梵志また白しぬ[6]『瞿曇、胎に入らず』。世尊告げて

※この三字國譯の際削るべきを誤りて存せるなり

【一】A. iv. 172. 失譯「黃竹園老婆羅門說學經」。

【二】鞞蘭若(Verañjā)。

【三】黃蘆園(Nalerupucimanda-mūla)。

【四】(1)瞿曇無味(Arasarūpo bhavaṁ Gotamo)。失譯にては「此沙門瞿曇、但懈怠慢」。

【五】(2)瞿曇無恐怖(Nibbhogo bhavaṁ Gotamo)。失譯「沙門瞿曇無有恐怖」。

【六】(3)瞿曇不入於胎(Apagabbho bhavaṁ Gotamo)。失譯にては「不復入胎」。巴利文には以下(4)不可作、(5)斷滅、(6)可惡、(7)法律、(8)苦行の五を擧ぐれど、漢譯は兩者とも(1)―(3)を擧ぐるのみ。四卷「師子經」に擧ぐるものも稍異れり、對照せよ。

れ。饒なる財物米穀、若し餘の錢財有れば、大王これに相應せよ。梵志及び車乘〔亦然り〕。象齋及び馬齋、〔六〕馬齋は門を障へず、聚集して齋施を作し、財物を梵志に施す。彼〔等〕これより利を得、愛樂して財物を惜しむ。彼〔等〕以て欲を起爲し、數數增長して愛す。猶ほ廣き池の水及び無量の財物の如し。是の如く人、牛有り、生生活の具に於てす。彼この縛を造作して我等彼に從ひ來る。〔七〕大王齋し施を行じてその財利を失する莫れ。饒なる財物・米穀、若し汝多く牛有れば、大王これに相應せよ。梵志及び車乘、〔亦然り〕。無量百千の牛、齋を爲すに因るが故に殺す。頭角饒る所無く、牛・猪昔時等し。往至して牛角を捉へ、利刀を以て牛を殺し、牛及び父を喚び、羅刹名づけて香と曰ふ。〔八〕彼非法を喚呼し、刀を以て牛を殺す時、この法もて齋を行じ、越過最も前に在り。事有ること無くして而も殺すは遠離衰退の法なり。昔時〔九〕三病有り。食を用ひざらんと欲せば、以て牛を憎嫉し、病を起すこと九十八〔種なり〕。是の如くこれ增す諍ひ、故に智の爲に惡まる。若し人是の如きを見て誰か憎むもの有らざらん。是の如くこの世の行、無智にして最も下賤、各各欲憎を爲し、若しは婦、夫を誹謗す。刹利・梵志の女〔亦然り〕。及び姓に守護せられ、若しは生法を犯すこと、自在に欲に由る。

是の如く梵志、今梵志の故の梵志の法を學ぶもの無く、梵志故の梵志の法を越えて來た爾許の時なり』。ここに於て拘娑羅國の衆多の梵志白して曰く『世尊、我已に知る。善逝、我已に解す。世尊、我今自ら佛・法及び比丘衆に歸す。唯願はくは世尊、我を受けて優婆塞と爲したまへ。今日より始めて終身自ら歸し乃ち命盡くるに至らん』。佛說是の如し。彼の拘娑羅國の衆多の梵志及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第三十九

〔六〕何ほどにても欲しがるものゝあるだけ施したるなり。

〔七〕梵志等再び甘蔗王に訴ふるなり。

〔八〕巴利文「刄物の牛に落つるや、『非法なる哉』と叫べり」。

〔九〕「慾・飢・老の三病のみこれありき」。

昔時この法有るも、梵志これを護らず、梵志は所有の錢・財・穀を守護せず。誦習の錢・財・穀、梵志これを守りて藏す。衣色若干種、屋舍及び床榻、豐城及び諸國[の民]梵志に學ぶこと是の如し。この梵志害する莫く、率ね諸法を守護し、往きて他の門に到れる彼を拘制するもの[一人として]有ること無く、家を發きて乞ひて法を求め、その食時到るに隨ふ。梵志家に住在すれば、見る者施を爲さんと欲し、滿四十八年清淨の梵行を行じ、明成成を求索するは昔時の梵志の行なり。彼財物を偸まず、亦恐怖有ること無く、愛愛攝して相應し、當に共に和合を以てすべく煩惱を爲さざるが故に、怨姪相應の法、諸有の梵志は、能く是の如きことを行ずること無し。若し第一の行有れば、梵志極めて堅く求む。彼諸の婬欲の法は行ぜず乃至夢[にだもせず]。彼この梵行に因りて自ら梵なり我は梵なりと稱す。彼にこの行有るを知れる慧者は當に彼を知るべし。床薄く衣極めて單にして、酥乳を食して命存し、乞求皆如法にして、[三]齋を立し布施を行じ、齋時異乞無く、自ら己の乞求に於てす。齋を立し施を行ずる時、彼牛を殺すこと有らず、父母兄弟及び餘有の親親の如く、人の牛も亦是の如し。彼[四]これに因りて樂を生じ、飮食して體力有り、乘者安隱にして樂しむ。この義理有るを知りて樂しみて牛を殺すこと莫し。柔軟の身極めて大にして精・色・名稱譽あり。慇懃にして自ら利を求むるは昔時の梵志の行なり。梵志自利の爲に事及び非事を專らにす。彼當にこの世に來りて必ずこの世を度脫すべく、彼月、月を過ぐれば、意彼に趣向するを見、夜中に遊戲して諸の婦人を嚴飾し、吉牛[その]前を圍遶し、婦女は極めて端正に、人間微妙の欲[あるは]、梵志の常の願なり。具足せる車・乘具、善く作縫し治好し、家居及び婚姻するは、梵志の常の願なり。彼この縛を造作し、我等彼に從ひ來る。[五]大王齋し施を行じてその財利を失する莫

【三】立齋。供犧のこと。

【四】因是。牛によりて、牛よりして。

【五】巴利文によれば、この梵志たちは讚歌を作りて甘蔗(＝懿摩)王に近づきて、この事を言へるやうなり。

知るべし卽ちこれ我なり。我昔梵志大長者爲り名づけて隋藍と曰ひぬ。居士、我その時に於て自ら饒益を爲し亦他を饒益し多人を饒益し世間を愍傷し、天の爲、人の爲、義及び饒益を求め、安隱快樂を求めぬ。その時法を說きて究竟に至らず、白淨を究竟せず、梵行を究竟せず、梵行を究竟し訖らず、その時生老病死・啼哭・憂慼を離れず、亦未だ一切の苦を脫するを得る能はざりき。居士、我今出世し如來・無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師・號佛衆祐なり、我今自ら饒益し、亦他を饒益し多人を饒益し世間を愍傷し、天の爲人の爲、義及び饒益を求め、安隱快樂を求む。我今法を說きて究竟に至るを得、白淨を究竟し、梵行を究竟し、梵行を究竟し訖る。我今已に生老病死・啼哭・憂慼を離れ、我今已に一切の苦を脫するを得たり』。佛說是の如し。須達哆居士及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行のしぬ。

百五十六、梵波羅延經第五[一]

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時拘婆羅國[二]の衆多の梵志中後に彷徉して佛の所に往詣し共に相問訊し却きて一面に坐して白して曰く『瞿曇、問ふ所有らんと欲す。我が問を聽くや』。世尊告げて曰はく『汝の問ふ所を恣にせよ』。時に諸の梵志問ひて曰く『瞿曇、頗し今梵志有りて故の梵志の法を學ぶや、故の梵志の法を越ゆと爲すや』。世尊答へて曰はく『今梵志故の梵志の法を學ぶもの無く、梵志久しく已に故の梵志の法を越ゆ』。時に諸の梵志問ひて曰く『瞿曇、云何が今梵志故の梵志の法を學ぶもの無く、諸の梵志等故の梵志の法を越ゆて來た幾時と爲すや』。彼の時世尊偈を以て答へて曰はく、

所謂昔時[仙士]有りて自ら調御し熱行し、　五欲の功德を捨てゝ淸淨の梵行を行じ、　梵行及び戒行[を行じ]、　卒ね至りて柔軟の性にして　恕亮にして害心無く、　忍辱してその意を護る。

【一】Sn. pp. 50—55.
【二】拘婆羅國(Kosala)。

夫人に食を施し、百須陀洹・百斯陀含・百阿那含に食を施すは、若しまた一阿羅訶に食を施す者有れば、これ彼の施より最も勝ると爲す。居士、(6)若し梵志隨藍、是の如き大施を行じ及び滿閻浮場の凡夫人に食を施し、百須陀洹・百斯陀含・百阿那含・百阿羅訶に食を施すは、若したま[八]一辟支佛に食を施す者有れば、これ彼の施より最も勝ると爲す。居士、(7)若し梵志隨藍、是の如き大施を行じ及び滿閻浮場の凡夫人に食を施し、百須陀洹・百斯陀含・百阿那含・百阿羅訶・百辟支佛に食を施すは、若しまた一如來・無所著・等正覺に食を施す者有れば、これ彼の施より最も勝ると爲す。居士、(8)若し梵志隨藍、是の如き大施を行じ、及び滿閻浮場の凡夫人に食を施し、百須陀洹・百斯陀含・百阿那含・百阿羅訶・百辟支佛に食を施すは、若し房舍を作りて四方の比丘衆に施す者有れば、これ彼の施より最も勝ると爲す。居士、(9)若し梵志隨藍、是の如き大施を行じ及び滿閻浮場の凡夫人に食を施し、百須陀洹・百斯陀含・百阿那含・百阿羅訶・百辟支佛に食を施し、房舍を作りて四方の比丘衆に施すは、若し歡喜心もて三尊、佛・法・比丘衆に歸命し及び戒を受くる者有れば、これ彼の施より最も勝ると爲す。居士、(10)若し梵志隨藍、是の如き大施を行じ及び滿閻浮場の凡夫人に食を施し、百須陀洹・百斯陀含・百阿那含・百阿羅訶・百辟支佛に食を施し、房舍を作りて四方の比丘衆に施し、歡喜心もて三尊、佛・法・比丘衆に歸命し及び戒を受くるは、若し彼の一切衆生の爲に慈心を行じ乃至牛を搆る頃も「慈心を行ずる」者有れば、これ彼の施より最も勝ると爲す。居士、(11)若し梵志隨藍、是の如き大施を行じ及び滿閻浮場の凡夫人に食を施し、百須陀洹・百斯陀含・百阿那含・百阿羅訶・百辟支佛に食を施し、房舍を作りて四方の比丘衆に施し、歡喜心もて三尊、佛・法・比丘衆に歸命し及び戒を受け、一切衆生の爲に慈心を行じ乃至牛を搆る頃も「慈心を行ずる」は、若し能く一切の諸法は無常・苦・空にして及び[九]非神なりと觀ずる者有れば、これ彼の施より最も勝ると爲す。居士の意に於て云何。昔時梵志大長者隨藍と名づけし者謂く異人なりや。この念を作すこと莫れ。所以者何。當に

【八】辟支佛(Pacceka-buddha)。一人一人覺るものゝ意。獨覺と譯するを正しとす。

【九】非神(Anatta)。

五欲の功德を得んと欲せず。所以者何。不至心を以ての故に施を行ずるなり。居士、當に知るべし。報を受くること是の如し。居士、若し妙施を行じて信じて施し故らに施し自ら手もて施し自ら往きて施し思惟して施し信に由りて施し業の果報を觀じて施せば、當に觀ずべし。是の如く報を受く。心好家を得んと欲し好乘を得んと欲し好衣被を得んと欲し好飮食を得んと欲し好五欲の功德を得んと欲す。所以者何。その至心を以ての故に施を行ずるなり。居士當に知るべし。報を受くること是の如し。居士、昔過去の時梵志大長者有り、名づけて〔四〕隨藍と曰ひ、極大富樂にして資財無量、封戶食邑あり諸の珍寶多く、畜牧產業稱計すべからず。彼布施を行じその像是の如し。八萬四千の金鉢に碎銀を盛滿して是の如き大施を行じ、八萬四千の銀鉢に碎金を盛滿して是の如き大施を行じ、八萬四千の金鉢に碎金を盛滿して是の如き大施を行じ、八萬四千の銀鉢に碎銀を盛滿して是の如き大施を行じ、八萬四千の象を莊挍し嚴飾し白絡もて上を覆ひて是の如き大施を行じ、八萬四千の馬を莊嚴し挍飾し白絡・合金〔五〕霏那、是の如き大施を行じ、八萬四千の牛、衣縄衣覆もてこれを犛り皆一斛の乳汁を得、是の如き大施を行じ、八萬四千の女姿容端正にして視る者歡悅し、衆寶・瓔珞・嚴飾具足し、是の如き大施を行じぬ。況やまたその餘の食噉含消をや。居士、(1)若し梵志隨藍、是の如き大施を行じ、若しまた〔六〕滿閻浮場の凡夫に食を施す者有れば、これ彼の施最も勝ると爲す。居士、(2)若し梵志隨藍、是の如き大施を行じ及び滿閻浮場の凡夫人に食を施すは、若しまた〔七〕一須陀洹に食を施す者有れば、これ彼の施より最も勝ると爲す。居士、(3)若し梵志隨藍、是の如き大施を行じ及び滿閻浮場の凡夫人に食を施し、百須陀洹に食を施すは、若しまた一斯陀含に食を施す者有れば、これ彼の施より最も勝ると爲す。居士、(4)若し梵志隨藍、是の如き大施を行じ、及び滿閻浮場の凡夫人に食を施し、百須陀洹・百斯陀含に食を施すは、若しまた一阿那含に食を施す者有れば、これ彼の施より最も勝ると爲す。居士(5)若し梵志隨藍、是の如き大施を行じ及び滿閻浮場の凡

【四】　隨藍（Vemala）。

【五】　霏那。「一切經音義」五二卷に「梵音也此謂二福德行一也」とあり、福德行ならば Guṇa なるべし。これも種類の意にて、種々の白絡合金を意味するかとも思はる。

【六】　滿閻浮場。閻浮洲中に滿てるの意。

【七】　須陀洹。斯陀含等、一卷「水喩經」註〔四〕、六卷「敎化病經」註〔六〕を見よ。

所以者何我亦是の如く說く、

　刹利二足尊は　謂く種族姓有り、　明及び行を求め學ぶは、　彼天人に稱せらる。と』。

佛說是の如し。尊者婆私吒・婆維婆等及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百五十五、須達哆經[1]第四

　我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時　須達哆[2]居士佛の所に往詣し、稽首して禮を作し却きて一面に坐しぬ。世尊問ひて曰はく『居士の家頗し施を行ずるや』。須達哆居士答へて曰く『唯然り世尊、家布施を行ず。但し至りて麁と爲し好き能はず。糠飯・麻羹・薑菜一片なり』。世尊告げて曰はく『居士、若し麁食を施すと妙食を施すとは倶に報を得るのみ。居士、若し麁施を行じて信じて施さず、故らに施さず自ら手もて施さず自ら往きて施さず思惟して施さず信に由りて施さず業の果報を觀じて施さざれば、當に觀ずべし、是の如く報を受く。心好家を得んと欲せず、好乘を得んと欲せず、好衣被を得んと欲せず、好飲食を得んと欲せず、好[3]五欲功德を得んと欲せず。所以者何。不至心を以ての故に施を行ずるなり。居士、當に知るべし。報を受くること是の如し。居士、若し麁施を行じて信じて施し故らに施し自ら手もて施し自ら往きて施し思惟して施し信に由りて施し業の果報を觀じて施せば、當に觀ずべし、是の如く報を受く。心好家を得んと欲し好乘を得んと欲し好衣被を得んと欲し好飲食を得んと欲し好五欲の功德を得んと欲す。所以者何。その至心を以ての故に施を行ずるなり。居士、當に知るべし。報を受くること是の如し。居士、若し妙施を行じて信じて施さず故らに施さず自ら手もて施さず自ら往きて施さず思惟して施さず信に由りて施さず業の果報を觀じて施さざれば、當に觀ずべし、是の如く報を受く。心好家を得んと欲せず、好乘を得んと欲せず、好衣被を得んと欲せず、好飲食を得んと欲せず、好

【一】 A. iv. 393. 求那毘地譯「須達經」、失譯「慈心厭離功德經」、法天譯「長者施報經」、「增一」二七品の三。

【二】 須達哆(Sudatta)。須達ともいふ、善施・善授の義。給孤獨長者の本名。六卷「敎化病經」參照。

【三】 五欲功德。五種の欲。色・聲・香・味・觸なり。詳しくは一卷「晝度樹經」註〔七〕を見よ。

を捨て家無くして學道し、亦この念を作す、「我當に沙門と作りて梵行を行ずべしと。」すなはち沙門と作りて梵行を行ず。婆私吒、是の如く世中この三種姓を起し已りてすなはち第四沙門種有るを知る。婆私吒、我今廣くこの三種姓を說く。云何が廣くこの三種有りや。刹利種族の族姓の子身に不善の法を行じ口・意に不善の法を行ずれば、彼身壞れ命終りて一向に苦を受く。是の如く梵志種族・鞞舍種族の族姓の子身に不善の法を行じ口・意に不善の法を行ずれば、彼身壞れ命終りて一向に苦を受く。婆私吒、刹利種族の族姓の子身に善法を行じ口・意に善法を行ずれば、彼身壞れ命終りて一向に樂を受く。是の如く梵志種族・鞞舍種族の族姓の子身に善法を行じ口・意に善法を行ずれば、彼身壞れ命終りて一向に樂を受く。婆私吒、刹利種族の族姓の子身に[二七]二行及與び護行を行じ、口意に二行及與び護行を行ずれば、彼身壞れ命終りて苦樂を受く。是の如く梵志種族・鞞舍種族の族姓の子身に二行及與び護行を行じ口意に二行及與び護行を行ずれば、彼身壞れ命終りて苦樂を受く。婆私吒、刹利種族の族姓の子七覺法を修し善く思ひ善く觀ずれば、彼是の如く知り是の如く見、欲漏心解脫し、有漏・無明漏心解脫し、解脫し已りてすなはち解脫を知り、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ更に有を受けずと如眞を知る。是の如く梵志種族・鞞舍種族の族姓の子七覺法を修し善く思ひ善く觀ずれば、彼是の如く知り是の如く見、欲漏心解脫し、有漏・無明漏心解脫し、解脫し已りてすなはち解脫を知り、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ更に有を受けずと如眞を知る。婆私吒、是の如くこの三種廣く分別す。梵天帝主この偈を說きて曰く、

　刹利二足尊は、　謂く種族姓有り、　明及び行を求め學ぶは、　彼天人に稱せらる。

婆私吒、梵天帝主善くこの偈を說く、不善に非ず。善く歌ひ諷誦する不善に非ず。善く詠み語言する不善に非ず。謂く是の如く說く、

　刹利二足尊は　謂く種族姓有り、　明及び行を求め學ぶは、　彼天人に稱せらる。

【二七】 二行及與護行(Dvaya-kāri vitimissa-diṭṭhika)。

平旦・村邑・王城に入りて而も乞食を行ず。彼の多くの衆生見てすなはち施與し恭敬し尊重して而もこの語を作す、「この異衆生守を以て病と爲し、守を以て癰と爲し、守を以て箭刺と爲してすなはち守を棄捨し、無事に依りて草葉屋を作りて禪を學ぶと」。この諸尊害惡不善の法を捨つ。[二四]これ梵志なり。この梵志これを梵志と謂ふ。彼の衆生禪を學びて禪を得ず、苦行を學びて苦行を得ず、遠離を學びて遠離を得ず、一心を學びて一心を得ず、精進を學びて精進を得ず、すなはち無事を捨て村邑・王城に還り、四柱屋を作りて經書を造立す。彼の多くの衆生是の如きを見已りてすなはちまた施與し恭敬し尊重せずして而もこの語を作す、「この異衆生本守を以て病と爲し、守を以て癰と爲し、守を以て箭刺と爲してすなはち守を棄捨し、無事に依りて草葉屋を作りて而も禪を學びて禪を得る能はず、苦行を學びて苦行を得ず、遠離を學びて遠離を得ず、一心を學びて一心を得ず、精進を學びて精進を得ず、すなはち無事を捨てゝ村邑・王城に還り、四柱屋を作りて經書を造立すと。この諸尊等更に博聞を學びてまた禪を學ばず。これ博聞なり。この博聞これを博聞と謂ふ。婆私吒、これを初因初緣の世中梵志種有りと謂ひ、舊第一の智にして如法にして不如法に非ず、如法の人尊ぶ。

[二五]ここに於て彼の異衆生各各諸方に詣りて而も田業を作す。これ各各諸方に而も田業を作し、この各各諸方に而も田業を作すをこれを鞞舍と謂ふ。婆私吒、これを初因初緣の世中に鞞舍種有りと謂ひ、舊第一の智にして如法にして不如法に非ず、如法の人尊ぶ。[二六]婆私吒、世中この三種姓を起し已りてすなはち第四沙門種有るを知る。云何が世中この三種姓有り已りてすなはち第四沙門種有るを知るや。刹利族に於て族姓の子能く自ら惡不善の法を訶嘖し、自ら惡不善の法を厭ひ、憎惡して鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道して而もこの念を作す、「我當に沙門と作りて梵行を行ずべしと」。すなはち沙門と作りて梵行を行ず。是の如く梵志種族、鞞舍種族の族姓の子も亦自ら惡不善の法を訶嘖し、自ら惡不善の法を厭ひ憎惡して鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家

【二四】梵志(Brāhmaṇa)。

【二五】鞞舍＝毘(吠舍)の起源。

【二六】沙門(Samaṇa)の起源。

取りて積聚すれば、彼の宿粳米すなはち皮𥞩を生じ、刈りて七日に至りて亦皮𥞩を生じ、刈らるる處に隨ひて卽ちまた生ぜず。[一八]我等寧ろ田種を造作して標牓を立つべきやと。ここに於て衆生等田種を造作して標牓を竪立す。中に於て一衆生有りて自ら稻穀有りて而も他の田に入りて竊に他の稻を取る。その主見已りてすなはちこの語を作す、「咄咄、弊惡の衆生、云何ぞこれを作す。汝自ら稻有りて而も他の田に入りて竊に他の稻を取る。汝今去るべし。後また作すこと莫れと」。然るに彼の衆生また再び三たびに至りて竊に他の稻を取る。その主亦再び三たびに至りて見已りてすなはち拳を以て扠ち牽きて衆の所に詣り彼の衆に語げて曰く、「この一衆生自ら稻穀有りて而も我が田に入りて竊に我が稻を取りぬと」。然るに彼の一衆生亦衆に語げて曰く、「この一衆生拳を以て我を扠ち牽き來りて衆に詣りぬと」。ここに於て彼の諸の衆生共に聚まり集會し、極めて悲しみ啼泣して而もこの語を作す、「我等惡不善の法を生ず。謂く田を守るなり。所以者何、守田に因るが故にすなはち共に諍訟し、失有り盡有り相道說する有り拳もて相扠つ有り。[一九]我等寧ろその衆中に於て一端正の形色極めて妙にして最も第一なる者を擧げ、立てて[二〇]田主と爲すべし。若し訶すべきは當に彼をして訶せしむべく、若し擯くべきは當に彼をして擯けしむべし。若し我曹等の得る所の稻穀は、當に如法を以て輸送して彼に與ふべしと」。ここに於て彼の衆生の中、若し端正の形色極めて妙にして最も第一の者有れば、衆すなはち共に擧げ、立てて田主と爲す。若し訶すべきは彼すなはち訶嘖し、若し擯くべきは彼すなはち擯棄し、若し稻有ればすなはち如法を以て輸送して彼に與ふ。これ田主なり。この田主これを剎利と謂ふ。[二一]如法に衆生を樂しましめ、守護して戒を行ず。これ王なり。この王これを王と謂ふ。婆私吒、これを初因初緣の世中の剎利種と謂ひ、舊第一の智にして如法にして不如法に非ず、如法の人尊ぶ。[二二]ここに於て彼の異衆生守を以て病と爲し、守を以て癰と爲し、守を以て箭刺と爲してすなはち守を棄捨し、[二三]無事に依りて草葉屋を作りて而も禪を學す。彼無事より朝朝

【一八】巴利文「我等寧ろ粳米を配分して、境界を設けん」。

【一九】剎利種の起源。

【二〇】田主(Khettānaṁ pati)。

【二一】令如法樂衆生(Dhammena pare rañjeti)。

【二二】梵志(=婆羅門)の起源。

【二三】無事とは森林のこと。

はち皮藭を生じ、刈りて七日に至りて亦皮藭を生じ、刈らるる處に隨ひて卽ちまた生ぜず。ここに於て彼の衆生すなはち共に聚集し極めて悲しみ啼泣して是の如き語を作す、「我等惡不善の法を生じぬ。謂く我曹等宿米を儲畜す。所以者何。我等本妙色意生ずる有り、一切の支節諸根具足し、喜を以て食と爲し自身光明有りて虛空に昇り淨色久しく住しぬ。我等地味を生じ色香味有りぬ。云何が色と爲す。猶ほ生酥及び熟酥の色の如し。云何が味と爲す。蜜丸の味の如し。我等地味を食して世に住すること久遠なり、我等若し地味を食すること多ければ、すなはち惡色を生じ、地味を食すること少ければ彼妙色有り、これより色に勝有り如有るを知り、色の勝如に因るが故に、我等各各共に相輕慢して言はく、我色勝り汝色如かずと。色の勝如に因りて而も輕慢及び惡法を生ぜるが故に地味すなはち滅しぬ。地味滅して後我等地肥を生じ色香味有りぬ。云何が色と爲す。猶ほ生酥及び熟酥の色の如し。云何が味と爲す。蜜丸の味の如し。我等地肥を食して世に住すること久遠なり、我等若し地肥を食すること多ければすなはち惡色を生じ、地肥を食すること少ければすなはち妙色有り、これより色に勝有り如有るを知り、色の勝如に因るが故に我等各各共に相輕慢して言はく、我色勝り汝色如かずと。色の勝如に因りて而も輕慢及び惡法を生ぜるが故に地肥すなはち滅しぬ。地肥滅して後、我等婆羅を生じ色香味有りぬ。云何が色と爲す。猶ほ曇華の色の如し。云何が味と爲す。淳蜜丸の味の如し。我等婆羅を食して世に住すること久遠なり、我等若し婆羅を食すること多ければすなはち惡色を生じ、婆羅を食すること少ければすなはち妙色有り、これより色に勝有り如有るを知り、色の勝如に因るが故に我等各各共に相輕慢して言はく、我色勝り汝色如かずと。色の勝如に因りて而も輕慢及び惡法を生ぜるが故に婆羅すなはち滅しぬ。婆羅滅して後我等自然の粳米を生じぬ。白淨にして皮無く亦藭藁有ること無く、長さ四寸、朝に刈りて暮に生じ暮に刈りて朝に生じ、熟して鹽味有り生氣有ること無し。我等彼の自然の粳米を食しぬ。如し我等自然の粳米極めて

は、謂く婦人を説くなり。若し彼の衆生男形及び女形を生ずれば、彼の衆生則ち更更相伺ひ、更更相伺ひ已りて眼更更相視、更更相視已りて則ち更更相染み、更更相染み已りてすなはち煩熱有り、煩熱有り已りてすなはち相愛著し、相愛著し已りてすなはち欲を行じ、若し欲を行ずるを見る時すなはち木石を以て或は杖塊を以て而もこれを打擲してすなはちこの語を作す、「咄、弊悪の衆生非法の事を作すと」。云何が衆生共にこれを作すや。猶ほ今人新婦を迎ふる時則ち樸華を以て散じ、或は華鬘を以て垂れ是の如きの言を作すが如し、「新婦安隠なれ、新婦安隠なれ。本憎むべき所も今愛すべき所なりと」。婆私吒、若し衆生有りて不浄の法を悪み、憎悪し羞恥し慚愧を懐けば、彼すなはち衆を離ること一日・二日なり、六・七日・半月・一月乃至一歳に至る。婆私吒、若し衆生有りてこの不浄の行を行ずるを得んと欲せば、彼すなはち家を作りて而もこの説を作す、「この中に悪を作す、この中に悪を作すと」。婆私吒、これを初因初縁の世中、家を起すの法と謂ひ、舊第一の習にして如法にして不如法に非ず、如法にして人尊ぶ。中に於て一事懶惰の衆生有りてすなはちこの念を作す、「我今何爲ぞ日日常に自然の粳米を取るや。我寧ろ并せて一日の食の直を取るべきやと」。彼すなはち并せて一日の食米を取る。ここに於て一衆生有りて彼の衆生に語げて曰く、「衆生、汝來りて共に行きて米を取るやと」。彼則ち答へて曰く、「我已に并せて取りぬ。汝自ら取り去れと」。彼の衆生聞き已りてすなはちこの念を作す、「これ實に善と爲す、これ實に快と爲す。我亦寧ろ并せて明日食する所の米を取るべきやと」。彼すなはち并せて明日の米を取り來る。また一衆生有りて彼の衆生に語げて曰く、「衆生、汝來りて共に行きて米を取るやと」。彼則ち答へて曰く、「我已に并せて明日の米を取り來りぬ。汝自ら取りて去れと」。彼の衆生聞き已りてすなはちこの念を作す、「これ實に善と爲す、これ實に快と爲す。我今寧ろ并せて七日の食米を取るべきやと」。時に彼の衆生即便ち并せて七日の米を取り來る。如し彼の衆生自然の粳米極めて取りて積聚すれば彼の宿粳米すな

私吒、地味滅して後彼の衆生、[13]地肥を生じ色香味有り。云何が色と爲す。猶ほ生酥及び熟酥の色の如し。云何が味と爲す。蜜丸の味の如し。彼[等]この地肥を食し世に住すること久遠なり。婆私吒、若し衆生有りて地肥を食すること多ければ、すなはち惡色を生じ、地肥を食すること少ければ、すなはち妙色有り。これより色に勝有り如有るを知る。色の勝如に因るが故に衆生衆生共に相輕慢して言はく、我色勝り汝色如かずと。色の勝如に因りて而も輕慢及び惡法を生ずるが故に地肥すなはち滅す。地肥滅し已りて彼の衆生等すなはち共に聚集し極めて悲しみ啼泣して而もこの語を作す、「奈何ぞ地肥、奈何ぞ地肥と」。猶ほ今人他の爲に嘖めらるゝが如し。本の字を說かず、受持すと雖も而も義を知らず。この說義を觀ずるも亦復是の如し。婆私吒、地肥滅して後彼の衆生[14]婆羅を生じ色香味有り。云何が色と爲す。猶ほ[15]曇華の色の如し。云何が味と爲す。[16]淳蜜丸の味の如し。彼この婆羅を食し世に住すること久遠なり。婆私吒、若し衆生有りて婆羅を食すること多ければ、すなはち惡色を生じ婆羅を食すること少ければ、妙色を生ず。これより色に勝有り如有るを知る。色の勝如に因るが故に衆生衆生共に相輕慢して言はく、我色勝り汝色如かずと。色の勝如に因りて而も輕慢及び惡法を生ずるが故に婆羅すなはち滅す。婆羅滅し已りて彼の衆生等すなはち共に聚集し極めて悲しみ啼泣して而もこの語を作す、「奈何ぞ婆羅、奈何ぞ婆羅と」。猶ほ今人苦法に觸れらるゝが如し。本の字を說かず。受持すと雖も而も義を知らず。この說義を觀ずるも亦復是の如し。婆私吒、婆羅滅して後彼の衆生自然の[17]粳米を生ず、白淨にして皮無く亦穢藁有ること無く長さ四寸、朝に刈りて暮に生じ暮に刈りて朝に生じ、熟して鹽味有り生氣有ること無し。衆生この自然の粳米を食し、彼の衆生の如くこの自然の粳米を食し已りて彼の衆生等すなはち若干の形を生ず。或は衆生有りて而も男形を生じ、或は衆生有りて而も女形を生ず。若し彼の衆生男女の形を生ずれば、彼相見已りてすなはちこの語を作す、「惡衆生生ず、惡衆生生ずと」。婆私吒、惡衆生生ずと

【一三】地肥(Bhūmi-pappaṭa-ka)。

【一四】婆羅(Badālatā)。「白衣金幢經」にては「林藤」。

【一五】曇華(Udumbara)。

【一六】淳蜜丸。とろとろになりたる蜜丸。

【一七】自然粳米(Akaṭṭha-pāka sāli)。

喜を以て食と爲し、自身光明ありて虛空に昇り淨色久しく住す。婆私吒、その時世中日月有ること無く亦星宿無く、晝夜有ること無く、一〇月半月無く、時無く歲無し。婆私吒、その時に當りて父無く母無く男無く女無く、又大家無くまた奴婢無く、唯等しき衆生なり。ここに於て一衆生有りて一一貪餮にして廉ならず、すなはちこの念を作す、「云何が地味なる。我寧ろ指を以てこの地味を抄りて嘗むべしと」。彼の時衆生すなはち指を以てこの地味を抄りて嘗む。是の如くして衆生既に地味を知り、また食するを得んと欲す。彼の時衆生またこの念を作す、「何の故に指を以てこの地味を食し用て自ら疲勞するや」。我今寧ろ手を以てこの地味を撮りてこれを食すべしと。彼の時衆生すなはち手を以てこの地味を撮りて食す。彼の衆生中に於てまた衆生有りて彼の衆生各手を以てこの地味を撮りて食するを見てすなはちこの念を作す、「これ實に善と爲す、これ實に快と爲す。我等寧ろ亦手を以てこの地味を撮りて食すべしと」。時に彼の衆生卽ち手を以てこの地味を撮りて食す。若し彼の衆生手を以てこの地味を撮りて食し已れば、是の如く是の如く身生じて轉た厚く轉た重く轉た堅し。若し彼本の時淸淨の色有りしは、ここに於てすなはち滅し自然に闇を生ず。婆私吒、世間の法自然にこれ有り。若し闇を生ずれば必ず日月を生じ、日月を生じ已りてすなはち星宿を生じ、星宿を生じ已りてすなはち晝夜を成し、晝夜を成し已りてすなはち月・半月有り、時有り歲有り。彼地味を食し世に住すること久遠なり。婆私吒、若し衆生有りて地味を食すること多ければ、すなはち惡色を生じ、地味を食すること少ければ、すなはち妙色有り。これより色に勝有り如有るを知る。色の勝如に因るが故に衆生衆生共に相輕慢して言はく、「我色勝り汝色如かずと」。色の勝如に因りて而も輕慢及び惡法を生ずるが故に地味すなはち滅す。一二地味滅し已りて彼の衆生等すなはち共に聚集して極めて悲しみ啼泣して而もこの語を作す、「奈何ぞ地味、奈何ぞ地味と」。猶ほ今人の含消美物の如し。本の字を說かず。受持すと雖も而も義を知らず。この說義を觀ずるも亦復是の如し。婆

【一〇】月・半月(Māsa-addha-māsa)。一箇月と一箇月を二分して白分(Sukka-pakkha)と黑分(Kaṇha-pakkha)となしたるをいふ。

【一一】貪餮不廉(Lobha-jātika)。

【一二】巴利文「地味の滅するや、〔彼等は〕相集りぬ、相集りて歎き悲みぬ「嗚呼味なるかな、嗚呼味なるかな」〔といひて〕。そは今尙ほ人の何によらず美味食を得れば「嗚呼味なるかな、嗚呼味なるかな」といふが如し。〔今人は〕古への本の文字に遵ふ、但その意義を曉らず」。

吒、意に於て云何。[五]諸の釋意を下して愛敬し、至りて重んじて[六]波斯匿拘娑羅王を供養し奉事するや』。彼則ち答へて曰く『是の如し世尊』。世尊問ひて曰はく『婆私吒、意に於て云何。若し諸の釋意を下して愛敬し、至りて重んじて波斯匿拘娑羅王を供養し奉事すれば、是の如く波斯匿拘娑羅王は則ち[七]我が身に於て、意を下し愛敬し、至りて重んじて我を供養し奉事するや』。世尊に答へて曰く『諸の釋意を下して愛敬し、至りて重んじて波斯匿拘娑羅王を供養し奉事するは、これ奇特無し。若し波斯匿拘娑羅王意を下して愛敬し、至りて重んじて世尊を供養し奉事するは、これ甚だ奇特なり』。世尊告げて曰はく『婆私吒、波斯匿拘娑羅王是の如き意ならずして、而も我が身に於て意を下して愛敬し、至りて重んじて我を供養し奉事す。沙門瞿曇の種族極めて高く我が種族下なり、沙門瞿曇財寶甚だ多く我財寶少し、沙門瞿曇形色至妙にして我色妙ならず、沙門瞿曇大威神有り我威神小なり、沙門瞿曇善智慧有り我惡智有り、とて「我を供養し奉事するにあらず」。婆私吒、但波斯匿拘娑羅王法を愛敬し、至りて重んじて供養し奉事の爲の故に、而も我が身に於て意を下し愛敬し、至りて重んじて我を供養し奉事す』。その時世尊比丘に告げて曰はく『婆私吒、時有りてこの世皆悉く敗壞す。この世壞るゝ時若し衆生有れば、晃昱天に生ず。彼その中に於て妙色意生じ、一切の支節諸根具足し、喜を以て食と爲し、自身光明ありて虚空に昇り淨色久しく住す。婆私吒、時有りてこの大地その中に水を滿し、彼の大水の上、風を以て吹攪し結搆して精と爲り合聚和合す。猶ほ熟酪抨を以て乳を抨るに結搆して精と爲り合聚和合するが如し。是の如く婆私吒、時有りてこの大地その中に水を滿し、彼の大水の上、風を以て吹攪し結搆して精と爲り合聚和合し、これより[九]地味を生じ色香味有り。云何が色と爲す。猶ほ生酥及び熟酥の色の如し。云何が味と爲す。蜜丸の味の如し。婆私吒、時有りてこの世還た復成ずる時、若し衆生有りて晃昱天に生じ、壽盡き業盡き福盡き命終りてここに生じて人と爲る。この間に生じ已りて妙色意生じ、一切の支節諸根具足し、

【五】「諸の釋（氏）意を下して愛敬し至重し供養し奉事するや」と讀むも可なり、以下傚へ。
【六】波斯匿王は佛の在世時代拘娑羅族の王にして、佛に歸依したり。然るに一方釋迦族は王に對して宗主の禮を執れり。
【七】王は佛に對して師の禮を執る。
【八】二卷「七日經」本文及び註［一三］を見よ。
【九】地味（Rasa-pṛthavī）、生酥（Sappi）、熟酥（Navanīta）、蜜丸（Khuddamadhu）。

も亦復是の如し』。世尊問ひて曰はく『婆私吒、意に於て云何。梵志は殺を離れ、殺・不與取・行邪婬・妄言を斷じ乃至邪見を離れて正見を得、剎利・居士は然らずと爲すや』。答へて曰く『世尊、梵志亦殺を離れ、殺・不與取・行邪婬・妄言を斷じ乃至邪見を離れて正見を得べくば、剎利・居士も亦復是の如し』。世尊問ひて曰はく『婆私吒、意に於て云何。若し無量の惡不善の法有れば、これ剎利・居士の所行にして梵志に非ざるや。若し無量の善法有れば、これ梵志の所行にして剎利・居士に非ざるや』。答へて曰く『世尊、若し無量の惡不善の法有れば、彼の剎利・居士も亦行ずべく、梵志も亦復是の如し。若し無量の善法有れば、彼の梵志も亦行ずべく、剎利・居士も亦復是の如し』。『婆私吒、若し無量の惡不善の法有りて、一向に剎利・居士行じて梵志に非ざれば、若し無量の善法有りて一向に梵志行じて剎利・居士に非ざれば、彼の諸の梵志この說を作すべし、「我等梵志はこれ梵天の子にして彼の口より生じ、梵[志]は梵[天]の化する所なりと」。所以者何。婆私吒、梵志の女、始め婚姻するを見る時、婚姻し已りて後懷妊身を見る時、懷妊身の已後產生するを見る時、或は童男或は童女なり。婆私吒、是の如く諸の梵志亦世法の如く產道に隨ひて生ず。然るに彼妄言し梵天を誣謗して而もこの說を作す、「我等梵志はこれ梵天の子にして彼の口より生じ、梵[志]は梵[天]の化する所なりと」。婆私吒、若し族姓子、若干種の姓、若干種の名、若干族を捨て鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして我に從ひて學道すれば、應にこの說を作すべし、「我等梵志はこれ梵天の子にして彼の口より生じ、梵[志]は梵[天]の化する所なりと」。所以者何。婆私吒、彼の族姓子我が正法律中に入りて我が正法律を受け、彼岸に至るを得、疑を斷じ惑を度し猶豫有ること無く、世尊の法に於て無所畏を得。この故に彼應にこの說を作すべし、「我等梵志はこれ梵天の子にして彼の口より生じ、梵[志]は梵[天]の化する所なりと」。婆私吒、彼の梵天はこれ如來・無所著・等正覺を說き、梵はこれ如來、冷なるはこれ如來、煩無く熱無く如を離れざるはこれ如來なり。婆私

諸の梵志見已りて、極めて訶し責數すること甚だ急にして至りて苦しむ』。世尊問ひて曰はく『婆私吒、諸の梵志見已りて、云何が極めて訶し責數すること甚だ急にして至りて苦しむるや』答へて曰く『世尊、諸の梵志我等を見已りて而もこの說を作す。梵志種勝りて餘者如かず、梵志種白くして餘者皆黑く、梵志は清淨を得、非梵志は清淨を得ず、梵志は梵天の子にして彼の口より生じ、梵[志]は梵[天]の化する所なり。汝等勝るを捨てゝ如かざるに從ひ、白きを捨てゝ黑きに從ふ、彼の禿・沙門、黑の縛する所と爲り種を斷じて子無し。この故に汝等所作大惡にして極めて大過を犯すと。世尊、諸の梵志我等を見已りて是の如く極めて訶し責數すること甚だ急にして至りて苦しむ』。世尊告げて曰はく『婆私吒、彼の諸の梵志の所說至惡にして極めて自ら賴る無し。所以者何。謂く彼愚癡にして善く曉解せず良田を識らず、自ら知る能はずして是の如き說を作す、我等梵志は、これ梵天の子にして彼の口より生じ、梵[志]は梵[天]の化する所なりと。所以者何。婆私吒、我がこの無上の明行作證は、生れながら勝るを說かず、種姓を說かず、憍慢を說かず。彼我が意を可とし我が意を不可とするに、坐に因り水に因り、學する所の經書[に因る]。婆私吒、若し婚姻する者有れば、彼應に生を說くべく、應に種姓を說くべく、應に憍慢を說くべし。彼我が意を可とし我が意を不可とするに、坐に因り水に因り、學する所の經書[に因るべし]。婆私吒、若し生を計り姓を計り慢を計る者有れば、彼極めて我が無上の明行作證を遠離す。婆私吒、生を說き姓を說き慢を說き、彼我が意を可とし我が意を不可とするに、坐に因り水に因り、學する所の經書に[因るは]、我が無上の明行作證より別なり。また次に婆私吒、謂く三種有りて一切の人人をして共に諍ふに非ずして、雜善不善の法、彼則ち聖の稱し稱せざる所と爲らしむ。云何が三と爲す。[四]剎利種・梵志種・居士種なり。婆私吒、意に於て云何。剎利は殺生し不與取し邪婬を行ひ妄言し乃至邪見あり、居士亦然り、梵志に非ざるや』。答へて曰く『世尊、剎利亦殺生し不與取し邪婬を行ひ妄言し乃至邪見あるべくば、梵志・居士

【四】剎利(Khattiya)、=剎帝利、梵志(Brāhmaṇa)=婆羅門、居士(Vessa)=毘(吠)舍。

卷の第三十九

*梵志品

百五十四、婆羅婆堂經第三

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衛國に遊び東園鹿子母堂に在しぬ。その時二人の婆私吒及び婆羅婆梵志族有りて鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道しぬ。諸の梵志見已りて極めて訶し責數すること甚だ急にして、至りて苦しめて而もこれに語げて曰く『梵志種勝りて餘者如かず、梵志種白くして餘者皆黑く、梵志は清淨を得、非梵志は清淨を得ず、梵志は梵天の子にして彼の口より生じ、梵[志]は梵[天]の化する所なり。汝等勝るを捨てゝ如かざるに從ひ、白きを捨てゝ黑きに從ふ。彼の禿・沙門、黑の縛する所と爲り種を斷じて子無し。この故に汝等所作大惡にして極めて大過を犯す。その時世尊則ち、晡時に於て燕坐より起ち堂上より來下し、堂影中の露地に於て經行し、諸の比丘の爲に甚深微妙の法を說きたまひぬ。尊者婆私吒遙に世尊則ち晡時に於て燕坐より起ち堂上より來下し、堂影中の露地に於て經行し、諸の比丘の爲に甚深微妙の法を說きたまふを見、尊者婆私吒見已りて語げて曰く『賢者婆羅婆、當に知るべし。世尊則ち晡時に於て燕坐より起ち堂上より來下し、堂影中の露地に於て經行し、諸の比丘の爲に甚深微妙の法を說きたまふ。賢者婆羅婆、共に佛に詣るべし。或は能くこれに因りて佛より法を聞かん』。ここに於て婆私吒及び婆羅婆即ち佛の所に詣り稽首して禮を作し後に從ひて經行しぬ。世尊迴顧して彼の二人に告げたまはく『婆私吒、汝等二梵志、梵志族を捨て鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道す。諸の梵志見已りて大いに責數せざるや』。彼即ち答へて曰く『唯然り世尊、

※この三字削るべきを誤りて存したるなり。

【一】D. 27, Aggañña-suttanta.「長阿含」六卷「小緣經」。施護譯「白衣金幢二婆羅門緣起經」。

【二】婆私吒(Vāseṭṭha)、婆羅婆(Bhāradvāja)。

【三】巴利文「禿頭の僞沙門の賤しく黑くして[梵・天の]足より生れたるもの等」。

り、老は苦なり、病は苦なり、死は苦なり、怨憎に會ふは苦なり、愛する「者」と別離するは苦なり、求むる所得ざるは苦なり。略して五盛陰は苦なりと、是の如く苦の如眞を知る。云何が苦の習の如眞を知る。謂くこの愛當に未來の有を受くべく、喜欲と倶に彼々の有を願ふと、是の如く苦の習如眞を知る。云何が苦の滅如眞を知る。謂く、この愛當に未來の有を受くべく、喜欲と倶に彼々の有を願ふ。[その]滅・無餘・斷・捨・吐・盡・無欲・沒・息止と、是の如く苦の滅の如眞を知る。云何が苦滅道の如眞を知る。謂く八支聖道、正見乃至正定これを謂ひて八と爲すと、是の如く苦滅道の如眞を知る』。この法を說き已りたまふや、鬚閑提異學塵を遠ざけ垢を離れ諸法の法眼生じぬ。ここに於て鬚閑提異學法を見法を得、白淨の法を覺り疑を斷じ惑を度し、更に餘の尊無く、また他に從はず、猶豫有ること無く、已に果證に住し世尊の法に於て無所畏を得、即ち座より起ち佛足を稽首して白して曰く『世尊、願はくは我をして出家學道するを得、具足「戒」を受けて比丘たるを得しめたまへ』。世尊告げて曰はく『善く來れり比丘、梵行を修行せよ』。鬚閑提異學は即ちこれ出家學道し、具足「戒」を受けて比丘たるを得ぬ。鬚閑提出家學道し、具足「戒」を受け法を知り已りて阿羅訶を得るに至りぬ。佛說是の如し。尊者鬚閑提佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第三十八

くも終に知ること能はず唐じく我を煩勞せん。鬚閑提、猶生盲の人のごとし。他往きて、汝當に知るべし。こはこれ靑色・黃・赤・白色なりと語ぐるに因りて、鬚閑提、彼の生盲の人頗し他の說に因りてこれ靑色・黃・赤・白色なりと知るや』。世尊に答へて曰く『不なり瞿曇』。『是の如く鬚閑提、若し汝聖慧眼未だ淨からざれば、我汝が爲に無病涅槃を說くも終に知ること能はず唐しく我を煩勞せん。鬚閑提、我汝が爲に如其像妙藥を說き、未だ淨からざる聖慧眼をして而も淸淨を得しめん。鬚閑提、若し汝聖慧眼淸淨を得れば、汝すなはち自らこはこれ無病にしてこはこれ涅槃なりと知らん。鬚閑提、猶ほ生盲の人のごとし。諸の親親有りて彼の爲に慈愍して利及び饒益を求め安隱快樂を求むるが故に爲に眼醫を求む。彼の眼醫者種種の治を與へ、或は吐かせ或は下し、或は鼻を灌ぎ或はまた灌下し、或はその脈を刺し或は涙をして出でしむ。鬚閑提、儻しはこの處淨き兩眼を得る有り。鬚閑提、若し彼兩眼淸淨を得れば則便ち自らこはこれ靑色・黃・赤・白色なりと見、彼の垢膩不淨の衣を見てすなはちこの念を作す、彼卽ち怨家にして長夜に則ち垢膩の衣を以て我を欺誑しぬと。すなはち憎心有り。鬚閑提、この人儻しは能く彼を殺害す。是の如く鬚閑提、我汝が爲に如其像妙藥を說き、未だ淨からざる聖慧眼をして而も淸淨を得しめん。鬚閑提、若し汝聖慧眼淨を得れば、汝すなはち自らこはこれ無病にしてこはこれ涅槃なりと知らん。鬚閑提、四種の法有りて未だ淨からざる聖慧眼而も淸淨を得。云何が四と爲す。善知識に親近し恭敬し承事し、善法を聞き善く思惟して法次法に趣向す。鬚閑提、汝當に是の如く學すべし。善知識に親近し恭敬し承事し、善法を聞きて善く思惟し、法次法に趣向せんと。鬚閑提、當に是の如きを學すべし。鬚閑提、汝善知識に親近し恭敬し承事し已りてすなはち善法を聞き、善法を聞き已りてすなはち善く思惟し、善く思惟し已りてすなはち法次法に趣向し、法次法に趣向し已りてすなはちこの苦の如眞を知り、この苦の習を知り、この苦の滅を知り、この苦滅道の如眞を知る。云何が苦の如眞を知る。謂く生は苦な

『鬚閑提、猶ほ生盲の如し、目有る人より、その白淨は無垢なり白淨は無垢なりと說く所を聞き、彼これを聞き已りてすなはち白淨を求む。諂誑の人有りて而も彼の爲に利及び饒益を求め安隱快樂を求めず、則ち垢膩不淨の衣を以て持ち往きて語げて曰く、汝當にこれを知るべし。こはこれ白淨無垢の衣なり。汝兩手を以て敬受して身に被よと。彼の盲子喜びて卽ち兩手を以て敬受して身に被て而もこの說を作す、白淨は無垢なり白淨は無垢なりと。鬚閑提、彼の人自ら知りて說くと爲すや、知らずして說くと爲すや。自ら見て說くと爲すや、見ずして說くと爲すや』。鬚閑提異學答へて曰く『瞿曇、是の如く說かば實に知見せず』。世尊語げて曰はく『是の如し鬚閑提、盲にして目無きが如く、身は卽ちこれ病、これ癰、これ箭、これ蛇、これ無常、これ苦、これ空、これ非神なりとて、兩手を以て抆摸して而もこの說を作す、瞿曇、こはこれ無病にしてこはこれ涅槃なりと。鬚閑提、汝尙ほ無病を識らず。何ぞ況や涅槃を知見せんをや。知見すと言はんは終にこの處り無し。鬚閑提、如來・無所著・等正覺說く、

無病は第一の利なり、　涅槃は第一の樂なり。
諸の道は八正道にして、　安隱甘露に住すと。

彼の衆多の人並に共にこれを聞く。衆多の異學この偈を聞き已りて展轉して相傳へ、義を知ること能はず。彼既に聞き已りて而も敎を求めんと欲す。彼並に愚癡にして還た相欺誑す。彼自ら現身は四大の種、父母より生じ飲食して長ずる所、常に覆ひ按摩澡浴し、強忍・破壞・磨滅・離散の法なり。然も神を見、神を受け、受に緣りて則ち有り、有に緣りて則ち生じ、生に緣りて則ち老死し、老死に緣りて則ち愁慼・啼哭し、憂苦・懊惱す。是の如くこの生、純ら大苦陰なり』。ここに於て鬚閑提異學卽ち坐より起ち、偏に著衣を袒き叉手を佛に向け白して曰く『瞿曇、我今極めて沙門瞿曇を信ず。唯願はくは瞿曇、善く爲に法を說き、我をしてこはこれ無病にしてこはこれ涅槃なりと知るを得しめよ』。世尊告げて曰はく『鬚閑提、若し汝聖慧眼未だ淨からざれば我汝が爲に無病涅槃を說

士有りて强ひて彼の人を捉へ火坑に臨みて炙り、彼その中に於て慞惶して迴避し身重熱を生ず。鬚閑提、意に於て云何。この火坑は今より更に熱し、大苦患ふべきこと本より甚しきや』。世尊に答へて曰く『不なり瞿曇。その本癩を病み身體爛熟し蟲の爲に食はれ、爪もて瘡を擿ち開きて火坑に臨みて炙るは、彼苦に於て大樂あり更樂想あり、その心迷亂して顚倒想有り。瞿曇、彼の人今に於て病を除き力を得、諸根を壞らずして已に癩病を脫れ、身體完く健にして平復故の如く更に本の所に還る。彼苦に於て大苦あり更樂想あり、その心泰然として顚倒想無し』。『鬚閑提、癩を病む人、身體爛熟し蟲の爲に食はれ、爪もて瘡を擿ち開き火坑に臨みて炙り、彼苦に於て大樂更樂想あり、その心迷亂して顚倒想有るが如く、是の如く鬚閑提、衆生欲を離れず、欲愛の爲に食はれ、欲熱の爲に熱せられて而も欲を行じ、彼苦欲に於て樂欲想有り、その心迷亂して顚倒想有り。鬚閑提、猶ほ彼の人病を除き力を得、諸根を壞らずして已に癩病を脫れ、身體完く健にして平復故の如く更に本の所に還り、彼苦に於て大苦あり更樂想あり、その心泰然として顚倒想無きが如く、是の如く鬚閑提、我苦欲に於て苦欲想有り、如眞實を得て顚倒想無し。所以者何。鬚閑提、過去時の欲、不淨臭處、意甚だ穢惡にして而も向ふべからず、憎諍して苦更に觸れ、未來現在の欲亦不淨臭處、意甚だ穢惡にして而も向ふべからず、憎諍して苦更に觸る。鬚閑提、如來・無所著・等正覺、無病は第一の利なり、涅槃は第一の樂なりと說く』。鬚閑提異學世尊に白して曰く『瞿曇、我亦曾て耆舊・尊德・長老・久學の梵行［者］の所より無病は第一の利なり、涅槃は第一の樂なりと聞きぬ』。世尊問ひて曰はく『鬚閑提、若し汝曾て耆舊・尊德・長老・久學の梵行［者］の所より無病は第一の利なり、涅槃は第一の樂なりと聞かば、鬚閑提、何者か無病にして何者か涅槃なりや』。ここに於て鬚閑提異學、身は卽ちこれ病、これ癰、これ箭、これ蛇、これ無常、これ苦、これ空、これ非神なりとて、兩手を以て抆摸して而もこの說を作しぬ『瞿曇、こはこれ無病にしてこはこれ涅槃なり』。世尊語げて曰はく

り。然も彼反つて癩瘡を以て樂と爲すが如く、鬚閑提、是の如く衆生未だ欲を離れず、欲愛の爲に食はれ、欲熱の爲に熱せられて而も欲を行ず。鬚閑提、是の如くして欲轉た增す多く欲愛轉た廣し。欲愛の爲に食はれ、欲熱の爲に熱せられて而も欲を行じ、是の如くして欲轉た增す多く欲愛轉た廣し。然も彼反つて欲愛を以て樂と爲す。彼若し欲を斷ぜず欲愛を離れず」內息心して、已に行じ當に行ずべく今行ぜんは、終にこの處り無し。所以者何。こは道理もて欲を斷じ欲愛を離るゝに非ずして欲を行ずと謂ふ』。世尊告げて曰はく『鬚閑提、猶ほ王及び大臣五所欲を得ること易く得難からざるがごとし。彼若し欲を斷ぜず欲愛を離れず、內息心して已に行じ當に行ずべく今行ぜんは、終にこの處り無し。所以者何。こは道理もて欲を斷じ欲愛を離るゝに非ずして欲を行ずと謂ふ。是の如く鬚閑提、衆生未だ欲を離れず、欲愛の爲に食はれ、欲熱の爲に熱せられて而も欲を行ず。鬚閑提、若し衆生未だ欲を離れず、欲愛の爲に食はれ、欲熱の爲に熱せられて而も欲を行ずれば、是の如くして欲轉た增す多く欲愛轉た廣し。然も彼反つて欲愛を以て樂と爲す。彼若し欲を斷ぜず欲愛を離れず內息心して、已に行じ當に行ずべく今行ぜんは、終にこの處り無し。所以者何。こは道理もて欲を斷じ欲愛を離るゝに非ずして欲を行ずと謂ふ。鬚閑提、猶ほ癩を病む人身體爛熟し蟲の爲に食はれ、爪もて瘡を擿開き火坑に臨みて炙るがごとし。人有りて彼の爲に憐念愍傷し利及び饒益を求め安隱・快樂を求め、如其像好藥を與へ、如其像好藥を與へ已りて、[彼]病を除き力を得、諸根を壞らずして已に癩病を脫れ、身體完く健にして平復故の如く更に本の所に還る。彼若し人の癩病有る者身體爛熟し蟲の爲に食はれ、爪を以て瘡を擿ち開きて火坑に臨みて炙[るが如くな]るを見れば、鬚閑提、彼の人見已りて寧ろまた意樂し稱譽し喜ぶや』。世尊に答へて曰く『不なり瞿曇。所以者何。病有れば藥を須ひ、病無ければ須ひず』。『鬚閑提、意に於て云何。若し彼の癩人病を除きて力を得、諸根を壞らずして已に癩病を脫れ、身體完く健にして平復故の如く更に本の所に還る。二力

【八】如其像好藥。その病氣の治癒するやうな、そのやうな好い藥の意(tathārūpa)。

量、諸の畜牧多く封戸食邑、諸の生活の具、種種豐饒なり。彼五欲を得ること易く、得難からず。彼身妙行・口・意妙行を成就し、死に臨むの時五欲の功德を捨つるを樂はず、身壞れ命終りて後善處に昇り、天上に生ずるを得、五欲の功德を具足して行ず。鬚閑提、この天及び天子寧ろ當に天の五欲の功德を捨てゝ人間の欲・歡喜の念を樂ふべきや』。世尊に答へて曰く『不なり瞿曇。所以者何。人間の欲は臭處不淨、意甚だ穢惡にして而も向ふべからず、憎諍極めて苦なり。瞿曇、人間の欲より天の欲最上・最妙・最勝なり。若し彼の天及び天子天上の五欲の功德を捨てゝ人間の欲・歡喜の念を樂はんは終にこの處り無し』。『是の如し鬚閑提、我人間の欲を斷じ天の欲を度し、鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道し、彼の五欲の功德の習・滅・味・患・出要の如眞を見、內息心して遊行す。我人の未だ欲を離れず、欲愛の爲に食はれ、欲熱の爲に熱せられ、五欲の功德に愛念し意樂し可とし欲と相應して行ずるを見る時、見已りて我彼を稱せず、我彼を樂はず。鬚閑提、意に於て云何。若しこの樂有り欲に因り欲愛に因りこの樂を樂ふ時薄賤の故に我彼を稱せず、薄賤の故に我彼を樂はず。鬚閑提、寧ろ我に於て說く所有るべきや』。世尊に答へて曰く『不なり瞿曇』。世尊告げて曰はく『鬚閑提、猶ほ人癩を病み身體爛熟し蟲の爲に食はれ、爪もて瘡を擿ち開き火坑に臨みて炙るがごとし。鬚閑提、意に於て云何。若し癩を病む人身體爛熟し蟲の爲に食はれ、爪もて瘡を擿ち開き火坑に臨みて炙「るが如くな」れば、是の如くして寧ろ病を除き力あるを得、諸根を壞せずして爲に癩病を脫れ身體完く健にして平復故の如く本所に還るや』。世尊に答へて曰く『不なり瞿曇。所以者何。若し癩を病む人身體爛熟し、蟲の爲に食はれ、爪もて瘡を擿ち開き火坑に臨みて炙「るが如くな」れば、是の如くして更に瘡を生じて轉た增す多く本の瘡轉た大なり。然も彼反つて癩瘡を以て樂と爲す』。『鬚閑提、癩を病む人身體爛熟し蟲の爲に食はれ、爪もて瘡を擿ち開き火坑に臨みて炙「るが如くな」れば、是の如くして更に瘡を生じて轉た增す多く本の瘡轉た大な

す。彼後時に於て身に觸を知るを捨て鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして學道し、彼身に觸の習・滅・味・患・出要を知りて如眞を見、內息心して遊行す。彼若し人の未だ觸欲を離れず、觸愛の爲に食はれ、觸熱の爲に熱せられ、彼身に觸を知りて愛念し意樂し可とし欲と相應するを見、行ずる時、見已りて彼を稱せず彼を樂はず。鬚閑提、意に於て云何。若しこの樂を見る有り愛に因り觸に因りこの樂を樂ふ時薄賤の故に彼を稱せず、薄賤の故に彼を樂はず。鬚閑提、寧ろ彼に於て說く所有るべきや』。世尊に答へて曰く『不なり瞿曇』。世尊問ひて曰はく『鬚閑提、意に於て云何。若人本未だ出家學道せず、五欲の功德を愛念し意樂し可とし欲と相應し、彼後時に於て五欲の功德を捨て鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道し、彼五欲の功德の習・滅・味・患・出要の如眞を見、內息心して遊行す。彼若し人の未だ欲を離れず、欲愛の爲に食はれ、欲熱の爲に熱せられ、五欲の功德を愛念し意樂し可とし欲と相應して行ずるを見る時、見已りて彼を稱せず彼を樂はず。鬚閑提、意に於て云何。若しこの樂有り欲に因り欲愛に因り、この樂を樂ふ時、薄賤の故に彼を稱せず、薄賤の故に彼を樂はず。鬚閑提、寧ろ彼に於て說く所有るべきや』。世尊に答へて曰く『不なり瞿曇』。『鬚閑提、我、本、未だ出家學道せざりし時五欲の功德を得ること易くして得難からず、愛念し意樂し可とし欲と相應しぬ。我後時に於て五欲の功德を捨て鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道し、彼の五欲の功德の習・滅・味・患・出要の如眞を見、內息心して遊行す。我人の未だ欲を離れず、欲愛の爲に食はれ、欲熱の爲に熱せられ、五欲の功德に愛念し意樂し可とし欲と相應して行ずるを見る時、見已りて我彼を稱せず、我彼を樂はざりき。鬚閑提、意に於て云何。若しこの樂有り欲に因り欲愛に因りこの樂を樂ふ時、薄賤の故に我彼を稱せず、薄賤の故に我彼を樂はず。鬚閑提、寧ろ我に於て說く所有るべきや』。世尊に答へて曰く『不なり瞿曇』。世尊告げて曰はく『鬚閑提、猶ほ居士、居士の子の如し。極大富樂にして資財無

して佛の所に往詣し共に相問訊し却きて一面に坐しぬ。世尊問ひて曰はく『婆羅婆、鬚閑提異學と共にこの草坐の處を論ぜるや』。婆羅婆梵志世尊に答へて曰く『是の如し瞿曇。我亦この事を以て沙門瞿曇に向ひて說かんと欲す。然るに沙門瞿曇未だ說かざるに已に自ら知る。所以者何。如來・無所著・等正覺[たる]を以ての故に』。世尊婆羅婆梵志と共にこの事を論じたまひぬ。鬚閑提異學後に於て彷徉して婆羅婆の第一靜室に往詣しぬ。世尊遙かに鬚閑提異學の來るを見已りて而もこの說を作したまひぬ『鬚閑提、眼根を調御せず、密に守護せずして而も修せざれば必ず苦報を受けん。彼沙門瞿曇に於て[七]善く自ら調御し善く密に守護して、而も善く修すれば必ず樂報を得ん。鬚閑提、汝これに因るが故に沙門瞿曇地を敗壞し、地を敗壞すれば用ふべき無しと說くや』。鬚閑提異學世尊に答へて曰く『是の如し瞿曇』。『鬚閑提、是の如く耳・鼻・舌・身根を調御せず、意根を密に守護せずして而も修せざれば、必ず苦報を受けん。彼沙門瞿曇に於て善く自ら調御し善く密に守護して而も善く修すれば必ず樂報を得ん。鬚閑提、汝これに因るが故に沙門瞿曇地を敗壞し、地を敗壞すれば用ふべき無しと說くや』。鬚閑提異學世尊に答へて曰く『是の如し瞿曇』。世尊問ひて曰はく『鬚閑提意に於て云何。若し人本未だ出家學道せず、彼眼に色を知りて愛念し意樂し可とし欲と相應す。彼後時に於て眼に色を知るを捨て鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道し、彼眼に色の習・滅・味・患・出要を知りて如眞を見、內息心して遊行す。彼若し人の未だ色欲を離れず、色愛の爲に食はれ、色熱の爲に熱せられ、彼眼に色を知りて愛念し意樂し可とし欲と相應するを見、行ずる時見已りて彼を稱せず彼を樂はず。鬚閑提、意に於て云何。若しこの樂有り愛に因り色に因りてこの樂を樂ふ時、薄賤の故に彼を稱せず、薄賤の故に彼を樂はず。鬚閑提、寧ろ彼に於て說く所有るべきや』。世尊に答へて曰く『不なり瞿曇』。『鬚閑提、意に於て云何。若し人本未だ出家學道せず、是の如く耳に聲を知り、鼻に香を知り、舌に味を知り、身に觸を知りて愛念し意樂し可とし欲と相應

【七】世尊に就て、世尊の座下にありての意。

中後に還りて衣鉢を擧し手足を澣洗し、尼師檀を以て肩上に著け、一林に往詣し晝行處に至りたまひぬ。その時世尊彼の林に入りて一樹下に至り尼師檀を敷きて結加趺坐したまひぬ。ここに於て[六]鬚閑提異學中後に彷徉して婆羅婆の第一靜室に往詣しぬ。鬚閑提異學遙かに婆羅婆の第一靜室に草座を布き一脇もて臥する處、師子の臥に似、沙門の臥に似、梵行[者]の臥に似る有るを見ぬ。鬚閑提異學見已りて問ひて曰く『婆羅婆の第一靜室に誰かこの草座に一脇もて臥する處、師子の臥に似、沙門の臥に似、梵行[者]の臥に似る有りや』。婆羅婆梵志答へて曰く『鬚閑提、沙門瞿曇[といふ]釋種の子有り、釋の宗族を捨て鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道し、無上正盡覺を覺れり。彼第一靜室にこの草座に一脇もて臥する處、師子の臥に似、沙門の臥に似、梵行[者]の臥に似たる有り』。鬚閑提異學語げて曰く『婆羅婆、我今見るべからざるを見、聞くべからざるを聞きぬ。謂く沙門瞿曇の臥する處を見ぬ。所以者何。彼の沙門瞿曇地を壞敗す。地を壞敗すれば用ふべき無し』。婆羅婆語げて曰く『鬚閑提、汝應にこの事を以て彼の沙門瞿曇を罵るべからず。所以者何。彼の沙門瞿曇多く慧有り。刹利の慧・梵志の慧・居士の慧・沙門の慧なり。若し慧を說けば皆聖智を得。鬚閑提、我この義を以て彼の沙門瞿曇に向ひて說かんと欲す。爾るべしと爲すや不や。鬚閑提語げて曰く『婆羅婆、若し說かんと欲せば則ち汝の意に隨へ。我違ふ所無し。婆羅婆、若し沙門瞿曇を見れば我亦この義を說かん。所以者何。彼の沙門瞿曇地を敗壞す。地を敗壞すれば用ふべき無し』。その時世尊晝行處に在りて淨き天耳の人[耳]を出過せるを以て婆羅婆梵志、鬚閑提異學と共にこの事を論ずるを聞き、世尊聞き已りて則ち晡時に於て燕坐より起ち、婆羅婆梵志の第一靜室に往詣し草座の上に於て尼師檀を敷きて結加趺坐したまひぬ。婆羅婆梵志遙かに世尊樹林の間に在りて端政姝好にして猶ほ星中の月の如く光耀煒燁として晃金山の若く、相好具足し威神巍巍たり、諸根寂定にして蔽礙有ること無く成就し調御し息心して靜默なるを見、見已りて進前

【六】鬚閑提異學(Māgaṇḍiya Paribbājaka)。

て極めて廣く、善く修して心定まり意解け遍滿し成就して遊ぶ。我をして梵天及び餘の梵天と作らしめよと。汝彼を觀ずるに、誰か梵天及び餘の梵天と作るを得るや』。鸚鵡摩納答へて曰く『瞿曇、若しこれ梵天を求め、要ず梵天上を求むるが故にすなはち結無く怨無く恚無く諍無く、無量にして極めて廣く、善く修して心定まり意解け遍滿し成就して遊べば、彼我を觀ずるに梵天或は餘の梵天と作るを得ん』。鸚鵡摩納問ひて曰く『瞿曇、梵道跡を知るや』。世尊告げて曰はく『摩納、我今汝に問ふ。解する所に隨ひて答へよ。摩納、意に於て云何。[16]那羅歌邏村この衆を去ること遠からざるや』。鸚鵡摩納答へて曰く『遠からず』。世尊告げて曰はく『摩納、意に於て云何。汝この衆に於て一人に告げて曰く、汝彼の那羅歌邏村に往至し到りて便即ち還れと。彼汝の教を受けて速疾かに那羅歌邏村に往至し到りて便即ち還る。彼往返し已りて汝道路、謂く那羅歌邏村より往返出入の事を問ふ。彼の人寧ろ住まりて「而も」答ふること能はざるや』。鸚鵡摩納世尊に答へて曰く『不なり瞿曇』。世尊告げて曰はく『摩納、彼の人那羅歌邏村に往返し、道路の事を問ふに乃ち住まりて而も答ふること能はざるを得べくも、若し如來・無所著・等正覺に梵道跡を問はゞ、終に暫く住まりて而も答ふること能はざるにあらず』。鸚鵡摩納世尊に白して曰く『沙門瞿曇、無著天祠この事具足す。謂く梵道跡を問ふに能く速かに答ふるが故に。世尊、我已に知る。善逝、我已に解す。世尊、我今自ら佛・法及び比丘衆に歸す。唯願はくは世尊、我を受けて優婆塞と爲したまへ。今日より始めて終身自ら歸し乃ち命盡くるに至らん』。佛說是の如し。鸚鵡摩納佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百五十三、[1]鬚閑提經第二

我が聞きしこと是の如し。ある時佛拘樓瘦に遊び[2]婆羅婆の第一[3]靜室に在りて[4]草座に坐したまひぬ。その時世尊夜を過ぎて平旦衣を著け鉢を持し[5]劍摩瑟曇に入りて次第に乞食し、食し已り

【一六】那羅歌邏村(Naḷakāra-gāma)。

【一】M. 75, Māgandiya-sutta.

【二】婆羅婆(Bhāradvāja)。

【三】第一靜室(Aggyāgāra)。この巴利語を今は a fire-hut(火室、溫浴室)と譯するを常とす、即ち aggi+agāra なり。「第一靜室」と譯したるは勿論 agga+agāra と見たるなり。

【四】草座(Tiṇasanthāraka)?

【五】劍摩瑟曇(Kammāssa-dhamma)。

得。彼梵行を行ずるに因るが故に善を得、悅を得。摩納、若し喜及び悅有り善く善と相應すれば、我これ心より起ると說く。云何が心と爲す。若し心結無く怨無く恚無く諍無ければ、彼心慈と俱にして一方に遍滿し成就して遊ぶ。是の如く二・三・四方・四維・上下、一切に普周く、心慈と俱にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。是の如く悲・喜［亦然り］。心捨と俱にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。摩納、猶ほ人有り善く螺を吹くが如し。彼若し方の未だ曾て聞かざる有れば、彼夜半に於て而も高山に登り力を極めて螺を吹き、微妙の聲を出して四方に遍滿［せしむ］。是の如く比丘心慈と俱にして一方に遍滿し成就して遊ぶ。是の如く二・三・四方・四維・上下、一切に普周く、心慈と俱にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。是の如く悲・喜［亦然り］。心捨と俱にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。摩納、意に於て云何。(1)若し天を求むる有れば、要ず天上を求むるが故に、すなはち貪伺相應の心を行ず、我をして天及び餘の天と作らしめよと。(2)若し天を求むる有れば、要ず天上を求むるが故に、すなはち結無く怨無く恚無く諍無く、無量にして極めて廣く、善く修し心定まり意解け遍滿し成就して遊ぶ、我をして天及び餘の天と作らしめよと。汝彼を觀ずるに、[一五]誰か天及び餘の天と作るを得るや』。鸚鵡摩納答へて曰く『瞿曇、若しこれ天を求め、要ず天を求むるが故に、すなはち結無く怨無く恚無く諍無く無量にして極めて廣く、善く修して心定まり意解け遍滿し成就して遊べば、我彼を觀ずるに、必ず天或は餘の天と作るを得ん』。世尊問ひて曰はく『摩納、意に於て云何。若しは梵天を求むる有れば、要ず梵天を求むるが故に、すなはち貪伺相應の心を行ず、我をして梵天及び餘の梵天と作らしめよと。若しは梵天を求むる有れば、要ず梵天上を求むるが故に、すなはち結無く怨無く恚無く諍無く、無量にし

【一五】上の（1）（2）の中。

設するや』。鸚鵡摩納白して曰く『瞿曇、梵志是の如き心もて布施を行じ、他をして怨恨を生じて而も憎嫉を懷かしめず。瞿曇、當に知るべし。梵志愍傷心を以て而も施を行じ、愍傷心を以て而も施を行じ已りてすなはち大福を得』。世尊告げて曰はく『摩納、梵志第六の法を施設し大果報有り大功德有り福を作し善を得と爲すに非ざるや』。鸚鵡摩納世尊に答へて曰く『是の如し瞿曇』。世尊問ひて曰はく『摩納、若し梵志有りて五法を施設し大果報有り大功德有り福を作し善を得れば、汝この法多く何處に在るを見るや。在家と爲すや、出家學道と爲すや』。鸚鵡摩納答へて曰く『瞿曇、若し梵志有りて五法を施設し大果報有り大功德有り福を作し善を得れば、我この法多く出家學道に在るを見、在家に非ざるなり。所以者何。家に在る者多事にして多く所作有り多く結恨有り多く憎諍有り、彼誠諦を守護するを得る能はず。瞿曇、出家學道の者は少事にして少しく所作有り少しく結恨有り少しく憎諍有り、彼必ず能く誠諦を守護するを得。瞿曇、彼の誠諦は、我多く出家學道に在るを見、在家に非ざるなり。所以者何。家に在る者は多事にして多く所作有り多く結恨有り多く憎諍有り、彼施を行ずるを得ず誦習するを得ず苦行を行ずるを得ず梵行を行ずるを得ず。瞿曇、出家學道する者は少事にして少しく所作有り少しく結恨有り少しく憎諍有り、彼施を行ずるを得、彼誦習するを得、苦行を行ずるを得梵行を行ずるを得。瞿曇、梵行を行ずるは、我この法多く出家學道に在るを見、在家に非ざるなり』。世尊告げて曰はく『摩納、若し梵志有りて五法を施設し、大果報有り大功德有り福を作し善を得れば、我これ心より起ると說く。云何が心と爲す。若し心結無く怨無く恚無く諍無し。彼を修するが爲の故に。摩納、意に於て云何。若し比丘有りて誠諦を守護すれば、彼誠諦を守護するに因るが故に喜を得、悅を得。摩納、若し喜及び悅有り、善く善と相應すれば、我これ心より起ると說く。云何が心と爲す。若し心結無く怨無く恚無く諍無ければ、彼を修するが爲の故に、是の如く彼施を行ずるを得、彼誦習するを得、苦行を行ずるを得、梵行を行ずるを

徳有りて愛念し意樂す。彼色を愛し欲と相應して甚だ樂を可とする有り。云何が五と爲す。目、色を知り、耳、聲を知り、鼻、香を知り、舌、味を知り、身、觸を知る。摩納、意に於て云何。衆生この五欲の功徳に因るが故に樂を生じ喜を生じ、またこれに過ぎざるや』。鸚鵡摩納世尊に白して曰く『是の如し瞿曇』。世尊問ひて曰はく『摩納、意に於て云何。若し草木に因りて而も火を然すと及び草木を離れて而も火を然すと、何者か光焔最上・最妙・最勝なりや』。鸚鵡摩納白して曰く『瞿曇、若し草木を離れて而も火を然さんは、終にこの處り無し。唯如意足力有り、瞿曇、若し草木を離れて而も火を然せば彼の光焔最上・最妙・最勝なり』。世尊告げて曰はく『是の如し是の如し、摩納、若し草木を離れて而も火を然さんは、終にこの處り無し。唯如意足力有りて若し草木を離れて火を然せば、彼の光焔最上・最妙・最勝なり。我今假に說く。摩納、草木に因りて而も火を然す者の如く、是の如く衆生の喜樂を生ずる所、謂く欲惡不善の法に因りて樂を捨て及び止息するを得ず。摩納、草木を離れて而も火を然す者の如く、是の如く衆生の捨樂を生ずる所、謂く欲を離れ諸の善法に從ふに因りて而も樂を捨て及び止息するを得』。世尊告げて曰はく『摩納、意に於て云何。一梵志有りて齋を作り施を行ず。或は東方より刹利の童子有りて來る。彼この說を作す、我その中に於て第一の座・第一の澡水・第一の飲食を得んと。彼、その中に於て第一の座・第一の澡水・第一の飲食を得ず、すなはち怨恨を生じて而も憎嫉を懷く。或は南方より梵志の童子有りて來る。彼この說を作す、我その中に於て淨妙の食を得んと。彼その中に於て淨妙の食を得ず、すなはち怨恨を生じて而も憎嫉を懷く。或は西方より居士の童子有りて來る。彼その說を作す、我その中に於て豐饒の食を得んと。彼その中に於て豐饒の食を得ず、すなはち怨恨を生じて而も憎嫉を懷く。或は北方より工師の童子有りて來る。彼この說を作す、我その中に於て豐足の食を得んと。彼その中に於て豐足の食を得ず、すなはち怨恨を生じて而も憎嫉を懷く。摩納、彼の諸の梵志是の如き施を行じて何等の報を施

と爲す』。『摩納、梵志弗袈裟娑羅姓直にして清淨に化す。彼の說く所は生盲にして目無き人の如くに非ざるや』。鸚鵡摩納世尊に答へて曰く『盲の如し瞿曇』、世尊告げて曰はく『摩納、意に於て云何。若し昔梵志有りて壽終り命過ぎ、經書を誦持し經書を流布し典經を誦習しぬ。謂く[一一]商伽梵志、生聞梵志、弗袈娑娑羅梵志及び汝の父都題。若し彼[等]の說く所可なり不可なり眞有り眞無く高有り下有りや』。鸚鵡摩納世尊に答へて曰く『若し昔梵志有りて壽終り命過ぎ、經書を誦持し經書を流布し典經を誦習しぬ、謂く商伽梵志、生聞梵志、弗袈娑娑羅及び我が父都題。彼[等]の說く所は我が意に於ては、可ならしめ、不可ならしむること莫らんと欲し、眞ならしめ、不眞ならしむること莫らんと欲し、高ならしめ、下ならしむる莫らんと欲す』。彼の時世尊問ひて曰はく『摩納、梵志弗袈娑娑羅姓直にして清淨に化す。彼の說く所は不可にして可有ること無しと爲すに非ざるや。不眞にして眞有ること無しと爲すに非ざるや。至下にして高有ること無しとなすに非ざるや』。鸚鵡摩納世尊に答へて曰く『實に爾り瞿曇』。また次に摩納、[一二]五法有りて障礙と作り覆蓋と作り盲と作りて目無く、能く智慧を滅し唐じく自ら疲勞して涅槃を得ず。云何が五と爲す。摩納、[一三]欲は第一の法にして障礙と作り覆蓋と作り盲と作りて目無く、能く智慧を滅し唐しく自ら疲勞して涅槃を得ず。摩納、恚・身見・戒取[亦然り]。疑は第五の法にして障礙と作り覆蓋と作り、盲と作りて目無く、能く智慧を滅し唐しく自ら疲勞して涅槃を得ず。摩納、意に於て云何。この五法の障礙し覆蓋し陰纒する所と爲り、彼若し自義を觀じ他義を觀じ倶義を觀じ及び一切の沙門梵志の心の念ずる所を知らんと欲せば、終にこの處り無し。摩納、梵志弗袈娑娑羅姓直にして清淨に化し、欲の染する所、欲の穢する所と爲り欲に染み欲に觸れ欲に猗著し欲の中に入りて災患を見ず、出要を知らずして而も欲を行じ、彼この五法の障礙し覆蓋し陰纒する所と爲る。彼若し自義を觀じ他義を觀じ倶義を觀じ及び一切の沙門梵志の心の念ずる所を知らんと欲せば、終にこの處り無し。また次に摩納、[一四]五欲の功

【一一】商伽(Caṅki)、生聞(Jānussoṇi)、弗袈娑娑羅(Pokkharasāti)、都題(Todeyya)。

【一二】五法(Pañca Nīvaraṇā)。

【一三】欲(Kāmacchanda)、恚(Vyāpāda)、身見(Kāyasakka)、戒取(Sīlabbataparāmāsa)、疑(Vicikicchā)。

【一四】五欲功德。五種の欲の意なること一卷「一」「韋度樹經」註[七]に說きたり。

事然らず』ここに於て世尊すなはちこの念を作したまひぬ、鸚鵡摩納都提子我を瞋恚し憎嫉して悅ばず、我を誹謗し我を指摘し我を罵詈し、應に瞿曇を誹謗すべく應に瞿曇を指すべく應に瞿曇に墮すべくして而も我に語げて曰く、瞿曇、梵志有り、弗袈裟裟羅と名づけ、姓直にして清淨に化す、彼この說を作す、『謂く』若し沙門・梵志有りて人上の法に於て知有り見有り、現に我は得る者なりと。我これを聞き已りてすなはち大にこれを笑ひ、意相可とせず、虛妄にして眞ならず亦如法ならず。云何が人、人中に生じて自ら人上の法を得と說く。若し人上の法に於て我知り我見ると言はば、この事然らずと。世尊知り已りて告げて曰く『摩納、梵志弗袈裟裟羅姓直にして清淨に化す。彼一切の沙門・梵志の心の念ずる所を知りて然る後この說を作すや、若し沙門・梵志有りて人上の法に於て知有り見有り、現に我は得る者なりと。我これを聞き已りてすなはち大にこれを笑ひ、意相可とせず、虛妄にして眞ならず亦如法ならず。云何が人、人中に生じて自ら人上の法を得と說く。若し人上の法に於て我知り我見ると言はば、この事然らず』。鸚鵡摩納答へて曰く『瞿曇、梵志弗袈裟裟羅姓直にして清淨に化す。自ら一婢有りて名づけて不尼と曰ひ、尙ほ心の念ずる所を知る能はず。況やまた一切沙門・梵志の心の念ずる所を知らんと欲するをや。若使知らんは終にこの處り無し』。世尊告げて曰はく『猶ほ人生れながら盲にして彼この說を作すがごとし、黑白の白無く亦黑白の色を見る者無く、好惡の色無く亦好惡の色を見る無く、長短の色無く亦長短の色を見る無く、近遠の色無く亦近遠の色を見る無く、麁細の色無く亦麁細の色を見る無し。我初より見ず知らず。この故に色無しと。彼の生盲の人是の如き說を作すは眞實と爲すや』。鸚鵡摩納世尊に答へて曰く『不なり瞿曇、所以者何。黑白の色有り亦黑白の色を見る者有り、好惡の色有り亦好惡の色を見る有り、長短の色有り亦長短の色を見る有り、近遠の色有り亦近遠の色を見る有り、麁細の色有り亦麁細の色を見る有り。若し我初より見ず知らず。この故に色無しと言ひ、彼の生盲の人この說を作さば眞實ならず

六に曰く應疑羅婆、七に曰く婆私吒、八に曰く迦葉、九に曰く婆羅婆、十に曰く婆惒、謂く今諸の梵志即ち彼具さに經を誦習し持擧す。彼頗しこの說を作せるや、我この五法現法に於て自ら知り自ら覺り自ら作證し已りて果を施設すと』。鸚鵡摩納世尊に白して曰く『無きなり瞿曇、但諸の梵志信に因りて受持す』。世尊告げて曰はく『若し諸の梵志に於て一梵志の而もこの說を作し、我この五法現法中に於て自ら知り自ら覺り自ら作證し已りて果報を施設すと[說く]無く、亦師及び祖師乃至七世の父母而もこの說を作し、我この五法現法中に於て自ら知り自ら覺り自ら作證し已りて果報を施設すと[說く]無く、若し昔梵志有りて壽終り命過ぎ、經書を誦持し經書を流布し典經を誦習し、一に曰く夜吒、二に曰く婆摩、三に曰く婆摩提婆、四に曰く毗奢蜜哆羅、五に曰く夜婆陀揵尼、六に曰く應疑羅婆、七に曰く婆私吒、八に曰く迦葉、九に曰く婆羅婆、十に曰く婆惒、謂く今諸の梵志即ち彼具さに經を誦習し持擧す。彼この說を作し、我この五法現法中に於て自ら知り自ら覺り自ら作證し已りて果報を施設すと[說く]無ければ、摩納、彼の諸の梵志ここを以ての故に信向中に於て根本無きにあらざるや』。鸚鵡摩納白して曰く『瞿曇、實に根本無し。但諸の梵志聞き已りて受持す』。世尊告げて曰はく『猶ほ衆の盲兒各相扶持するがごとし。彼前に在れば後を見ず亦中を見ず、彼中に在れば前を見ず亦後を見ず、彼後に在れば中を見ず亦前を見ず。摩納、說く所の諸の梵志輩も亦復是の如し。摩納、前に信を說きて而も後にまた聞を說く』。鸚鵡摩納世尊を瞋恚し憎嫉して悅ばず、世尊を誹謗し世尊を指擿し世尊を罵言し、應に瞿曇を誹謗すべく、應に瞿曇を指すべく、應に瞿曇を墮すべく、世尊に告げて曰く『一梵志有り、[一〇]弗袈裟裟羅と名づけ、姓直にして淸淨に化す。彼この說を作す[謂く]、若し沙門・梵志有りて人上の法に知有り見有り、現に我は得る者なりと。我これを聞き已りてすなはち大にこれを笑ひ、意相可とせず、虛妄にして眞ならず亦如法ならず。云何が人、人中に生じて自ら人上の法を得と說く。若し人上の法に於て我知り我見ると言はば、この

【一〇】弗袈裟裟羅(Pokkharasāti)。

し家に在る者大災患有り大鬪諍有り大怨憎有りて正行を行ずれば大果報を得、大功德有り。猶ほ田作の如し。大災患有り大鬪諍有り大怨憎有りて正行を行ずれば大果報を得、大功德有り。是の如く摩納、若し家に在る者亦復是の如し。摩納、(4)出家學道は少しく治生の如し。少しく災患有り少しく鬪諍有り少しく怨憎有りて正行を行ずれば、大果報を得、大功德有り猶ほ治生の如し。少しく災患有り少しく鬪諍有り少しく怨憎有りて正行を行ずれば、大果報を得、大功德有り。是の如く摩納、出家學道も亦復是の如し。摩納、我是の如く說き、この二法を說きて是の如く分別し是の如く顯示す。若し沙門梵志有りて有力堅固にして深く入り一向に專著すれば而もこれを說きて眞諦と爲し、餘は虛妄[なりとす]。鸚鵡摩納白して曰く『瞿曇、彼の諸の梵志五法を施設し、大果報有り大功德有り福を作し善を得』。世尊告げて曰はく『若し[七]諸の梵志五法を施設し、大果報有り大功德有り福を作し善を得れば、汝この衆に在りて今說くべきや』。鸚鵡摩納白して曰く『瞿曇、我不可無し。所以者何。瞿曇、今に於て現にこの衆に坐す』。世尊告げて曰はく『汝すなはち說くべし』。鸚鵡摩納白して曰く『瞿曇、善く聽け。瞿曇、梵志第一[八]眞諦の法を施設し、大果報有り大功德有り福を作し善を得。第二誦習、第三熱行、第四苦行なり。瞿曇、梵志第五梵行を施設し、大果報有り大功德有り福を作し善を得』。世尊告げて曰はく『若し梵志有りて五法を施設し、大果報有り大功德有り福を作し善を得れば、彼の梵志中に頗し一梵志有りて是の如き說を作し、我この五法現法中に於て自ら知り自ら覺り自ら作證し已りて果を施設すと[說く]や』。鸚鵡摩納世尊に白して曰く『無きなり瞿曇』。世尊告げて曰はく『頗し師及び祖師七世の父母に至りて是の如き說を作す有りや、我この五法現法中に於て自ら知り自ら覺り自ら作證し已りて果を施設すと』。鸚鵡摩納世尊に白して曰く『無きなり瞿曇』。その時世尊問ひて曰はく『摩納、若し昔梵志有りて壽終り命過ぎて經書を誦持し經書を流布し典經を誦習し、一に曰く[九]夜吒、二に曰く婆摩、三に曰く婆摩提婆、四に曰く毘奢蜜哆羅、五に曰く夜婆陀揵尼、

【七】 梵志の五法。

【八】 眞諦(Sacca)、誦習(Ajjhena)、熱行(Cāga)、苦行(Tapa)、梵行(Brahmacariya)、

【九】 夜吒(Aṭṭhaka)、婆摩(Vāmaka)、婆摩提婆(Vāmadeva)、毘奢蜜哆羅(Vessāmitta)、夜婆陀揵尼(Yamataggi)、應疑羅婆(Aṅgirasa)、婆私吒(Vāseṭṭha)、迦葉(Kassapa)、婆羅婆(Bhāradvāja)、婆和(Bhagu)。

に在る者はすなはち善く解するを得、則ち如法を知り、出家學道は則ち然らずと。我瞿曇に問ふ。この事云何』。世尊告げて曰はく『この事定まらず』。鸚鵡摩納白して曰く『瞿曇、願はくは今我が爲にこの事を分別せよ』。世尊告げて曰はく『摩納、諦かに聽け、善くこれを思念せよ。我當に汝が爲に具さに分別して說くべし』。鸚鵡摩納教を受けて而も聽きぬ。佛言はく『摩納、若し在家及び出家學道有りて邪行を行ずれば我彼を稱せず。所以者何。若し在家及び出家學道有りて邪行を行ずれば、善く解するを得ず如法を知るを得ず。この故に摩納、若し在家及び出家學道有りて邪法を行ずれば我彼を稱せず。摩納、若し在家及び出家學道有りて正行を行ずれば我彼を稱說す。所以者何。若し在家及び出家學道有りて正行を行ずれば、必ず善く解するを得、則ち如法を知る。この故に摩納、若し在家及び出家學道有りて正行を行ずれば我彼を稱說す。摩納、我是の如く說き、この二法を說きて是の如く分別し是の如く顯示す。若し沙門梵志有りて有力堅固にして深く入り一向に專著すれば而もこれを說きて眞諦と爲し、餘者は虛妄[なりとす]」。鸚鵡摩納白して曰く『瞿曇、我が聞く所の如くば、若し[1]家に在る者はすなはち大利有り大功德有り、出家學道は則ち然らずと。我瞿曇に問ふ。この事云何』。世尊告げて曰はく『この事定まらず』。鸚鵡摩納白して曰く『瞿曇、願はくはまた我が爲にこの事を分別せよ』。世尊告げて曰はく『摩納、諦かに聽き善くこれを思念せよ。我當に汝が爲に具さに分別して說くべし』。鸚鵡摩納教を受けて而も聽きぬ。佛言はく『摩納、若し家に在る者(1)大災患有り大鬪諍有り大怨憎有りて、邪行を行ずれば大果を得ず大功德無し。猶ほ田作の如し。大災患有り大鬪諍有り大怨憎有りて邪行を行ずれば大果を得ず大功德無し。是の如く摩納、若し家に在る者亦復是の如し。摩納、(2)出家學道は少しく災患有り少しく鬪諍有り少しく怨憎有りて邪行を行ずれば大果を得ず大功德無し。猶ほ治生の如し。少しく災患有り少しく鬪諍有り少しく怨憎有りて邪行を行ずれば大果を得ず大功德無し。是の如く摩納、出家學道も亦復是の如し。摩納、(3)若

【1】在家者有大利大功德。

巻の第三十八

梵志品(十経あり)

鸚鵡・鬚閑提・婆羅婆遊堂・須達(哆)・梵波羅延・黄蘆園・頭那・阿伽羅訶那・阿蘭那・梵摩(これなり)。

百五十二、鸚鵡經第一

我が聞きしこと是の如し。ある時佛王舍城に遊び竹林加蘭哆園に在しぬ。その時　鸚鵡摩納都題子少しく所為有りて王舍城に往至し居士の家に寄宿しぬ。ここに於て鸚鵡摩納都題子寄宿する所の居士に問ひて曰く『頗し沙門・梵志の、宗主たり衆の師たり、大衆を統領し人の為に尊ばれ、我をして時に随ひて往見し奉敬せしめ、儻し能くこれに因りて奉敬するの時、歡喜を得しむる[者]有りや』。居士答へて曰く『有るなり、[三]天愛、沙門瞿曇は釋種の子にして釋の宗族を捨て鬚髪を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして學道し、[四]無上正盡覺を覺りぬ。天愛、自ら時に随ひて往見し、彼に詣りて奉敬すべし。或は能くこれに因りて奉敬するの時、心歡喜を得ん』。鸚鵡摩納即ちまた問ひて曰く『沙門瞿曇は今何處に在りや。我これを見んと欲す』。居士答へて曰く『沙門瞿曇この王舍城、竹林加蘭哆園に在り。すなはち往見すべし』。ここに於て鸚鵡摩納寄宿する所の居士の家より出でゝ竹林加蘭哆園に往詣しぬ。鸚鵡摩納遙かに世尊の樹林の間に在り、端政姝好にして猶ほ星中の月のごとく光耀煒燁として光金山の若く、相好具足し威神巍巍たり、諸根寂定にして蔽礙有ること無く、成就し調御し息心して靜默たるを見、見已りてすなはち前みて佛の所に往詣し共に相問訊し却きて一面に坐し白して曰く『瞿曇、問ふ所有らんと欲す。聽きて乃ち敢て陳ぶるや』。世尊告げて曰はく『汝の問ふ所を恣にせよ』。鸚鵡摩納問ひて曰く『瞿曇、我が聞く所の如くば、若し[五]家

【一】 M. 99, Subha-sutta. 求那跋陀羅譯「鸚鵡經」。

【二】 鸚鵡摩納都題子(Subha Māṇava Todeyyaputta)。

【三】 天愛(Devānaṁ piyo)。「諸天の所愛」の義。愚者の通稱とすれど、此處にては必ずしも然らざるが如し。

【四】 無上正盡覺(Anuttarā sammāsambodhi)。

【五】 在家者得善觧、知如法、出家者不然。

摩納佛足を稽首し却きて一面に坐しぬ。世尊彼の爲に法を說き、勸發・渇仰・成就・歡喜せしめ、無量の方便もて彼の爲に法を說き、勸發・渇仰・成就・歡喜せしめ已りて默然として住したまひぬ。ここに於て阿攝惒邏延多那摩納、佛爲に法を說き、勸發・渇仰・成就・歡喜せしめ已りたまへば、卽ち坐より起ち佛足を稽首し遶三匝して而も去りぬ。この時拘薩羅の衆多の梵志還り去ること遠からずして種種の言語もて阿攝惒邏延多那を責數しぬ『何等か作さんと欲す。沙門瞿曇を伏せんと欲して而も反つて沙門瞿曇の爲に降伏せられ還る。猶ほ人有りて眼の爲に林中に入りて而も反つて眼を失ひて還るが如し。阿攝惒邏延多那、汝亦是の如し。沙門瞿曇を伏せんと欲して而も反つて沙門瞿曇の爲に降伏せられて還る。猶ほ人有りて飮まんが爲に池に入りて而も反つて渇して還るが如し。阿攝惒邏延多那汝亦是の如し。沙門瞿曇を伏せんと欲して而も反つて沙門瞿曇の爲に降伏せられて還る。阿攝惒邏延多那、何等か作さんと欲す』。ここに於て阿攝惒邏延多那摩納、拘薩羅の衆多の梵志に語げて曰く『諸賢、我前に已に說きぬ、沙門瞿曇如法に法を說く。若し如法に法を說けば難詰すべからずと』。佛說是の如し。阿攝惒邏延多那摩納佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第三十七

く、梵志清淨を得、非梵志清淨を得ず、梵志は梵天の子にして彼の口より生じ、梵[志]は梵[天]の化する所なりと。摩納、彼の無事高處に住せる衆多の仙人、阿私羅仙人提鞞邏の爲に是の如く、善く教へられ善く訶せられ、清淨の梵志を施設する能はず。況や汝が師徒らに皮革衣を著くるをや』。ここに於て阿攝惒邏延多那摩納世尊の爲に面訶詰嘖せられ、內に愁慼を懷き、低頭し默然として辯を失して言無し。ここに於て世尊阿攝惒邏延多那摩納を面訶詰嘖し已り、また歡悅せしめて卽便ち告げて曰はく『摩納、一梵志有りて齋を作し施を行ず。彼二兒有り。一は好く學問し、二は學問せず。摩納の意に於て云何。彼の梵志先づ誰に第一の座・第一の澡水・第一の食を施すと爲すや』。阿攝惒邏延多那摩納答へて曰く『瞿曇、若し彼の梵志その二兒有りて好く學問すれば、必ず先づ彼に第一の座・第一の澡水・第一の食を施すなり』。世尊また問ひて曰はく『摩納、また一梵志有りて齋を作し施を行ず。彼四兒有り。一は好く學問し然も精進せず、喜びて惡法を行じ、二は學問せず然も好く精進し、喜びて妙法を行ず。摩納の意に於て云何。彼の梵志先づ誰に第一の座、第一の澡水、第一の食を施すと爲すや』。阿攝惒邏延多那摩納答へて曰く『瞿曇、若し彼の梵志その二兒有りて學問せずと雖も而も好く精進し喜びて妙法を行ずれば、必ず先づ彼に第一の座・第一の澡水・第一の食を施すなり』。世尊告げて曰はく『摩納、汝先づ學問を稱歎し後持戒を稱歎す。摩納、我四種姓皆悉く清淨なりと說き施設し顯示し、汝亦四種姓皆悉く清淨なりと說き施設し顯示す』。ここに於て阿攝惒邏延多那摩納卽ち坐より起ちて佛足を稽首せんと欲しぬ。その時彼の大衆高大の音聲を唱へぬ『沙門瞿曇、甚奇甚特なり。大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神有り。所以者何。沙門瞿曇四種姓皆悉く清淨なりと說き施設し顯示するが如く、阿攝惒邏延多那摩納をして亦四種姓皆悉く清淨なりと說かしむ』。その時世尊彼の大衆の心の念ずる所を知りて告げて曰はく『止みね、止みね。阿攝惒邏延多那、但心喜足すればまた坐に還るべし。我當に汝が爲に法を說くべし』。阿攝惒邏延多那

この人を呪するに、この人光顏益す好く身體悅澤す。我等寧ろ問ふべしと。卽便ちこれに問ひぬ、汝これ誰と爲すやと。阿私羅仙人提裨邏答へて曰く、諸賢、汝等頗し阿私羅仙人提裨邏有りと聞くやと。答へて曰く、阿私羅仙人提裨邏有りと聞くと。また語げて曰く我は卽ちこれなりと。彼の衆多の仙人卽ち共に阿私羅仙人提裨邏に辭謝して曰く、願はくは忍恕を爲したまへ。我等尊これ阿私羅仙人提裨邏と知らざりしのみと。ここに於て阿私羅仙人提裨邏、諸の仙人に告げて曰く、我已に相恕す。汝等實に惡見を生じ、梵志種勝り餘者如かず、梵志種白くして餘者皆黑く、梵志清淨を得、非梵志清淨を得ず、梵志は梵天の子にして彼の口より生じ、梵「志」は梵「天」の化する所なりと「爲す」。彼の諸の仙人答へて曰く、是の如しと。阿私羅また諸の仙人に問ひて曰く、汝等自ら己の父を知ると爲すやと。彼の諸の仙人答へて曰く、知るなりと。彼の梵志、梵志の婦を取り非梵志に非ず、彼の父のまた父乃至七世の父、彼の梵志、梵志の婦を取り非梵志に非ずと。阿私羅また諸の仙人に問ひて曰く、汝等自ら己の母を知ると爲すやと。彼の諸の仙人答へて曰く、知るなり。彼の梵志、梵志の夫を取り非梵志に非ず。彼の母のまた母乃至七世の母、彼の梵志、梵志の夫を取り非梵志に非ずと。阿私羅また諸の仙人に問ひて曰く、汝等頗し自ら胎を受けしを知るやと、彼の諸の仙人答へて曰く、知るなり。[八]三事等しく合會するを以て胎を受く。父母合會し、漏無く堪耐し香陰已に至りぬ。阿私羅、この事等會して母胎に入ると。阿私羅また諸の仙人に問ひて曰く、頗し生を受けて男と爲すや女と爲すやと知り、從來する所を知り、刹利族より來ると爲すや、梵志・居士・工師族より來ると爲すや。東方・南方・西方・北方より來ると爲すやと。彼の諸の仙人答へて曰く、知らずと。阿私羅また彼の仙人に語げて曰く、諸賢、これを見ず知らざれば、汝等胎を受け、誰か何處より來り、男と爲すや女と爲すや、刹利より來ると爲すや、梵志・居士・工師より來ると「爲すや」、東方・南方・西方・北方より來ると爲すやを知らず。然もこの說を作す、梵志種勝り餘者如かず、梵志種白くして餘者皆黑

【八】以二三事等合會一受レ胎 (Tiṇṇaṃ sannipātā gabbhassa avakkanti hoti)。巴利文には「(一)父母合會し、(二)母時にあたり、(三)香陰現前す」。

於て云何。若し人衆多の草馬有り、一父驢を放ち、中に於て一草馬、父驢と共に合會し、彼合會に因りて後すなはち駒を生む。汝云何が說くや、彼驢なりと爲すや馬なりと爲すや』阿攝惒邏延多那摩納答へて曰く『瞿曇、若し馬有りて驢と共に合會し、彼合會に因りて後すなはち駒を生む。我彼驢なりと說かず亦馬なりと說かず。瞿曇、我但彼は騾なりと說く』。「是の如し摩納、若しこの身生ずる所に隨へば卽ち彼の數なり、若し梵志族に生ずれば卽ち梵志族の數なり、若し刹利・居士・工師族に生ずれば卽ち「刹利・居士・」工師族の數なり』。世尊告げて曰はく『摩納、乃往昔時衆多の仙人有り共に無事高處に住し、是の如き惡見を生じぬ、梵志種勝り餘者如かず、梵志種白くして餘者皆黑く、梵志清淨を得、非梵志清淨を得ず、梵志は梵天の子にして彼の口より生じ、梵「志」は梵「天」の化する所なりと。ここに於て　阿私羅仙人提鞞邏、衆多の仙人と共に無事高處に住し是の如き惡見を生ぜりと聞き已りて袈裟衣を著け、袈裟巾を以て頭を裹み杖を拄へ繖を持ち白衣を著け、變じて門より入らずして仙人の住處靜室に至りて經行しぬ。ここに於て共に無事高處に住せるに一仙人有り、阿私羅仙人提鞞邏袈裟衣を著け、袈裟巾を以て頭を裹み、杖を拄へ繖を持ち白衣を著け、變じて門より入らずして仙人の住處靜室に至りて經行するを見、見已りて共に無事高處の衆多の仙人の所に往詣し、すなはちこの語を作しぬ。諸賢、今一人有りて袈裟衣を著け袈裟巾を以て頭を裹み、杖を拄へ繖を持ち白衣を著け、變じて門より入らずして仙人の住處靜室に至りて經行す。我等寧ろ共に往きてこれを呪すべきや、「汝灰と作れ汝灰と作れ」と』。ここに於て共に無事高處に住せる衆多の仙人卽ち彼の阿私羅仙人提鞞邏の所に往詣し、到り已りて共に「汝灰と作れ、汝灰と作れ」と呪しぬ。その呪法の如く、「汝灰と作れ汝灰と作れ」とこれを呪すれば、是の如く是の如く、光顏益す好く身體悅澤しぬ。彼の衆多の仙人すなはちこの念を作しぬ、我等本「汝灰と作れ、汝灰と作れ」と呪すれば、彼卽ち灰と作りぬ。我「等」今この人を、「汝灰と作れ、汝灰と作れ」と呪し、我等その呪法の如く、

【六】騾（Assatara）。うさぎうま。

【七】阿私羅提鞞邏（Asita Devala）。

り餘者如かず、梵志種白くして餘者皆黑く、梵志淸淨を得、非梵志淸淨を得ず、梵志は梵天の子にして彼の口より生じ、梵「志」は梵「天」の化する所なりと。』世尊告げて曰はく『摩納、若しこの身生ずる所に隨へば、卽ち彼の數なり。若し梵志族に生ずれば卽ち梵志族の數なり、若し刹利・居士・工師族に生ずれば卽ち「刹利・居士・」工師族の數なり。摩納、猶ほ火生ずる所に隨へば卽ち彼の數なるが如し。若し木に因りて生ずれば卽ち木火の數なり、若し草・糞・薪に因りて生ずれば卽ち「草・糞・」薪火の數なり。是の如く摩納、この身生ずる所に隨へば卽ち彼の數なり。若し梵志族に生ずれば卽ち梵志族の數なり、若し刹利・居士・工師族に生ずれば卽ち「刹利・居士・」工師族の數なり』。世尊問ひて曰はく『摩納、意に於て云何。若し刹利の女梵志の男と合會すれば、彼合會に因りて後すなはち子を生み、或は父に似、或は母に似、或は父母に似ず。汝云何が說くや、彼刹利と爲すや梵志と爲すや』。阿攝惒邏延多那摩納答へて曰く『瞿曇、刹利の女梵志の男と共に合會すれば、彼合會に因りて後すなはち子を生み、或は父に似、或は母に似、或は父母に似ず。我彼刹利なりと說かず亦梵志なりと說かず。瞿曇、我但彼は他身なりと說く』。是の如し摩納、この身生ずる所に隨へば卽ち彼の數なり、若し梵志族に生ずれば卽ち梵志族の數なり、若し刹利・居士・工師族に生ずれば卽ち「刹利・居士・」工師族の數なり』。世尊問ひて曰はく『摩納、若し梵志の女刹利の男と共に合會すれば、彼合會に因りて後すなはち子を生み、或は父に似、或は母に似、或は父母に似ず。汝云何が說くや、彼梵志なりと爲すや刹利なりと爲すや』。阿攝惒邏延多那摩納答へて曰はく『瞿曇、梵志の女刹利の男と共に合會すれば、彼合會に因りて後すなはち子を生み、或は父に似、或は母に似、或は父母に似ず。我彼梵志なりと說かず亦刹利なりと說かず。瞿曇、我但彼は他身なりと說く』。『是の如し摩納、この身生ずる所に隨へば卽ち彼の數なり。若し梵志族に生ずれば卽ち梵志族の數なり。若し刹利・居士・工師族に生ずれば卽ち「刹利・居士・」工師族の數なり』。世尊問ひて曰はく『摩納、意に

や。居士族・工師族爲らば彼當に燥ける猪狗の槽及び伊蘭檀木及び餘の弊木を以て用ひて火母と作し、鑽を以てこれを鑽り火を生じて長養すべきや。一切百種の人の爲に皆能く若干種の木を以て用ひて火母と作し、鑽を以てこれを鑽り火を生じて長養するや』。阿攝惒邏延多那摩納答へて曰く『瞿曇、彼の一切百種の人皆能く若干種の木を以て用ひて火母とを作し、鑽を以てこれを鑽り火を生じて長養す』。『是の如し摩納、梵志若し正しく趣けば、彼善く解するを得、自ら如法を知り、刹利・居士・工師若し正しく趣けば、亦善く解するを得、自ら如法を知る』。阿攝惒邏延多那摩納白して曰く『瞿曇、甚奇甚特なり、快くこの喩を說く。但諸の梵志是の如き說を作す、梵志種勝り餘者如かず、梵志種白くして餘者皆黑く、梵志淸淨を得、非梵志淸淨を得ず、梵志は梵天の子にして彼の口より生じ、梵[志]は梵[天]の化する所なりと』。世尊問ひて曰はく『摩納、意に於て云何。若し彼の百種の人皆若干種の木を以て用ひて火母と作し、鑽を以てこれを鑽り火を生じて長養すれば、彼の一切の火皆焰有り色有り熱有り光有りて皆能く火事を作す、彼の火獨り焰有り色有り熱有り光有りて能く火事を作すと爲すや。彼の火獨り焰無く色無く熱無く光無くして火事を作す能はずと爲すや。彼の一切の火皆焰有り色有り熱有り光有りて皆能く火事を作すと爲すや』。阿攝惒邏延多那摩納白して曰く『瞿曇、若し彼の百種の人皆若干種の木を以て用ひて火母と作し、鑽を以てこれを鑽り火を生じて長養すれば、彼の一切の火皆焰有り色有り熱有り光有りて皆能く火事を作す。若し彼の火獨り焰有り色有り熱有り光有りて能く火事爲らんは、終にこの處り無し。若し彼の火獨り焰無く色無く熱無く光無くして火事爲ること能はざらんは、亦この處り無し。瞿曇、但彼の一切の火皆焰有り色有り熱有り光有りて皆能く火事を作す』。『是の如し摩納、梵志若し正しく趣けば、彼善く解するを得、自ら如法を知り、刹利・居士・工師若し正しく趣けば、亦善く解するを得、自ら如法を知る』。阿攝惒邏延多那摩納白して曰く『瞿曇、甚奇甚特なり、快くこの喩を說く。但諸の梵志是の如き說を作す、梵志種勝

へて曰く『瞿曇、梵志能く慈心を行じ結無く怨無く恚無く諍無く、刹利・居士・工師亦然り』。『是の如し摩納、梵志若し正しく趣けば、彼善く解するを得、自ら如法を知り、刹利・居士・工師若し正しく趣けば、亦善く解するを得、自ら如法を知る』。阿攝惒羅延多那摩納白して曰く『瞿曇、甚奇甚特なり、快くこの喩を說く。但諸の梵志是の如き說を作す、梵志種勝り餘者如かず、梵志種白くして餘者皆黑く、梵志淸淨を得、非梵志淸淨を得ず、梵志は梵天の子にして彼の口より生じ、梵[志]は梵[天]の化する所なりと』。世尊問ひて曰はく『摩納、意に於て云何。若し百種の人來り、或は一人有りて而も彼に語げて曰く『汝等共に來れ、若し刹利族・梵志族に生ぜる者は、唯彼能く澡豆を持し水に至りて洗浴して垢を去り極めて淨めよと。摩納、意に於て云何。刹利族・梵志族爲らば、彼能く澡豆を持し水に至り洗浴して垢を去り極めて淨むるや、居士族・工師族爲らば、彼澡豆を持し水に至りて洗浴して垢を去り極めて淨むる能はざるや。一切百種の人の爲に皆能く澡豆を持し水に至り洗浴し垢を去りて極めて淨むるや』。阿攝惒邏延多那摩納答へて曰く『瞿曇、彼の一切百種の人皆能く澡豆を持し水に至りて洗浴し垢を去りて極めて淨む』。『是の如し摩納、梵志若し正しく趣けば、彼善く解するを得、自ら如法を知り、刹利・居士・工師若し正しく趣けば、亦善く解するを得、自ら如法を知る』。阿攝惒邏延多那摩納白して曰く『瞿曇、甚奇甚特なり、快くこの喩を說く。但諸の梵志是の如き說を作す、梵志種勝り餘者如かず、梵志種白くして餘者皆黑く、梵志淸淨を得、非梵志淸淨を得ず、梵志は梵天の子にして彼の口より生じ、梵[志]は梵[天]の化する所なりと』。世尊問ひて曰はく『摩納、意に於て云何。若し百種の人來り、或は一人有りて而も彼[等]に語げて曰く『汝等共に來れ、若し刹利族・梵志族に生ぜる者は、唯彼能く極めて燥ける娑羅及び栴檀木を以て用ひて火母と作し鑽を以てこれを鑽り火を生じて長養せよと。摩納、意に於て云何。刹利族・梵志族爲らば、彼能く極めて燥ける娑羅及び栴檀木を以て用ひて火母と作し鑽を以てこれを鑽り火を生じ長養する

訊し却きて一面に坐し白して曰く『瞿曇、問ふ所有らんと欲す。我が問を聽すや。』世尊告げて曰はく『摩納、汝の問ふ所を恣にせよ。』阿攝惒邏延多那すなはち問ひて曰く『瞿曇、諸の梵志等是の如き說を作す、梵志種勝り餘者如かず、梵志種白くして餘者皆黑く、梵志清淨を得、非梵志清淨を得ず、梵志は梵天の子にして彼の口より生じ、梵「志」は梵「天」の化する所なりと。未だ知らず、沙門瞿曇、當に云何が說くべきや』。世尊告げて曰はく『我今汝に問はん。解する所に隨ひて答へよ。摩納、頗し餘尼[四]及び劍浮[五]國に二種姓大家及び奴有りて、大家奴と作り、奴大家と作るを聞くや』。阿攝惒邏延多那摩納答へて曰く『瞿曇、我餘尼及び劍浮國に二種姓大家及び奴有りて、大家奴と作り奴大家と作るを聞くなり』。『是の如し摩納、梵志若し正しく趣けば、彼善く解するを得、自ら如法を知る。刹利・居士・工師若し正しく趣けば、亦善く解するを得、自ら如法を知る』。阿攝惒邏延多那摩納白して曰く『瞿曇、甚奇甚特なり。快くこの喩を說きぬ。但諸の梵志是の如き說を作す、梵志種勝り餘者如かず、梵志種白くして餘者皆黑く、梵志清淨を得、非梵志清淨を得ず、梵志は梵天の子にして彼の口より生じ、梵「志」は梵「天」の化する所なりと。』世尊問ひて曰はく『摩納、意に於て云何。頗し獨り梵志有りてこの虛空に於て著せず縛せず觸れず礙へず、刹利・居士・工師然らずと爲すや』。阿攝惒邏延多那摩納答へて曰く』瞿曇、梵志この虛空に於て著せず縛せず觸れず礙へず、刹利・居士・工師亦然り』。『是の如し摩納、梵志若し正しく趣けば、彼善く解するを得、自ら如法を知り、刹利・居士・工師若し正しく趣けば、亦善く解するを得、自ら如法を知る』。阿攝惒邏延多那摩納白して曰く『瞿曇、甚奇甚特なり、快くこの喩を說く。但諸の梵志是の如き說を作す、梵志種勝り餘者如かず、梵志種白くして餘者皆黑く、梵志清淨を得、非梵志清淨を得ず、梵志は梵天の子にして彼の口より生じ、梵「志」は梵「天」の化する所なりと』。世尊問ひて曰はく『摩納、意に於て云何。頗し獨り梵志有りて能く慈心を行じ結無く怨無く恚無く諍無く、刹利・居士・工師は然らざるや』。阿攝惒邏延多那摩納答

【四】餘尼(Yona)。
【五】劍浮(Kamboja)。

絶たず、生生惡無く博聞し總持し、[三]四典經を誦過し、深く因緣・正文・戲・五には句說に達す。阿攝惒邏延多那摩納力有り、能く沙門瞿曇の所に至りて則ちこの事を以て如法に難詰せん。諸賢、共に阿攝惒邏延多那摩納の所に詣り向ひてこの事を說くべし。阿攝惒邏延多那摩納の所說に隨ひて我等當に受くべし」と。ここに於て拘薩羅の衆多の梵志即ち阿攝惒邏延多那摩納の所に詣り共に相問訊し却きて一面に坐し語げて曰く『摩納、我等衆多の梵志拘薩羅に於て學堂に集在し共にこの事を論じぬ、「梵志種勝り餘者如かず、梵志種白くして餘者皆黑く、梵志淸淨を得、非梵志淸淨を得ず、梵志は梵天の子にして彼の口より生じ、梵は梵の化する所、而も沙門瞿曇四種姓皆悉く淸淨なりと說き施設し顯示すと」。我等この念を作しぬ、「諸賢、誰か力有り、能く沙門瞿曇の所に至りて則ちこの事を以て如法に難詰すと爲すやと。」我等またこの念を作しぬ、「阿攝惒邏延多那摩納父母の擧ぐる所と爲り、生を受くること淸淨にして乃至七世の父母種族を絶たず、生生惡無くして博聞し總持し、四典經を誦過し深く因緣・正文・戲・五には句說に達す。阿攝惒邏延多那摩納力有り、能く沙門瞿曇の所に至りて則ちこの事を以て如法に難詰せんと」。願はくは阿攝惒邏延多那摩納、沙門瞿曇の所に往詣し則ちこの事を以て如法に難詰せよ』。阿攝惒邏延多那摩納諸の梵志に語げて曰く『諸賢、沙門瞿曇は如法に法を說く。若し如法に法を說くは難詰すべからず』。拘薩羅の衆多の梵志語げて曰く『摩納、汝未だ屈する事有らず、未だ豫め自ら伏すべからず。所以者何、阿攝惒邏延多那摩納父母の擧ぐる所と爲り、生を受くること淸淨にして乃至七世の父母種族を絶たず、生生惡無くして博聞し總持し、四典經を誦過し深く因緣・正文・戲・五には句說に達す。阿攝惒邏延多那摩納力有り能く沙門瞿曇の所に至りて則ちこの事を以て如法に難詰せん。願はくは阿攝惒邏延多那摩納、沙門瞿曇の所に往詣し則ちこの事を以て如法に難詰せよ』。阿攝惒邏延多那摩納、拘薩羅の衆多の梵志の爲に默然として而も受けぬ。ここに於て阿攝惒邏延多那摩納彼の拘薩羅の衆多の梵志と佛の所に往詣し、共に相問

【三】婆羅門の五典、已に一二卷「鞞婆陵耆經」に出づ。「善見律」一卷には三園陀(Vedas)、乾費(Nighaṇṭu)、揩費(Keṭubha)、伊底呵寫(Itihāsa)、文字一切分別(Akkhara-pabheda)とす。

諸の法を知り、人の爲に息止の法・滅訖の法・覺道の法・善趣の法を施設し、自有財物を施設す』。世尊問ひて曰はく『梵志、意に於て云何。若し彼の百種の人皆若干種の木を以て用ひて火母と作し鑽を以てこれを鑽り火を生じて長養し、彼に或は人有りて燥ける草木を以てその火中に著けば、燄を生じ色を生じ熱を生じ、烟を生じ頗し燄色熱烟有れば、燄色熱烟而も差別ありや。』鬱瘦歌邏梵志答へて曰く『瞿曇、若し彼の百種の人皆若干種の木を以て用ひて火母と作し鑽を以てこれを鑽り火を生じて長養し、彼に若し人有りて燥ける草木を以てその火中に著けば、燄を生じ色を生じ、熱を生じ烟を生じ、我彼の火の燄色熱烟に於て燄色熱烟差別有るを施設する能はず』。世尊告げて曰はく『梵志、是の如く我が得る所の火・得る所の不放逸、能く放逸及び貢高・慢を滅す。我この火に於て火亦差別有るを施設する能はず』。鬱瘦歌邏梵志白して曰く『世尊、我已に知る。善逝、我已に解す。世尊、我今自ら佛・法及び比丘衆に歸す。唯願はくは世尊、我を受けて優婆塞と爲したまへ。今日より始めて終身自ら歸し乃ち命盡くるに至らん』。佛說是の如し。鬱瘦歌邏梵志佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百五十一[一]、阿攝惒經第十

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時衆多の梵志拘薩羅に於て學堂に集在し共にこの事を論じぬ『梵志種勝りて餘者如かず、梵志種白くして餘者皆黑く、梵志清淨を得、非梵志清淨を得ず、梵志は梵天の子にして彼の口より生じ、梵は梵の化する所、而も沙門瞿曇、四種姓皆悉く清淨なりと說き施設し顯示す』。彼[等]この念を作しぬ、「諸賢、誰か力有り、能く沙門瞿曇の所に至りて則ちこの事を以て如法に難詰すと爲すやと」。彼[等]またこの念を作す、「阿攝惒邏延多那摩納[二]父母の擧ぐる所と爲り、生を受くること清淨にして乃至七世の父母種族を

【一】M. 93, Assalāyana-sutta. 竺曇無蘭譯「頞波羅延問種經」。

【二】阿攝惒邏延多那摩納(Assalāyana māṇava)。

『是の如く梵志、我自ら善く解し善く諸の法を知り、人の爲に息止の法・滅訖の法・覺道の法・善趣の法を施設し、自有財物を施設す』。世尊問ひて曰はく『梵志、意に於て云何。若し百種の人來り、或は一人有りて而も彼[等]に告げて曰く、「汝等共に來れ、若し刹利族・梵志族に生せる者は、唯彼能く極めて燥ける娑羅及び栴檀木を以て用ひて火母と作し鑽を以てこれを鑽り火を生じて長養せよと。」梵志、意に於て云何。刹利族・梵志族爲らば、彼能く極めて燥ける娑羅及び栴檀木を以て用ひて火母と作し鑽を以てこれを鑽り火を生じて長養するや。居士族・工師族爲らば彼當に燥ける猪狗の槽・伊蘭檀木及び餘の弊木を以て用ひて火母と作し、鑽を以てこれを鑽り火を生じて長養すべきや。一切の百種の人皆能く若干種の木を以て用ひて火母と作し、鑽を以てこれを鑽り火を生じて長養するや』。鬱瘦歌邏梵志答へて曰く「瞿曇、彼の一切の百種の人皆能く若干種の木を以て用ひて火母と作し鑽を以てこれを鑽り火を生じて長養す』『是の如く梵志、我自ら善く解し、善く諸の法を知り、人の爲に息止の法・滅訖の法・覺道の法・善趣の法を施設し、自有財物を施設す』。世尊問ひて曰はく『梵志、意に於て云何。若し彼の百種の人皆若干種の木を以て用ひて火母と作し鑽を以てこれを鑽り火を生じて長養すれば、彼の一切の火皆焰有り色有り、熱有り光有りて能く火事を作し、彼の火獨り焰有り色有り熱有り光有りて能く火事を作すことを爲すや。彼の火獨り焰無く色無く熱無く光無くして火事を作す能はずと爲すや。彼の一切の火皆焰有り色有り熱有り光有りて皆能く火事を作すと爲すや』。鬱瘦歌邏梵志答へて曰く『瞿曇、若し百種の人皆若干種の木を以て用ひて火母と作し鑽を以てこれを鑽り火を生じて長養すれば、彼の一切の火皆焰有り色有り熱有り光有りて皆能く火事を作す。若し彼の火獨り焰有り色有り熱有り光有りて能く火事を爲さんは、終にこの處り無し。若し彼の火獨り焰無く色無く熱無く光無くして火事を爲す能はさらんは、亦この處り無し。但瞿曇、彼の一切の火皆焰有り色有り熱有り光有りて皆能く火事を作す』『是の如く梵志、我自ら善く解し善く

【六】娑羅（Sāla）、栴檀木（Candana）。

【七】巴利文には「狗及び豚に〔物食はす時に用ふる〕槽、染物師の〔物を染むるに用ふる〕槽、蓖麻木（＝伊蘭檀）の四を擧ぐ。

天に至るに於て自ら知らずして四種姓の爲に四種の自有財物を施設し、梵志の爲に自有財物を施設し、刹利・居士・工師の爲に自有財物を施設すと』。世尊告げて曰はく『梵志、猶ほ人有り、强ひて他に肉を與へて而もこの說を作すが如し、「士夫食すべし。當に我に直を與ふべしと。」梵志、汝諸の梵志の爲に說くも亦復是の如し。所以者何。梵志自ら知らずして四種姓の爲に四種の自有財物を施設し梵志の爲に自有財物を施設し、刹利・居士・工師の爲に自有財物を施設す。是の如く梵志、我自ら善く解し善く諸の法を知り、人の爲に息止の法・滅訖の法・覺道の法・善趣の法を施設し自有財物を施設す』。世尊問ひて曰はく『梵志、意に於て云何。頗し梵志有りてこの虛空に於て著せず縛せず觸れず礙へず、刹利・居士・工師は然らざるや』。鬱瘦歌邏梵志答へて曰はく『瞿曇、梵志この虛空に於て著せず、縛せず觸れず礙へず、刹利・居士・工師亦然り』。『是の如く梵志、我自ら善く解し善く諸の法を知り、人の爲に息止の法・滅訖の法・覺道の法・善趣の法を施設し、自有財物を施設す』。世尊問ひて曰はく、『梵志、意に於て云何。頗し梵志有りて能く慈心を行じ結無く怨無く恚無く諍無く、刹利・居士・工師は然らざるや』。鬱瘦歌邏梵志答へて曰く『瞿曇、梵志能く慈心を行じ、結無く怨無く、恚無く諍無く、刹利・居士・工師亦然り』。『是の如く梵志、我自ら善く解し善く諸の法を知り、人の爲に息止の法・滅訖の法・覺道の法・善趣の法を施設し、自有財物を施設す』。世尊問ひて曰はく『梵志、意に於て云何。若し百種の人來り、或は一人有りて而も彼[等]に語げて曰く、「汝等共に來れ。若し刹利族、梵志族に生ぜる者有らば、唯彼能く澡豆を持し水に至りて洗浴し垢を去りて極めて淨めよと」。梵志、意に於て云何。刹利族・梵志族爲らば、彼能く澡豆を持し水に至りて洗浴し垢を去りて極めて淨むるや。居士族、工師族爲らば、彼澡豆を持し洗浴し垢を去りて極めて淨むる能はざるや。一切の百種の人の爲に皆能く澡豆を持し水に至りて洗浴し垢を去りて極めて淨むるや』。鬱瘦歌邏梵志答へて曰く『瞿曇、彼の一切の百種の人皆能く澡豆を持し水に至りて洗浴し垢を去りて極めて淨む』。

居士・工師の爲に自有財物を施設す。瞿曇、梵志、梵志の爲に自有財物を施設するは、瞿曇、梵志、梵志の爲に乞求の自有財物を施設し、若し梵志乞求を輕慢すれば則便ち自有財物を輕慢し、自有財物を輕慢し已りて則便ち利を失す。猶ほ牛を放つ人、牛を看る能はざれば則便ち利を失するが如し。是の如く瞿曇、梵志、梵志の爲に乞求の自有財物を施設し、若し梵志乞求を輕慢すれば則便ち自有財物を輕慢し、自有財物を輕慢し已りて則便ち利を失す。瞿曇、梵志、刹利の爲に自有財物を施設するは、瞿曇、梵志、刹利の爲に弓箭の自有財物を施設し、若し刹利、弓箭を輕慢すれば則便ち自有財物を輕慢し、自有財物を輕慢し已りて則便ち利を失す。猶ほ牛を放つ人、牛を看る能はざれば則便ち利を失するが如し。是の如く瞿曇、梵志、刹利の爲に弓箭の自有財物を施設し、若し刹利、弓箭を輕慢すれば則便ち自有財物を輕慢し、自有財物を輕慢し已りて則便ち利を失す。瞿曇、梵志、居士の爲に自有財物を施設するは、瞿曇、梵志居士の爲に田作の自有財物を施設し、若し居士田作を輕慢すれば則便ち自有財物を輕慢し、自有財物を輕慢し已りて則便ち利を失す。猶ほ牛を放つ人、牛を看る能はざれば則便ち利を失するが如し。是の如く瞿曇、梵志、居士の爲に田作の自有財物を施設し、若し居士田作を輕慢すれば則便ち自有財物を輕慢し、自有財物を輕慢し已りて則便ち利を失す。瞿曇、梵志工師の爲に自有財物を施設するは、瞿曇、梵志、工師の爲に麻の自有財物を施設し、若し工師麻を輕慢すれば則便ち自有財物を輕慢し、自有則物を輕慢し已りて則便ち利を失す。猶ほ牛を放つ人、牛を看る能はざれば則便ち利を失するが如し。是の如く瞿曇、梵志、工師の爲に麻の自有財物を施設し、若し工師麻を輕慢すれば則便ち自有財物を輕慢し、自有財物を輕慢し已りて則便ち利を失す』。世尊問ひて曰はく『梵志、諸の梵志頗し自ら四種姓の爲に四種の自有財物を施設し、梵志の爲に自有財物を施設し、刹利・居士・工師の爲に自有財物を施設するを知るや』。鬱瘦歌邏梵志答へて曰く『知らざるなり瞿曇。但諸の梵志自ら說く、我この世・天及び魔・梵・沙門・梵志、人より

---

(1)乞求は梵志の自有財物。

(2)弓箭は刹利の自有財物。

(3)田作は居士の自有財物。

(4)麻は工師の自有財物。【五】巴利語asitabyābhaṅgiなり、「麻」と譯したるはbhaṅgāと混淆したるが如し。巴利原典刊行會の辭書にはsickle and pole（鎌と天秤棒）と解すれど、asitaが何故に鎌なるかは說明せず。Lord Chalmersはthe carrying of crops on the pole slung over his shoulder（自分の肩の上に引かついだ棒に收獲物を運ぶこと）と譯すれど、これも適當とは思はれず。

奉事すべからず。瞿曇、(5)若し梵志に奉事するに、奉事に因るが故に、信・戒・博聞・庶幾・智慧を增益すれば、我應に彼に奉事すべし。(6)刹利・居士・工師に奉事するに、奉事に因るが故に、信・戒・博聞・庶幾・智慧を增益すれば、我應に彼に奉事すべし』。世尊告げて曰はく『梵志、若し更に梵志有りて來り、愚に非ず癡に非ず、亦顚倒に非ず、心顚倒無く自由自在なり。我彼の梵志に問ふ、「意に於て云何。(1)若し奉事有り、奉事に因るが故に、信・戒・博聞・庶幾・智慧を失すれば、これ奉事と爲すや。(2)若し奉事有り、奉事に因るが故に、信・戒・博聞・庶幾・智慧を增益すれば、これ奉事と爲すや。梵志、(3)若し梵志に奉事するに、奉事に因るが故に、信・戒・博聞・庶幾・智慧を失すれば、これ奉事と爲すや。(4)刹利・居士・工師に奉事するに、奉事に因るが故に、信・戒・博聞・庶幾・智慧を失すれば、これ奉事と爲すや。梵志、(5)若し梵志に奉事するに、奉事に因るが故に、信・戒・博聞・庶幾・智慧を增益すれば、これ奉事と爲すや。(6)刹利・居士・工師に奉事するに、奉事に因るが故に、信・戒・博聞・庶幾・智慧を增益すれば、これ奉事と爲すやと」。梵志、彼の梵志、愚に非ず癡に非ず。亦顚倒に非ず、心顚倒無く自由自在にして、亦是の如く我に答へて曰く「瞿曇、(1)若し我奉事するに、奉事に因るが故に、信・戒・博聞・庶幾・智慧を失すれば、我應に彼に奉事すべからず。(2)若し我奉事するに、奉事に因るが故に、信・戒・博聞・庶幾・智慧を增益すれば、我應に彼に奉事すべし。瞿曇、(3)若し梵志に奉事するに、奉事に因るが故に、信・戒・博聞・庶幾・智慧を失すれば、我應に彼に奉事すべからず。(4)刹利・居士・工師に奉事するに、奉事に因るが故に、信・戒・博聞・庶幾・智慧を失すれば、我應に彼に奉事すべからず。瞿曇、(5)若し梵志に奉事するに、奉事に因るが故に、信・戒・博聞・庶幾・智慧を增益すれば、我應に彼に奉事すべし。(6)刹利・居士・工師に奉事するに、奉事に因るが故に、信・戒・博聞・庶幾・智慧を增益すれば、我應に彼に奉事すべしと」』。鬱瘦歌邏梵志白して曰く『瞿曇、[四]梵志四種姓の爲に四種の自有財物を施設し、梵志の爲に自有財物を施設し、刹利・

【四】梵志爲二四種姓一施二設四種自有財物一(Brāhmaṇā cattāri dhanāni paññāpenti)。

るが故に、勝有りて如無ければ、これ奉事と爲すや。(6)剎利・居士・工師に奉事し、奉事に因るが故に、勝有りて如無ければ、これ奉事と爲すやと。」梵志、彼の梵志愚に非ず癡に非ず、亦顚倒に非ず、心顚倒無く自由自在なり。我に答へて曰く、「瞿曇。(1)若し我奉事するに、奉事に因るが故に、如有りて勝無ければ、我應に彼に奉事すべからず。(2)若し我奉事するに、奉事に因るが故に、勝有りて如無ければ、我應に彼に奉事すべし。瞿曇、(3)若し梵志に奉事するに、奉事に因るが故に、如有りて勝無ければ、我應に彼に奉事すべからず。(4)剎利・居士・工師に奉事するに奉事に因るが故に、如有りて勝無ければ、我應に彼に奉事すべからず。瞿曇、(5)若し梵志に奉事するに、奉事に因るが故に、勝有りて如無ければ、我應に彼に奉事すべし。(6)剎利・居士・工師に、奉事するに、奉事に因るが故に、勝有りて如無ければ我應に彼に奉事すべしと」』。世尊問ひて曰はく『「梵志、意に於て云何。(1)若し奉事有り、奉事に因るが故に、信・戒・博聞・庶幾・智慧を失すれば、これ奉事と爲すや。(2)若し奉事有り、奉事に因るが故に、信・戒・博聞・庶幾・智慧を增益すれば、これ奉事と爲すや。梵志、(3)若し梵志に奉事するに、奉事に因るが故に、信・戒・博聞・庶幾・智慧を失すれば、これ奉事と爲すや。(4)剎利・居士・工師に奉事するに、奉事に因るが故に、信・戒・博聞・庶幾・智慧を失すれば、これ奉事と爲すや。梵志、(5)若し梵志に奉事するに、奉事に因るが故に、信・戒・博聞・庶幾・智慧を增益すれば、これ奉事と爲すや。(6)剎利・居士・工師に奉事し奉事に因るが故に信・戒・博聞・庶幾・智慧を增益すれば、これに奉事すと爲すや」』。鬱瘦歌邏梵志答へて曰く『瞿曇(1)若し我奉事するに、奉事に因るが故に、信・戒・博聞・庶幾・智慧を失すれば、我應に彼に奉事すべからず。(2)若し我奉事するに、奉事に因るが故に信・戒・博聞・庶幾・智慧を增益すれば、我應に彼に奉事すべし。瞿曇、(3)若し梵志に奉事するに、奉事に因るが故に、信・戒・博聞・庶幾・智慧を失すれば、我應に彼に奉事すべからず。(4)剎利・居士・工師に奉事するに、奉事に因るが故に、信・戒・博聞・庶幾・智慧を失すれば、我應に彼に

他に肉を與へて而もこの說を作すが如し、士夫食すべし。當に我に直を與ふべしと。梵志、汝諸の梵志の爲に說くも亦復是の如し。所以者何。梵志自ら知らずして四種姓の爲に四種の奉事を施設し、梵志の爲に奉事を施設し、刹利・居士・工師の爲に奉事を施設す』。世尊問ひて曰はく『梵志、云何が奉事なる。(1)若し奉事有り、奉事に因るが故に如ありて勝無ければ[三]これ奉事と爲すや。(2)若し奉事有り、奉事に因るが故に、勝有りて如無ければこれに奉事と爲すや。梵志、(3)若し梵志に奉事するに、奉事に因るが故に、如有りて勝無ければ、これ奉事と爲すや。(4)刹利・居士・工師に奉事するに奉事に因るが故に、如有りて勝無ければこれ奉事と爲すや。梵志、(5)若し梵志に奉事するに、奉事に因るが故に、勝有りて如無ければこれに奉事すと爲すや。(6)刹利・居士・工師に奉事するに奉事に因るが故に、勝有りて如無ければこれに奉事すと爲すや』。欝瘦歌邏梵志答へて曰く『瞿曇、(1)若し我奉事し、奉事に因るが故に、如有りて勝無ければ、我應に彼に奉事すべからず。(2)若し我奉事し、奉事に因るが故に、勝有りて如無ければ、我應に彼に奉事すべし。瞿曇、(3)若し梵志に奉事するに奉事に因るが故に、如有りて勝無ければ、我應に彼に奉事すべからず。(4)刹利・居士・工師に奉事するに、奉事に因るが故に、如有りて勝無ければ、我應に彼に奉事すべからず。瞿曇、(5)若し梵志に奉事するに、奉事に因るが故に、勝有りて如無ければ、我應に彼に奉事すべし。(6)刹利・居士・工師に奉事するに、奉事に因るが故に勝有りて如無ければ、我應に彼に奉事すべし』。世尊告げて曰はく『梵志、若し更に梵志有りて來り、愚に非ず癡に非ず、亦顚倒に非ず、心顚倒無く自由自在なり。我彼の梵志に問ふ、「意に於て云何。(1)若し奉事有り、無事に因るが故に、如有りて勝無ければこれ奉事と爲すや。(2)若し奉事有り、奉事に因るが故に勝有りて如無ければ、これ奉事と爲すや。梵志、(3)若し梵志に奉事し、奉事に因るが故に、如有りて勝無ければ、これ奉事と爲すや。(4)刹利・居士・工師に奉事し、奉事に因るが故に如有りて勝無ければ、これ奉事と爲すや。梵志、(5)若し梵志に奉事し、奉事に因

【三】こは正しき奉事の仕方といはるべきや。

依り、涅槃を以て訖と爲す』。生聞梵志白して曰く『世尊、我已に知る。善逝、我已に解す。世尊、我今自ら佛・法及び比丘衆に歸す。唯願はくは世尊、我を受けて優婆塞と爲したまへ。今日より始めて終身自ら歸し乃ち命盡くるに至らん』。佛說是の如し。生聞梵志佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百五十、[一]鬱瘦歌邏經第九

我が聞きしこと是の如し。ある時佛王舍城に遊び竹林加蘭哆園に在しぬ。その時鬱瘦歌邏梵志中後に彷徉して佛の所に往詣し共に相問訊し却きて一面に坐し白して曰く『瞿曇、問ふ所有らんと欲す。聽きて乃ち敢へて陳ぶるや』。世尊告げて曰はく『汝の問ふ所を恣にせよ』。鬱瘦歌邏梵志卽便ち問ひて曰く『瞿曇、[二]梵志四種姓の爲に四種の奉事を施設し、梵志の爲に奉事を施設し、刹利・居士・工師の爲に奉事を施設す。瞿曇、梵志、梵志の爲に奉事を施設するは、梵志應に梵志に奉事すべく、刹利・居士・工師亦應に梵志に奉事すべし。瞿曇、この四種姓應に梵志に奉事すべし。瞿曇、梵志、刹利の爲に奉事を施設するは、刹利應に刹利に奉事すべく、居士・工師亦應に刹利に奉事すべし。瞿曇この三種姓應に刹利に奉事すべし。瞿曇、梵志、居士の爲に奉事を施設するは、居士應に居士に奉事すべく、工師亦應に居士に奉事すべし。瞿曇、この二種姓應に居士に奉事すべし。瞿曇、梵志、工師の爲に奉事を施設するは、工師應に工師に奉事すべし。誰かまた下賤應に工師に奉事すべき。唯工師のみ工師に奉事す』。世尊問ひて曰はく『梵志、諸の梵志頗し自ら四種姓の爲に四種の奉事を施設し、梵志の爲に奉事を施設し、刹利・居士・工師の爲に奉事を施設するを知るや』。鬱瘦歌邏梵志答へて曰く『知らざるなり瞿曇、但諸の梵志自らこの說を作す、我この世・天及び魔・梵・沙門・梵志・人より天に至るに於て、梵志自ら知らずして四種姓の爲に四種の奉事を施設し、梵志の爲に奉事を施設し、刹利・居士・工師の爲に奉事を施設すと』。世尊告げて曰はく『梵志、猶ほ人有りて强ひて

【一】 M. 96, Esukārī-sutta.

【二】 梵志爲二四種姓一施二設四種奉事一(Brāhmaṇā catasso pāricariyā paññāpenti)。四種姓とは(一)婆羅門(梵志)、(二)刹帝利、(三)毘舍(居士)、(四)首陀(工師)なり。

卷の第三十七

梵*志品

百四十九、[一]何欲經第八

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衛國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時[二]生聞梵志中後に彷徉して佛の所に往詣し共に相問訊し却きて一面に坐し白して曰く『瞿曇、問ふ所有らんと欲す。聽きて乃ち敢へて陳ぶるや』。世尊告げて曰はく『汝の問ふ所を恣にせよ』。梵志即便ち問ひて曰く『瞿曇、(1)剎利は何を欲し、何を行じ、何に立ち何に依り、何に訖るや』。世尊答へて曰はく『剎利は財物を得んと欲し、智慧を行じ、立つ所刀を以てし、人民に依り、自在を以て訖と爲す』。生聞梵志問ひて曰く『瞿曇、(2)居士は何を欲し何を行じ何に立ち何に依り何に訖るや』。世尊答へて曰はく『(1)居士は財物を得んと欲し、智慧を行じ、立つに技術を以てし、作業に依り、作業竟るを以て訖と爲す』。生聞梵志問ひて曰く『瞿曇、(3)婦人は何を欲し何を行じ何に立ち何に依り何に訖るや』。世尊答へて曰はく『婦人は男子を得んと欲し、嚴飾を行じ、立つに兒子を以てし、無對に依り、自在を以て訖と爲す』。生聞梵志問ひて曰く『瞿曇、(4)偸劫は何を欲し何を行じ何に立ち何に依り何に訖るや』。世尊答へて曰はく『偸劫は不與取を欲し、隱藏處を行じ、立つ所刀を以てし、闇冥に依り、不見を以て訖と爲す』。生聞梵志問ひて曰く『瞿曇、(5)梵志何を欲し、何を行じ、何に立ち何に依り何に訖るや』。世尊答へて曰はく『梵志は財物を得んと欲し、智慧を行じ、立つに經書を以てし、齋戒に依り、梵天を以て訖と爲す』。生聞梵志問ひて曰く『瞿曇、(6)沙門何を欲し何を行じ何に立ち何に依り何に訖るや』。世尊答へて曰はく『沙門は眞諦を得んと欲し、智慧を行じ、立つ所戒を以てし無[事]處に

※この三字削るべきを誤りて存したるなり。
【一】A. iii. 362.「增一阿含」三七品の八。
【二】生聞梵志(Jānussoni Brahmaṇa)。
(1)剎利。
(2)居士。
(3)婦人。
(4)偸劫。
(5)梵志。
(6)沙門。

猶ほ月の如しと觀ずべし』。ここに於て世尊この頌を說きて曰はく、

譬へば月の無垢にして虛空界に遊び、　一切世の星宿悉くその光明を翳すが如し。　是の如く信・博聞・庶幾・無慳貪は、　世間の一切の慳悉く光明を翳施す。　猶ほ大龍有りて雲雷電を興起し、　雨下り極めて滂沛として一切の地を充滿するが如し。　是の如く信・博聞・庶幾・無慳貪は、　飲食を施して豐足し、　樂しみ勸めて增す廣く施す。　是の如く極めて電震ひ天時雨を降らすが如し。　彼の福雨廣大にして施主の雨ふらす所の　錢財・名譽多く、善處に生するを得、　彼當に福を受け死し已りて天上に生ずべし。

佛說是の如し。生聞梵志佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第三十六

行ぜざれば、必ず饒益を得、必ずその樂を得るや』。世尊答へて曰はく『梵志、天及び人、身に非法を行じ及び惡を行じ、口意に非法を行じ及び惡を行ずれば、その時天及び人必ず當に減損すべく、阿修羅必ず當に興盛すべし。梵志、若し天及び人、身に如法を行じてその身を守護し、口意に如法を行じて口意を守護すれば、その時天及び人必ず當に興盛すべく、阿修羅必ず當に減損すべし。梵志、是の如く天及び人非法を行じ及び惡を行ずれば、必ず益を得ず、必ずその苦を得。梵志、是の如く天及び人能く如法を行じて惡を行ぜざれば、必ず饒益を得、必ずその樂を得』。生聞梵志また問ひて曰く『瞿曇、云何が惡知識を觀ずるや』。世尊答へて曰はく『梵志、當に惡知識は猶ほ月の如しと觀ずべし』。生聞梵志また問ひて曰く『瞿曇、云何が當に惡知識は猶ほ月の如しと觀ずべきや』。世尊答へて曰はく『梵志、盡くるに向んとする月、日日に稍減じ、宮殿亦減じ光明亦減じ形色亦減じ、日日に盡き去るが如し。梵志、時有りて月乃ち盡くるに至り都べてまた見えず。梵志、惡知識の人如來の正法律に於て亦その信を得、彼信を得已りて則ち後時に於て而も孝順せず亦恭敬せず、所行順はず、正智を立せず、法・次法に趣向せず、彼すなはち信を失し、持戒・博聞・庶幾・智慧亦復これを失す。梵志、時有りてこの惡知識善法を滅せしむること猶ほ月の盡くるが如し。梵志、是の如く當に惡知識は猶ほ月の如しと觀ずべし』。生聞梵志また問ひて曰く『瞿曇、云何が善知識を觀ずるや』。世尊答へて曰はく『梵志、當に善知識は猶ほ月の如しと觀ずべし』。生聞梵志また問ひて曰く『瞿曇、云何が當に善知識は猶ほ月の如しと觀ずべきや』。世尊答へて曰はく『梵志、猶ほ月の初めて生じて少しく壯にして明淨日日に增長するが如し。梵志、或時月十五日にその殿豐滿す。梵志、是の如く善知識は如來の正法律に於て信を得、彼信を得已りて而も後時に於て孝順し恭敬し、所行隨順して正智を立し、法・次法に趣向す。彼信を增長し、持戒・博聞・庶幾・智慧亦復增長す。梵志、時有りて彼の善知識・善法具足すること十五日の月の如し。梵志、是の如く當に善知識は

【一】以下「增一阿含」一七品の八。

や』。世尊答へて曰はく『梵志、家に在る者自在を以て樂と爲し、出家學道する者不自在を以て樂と爲す』。生聞梵志また問ひて曰く『瞿曇、家に在る者云何が自在を以て樂と爲し、出家學道する者云何が不自在を以て樂と爲すや』。世尊答へて曰はく『梵志、若し家に在る者錢增長するを得、金・銀・眞珠・琉璃・水精皆增長するを得、畜牧・穀米及び奴婢・使[人]亦增長するを得れば、その時家に在るもの快樂・歡喜す。これに因るが故に家に在る者多く快樂・歡喜す。梵志、出家學道する者行欲に隨はず行恚・癡に隨はざれば、その時出家學道するもの快樂歡喜す。これに因るが故に出家學道する者多く快樂・歡喜す。梵志、是の如く家に在る者自在を以て樂と爲し、出家學道する者不自在を以て樂と爲す』。生聞梵志また問ひて曰く『瞿曇、何事を以ての故に、天及び人をして必ず利義無からしめ、何事を以ての故に、天及び人をして必ず利義有らしむるや』。世尊答へて曰はく『梵志、若し天及び人共に諍へば必ず利義無く、若し天及び人諍はざれば必ず利義有り』。生聞梵志また問ひて曰く『瞿曇、云何が天及び人共に諍へば必ず利義無く、云何が天及び人諍はざれば必ず利義有りや。』世尊答へて曰はく『梵志、若し時に天及び人鬪諍怨憎すれば、その時天及び人憂苦愁慼す。これに因るが故に天及び人多く憂苦有り多く愁慼を懷く。梵志、若し時に天及び人鬪諍せず怨憎せざれば、その時天及び人快樂歡喜す。これに因るが故に天及び人多く快樂し多く歡喜す。梵志、是の如く天及び人共に諍へば必ず利義無く、天及び人諍はざれば必ず利義有り』。生聞梵志また問ひて曰く『瞿曇、何事を以ての故に、天及び人をして必ず饒益を得ず、必ずその苦を得しめ、何事を以ての故に、天及び人をして必ず饒益を得、必ずその樂を得しむるや』。世尊答へて曰はく『梵志、若し天及び人非法を行じ及び惡を行ずれば、必ず益を得ず、必ずその苦を得、若し天及び人能く如法を行じて惡を行ぜざれば、必ず饒益を得、必ずその樂を得』。生聞梵志また問ひて曰く『瞿曇、天及び人云何が非法を行じ及び惡を行ずれば、必ず益を得ず、必ずその苦を得、天及び人云何が如法を行じて惡を

し誦習するに而も差別有りこの功德有りと謂ふ』 生聞梵志また世尊に問ひぬ。『この博聞し誦習するにこの差別有りこの功德有り。頗し更に差別有り、更に功德の最上・最妙・最勝なる有りや』。世尊答へて曰はく『梵志、この博聞し誦習するにこの差別有りこの功德有り。更に差別無く、更に功德の最上・最妙・最勝なる者無し』。生聞梵志白して曰く『世尊、我已に知る。善逝、我已に解す。世尊、我今自ら佛・法及び比丘衆に歸す。唯願はくは世尊、我を受けて優婆塞と爲したまへ。今日より始めて終身自ら歸し乃ち命盡くるに至らん』。佛說是の如し。生聞梵志佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百四十八、何苦經第七

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時生聞梵志中後に彷徉して佛の所に往詣し、共に相問訊し却きて一面に坐し白して曰く『瞿曇、我問ふ所有らんと欲す。聽きて乃ち敢へて陳ぶるや』。世尊告げて曰はく『梵志、汝の問ふ所を恣にせよ』。生聞梵志即便ち問ひて曰く『瞿曇、家に在る者何の苦有り、出家學道する者何の苦有りや』。世尊答へて曰はく『梵志、家に在る者不自在を以て苦と爲し、出家學道する者自在を以て苦と爲す』。生聞梵志また問ひて曰く『瞿曇、家に在る者云何が不自在を以て苦と爲し、出家學道する者云何が自在を以て苦と爲すや』。世尊答へて曰はく『梵志、若し家に在る者錢增長せず金・銀・眞珠・琉璃・水精悉く增長せず、畜牧・穀米及び奴婢使[人]亦增長せざれば、その時家に在るもの憂苦・愁慼す。これに因るが故に家に在る者多く憂苦有り、多く愁慼を懷く。梵志、若し出家學道する者行その欲に隨ひ、行恚・癡に隨へば、その時出家學道するもの憂苦・愁慼す。これに因るが故に出家學道する者多く憂苦有り、多く愁慼を懷く。梵志、是の如く家に在る者不自在を以て苦と爲し、出家學道する者自在を以て苦と爲す』。生聞梵志、また問ひて曰く『瞿曇、家に在る者何の樂有り、出家學道する者何の樂有り

を離れ悪不善の法を離れ、〔乃至〕第四禪を得るに至り成就して遊べば、梵志、これを博聞し誦習するに而も差別有りこの功徳有りと謂ふ。(10)また次に梵志、多聞の聖弟子[一]三結已に盡きて須陀洹を得、悪法に墮せず、定んで正覺に趣き極めて七有を受け、天上人間に七たび往來し已りて則ち苦邊を得。梵志、若し多聞の聖弟子三結已に盡きて須陀洹を得、悪法に墮せず、定んで正覺に趣き極めて七有を受け天上人間に七たび往來し已りて則ち苦邊を得れば、梵志、これを博聞し誦習するに而も差別有りこの功徳有りと謂ふ。(11)また次に梵志、多聞の聖弟子三結已に盡き婬・怒・癡薄く一往來を得、天上人間に一たび往來し已りて則ち苦邊を得。梵志、若し多聞の聖弟子三結已に盡き婬・怒・癡薄く一往來を得、天上人間に一たび往來し已りて則ち苦邊を得れば、梵志、これを博聞し誦習するに而も差別有りこの功徳有りと謂ふ。(12)また次に梵志、多聞の聖弟子[二]五下分結盡き、彼の間に生じ已りてすなはち般涅槃し、不退法を得てこの世に還らず。梵志、若し多聞の聖弟子、五下分結盡き、彼の間に生じ已りてすなはち般涅槃し、不退法を得てこの世に還らざれば、梵志、これを博聞し誦習するに而も差別有りこの功徳有りと謂ふ。(13)また次に梵志、多聞の聖弟子、息解脱有り色を離れて無色を得、如其像定、身に作證し成就して遊び、慧觀もて漏を斷じて而も漏を知る。梵志、若し多聞の聖弟子、息解脱有り色を離れて無色を得、如其像定、身に作證し成就して遊び、慧觀もて漏を斷じて而も漏を知れば、梵志、これを博聞し誦習するに而も差別有りこの功徳有りと謂ふ。(14)また次に梵志、多聞の聖弟子、如意足・天耳・他心智・宿命智・生死智あり、諸漏已に盡きて無漏を得、心解脱し慧解脱し、現法中に於て自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊び、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ更に有を受けずと如眞を知る。梵志、若し多聞の聖弟子如意足・天耳・他心智・宿命智・生死智あり、諸漏已に盡きて無漏を得、心解脱し慧解脱し、現法中に於て自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊び、生已に盡き梵行已に立ち、所作已に辨じ更に有を受けずと如眞を知れば、梵志、これを博聞

【一】三結。身見・戒禁取見・疑なり。三種の煩惱。一卷「水喩經」註〔三〕を見よ。

【二】五下分結。貪欲・瞋恚・身見・戒禁取見・疑の五種の煩惱にして有情を下欲界に結び繫ぐを以て斯く呼ぶ。

德有りと謂ふ。(3)また次に梵志、多聞の聖弟子有する所の財物皆悉く無常なるを知りて出家學道するを念ず。梵志、若し多聞の聖弟子有する所の財物皆悉く無常なるを知りて出家學道するを念ずれば、梵志、これを博聞し誦習するに而も差別有りこの功德有りと謂ふ。(4)また次に梵志、多聞の聖弟子有する所の財物皆悉く無常なるを知り已りて鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道す。梵志、若し多聞の聖弟子有する所の財物皆悉く無常なるを知り已りて鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道すれば、梵志、これを博聞し誦習するに而も差別有り、この功德有りと謂ふ。(5)また次に梵志、多聞の聖弟子能く飢渴・寒熱・蚊虻・蠅蚤を忍び、風日の逼る所、惡聲・捶杖亦能くこれを忍び、身諸の疾に遇ひ極めて苦痛を爲し命絕えんと欲するに至るも、諸の不可樂皆能く堪耐す。梵志、若し多聞の聖弟子能く飢渴・寒熱・蚊虻・蠅蚤を忍び、風日の逼る所、惡聲・捶杖亦能くこれを忍び、身諸の疾に遇ひ極めて苦痛を爲し命絕えんと欲するに至るも、諸の不可樂皆能く堪耐すれば、梵志、これを博聞し誦習するに而も差別有りこの功德有りと謂ふ。(6)また次に梵志、多聞の聖弟子不樂を堪耐し不樂を生じ已るも心終に著せず。梵志、若し多聞の聖弟子不樂を堪耐し不樂を生じ已るも心終に著せざれば、梵志、これを博聞し誦習するに而も差別有りこの功德有りと謂ふ。(7)また次に梵志、多聞の聖弟子恐怖に堪耐し恐怖を生じ已るも心終に著せず。梵志、若し多聞の聖弟子恐怖に堪耐し恐怖を生じ已るも心終に著せざれば、梵志、これを博聞し誦習するに而も差別有りこの功德有りと謂ふ。(8)また次に梵志、多聞の聖弟子若し三惡不善の念、欲念・恚念及び害念を生じ、この三惡不善の念を爲し已るも心終に著せず。梵志、若し多聞の聖弟子若し三惡不善の念、欲念・恚念及び害念を生じ、この三惡不善の念を爲し已るも心終に著せざれば、梵志、これを博聞し誦習するに而も差別有りこの功德有りと謂ふ。(9)また次に梵志、多聞の聖弟子欲を離れ惡不善の法を離れ、[乃至]第四禪を得るに至り成就して遊ぶ。梵志、若し多聞の聖弟子欲

百四十七、聞德經第六

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時生聞梵志中後に彷徉して佛の所に往詣し、共に相問訊し却きて一面に坐し白して曰く『瞿曇、我問ふ所有らんと欲す。聽きて乃ち敢へて陳ぶるや』。世尊告げて曰はく『梵志、汝の問ふ所を恣にせよ』。生聞梵志即便ち問ひて曰く『沙門瞿曇の弟子或は家に在る有り或は出家學道する有り。何の義を以ての故に博聞し誦習するや』。世尊答へて曰はく『梵志、我が弟子或は家に在る有り或は出家學道す。博聞し誦習する所以は、自ら調御せんと欲し自ら息止せんと欲し自ら滅訖を求む。梵志、我が弟子或は家に在る有り、或は出家學道し、この義を以ての故に博聞し誦習す』。生聞梵志また問ひて曰く『瞿曇、博聞し誦習するに差別有りや。博聞し誦習するに功德有りや』。世尊答へて曰はく『梵志、博聞し誦習するに而も差別有り、博聞し誦習すれば則ち功德有り』。生聞梵志また問ひて曰く『瞿曇、博聞し誦習するに何の差別有り、何の[功]德有りや』。世尊答へて曰はく『梵志、(1)多聞の聖弟子晝日作業してその利を得んと欲し、彼の所作業敗壞して成らず。彼の所作業敗壞し成らざるに已りて、然も憂慼・愁煩・啼哭せず、身を推して懊惱せず亦癡狂せず。梵志、若し多聞の聖弟子晝日作業してその利を得んと欲し、彼の所作業敗壞して成らず。彼の所作業敗壞して成らざるに已りて然も憂慼・愁煩・啼哭せず、身を推して懊惱せず亦癡狂せざれば、梵志、これを博聞し誦習するに而も差別有りこの功德有りと謂ふ。(2)また次に梵志、多聞の聖弟子有する所の愛念異なりて散解する無く、また相應せず、與に別離し已りて然も憂慼・愁煩・啼哭せず、身を推して懊惱せず、亦癡狂せず。梵志、若し多聞の聖弟子有する所の愛念異なりて散解する無く、また相應せず、與に別離し已りて然も憂慼・愁煩・啼哭せず、身を推して懊惱せず、亦癡狂せざれば、梵志、これを博聞し誦習するに而も差別有り、この功

ぶ。梵志、これを如來の屈する所、如來の行ずる所、如來の服する所と謂ひ、然も彼これを以て訖ると爲さず。世尊・如來・無所著・等正覺・世尊の所說の法善にして如來の弟子聖衆善く趣き、彼喜欲を離れ、捨無求にして遊び、正念正智にして而も身樂を覺ふ、謂く聖［者］の說く所［聖］の所捨・念・樂住室の第三禪に逮り成就して遊ぶ。梵志、これを如來の屈する所、如來の行ずる所、如來の服する所と謂ひて、然も彼これを以て訖ると爲さず。世尊・如來・無所著・等正覺・世尊の所說の法善にして、如來の弟子聖衆善く趣き、彼樂滅し苦滅し、喜憂は本已に滅して、苦ならず樂ならず、捨あり念あり清淨にして第四禪に逮り成就して遊ぶ。梵志、これを如來の屈する所、如來の行ずる所、如來の服する所と謂ひ、然も彼これを以て訖ると爲さず。世尊・如來・無所著・等正覺・世尊の所說の法善にして、如來の弟子聖衆善く趣き、彼已に是の如き定心を得、淸淨にして穢無く煩無く柔軟にして善く住して不動心を得。漏盡智通に趣向して作證し、彼この苦の如眞を知り、この苦の習を知り、この苦の滅を知り、この苦滅道の如眞を知り、この漏の如眞を知り、この漏の習を知り、この漏の滅を知り、この漏滅道の如眞を知り、彼是の如く知り、是の如く見、欲漏心解脫し、有漏・無明漏心解脫し、解脫し已りてすなはち解脫を知り、生已に盡き梵行已に立ち、所作已に辨じ更に有を受けずと如眞を知る。梵志、これを如來の屈する所、如來の行ずる所、如來の服する所と謂ひ、彼これを以て訖ると爲す。世尊・如來・無所著・等正覺・世尊の所說の法善にして如來の弟子聖衆善く趣く。梵志、意に於て云何。是の如き象跡の喩善く作し具足するや』。生聞梵志答へて曰く『唯然り瞿曇、是の如き象跡の喩善く作し具足す』。生聞梵志白して曰く『世尊、我已に知る。善逝、我已に解す。世尊・我今自ら佛、法及び比丘衆に歸す。唯願はくは世尊我を受けて優婆塞と爲したまへ。今日より始めて終身自ら歸し乃ち命盡くるに至らん』。佛說是の如し。生聞梵志及び卑盧異學佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

の心を淨除す。彼過中食を離れ、過中食を斷じ、一食して夜食學時食せず、彼過中食に於てその心を淨除す。彼已にこの聖戒聚を成就し、[一三]また極めて知足を行じて衣は形を覆ふを取り、食は軀を充すを取り、所に隨ひて遊至し衣鉢と倶に行きて顧戀無く、猶ほ鷹鳥の兩翅と倶に空中に飛翔するが如し。彼已にこの聖戒聚及び極知足を成就し、[一四]また諸根を守護して常に閉塞を念じ明達を念欲し、念心を守護して而も成就するを得、恒に正知を起し、若し眼、色を見るも然も想を受けず亦色を味はず。謂く忿諍の故に眼根を守護し、心中に貪伺・憂慼・惡不善の法を生ぜず、彼に趣向するが故に眼根を守護す。是の如く耳・鼻・舌・身［亦然り］。若し意、法を知るも然も想を受けず亦法を味はず。謂く忿諍の故に意根を守護し、心中に貪伺・憂慼・惡不善の法を生ぜず、彼に趣向するが故に意根を守護す。彼已にこの聖戒聚及び極知足を成就し諸根を守護し、[一五]また正に出入を知り、屈伸・低仰・儀容・庠序を善觀分別し、善く僧伽梨及び諸の衣鉢を著け、行住・坐臥・眠寤・語默、皆正にこれを知る。彼已にこの聖戒聚及び極知足を成就し諸根を守護し正に出入を知り、[一六]また獨り遠離に住して無事處に在り、或は樹下・空・安靖處・山巖・石室・露地・穰積に至り、或は林中に至り或は塚間に在り。彼已に無事處に在り、或は樹下・空・安靜處に至りて尼師檀を敷きて結加趺坐し、正身正願して反念向はず、貪伺を斷除し心諍有ること無く、他の財物諸の生活の具を見て、貪伺を起して我が得たらしめんと欲せず、彼貪伺に於てその心を淨除す。是の如く瞋恚・睡眠・調悔［亦然り］。疑を斷じ惑を度し、諸の善法に於て猶豫有ること無く、彼疑惑に於てその心を淨除す。彼この五蓋・心穢・慧羸を斷じ、[一七]欲を離れ惡不善の法を離れ、覺有り觀有り、離より生ずる喜と樂とある初禪に逮り成就して遊ぶ。梵志、これを如來の屈する所、如來の行ずる所、如來の服する所と謂ひ、然も彼これを以て訖ると爲さず。世尊・如來・無所著・等正覺・世尊の所說の法は善にして如來の弟子聖衆善く趣き、彼覺觀已に息み、內靖く一心にして覺無く觀無く、定より生ずる喜と樂とある第二禪に逮り成就して遊

【一三】彼知足を行ず。三六卷「瞿默目揵連經」參照。

【一四】彼諸根を守護す。以下三五卷「算數目揵連經」參照。

【一五】彼正知正念あり。

【一六】彼遠離獨住禪觀す。

【一七】以下四禪を說く、二卷「晝度樹經」本文及び註〔八一—一三〕參照。

彼兩舌を離れ兩舌を斷じ不兩舌を行じて他を破壞せず、これに聞きて彼に告げ、これを破壞せんと欲せず、彼に聞きてこれに告げ、彼を破壞せんと欲せず、離るれば合せんと欲し、合すれば歡喜し、群黨を作さず群黨を樂しまず群黨を稱說せず。彼兩舌に於てその心を淨除す。彼麁言を離れ麁言を斷じ、若し言ふ所辭氣麁獷惡聲にして耳に逆ひ、衆の憙ばざる所、衆の愛せざる所にして他をして苦惱せしめ定を得ざらしむる有れば、是の如き言を斷じ、若し言ふ所清和柔潤にして耳に順ひ心に入り、憙ぶべく愛すべく、他をして安隱ならしめ、言聲具了して人をして畏れしめず、他をして定を得しむる有れば、是の如き言を說き、彼麁言に於てその心を淨除す。彼綺語を離れ綺語を斷じ、時說・眞說・法說・義說・止息說・樂止息說し、事時に隨ひて宜しきを得、善く敎へ善く訶し、彼綺語に於てその心を淨除す。彼治生を離れ治生を斷じ稱量及び斗斛を棄捨し、亦貨を受けず、人を縛束せず斗量を折るを望まず、小利を以て人を侵欺せず、彼治生に於てその心を淨除す。彼寡婦童女を受くるを離れ、寡婦童女を受くるを斷じ、彼寡婦童女を受くるに於てその心を淨除す。彼奴婢を受くるを離れ奴婢を受くるを斷じ、彼奴婢を受くるに於てその心を淨除す、彼象馬牛羊を受くるを離れ象馬牛羊を受くるを斷じ、彼象馬牛羊を受くるに於てその心を淨除す。彼雞猪を受くるを離れ雞猪を受くるを斷じ、彼雞猪を受くるに於てその心を淨除す。彼田業店肆を受くるを離れ、田業店肆を受くるを斷じ、彼田業店肆を受くるに於てその心を淨除す。彼生稻麥豆を受くるを離れ、生稻麥豆を受くるを斷じ、彼生稻麥豆を受くるに於てその心を淨除す。彼酒を離れ酒を斷じ、彼飮酒に於てその心を淨除す。彼高廣大床を離れ高廣大床を斷じ、彼高廣大床に於てその心を淨除す。彼華鬘・瓔珞・塗香・脂粉を離れ華鬘・瓔珞・塗香・脂粉を斷じ、彼華鬘・瓔珞・塗香・脂粉に於てその心を淨除す。彼歌舞・倡妓及び往觀聽を離れ歌舞・倡妓・往觀聽を斷じ、彼歌舞・倡妓及び往觀聽に於てその心を淨除す。彼生色像寶を受くるを離れ、生色像寶を受くるを斷じ、彼生色像寶を受くるに於てそ

また大象の跡を見、見已りて必ず彼の象極めて大にして而もこの跡有りと信ず。彼この跡を尋ね已りて大象の跡を見るに大象の跡方に極めて長く極めて廣く、周帀遍く著き正に深く地に入る。及び彼の象或は去り或は來り或は住まり或は走り或は立ち或は臥すを見、彼の象を見已りてすなはちこの念を作す、若しこの跡有れば、必ずこれ大象ならんと。梵志、是の如く若し世中、如來・無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師・號佛衆祐を出せば、彼この世天及び魔・梵・沙門・梵志・乃至天・人に於て自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊び、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ更に有を受けずと如眞を知り、彼法を說きて初め妙、中ごろ妙、竟り亦妙にして義有り文有り、具足し清淨にして梵行を顯現す。彼の所說の法を或は居士「或は」居士子聞き已りて信を得、如來の正法律に於て彼信を得已りてすはなちこの念を作す、在家は至つて狹く塵勞の處なり、出家學道は發露して廣大なり。我今家に在りて鏁の爲に鏁され、形壽を盡して梵行を淨修するを得ず。我寧ろ少き財物及び多き財物を捨て少き親族及び多き親族を捨て、鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道すべしと。[一] 彼後時に於て少き財物及び多き財物を捨て少き親族及び多き親族を捨て、鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道す。彼出家し已りて親族の相を捨て、比丘の要を受け禁戒を修習し從解脫を守護し、又復善く威儀禮節を攝し、纖芥の罪を見て常に畏怖を懷き、學戒を受持す。[二] 彼殺を離れ殺を斷じ刀杖を棄捨し、慚有り愧有り、慈悲心有りて一切乃至蜫蟲を饒益し、彼殺生に於てその心を淨除す。彼不與取を離れ不與取を斷じ、與へられて而も後取り與取を樂しみ、常に布施を好み歡喜して悋むこと無くその報を望まず。彼不與取に於てその心を淨除す。彼非梵行を離れ非梵行を斷じ、梵行を懃修し妙行を精懃し、清淨にして穢無く欲を離れ婬を斷じ、彼非梵行に於てその心を淨除す。彼妄言を離れ妄言を斷じ、眞諦を言ひ眞諦を樂しみ眞諦に住して移動せず、一切信ずべくして世間を欺かず、彼妄言に於てその心を淨除す。

【一】彼出家學道す。

【二】彼聖戒聚を成就す。以下一二卷「調婆陵耆經」參照。

し答ふる能はざればすなはち伏して捨て去らんと。彼世尊某村邑に遊びたまふと聞きて、すなはち彼の所に往き、世尊を見已りて、尚敢へて問はず、況やまた能く伏するをや。梵志、我書を讀む所用てかくの如き第四の句義を得、我この義に因りて必ず世尊・如來・無所著・等正覺、世尊の所說の法善にして如來の弟子聖衆善く趣くを信ず。梵志、我書を讀む所この四句義有りて我この四句義に因るが故に必ず世尊・如來・無所著・等正覺、世尊の所說の法善にして如來の弟子聖衆善く趣くを信ず』。生聞梵志語げて曰く『婆瑳、汝大いに沙門瞿曇を供養し、因る所、緣る所歡喜奉行す』。卑盧異學答へて曰く『梵志、是の如し是の如し。我極めて彼の世尊を供養し亦、極めて稱譽す。一切世間亦應に供養すべし』。彼の生聞梵志この義を聞き已りて即ち乘より下り右膝を地に著け叉手を勝林給孤獨園に向け再び三たび禮を作し、南無如來・無所著・等正覺と、是の如く三たびに至り已りてまた極めて好き白乘に乘りて勝林給孤獨園に往詣し、彼の乘地に到りて即便ち乘を下り步み進みて佛に詣り、共に相問訊し却きて一面に坐しぬ。生聞梵志向に卑盧異學と共に論ぜし所の事、盡く佛に向ひて說きぬ。世尊聞き已りて告げて曰はく『梵志、卑盧異學象跡の喩を說くも猶ほ善く作さず亦具足せず。如し象跡の喩善く作し具足するは、今汝が爲に說かん。當に善くこれを聽くべし。梵志、譬へば善象師無事處に遊び、樹林間に於て大象の跡を見、見已りて必ず彼の象極めて大にして而もこの跡有るを信ず。梵志、彼の善象師或は信ぜざれば、この林中に於てまた母象有りて[8]加梨兔と名づけ身極めて高大にして彼この跡有りと、即ちこの跡を尋ねてまた大象の跡を見、見已りて必ず彼の象極めて大にして而もこの跡有りと信ず。梵志、彼の善象師或はまた信ぜず、この林中に於て更に母象有りて[9]加羅梨と名づけ身極めて高大にして彼この跡有りと、即ちこの跡を尋ね、また大象の跡を見、見已りて必ず彼の象極めて大にして而もこの跡有りと信ず。梵志、彼の大象師或はまた信ぜず、この林中に更に母象有りて[10]婆惒兔と名づけ身極めて高大にして彼この跡有りと、即ちこの跡を尋ね、

【八】加梨兔(Kaneruka)。

【九】加羅梨(Kalarika)。

【一〇】婆惒兔(Vamanika)。

已りたまふや、卽ち坐より起ち佛足を稽首し遶三匝して而も去りぬ。その時〔三〕生聞梵志極めて好き〔四〕白乘に乘り五百の弟子と倶に平旦時を以て舍衞より出でて〔五〕無事處に至り、弟子をして經書を諷讀せしめんと欲しぬ。生聞梵志遙かに卑盧異學の來るを見、すなはち問ひぬ、『〔六〕婆蹉、晨に起きて何處より來るや』。卑盧異學答へて曰く『梵志、我世尊を見、禮事し供養して來る』。生聞梵志問ひて曰く『婆蹉、頗し沙門瞿曇、空・安靜處にて智慧を學するを知るや』。卑盧異學答へて曰く『梵志、何等の人世尊の空・安靜處にて智慧を學したまふを知るべきや。梵志、若し世尊空・安靜處にて智慧を學したまふを知らば、亦當に彼の如くすべし。但梵志、我書を讀む所四句義有り。〔七〕四句義に因りて我必ず世尊・如來・無所著・等正覺・世尊の所說の法善にして、如來の弟子聖衆善く趣くを信ず。梵志、譬へば善象師無事處に遊び樹林間に於て大象の跡を見、見已りて必ず彼の象極めて大にして而もこの跡有りと信ず。梵志、我亦是の如し。我書を讀む所四句義有り。四句義に因りて我必ず世尊・如來・無所著・等正覺、世尊の所說の法善にして、如來の弟子聖衆善く趣くを信ず。云何が四句義なる。梵志、(1)智慧ある刹利論士多聞にして決定して能く世人を伏し、知らざる所無く、則ち諸の見を以て文章を造作して世間に行ひ、彼この念を作す、我沙門瞿曇の所に往きて是の如き是の如き事を問はん。若し能く答ふれば當にまた重ねて問ふべく、若し答ふる能はざればすなはち伏して捨て去らんと。彼世尊某村邑に遊びたまふと聞き、すなはち彼の所に往きて世尊を見已りて、尙敢へて問はず、況やまた能く伏するをや。梵志、我書を讀む所用てかくの如き第一の句義を得、我この義に因りて必ず世尊・如來・無所著・等正覺、世尊の所說の法善にして如來の弟子聖衆善く趣くを信ず。是の如く(2)智慧ある梵志、(3)智慧ある居士・「亦然り」。(4)智慧ある沙門論士、多聞にして決定して能く世人を伏し知らざる所無く、則ち諸の見を以て文章を造作し世間に行ひ、彼この念を作す、我沙門瞿曇の所に往きて是の如き是の如き事を問はん。若し能く答ふれば當にまた重ねて問ふべく、若

〔三〕　生聞梵志(Jāṇussoṇi Brāhmaṇa)。三六卷「象跡喩經」に出づ。
〔四〕　總て白き幌付きの車。
〔五〕　森林をいふ。
〔六〕　婆蹉(Vacchāyana)。
〔七〕　四句義により世尊所說の法は善なり。

へ』。ここに於て摩竭陀の大臣雨勢、尊者阿難の所說を聞きて善く受け善く持し、卽ち坐より起ち尊者阿難を遶ること三匝して而も去りぬ。この時梵志瞿默目揵連、摩竭陀の大臣雨勢去りてより後久しからずして白して曰く『阿難、我問ふ所の事、都べて答へざるや』と。尊者阿難告げて曰く『目揵連。我實に答へず』。梵志瞿默目揵連白して曰く『阿難、我更に問ふ所有り。我が問を聽すや』。尊者阿難答へて曰く『目揵連、汝すなはち問ふべし。我聞きて當に思ふべし』。梵志瞿默目揵連卽ち問ひて曰く『阿難、若し如來・無所著・等正覺の解脫及び慧解脫、阿羅訶の解脫、この三解脫何の差別有り、何の勝如有りや』。尊者阿難答へて曰く『目揵連、若し如來・無所著・等正覺の解脫及び慧解脫、阿羅訶の解脫、この三解脫差別有ること無く亦勝如無し』。梵志瞿默目揵連白して曰く『阿難、ここに在りて食すべし』。尊者阿難默然として受けぬ。梵志瞿默目揵連默然として受くるを知り已りて卽ち坐より起ち自ら澡水を行じ、極美淨妙の種種豐饒なる食噉含消もて自ら手もて斟酌し極めて飽滿せしめ、食し訖り器を擧し澡水を行じ竟りて一小床を取りて別に坐して法を聽きぬ。尊者阿難彼の爲に法を說き、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、無量の方便もて彼の爲に法を說き、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りぬ。尊者阿難の所說是の如し。摩竭陀の大臣雨勢、眷屬及び梵志瞿默目揵連、尊者阿難の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百四十六、象跡喩經第五

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時卑盧異學平旦則ち舍衞國より出でて佛の所に往詣し稽首して禮を作し却きて一面に坐しぬ。佛彼の爲に法を說き、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、無量の方便もて彼の爲に法を說き、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りて默然として住したまひぬ。卑盧異學、佛[彼の]爲に法を說き、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ

【二】三種の解脫差別なし。

【一】M. 27. Cūḷa-Hatthipadopama-sutta,

【二】卑盧異學(Pilotika Paribbājaka)。

を行じ伺を樂しむが故に』。摩竭陀の大臣雨勢聞き已りて語げて曰く『婆雞大將、沙門瞿曇[八]昔時金鞞羅樂園中に遊行しぬ。婆雞大將、その時我數ば彼に往詣して沙門瞿曇を見き。所以者何。沙門瞿曇、伺を行じ伺を樂しみ、一切の伺を稱歎しぬ』。尊者阿難聞き已りて告げて曰く『雨勢、沙門瞿曇一切の伺を稱說しぬと、この說を作すこと莫れ。所以者何。世尊或は伺を稱說したまひ或は稱說したまはず』。摩竭陀の大臣雨勢また問ひて曰く『阿難、[九]沙門瞿曇何を稱說せずと。何等の伺を稱說せざるや』。尊者阿難答へて曰く『雨勢、(1)或は一貪欲の纏ふ所有りて而も貪欲を起し、出要の如眞を知らず。彼貪欲の障礙する所と爲るが故に、[一〇]伺ひ增す伺ひて而も重ねて伺ふ。雨勢、これを第一の伺と謂ひ、世尊稱說したまはず。(2)また次に雨勢、或は一瞋恚の纏ふ所有りて而も瞋恚を起し、出要の如眞を知らず。彼瞋恚の障礙する所と爲るが故に、伺ひ增す伺ひて而も重ねて伺ふ。雨勢、これを第二の伺と謂ひ、世尊稱說したまはず。(3)また次に雨勢、睡眠の纏ふ所にして而も睡眠を起し、出要の如眞を知らず。彼睡眠の障礙する所と爲るが故に、伺ひ增す伺ひて而も重ねて伺ふ。雨勢、これを第三の伺と謂ひ、世尊稱說したまはず。(4)また次に雨勢、疑惑の纏ふ所にして而も疑惑を起し、出要の如眞を知らず。彼疑惑の障礙する所と爲るが故に、伺ひ增す伺ひて而も重ねて伺ふ。雨勢、これを第四の伺と謂ひ、世尊稱說したまはず。雨勢、世尊この四伺を稱說したまはず』。摩竭陀の大臣雨勢白して曰く『阿難、この四伺憎むべく、憎むべき處にして沙門瞿曇稱說せず。所以者何。正に盡く覺るが故に』。摩竭陀の大臣雨勢また問ひて曰く『阿難、何等の伺沙門瞿曇の稱說する所なりや』。尊者阿難答へて曰く『雨勢、比丘は欲を離れ惡不善の法を離れ、[乃至]第四禪を得るに至り成就して遊ぶ。雨勢、世尊この四伺を稱說したまふ』。摩竭陀の大臣雨勢白して曰く『阿難、この四伺稱すべく、稱すべき處にして沙門瞿曇稱する所なり。所以者何。正に盡く覺るを以ての故に。阿難、我事煩猥なり。退きて還歸せんと請ふ』。尊者阿難告げて曰く『還らんと欲せば意に隨

【八】巴利文にては「毘舍離城の大林、重閣講堂」なり。

【九】世尊四伺を稱說したまはず。

【一〇】jhāyati, pajjhāyati, nijjhāyati, apajjhāyati; he muses and bemuses, unmuses and demuses(Chalmers).

比丘を愛敬し尊重し供養し宗奉し禮事す。(9)また次に雨勢、比丘智慧を修行して興衰の法を觀じ、かくの如き智を得て聖慧明達し分別曉了して以て正に苦を盡くす。雨勢、我等若し比丘極めて慧を行ずるを見れば、則ち共に彼の比丘を愛敬し尊重し供養し宗奉し禮事す。(10)また次に雨勢、比丘諸漏已に盡きて而も無漏を得、心解脱し慧解脱し、自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊び、生已に盡き梵行已に立ち、所作已に辨じ更に有を受けずと如眞を知る。雨勢、我等若し比丘諸漏已に盡くるを見れば、則ち共に彼の比丘を愛敬し尊重し供養し宗奉し禮事す。雨勢、世尊知見し、如來・無所著・等正覺この十法而も尊敬すべしと說きたまひぬ。雨勢、我等若し比丘この十法を行ずるを見れば、則ち共に彼の比丘を愛敬し尊重し供養し宗奉し禮事す』。ここに於て彼の大衆高大の音聲を放ちて『直道を修すべく、修すべからざるに非ず。若し直道を修し、修すべからざるに非ざれば、世中の阿羅訶に隨ひて愛敬し尊重し供養し禮事せん。若し諸尊直道を修すべくして而も能く修せば、この故に世中の阿羅訶愛敬し尊重し供養し禮事す』。ここに於て摩竭陀の大臣雨勢及びその眷屬問ひて曰く『阿難、今何處に遊ぶや』。尊者阿難答へて曰く『我今この王舍城竹林加蘭哆園に遊行す』。『阿難、竹林加蘭哆園至つて愛樂すべく、政頓して喜ぶべく、晝は喧鬧ならず、夜は則ち靜寂にして、蚊虻有ること無く亦蠅蚤無く、寒からず熱からずして、阿難、竹林加蘭哆園に樂しみ住するや』。尊者阿難答へて曰く『是の如し雨勢、是の如し雨勢、竹林加蘭哆園至つて愛樂すべく、政頓して喜ぶべく、晝は喧鬧ならず、夜は則ち靜寂にして蚊虻有ること無く亦蠅蚤無く、寒からず熱からずして、雨勢、我竹林加蘭哆園中に樂しみ住す。所以者何。世尊擁護したまふを以ての故に』。この時[六]婆難大將彼の衆中に在りぬ。婆難大將白して曰く『是の如し雨勢、是の如し雨勢、竹林加蘭哆園至つて愛樂すべく、政頓して喜ぶべく、晝は喧鬧ならず夜は則ち靜寂にして蚊虻有ること無く亦蠅蚤無く、寒からず熱からずして、彼の尊者竹林加蘭哆園に樂しみ住す。所以者何。この尊者[七]伺

【六】婆難大將 (Upananda senāpati)。

【七】行伺樂伺 (Jhāyī jhānasīlī)。

(1)比丘禁戒を修習し從解脱を守護し、又また善く威儀禮節を攝し、纎芥の罪を見て常に畏怖を懷き、學戒を受持す。雨勢、我等若し比丘極めて增上戒を行ずるを見れば、則ち共に彼の比丘を愛敬し尊重し供養し宗奉し禮事す。(2)また次に雨勢、比丘廣く學び多く聞き、守持して忘れず積聚して博く聞く、謂ふ所の法は初め妙、中ごろ妙、竟り亦妙にして義有り文有り具足し清淨にして梵行を顯現し、是の如く諸法廣く學び多く聞き、誦習して意に推觀する所に至り、明見深達なり。雨勢、我等若し比丘極めて多く聞くを見れば、則ち共に彼の比丘を愛敬し尊重し供養し宗奉し禮事す。(3)また次に雨勢、比丘善知識と作り善朋友と作り善伴黨と作る。雨勢、我等若し比丘極めて善知識なるを見れば、則ち共に彼の比丘を愛敬し尊重し供養し宗奉し禮事す。(4)また次に雨勢、比丘樂しみて遠離に住し、二の遠離、身及び心を成就す。雨勢、我等若し比丘極めて樂しみて遠離に住するを見れば、則ち共に彼の比丘を愛敬し尊重し供養し宗奉し禮事す。(5)また次に雨勢、比丘燕坐を樂しみ、内行正に止まり亦伺を離れず。觀增長空行を成就す。雨勢、我等若し比丘極めて燕坐を樂しむを見れば、則ち共に彼の比丘を愛敬し尊重し供養し宗奉し禮事す。(6)また次に雨勢、比丘足るを知り、衣は形を覆ふを取り、食は軀を充すを取り、所に隨ひて遊至し、衣鉢と倶に行きて顧戀無し。猶ほ鷹鳥の兩翅と倶に空中に飛翔するが如し。是の如く比丘足るを知り、衣は形を覆ふを取り食は軀を充すを取り、所に隨ひて遊至し、衣鉢と倶に行きて顧戀無し。雨勢、我等若し比丘の極めて足るを知るを見れば、則ち共に彼の比丘を愛敬し尊重し供養し宗奉し禮事す。(7)また次に雨勢、比丘常に念を行じ正念を成就し、久しく曾て習ひし所、久しく曾て聞きし所、恒に憶ひて忘れず。雨勢、我等若し比丘極めて正念有るを見れば、則ち共に彼の比丘を愛敬し尊重し供養し宗奉し禮事す。(8)また次に雨勢、比丘常に精進を行じ、惡不善を斷じて諸の善法を修し、恒に自ら意を起し專一堅固にして諸の善本の爲に方便を捨てず。雨勢、我等若し比丘極めて精懃するを見れば、則ち共に彼の

【五】このあたり原文に誤あるが如し。

の說く所何ぞ相應せざる。阿難向に是の如く說く、「一比丘の世尊と等しく等しきもの無く、亦一比丘の世尊の知見する所と爲り、如來・無所著・等正覺在[世の]時、この比丘我が般涅槃の後諸の比丘の依る所と爲らんと立つる所にして、謂く我等をして今依る所たらしむる者無し。亦一比丘の衆と共に和し集まりてこの比丘を拜して、世尊般涅槃の後諸の比丘の依る所爲りと[なし]、謂く我等をして今依る所たらしむる者無しと。阿難、何に因り何に緣りて今我依る所有りと說くや』。尊者阿難答へて曰く『雨勢、我等人に依らずして而も法に依る。雨勢、我等若し村邑に依りて遊行し、十五日に從解脫を說く時、集まりて一處に坐し、若し比丘有りて法を知れば、我等彼の比丘に我等が爲に法を說かんことを請ひ、若し彼の衆清淨なれば、我等一切歡喜して彼の比丘の所說を奉行し、若し彼の衆清淨ならざれば、法の說く所に隨ひて我等これを作さしむ』。摩竭陀の大臣雨勢白して曰く『阿難、汝等これを作さしむるに非ず、但法これを作さしむ。阿難、是の如く少法多法久しく住するを得べくば、是の如く阿難、等しく共に和合して諍はず、安隱にして一敎を同一にし、水乳を合一し、快樂にして遊行し、沙門瞿曇在[世の]時の如し』。摩竭陀の大臣雨勢また問ひて曰く『阿難、頗し尊敬すべき有りや』。尊者阿難答へて曰く『雨勢、尊敬すべき有り』。雨勢白して曰く『阿難、前後の說く所何ぞ相應せざる。阿難向に是の如く說く、一比丘の世尊と共に等しく等しきもの無く、亦一比丘の世尊在[世の]時、この比丘我が般涅槃の後諸の比丘の依る所と爲らんと立てたまふ所と爲り、謂く我等をして今依る所たらしむる者無し。亦一比丘の衆と共に和し集まりてこの比丘を拜して世尊般涅槃の後諸の比丘の依る所たりと[なし]、謂く我等をして今依る所たらしむる者無しと。阿難、汝何に因り何に緣りて今尊敬すべき有りと說くや』。尊者阿難答へて曰く『雨勢、世尊知見し、如來・無所著・等正覺[四]十法有りて而も尊敬すべしと說きたまひぬ。我等若し比丘この十法有るを見れば、則ち共に彼の比丘を愛敬し尊重し供養し宗奉し禮事す。云何が十と爲す。雨勢、

【四】十法あるを尊敬すべし。

と等しきもの有りやと』。摩竭陀の大臣雨勢また問ひて曰く『阿難、云何が彼に答ふるや』。尊者阿難答へて曰く『雨勢、都べて一比丘の世尊と等しく等しきもの無し』。摩竭陀の大臣雨勢また問ひて曰く『唯然り阿難、一比丘世尊と等しく等しきもの無し。頗し一比丘有り、沙門瞿曇在「世の」時立つる所と爲り、この比丘我が般涅槃の後諸の比丘の依る所と爲らんと「言ひ」、謂く汝等をして今依る所たらしむる「ものあり」や』。尊者阿難答へて曰く『雨勢、都べて一比丘の世尊の知見したまふ所と爲り、如來・無所著・等正覺在「世の」時、この比丘我が般涅槃の後、諸の比丘の依る所と爲らんと立てたまひし所にして、謂く我等をして今依る所たらしむる者無し』。摩竭陀の大臣雨勢、また問ひて曰く『阿難、唯然り。一比丘の沙門瞿曇と等しく等しきもの無く、亦一比丘の沙門瞿曇在「世の」時、この比丘我が般涅槃の後諸の比丘の依る所と爲らんと立つる所と爲り、謂く汝等をして今依る所たらしむる者無し。頗し一比丘有りて、衆と共に和し集まりてこの比丘を拜して世尊般涅槃の後諸の比丘の依る所たりと「なし」、謂く汝等をして今依る所たらしむる「ものあり」や』。尊者阿難答へて曰く『雨勢、亦一比丘の衆と共に和し集まりて、この比丘を拜して、世尊般涅槃の後諸の比丘の依る所たりと「なし」、謂く我等をして今依る所たらしむる者無し』。摩竭陀の大臣、雨勢また問ひて曰く『阿難唯然り。一比丘の沙門瞿曇と等しく等しきもの無く、亦一比丘の沙門瞿曇在「世の」時、この比丘我が般涅槃の後諸の比丘の依る所と爲らんと立つる所と爲り、謂く汝等をして今依る所たらしむる者無し。亦一比丘の衆と共に和し集まりてこの比丘を拜して、世尊般涅槃の後諸の比丘の依る所たりと「なし」、謂く汝等をして今依る所たらしむる者無し。阿難、若し爾れば汝等依る所無く、「而も」共に和合して諍はず、安隱にして一教を同一にし、水乳を合一し、快樂にして遊行し、沙門瞿曇在「世の」時の如きや』。尊者阿難告げて曰く『雨勢、汝この說を作し、我等依る所無しと言ふこと莫れ。所以者何。我等依る所有るのみ』。摩竭陀の大臣雨勢白して曰く『阿難、前後

巻の第三十六

※梵志品

百四十五、[一]瞿默目揵連經第四

我が聞きしこと是の如し。ある時佛般涅槃の後久しからずして尊者阿難、王舍城に遊びぬ。その時摩竭陀の[二]大臣雨勢王舍城を治めぬ。跋耆を防がんが爲の故なり。ここに於て摩竭陀の大臣雨勢[三]瞿默目揵連なる田作の人を遣して竹林加蘭哆園に往至せしめぬ。その時尊者阿難夜を過ぎて平旦衣を著け鉢を持し、乞食の爲の故に王舍城に入りぬ。ここに於て尊者阿難この念を作しぬ、且らく王舍城の乞食を置きて、我寧ろ瞿默目揵連なる田作の人の所に往詣すべしと。』ここに於て尊者阿難、瞿默目揵連なる田作の人の所に往詣しぬ。梵志瞿默目揵連遙かに尊者阿難の來るを見て卽ち坐より起ち、偏に著衣を袒ぎ叉手を尊者阿難に向けて白して曰く『善く來りぬ阿難、久しくここに來らず。この座に坐すべし』。尊者阿難卽ち彼の座に坐しぬ。梵志瞿默目揵連尊者阿難と共に相問訊し却きて一面に坐し白して曰く『阿難、問ふ所有らんと欲す。我が問を聽すや』。尊者阿難報へて曰く『目揵連、汝すなはち問ふべし。我聞きて當に思ふべし』。則便ち問ひて曰く『阿難、頗し一比丘の沙門瞿曇と等しきもの有りや』。尊者阿難梵志瞿默目揵連と共にこの事を論ぜる時、その時摩竭陀の大臣雨勢田作の人を慰勞し、梵志瞿默目揵連なる田作の人の所に往詣し、摩竭陀の大臣雨勢遙かに尊者阿難坐して梵志瞿默目揵連なる田作の人の中に在るを見て尊者阿難の所に往詣し共に相問訊し却きて一面に坐し、問ひて曰く『阿難、梵志瞿默目揵連と共に何事を論じ、何事を以ての故に共にここに會すや』。尊者阿難答へて曰く『雨勢、梵志瞿默目揵連我に問ふ、阿難、頗し一比丘沙門の瞿曇

※この三字削るべきを誤りて存したるなり。

【一】M. 108, Gopaka-moggallāna-sutta.

【二】三五卷「雨勢經」及び註を見よ。

【三】瞿默目揵連（Gopaka-moggallāna）。

とし。所以者何。瞿曇、彼の沈香は諸の根香に於て最上と爲すが故に。瞿曇、猶ほ諸の婆羅樹香[一七]、赤栴檀を第一と爲すがごとし。所以者何。瞿曇、赤栴檀は諸の婆羅樹香に於て最上と爲すが故に。瞿曇、猶ほ諸の水華、青蓮華を第一と爲すがごとし。所以者何。瞿曇、青蓮華は諸の水華に於て最上と爲すが故に。瞿曇、猶ほ諸の陸華、修摩那花を第一と爲すがごとし。所以者何。瞿曇、修摩那花は諸の陸花に於て最上と爲すが故に、瞿曇、猶ほ世中諸の有論士、沙門瞿曇を最も第一と爲すがごとし。所以者何。沙門瞿曇論士能く一切の外道異學を伏するが故に。世尊、我今自ら佛・法及び比丘衆に歸す。唯願はくは世尊、我を受けて優婆塞と爲したまへ。今日より始めて終身自ら歸し乃ち命盡くるに至らん』。佛說是の如し。尊數目揵連及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第三十五

【一七】婆羅樹香と樹心を取りて作りたる香をいふ、婆羅は Sāra なり。Sāla と混ずべからず。

長き流河を俠み、又清泉有るは彼盡く見盡く知るや』。算數目揵連答へて曰く『瞿曇、我都べて事無し。彼の王舍城の道有り、我現に在りて導師たるも、彼の第一の人我が教に隨はずして平正の道を捨て惡道より還り、若し王舍城外に好き園林有り、その地平正にして樓觀浴池あり、若干の華樹、長き流河を俠み、又清泉有るは彼盡く見ず亦知らざるのみ。彼の第二の人我が教に隨順して平正の道に從ひて展轉して王舍城に至るを得、若し王舍城外に好き園林有り、その地平正にして樓觀浴池あり、若干の華樹、長き流河を俠み、又清泉有るは、彼盡く見盡く知るのみ』。世尊告げて曰はく『是の如し目揵連、我亦事無し。彼の涅槃有り、涅槃の道有り、我導師と爲り、諸の比丘の爲に是の如く訓誨し、是の如く教訶するも、[或は]究竟涅槃を得、或は得ざる有り。目揵連、但各各自ら比丘の行ずる所に隨ふ。その時世尊すなはち彼の行を記して究竟して漏盡くと謂ふのみ』。算數目揵連白して曰く『瞿曇、我已に知る。瞿曇、我已に解す。瞿曇、猶ほ良地に娑羅林有るが如し。彼の中に娑羅林を守る人有り、明健にして懈らず、諸の娑羅の根、時を以て鋤もて掘り高きを平にし下きを塡め、糞沃もて漑灌してその時を失せず。若しその邊に穢惡の草生ずる有れば盡く拔きてこれを棄て、若し橫曲して調直ならざる者有れば盡く伐てこれを治し、若し極めて好き中直の樹有ればすなはち擁して養護し時に隨ひて鋤掘し、糞沃もて漑灌してその時を失せず。是の如くして良地の娑羅樹林轉た茂りて盛好なり。瞿曇、是の如く人有りて諛諂し欺誑して極めて〔一六〕庶幾はず、信無く懈怠にして念無く定無く、惡慧にして心狂ひ諸根掉亂し、戒を持すること寬緩にして廣く沙門[道]を修せず。瞿曇、是の如きの人事を共にすること能はず。所以者何。瞿曇、是の如き人は梵行を穢汚す。瞿曇、若しまた人有り、諛諂有らず亦欺誑せず、庶幾ひ信有り精進して懈らず、念有り定有り、亦智慧有り極めて戒を恭敬し、廣く沙門[道]を修す。瞿曇、是の如きの人能く事を共にす。所以者何。瞿曇、是の如き人は梵行を清淨にす。瞿曇、猶ほ諸の根香、沈香を第一と爲すがご

【一六】不庶幾(Anupekkhati)?期待・希望の意。

知り、亦彼の道を諳んず』。世尊問ひて曰はく『目揵連、若し[一四]人有り來りて彼の王を見んと欲して王舍城に至り、その人汝に問ふ「我王を見んと欲して王舍城に至る。算數目揵連、王舍城の處を知り彼の道徑を諳んじ、我に示語すべきやと。」汝彼の人に告げて曰く、「ここより東行して彼の某村に至り、某村より去りて當に某邑に至るべし。是の如く展轉して王舍城に至る。若し王舍城外に好き園林有り、その地平正にして樓觀浴池あり、若干の華樹、長き流河を俠み、又清泉有るを盡く見、盡く知らんと」。彼の人汝の語を聞き汝の教を受け已りて、ここより東行して須臾にして久しからずしてすなはち正道を捨て惡道より還り、若し王舍城外に好き園林有りてその地平正にして樓觀浴池あり、若干の華樹、長き流河を俠み、又清泉有るは、彼盡く見ず亦知らず。[一五]また人有り來りて彼の王を見んと欲して王舍城に至り、その人汝に問ふ「我王を見んと欲して王舍城に至る。算數目揵連、王舍城の處を知り彼の道徑を諳んじ、我に示語すべきやと」。汝彼の人に告げて曰く、「ここより東行して彼の某村に至り、某村より去りて當に某邑に至るべし。是の如く展轉して王舍城に至る。若し王舍城外に好き園林有りてその地平正にして樓觀浴池あり、若干の華樹、長き流河を俠み、又清泉有るを盡く見、盡く知らんと。彼の人汝の語を聞き汝の教を受け已りて、即ちここより東行して彼の某村に至り、某村より去りて某邑に至るを得、是の如く展轉して王舍城に至る。若し王舍城外に好き園林有り、その地平正にして樓觀浴池あり、若干の華樹、長き流河を俠み、又清泉有るは、盡く見盡く知る。目揵連、この中何に因り何に緣りて、彼の王舍城有り、王舍城の道有り、汝現に在りて導師たるに、彼の第一の人汝の教を受け、後に於て久しからずして平正の道を捨て惡道より還り、若し王舍城外に好き園林有り、その地平正にして樓觀浴池あり、若干の華樹、長き流河を俠み、又清泉有るは、彼盡く見ず亦知らざるや。彼の第二の人隨ひて汝の教を受け、平正の道に從ひて展轉して王舍城に至るを得、若し王舍城外に好き園林有り、その地平正にして樓觀浴池あり、若干の華樹、

【一四】第一の人來りて問ふ。
【一五】第二の人來りて問ふ。

故に、意根を守護して心中に貪伺・憂感・惡不善の法を生ぜず、彼に趣向するが故に、意根を守護すれば、如來また上りて教ふ、「比丘、汝來れ、[九]正に出入を知り、屈伸・低仰・儀容・庠序を善觀分別し、善く僧伽梨及び諸の衣鉢を著け、行住・坐臥・眠寤・語默、皆正にこれを知れ」と。目揵連、若し比丘正に出入を知り、屈伸・低仰・儀容・庠序を善觀分別し、善く僧伽梨及び諸の衣鉢を著け、行住・坐臥・眠寤・語默、皆正に知れば、如來また上りて教ふ、「比丘、汝來れ、[一〇]獨り住みて遠離し無事處に在り、或は樹下・空・安靜處・山巖・石室・露地・穰積に至り、或は林中に至り、或は塚間に住在し、汝已に無事處に在り、或は樹下・空・安靜處に至りて尼師檀を敷きて結加趺坐し正身正願し反念向はず、貪伺を斷除して心諍有ること無く、他の財物諸の生活の具を見て貪伺を起して我が得たらしめんと欲すること莫れ。汝貪伺に於てその心を淨除し、是の如く瞋恚・睡眠・調悔[亦然り]。疑を斷じ惑を度し、諸の善法に於て猶豫有ること無く、汝疑惑に於てその心を淨除せよ。汝この[一一]五蓋・心穢・慧羸を斷じ、欲を離れ惡不善の法を離れ、[乃至]第四禪を得て成就して遊ぶに至れ」と。目揵連、若し比丘欲を離れ惡不善の法を離れ、[乃至]第四禪を得て成就して遊ぶに至れば、目揵連、如來諸の年少の比丘の爲に多く益する所有り、謂く訓誨教訶す。目揵連、若し比丘長老・上尊・舊學の梵行[者]有れば如來また上りて教ふ、「謂く[一二]究竟し訖れば一切の漏盡くと」。算數目揵連即ちまた問ひて曰く『沙門瞿曇、一切の弟子是の如く訓誨し是の如く教訶すれば、盡く究竟智を得て必ず涅槃するや』。世尊答へて曰はく『目揵連、[一三]一向に得ず。或は得る者或は得ざる者有り』。算數目揵連また更に問ひて曰く『瞿曇、この中何に因り何に縁りて、涅槃有り涅槃の道有り、沙門瞿曇、現に在りて導師たるに、或は比丘有りて是の如く訓誨し是の如く教訶すれば、究竟涅槃を得、或はまた得ざるや』。世尊告げて曰はく『目揵連、我還つて汝に問はん。解する所に隨ひて答へよ。目揵連、意に於て云何。汝王舍城の處を知りて彼の道を諳んずるや』。算數目揵連答へて曰く『唯然り。我王舍城の處を

【九】正知正念を有て。

【一〇】遠離獨住禪觀せよ。

【一一】五蓋(Pañca nīvaraṇā)、心穢(Cetaso upakkilesā)、慧羸(Paññāya dubbalīkaraṇā)。

【一二】究竟して漏盡智を得よ。

【一三】皆殘らず涅槃を得るわけではない。

成し訖る。沙門瞿曇、この法律中云何が漸く次第に作し至りて成就し訖るや』。世尊告げて曰はく『目揵連、若し正說有れば漸く次第に作し乃至成し訖る。目揵連、我が法律中謂く正說あり。所以者何。目揵連、我この法律に於て漸く次第に作し至りて成就し訖る。目揵連、若し年少の比丘初めて來りて道を學び始めて法律に入れば、如來先づ敎ふ、「比丘、[五]汝來れ、身、命を護りて清淨に、口・意、命を護りて清淨にせよと」。目揵連、若し比丘身、命を護りて清淨に、口・意、命を護りて清淨なれば、如來また上りて敎ふ、「比丘、汝來れ、[六]內身を觀ずること身の如く、覺・心・法を觀ずること[覺・心・]法の如くなるに至れと。」目揵連、若し比丘內身を觀ずること身の如く、覺・心・法を觀ずること[覺・心・]法の如くなるに至れば、如來また上りて敎ふ、「比丘、汝來れ、內身を觀ずること身の如くにして、欲相應の念を念ずること莫れ、覺・心・法を觀ずること[覺・心・]法の如くなるに至りて非法相應の念を念ずること莫れと。」目揵連、若し比丘內身を觀ずること身の如くにして欲相應の念を念ぜず、覺・心・法を觀ずること[覺・心・]法の如くなるに至りて非法相應の念を念ぜざれば、如來また上りて敎ふ、「比丘、[七]汝來れ、諸根を守護し常に閉塞を念じ明達を念欲し、念心を守護して而も成就するを得、恒に正知を起して、若し眼、色を見るも然も相を受けず、亦色を味はず。謂く忿諍の故に。眼根を守護して心中に[八]貪伺・憂慼・惡不善の法を生ぜざれ。彼に趣向するが故に、眼根を守護せよ。是の如く耳・鼻・舌・身[亦然り]。若し意、法を知るも然も相を受けず、亦法を味はず。謂く忿諍の故に。意根を守護して心中に貪伺・憂慼・惡不善の法を生ぜざれ。彼に趣向するが故に、意根を守護せよと。」目揵連、若し比丘諸根を守護し常に閉塞を念じ明達を念欲し、念心を守護して、而も成就するを得、恒に正知を起して、若し眼、色を見るも然も相を受けず、亦色を味はず、謂く忿諍の故に、眼根を守護して心中に貪伺・憂慼・惡不善の法を生ぜず、彼に趣向するが故に、眼根を守護し、是の如く耳・鼻・舌・身[亦然り]。若し意、法を知るも然も相を受けず、亦法を味はず、謂く忿諍の

【五】命にかけても身・口・意の三業を清淨にせよ。

【六】四念處なり。身(Kāya)、覺(Vedanā 受)、心(Citta)、法(Dhamma)。

【七】六根門を護れ。

【八】貪伺(Abhijjhā)、憂慼(Domanassa)、惡不善法(Pāpakā Akusalā dhammā)。

この跡を行じ已りて諸漏已に盡きて無漏を得、心解脱し慧解脱し、自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊び、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ更に有を受けずと如眞を知り、我、他の爲に說き、他、他の爲に說き、是の如く展轉すること無量百千なり。摩納、この故に汝善くこの論に達す。汝當に是の如く善く受け善く持すべし。所以者何、この所說の義應に當に是の如くなるべし』。ここに於て傷歌邏摩納白して曰く『世尊、我已に知る。善逝、我已に解す。世尊、我今自ら佛、法及び比丘衆に歸す。唯願はくは世尊我を受けて優婆塞と爲したまへ。今日より始めて終身自ら歸し乃ち命盡くるに至らん』。佛說是の如し。傷歌邏摩納、尊者阿難及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百四十四、[一]算數目揵連經第三

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衛國に遊び[二]東園鹿子母堂に在しぬ。その時[三]算數梵志目揵連中後に彷徉して佛の所に往詣し、共に相問訊し卻きて一面に坐し白して曰く『瞿曇、我問ふ所有らんと欲す。聽きて乃ち敢て陳ぶるや』。世尊告げて曰はく『目揵連、汝の問ふ所を恣にせよ。自ら疑難すること莫れ』。算數目揵連則便ち問ひて曰く『瞿曇、この鹿子母堂漸く次第に作し轉た後に成り訖る。瞿曇、この鹿子母堂の[四]棚梯、初め一隥を昇り後に二・三・四隥を昇る。瞿曇、是の如くこの鹿子母堂漸く次第に上る。瞿曇、この御象者亦漸く次第に調御し成し訖る。謂く鉤に因るが故に。瞿曇、この御馬者亦漸く次第に調御し成し訖る。謂く鞁に因るが故に。瞿曇、この刹利亦漸く次第に至りて成就し訖る。謂く弓箭を捉ふるに因るが故に。瞿曇、この諸の梵志亦漸く次第に至りて成就し訖る。謂く經書を學ぶに因るが故に。瞿曇、我等算數を學び算數を以て存命し、亦漸く次第に至りて成就し訖る。若し弟子有り、或は男或は女にして始め一一の數を敎へ、二二・三三・十百千萬と次第に上に至る。瞿曇、是の如く我等算數を學び算數を以て存命し、漸く次第に至りて

【一】 M. 107, Gaṇaka-moggallāna-sutta. 法炬譯「數經」。
【二】 東園鹿子母堂(Pubbārāma Migāramātupāsāda)。
【三】 算數梵志目揵連(Gaṇaka-moggallāna)。
【四】 梯子のこと。

り、彼他の爲に說き、他、他の爲に說き、是の如く展轉すること無量百千なり。摩納、これを敎訓示現と謂ふ。この三示現、何者の示現、最上・最妙・最勝なりや』。傷歌邏摩納答へて曰く『瞿曇、若し[八]沙門梵志有りて大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神有り、如意足に於て心自在を得、乃ち身梵天に至るに及ぶは、瞿曇、これ自ら作し自ら有り自らその報を受く。瞿曇、諸の示現に於てこは大法を示現す。瞿曇、若し沙門梵志有りて他の相を以て他の意を占し乃至心心所有法を占するは、瞿曇、これ亦自ら作し自ら有り自らその報を受く。瞿曇、諸の示現に於てこは亦大法を示現す。瞿曇、若し沙門梵志有りて自ら是の如き道、是の如き跡を行じ、この道を行じこの跡を行じ已りて諸漏已に盡きて無漏を得、心解脫し慧解脫し、自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊び、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ更に有を受けずと如眞を知り、彼他の爲に說き、他他の爲に說き、是の如く展轉すること無量百千なるは、瞿曇、三示現に於てこの示現最上・最妙・最勝なり』。世尊また傷歌邏に問ひて曰はく『三示現に於て何れの示現を稱歎するや』。傷歌邏摩納答へて曰く『瞿曇、三示現に於て我[九]沙門瞿曇を稱歎す。所以者何。沙門瞿曇大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神有り、心自在を得乃ち身梵天に至るに及ぶ。沙門瞿曇他の相を以て他の意を占し乃至心心所有法を占す。沙門瞿曇是の如き道、是の如き跡を示現し、この道を行じこの跡を行じ已りて諸漏已に盡きて無漏を得、心解脫し慧解脫し自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊び、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ更に有を受けずと如眞を知り、沙門瞿曇他の爲に說き、他、他の爲に說き、是の如く展轉すること無量百千なり。瞿曇この故に三示現に於て我沙門瞿曇を稱歎す』。ここに於て世尊告げて曰はく『摩納、汝善くこの論に達す。所以者何。我大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神有り、如意足に於て心自在を得乃ち身梵天に至るに及ぶ。摩納、我他の相を以て他の意を占し乃至心心所有法を占す。摩納、我自ら是の如き道、是の如き跡を行じ、この道を行じ

【八】如意足示現最上最妙最勝なり。

【九】沙門瞿曇を稱歎す。

聞くを以て而も他の意を占してこの意有り、この意の如しとすれば實にこの意有り。無量の占、少からざる占、彼の一切眞諦にして而も虚設有ること無く、他の相を以て他の意を占せず、亦天の聲及び非人の聲を聞きて他の意を占せず、但他の念、他の思、他の說を以てし、聲を聞き已りて他の意を占してこの意有り、この意の如しとすれば實にこの意有り。無量の占少からざる占、彼の一切眞諦にして而も虚設有ること無く、他の相を以て他の意を占せず、亦天の聲及び非人の聲を聞くを以て他の意を占せず、亦他の念他の思他の說を以てし聲を聞き已りて他の意を占せず、但他の無[六]覺無觀定に入るを見るを以て、見已りてこの念を作す、「この賢者の如く念ぜず思はず、意の願ふ所の如し。彼の賢者この定より寤めて是の如く念ぜんと。」彼この定より寤めて卽ち是の如く是の如く念ず。彼亦過去を占し亦未來を占し亦現在を占し、久しく作す所久しく說く所、安靜處を占して安靜處に住し、亦心心所有法を占するに至る。摩納、これを占念示現と謂ふ。摩納、云何が敎訓示現[七]なる。一沙門梵志有りて自ら是の如き道是の如き跡を行じ、この道を行じこの跡を行じ已りて諸漏已に盡きて無漏を得、心解脫し慧解脫し、自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊び、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ更に有を受けずと如眞を知り、彼他の爲に、「我自ら是の如き道是の如き跡を行じ、この道を行じこの跡を行じ已りて諸漏已に盡きて無漏を得、心解脫し慧解脫し、自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊び、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ更に有を受けずと如眞を知りぬ。汝等共に來りて亦自ら是の如き道是の如き跡を行じ、この道を行じこの跡を行じ已れば、諸漏已に盡きて無漏を得、心解脫し慧解脫し、自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊び、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ更に有を受けずと如眞を知らんと」說く。彼亦自ら是の如き道是の如き跡を行じ、この道を行じこの跡を行じ已りて諸漏已に盡きて無漏を得、心解脫し慧解脫し、自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊び、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ更に有を受けずと如眞を知

【六】無覺無觀定(Avitakka-avicāra-samādhi)。

【七】敎訓示現(Anusāsani-pāṭihāriya)。

を得、心解脫し慧解脫し自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊び、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ更に有を受けずと如眞を知りぬ。汝等共に來りて亦自ら是の如き道是の如き跡を行じ、この道を行じこの跡を行じ已らば諸漏已に盡きて無漏を得、心解脫し慧解脫し自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊び、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ更に有を受けずと如眞を知らんと說き、彼亦自ら是の如き道是の如き跡を行じ、この道を行じこの跡を行じ已りて諸漏已に盡きて無漏を得、心解脫し慧解脫し自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊び、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ更に有を受けずと如眞を知り、彼他の爲に說き、他、他の爲に說き、是の如く展轉して無量百千ならば、摩納の意に於て云何。我が弟子族よりして鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして學道し、一福跡を行じて無量の福跡を行ぜざるや。學道に因るが故に』傷歌邏摩納答へて曰く『瞿曇、我沙門瞿曇の說く所の義を解する如くば、彼の沙門瞿曇の弟子族よりして鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして學道し、無量の福跡を行じて一福跡を行ぜず。學道に因るが故に』。世尊また傷歌邏に告げて曰はく『[三]三示現有り。如意足示現・占念示現・敎訓示現なり。摩納、云何が[四]如意足示現なる。一沙門梵志有りて大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神有り、如意足に於て心自在を得、無量の如意足の功德を行じ、謂く一を分ちて衆と爲し衆を合して一と爲し、一は則ち一に住め、知有り見有り、石壁を礙へず、猶ほ空を行くが如く、地に沒すること水の如く、水を履ふこと地の如く、結加趺坐して虛空に上昇すること猶ほ鳥の翔くるが如く、今この日月大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神有り、手を以て身を捫摸して梵天に至る。摩納、これを如意足示現と謂ふ。摩納、云何が[五]占念示現なる。一沙門梵志有りて他の相を以て他の意を占してこの意有りこの意の如しとすれば、實にこの意有り、無量の占、少からざる占、彼の一切眞諦にして而も虛設有ること無く、他の相を以て他の意を占せざれば、但天の聲及び非人の聲を

【三】三示現(Tīṇi Pāṭihāriyāni)。
【四】如意足示現(Iddhipāṭihāriya)。
【五】占念示現(Ādesanāpāṭihāriya)。

故に。沙門瞿曇の弟子族よりして鬚髪を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして學道し、自ら調御し自ら息止し自ら滅訖す。是の如く沙門瞿曇の弟子族よりするもの一福跡を行じて無量の福跡を行ぜず。學道に因るが故に』。その時尊者阿難拂を執りて佛に侍しぬ。ここに於て尊者阿難問ひて曰く『摩納、この二道跡、何者が最上・最妙・最勝なりや』。傷歌邏摩納語げて曰く『阿難、沙門瞿曇及び阿難、我俱に恭敬し尊重し奉祠す』。尊者阿難また語げて曰く『摩納、我汝に誰を恭敬し尊重し奉祠するやを問はず。我但汝にこの二道跡、何者が最上・最妙・最勝なりやを問ふのみ』。尊者阿難再び三びに至りて問ひて曰く『摩納、この二道跡何者が最上・最妙・最勝なりや』。傷歌邏摩納亦再び三たび語げて曰く『阿難、沙門瞿曇及び阿難、我俱に恭敬し尊重し奉祠す』。尊者阿難また語げて曰く『摩納、我汝に誰を恭敬し尊重し奉祠するやを問はず。我但汝にこの二道跡、何者が最上・最妙・最勝なりやを問ふのみ』。ここに於て世尊すなはちこの念を作したまひぬ『この傷歌邏摩納、阿難の爲に屈せらる。我寧ろ彼を救ふべし』。世尊知り已りて告げて曰はく『摩納、昔日王及び群臣普く集まり大に會して共に何事を論じ、何事を以ての故に共に集會せるや』。傷歌邏摩納答へて曰く『瞿曇、昔日王及び群臣普く集まり大に會して共に此の如き事を論じぬ、「何に因り何に緣りて昔沙門瞿曇少く戒を施設し、然も諸の比丘道を得る者多く、何に因り何に緣りて今沙門瞿曇多く戒を施設し、然も諸の比丘道を得るもの少きやと。」瞿曇、昔日王及び群臣普く集まり大に會して共にこの事を論じ、この事を以ての故に共に集會せるのみ』。その時世尊告げて曰はく『摩納、我今汝に問はん。解する所に隨ひて答へよ。意に於て云何。若使一沙門梵志有りて自ら是の如き道、是の如き跡を行じ、この道を行じこの跡を行じ已りて諸漏已に盡きて無漏を得、心解脫し慧解脫し自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊び、生已に盡き梵行已に立ち、所作已に辨じ更に有を受けずと如眞を知り、彼他の爲に、我自ら是の如き道是の如き跡を行じ、この道を行じこの跡を行じ已りて諸漏已に盡きて無漏

く『今汝等が爲に〔三〕六慰勞法を說かん。汝等諦かに聽け、善くこれを思念せよ』。時に諸の比丘白して曰く『唯然り』。佛言はく『云何が六と爲す。(1)慈身業を以て諸の梵行に向ふはこれ慰勞の法、愛法樂法にして愛せしめ重んぜしめ奉せしめ敬はしめ修せしめ攝せしめ、沙門を得、一心を得、精進を得、涅槃を得。是の如く(2)慈口業・(3)慈意業〔亦然り〕。(4)若し法利有れば如法に利を得、自ら飯食する所鉢中に在るに至り、是の如き利分ちて諸の梵行に布施するは、これ慰勞法、愛法樂報にして愛せしめ重んぜしめ奉せしめ敬はしめ修せしめ攝せしめ、沙門を得、一心を得、精進を得、涅槃を得。(5)若し戒有りて缺かず穿たず穢無く黑無く、地の如く他に隨はず、聖に稱譽せられ具さに善く受持し、是の如き戒分ちて諸の梵行に布施するは、これ慰勞の法、愛法・樂法にして愛せしめ重んぜしめ奉せしめ敬せしめ修せしめ攝せしめ、沙門を得、一心を得・精進を得、涅槃を得。(6)若しこの聖の出要を見る有りて明かに了り深く達して能く正しく苦を盡し、是の如き見分ちて諸の梵行に布施するは、これ慰勞の法、愛法樂法にして愛せしめ重んぜしめ奉せしめ敬はしめ修せしめ、攝せしめ、沙門を得、一心を得、精進を得、涅槃を得。我向に言ひし所の六慰勞の法はこれに因るが故に說く』。佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百四十三、〔一〕傷歌邏經第二

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時〔二〕傷歌邏摩納中後に彷徉して佛の所に往詣し、共に相問訊し卻きて一面に坐し白して曰く『瞿曇、我問ふ所有らんと欲す。聽きて乃ち敢て陳ぶるや』。世尊告げて曰はく『摩納、若し疑有らば汝の問ふ所を恣にせよ』。傷歌邏摩納即便ち問ひて曰く『瞿曇、梵志如法に財物を行乞し、或は自ら齋を作り或は齋を作らしむ。瞿曇、若し自ら齋を作り齋を作らしむれば、彼の一切無量の福跡を行ず。齋に因るを以ての

【三】六慰勞法。

【一】A. 1. 168.

【二】傷歌邏摩納(Saṅgārava Māṇava)。

この七不衰の法を行じ受持して犯さざれば、比丘必ず勝れて則ち法衰へず』。世尊また諸の比丘に告げて曰はく『我汝等が爲に更に[一二]七不衰の法を說かん。汝等諦かに聽け、善くこれを思念せよ』。時に諸の比丘白して曰く『唯然り』。佛言はく『云何が七と爲す。若し比丘信財・戒財・慚財・愧財・博聞財・施財を成就し慧財を成就すれば、比丘必ず勝れて則ち法衰へず。若し比丘この七不衰の法を行じ受持して犯さざれば、比丘必ず勝れて則ち法衰へず』。世尊また諸の比丘に告げて曰はく『我汝等が爲に更に[一三]七不衰の法を說かん。汝等諦かに聽け、善くこれを思念せよ』。時に諸の比丘白して曰く『唯然り』。佛言はく『云何が七と爲す。若し比丘信力・精進力・慚力・愧力・念力・定力を成就し慧力を成就すれば、比丘必ず勝れて則ち法衰へず。若し比丘この七不衰の法を行じ受持して犯さざれば、比丘必ず勝れて則ち法衰へず』。世尊また諸の比丘に告げて曰はく『我汝等が爲に更に[一四]七不衰の法を說かん。汝等諦かに聽け、善くこれを思念せよ』。時に諸の比丘白して曰く『唯然り』。佛言はく『云何が七と爲す。若し比丘念覺支の捨離に依り無欲に依り滅盡に依り出要に趣向するを修し擇法・精進・喜・息・定［亦然り］。捨覺支の捨離に依り無欲に依り滅盡に依り出要に趣向するを修すれば、比丘必ず勝れて則ち法衰へず。若し比丘この七不衰の法を行じ受持して犯さざれば、比丘必ず勝れて則ち法衰へず』。世尊また諸の比丘に告げて曰はく『我汝等が爲に更に[一五]七不衰の法を說かん。汝等諦かに聽け、善くこれを思念せよ』。時に諸の比丘白して曰く『唯然り』。佛言はく『云何が七と爲す。(1)若し比丘應に[一六]面前律を與ふべきは面前律を與へ、(2)應に[一七]憶律を與ふべきは憶律を與へ、應に[一八]不癡律を與ふべきは不癡律を與へ、應に[一九]自發露を與ふべきは自發露を與へ、應に[二〇]居を與ふべきは居を與へ、應に[二一]展轉を與ふべきは展轉を與へ、衆中諍を起し當に以て[二二]糞掃を棄つるが如く諍を止むべきは法もてこれを止むれば、比丘必ず勝れて則ち法衰へず。若し比丘この七不衰の法を行じ受持して犯さざれば、比丘必ず勝れて則ち法衰へず。世尊また諸の比丘に告げて曰は

【一二】第四の七不衰の法。
【一三】第五の七不衰の法。
【一四】第六の七不衰の法。七菩提分法。
【一五】第七の七不衰の法。
【一六】面前律(Sammukhāvinaya)。
【一七】憶律(Patisāraniya)。
【一八】不癡律(Amūḷhavinaya)。
【一九】自發露(Tajjaniya)。
【二〇】居(Nissaya)。
【二一】展轉(Pabbājaniya)。
【二二】如棄糞掃(Ukkhepaniya)。

し比丘、この未來の有愛喜欲共に倶に愛樂し彼彼起る有るも隨はざれば、比丘必ず勝れて則ち法衰へず。(5)若し比丘長老上尊倶に梵行を學する有り、比丘悉く共に宗敬し恭奉し供養し、彼より教を聞きて則ち受くれば、比丘必ず勝れて則ち法衰へず。(6)若し比丘無事處・山林・高巖に有りて閑居し靜處寂として音聲無く、遠離して惡無く、人民有ること無く、隨順して宴坐し樂しみ住して離れざれば、比丘必ず勝れて則ち法衰へず。(7)若し比丘悉く共に諸の梵行者を擁護し至つて重んじ、愛敬し、常に未だ來らざる諸の梵行者を願ひて而も來らしめんと欲し、既に已に來れるは恒に久しく住するを樂ひ、常に衣被・飲食・床榻・湯藥、諸の生活の具を乏しからざらしむれば、比丘必ず勝れて則ち法衰へず。若し比丘この七不衰の法を行じ受持して犯さざれば、比丘必ず勝れて則ち法衰へず』。ここに於て世尊また諸の比丘に告げて曰はく『我汝等が爲に更に〔一〇〕七不衰の法を說かん。汝等諦かに聽け、善くこれを思念せよ』。時に諸の比丘白して曰く『唯然り』。佛言はく『云何が七と爲す。(1)若し比丘師を尊び恭敬し極重し供養し奉事すれば、比丘必ず勝れて則ち法衰へず。(2)―(7)若し比丘、法・衆・戒・不放逸・供給・定を恭敬し極重し供養し奉事すれば、比丘必ず勝れて則ち法衰へず。若し比丘この七不衰の法を行じ受持して犯さざれば、比丘必ず勝れて則ち法衰へず』。世尊また諸の比丘に告げて曰はく『我汝等が爲に更に〔一一〕七不衰の法を說かん。汝等諦かに聽け、善くこれを思念せよ』。時に諸の比丘白して曰く『唯然り』。佛言はく『云何が七と爲す。(1)若し比丘業を行ぜず業を樂まず業を習はざれば、比丘必ず勝れて則ち法衰へず。(2)諍說を行ぜず諍說を樂しまず諍說を習はざれば、(3)聚會を行ぜず聚會を樂しまず聚會を習はざれば、(4)雜合を行ぜず雜合を樂しまず雜合を習はざれば、(5)睡眠を行ぜず睡眠を樂しまず睡眠を習はざれば、(6)利の爲にせず譽の爲にせず他人の爲に梵行を行ぜざれば、(7)暫爾の爲にせず德勝らんが爲にせず、その中間に於て方便を捨て德をして勝らしむれば、比丘必ず勝れて則ち法衰へず。若し比丘

【一〇】第二の七不衰の法。

【一一】第三の七不衰の法。

て大いに愛敬し、常に未だ來らざる阿羅訶者を願ひて而も來らしめんと欲し、既に已に來れるは恒に久しく住せんことを樂ひ、常に衣被・飮食・床榻・湯藥、諸の生活の具を乏しからざらしむれば、跋耆必ず勝ちて則ち衰へずと爲す。雨勢、跋耆この七不衰の法を行ず。これこの七不衰の法を受持すれば、跋耆必ず勝ちて則ち衰へずと爲す』。ここに於て大臣雨勢卽ち坐より起ち偏に著衣を袒ぎ叉手を佛に向け白して曰く『瞿曇、設し彼の跋耆一不衰の法を成就すれば、摩竭陀王、未生怨鞞陀提子彼を伏する能はず。況やまた七不衰の法を具するをや。瞿曇、我國事多し。退きて還歸せんことを請ふ』。世尊報へて曰はく『去らんと欲せば意に隨へ』。ここに於て大臣雨勢、佛の所說を聞きて則ち善く受持し、起ちて世尊を遶ること三匝して而も去りぬ。大臣雨勢去りて後久しからず。ここに於て世尊迴顧して告げて曰はく『阿難、若し比丘有りて鷲巖山の處處に依りて住する者は、一切に宣令して盡く講堂に集め、一切集まり已らばすなはち來りて我に白せ』。尊者阿難卽ち佛の敎を受けて『唯然り世尊』。この時尊者阿難すなはち行きて宣令し、若し比丘有りて鷲巖山の處處に住する者は、今一切をして盡く講堂に集まらしめ、一切集まり已りて、還りて佛の所に詣り稽首して禮を作し却きて一面に住し白して曰く『世尊、我已に宣令し、若し比丘有りて鷲巖山の處處に依りて住する者は、悉く一切をして盡く講堂に集まらしめ、今皆已に集まりぬ。唯願はくは世尊、自らその時を知りたまへ』。ここに於て世尊尊者阿難を將ゐて講堂に往詣し、比丘衆の前に於て座を敷きて而も坐し、諸の比丘に告げたまはく『今汝が爲に[九]七不衰の法を說かん。汝等諦かに聽け、善くこれを思念せよ』。時に諸の比丘白して曰く『唯然り』。佛言はく『云何が七と爲す。(1)若し比丘數數集會し多く衆集すれば、比丘必ず勝れて則ち法衰へず。(2)若し比丘共に齊しく集會し倶に衆事を作し共に倶に起たば、比丘必ず勝れて則ち法衰へず。(3)若し比丘未だ施設せざる事は更に施設せず、本施設せし所は而も改易せず、我が所說の戒を善く奉行すれば、比丘必ず勝れて則ち法衰へず。(4)若

【九】比丘の七不衰の法。

ば、跋耆必ず勝ちて則ち衰へずと爲す』。世尊また尊者阿難に問ひたまはく『(4)頗し跋耆力勢を以て而も他の婦、他の童女を犯さざるを聞くや』。尊者阿難白して曰く『世尊、我跋耆力勢を以て而も他の婦、他の童女を犯さざるを聞くなり』。世尊また大臣雨勢に告げたまはく『若し彼の跋耆力勢を以て而も他の婦他の童女を犯さざれば、跋耆必ず勝ちて則ち衰へずと爲す』。世尊また尊者阿難に問ひたまはく『(5)頗し跋耆、名徳尊重の者有りて跋耆悉く共に宗敬し恭奉し供養し、彼より教を聞きて則ち受くるを聞くや』。尊者阿難白して曰く『世尊、我跋耆、名徳尊重の者有りて跋耆悉く共に宗敬し恭奉し供養し、彼より教を聞きて則ち受くるを聞く』。世尊また大臣雨勢に告げたまはく『(6)若し彼の跋耆、名徳尊重の者有りて跋耆悉く共に宗敬し恭奉し供養し、彼より教を聞きて則ち受くれば、跋耆必ず勝ちて則ち衰へずと爲す』。世尊また尊者阿難に問ひたまはく『頗し跋耆所有の舊き寺、跋耆悉く共に修飾し遵奉し供養し禮事し本の所施常に作して廢せず、本の所爲は減損せざるを聞くや』。尊者阿難白して曰く『世尊、我跋耆所有の舊き寺、跋耆悉く共に修飾し遵奉し供養し禮事し、本の所施常に作して廢せず、本の所爲は減損せざるを聞くなり』。世尊また大臣雨勢に告げたまはく『若し彼の跋耆所有の舊き寺、跋耆悉く共に修飾し遵奉し供養し禮事し、本の所施常に作して廢せず、本の所爲は減損せざれば、跋耆必ず勝ちて則ち衰へずと爲す』。また世尊尊者阿難に問ひたまはく『(7)頗し跋耆悉く共に諸の阿羅訶を擁護し極めて大いに愛敬し、常に未だ來らざる阿羅訶者を願ひて而も來らしめんと欲し、既に已に來れるは恒に久しく住せんことを樂ひ、常に衣被・飲食・床榻・湯藥、諸の生活の具を乏しからざらしむるを聞くや』。尊者阿難白して曰く『世尊、我跋耆悉く共に諸の阿羅訶を擁護し極めて大いに愛敬し、常に未だ來らざる阿羅訶者を願ひて而も來らしめんと欲し、既に已に來れるは恒に久しく住せんことを樂ひ、常に衣被・飲食・床榻・湯藥、諸の生活の具を乏しからさらしむるを聞く』。世尊また大臣雨勢に告げたまはく『若し彼の跋耆悉く共に諸の阿羅訶を擁護し極め

【八】寺(Cetiya)。支提・制多・塔・廟。

陀提子、跋耆と相憎み、常に眷屬に在りて數ばこの說を作す、「跋耆國の人大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神有り。我當に跋耆人種を斷滅し跋耆を破壞し跋耆の人をして無量の厄に遭はしむべしと。」沙門瞿曇何ぞ所說あるべきや』。世尊聞き已りて告げて曰はく『雨勢、我昔曾て跋耆國に遊びき。彼の國に寺有り、[六]遮梨邏と名づく。雨勢、その時我跋耆國の人の爲に[七]七不衰の法を說きぬ。跋耆國の人則ち能く七不衰の法を受け行ず。雨勢、若し跋耆國の人七不衰の法を行じて而も犯さざれば、跋耆必ず勝ちて則ち衰へずと爲す』。大臣雨勢世尊に白して曰く『沙門瞿曇、この事を略說し、廣く分別せず。我等この義を解するを得る能はず。願はくは沙門瞿曇、廣く分別して說き、當に我等をしてこの義を知るを得しむべし』。世尊告げて曰はく『雨勢、諦かに聽け、善くこれを思念せよ。我當に汝が爲に廣くこの義を說くべし』。大臣雨勢敎を受けて而も聽きぬ。この時尊者阿難拂を執りて佛に侍しぬ。世尊迴顧して問ひて曰はく『阿難、(1)頗し跋耆數々集會し多く聚集するを聞くや』。尊者阿難白して曰く『世尊、我跋耆數々集會し多く聚集するを聞くなり』。世尊卽ち大臣雨勢に告げたまはく『若し彼の跋耆數々集會し多く聚集すれば、跋耆必ず勝ちて卽ち衰へずと爲す』。世尊また尊者阿難に問ひたまはく『(2)頗し跋耆共に俱に集會し俱に跋耆の事を作し共に俱に起つを聞くや』。尊者阿難白して曰く『世尊、我跋耆共に俱に集會し俱に跋耆の事を作し共に俱に起つを聞くなり。』世尊また大臣雨勢に告げたまはく『若し彼の跋耆共に俱に集會し俱に跋耆の事を作し共に俱に起たば、跋耆必ず勝ちて則ち衰へずと爲す』。世尊また尊者阿難に問ひたまはく『(3)頗し跋耆未だ施設せざる者は更に施設せず、本施設せし所は而も改易せず、舊き跋耆の法善く奉行するを聞くや』。尊者阿難白して曰く『世尊、我跋耆未だ施設せざる者は更に施設せず、本施設せし所は而も改易せず、舊き跋耆の法善く奉行するを聞くなり』。世尊また大臣雨勢に告げたまはく『若し彼の跋耆未だ施設せざる者は更に施設せず、本施設せし所は而も改易せず、舊き跋耆の法善く奉行すれ

【六】遮梨邏(Cāpāla-cetiya)。遮波羅支提。
【七】七不衰法(Satta aparihāniya-dhammā)。

卷の第三十五

梵志品第二（一十經あり）

雨勢・〔傷〕歌邏・〔算〕數〔目揵連〕・瞿默〔目揵連〕・象跡喩・聞德・何苦・〔何〕欲・鬱瘦〔歌邏〕、阿攝惒なり。

百四十二、[1]雨勢經第一

我が聞きしこと是の如し。ある時佛王舍城に遊び　[2]鷲巖山中に在しぬ。その時摩竭陀王　[3]未生怨鞞陀提子、[4]跋耆と相憎み、常に眷屬に在りて數ばこの說を作しぬ『跋耆國の人大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神有り。我當に跋耆人種を斷滅し跋耆を破壞し、跋耆の人をして無量の厄に遭はしむべし』。ここに於て摩竭陀王、未生怨鞞陀提子世尊王舍城に遊び鷲巖山中に在すと聞き、すなはち大臣　[5]雨勢に告げて曰く『我沙門瞿曇王舍城に遊び、鷲巖山中に在りと聞く。雨勢、汝沙門瞿曇の所に往至し、汝我が名を持ちて、聖體安快無病にして氣力常の如きやを問訊し、當にこの語を作すべし、「瞿曇、摩竭陀王、未生怨鞞陀提子、聖體安快無病にして氣力常の如きやを問訊す。瞿曇、摩竭陀王、未生怨鞞陀提子、跋耆と相憎み、常に眷屬に在りて數ばこの說を作す、跋耆國の人大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神有り。我當に跋耆人種を斷滅し、跋耆を破壞し、跋耆の人をして無量の厄に遭はしむべしと」。沙門瞿曇、當に何ぞ所說あるべしと」雨勢、若し沙門瞿曇所說有らば、汝善く受持せよ。所以者何。是の如きの人終に妄說せず』。大臣雨勢王の敎を受け已りて最好の乘ものに乘りて五百乘と俱に王舍城を出で、卽便ち鷲巖山中に往詣し、鷲巖山に登り、車を下りて步み進みて佛の所に往詣し、すなはち世尊と共に相問訊し、却きて一面に坐し白して曰く『瞿曇、摩竭陀王、未生怨鞞陀提子、聖體安快無病にして氣力常の如きやを問訊す。瞿曇、摩竭陀王、未生怨鞞

【一】D. 10, Mahāparinibbāna-suttanta. I. 1—11, A. iV. 17.「長阿含」二卷「遊行經」、失譯白法祖譯「佛般泥洹經」、「般泥洹經」、「根本說一切有部毘奈耶雜事」三五卷「增一阿含」四〇品の二。

【二】鷲巖山（巴 Gijjhakūṭa-pabbata, 梵 Gṛdhrakūṭa-parvata）。靈鷲山をいふ。

【三】未生怨鞞陀提子（Ajātasattu Vedehiputta 韋駄希の子の意）。

【四】跋耆（Vajjī）。跋祇・跋闍・婆祇・拔祇・伐地とも音譯す、毘舍離城を中心として住みたる人種の名。

【五】雨勢（Vassakāra）。禹舍大臣・雨舍婆羅門。

得。雄猛にして諸の義を觀じ、　慧者必ず解脫す。

佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第三十四

量の善法の得べき有れば、彼の一切不放逸を以て本と爲し、不放逸を習と爲し、不放逸に因りて生じ、不放逸を首と爲す。不放逸は諸の善法に於て最も第一と爲す。猶ほ諸の獸中彼の師子王を最も第一と爲すがごとく、猶ほ列陣共に鬪戰する時唯要誓を第一と爲すが如く、猶ほ樓觀の椽のごとし。彼の一切皆[五]承椽梁に依りて立ち、承椽梁、承椽梁皆これを攝持し、承椽梁は最も第一と爲す。謂く盡く攝するが故に。是の如く若し無量の善法の得べき有れば、彼の一切不放逸を以て本と爲し、不放逸を習と爲し、不放逸に因りて生じ、不放逸を首と爲す。不放逸は諸の善法に於て最も第一と爲す。猶ほ諸の山、須彌山を第一と爲すが如く、猶ほ諸の泉・大泉・攝水、大海を第一と爲すが如く、猶ほ諸の大身阿須羅王を第一と爲すがごとく、猶ほ諸の瞻侍、魔王を第一と爲すがごとく、猶ほ諸の行欲、頂生王を第一と爲すがごとく、猶ほ諸の小王、轉輪王を第一と爲すが如く、猶ほ虛空の諸の星宿、月殿を第一と爲すが如く、猶ほ諸の綵衣、白練を第一と爲すがごとく、猶ほ諸の光明、慧光明を第一と爲すがごとく、猶ほ諸の衆、如來の弟子衆を第一と爲すが如く、猶ほ諸の法、有爲及び無爲、愛盡・無欲・滅盡の涅槃を第一と爲すが如く、猶ほ諸の衆生、無足・二足・四足・多足、色・無色、有想・無想・乃至非有想非無想、如來彼に於て極第一と爲し、大と爲し上と爲し、最と爲し勝と爲し、尊と爲し妙と爲すがごとく、猶ほ牛に因りて乳有り、乳に因りて酪有り、酪に因りて生酥有り、生酥に因りて熟酥有り、熟酥に因りて酥精有り、酥精を第一と爲し、大と爲し上と爲し、最と爲し勝と爲し、尊と爲し妙と爲すが如し。是の如く若し諸の衆生、無足・二足・四足・多足、色・無色、有想・無想・乃至非有想非無想有れば、如來彼に於て極第一と爲し、大と爲し上と爲し、最と爲し勝と爲し、尊と爲し妙と爲す』。ここに於て世尊この頌を說きて曰はく、

[六]若し財物を求むる有れば、　極めて好く轉た增して多し。
不放逸を稱譽し、　事、無事を慧
[者]は說く、　不放逸有れば、　必ず二俱に義を取る。
即ちこの世に能く獲、　後世も亦復

【五】承椽梁(Gopānasī)。屋根の骨組を支ふる梁。「別譯」には「高波那寫」と音譯す。

【六】S. i. 89.

狂ひ、諸根を調亂し、戒を持すること極めて寛にして沙門を修せず、行を增廣せず』。ここに於て世尊この頌を說きて曰はく、

愚癡にして欲樂を失ひ、　また沙門の義を失ひ、　俱に二邊を忘失す。　猶ほ燒きたる殘火の燼の如く、　猶ほ無事處に燒人の殘火の燼の如し。　無事[所も]村も用ひず。　人の欲に著するも亦然り、　猶ほ燒きたる殘火の燼の如く、　俱に二邊を忘失す。

佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百四十一、[一]喩經第二十五

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『若し無量の善法の得べき有れば、彼の一切不放逸を以て本と爲し、不放逸を習と爲し、不放逸に因りて生じ、不放逸を首と爲す。不放逸は諸の善法に於て最も第一と爲す。猶ほ田業を作すがごとし。彼の一切地に因り地に依り地に立ちて田業を作すを得。是の如く若し無量の善法の得べき有れば、彼の一切、不放逸を以て本と爲し、不放逸を習と爲し、不放逸に因りて生じ、不放逸を首と爲す。不放逸は諸の善法に於て最も第一と爲す。猶ほ種子のごとし。村及與鬼村、百穀藥木生じ長養し得るは、彼の一切地に因り地に依り地に立ちて生じ長養するを得。是の如く若し無量の善法の得べき有れば、彼の一切不放逸を以て本と爲し、不放逸を習と爲し、不放逸に因りて生じ、不放逸を首と爲す。不放逸は諸の善法に於て最も第一と爲す。猶ほ諸の根香・[二]沈香を第一と爲すがごとく、猶ほ諸の樹香・[三]赤栴檀を第一と爲すがごとく、猶ほ諸の水華、靑蓮華を第一と爲すがごとく、猶ほ諸の陸華、[四]須摩那華を第一と爲すがごとく、猶ほ諸の獸跡、彼の一切悉く象跡中に入り、象跡盡く攝し、彼の象跡を第一と爲すがごとし。謂く廣く入るゝが故に。是の如く若し無

【一】S. v. 43—45; i. 86,「雜阿含」四六卷の一八經、「別譯雜阿含」四卷の四經。「本事經」一の一二參照。cf. Iti. 23.

【二】沈香(Kālānusāriya)。「別譯雜阿含」には「黑堅實香」とす。

【三】赤栴檀(Lohitacandana)。

【四】須摩那華(Sumana)。素馨花。

如く行じて精勤し、常に不淨想を念ぜば、永く婬怒癡を斷じ、一切の無明を除き、清淨の明を興起して比丘苦の邊を得ん。

佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百四十、[一]至邊經第三十四

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『生活中に於て下極至邊なるは謂く乞食を行ずるなり。世間大ひに諱むは謂く禿頭にして手に鉢を擎げて行くが爲なり。彼の族姓子義の故に受く。所以者何。生老病死・愁戚・啼哭・憂苦・懊惱を厭患するを以て、或はこの淳具足大苦陰の邊を得。汝等、是の如き心もて出家學道するに非ざるや』。時に諸の比丘白して曰く『是の如し』。世尊また諸の比丘に告げて曰はく『彼の愚癡の人是の如き心を以て出家學道して而も伺を行じ欲に染著すること至重にして濁心中に纏はり、憎嫉して信無く、懈怠して正念を失ひ、正定無く惡慧にして心狂ひ、諸根を調亂し、戒を持すること極めて寬にして沙門を修せず、行を增廣せず。猶ほ人墨を以て浣ぎ、墨の汚す所となり、血を以て血を除き、垢を以て垢を除き、濁を以て濁を除き、廁を以て廁を除き、但その穢を增すがごとし。冥より冥に入り、闇より闇に入る。我彼の愚癡の人沙門戒を持するも亦復是の如しと說く。謂く彼の人伺欲に染著すること至重にして濁心中に纏はり、憎嫉して信無く、懈怠して正念を失ひ、正定無く惡慧にして心狂ひ、諸根を調亂し、戒を持すること極めて寬にして沙門を修せず、行を增廣せず。猶ほ無事處の燒人の殘木のごとし。彼の火燼は無事[所]の用ふる所に非ず、亦村邑の用ふる所に非ず。我彼の愚癡の人沙門の戒を持するも亦復是の如しと說く。謂く彼の人伺を行じ欲に染著すること至重にして濁心中に纏はり、憎嫉して信無く、懈怠して正念を失ひ、正定無く惡慧にして心

【一】 Iti. 91,「本事經」二の三二、cf. S. iii. 91,「雜阿含」一〇卷一七經。

佛の法律を念ずべし。

佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百三十九、息止道經第二十三

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『年少の比丘始めて戒を成就するには當に數數息止道に詣るを以て相を觀ずべし。骨相・青相・腐相・食相・骨鏁相なり。彼この相を善く受け善く持し已りて住處に還り至り、手足を澡洗し、尼師檀を敷きて床上に在りて結加趺坐し、卽ちこの相、骨相・青相・腐相・食相・骨鏁相を念ぜよ。所以者何。若し彼の比丘この相を修習すれば、速かに心中の欲恚の病を除く』。ここに於て世尊この頌を說きて曰はく、

若し年少の比丘、覺未だ上意を得ざれば、當に息止道に詣り、その婬欲を除かんと欲すべし。心中恚諍無く、衆生を慈愍し、一切方に遍滿して往至して諸の身を觀ぜよ。當に青相・及以爛腐壞せるを觀じ、鳥蟲の食ふ所、骨骨節相連るを觀ずべし。是の如き相を修習し、還歸して本の處に至り、手足を澡洗し、床を敷きて正に基坐し、當に以て眞實を觀ずべし。內身及び外身、大小便を盛滿し、心・腎・肝・肺等ありと。若し分衞して食せんと欲し、人の村邑間に到らば將の鎧もて纏絡するが如く、常に正念もて前に在くべし。若し色愛すべく清淨にして欲相應するを見ば見已りて如眞を觀じ佛の法律を正念せよ。この中骨筋無く、肉無く亦血無く、腎・心・肝・肺無く、涕・唾・腦有ること無し。一切の地皆空にして水種亦復然り、空なり一切の火種、風種亦復空なり。若し所有の諸の覺、清淨にして欲想應するは、彼の一切息止して慧の觀ずる如くせよ。是の

【一】Sn. Vijaya-sutta.

【二】骨相(Aṭṭhika-saññā)。青相＝青淤相(Vinīlaka-)。腐相(Vipubbaka-)。食相は食不可樂相(Āhāra-paṭikkūla-)か。骨鏁相(Aṭṭhisaṅkhalika-)。

の常に任せし所なり。比丘、彼の八萬四千の大城の中一城有りて極大富樂にして多く人民有り、拘舍惒提と名づけ、これ我が常に居りし所なり。比丘、彼の八萬四千の車の中而も一車有りて莊るに象の好き師子虎豹の斑文の皮もて織成せる雜色を以て種種莊飾し、極めて利疾にして樂聲車と名づけ、これ我が常に載り至りて園觀を觀望せし所なり。比丘、彼の八萬四千の馬の中而も一馬有りて體紺青色にして頭像烏の如く、騣馬王と名づけ、これ我が常に騎り至りて園觀を觀望せし所なり。比丘、彼の八萬四千の大象の中而も一象有りて體を擧げて極めて白く七支盡く正しく于娑賀象王と名づけ、これ我の常に乘り至りて園觀を觀望せし所なり。比丘、我この念を作しぬ、これ何業の果にして何業の報と爲し、我をして今日大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神有らしむるやと。比丘、我またこの念を作しぬ、これ三業の果にして三業の報と爲し、我をして今日大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神有らしむ。一には布施、二には調御、三には守護なりと」。ここに於て世尊この頌を說きて曰はく、

この福の報を觀よ、　妙善にして饒益多し。　比丘、我在昔、　七年慈心を修し、　七反の成敗劫に、　この世に來還せず、　世間敗壞する時、　晃昱天に生じ　世間轉成の時、　梵天中に生じ、　梵[天]に在りて大梵と爲り、　千[返]自在天に生じ、　三十六[返]釋と爲り、　無量百[返]頂[生]王たり。　刹利頂生王、人の最尊爲り、　如法にして刀杖に非ずして天下を政御し、　如法にして枉を加へず、　正に安樂にして教授す。　如法に轉じて相傳へ、　一切大地に遍く、　大に富みて錢財多く、　是の如き族に生じ　財穀具足して滿ち、　七寶珍を成就し、　この大福祐に因りて、　生ずる所自在を得。　諸佛世を御し、彼の佛の所說、　この甚奇特を知り、　神通を見ること少からず。　誰か知りて而も信ぜざる。　是の如くして冥に生ぜん。　この故に當に自ら爲すべし。　大福祐を求めんと欲せば、　當に法を恭敬し、　常に

大象有りて好き乘具を被、衆寶もて交飾し白珠珞もて覆ひ、于娑賀象王を主と爲す。比丘、我刹利頂生王と作りし時、八萬四千の馬有りて好き乘具を被、衆寶もて嚴飾し金銀もて交絡し、駈馬王を首と爲す。比丘、我刹利頂生王と作りし時、八萬四千の車有りて四種に交飾し、莊るに衆の好き師子虎豹の斑文の皮もて織成せる雜色を以て種種交飾し、極めて利疾にして樂聲車と名づくるを首と爲す。比丘、我刹利頂生王と作りし時、八萬四千の大城有りて極大富樂にして多く人民有り、拘舍惒提王城を首と爲す。比丘、我刹利頂生王と作りし時、八萬四千の樓有りて四種の寶樓、金・銀・琉璃及び水精にして正法殿を首と爲す。比丘、我刹利頂生王と作りし時、八萬四千の御座有りて四種の寶座、金・銀・琉璃及び水精にして敷くに氍氀毾㲪を以てし、覆ふに錦綺羅縠を以てし、襯體被・兩頭安枕・加陵伽波惒邏・波遮悉多羅那有りき。比丘、我刹利頂生王と作りし時、八萬四千の雙衣有りて初摩衣有り錦繒衣有り劫具衣有り加陵伽波惒羅衣有りき。比丘、我刹利頂生王と作りし時、八萬四千の女有りて身體光澤あり皦潔明淨にして美色人を過ぎ小しく天に及ばず、姿容端正にして覩る者歡悅し、衆寶瓔珞もて嚴飾具足し、盡く刹利種の女にして餘族無量なりき。比丘、我刹利頂生王と作りし時、八萬四千種の食有りて晝夜常に供へ、我が爲の故に設けて我をして食せしめんと欲しぬ。比丘、彼の八萬四千種の食の中一種の食有りて極美淨潔にして無量種の味あり。これ我の常に食せし所なり。比丘、彼の八萬四千の女の中一刹利女有りて最も端正姝妙にして常に我に奉侍しぬ。比丘、彼の八萬四千の雙衣の中一雙衣有りて或は初摩衣、或は錦繒衣、或は劫具衣、或は加陵伽波惒邏衣にしてこれ我が常に著けし所なり。比丘、彼の八萬四千の御座の中一御座有りて或は金、或は銀、或は琉璃、或は水精にして敷くに氍氀毾㲪を以てし、覆ふに錦綺羅縠を以てし、襯體被・兩頭安枕・加陵伽波惒邏・波遮悉哆邏那有りて、これ我が常に臥せし所なり。比丘、彼の八萬四千の樓觀の中一樓觀有りて或は金、或は銀、或は琉璃、或は水精にして正法殿と名づけ、これ我

【三】于娑賀象(Uposatha)。
【四】駈馬王(Valāhaka)。
【五】樂聲車(Vejayanta)。
【六】拘舍惒提(Kusāvati)。
【七】正法殿(Dhammapāsāda)。

所有れば、謂く師子吼なり。一切世間・天及び魔・梵・沙門・梵志、人より天に至る。如來はこれ梵有なり、如來は至冷の有にして煩無く亦熱無く、眞諦にして虚ならざるの有なり』。ここに於て世尊この頌を說きて曰はく、

一切世間を知り、　一切世間を出で、　一切世間、一切世の如眞を說き、　彼は最上の尊雄にして能く一切の縛を解き、　一切の業を盡くすを得、　生死悉く解脫す。　これ天、亦これ人、　若し佛に歸命する有り、　稽首して如來を禮し、　甚深にして極大海「の如くなる」を知り已りて亦修敬すれば、　諸天香音神　彼を亦稽首して禮す。　謂く死に隨ふ者、　稽首して智士を禮し、　人の上に歸命す。　憂無く塵を離れて安く、　無礙にして諸解脫す。　この故に當に禪を樂しみ、　遠離して極定に住すべし。　當に自ら燈明を作すべし。　我必ず時を失ふこと無かれ。　時を失へば憂慼有り。　謂く地獄の中に墮す。

佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百三十八[一]、福經第二十二

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『福を畏るゝこと莫れ。愛樂にして意の念ずる所なり。所以者何。福はこれ樂なりと說く。福を畏れよ。愛樂にして意の念ずる所ならず。所以者何。福に非ざるはこれ苦なりと說く。何を以ての故に。[二]我憶ふに往昔長夜に福を作し、長夜に報を受けて愛樂にして意の念ずる所なりき。我往昔時七年慈を行じ、七返成敗してこの世に來らず。世敗壞する時晃昱天に生じ、世成立する時來下して空梵宮殿中に生じ、彼の梵中に於て大梵天と作り、餘處に千返自在天王と作り、三十六返天帝釋と作り、また無量返刹利頂生王と作りぬ。比丘、我刹利頂生王と作りし時、八萬四千の

【一】A. iv. 89; S. iii. 143. 「雜阿含」一〇卷の九經。

【二】一一卷「牛糞喩經」參照。

彼の比丘必ず害を被る。猶ほ商人の羅刹の食ふ所と爲るが如し。我が法善く說[かれ]發露すること極めて廣く、善く護りて空缺有ること無く、橋栰浮具の如く、遍滿し流布して乃ち天人に至る。是の如く我が法善く說[かれ]發露すること極めて廣く、善く護りて空缺有ること無く、橋栰浮具の如く、遍滿し流布して乃ち天人に至る。若し比丘有りて是の如き念を作し、地はこれ我に非ず、我に地有ること無し。水火風空[亦然り]。識はこれ我に非ず、我に識有ること無しと作さば、彼の比丘安隱に去るを得。猶ほ商人の駿馬王に乘りて安隱に度るを得るが如し』。ここに於て世尊この頌を說きて曰はく、

若し佛の說く正法律を信ぜざる有れば、彼の人必ず害を被り、羅刹の爲に食はるゝが如し。若し人佛の說く正法律を信ずる有れば、彼安隱に度るを得、駿馬王に乘るが如し。

佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百三十七、[一] 世間經第二十一

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『如來自ら世間を覺り、亦他の爲に說く。如來世間を知る。[二] 如來自ら世間の習を覺り亦他の爲に說く。[三] 如來世間の習斷ず。如來自ら世間の滅を覺り亦他の爲に說く。[四] 如來世間の滅を作證す。如來自ら世間の道跡を覺り亦他の爲に說く。[五] 如來世間の道跡を修す。若し一切盡く普く正しき有れば彼の一切の如來の知見覺得有り。所以者何。如來は昔夜、無上正盡覺を覺りしより今日夜、無餘涅槃界に於て當に滅訖を取るべきに至るまで、その中間に於て、若し如來の口言說する所有り、應對する所有れば、彼の一切これ眞諦にして虛ならず如を離れず、亦顚倒に非ず、眞諦にして實を審かにす。若し師子を說かば、當に如來を說くが如くすべし。所以者何。如來衆に在りて講說する

【一】 A. ii. 23. It. 112.「雜阿含」三一卷の四五經。
【二】 (1)知二世間一。
【三】 (2)斷二世間習一。
【四】 (3)作二證世間滅一。
【五】 (4)修二世間道跡一。

香味觸[亦然り]。法はこれ我、我法有りと[作さば]、彼の比丘必ず害を被る。猶ほ商人の羅刹の食ふ所と爲るが如し。我が法善く說[かれ]發露すること極めて廣く、善く護りて空缺有ること無く、橋栰浮具の如く、遍滿し流布して乃ち天人に至る。是の如く我が法善く說[かれ]發露すること極めて廣く、善く護りて空缺有ること無く、橋栰浮具の如く、遍滿し流布して乃ち天人に至る。若し比丘有りて是の如き念を作し、色はこれ我に非ず、我に色有ること無し。聲香味觸[亦然り]。法はこれ我に非ず、我に法有ること無しと[作さば]、彼の比丘安隱に去るを得。猶ほ商人の駈馬王に乘りて安隱に度るを得るが如し。我が法善く說[かれ]發露すること極めて廣く、善く護りて空缺有ること無く、橋栰浮具の如く、遍滿し流布して乃ち天人に至る。是の如く我が法善く說[かれ]發露すること極めて廣く、善く護りて空缺有ること無く、橋栰浮具の如く、遍滿し流布して乃ち天人に至る。若し比丘有りて是の如き念を作し、[一二]色陰はこれ我、我に色陰有り。覺想行[亦然り]。識陰はこれ我、我に識陰有りと[作さば]、彼の比丘必ず害を被る。猶ほ商人の羅刹の食ふ所と爲るが如し。我が法善く說[かれ]發露すること極めて廣く、善く護りて空缺有ること無く、橋栰浮具の如く、遍滿し流布して乃ち天人に至る。是の如く我が法善く說[かれ]發露すること極めて廣く、善く護りて空缺有ること無く、橋栰浮具の如く、遍滿し流布し乃ち天人に至る。若し比丘有りて是の如き念を作し、色陰はこれ我に非ず、我に色陰有ること無し。覺想・行[亦然り]。識陰はこれ我に非ず、我に識陰有ること無しと作さば、彼の比丘安隱に去るを得。猶ほ商人の駈馬王に乘りて安隱に度るを得るが如し。我が法善く說[かれ]發露すること極めて廣く、善く護りて空缺有ること無く、橋栰浮具の如く、遍滿し流布して乃ち天人に至る。是の如く我が法善く說[かれ]發露すること極めて廣く、善く護りて空缺有ること無く、橋栰浮具の如く、遍滿し流布して乃ち天人に至る。若し比丘有りて是の如き念を作し、[一三]地はこれ我、我に地有り。水火風空[亦然り]。識はこれ我、我に識有りと[作さば]、

【一二】五陰これ我なりと執すれば害を被る。

【一三】六大これ我なりと執すれば害を被る。

も、彼必ず顚倒して水に落墮し、すなはち當に彼の婦人の爲に食はるべし。當に逼迫に遭ふべし。若し人を食ふ時餘の髮毛及び爪齒有れば、彼の婦人等盡く取りてこれを食ふ。また次に彼の人を食ふ時血の地に渧る有れば、彼の歸人等すなはち手爪を以て地を掘ること深さ四寸にして取りて而もこれを食ふ。若し彼の商人、この念を作さず、我男女有り、我極樂最妙の好處にして園觀・浴池・坐臥處の所・林木蓊鬱たる有り、我多く錢財・金・銀・水精・琉璃・摩尼・眞珠・碧玉・白珂・車渠・珊瑚・虎珀・馬瑙・玳瑁・赤石・旋珠有りと[念ぜざれば]、彼駈馬王の一毛を持つ者と雖も彼必ず安隱に閻浮洲に度至す。〔九〕諸の比丘、我この喩を說きて義を知らしめんと欲す。こはこの義を說く。我が法善く說[かれ]、發露すること極めて廣く、善く護りて空缺有ること無くは橋栰浮具の如く、遍滿し流布して乃ち天人に至る。是の如く我が法善く說[かれ]、發露すること極めて廣く、善く護りて空缺有ること無く、橋栰浮具の如く、遍滿し流布して乃ち天人に至る。若し比丘有りて是の如き念を作し、〔一〇〕眼はこれ我、我に眼有り、耳鼻舌身[亦然り]。意はこれ我、我に意有りと[作さば]、彼の比丘必ず害を被る。猶ほ商人の羅刹の食ふ所と爲るが如し。我が法善く說[かれ]發露すること極めて廣く、善く護りて空缺有ること無く、橋栰浮具の如く、遍滿し流布して乃ち天人に至る。是の如く我が法善く說[かれ]發露すること極めて廣く、善く護りて空缺有ること無く、橋栰浮具の如く、遍滿し流布して乃ち天人に至る。若し比丘有りて是の如き念を作し、眼はこれ我に非ず、我に眼有ること無く、耳鼻舌身[亦然り]。意はこれ我に非ず、我意有ること無しと[作さば]、彼の比丘安隱に去るを得。猶ほ商人の駈馬王に乘りて安隱に度るを得るが如し。我が法善く說[かれ]發露すること極めて廣く、善く護りて空缺有ること無く、橋栰浮具の如く、遍滿し流布して乃ち天人に至る。是の如く我が法善く說[かれ]發露すること極めて廣く、善く護りて空缺有ること無く、橋栰浮具の如く、遍滿し流布して乃ち天人に至る。若し比丘有りて是の如き念を作し、〔一一〕色はこれ我、我に色有り、聲

〔九〕以下は上の喩によりて法を說く。

〔一〇〕六根これ我なりと執すれば害を被る。

〔一一〕六境これ我なりと執すれば害を被る。

脫したまへ。願はくは我等を將ゐてここより安隱に閻浮洲に度至せしめたまへと。時に駃馬王語げて曰く、商人、彼の婦人等必ず當に兒を抱きて共に相將ゐ來りて而もこの語を作すべし、諸賢、善くここに來り還れ。この間、極樂最妙の好處にして園觀・浴池・坐臥處の所・林木蓊鬱たり。多く錢財・金・銀・水精・琉璃・摩尼・眞珠・碧玉・白珂・車渠・珊瑚・虎珀・馬瑙・玳瑁・赤石・旋珠有り。盡く諸賢に與ふ。當に我等と共に相娛樂すべし。設し我を用とせざれば當に兒子を憐念すべしと。若し彼の商人而もこの念を作し、我男女有り、我極樂最妙の好處にして園觀・浴池・坐臥處の所・林木蓊鬱たる有り。我多く錢財・金・銀・水精・琉璃・摩尼・眞珠・碧玉・白珂・車渠・珊瑚・虎珀・馬瑙・玳瑁・赤石・旋珠有りと「念ぜば」、彼我に騎りて正に背中に當ると雖も彼必ず顚倒して水に落墮し、すなはち當に彼の婦人の食ふ所と爲るべし。當に逼迫に遭ふべし。若し人を食ふ時餘の髮毛及び爪齒有れば、彼の婦人すなはち當に盡く取りてこれを食ふべし。また次に若し人を食ふ時血の地に渧る有れば、彼の婦人等すなはち手爪を以て地を掘ること深さ四寸にして取りて而もこれを食ふ。若し彼の商人この念を作さず、我男女有り、我極樂最妙の好處にして園觀・浴池・坐臥處の所・林木蓊鬱たる有り。我多く錢財・金・銀・水精・琉璃・摩尼・眞珠・碧玉・白珂・車渠・珊瑚・虎珀・馬瑙・玳瑁・赤石・旋珠有りと「念ぜざれば」、彼我が身上の一毛を持つと雖も彼必ず安隱に閻浮洲に度至せんと』。ここに於て世尊諸の比丘に告げたまはく『彼の婦人等兒子を抱き來りて而もこの語を作す、諸賢、善くここに來り還れ、この間極樂最妙の好處にして園觀・浴池・坐臥處の所・林木蓊鬱たり、多く錢財・金・銀・水精・琉璃・摩尼・眞珠・碧玉・白珂・車渠・珊瑚・虎珀・馬瑙・玳瑁・赤石・旋珠有り。盡く諸賢に與ふ。當に我等と共に相娛樂すべしと。若し彼の商人而もこの念を作し、我男女有り、我極樂最妙の好處にして園觀・浴池・坐臥處の所・林木蓊鬱たる有り。我多く錢財・金・銀・水精・琉璃・摩尼・眞珠・碧玉・白珂・車渠・珊瑚・虎珀・馬瑙・玳瑁・赤石・旋珠有りと「念ぜば」、彼駃馬王の脊に乘りて正に背中に當るを得ると雖

に於て唱へて曰く、閻浮洲の諸の商人愚癡にして定まらず亦善く解せず。所以者何。十五日に從解脫を說く時而も南行せしむること能はず。彼に〔八〕馲馬王有り、自然の粳米を食し、安隱快樂にして諸根を充滿し、再び三たび唱へて曰く、誰か彼の岸に度らんと欲し、誰か我をして脫さしめんと欲し、誰か我をして將ゐてここより安隱に閻浮洲に度至せしめんと欲するやと。汝等共に馲馬王に詣りて而もこの語を作すべし、我等彼の岸に渡至するを得んと欲す。願はくは我等を脫したまへ。願はくは我等を將ゐてここより安隱に閻浮洲に度至せしめたまへと。賢者、これを方便、汝等をしてここより安隱に閻浮洲に度至せしむと謂ふ。商人汝來りて、彼の馲馬王の所に往至して而もこの語を作すべし、我等彼の岸に渡至するを得んと欲す。願はくは我等を脫したまへ。願はくは我等を將ゐてここより安隱に閻浮洲に度至せしめたまへと。ここに於て閻浮洲に一智慧の商人有りて語げて曰く、諸の商人今時馲馬王の所に往詣して而もこの語を作せ、我等彼の岸に渡至するを得んと欲す。願はくは我等を脫したまへ。願はくは我等を將ゐてここより安隱に閻浮洲に度至せしめたまへと。諸の商人諸天の意に隨ひ、諸の商人若使十五日に從解脫を說く時、馲馬王自然の粳米を食し、安隱快樂にして諸根を充滿し、再び三たび唱へて曰く、誰か彼の岸に渡らんと欲し、誰か我に從ひて脫れんと欲し、誰か我をして將ゐてここより安隱に閻浮洲に度至せしめんと欲するやと。我等その時卽ち彼の所に往きて而もこの語を作さん、我等彼の岸に渡至するを得んと欲す。願はくは我等を脫したまへ。願はくは我等を將ゐてここより安隱に閻浮洲に度至せしめたまへと。ここに於て馲馬王後十五日に從解脫を說くは、自然の粳米を食し、安隱快樂にして諸根を充滿し、再び三たび唱へて曰く、誰か彼の岸に度るを得んと欲するや。我當に彼を脫すべし。我當に彼を將ゐてここより安隱に閻浮洲に度至せしむべしと。時に閻浮洲の諸の商人聞き已りて卽便ち馲馬王の所に往詣して而もこの語を作しぬ、我等彼の岸に渡至するを得んと欲す。願はくば我等を

〔八〕馲馬。長き毛ある馬の義。雲馬（Valāhassa）の事なるべし。

船を破壊せられしを聞かざれば、則ち我等と共に相娯樂す。賢者、若し彼の婦人閻浮洲に更に商人有り、海中に在りて摩竭魚王の爲に船を破壊せられしを聞けば、すなはち我等を食ひ、極めて逼迫に遭ふ。若し人を食ふ時餘の髪毛及び爪齒有れば、彼の婦人等盡く取りてこれを食ひ、若し人を食ふ時、血の地に渧る有れば、彼の婦人等すなはち手爪を以て地を掘ること深さ四寸にして取りて而もこれを食ふ。賢者、當に知るべし。我等、閻浮洲の商人本五百人有りき。中に於て已に二百五十を噉ひ、餘に二百五十有り、今皆この大鐵城中に有り。賢者、汝彼の婦人の語を信ずること莫れ。彼は眞人に非ず、これ羅刹鬼のみと。ここに於て閻浮洲の諸の商人彼の閻浮洲の一智慧の商人に問ひて曰く、賢者、彼の大衆人に、諸賢、頗し方便有りて我等及び汝等をしてここより安隱に閻浮洲に度至せしむるやと問はざりしやと。閻浮洲の一智慧の商人答へて曰く、諸賢、我時に脱れて是の如く問はざりきと。ここに於て閻浮洲の諸の商人語げて曰く、賢者、還り去りて本共に居りし婦人の處に至り已りて彼の眠る時に伺ひて安徐として而も起き更に竊に南行し、また彼の大衆人の所に往至し問ひて曰へ、諸賢、頗し方便有りて我等及び汝等をしてここより安隱に閻浮洲に度至せしむるやと。ここに於て閻浮洲の一智慧の商人諸の商人の爲に默然として而も受けぬ。この時閻浮洲の一智慧の商人還りて共に居る婦人の處に至り已りて彼の眠る時を伺ひ安徐として而も起き卽ち竊に南行し、また彼の大衆人の所に往至し問ひて曰く、諸賢、頗し方便有りて我等及び汝等をしてここより安隱に閻浮洲に度至せしむるやと。彼の大衆人答へて曰く、賢者、更に方便の我等をしてここより安隱に閻浮洲に度至せしむる無し。賢者、我この念を作しぬ、我等當に共にこの牆を破掘して本の所に還歸すべしと。適ま心を發し已りてこの牆轉た更に倍して常よりも高し。賢者、これ方便、我等をしてここより安隱に閻浮洲に度至するを得ざらしむと謂ふ。賢者、別に方便有りて汝等をしてここより安隱に閻浮洲に度至せしむべきも、我等永く方便無し。諸賢、我等聞くに天空

子及び諸の愛念する親親・朋友を呼喚し、好き閻浮洲安隱快樂なるもまた見るを得ずと「叫ぶ」を聞きぬ。我これを聞き已りて極めて大いに恐怖し身毛皆竪ち、人及び非人をして我に觸嬈せしむる者莫れと。ここに於て我すなはち自ら恐怖を制してまた進みて南行しぬ。進みて南行し已りて忽ち東邊に大鐵城有るを見、見已りて遍く觀ずるに、その門乃至猫子を容るべき出處を見ず。我また大鐵城の北に於て大叢樹有るを見て卽ち彼の大叢樹の所に往至し、安徐として緣ぢ上り、上り已りて彼の大衆人に問ひて曰く、諸賢、汝等何が故に啼哭懊惱し、父を喚び母を呼び、妻子及び諸の愛念する親親・朋友を呼喚し、好き閻浮洲安隱快樂なるもまた見るを得ずと「叫ぶ」やと。彼の大衆人而も我に答へて曰く、賢者、我等はこれ閻浮洲の諸の商人なり。皆共に集會して賈客堂に在りて而もこの念を作しぬ、我等寧ろ海に乘りて船を裝ひ、大海中に入り財寶を取り來りて以て家用に供すべしと。賢者、我等またこの念を作しぬ、諸賢、我等海に入りては安隱不安隱を豫知すべからず。我等寧ろ各各浮海の具、謂く羖羊皮囊・大瓠・押栰を備辦すべしと。賢者、我等後時に各各浮海の具、謂く羖皮羊囊・大瓠・押栰を備辦してすなはち大海に入りぬ。賢者、我等海中に在りて摩竭魚王の爲にその船を破壞せられぬ。賢者、我等商人各各自ら浮海の具、羖羊皮囊・大瓠・押栰に乘り浮びて諸方に向ひぬ。その時海東に大風卒に起りて我等商人を吹きて海の西岸に至りぬ。彼の中に諸の女人輩の極妙端正、一切の嚴具以てその身を飾るに逢見しぬ。彼の女見已りてすなはちこの語を作しぬ、善く來りぬ諸賢、快く來りぬ諸賢、この間極樂最妙の好處にして園觀・浴池・坐臥處の所・林木蓊欝たり。多く錢財・金・銀・水精・琉璃・摩尼・眞珠・碧玉・白珂・車璖・珊瑚・虎珀・馬瑙・瑇瑁・赤石・旋珠有り。盡く諸賢に與ふ。當に我等と共に相娛樂すべし。閻浮洲の商人をして南行し乃至夢に於てもせしむること莫れと。賢者、我等彼の婦人と共に相娛樂しぬ。我等婦人と共に合會せるに因りて男を生み或はまた女を生みぬ。賢者、若し彼の婦人閻浮洲に更に商人有り、海中に在りて摩竭魚王の爲に

水精・琉璃・摩尼・眞珠・碧玉・白珂・車璖・珊瑚・虎珀・馬瑙・瑇瑁・赤石・旋珠有り。盡く諸賢に與ふ。當に我等と共に相娛樂すべし。閻浮洲の商人をして南行し乃至夢に於てもせしむること莫れと。賢者、我等彼の婦人と共に相娛樂しぬ。我等婦人と共に合會するに因りて男を生み或はまた女を生みぬ。賢者、若し彼の婦人、閻浮洲の餘の諸の商人海中に在りて摩竭魚王の爲に船を破壞せられしを聞かざれば、則ち我等と共に相娛樂す。若し彼の婦人閻浮洲に諸の商人有り、海中に在りて摩竭魚王の爲に船を破壞せられしを聞けば、すなはち我等を食し極めて逼迫に遭[はしむ]。若し人を食ふ時餘の髮毛及び爪齒有れば、彼の婦人等盡く取りてこれを食ひ、若し人を食ふ時血の地に滴る有れば、彼の婦人等すなはち手爪を以て地を掘ること深さ四寸にして取りて而もこれを食ふ。賢者、當に知るべし。我等閻浮洲の商人本五百人有りき。中に於て已に二百五十を噉ひ、餘に二百五十有り。今皆この大鐵城中に在り。賢者、汝彼の婦人の語を信ずること莫れ。彼は眞人に非ず、これ羅刹鬼[七]のみと。ここに於て閻浮洲の一智慧の商人大叢樹より安徐として下り已り、道を復して而も彼の婦人の所、本共に居りし處に還りぬ。彼の婦人故のごとく眠りて未だ寤めざるを知りて、卽ちその夜に於て彼の閻浮洲の一智慧の商人速かに彼の閻浮洲の諸の商人の所に往至してすなはちこの語を作しぬ、汝等共に來れ。當に靜處に至るべし。汝各各獨り往きて兒を將ゐて去ること勿れ。當に共に彼に在りて密かに論ずる所有るべしと。彼の閻浮洲の諸の商人等共に靜處に至り各各自ら獨り去りて兒息を將ゐず。ここに於て閻浮洲の一智慧の商人語げて曰く、諸の商人、我則ち獨り安靜處に住して而もこの念を作しぬ、何等を以ての故に、この婦人輩我等を制して南行せしめざるや。我寧ろ共に居る婦人を伺ふべし。彼の眠るを知り已りて、安徐として而も起き當に竊に南行すべしと。ここに於て我すなはち共に居る婦人を伺ひ、彼の眠るを知り已りて、我安徐として起き卽ち竊に南行しぬ。我南行し已りて遙かに大音高聲もて喚叫し、衆多の人聲・啼哭・懊惱し、父を喚び母を呼び、妻

【七】羅刹鬼(Rakkhasa)。

而も起き、當に竊かに南行すべしと。彼の閻浮洲の一智慧の商人、則ち後に於て共に居る婦人を伺ひ、彼の眠るを知り已りて安徐として而も起き、卽ち竊かに南行しぬ。彼の閻浮洲の一智慧の商人既に南行し已りて遙かに大音高聲もて喚叫し、衆多の人聲・啼哭・懊惱し、父を喚び母を呼び、妻子及び諸の愛念する親親・朋友を呼喚し、好き閻浮洲安隱快樂なるも、また見るを得ずと[叫ぶ]を聞きぬ。彼の商人聞き已りて極めて大いに恐怖し、身毛皆竪ち、人及び非人をして我に觸嬈せしむる者莫れと。ここに於て閻浮洲の一智慧の商人自ら恐怖を制してまた進みて南行しぬ。彼の閻浮洲の一智慧の商人進みて南に行き已りて忽ち東邊に大鐵城有るを見、見已りて遍く觀ずるに、その門乃至猫子を容るべき出處をも見ず。彼の閻浮洲の一智慧の商人鐵城の北を見るに大叢樹有り。卽ち彼の大叢樹の所に往至し安徐として緣ぢ上りぬ。上り已りて彼の大衆人に問ひて曰く、諸賢、汝等何が故に啼哭・懊惱し、父を喚び母を呼び、妻子及び諸の愛念する親親・朋友を呼喚し、好き閻浮洲安隱・快樂なるも、また見るを得ずと[叫ぶ]やと。時に大衆人すなはち彼に答へて曰く、賢者、我等はこれ閻浮洲の諸の商人なり。皆共に集會して賈客堂に在りて而もこの念を作しぬ、我等寧ろ海に乘りて船を裝ひ、大海中に入り財寶を取り求めて以て家用に供すべしと。賢者、我等またこの念を作しぬ、諸賢、我等海に入りては安隱不安隱を豫知すべからず。我等寧ろ各各浮海の具、謂く羖羊皮囊・大瓠・押栰を備辦すべしと。賢者、我後時に於て各各浮海の具、謂く羖羊皮囊・大瓠・押栰を備辦してすなはち大海に入りぬ。賢者、我等海中に在りて摩竭魚王の爲にその船を破壞せられぬ。賢者、我等商人各各自ら浮海の具、羖羊皮囊・大瓠・押栰に乘り浮きて諸方に向ひぬ。その時海東より大風卒に起り、我等商人を吹きて海の西岸に至りぬ。彼の中に諸の女人輩の極妙端正、一切の嚴具以てその身を飾るに逢見しぬ。彼の女見已りてすなはちこの語を作しぬ、善く來りぬ諸賢、快く來りぬ諸賢、この間極樂最妙の好處にして、園觀・浴地・坐臥處の所・林木蓊欝たり。多く錢財・金・銀・

卷の第三十四

大*品

百三十六、[一]商人求財經第二十

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『乃往昔時・閻浮洲中の諸の商人等皆共に集會して賈客堂に在りてこの念を作しぬ、我等寧ろ海に乘りて船を裝ひ、大海中に入りて財寶を取り來りて以て家用に供すべしと。またこの念を作しぬ、諸賢、海に入りては、安隱不安隱を豫知すべからず。我等寧ろ各各浮海の具、謂く[二]羖羊皮囊・[三]大瓠・[四]押栰を備辨すべしと。彼[等]後時に於て各各浮海の具、羖羊皮囊・大瓠・押栰を備辨し、すなはち大海に入りぬ。後海中に在りて[五]摩竭魚王の爲にその船を破壞せられぬ。彼の商人等各各自ら浮海の具、羖羊皮囊・大瓠・押栰に乘り浮きて諸方に向ひぬ。その時海東より大風卒に起り、諸の商人を吹きて海の西岸に至りぬ。彼中に諸の女人輩の極妙端正、一切の嚴具以てその身を飾るに逢見しぬ。彼の女見已りてすなはちこの語を作しぬ、善く來りぬ諸賢、快く來りぬ諸賢、この間極樂最妙の好處にして、園觀・浴地・坐臥處の所・林木蓊欝たり、多く錢財・金・銀・水精・琉璃・摩尼・眞珠・碧玉・白珂・車渠・珊瑚・虎珀・馬瑙・瑇瑁・赤石・旋珠有り、盡く諸賢に與ふ。當に我等と共に相娛樂すべし。[六]閻浮洲の商人をして南行し乃至夢に於てせしむること莫れと。彼の商人等皆婦人と共に相娛樂しぬ。彼の商人等因りて婦人と共に合會して男を生み或はまた女を生みぬ。彼後時に於て閻浮洲に一智慧の商人有り、獨り靜處に住して而もこの念を作しぬ。何等を以ての故に、この婦人輩我等を制して南行せしめざるや。我寧ろ共に居る婦人を伺ふべし。彼眠るを知り已りて安徐として

※ 二字削るべきを誤りて存し置きたり。

【一】 Jāt. 196, Valāhassa.「增一阿含」四五品の一、「本行集經」五〇卷、「六度集經法」(37)、(59)。

【二】 羖羊皮囊とは黑色の牝羊の皮を以て作りたる囊。

【三】 大瓠とは大形のふくべ。

【四】 押栰とはおし筏。

【五】 摩竭魚(Makara)。南海中に棲める怪魚。

【六】 閻浮洲から來た商人たちは是より南の方へ往つてはならぬ。夢にも往つてはならぬ。蓋し其處に祕密あることを後暴露する通り。

快く樂を得。 彼必ず錢財饒くして海中に水流るゝが如し。 彼是の如く財を求め、 猶ほ蜂の花を採るが如し 長夜に錢財を求め、 當に自ら快樂を受くべし。 財を出して遠からしむること莫れ。 亦普漫せしむること勿れ。 財を以て兇暴及び豪强に與ふべからず 東方父母爲り、 南方師尊爲り。 西方妻子爲り、 北方奴婢爲り。 下方は親友の臣にして上は沙門梵志たり。 願はくはこの諸方を禮して、 二倶に大稱を得、 この諸方を禮し已りて施主天に生ずるを得。

佛說是の如し。善生居士子、佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第三十三

（卷三十三）善生經第十九

事を以て沙門・梵志を尊敬し供養すべし。云何が五と爲す。一には門を禁制せず。二には來るを見ては讃善す。三には床を敷設して待つ。四には淨美豐饒の飲食を施設す。五には擁護すること法の如し。施主この五事を以て沙門・梵志を尊敬し供養す。沙門・梵志亦五事を以て善く施主を念ず。云何が五と爲す。一には信を教へ信を行じ信を念ぜしむ。二には禁戒を教ふ。三には博聞を教ふ。四には布施を教ふ。五には慧を教へ慧を行じ慧を立せしむ。沙門梵志この五事を以て善く施主を念ず。居士子、是の如く上方は、二倶に分別す。居士子、聖法律中上方は謂く施主、沙門・梵志なり。居士子、若し人沙門・梵志を尊奉すれば、必ず增益有りて則ち衰耗無し。居士子、四攝事有り。云何が四と爲す。一には惠施、二には愛言、三には利行、四には等利なり』。ここに於て世尊この頌を説きて曰はく、

[三二]惠施及び愛言し、　常に他の爲に利を行じ、　衆生等しく同じく利し、　名稱普く遠く至る。
これ則ち世を攝持するは猶ほ御車の人の如し。　若し攝持する無くば、　母その子に因りて
供養恭敬を得ず。　父子に因るも亦然り。　若しこの法攝する有れば、　故に大福祐を得、
照すこと遠くして猶ほ日光の如し。　速かに利し翻すこと捷疾なり。　麁說せず、聰明なり。
是の如くして名稱を得。　定んで功高無きを獲、　速かに利し翻すこと捷疾なり。　信・尸
賴を成就し、　是の如くして名稱を得。　常に起きて懶惰ならず、　嘉びて人に飲食を施し、
將に去らんとして調御すること正しく、　是の如くして名稱を得。　親友の臣は同じく恤み、
愛樂齊限有り。　謂く親中に攝在し、　殊妙師子の如し。　始め當に技術を學ぶべし。　後
に於て財物を求め、　後財物求め已りて分別して四分と作し、　一分は飲食と作し、　一分は
田業を作し、　一分は擧げて藏置し、　急時に所須に赴け、　耕作、商人に給し、　一分に息利
を出す。　第五に婦を取るを爲し、　第六に屋宅を作り、　家若し六事を具すれば增さずして

【三二】 惠施(Dāna)、愛言(Peyya-vajja)、利行(Attha-cariyā)、同事(Samānattatā)を四攝法(Cattāri saṅgahavatthūni)と呼ぶ。

てす。九には門を禁制せず。十には來るを見ては讃善す。十一には床を敷設して待つ。十二には淨美豐饒の飲食を施設す。十三には沙門・梵志を供養す。妻子この十三事を以て善く夫を敬順す。居士子、是の如く西方は二倶に分別す。居子士、聖法律中西方は、謂く夫、妻子なり。居士子、若し人妻子を慈愍すれは、必ず増益有りて則ち衰耗無し。居士子、[二九]北方の如きは、これ大家の奴婢使人を觀るが如し。大家當に五事を以て奴婢使人を愍念し給恤すべし。云何が五と爲す。一にはその力に隨ひて而も作業せしむ。二には時に隨ひてこれに食はす。三には時に隨ひてこれに飲ます。四には及び日に休息せしむ。五には病みては湯藥を給す。大家この五事を以て奴婢使人を愍念し給恤す。奴婢使人當に九事を以て善く大家に奉すべし。云何が九と爲す。一には時に隨ひて作業す。二には專心に作業す。三には一切を作業す。四には前に瞻侍を以てし、五には後に愛行を以てす。六には言は誠實を以てす。七には急時に遠離せず。八には他方に行く時は則便ち讃歎す。九には大家の庶幾を稱す。奴婢使人この九事を以て善く大家に奉す。居士子、是の如く北方は、二倶に分別す。居士子、聖法律中北方は、謂く大家、奴婢使人なり。居士子、若し人有りて奴婢使人を慈愍すれば、必ず増益有りて則ち衰耗無し。居士子、[三〇]下方の如きは、これ親友親友の臣を觀るが如し。親友當に五事を以て親友の臣を愛敬し供給すべし。云何が五と爲す。一には愛敬す。二には輕慢せず。三には欺誑せず。四には珍寶を施與す。五には親友の臣を拯念す。親友この五事を以て親友の臣を愛敬し供給す。親友の臣亦五事を以て善く親友を念ず。云何が五と爲す。一には財物盡くるを知る。二には財物盡くるを知り已りて財物を供給す。三に放逸なるを見ては教訶す。四には愛念す。五には急時に歸依すべし。親友の臣この五事を以て善く親友を念ず。居士子、是の如く下方は、二倶に分別す。居士子、聖法律中下方は、謂く親友、親友の臣なり。居士子、若し人親友の臣を慈愍すれば、必ず増益有りて則ち衰耗無し。居士子、[三一]上方の如きは、これ施主、沙門・梵志を觀るが如し。施主當に五

【二九】（4）北方、大家以二五事一愍二念奴婢一。奴婢以二九事一奉二大家一。

【三〇】（5）下方、親友以二五事一愛二敬親友臣一。親友臣以二五事一念二親友一。

【三一】（6）上方、施主以二五事一尊二敬沙門梵志一。沙門梵志以二五事一念二施主一。

居士子、[二五]聖法律中に六方有り。東方・南方・西方・北方・下方・上方なり。居士子、[二六]東方の如きは、これ子の父母を觀るが如くせよ。子當に五事を以て父母を奉敬し供養すべし。云何が五と爲す。一には財物を增益す。二には衆事を備辦す。三には欲する所は則ち奉る。四には自ら恣にして違はず。五には有する所の私物は盡く以て奉上す。子この五事を以て父母を奉敬し供養す。父母亦五事を以て善くその子を念ず。云何が五と爲す。一には兒子を愛念す。二には供給して乏しき無［から しむ］。三には子をして負債せざらしむ。四には婚娶を稱可す。五には父母意に可とし、有する所の財物は盡く以て子に付す。父母この五事を以て善くその子を念ず。居士子、是の如く東方は二俱に分別す。居士子、聖法律中東方は謂く子、父母なり。居士子、若し父母に慈孝すれば、必ず增益有りて則ち衰耗無し。居士子、[二七]南方の如きは、これ弟子の師を觀るが如し。弟子當に五事を以て師を恭敬し供養すべし。云何が五と爲す。一には善く恭順す。二には善く承事す。三には速かに起く。四には作す所の業善なり。五には能く師を奉敬す。弟子この五事を以て師を恭敬し供養す。師亦五事を以て善く弟子を念ず。云何が五と爲す。一には技術を敎ふ。二には速かに敎ふ。三には盡く知る所を敎ふ。四には善方に安處す。五には善知識を付囑す。師この五事を以て善く弟子を念ず。居士子、是の如く南方は二俱に分別す。居士子、聖法律中南方は、謂く弟子、師なり。居士子、若し人師に慈順すれば、必ず增益有りて則ち衰耗無し。居士子、[二八]西方の如きは、これ夫の妻子を觀るが如し。夫當に五事を以て妻子を愛敬し供給すべし。云何が五と爲す。一には妻子を憐念す。二には輕慢せず。三には爲に瓔珞嚴具を作る。四には家中に於て自在を得［しむ］。五には妻の親親を念ず。夫この五事を以て妻子を愛敬し供給す。妻子當に十三事を以て善く夫を敬順すべし。云何が十三なる。一には夫を重んじ愛敬す。二には重く夫を供養す。三には善くその夫を念ず。四には作業を攝持す。五には善く眷屬を攝す。六には前に瞻侍を以てし、七には後に愛行を以てす。八には言は誠實を以

【二五】聖法律中の六方禮。
【二六】（1）東方、子以二五事一禮二父母一。父母以二五事一念レ子。
【二七】（2）南方、弟子以二五事一禮レ師。師以二五事一念二弟子一。
【二八】（3）西方、夫以二五事一愛二妻子一。妻子以二十三事一敬二順夫一。

故に〔二一〕苦樂を同じくするは、當に知るべし、これ善親なり。云何が四と爲す。一には彼の爲に己を捨つ。二には彼の爲に財を捨つ。三には彼の爲に妻子を捨つ。四には所說堪忍す』。ここに於て世尊この頌を說きて曰はく、

欲・財・妻子を捨て、　所說能く堪忍し、　親しく苦樂を同じくすと知らば、　慧者は當に狎習すべし。

居士子、四事に因るが故に〔二二〕愍念は、當に知るべし、これ善親なり。云何が四と爲す。一には妙法を教ふ。二には惡法を制す。三には面前に稱說す。四には怨家を却く』。ここに於て世尊この頌を說きて曰はく、

妙善を教へ惡を制し、　面り稱へ怨家を却け、　善親にして愍念すと知らば、　慧者は當に狎習すべし。

居士子、四事に因るが故に〔二三〕利を求むるは、當に知るべし、これ善親なり。云何が四と爲す。一には密事發露す。二には密かに覆藏せず。三には利を得て喜と爲す。四には利を得ざるも憂へず』。ここに於て世尊この頌を說きて曰はく、

密事は露はして藏せず、　利すれば喜び、　無きも憂へず、　善親にして利を求むと知らば　慧者は當に狎習すべし。

居士子、四事に因るが故に〔二四〕饒益は、當に知るべし、これ善親なり。云何が四と爲す。一には財物盡くるを知る。二には財物盡くるを知り已りてすなはち物を給與す。三には放逸なるを見て教訶す。四には常に以て愍念す』。ここに於て世尊この頌を說きて曰はく、

財盡くるを知りて物を與へ、　放逸なるは教へて愍念し、　善親にして饒益すと知らば、　慧者は當に狎習すべし。

【二一】（1）同苦樂善親。
【二二】（2）愍念善親。
【二三】（3）求利善親。
【二四】（4）饒益善親。

居士子、四事に因るが故に[一七]面前に愛言するは親しきに非ずして親しきが似如し。云何が四と爲す。一には妙事を制す。二には惡を作すを敎ふ。三には面前に稱譽す。四にはその惡に背き說く』。ここに於て世尊この頌を說きて曰はく、

若し妙善の法を制し、　惡不善を作すを敎へ、　面前に對して稱譽し、　背後にその惡を說く。
若し妙及び惡を知り亦復二說を覺る。これ親しくして親しむべからず。　彼の人を知ること是の如くならば、　常に當に彼を遠離し、　道に恐怖有るが如くすべし。

居士子、四事に因るが故に[一八]言語は親しきに非ずして親しきが似如し。云何が四と爲す。一には過去の事を認む。二には必ず當來の事を辯ず。三には虛りて眞說せず。四には現事必ず滅す、我當に作すべし、認說するを作さずとて』。ここに於て世尊この頌を說きて曰はく、

過[去]及び未來を認め、　虛じく現滅の事を論ず、　當に作すべし、說くことを作さずとて。
親しきに非ずして親しきが如しと知らば、　常に當に彼を遠離し、　道に恐怖有るが如くすべし。

居士子、四事に因るが故に[一九]惡趣伴は親しきに非ずして親しきが似如し。云何が四と爲す。一には種種の戲を敎ふ。二には非時の行を敎ふ。三には敎へて酒を飲ましむ。四には惡知識に親近せしむ』。ここに於て世尊この頌を說きて曰はく、

若干種の戲と、　酒を飲み他の妻を犯すを敎へ、　下を習ひて勝を習はず。彼滅すること月の盡くるが如し。常に當に彼を遠離し道に恐怖有るが如くすべし。

居士子、[二〇]善親は、當に知るべし。四種有り。云何が四と爲す。一には苦樂を同じくするは、當に知るべし、これ善親なり。二には愍念は、當に知るべし、これ善親なり。三には利を求むるは、當に知るべし、これ善親なり。四には饒益は、當に知るべし、これ善親なり。居士子、四事に因るが

【一七】（2）面前愛言非親似如親。

【一八】（3）言說非親似如親。

【一九】（4）惡趣伴非親似如親。

【二〇】四種善親。

恣にして自ら護らず、此處に人を壞敗す。行來して防護せず、邪婬にして他の妻を犯し、心中常に怨を結び、求願して利有ること無し。酒を飲みて女色を念じ、此處に人を壞敗す。重ねて不善の行を作し、佷戾して敎を受けず、沙門・梵志を罵り、顚倒して邪見有り、凶暴にして黑業を行じ、此處に人を壞敗す。自ら乏しくして財物無く、酒を飲みて衣被を失ひ、負債涌泉の如し。彼必ず門族を壞る。數ば酒罏に往至し、惡朋友に親近し、應に得べき財は得ず、これ伴黨もて樂と爲し、多く惡朋友有りて常に不善の伴を隨へ、今世及び後世、二俱に敗壞するを得。人惡を習ふは轉た滅じ、善を習ふは轉た興盛となれば、勝を習ふ者轉た增す。この故に當に勝を習ふべし。昇を習へば則ち昇を得、常に智慧昇るに逮り、轉た淸淨戒を獲、及び微妙の上とを[獲]。晝は則ち眠臥するを喜び、夜は則ち遊行するを好み、放逸にして常に酒を飲み、家に居て成ずるを得ず。大寒と大熱に、謂く懶惰の人有りて至竟に業を成ぜず、終に財利を獲ず。若し寒と大熱には計らざること猶草の如し。若し人この業を作せば彼終に樂を失はず。

居士子、[一五]四の親しからずして親しきに似る有る。云何が四と爲す。一には事を知るは親しきに非ずして親しきが似如し。二には面前に愛言するは親しきに非ずして親しきが似如し。三には言語は親しきに非ずして親しきが似如し。四には惡趣伴は親しきに非ずして親しき似如し。居士子、四事に因るが故に[一六]事を知るは親しきに非ずして親しきが似如し。云何が四と爲す。一には事を知るを以て財を奪ふ。二には少を以て多を取る。三には或は恐怖を以てす。四には或は利の爲に狎習す。

ここに於て世尊この頌を說きて曰はく、

人知るを以て事と爲し、言語至りて柔軟にして怖、利の爲に狎習し、親しきに非ずして
親しきが如くなるを知らば、常に當に彼を遠離し、道に恐怖有るが如くすべし。

【一五】四不親而似親。

【一六】（1）知事非親似如親。

る。五には多く苦患を生ず。六には人の爲に誘らる。居士子、人非時に行ずれば作事を經營せず。作事營まざれば則ち功業成らず。未だ得ざる財物は則ち得る能はず。本有りし財物はすなはち轉た消耗す。居士子、若し人酒を飮み放逸なれば、當に知るべし、[一]六災患有り。一には現に財物失す。二には多く疾患有り。三には諸の鬪諍を增す。四には隱藏發露す。五には稱せず護らず。六には慧を滅し癡を生ず。居士子、人酒を飮み放逸なれば作事を經營せず。作事營まざれば則ち功業成らず。未だ得ざる財物は則ち得る能はず、本有りし財物はすなはち轉た消耗す。居士子、若し人惡知識に親近すれば、當に知るべし、[二]六災患有り。云何が六と爲す一には賊に親近す。二には欺誑に親近す。三には狂醉に親近す。四には放恣に親近す。五には嬉戲に逐會す。六にはこれを以て親友と爲し、これを以て伴侶と爲す。居士子、若し人惡知識に親近すれば作事を經營せず。作事營まざれば則ち功業成らず。未だ得ざる財物は則ち得る能はず、本有りし財物はすなはち轉た消耗す。居士子、若し人伎樂を憙べば、當に知るべし、[三]六災患有り。云何が六と爲す。一には歌を聞くを憙ぶ。二には舞を見るを憙ぶ。三には往きて樂を作すを憙ぶ。四には弄鈴を見るを憙ぶ。五には兩手を拍つを憙ぶ。六には大衆會を憙ぶ。居士子、若し人伎樂を憙べば作事を經營せず。作事營まざれば則ち功業成らず。未だ得ざる財物は則ち得る能はず、本有りし財物はすなはち轉た消耗す。居士子、若し人懶惰有れば、當に知るべし、[四]六災患有り。云何が六と爲す。一には大早に業を作さず。二には大晩に業を作さず。三には大寒に業を作さず。四には大熱に業を作さず。五には大飽に業を作さず。六には大飢に業を作さず。居士子、若し人懶惰なれば作事を經營せず。作事營まざれば則ち功業成らず。未だ得ざる財物は則ち得る能はず、本有りし財物はすなはち轉た消耗す。ここに於て世尊この頌を說きて曰はく、

種種戲れて色を逐ひ酒を嗜み憙びて樂を作し　惡知識に親近し、懶惰にして作業せず、放

【一】(3)飮酒の六災患。
【二】(4)惡知識親近の六災患。
【三】(5)伎樂を喜ぶの六災患。
【四】(6)懶惰の六災患。

り』。ここに於て世尊この頌を說きて曰はく、

殺生・不與取・邪婬にして他の妻を犯し、　言ふ所眞實ならざれば、　慧者は稱譽せず。

居士子、人[六]四事に因るが故にすなはち多く罪を得。云何か四と爲す。欲を行じ恚を行じ怖を行じ癡を行ずるなり』。ここに於て世尊この頌を說きて曰はく、

欲・恚・怖及び癡、　惡非法の行を行ぜば、　彼必ず名稱を滅す。　月の盡く沒するに向んとするが如し。

居士子、人[七]四事に因るが故にすなはち多く福を得。云何が四と爲す。欲を行ぜず、恚を行ぜず、怖を行ぜず、癡を行ぜざるなり』。ここに於て世尊この頌を說きて曰はく、

欲を斷じて恚・怖無く、　癡無くして法行を行ぜば、　彼名稱普く聞ゆ、　月の漸く盛滿するが如し。

居士子、財物を求むるは、當に知るべし、[八]六非道有り。云何が六と爲す。一に曰く種種の戲もて財物を求むるは非道と爲す。二に曰く非時に行じて財物を求むるは非道と爲す。三に曰く酒を飲み放逸にして財物を求むるは非道と爲す。四に曰く惡知識に親近して財物を求むるは非道と爲す。五に曰く常に妓樂を喜びて財物を求むるは非道と爲す。六に曰く懶惰にして財物を求むるは非道と爲す。居士子、若し人種種に戲るれば、當に知るべし、[九]六災患有り。云何が六と爲す。一には負くれば則ち怨を生ず。二には失へば則ち恥を生ず。三には負くれば則ち眠安からず。四には怨家をして喜を懷かしむ。五には宗親をして憂を懷かしむ。六には衆に在りて說く所人信用せず。居士子、人博戲すれば作事を經營せず。作事營まざれば則ち功業成らず。未だ得ざる財物は則ち得る能はず、本有りし財物はすなはち轉た消耗す。居士子、人非時に行ずれば、當に知るべし、[一〇]六災患有り。云何が六と爲す。一には自ら護らず。二には財物を護らず。三には妻子を護らず、四には人の爲に疑は

【六】四事。
【七】四事。
【八】六非道。
【九】（1）博戲の六災患。
【一〇】（2）非時行の六災患。

すべしとて。世尊見已りて往きて善生居士子の所に至りて問ひて曰はく『居士子、何の沙門・梵志の教を受け、汝に恭敬し供養し禮事するを教へて、平旦沐浴し新芻磨衣を著け手に生拘舍葉を執り、往きて水邊に至り、叉手して六方に向ひて禮するや、東方若し衆生有らば、我盡く彼を恭敬し供養し禮事せん。我盡く彼を恭敬し供養し禮事し已りて、彼亦當に我を恭敬し供養し禮事すべし。是の如く南方・西方・北方・下方「亦然り」。上方若し衆生有らば、我盡く彼を恭敬し供養し禮事せん。我盡く彼を恭敬し供養し禮事し已りて、彼亦當に我を恭敬し供養し禮事すべしとて』。善生居士子答へて曰く『世尊、我餘の沙門・梵志の教を受けず。世尊、我が父命終る時に臨みて、六方に因るが故に我に遺勅し善く教へ善く訶して曰く、善生、我命終りて後は汝當に叉手して六方に向ひて禮すべし。東方若し衆生有らば、我盡く彼を恭敬し供養し禮事せん。我盡く彼を恭敬し、供養し禮事し已りて、彼亦當に我を恭敬し供養し禮事すべし。是の如く南方・西方・北方・下方「亦然り」。上方若し衆生有らば、我盡く彼を恭敬し供養し禮事せん。我盡く彼を恭敬し供養し禮事し已りて、彼亦當に我を恭敬し供養し禮事すべしと。世尊、我父の遺教を受けて恭敬し供養し禮事するが故に平旦沐浴し新芻磨衣を著け、手に生拘舍葉を執り、往きて水邊に至り、叉手して六方に向ひて禮す、東方若し衆生有らば、我盡く彼を恭敬し供養し禮事せん。我盡く彼を恭敬し供養し、禮事し已りて、彼また當に我を恭敬し供養し禮事すべし。是の如く南方・西方・北方・下方「亦然り」。上方若し衆生有らば、我盡く彼を恭敬し供養し禮事せん。我盡く彼を恭敬し供養し禮事し已りて、彼亦當に我を恭敬し供養し禮事すべしとて』。世尊聞き已りて告げて曰はく「居士子、我六方有りと說き、無しと說かず。居士子、若し人有り、善く六方を別ち、四方の惡不善の業垢を離るれば、彼現法に於て敬すべく、重んずべく、身壞れ命終りて必ず善處に至り天中に上生す。居士子、衆生[五]四種の業四種の穢有り。云何が四と爲す。居士子、殺生はこれ衆生の業種・穢種なり。不與取・邪婬・妄言はこれ衆生の業種・穢種な

【五】四種の業種、穢種。

所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百三十五、善生經第十九[一]

我が聞きしこと是の如し。ある時佛王舍城に遊び[二]鐃蝦蟆林に在しぬ。その時善生居士子の父臨終の時、六方に因るが故にその子に遺勅し善く敎へ善く訶して曰く『善生、我命終して後は汝當に叉手して六方に向ひて禮すべし。東方若し衆生有らば、我盡く彼に恭敬し供養し禮事せん。我盡く彼に恭敬し供養し禮事し已りて、彼亦當に我に恭敬し供養し禮事すべし。是の如く南方・西方・北方・下方[亦然り]。上方若し衆生有らば、我盡く彼に恭敬し供養し禮事せん。我盡く彼に恭敬し供養し禮事し已りて、彼亦當に我に恭敬し供養し禮事すべしと』。善生居士子父の敎を聞き已りて、父に白して曰く『唯當に尊の勅の如くすべし』。ここに於て善生居士子父命終して後平旦沐浴し[三]新芻磨衣を著け、手に[四]生拘舍葉を執り、往きて水邊に至り叉手して六方に向ひて禮しぬ、東方若し衆生有らば我盡く彼に恭敬し供養し禮事せん。我盡く彼に恭敬し供養し禮事し已りて、彼亦當に我に恭敬し供養し禮事すべしとて。是の如く南方・西方・北方・下方[亦然り]。上方若し衆生有らば、我盡く彼に恭敬し供養し禮事せん。我盡く彼に恭敬し供養し禮事し已りて、彼亦當に我に恭敬し供養し禮事すべしとて。彼の時世尊夜を過ぎて平旦、衣を著け鉢を持ち、王舍城に入りて而も乞食を行じたまひぬ。世尊王舍城に入りて乞食する時遙かに善生居士子平旦沐浴し新芻磨衣を著け、手に生拘舍葉を執り、往きて水邊に至り、叉手して六方に向ひて禮するを見たまひぬ、東方、若し衆生有らば、我盡く彼を恭敬し供養し禮事せん。我盡く彼を恭敬し供養し禮事し已りて、彼亦當に我を恭敬し供養し禮事すべしとて、是の如く南方・西方・北方・下方[亦然り]。上方若し衆生有らば、我盡く彼を恭敬し供養し禮事せん。我盡く彼を恭敬し供養し禮事し已りて、彼亦當に我を恭敬し供養し禮事

【一】D. 31, Siṅgālovāda-suttanta.「長阿含」一一卷「善生經」、安世高譯「尸伽羅越六方禮經」、支法度譯「善生子經」。
【二】鐃蝦蟆林 (Kalandaka-nivāpa)。
【三】新芻摩衣。芻摩(Khoma)とは麻の一種。
【四】生拘舍葉。なまの拘舍(Kusa)草の葉。

尊、我を受けて優婆塞と爲したまへ。今日より始めて終身自ら歸し乃ち命盡くるに至らん』。ここに於て天王釋五結樂子を稱歎して曰く『善き哉、善き哉、汝五結大いに我を益しぬ。所以者何。汝に由るが故に佛定より寤めたまひぬ。汝先に世尊をして定より寤めたてまつらしを以ての故に、我等をして後に佛を見るを得しめぬ。五結、我ここより歸り、耽浮樓伎樂王女、賢月色を以て嫁して汝に與へて婦と作し、及びその父樂王の本國を［與へ］、汝を拜與して伎樂王と作さん』。ここに於て天王釋三十三天に告げて曰く『汝等共に來れ。若し我等本梵天王の爲に、梵天上に住し、再び三たび恭敬禮事せしは、彼今盡く世尊の爲に恭敬禮事せん。所以者何。世尊梵天にして、梵天造化に當り最尊にして衆生・衆生の有及び當有彼所を生じ、知るべきは盡く知り、見るべきは盡く見たまふ』。ここに於て天王釋及び三十三天、五結樂子、若し本梵天の爲に、梵天上に住して再び三たび恭敬禮事せるは、彼盡く世尊の爲に恭敬禮事し、如來・無所著・等正覺を稽首しぬ。ここに於て天王釋及び三十三天・五結樂子再び世尊の爲に恭敬禮事し、佛足を稽首し遶三匝し已りて即ち彼處に於て忽ち沒して現ぜず。その時梵天色像巍巍たり光耀焜燁として夜將に且に向はんとするに、佛の所に往詣し佛足を稽首し却きて一面に住し即ち時に偈を以て世尊に白して曰く、

『多くの饒益と義との爲に、　利義を見て天に曰ふ、　賢、摩竭國に住し、　婆娑婆事を問ふ。

大仙人この法を說きし時、天王釋塵を遠ざけ垢を離れ諸法の法眼生じ、及び八萬の諸天亦塵を遠ざけ垢を離れ諸法の法眼生じぬ』。ここに於て世尊梵天に告げて曰はく『是の如し、是の如し。梵天の說く所、

多くの饒益と義との爲に、　利義を見て天に曰ふ、　賢、摩竭國に住し、　婆娑婆事を問ふと。

梵天、我法を說きし時、天王釋塵を遠ざけ垢を離れ諸法の法眼生じ、及び八萬の諸天亦塵を遠ざけ垢を離れ諸法の法眼生じぬ』。佛說是の如し。時に天王釋及び三十三天・ヶ結樂子幷に大梵天佛の

封戸・食邑種種具足し、謂く刹利長者族・梵志長者族・居士長者族・及び餘の族極大富樂にして資財無量、畜牧產業稱計すべからず、封戸・食邑種種具足し、是の如き族に生じ已りて諸根を成就し、如來所說の法律に信を得る有れば、信を得已りて鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道し、智を覺り、智を覺り已りて、若し智を得ればすなはち究竟智を得、究竟邊を得、智を學び智を學び已りて、若し智を得て究竟智を得ざれば、若しは諸天有りて大福祐有り、色像巍巍として光耀煒燁たり、極めて威力有り、安隱・快樂にして長く宮殿に住し、最上に生じ、我彼の中に生ぜんと』。ここに於て天王釋而も頌を說きて曰く、

天身を捨離し、　來下して人間に生じ　愚癡に入胎せず、　我が意の樂ふ所に隨はん。　身具足するを得已りて、　質直正道に逮り、　具足梵行を行じ、　常に乞食を樂しまん。

智を學び、智を學び已りて、若し智を得れば、すなはち究竟智を得、究竟邊を得、智を學び智を學び已りて、若し智を得て究竟智を得ざれば、當に最上妙天と作るべし。諸天名を聞き、色究竟天往きて彼の中に生ぜん。大仙人、願はくは當に阿那含を得べし。大仙人、我今定んで須陀洹を得』。世尊問ひて曰はく『拘翼、汝何に因りてこの極好・極高・極廣を得、差降して而も自ら須陀洹を得と稱說するや』。時に天王釋偈を以て答へて曰く、

更に餘尊有らず、　唯世尊の境界のみ、　最上の差降を得。　未だ曾てここに有らず　大仙、我ここに坐し、　即ちこの天身に於て　我更に壽を增すを得、　是の如く自ら眼もて見る。

この法を說きし時、天王釋塵を遠ざけ垢を離れ諸法の法眼生じ、及び八萬の諸天亦塵を遠ざけ垢を離れ諸法の法眼生じぬ。ここに於て天王釋法を見法を得、白淨法を覺り、疑を斷じ惑を度し、更に餘尊無く、また他に從はず猶豫有ること無く、已に果證に住し、世尊の法に於て無所畏を得、即ち坐より起ち佛足を稽首して白して曰く『世尊、我今自ら佛・法及び比丘衆に歸す。唯願はくは世

た是の如き問を得るをや』。時に天王釋而も頌を說きて曰く、

釋往き釋往き已りて、　釋今この說を作す、　意の念ずる所を遠離し、　疑と諸の猶豫を除き、
久遠に世に行じ　推求して如來を索む。　沙門・梵志遠離し燕坐する在るを見て　謂へらく、
これ正盡覺なりと。　往きて奉敬し禮事す。　云何が昇進を得るやと、　是の如く我彼に問ふ。　問ひ已りて聖道及び道跡を知る能はず、　世尊今我が爲に、　若し意疑ふ所、　念ずる所及び思ふ所、　その意の行ずる所有るは　心の隱と現とを知り、　明者は我が爲に說きたまふ。　尊佛は尊くして師爲り、　尊は無著・牟尼たり、　尊、諸の結使を斷じ、　自ら度して衆生を度す。　覺は第一の覺たり、　御は最上の御たり、　息は尊妙の息たり。　大仙自ら度して[他]を度す。　故に我天尊を禮し、　人の最上を稽首し、　諸の愛刺を斷絕して、　我日親を禮す。

ここに於て世尊問ひて曰はく『拘翼、汝頗し昔時を憶ふに是の如き離を得、是の歡喜を得、謂く我より法喜を得たるや』。時に天王釋答へて曰く『世尊、唯大仙人自ら當にこれを知るべし。大仙人、[三六]昔ある時天及び阿修羅而も共に鬪ひ戰ひぬ。大仙人、天及び阿修羅共に鬪ひ戰ふ時、我この念を作しぬ、天をして勝を得て阿修羅を破らしめよ。諸の天の食及び阿修羅の食盡く三十三天の食たらしめよと。大仙人、天及び阿修羅共に鬪ひ戰ひし時天すなはち勝を得て阿修羅を破り、諸の天の食及び阿修羅の食盡く三十三天の食たらしめぬ。大仙人、その時離有り喜有り、刀杖・結・怨・鬪諍・憎嫉を雜へ、神通を得ず、覺道を得ず、涅槃を得ざりき。大仙人、今日離を得、喜を得、刀杖・結・怨・鬪諍・憎嫉を雜へず、通を得、覺を得、亦涅槃を得』。世尊問ひて曰はく『拘翼、汝何に因りて離を得、喜を得、謂く我より法喜を得るや』。時に天王釋答へて曰く『大仙人、我この念を作す、我ここに於て命終りて人間に生じ、彼若し族有りて極大富樂にして資財無量、畜牧產業、稱計すべからず、

【三五】日親（Ādiccabandhu）。釋迦牟尼佛の一名、佛は日種族の人。

【三六】天と阿修羅との戰。

唯然り大仙人、佛所說の法の如く、我悉くこれを知り、我疑を斷じ惑を度し猶豫有ること無し。佛の所說を聞くが故に』。時に天王釋佛の所說を聞き、善く受け善く持し白して曰く『大仙人、我長夜に於て疑惑の刺有りき、世尊今日而もこれを拔出したまふ。所以者何。謂く如來・無所著・等正覺の故に』。世尊問ひて曰はく『拘翼、汝頗し昔時曾て餘の沙門・梵志にかくの如き事を問ひしを憶ふや』。時に天王釋答へて曰く『世尊、唯大仙人、自ら當にこれを知るべし。大仙人、三十三天法堂に集在し、各愁慼を懷き數數歎說すらく、我等若し如來・無所著・等正覺に値はゞ、必ず當に往きて見るべしと。大仙人、然るに我等如來・無所著・等正覺に値ふを得ずして已り、すなはち五欲の功德を具足するを行じぬ。大仙人、我等放逸にして放逸を行じ已りて、大威德天子極妙處に於て即便ち命終りぬ。大仙人、我大威德天子極妙處に於て即ち命終るを見し時すなはち極厭を生じ身毛皆竪ち、我をしてこの處に於て速かに命終らしむること莫れと。大仙人、我これに因りて厭ひ、これに因りて憂慼するが故に、若し餘の沙門・梵志無事處・山林・樹下に在り、高巖に樂居し寂として音聲無く、遠離して惡無く人民有ること無く、隨順して燕坐し、彼遠離を樂しみ、燕坐し安隱快樂にして遊行するを見れば、我彼を見已りてすなはち謂へらく、これ如來・無所著・等正覺なりと。即ち往きて奉見しぬ。彼我を識らずして而も我に問ひて言はく、汝これ誰と爲すやと。我時に彼に答へぬ、大仙人、我はこれ天王釋なり。大仙人、我はこれ天王釋なりと。彼また我に問ひぬ、我曾て釋を見、亦釋種姓を見る。何等を以ての故に名づけて釋と爲し、何等を以ての故に釋種姓と爲すやと。我すなはち彼に答へぬ、大仙人、若し來りて我が事を問ふ有れば、我すなはち[三四]能ふ所に隨ひ、その力に隨ひて而も彼に答ふ。この故に我名づけて釋と爲すと。彼この說を作しぬ、我等若しその事に隨ひて以て釋に問はゞ、釋亦その事に隨ひて我に答へよと。彼我に事を問ふも我彼に問はず、彼我に歸命するも我彼に歸命せざりき。大仙人、彼の沙門梵志に從ひて竟に威儀法の敎を得ず、況やま

【三四】「釋」といふ名の由來。

を一にせざるや』。世尊聞き已りて答へて曰はく『拘翼、[三一]この世は若干種界有り無量界有り。彼所知界に隨ひ、卽ち彼の界その力に隨ひ、その方便に隨ひて一向にこれを說き「こは」眞諦にして餘は虛妄なりと爲す。拘翼、この故に一切の沙門・梵志同じく、說を一にし欲を一にし愛を一にし樂を一にし意を一にせざるのみ』。時に天王釋聞き已りて白して曰く『唯然り世尊、唯然り善逝、唯然り大仙人、この世は若干種界有り、無量界有り、彼所知界に隨ひ、卽ち彼の界その力に隨ひ、その方便に隨ひ、一向にこれを說き、「こは」眞諦にして餘は虛妄と爲す。大仙人、ここを以ての故に一切の沙門梵志同じく說を一にし欲を一にし愛を一にし樂を一にし意を一にせざるのみ。唯然り世尊、唯然り善逝、唯然り大仙人、佛所說の法の如く我悉くこれを知り、我疑を斷じ惑を度し猶豫有ること無し。佛の所說を聞くが故に』。時に天王釋佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『大仙人、一切の沙門・梵志究竟に至るを得、白淨を究竟し、梵行を究竟し、梵行を究竟し訖るや』。世尊聞き已りて答へて曰はく『拘翼、[三二]必ずしも一切の沙門・梵志究竟に至るを得、白淨を究竟し、梵行を究竟し、梵行を究竟し訖らず』。時に天王釋また問ひて曰く『大仙人、何等を以ての故に、必ずしも一切の沙門梵志究竟に至るを得、白淨を究竟し、梵行を究竟し、梵行を究竟し訖らざるや』。世尊聞き已りて答へて曰はく『拘翼、[三三]若し沙門・梵志有りて無上愛に於て盡く正しく善く心解脫せざれば、彼究竟に至らず、白淨を究竟せず、梵行を究竟せず、梵行を究竟し訖らず。拘翼、若し沙門・梵志有りて無上愛に於て盡く正しく善く心解脫すれば、彼究竟に至り、白淨を究竟し、梵行を究竟し梵行を究竟し訖る』。時に天王釋聞き已りて白して曰く『唯然り世尊、唯然り善逝、唯然り大仙人、若し沙門・梵志有りて無上愛に於て盡く正しく善く心解脫せざれば、彼究竟に至らず、白淨を究竟せず梵行を究竟せず、梵行を究竟し訖らず。大仙人、若し沙門・梵志有りて無上愛に於て盡く正しく善く心解脫すれば、彼究竟に至り、白淨を究竟し、梵行を究竟し梵行を究竟し訖る。唯然り世尊、唯然り善逝、

【三一】この世は若干界無量界なり。

【三二】沙門・梵志必ずしも究竟に至らず、梵行を究竟せず。

【三三】沙門・梵志無上愛に於て善く心解脫せざれば究竟に至らず、梵行を究竟せず。

戲道跡に趣向するに、命存する一時の頃、また幾ばくの法を斷じ幾ばくの法を行ずるや』。世尊聞き已りて答へて曰はく『拘翼、比丘は[二九]滅戲道跡に趣向するに、命存する一時の頃、また三法を斷じ三法を行ず。云何が三と爲す。一に曰く喜、二に曰く憂、三に曰く捨なり。拘翼、喜とは我二種有りと説く。行ずべきと行ずべからざるとなり。若し喜行ずべからざるは我即ち彼を斷じ、若し喜行ずべきは、我彼の爲に時を知る。念有り智有りて彼を成就するが故に、憂亦是の如し。拘翼、捨とは我亦二種有りと説く。行ずべきと行ずべからざるとなり。若し捨行ずべからざるは、我即ち彼を斷じ、若し捨行ずべきは、我彼の爲に時を知る。念有り智有りて彼を成就するが故に』。時に天王釋聞き已りて白して曰く『唯然り世尊、唯然り善逝、唯然り大仙人、比丘は滅戲道跡に趣向するに、命存する一時の頃、三法を斷じ三法を行ず。云何が三と爲す。一に曰く喜、二に曰く憂、三に曰く捨なり。大仙人喜とは二種有りと説く。行ずべきと行ずべからざるとなり。若し喜惡不善の法を増長し善法を減損するは、大仙人即ち彼を斷じ、若し喜惡不善の法を減損し善法を増長するは、大仙人彼の爲に時を知る。念有り智有りて彼を成就するが故に。憂亦是の如し。大仙人捨とは亦二種有りと説く。行ずべきと行ずべからざるとなり。若し捨惡不善の法を増長し善法を減損するは、大仙人即ち彼を斷じ、若し捨惡不善の法を減損し、善法を増長するは、大仙人彼の爲に時を知る。念有り智有りて彼を成就するが故に。唯然り世尊、唯然り善逝、唯然り大仙人、佛所説の法の如く我悉くこれを知り、我疑を斷じ惑を度し猶豫有ること無し。佛の所説を聞くが故に』。時に天王釋佛の所説を聞きて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『大仙人、一切の沙門・梵志同じく説を一にし欲を一にし愛を一にし樂を一にし意を一にするや』。世尊聞き已りて答へて曰はく『拘翼、[三〇]一切の沙門・梵志同じく説を一にし欲を一にし愛を一にし樂を一にし意を一にするにあらず』。時に天王釋また問ひて曰く『大仙人、一切の沙門・梵志何等を以ての故に同じく説を一にし欲を一にし愛を一にし樂を一にし意

【二九】滅戲道跡に趣向するには命存する一時の頃、喜(Somanassa)、憂(Domanassa)、捨(Upekkha)の三法を斷ず。

【三〇】沙門梵志は説・欲・愛・樂・意を一にせず。

所説を聞くが故に』。時に天王釋佛の所説を聞きて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『大仙人、比丘は滅戲道跡に趣向するに幾ばくの法有りて從解脫を護り、幾ばくの法を行ずるや』。世尊聞き已りて答へて曰はく『拘翼、比丘は滅戲道跡に趣向するに[二八]六法有りて從解脫を護り、六法を行ず。云何が六と爲す。眼、色を視、耳、聲を聞き、鼻、香を嗅ぎ、舌、味を甞め、身、觸を覺り、意、法を知る。拘翼、眼色を視るとは我二種有りと説く、行ずべきと行ずべからざるとなり。若し眼色を視て行ずべからざるは我即ち彼を斷じ、若し眼色を視て行ずべきは我彼の爲に時を知る。念有り智有りて彼を成就するが故に。是の如く耳聲を聞き、鼻香を嗅ぎ、舌味を甞め、身觸を覺り。意法を知るとは、我亦二種有りと説く、行ずべきと行ずべからざるとなり。若し意法を知りて行ずべからざるは我即ち彼を斷じ、若し意法を知りて行ずべきは我彼の爲に時を知る。念有り智有りて彼を成就するが故に』。時に天王釋聞き已りて白して曰く『唯然り世尊、唯然り善逝、唯然り大仙人、比丘は滅戲道跡に趣向するに六法有りて從解脫を護り、六法を行ず。云何が六と爲す。眼色を視、耳聲を聞き、鼻香を嗅ぎ、舌味を甞め、身觸を覺り、意法を知る。大仙人眼色を視るとは二種有りと説く。行ずべきと行ずべからざるとなり。若し眼色を視て惡不善の法を增長し善法を減損するは大仙人即ち彼を斷じ、若し眼色を視て惡不善の法を減損し善法を增長するは大仙人彼の爲に時を知る。念有り智有りて彼を成就するが故に。是の如く耳聲を聞き、鼻香を嗅ぎ、舌味を甞め、身觸を覺る。大仙人意法を知るとは亦二種有りと説く。行ずべきと行ずべからざるとなり。若し意法を知りて惡不善の法を增長し善法を減損するは、大仙人即ち彼を斷じ、若し意法を知りて惡不善の法を減損し善法を增長するは大仙人彼の爲に時を知る。念有り智有りて彼を成就するが故に。唯然り世尊、唯然り善逝、唯然り大仙人、佛所説の如く我悉くこれを知り、我疑を斷じ惑を度し猶豫有ること無し。佛の所説を聞くが故に』。時に天王釋佛の所説を聞きて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『大仙人、比丘は滅

【二八】滅戲道跡に趣向するに六法あり。

はこれを行じて滅戯道跡に趣向す』。時に天王釋聞き已りて白して曰く『唯然り世尊、唯然り善逝、唯然り大仙人、滅戯道跡とは謂く八支聖道なり。正見乃至正定を八と爲す。大仙人、これを滅戯道跡と爲し、比丘はこれを行じて滅戯道跡に趣向す。唯然り世尊、唯然り善逝、唯然り大仙人、佛所説の法の如く我悉くこれを知り、我疑を斷じ惑を度し猶豫有ること無し。佛の所説を聞くが故に』。時に天王釋佛の所説を聞きて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『大仙人、比丘は滅戯道跡に趣向するに幾ばくの法を斷じ幾ばくの法を行ずるや』。世尊聞き已りて答へて曰はく『拘翼、比丘は滅戯道跡に趣向するに三法を斷じ三法を修行す。云何が三と爲す。一に曰く念、二に曰く言、三に曰く、求なり。拘翼、念とは我二種有りと説く。行ずべきと行ずべからざるとなり。若し念行ずべからざるは我即ち彼を斷じ、若し念行ずべきは我彼の爲に時を知る。念有り智有りて彼の念を成就せんが爲の故に。言亦是の如し。拘翼、求とは、我亦二種有りと説く、行ずべきと行ずべからざるとなり。若し求、行ずべからざるは我即ち彼を斷じ、若し求、行ずべきは我彼の爲に時を知る。念有り智有りて彼の求を成就するが故に』。時に天王釋聞き已りて白して曰く『唯然り世尊、唯然り善逝、唯然り大仙人、比丘は滅戯道跡に趣向するに三法を斷じ、三法を修行す。云何が三と爲す。一に曰く念、二に曰く言、三に曰く求なり。大仙人念に二種有りと説く、行ずべきと行ずべからざるとなり。若し念惡不善の法を増長し善法を減損するは、大仙人すなはち彼を斷じ、若し念惡不善の法を減損し善法を増長するは、大仙人彼の爲に時を知る。念有り智有りて彼の念を成就するが故に。言亦是の如し。大仙人求亦二種有りと説く、行ずべきと行ずべからざるとなり。若し求惡不善の法を増長し善法を減損するは、大仙人すなはち彼を斷じ、若し求惡不善の法を減損し善法を増長するは、大仙人、彼の爲に時を知る。念有り智有りて彼の求を成就するが故に。唯然り世尊、唯然り善逝、唯然り大仙人、佛所説の法の如く我悉くこれを知り、我疑を斷じ惑を度し猶豫有ること無し。佛の

【三七】滅戯道跡に趣向するに三法を斷じ三法を修行す。念・言・求これなり。

如く我悉くこれを知り、我疑を斷じ惑を度し猶豫有ること無し。佛の所説を聞くが故に』。時に天王釋佛の所説を聞きて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『大仙人、念は何に因り何に緣り、何より生ずると爲し何に由りて而も有り、また何に因由して念有ること無きや』。世尊聞き已りて答へて曰はく『拘翼、[二四]念は思に因り思に緣り、思より而も生じ思に由るが故に有り。若し思無ければ則ち念有ること無し。念に由るが故に欲有り、欲に由るが故に愛不愛有り、愛不愛に由るが故に慳嫉有り。[二五]慳嫉に由るが故に刀杖・鬪諍・憎嫉・諛諂・欺誑・妄言・兩舌有り、心中無量の惡不善の法を生ず。是の如くこの純大苦陰生ず。若し思無ければ則ち念有ること無く、若し念無ければ則ち欲有ること無く、若し欲無ければ則ち愛不愛無く、若し愛不愛無ければ則ち慳嫉無し。若し慳嫉無ければ則ち刀杖・鬪諍・憎嫉・諛諂・欺誑・妄言・兩舌無く、心中無量の惡不善の法を生ぜず、是の如くこの純大苦陰滅す』。時に天王釋聞き已りて白して曰く『唯然り世尊、唯然り善逝、唯然り大仙人、念は思に因り思に緣り、思より而も生じ思に由るが故に有り。若し思無ければ則ち念有ること無し。念に由るが故に欲有り、欲に由るが故に愛不愛有り、愛不愛に由るが故に慳嫉有り、慳嫉に由るが故に刀杖・鬪諍・憎嫉・諛諂・欺誑・妄言・兩舌有り、心中無量の惡不善の法を生ず。是の如くこの純大苦陰生ず。若し思無ければ則ち念有ること無く、若し念無ければ則ち欲有ること無く、若し欲無ければ則ち愛不愛無く、若し愛不愛無ければ則ち慳嫉無く、若し慳嫉無ければ則ち刀杖・鬪諍・憎嫉・諛諂・欺誑・妄言・兩舌無く、心中無量の惡不善の法を生ぜず。是の如くこの純大苦陰滅す。唯然り世尊、唯然り善逝、唯然り大仙人、佛所説の法の如く我悉くこれを知り、我疑を斷じ惑を度し猶豫有ること無し。佛の所説を聞くが故に』。時に天王釋佛の所説を聞きて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『大仙人、何者か滅戲道跡なる。比丘何を行じて滅戲道跡に趣向するや』。世尊聞き已りて答へて曰はく『拘翼、[二六]滅戲道跡とは謂く八支聖道なり。正見乃至正定を八と爲す。拘翼、これを滅戲道跡と謂ひ、比丘

【二四】念は思(Papañca-saññā-saṅkhām)によりて生ず。

【二五】慳嫉によるが故に刀杖・鬪諍乃至惡不善の法、純大苦陰生ず。

【二六】滅戲道跡(Nirodha-sā-ruppa-gāmini-paṭipadā)。

世尊、唯然り善逝、唯然り大仙人、佛所說の法の如く我悉くこれを知り我疑を斷じ惑を度し猶豫有ること無し。佛の所說を聞くが故に』。時に天王釋佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『大仙人、慳嫉は何に因り何に緣り、何より生ずると爲し何に由りて而も有るや。また何に因由して慳嫉無きや』。世尊聞き已りて答へて曰はく『拘翼、[二一]慳嫉は愛不愛に因り愛不愛に緣り、愛不愛より生じ愛不愛に由りて有り。若し愛不愛無ければ則ち慳嫉無し』。時に天王釋聞き已りて白して曰く『唯然り世尊、唯然り善逝、唯然り大仙人、慳嫉は愛不愛に因り愛不愛に緣り、愛不愛より生じ愛不愛に由りて有り。若し愛不愛無ければ則ち慳嫉無し。唯然り、世尊、唯然り善逝、唯然り大仙人、佛所說の如く、我悉くこれを知り我疑を斷じ惑を度し猶豫有ること無し。佛の所說を聞くが故に』。時に天王釋佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『大仙人、愛不愛は何に因り何に緣り、何より生ずると爲し何に由りて而も有り、また何に因由して愛不愛無きや』。世尊聞き已りて答へて曰はく『拘翼、[二二]愛不愛は欲に因り欲に緣り、欲より而も生じ欲に由るが故に有り。若し欲無ければ則ち愛不愛無し』。時に天王釋聞き已りて白して曰く『唯然り世尊、唯然り善逝、唯然り大仙人、愛不愛は欲に因り欲に緣り、欲より而も生じ欲に由るが故に有り。若し欲無ければ則ち愛不愛無し。唯然り世尊、唯然り善逝、唯然り大仙人、佛所說の法の如く我悉くこれを知り我疑を斷じ惑を度し猶豫有ること無し。佛の所說を聞くが故に』。時に天王釋佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『大仙人、欲は何に因り何に緣り、何より生ずると爲し何に由りて而も有り、また何に因由して欲有ること無きや』。世尊聞き已りて答へて曰はく『拘翼、[二三]欲は念に因り念に緣り、念より而も生じ念に由るが故に有り。若し念無ければ則ち欲有ること無し』。時に天王釋聞き已りて白して曰く『唯然り世尊、唯然り善逝、唯然り大仙人、欲は念に因り念に緣り、念より而も生じ念に由るが故に有り。若し念無ければ則ち欲有ること無し。唯然り世尊、唯然り善逝、唯然り大仙人、佛所說の法の

【二一】慳嫉は愛不愛(Piyapiya)によりて生ず。

【二二】愛不愛は欲(Chanda)によりて生ず。

【二三】欲は念(Vitakka)によりて生ず。

瞿婆後に說きて曰く、人中佛の勝るゝ有り、釋牟尼欲を知る。彼の子、中に念を失し、我訶して更にまた得、三中の一に於て則ち伎樂の中に生じ、二等正道を成じ天に在りて定根の樂あり。汝是の如き法を說き、弟子惑有ること無く、漏を度し邪疑を斷じ、佛の勝るゝを禮し根を伏す。若し彼諸の法を覺れば、二昇進處を得。彼昇進を得已りて梵天の中に生じ、我等彼の法を知り、大仙こゝに來り至る。

その時世尊すなはちこの念を作したまひぬ、この鬼長夜に諛諂有ること無し、亦欺誑無く、幻無く質直にして、若し問ふ者有れば盡く知らんと欲するが故に、觸嬈するを欲せず。彼の問ふ所も亦復是の如し。我寧ろ甚深の阿毘曇を說くべしと。世尊知り已りて天王釋の爲にこの頌を說きて曰はく、

現法に於て樂しむが故に亦後世樂なりと爲す。拘翼自ら恣に問ひ、意の樂ふ所に隨ひ、
彼彼の問ふ所盡く當に決斷を爲すべし。世尊已に聽され、日天義を見んと求め、摩竭
陀國に在りて賢[18]婆娑婆問ふ。

こゝに於て天王釋白して曰く『世尊、天・人・阿修羅・揵沓惒・羅刹及び餘の種種身各各幾ばくの結[19]有りや』。世尊聞き已りて答へて曰はく『拘翼、天・人・阿修羅・揵沓惒・羅刹及び餘の種種身各各二結有り。[20]慳及び嫉なり。彼各各この念を作す、我をして杖無く結無く怨無く恚無く諍無く鬪無く苦無く安樂にして遊行せしめよと。彼この念を作すと雖も然も故のごとく杖有り結有り怨有り恚有り諍有り鬪有り苦有りて安樂の遊行無し』。時に天王釋聞き已りて白して曰く『唯然り世尊、唯然り善逝、唯然り大仙人、天・人・阿修羅・揵沓惒・羅刹及び餘の種種身各各二結有り。彼この念を作す、我をして杖無く結無く怨無く恚無く諍無く鬪無く苦無く安樂にして遊行せしめよと。彼この念を作すと雖も然も故のごとく杖有り結有り怨有り恚有り諍有り鬪有り苦有りて安樂の遊行無し。唯然り

【一八】婆娑婆(Vāsava)。帝釋天の異名。
【一九】結(Saṁyojana)。煩惱をいふ。
【二〇】有情には慳(Macchariya)、嫉(Issā)の二結あり。

を離れ、身壞れ命終りて妙處三十三天に生ずるを得、我が爲に子と作りぬ。彼既に生じ已りて諸天悉く知る、[一四]瞿婆天子大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神有りと知る。大仙人、我また世尊の弟子三比丘等有りて亦世尊に從ひて梵行を修習し、欲を捨離せず、身壞れ命終りて餘の下賤の伎樂宮中に生ずるを見る、彼既に生じ已りて、日日來りて三十三天に至り諸天に供事し瞿婆天子に奉侍す。天子彼を見已りて而も頌を說きて曰く、

[一五]與眼の優婆私、我字して瞿毘と名け、佛及び法を奉敬し、淨意もて衆を供養す。我已に佛恩を蒙り、釋の子にして大祐德あり、妙に三十三に生じ、彼[等]祐天子として知る。

彼の本の比丘を見るに生を[一六]伎樂神に受け、叉手して面前に立ち、瞿婆爲に偈を說く。

これ本の瞿曇の子なり。我本人爲りし時、來りて我が家に至到りしを、飮食もて好く供養せり。こは本聖と等しく無上の梵行を行ぜしが、今他の爲に使はれ、[一七]日來天に奉事す。我本汝に承事し、聖の善く說ける法を聞き、信を得、戒を成就し、妙に三十三に生ず。汝本奉事を受け、無上の梵行を行じ、今他の爲に使はれ、日來天に奉事す。汝何を以て面と爲し、佛法を受持し已りて反り背きて法に向はざるや。この眼覺め善く說く。我昔汝等を見、今下伎樂に生ず、自ら非法の行を行じ、自ら非法に生ず。我本家に在居し、我が今の勝德を觀ず、女を轉じて天子と成り、自ら五欲の樂在り。彼瞿曇等を訶し、厭ひ已りて瞿曇を歎ず。我今當に進行すべし。天子の眞諦說、一彼に於て懃行し瞿曇の法律を憶ひ、欲の災患有るを知り、即ち彼欲を捨離す。彼欲の爲に結縛されしが、即ち捨て丶遠離するを得、象の羈絆を斷ずるが如く三十三天を度る。因陀羅・天・梵・一切皆來り集まる。即ち彼上に坐し去り、雄猛にして塵欲を捨つ。帝釋見已りて、勝天・天中の天を厭ふ。彼本下賤に生じて三十三天を度り、厭ひ已りて妙に言ふを息む。

[一四] 瞿婆天子(Gopaka devaputta)。

[一五] 與眼(Cakkhumant)。世尊を謂ふ、「有眼者」とするを正しとす。

[一六] 伎樂神(天)。乾闥婆天を謂ふ。

[一七] 日頃、平生の意。

時に天王釋再び三たび自ら名姓を稱し佛足を稽首し却きて一面に住し、三十三天及び五結樂子も亦佛足を稽首し却きて一面に坐しぬ。時に天王釋白して曰く『唯大仙人、我世尊を去ること近くして一坐するや、遠くして坐するや』。世尊告げて曰はく『汝我に近くして坐せ。所以者何。汝大天眷屬有り』。こゝに於て天王釋佛足を稽首し却きて一面に坐し、三十三天及び五結樂子も亦佛足を稽首し却きて一面に坐しぬ。その時閻陀羅石室忽然として廣大となりぬ。所以者何。佛の威神及び諸天の威德なり。時に天王釋坐しをはりて白して曰く『唯大仙人、我長夜に於て世尊を見んと欲し法を請問せんと欲す。大仙人、往昔ある時世尊舍衞國に遊び石巖中に住したまひぬ。大仙人、我その時自らの爲に及び三十三天の爲に千象車に乘りて鞞沙門大王の家に往至しぬ。その時鞞沙門大王の家に妾有り[一二]槃闍那と名づけぬ。その時世尊定に入りて寂然たり。彼の妾叉手して世尊の足を禮しぬ。大仙人、我彼に語げて曰く、妹、我今往きて世尊を見る時に非ず。世尊定に入りたまふ。若し世尊定より寤めたまはゞ、妹すなはち我が爲に佛の足を稽首し世尊に問訊せよ、聖體康强、安快無病にして居起輕便、氣力常の如きやと。是の如き說を作せ、唯大仙人、天王釋佛の足を稽首し世尊に問訊したてまつる、聖體康强、安快無病にして起居輕便、氣力常の如きやと。大仙人、彼の妹我が爲に佛の足を稽首し世尊に問訊しぬ。世尊、憶すと爲したまふや不や』。世尊告げて曰はく『拘翼、彼の妹汝が爲に我が足を稽首し具さに汝が意を宣べ我に問訊しぬ。我亦憶ふ。拘翼、汝の去る時に當りこの音聲を聞きてすなはち定より寤めぬ』。『大仙人、昔時我聞くに、若し如來・無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師・佛衆祐と號し世に出づる時は諸の天衆を增し阿修羅を減ずと。大仙人、我自ら眼もて世尊の弟子比丘を見るに世尊に從ひて梵行を修習し欲を捨て欲を離れ、身壞れ命終りて善處に至り天中に生ずるを得。大仙人、[一三]瞿毘釋女これ世尊の弟子なり。亦世尊に從ひて梵行を修習し、この女身を憎惡し男形を愛樂し女人の身を轉じて男子の形を受け、欲を捨て欲

【一二】槃闍那(Bhuñjati)。

【一三】瞿毘釋女(Gopikā Sakyan-dhitā)、

我も亦復彼の女を得んと求め欲しぬ。然るに大仙人、彼の女を求むる時竟に得ること能はず。我その時に於て彼の女の後に住して、すなはちこの欲相應偈・龍相應偈・沙門相應偈・阿羅訶相應偈を歌ひ頌しぬ。大仙人、我この偈を歌ひ頌せる時、彼の女廻顧し怡然として笑を含みて而も我に語げて曰く、五結、我未だ曾て彼の佛世尊を見ず。然るに我已に三十三天より彼の世尊・如來・無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師・佛衆祐と號するを聞く。五結、若し汝能く數ば世尊を稱歎すれば、汝と共に大仙人に事ふべし。我唯一たび共に會はん。自後また見ずと』。こゝに於て天王釋而もこの念を作しぬ、五結樂子已に世尊をして定より覺め起きしめ已りて我を善逝に通ずと。彼の時天帝釋告げて曰く『五結、汝卽ち彼に往き我が爲に佛足を稽首し世尊に問訊せよ、聖體康强、安快無病にして起居輕便、氣力常の如きやと。是の如き語を作せ、大仙人、天王釋佛足を稽首し世尊に問訊したてまつる、聖體康强、安快無病にして起居輕便、氣力常の如きやと。大仙人、天王釋及び三十三天世尊を見んと欲すと』。五結樂子白して曰く『唯然り』。こゝに於て五結樂子琉璃琴を捨て叉手を佛に向け白して曰く『世尊、唯大仙人、天王釋佛足を稽首し世尊に問訊したてまつる、聖體康强、安快無病にして起居輕便、氣力常の如きやと。大仙人、天王釋及び三十三天世尊を見んと欲す』。その時世尊告げて曰はく『五結、今天王釋、安隱快樂なり、及び諸の天・人・阿修羅・揵沓和・羅刹及び餘の種種の身安隱快樂なり。五結、天王釋我を見んと欲せばその欲する所に隨へ』。こゝに於て五結樂子佛の所說を聞き善く受け善く持し佛足を稽首し遶三匝して而も去り、天王釋の所に往詣し白して曰く『天王、我已に爲に世尊に白しぬ。世尊今天王を待ちたまふ。唯願はくは天王、自ら當に時を知りたまふべし』。こゝに於て天王釋及び三十三天五結樂子佛の所に往詣しぬ。時に天王釋佛足を稽首し再び三たび自ら名姓を稱して言はく『唯大仙人、我はこれ天王釋なり。我はこれ天王釋なり』。世尊告げて曰はく『是の如し、是の如し、拘翼、汝はこれ天王釋なり』。

賢、汝の父母、[五]月及び耽浮樓を禮す、謂く汝の殊妙を生み、我をして歡心を發さしむ。煩熱しては涼風を求め、渇しては冷水を飮まんと欲す。是の如く我汝を愛すること猶ほ[六]羅訶の法を愛するがごとし。水を收むること甚だ難きが如く、欲に著くも亦復然り。無量の生共に會し、施與無著の如し。池水淸くして且涼しく、底に金粟沙有り、如し龍象熱逼ればこの池水に入りて浴す。猶ほ鈎牽の象の如く。我が意汝が爲に伏す。所行汝覺らず、窈窕して未だ汝を得ず、我が意極めて汝に著き、煩冤我が心を燒く。この故に我樂しまず、人の虎口に入るが如く、釋子の思禪の如く、常に樂しみて一に在り。牟尼覺を得るが如く、汝の妙淨然を得、牟尼の樂しむ所の如く、無上正盡覺。是の如きは我が樂しむ所、常に汝を得んと求め欲す。病みて藥を得んと欲するが如く、飢ゑて食を得んと欲するが如し。賢、汝我が心を止む。猶ほ水の火を滅するが如し。若し我が所作福にして諸の無著に供養せば彼これ悉く淨妙にして我汝と共に報を受く。願はくは我汝と共に終り汝の獨沾を離れざらん。我寧ろ汝と共に死し相離れて生ずるを用ひず。釋、爲に我が願を與へよ。三十三天尊し、汝人の無上の尊なり。これ我が願、最も堅し。この故に大雄を禮し、人の最に稽首し、諸の愛刺を斷絶し、我日の親を禮す。

こゝに於て世尊三昧より起ち、五結樂子を讃歎して曰はく『善き哉、善き哉、五結、汝の歌音琴聲と相應し、琴聲歌音と相應し、歌音琴聲の外に出で、琴聲歌音の外に出です。五結、汝頗し昔時この欲相應偈・龍相應偈・沙門相應偈・阿羅訶相應偈を歌ひ頌せるを憶ふや』。五結樂子白して曰く『世尊、唯大仙人自ら當にこれを知りたまふべし。大仙人、昔時世尊初め道を覺るを得、[七]欝鞞羅、[八]尼連禪河岸の[九]阿闍惒羅尼拘類樹下に遊びたまひぬ。その時耽浮樓樂王の女、[一〇]賢月色と名づく。天有り[一一]結、摩兜麗御車の子と名づけ、彼女を求め欲しぬ。大仙人、彼當に彼の女を求め欲せる時に當り、

【五】月及耽浮樓（Timbaru Suriya-vacasa）。「チインバルと日の光榮あるもの」の意。
【六】羅訶法。阿羅漢の法。
【七】欝鞞羅（Uruvelā）。
【八】尼連禪河（Nerañjarā）。
【九】阿闍惒羅尼拘類（Ajapāla-Nigrodha）。
【一〇】賢月色（Bhaddā Suriya-vacasā）。
【一一】結、摩兜麗御車の子、御車摩兜麗（Mātali）の子結（Sikhaddhi）と呼ぶものゝ意。

巻の第三十三

百三十四、釋問經第十八[1]

我が聞きしこと是の如し。ある時佛摩竭陀國に遊び王舍城の東、㮈林村の北、鞞陀提山、因陀羅石室に在しぬ。その時天王釋佛摩竭陀國に遊び王舍城の東、㮈林村の北、鞞陀提山、因陀羅石室に在すと聞きぬ。時に天王釋[2]五結樂子に告げぬ『我、世尊摩竭陀國に遊び王舍城の東、㮈林村の北、鞞陀提山、因陀羅石室に在すと聞く。五結、汝來りて共に往きて佛を見よ』。五結樂子白して曰く『唯然り』。ここに於て五結樂子[3]琉璃の琴を挾み天王釋に從ひて行きぬ。三十三天、天王釋その意至重にして往きて佛を見んと欲すと聞き、三十三天も亦復天王釋に侍從して行きぬ。ここに於て天王釋及び三十三天・五結樂子猶ほ力士の臂を屈伸する頃の如く、三十三天より忽ち沒して現れず、已に摩竭陀國王舍城の東、㮈林村の北、鞞陀提山に住し、石室を去ること遠からず。その時鞞陀提山光耀極めて照らし明火熖の如し。彼の山の左右の居民これを見てすなはちこの念を作しぬ、鞞陀提山火燒し、普く然ゆと。時に天王釋一處に住し已りて告げて曰く『五結、世尊是の如く無事處・山林・樹下に住し、高巖に樂居し寂として音聲無く、遠離して惡無く人民有る無く、隨順して燕坐し大威德有り。諸天共に俱に彼の遠離し燕坐し安隱・快樂にして遊行するを樂しむ。我等未だ通らず、便ち前むべからず、五結、汝往きて先に通れ。我等然る後當に進むべし』。五結樂子白して曰く『唯然り』。こゝに於て五結樂子天王釋の敎を受け已りて琉璃の琴を挾み、卽ち先に因陀羅石室に往至し、すなはちこの念を作しぬ、この處佛を離るゝこと近からず遠からざるを知る。佛をして我を知りて我が音聲を聞かしめんと。彼の處に住し已りて琉璃琴を調べ[4]欲相應偈・龍相應偈・沙門相應偈・阿羅訶相應偈を作して而も頌を歌ひて曰く、

【一】D. 21, Sakkapañha-suttanta.「長阿含」一〇卷「釋提桓因問經」、法賢譯「帝釋所問經」、吉迦夜曇曜譯「雜寶藏經」（6）帝釋問事錄。

【二】五結樂子（Pañcasikha Gandhabbaputta）。「長阿」般遮翼。

【三】琉璃琴（Beluva-paṇḍu-vīṇā）。法賢譯瑠璃寶裝箜篌。

【四】巴利文には佛・法・阿羅漢・欲の四相應を擧ぐ。

無く　如去善逝と爲り、　比無く與に等しき無く、　名稱已に正に逮びたる佛の弟子婆
離。こはこれ百難佛、　本未だ曾て思惟せず、　優婆離の說く所、　諸天來りて彼に至り、
善く助けて諸の辯を加へ、　如法その人の如し。　尼犍親子佛十力の弟子に問ふ。

と』。尼犍親子問ひて曰く『居士、汝何の意を以て沙門瞿曇を稱歎するや』。優婆離居士報へて曰く『尊人、我が喩を說くを聽け。慧者喩を聞けば則ちその義を解す。猶ほ善き鬘師と鬘師の弟子種種の華を採り長き鬘を以て結びて種種の鬘を作るがごとし。是の如く尊人、如來・無所著・等正覺無量の稱歎有り。我の尊ぶ所、故を以て稱歎す』。この法を說く時優婆離居士塵を遠ざけ垢を離れ諸法の法眼生じぬ。尼犍親子、卽ち熱血を吐き、波和國に至り、この惡患を以て尋いですなはち命終りぬ。佛說是の如し。優婆離居士佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第三十二

極めて善き幻化の呪なり。尊人、彼の幻化の呪我が父母をして長夜に利・饒益・安隱・快樂を得しめ、及びその妻子・奴婢・作使[亦然り]、那難陀國王及び一切世間・天及び魔・梵・沙門・梵志・人より天に至るまで彼[等]をして長夜に利・饒益・安隱・快樂を得しむ』。尼揵親子語げて曰く『居士、那難陀を擧げて優婆離居士これ尼揵の弟子なるを知る。今は竟に誰の弟子と爲るや』。ここに於て優婆離居士卽ち座より起ち右膝を地に著け、若し[三三]方に佛有らんに叉手を彼の[方]に向け語げて曰く、『尊人、我が說く所を聽け、

雄猛にして愚癡を離れ、穢を斷じ整へて降伏し、敵無く微妙に思ひ、戒・禪・智慧を學び、安隱にして垢有る無き佛の弟子[三四]婆離。大聖は修習し已りて德を得、說くこと自在、善く念じ妙に正觀し、高ぶらず亦下らず、不動にして自在なるは佛の弟子婆離。曲無くして常に足ることを知り、慳を捨離して滿つるを得、沙門と作りて覺を成じ、甚深[最]後身尊の大士にして比無く、塵有る無き佛の弟子婆離。疾無く量るべからず、甚深にして牟尼を得、常に安隱勇猛にして法に住し微妙に思ひ、調御して常に戲れざる佛の弟子婆離。大龍は住みて高きことを樂しみ結盡きて解脫を得、應[供]辯才清淨にして慧生じ憂感を離れ、不還にして釋迦有る佛の弟子婆離。正に去りて禪思惟し、嬈有る無く清淨なり、常に笑ひて恚有る無く離を樂しみて第一を得、無畏にして常に專精なる佛の弟子婆離。七仙與に等しき無く、三達して梵に逮得し、淨浴して明燈の如く、息を得、怨結を止め、勇猛にして極めて清淨なる佛の弟子婆離。息を得、慧地の如く大慧もて世貪を除き、可祠無上の眼、上士與に等しき無く、御者にして恚有る無き佛の弟子婆離。望を斷じ無上の善あり、善く調し比無く御し、無上にして常に歡喜し、疑無くして光明有り、慢を斷じて無上覺なる佛の弟子婆離。愛を斷じ無比覺にして烟無く燎有る

[三三] 佛の居たまへりと思はるゝ方向に、合掌を向くるをいふ。

[三四] 婆離は勿論優婆離自身をいふ。

婦に語げて曰く、我已に兒の爲に獼猴子の戲具を買ひ來りて還りぬと。その婦見已りて色を嫌ひて好まず。卽ち夫に語げて曰く、君この獼猴の戲具を持ちて往きて染家に至り、染めて黃色と作し極めて愛すべからしめ、擣ちて光を生ぜしむべしと。梵志聞き已りて卽時にこの獼猴の戲具を持ちて往きて染家に至り而もこれに語げて曰く、我が爲にこの獼猴の戲具を染めて好き黃色と作し極めて愛すべからしめ、擣ちて光を生ぜしめよと。その時染家すなはち梵志に語げぬ、獼猴の戲具染めて黃色と作し極めて愛すべからしむるは、これ爾るべし。然も擣ちて光澤をして生ぜしむべからずと。ここに於て染家この頌を說きて曰く

獼猴色を受くるを忍び、　擣つを堪へ忍ぶ能はず、　若し擣てば則ち命終る。　終に椎打すべからず。　こはこれ臭穢の囊、　獼猴不淨を滿たすと。

尊人當に知るべし。尼揵の說く所亦復是の如し。他の難問を受くるに堪へ忍ぶこと能はず、亦思惟觀察するを得べからず。但愚を染めて慧を染めず。尊人また聽け、猶ほ淸淨の波羅㮈衣の如し。主持ち往きて彼の染家に至り而もこれに語げて曰く、爲にこの衣を染めて極めて好き色と作し愛すべからしめよ。亦爲に極めて擣ちて光澤を生ぜしめよと。彼の時染家、衣の主に語げて曰く、この衣染めて極めて好き色と作し愛すべからしむべし。亦極めて擣ちて光澤を生ぜしむべしと。ここに於て染家この頌を說きて曰く

波羅㮈衣の如く、　白淨にして色を受くるを忍び、　擣ち已れば則ち柔軟にして光色增して益益好し。

と。尊人當に知るべし。諸の如來・無所著・等正覺の說く所亦復是の如し。極めて能く他の難問を受くるを堪へ忍び、亦快く思惟觀察するを得べし。唯但慧を染め愚を染めず』。尼揵親子語げて曰く『居士、沙門瞿曇の幻呪の化する所と爲りぬ』。優婆離居士語げて曰く『尊人、善き幻化の呪なり。

ぬ。優婆離居士遙かに尼揵親子の大尼揵衆五百人と倶に入るを見て而もこの語を作しぬ『尊人、座有り。坐せんと欲せば意に隨へ』。尼揵親子語げて曰く『居士、汝應に爾るべきや。自ら高座に上りて結加趺坐して人と共に語ること出家者學道[者]の如くにして與る無し』。優婆離居士語げて曰く『尊人、我自ら物を有す。與へんと欲せばすなはち與へ、與へざればすなはち與へず。この座我が有なり。この故に我言ふ、座有り。坐せんと欲せば意に隨へと』。尼揵親子座を敷きて而も坐し語げて曰く『居士、何を以ての故に爾るや。沙門瞿曇を降伏せんと欲して而も反つて自ら降伏し來る。猶ほ人有り、眼を求めて林に入りて而も眼を失ひて還るが如し。是の如く居士、往きて沙門瞿曇を降伏せんと欲して反つて沙門瞿曇の爲に降伏せられて來る。猶ほ人有り、渴するを以て池に入りて而も反つて渴して還るが如し。居士も亦然り。往きて沙門瞿曇を降伏せんと欲して而も反つて自ら降伏して還る。何を以ての故に爾るや』。優婆離居士語げて曰く『尊人、我が喩を說くを聽け、慧者は喩を聞けば則ちその義を解す。尊人、譬へば一梵志年小の婦有り。彼の婦懷妊しその夫に語げて曰く、我今懷妊す。君去りて市に至り、兒の爲に好き戲具を買ひ來るべしと。時に彼の梵志その婦に語げて曰く、但卿をして安隱にして產むを得しめ已らば何ぞ無きを憂へんや。若し男を生まば當に卿の爲に男の戲具を買ひ來るべし。若し女を生まば亦當に爲に女の戲具を買ひ來るべしと。婦再び三たびに至りてその夫に語げて曰く、我今懷妊す。君去りて市に至り、速かに兒の爲に好き戲具を買ひ來れと。梵志も亦再び三たびに至りてその婦に語げて曰く、但卿をして安隱にして產むを得しめ已らば何ぞ無きを憂へんや。若し男を生まば當に卿の爲に男の戲具を買ひ來るべし。若し女を生まば亦當に爲に女の戲具を買ひ來るべしと。彼の梵志は極めて婦を憐念し、卽便ち問ひて曰く、卿、兒の爲に何の戲具を買はんと欲するやと。婦これに報へて曰く、君去りて兒の爲に獼猴子の好き戲具を買ひ來れ。梵志聞き已りて往きて市中に至り、獼猴子の戲具を買ひ、持ち還りてその

なり。尊、優婆離居士今已に沙門瞿曇の化を受けて化して弟子と作り已り、諸の尼揵の門に入るを聽さず、唯沙門瞿曇の弟子、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆私の入るを聽す』。尼揵親子告げて曰く『苦行、若し優婆離居士沙門瞿曇の化を受けて弟子と作らんは、終にこの處り無し。若し沙門瞿曇優婆離居士の化を受けて弟子と作らんは、必ずこの處り有り』。長苦行尼揵白して曰く『尊、若し我が說く所を信ぜざれば、願はくは尊自ら往きたまへ』。[三二] ここに於て尼揵親子大尼揵衆五百人と俱に優婆離居士の家に往詣しぬ。守門人遙かに尼揵親子の大尼揵衆五百人と俱に來るを見て而もこの說を作しぬ。『尊者優婆離居士今佛の化を受け化して弟子と作り、則ち諸の尼揵の門に入るを聽さず、唯世尊の四衆の弟子、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆私の入るを聽す。若し食を得んと欲せばすなはちここに住すべし。當に食を出して與ふべし』。尼揵親子語げて曰く『守門人、我食を用ひず。但優婆離居士を見るを得んと欲す』。守門人語げて曰く『願はくは尊ここに住したまへ。我今入りて尊者優婆離居士に白さん』。彼の守門人即ち入りて白して曰く『居士、當に知るべし、尼揵親子大尼揵衆五百人と俱に住まりて門外に在りて是の如き語を作す、我優婆離居士を見るを得んと欲すと』。優婆離居士守門人に告げぬ『汝中門に至りて床座を敷設し、訖らば還りて我に白せ』。守門人敎を受けて中門に往至し床座を敷設し訖りて還りて白して曰く『居士、當に知るべし。床を敷き已訖りぬ。唯願はくは居士、自ら當に時を知るべし』。優婆離居士守門人を將ゐて中門に往至し、若し床座有りて極めて高く廣大にして極めて淨く好き敷[物]、謂く優婆離居士本尼揵親子を抱きて坐せしめし所は、優婆離居士自らその上に處りて結加趺坐し、守門人に告げぬ『汝出でて尼揵親子の所に往至し、是の如き語を作せ、尊人、優婆離居士言ふ、尊人入らんと欲せば自ら意に隨ふべしと』。彼の守門人敎を受けて即ち出でて尼揵親子の所に至り、是の如き語を作しぬ『尊人、優婆離居士言ふ、尊人入らんと欲せば自ら意に隨ふべしと』。ここに於て尼揵親子大尼揵衆五百人と俱に入りて中門に至り

【三二】尼揵親子尙ほ信ぜず、自ら居士の家に至る。

比丘・比丘尼・優婆塞・優婆私の入るを聽すと聞き、長苦行尼揵[三〇]聞き已りて尼揵親子の所に往詣し白して曰く『尊、こはこれ我本說きし所なり』。尼揵親子問ひて曰く『苦行、何者ぞこれ汝本說きし所なるや』。長苦行尼揵答へて曰く『尊、我本說きし所、優婆離居士をして沙門瞿曇の所に往詣せしむるを欲せず。所以者何。沙門瞿曇、幻化の呪を知り能く呪もて弟子、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆私を化作す。恐らくは優婆離居士沙門瞿曇の化を受けて化して弟子と作らんとなり。尊、優婆離居士今已に沙門瞿曇の化を受け化して弟子と作り已りて諸の尼揵の門に入るを聽さず、唯沙門瞿曇の弟子比丘・比丘尼・優婆塞・優婆私の入るを聽す』。尼揵親子語げて曰く『苦行、若し優婆離居士沙門瞿曇の化を受けて弟子と作らんは終にこの處り無し。若し沙門瞿曇優婆離居士の化を受けて弟子と作らんは、必ずこの處り有り』。長苦行尼揵また白して曰く『尊、若し我が說く所を信ぜざれば尊自ら往くべし。亦使を遣すべし』。ここに於て[三一]尼揵親子告げて曰く『苦行、汝自ら彼に往詣してこれを看るべし、優婆離居士沙門瞿曇の化を受けて弟子と作ると爲すや、沙門瞿曇優婆離居士の化を受けて弟子と作ると爲すやと』。長苦行尼揵尼揵親子の敎を受け已りて優婆離居士の家に往詣しぬ。守門人遙かに長苦行尼揵の來るを見て而もこの說を作しぬ『尊者優婆離居士今佛の化を受け化して弟子と作り、則ち諸の尼揵の門に入るを聽さず、唯世尊の四衆の弟子、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆私の入るを聽す。若し食を得んと欲せばすなはちここに住すべし。當に食を出して與ふべし』。長苦行尼揵語げて曰く『守門人、我食を用ひず』。長苦行尼揵この事を知り已りて頭を奮ひて而も去り、尼揵親子の所に往詣し白して曰く『尊、こはこれ我本說きし所の如し』。尼揵親子問ひて曰く『苦行、何者ぞこれ汝の本說きし所なるや』。長苦行尼揵答へて曰く『尊、我本說きし所、優婆離居士をして沙門瞿曇の所に往詣せしむるを欲せず。所以者何。沙門瞿曇、幻化の呪を知りて能く呪もて弟子、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆私を化作す。恐らくは優婆離居士沙門瞿曇の化を受けて化して弟子と作らんと

【三〇】長苦行優婆離の歸佛を聞きて尼揵親子に訴ふ。

【三一】尼揵親子信ぜずして長苦行を居士の家に遣す。

すると尼揵に施與せざるとを知らん。世尊、我今再び自ら佛・法・及び比丘衆に歸す。唯願はくは世尊、我を受けて優婆塞と爲したまへ。今日より始めて終身自ら歸し乃ち命盡くるに至らん』。ここに於て世尊優婆離の爲に法を說き、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、無量の方便もて彼の爲に法を說き、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りて、諸佛の法の如く先に端正の法を說きたまひ、聞く者歡悅しぬ。謂く施を說き戒を說き生天の法を說き欲を毀呰して災患と爲し生死を穢と爲し、無欲を稱歎して妙道品白淨と爲したまひぬ。世尊彼の爲に是の如き法を說き已りて、佛彼歡喜心・具足心・柔軟心・堪耐心・昇上心・一向心・無疑心・無蓋心有り能有り力有りて正法を受くるに堪ふるを知りたまひて、謂く諸佛所說の正要の如く、世尊すなはち彼の爲に苦集滅道を說きたまひぬ。優婆離居士即ち坐中に於て四聖諦、苦習滅道を見、猶ほ白素の染めて色と爲し易きが如く、是の如く優婆離居士即ち坐中に於て四聖諦、苦習滅道を見ぬ。ここに於て優婆離居士法を見、法を得、白淨の法を覺り、疑を斷じ惑を度し、更に餘尊無くまた他に從はず、猶豫有ること無く已に果證に住し、世尊の法に於て無所畏を得、即ち坐より起ちて佛の爲に禮を作し『世尊、我今三たび自ら佛・法及び比丘衆に歸す。唯願はくは世尊、我を受けて優婆塞と爲したまへ。今日より始めて終身自ら歸し乃ち命盡くるに至らん』。ここに於て優婆離居士佛の所說を聞きて善く受け善く持し、佛足を稽首し遶三匝して而も歸り[二九]守門者に勅して『汝等當に知るべし。我今則ち世尊の弟子爲り。今日より始めて諸の尼揵來るも門に入るを聽すこと莫れ。唯世尊の四衆の弟子、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆私の入るを聽せ。若し尼揵來らば當に彼に語げて言ふべし、尊者、優婆離居士今佛の化を受け化して弟子と作り、則ち諸の尼揵の門に入るを聽さず、唯世尊の四衆の弟子、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆私の入るを聽す。若し食を須めばすなはちここに住すべし。當に食を出して與ふべし』と』。ここに於て長苦行尼揵優婆離居士沙門瞿曇の化を受け化して弟子と作り、則ち諸の尼揵の門に入るを聽さず、唯沙門瞿曇の弟子

【二九】守門者に勅して尼揵の入るを拒ましむ。

言するを得ること勿れ。是の如く勝人は默然として善を爲す』。優婆離居士白して曰く『世尊、我ここを以ての故に[二七]また世尊に於て重ねて歡喜を加ふ。所以者何。謂く世尊是の如き說を作したまふ、居士、汝默然として行じ宣言するを得ること勿れ。是の如く勝人默然として善を爲すと。世尊、若し我更に餘の沙門梵志の爲に弟子と作らば、彼等すなはち當に幢幡蓋を持ちて遍く行きて那難陀に宣令して是の如き說を作すべし、優婆離居士我が爲に弟子と作る。優婆離居士我が爲に弟子と作ると。然るに世尊この說を作したまふ。居士、汝默然として行じ宣言するを得ること勿れ。是の如く勝人默然として善を爲すと』。優婆離居士白して曰く『世尊、今日より始めて諸の尼揵の我が家の門に入るを聽さず、唯世尊、四衆の弟子、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆私の入るを聽さん』。世尊告げて曰はく『居士、彼の尼揵等は汝の家長夜に共に尊敬せる所なり。若しそれ來らば汝當に力に隨ひて彼を供養すべし』。優婆離白して曰く『世尊、我これを以ての故に[二八]また世尊に於て倍して歡喜を加ふ。所以者何。謂く世尊是の如き說を作したまふ、居士、彼の尼揵等は汝の家長夜に共に尊敬せる所なり。若しそれ來らば汝當に力に隨ひて彼を供養すべしと。世尊、我本世尊是の如き說を作すと聞きぬ。當に我に施與すべく他に施與すること莫れ。當に我が弟子に施與すべく他の弟子に施與すること莫れ。若し我に施與すれば當に大福を得べく、若し他に施與すれば大福を得ず。我が弟子に施與すれば當に大福を得べく、他の弟子に施與すれば大福を得ずと』。世尊告げて曰はく『居士、我是の如く說かず、當に我に施與すべく他に施與すること莫れ。我が弟子に施與し他の弟子に施與すること莫れ。若し我に施與すれば當に大福を得べく、若し他に施與すれば大福を得ず。我が弟子に施與すれば當に大福を得べく、若し他の弟子に施與すれば大福を得ずと。居士、我是の如く說く、一切に施與し隨心歡喜せよ。但不精進の者に施與すれば大福を得ず。精進の者に施與すれば當に大福を得べしと』。優婆離居士白して曰く『世尊、願はくは爲すこと無かれ。我自ら尼揵に施與

【二七】再び世尊を讃す。

【二八】三たび世尊を讃す。

有り、心自在を得。彼この說を作す、我以て一瞋念を發してこの一切の那難陀內をして燒きて灰と成らしめんと。居士、意に於て云何。彼の沙門梵志寧ろ能くこの一切の那難陀內をして燒きて灰と成らしむるや』。優婆離居士答へて曰く『瞿曇、何ぞ但一那難陀なる、何ぞ但二・三・四なる。瞿曇、彼の沙門・梵志大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神有り、心自在を得。若し一瞋念を發すれば能く一切の國、一切の人民をして燒きて灰と成らしめん。況や一那難陀をや』。世尊告げて曰はく『居士、汝當に思量して後に答ふべし。汝の說く所前後と違ひ、後前と違へば則ち相應せず。汝この衆に在りて自ら說きぬ、瞿曇、我眞諦に住し眞諦を以て答へん。沙門瞿曇、但當に我と共にこの事を論ずべしと』。世尊問ひて曰はく『居士、汝頗し曾て[三四]大澤無事・麒麟無事・麋鹿無事・靜寂無事・空野無事、無事は卽ち無事と聞きしや』。優婆離居士答へて曰く『瞿曇、我聞きしこと有り』。『居士、意に於て云何。彼誰か大澤無事、麒麟無事・麋鹿無事・靜寂無事・空野無事、無事は卽ち無事と爲すや』。優婆離居士默然として答へず。世尊告げて曰はく『居士、速かに答へよ。居士、速かに答へよ。今默然の時に非ず。居士、この衆に在りて自ら說きぬ、瞿曇、我眞諦に住し眞諦を以て答へん。沙門瞿曇、但當に我と共にこの事を論ずべしと』。ここに於て優婆離居士須臾く默然とし已りて語げて曰く『瞿曇、我默然せず。我但この義を思惟するのみ。[三五]瞿曇、彼の愚癡の尼揵、善く曉了せず解知する能はず良田を知らずして而も自ら審かならざるに長夜に我を欺く。彼の爲に誤られぬ。謂く沙門瞿曇に向ひて身罰を施設して最も重しと爲し、惡業を行ぜず惡業を作さざらしめ、口罰・意罰而も如かずと[說く]。如し我沙門瞿曇の所說に從ひて義を知らば、仙人一瞋念を發して能く大澤無事・麒麟無事・麋鹿無事・靜寂無事・空野無事、無事は卽ち無事ならしむ。世尊、我已に知る。善逝、我已に解す。[三六]我今自ら佛・法及び比丘衆に歸せん。唯願はくは世尊、我を受けて優婆塞と爲したまへ。今日より始めて終身自ら歸し乃ち命盡くるに至らん』。世尊告げて曰はく『居士、汝默然として行じ宣

【三四】大澤無事(Daṇḍakāraññaṃ)、麒麟無事(Kaliṅgāraññaṃ)、麋鹿無事(Mejjhāraññaṃ)、靜寂無事(Mātaṅgāraññaṃ ?)

【三五】優婆離尼揵親子に欺かれたるを悟る。

【三六】優婆離三寶に歸す。

諦を以て答へん。沙門瞿曇、但當に我と共にこの事を論ずべし』。世尊問ひて曰はく『居士、意に於て云何。若し尼揵有りて來り、布施を好み喜び、布施を樂しみ行じ、戲無くして不戲を樂しみ、極めて清淨にして極呪を行ずと爲す。若し彼行來する時多く大小の蟲を殺さば、云何ぞ居士、尼揵親子この殺生に於て報を施設するや』。優婆離居士答へて曰く『瞿曇、[一八]若し思へば大罪有り、若し思無ければ大罪無し』。世尊問ひて曰はく『居士、汝思を說きて何等と爲すや』。優婆離居士答へて曰く『瞿曇、意業これなり』。世尊告げて曰はく『居士、汝當に思量して而も後に答ふべし。汝の說く所、前後と違ふ。後前と違へば則ち相應せず。汝この衆に在りて自ら說きぬ。瞿曇、我眞諦に住し眞諦を以て答へん。沙門瞿曇、但當に我と共にこの事を論ずべしと。居士、意に於て云何。[一九]若し尼揵有りて來り、湯を飲みて冷水を斷ず。彼湯無き時すなはち冷水を飲まんと欲して冷水を得ず。彼すなはち命終る。居士、尼揵親子云何が彼の尼揵の生ずる所を說くべきや』。優婆離居士答へて曰く『瞿曇、天有り[二〇]意著と名づく。彼の尼揵命終り、[二一]若し意著して死せば必ず彼處に生ず』。世尊告げて曰はく『居士、汝當に思量して後に答ふべし。汝の說く所前後と違ひ、後前と違へば則ち相應せず。汝この衆に在りて自ら說きぬ、瞿曇、我眞諦に住し眞諦を以て答へん。沙門瞿曇、但當に我と共にこの事を論ずべしと。居士、意に於て云何。若使人有り利刀を持ち來り、彼この說を作す、[二二]我この那難陀內に於て一切衆生を一日中に於て斫剉斬截し、剝裂削割し一肉聚を作り一肉積を作らんと。居士、意に於て云何。彼の人寧ろ能くこの那難陀內に於て一切衆生を一日中に於て斫剉斬截し、剝裂削割し、一肉聚を作り一肉積を作るや』。優婆離居士答へて曰く『不なり。所以者何。この那難陀內極大富樂にして多く人民有り。この故に彼の人この那難陀內に於て一切衆生を、必ず一日中に於て斫剉斬截し、剝裂削割して一肉聚を作り一肉積を作ること能はず。瞿曇、彼の人唐じく大いに煩勞す』。『居士、意に於て云何。若し沙門梵志有り來りて[二三]大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神

【一八】若思者有大罪。

【一九】尼揵子は極度に殺生を戒め、冷水はその中に微生物を含む恐れあれば飲むべからず、熱水は可といふ。

【二〇】意著天(Manosatta deva)に生れん。

【二一】若意著死者(Manopatibaddhi kālaṁ karoti)。

【二二】那難陀の人民を一日の中に殺す能はず。

【二三】大如意足の沙門梵志は一瞋念を發して那難陀も國土も燒くことを得。

優婆離居士、沙門瞿曇の化を受けて弟子と作らんは、終にこの處り無し。若し沙門瞿曇、優婆離居士の化を受けて弟子と作らんは、必ずこの處り有り』。優婆離居士再び三たび尼揵親子に白して曰く『我今沙門瞿曇の所に往詣し彼と共に談論し降伏し已りて還らん』。尼揵親子亦再び三たび答へて曰く『汝速かに往くべし。我も亦沙門瞿曇を伏すべし。汝亦可なり。長苦行尼揵亦可なり』。長苦行尼揵また再び三たび白して曰く『我優婆離居士をして沙門瞿曇の所に往詣せしむるを欲せず。所以者何。沙門瞿曇幻化の呪を知り、能く呪もて弟子、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆私を化作す。恐らくは優婆離居士、沙門瞿曇の化を受け、化して弟子と作らん』。尼揵親子語げて曰く『苦行、若し優婆離居士沙門瞿曇の化を受けて弟子と作らんは、終にこの處り無し。若し沙門瞿曇優婆離居士の化を受けて弟子と作らんは、必ずこの處り有り。優婆離居士、汝去りて意に隨へ』。ここに於て[一七]優婆離居士尼揵親子の足に稽首し三匝して而も去り佛の所に往詣し共に相問訊し却きて一面に坐し問ひて曰く『瞿曇、今日長苦行尼揵來りてここに至れるや』。世尊答へて曰はく『來れり、居士』。優婆離居士問ひて曰く『瞿曇、頗し長苦行尼揵と共に論ずる所有りしや』。世尊答へて曰はく『論ずる所有りき』。優婆離居士語げて曰く『瞿曇、若し長苦行尼揵と共に論ぜる所有らば、盡く我が爲に說け。若し我聞き已らば或は能くこれを知らん』。ここに於て世尊長苦行尼揵と共に論ぜる所有りしもの、盡く彼に向ひて說きたまひぬ。その時優婆離居士聞きてすなはち歎じて曰く『善き哉、苦行、謂く尊師に於て弟子の法を行じ、所作・智辯・聰明にして決定し、安隱無畏に成就調御し、大辯才に逮り甘露幢を得、甘露界に於て自ら作證し成就して遊ぶ。所以者何。謂く[彼]沙門瞿曇に向ひて身罰を施設して最も重しと[爲し]、惡業を行ぜず惡業を作さざらしめ、口罰は然らず意罰最も下にして身罰の極大甚重なるに及ばず[と說きぬ]』。彼の時世尊告げて曰はく『居士、我汝と共にこの事を論ぜんと欲す。汝若し眞諦に住せば眞諦を以て答へよ』。優婆離居士報へて曰く『瞿曇、我眞諦に住し眞

【一七】優婆離居士往きて佛を見る。

隱無畏にして成就調御し、大辯才に逮り甘露幢を得、甘露界に於て自ら作證し成就して遊ぶ。所以者何。謂く汝沙門瞿曇に向ひて身罰を施設して最も重しと爲し、惡業を行せず惡業を作さざらしめ、口罰は然らず意罰最も下にして身罰の極大甚重なるに及ばずと[說く]』。この時 一二優婆離居士五百の居士と倶に集まりて衆中に在り、叉手を尼揵親子に向けぬ。ここに於て優婆離居士長苦行尼揵に語げて曰く『尊、已に再び三たび沙門瞿曇にかくの如き事を審定せるや』。長苦行尼揵答へて曰く『居士、我已に再び三たび沙門瞿曇にかくの如き事を審定しぬ』。優婆離居士長苦行尼揵に語げて曰く『我亦能く再び三たびに至りて沙門瞿曇にかくの如き事を審定し已りて牽挽する所に隨はん。猶ほ 一三力士の長髦羊を執へ牽挽する所に隨ふが如く、我も亦是の如く能く再び三たびに至りて沙門瞿曇にかくの如き事を審定し已りて牽挽する所に隨はん。猶ほ力士の手に 一四髦裘を執へ抖擻して塵を去るが如く、我も亦是の如く能く再び三たびに至りて沙門瞿曇にかくの如き事を審定し已りて牽挽する所に隨はん。猶ほ沽酒の師、沽酒の弟子漉酒嚢を取りて深水の中に著け、意の欲する所に隨ひ牽挽する所に隨ふが如く、我も亦是の如く能く再び三たびに至りて沙門瞿曇にかくの如き事を審定し已りて牽挽する所に隨はん。一五猶ほ龍象王年六十に滿ちて而も憍傲摩訶能加を以て牙足體具はり筋力熾盛なり。力士將ゐ去りて水を以て髀を洗ひ脊を洗ひ脇を洗ひ腹を洗ひ牙を洗ひ頭を洗ひ及び水中に戯るるがごとく、我も亦是の如く能く再び三たびに至りて沙門瞿曇にかくの如き事を審定し已りてその洗ふ所に隨はん。我沙門瞿曇の所に往詣し彼と共に談論し降伏し已りて還らん』。尼揵親子優婆離居士に語げて曰く『我も亦沙門瞿曇を伏すべし。汝亦可なり。長苦行尼揵亦可なり』。ここに於て長苦行尼揵、尼揵親子に白して曰く『我優婆離居士をして沙門瞿曇の所に往詣せしむるを欲せず。所以者何。一六沙門瞿曇幻化の呪を知り能く呪もて弟子、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆私を化作す。恐らくは優婆離居士、沙門瞿曇の化を受け、化して弟子と作らん。尼揵親子語げて曰く『苦行、若し

【一二】優婆離居士(Upāli gahapati)壯語す。

【一三】四の譬。

【一四】髦裘。長き毛の著ける皮衣。

【一五】原文「猶龍象王年滿六十而以憍傲（或傲）摩訶能加（或伽）……」巴利文「猶ほ齢六十歳に滿てる象の水深き蓮池に入りて「麻洗ひ」と稱する一種の戯をなすが如く、斯の如く余は沙門瞿曇に對して「麻洗ひ」の如き戯をなさん」。「憍傲摩訶能加」は saṇadhovika に當る筈なれど兩者の同一を認むるは困難なり。P. T. S. Dictionary はこれを Name of a particular kind of gambol of elephants in water と解し、Lord Chalmers はこれを the merry washingday と譯す。

【一六】長苦行曰ふ、沙門瞿曇幻化の呪を以て弟子を化作す。優婆離居士恐く彼に化せられん。

くの罰を施設して惡業を行ぜず惡業を作さざらしむるや』。その時[九]世尊答へて曰はく『苦行、我罰を施設して惡業を行ぜず惡業を作さざらしめず。我但業を施設して惡業を行ぜず惡業を作さざらしむ』。長苦行尼揵問ひて曰く『瞿曇、幾ばくの業を施設して惡業を行ぜず、惡業を作さざらしむるや』。世尊又また答へて曰はく『苦行、我三業を施設して惡業を行ぜず、惡業を作さざらしむ。云何が三と爲す。身業・口業及び意業なり』。苦行尼揵問ひて曰く『瞿曇、身業異なり口業異なり意業異なるや』。世尊又また答へて曰はく『苦行、我身業異なり口業異なり意業異なり』。長苦行尼揵問ひて曰く『瞿曇、この三業是の如く相似たり。行の業を施設して最も重しと爲し、惡業を行ぜず惡業を作さざらしむるや。身業・口業と爲すや、意業と爲すや』。[一〇]世尊又また答へて曰はく『苦行、この三業是の如く相似たり。[一〇]我意業を施設して最も重しと爲し、惡業を行ぜず惡業を作さざらしむ。身業・口業は則ち然らず』。長苦行尼揵問ひて曰く『瞿曇、意業を施設して最も重しと爲すや』。世尊又また答へて曰はく『苦行、我意業を施設して最も重しと爲す』。長苦行尼揵また再び三たび問ひて曰く『瞿曇、意業を施設して最も重しと爲すや』。世尊も亦再び三たび答へて曰はく『苦行、我意業を施設して最も重しと爲す』。ここに於て長苦行尼揵再び三たび世尊にかくの如き事を審定し已りて即ち座より起ち世尊を遶ること三匝して而も退き還り去り、尼揵親子の所に往詣しぬ。[一一]尼揵親子遙かに長苦行尼揵の來るを見て卽ち更に問ひて曰く『苦行、何處より來るや』。長苦行尼揵答へて曰く『尊、我那難陀波婆離㮈林の沙門瞿曇の處より來る』。尼揵親子問ひて曰く『苦行、頗し沙門瞿曇と共に論ずる所有りしや』。長苦行尼揵答へて曰く『共に論じぬ』。尼揵親子告げて曰く『苦行、若し沙門瞿曇と共に論ずる所有りしならば、盡く我が爲に說け。我或は能く彼の論ずる所を知らん』。ここに於て長苦行尼揵、世尊と共に論ずる所有りしもの盡く彼に向ひて說きぬ。尼揵親子聞きてすなはち歎じて曰く『善き哉苦行、謂く汝師に於て弟子の法を行じ、所作智辯聰明にして決定し、安

【九】世尊三業を施設して罰を施設せず。

【一〇】世尊曰く意業最重。

【一一】長苦行還りて尼揵親子に報ず。

卷の第三十二

百三十三、優婆離經第十七[一]

我が聞きしこと是の如し。ある時佛[二]那難陀に遊び[三]波婆離捺林に在しぬ。その時[四]長苦行尼揵中後に彷徉して佛の所に往詣し共に相問訊し却きて一面に坐しぬ。ここに於て世尊問ひて曰はく『苦行、尼揵親子幾ばくの行を施設して惡業を行ぜず、惡業を作さざらしむるや』。長苦行尼揵答へて曰く『瞿曇、我が尊師[五]尼揵親子我等の爲に行を施設して惡業を行ぜず、惡業を作さざらしめず。但我等の爲に罰を施設して惡業を行ぜず惡業を作さざらしむ』。世尊又また問ひて曰はく『苦行、尼揵親子幾ばくの罰を施設して惡業を行ぜず惡業を作さざらしむるや』。長苦行尼揵答へて曰く『瞿曇、我が尊師、[六]尼揵親子我等輩の爲に三罰を施設して惡業を行ぜず惡業を作さざらしむ。云何が三と爲す。身罰・口罰及び意罰なり』。世尊又また問ひて曰はく『苦行、云何が身罰異なり口罰異なり意罰異なるや』。長苦行尼揵答へて曰く『瞿曇、我等身罰異なり口罰異なり意罰異なり』。世尊又また問ひて曰はく『苦行、この三罰是の如く相似たり。尼揵親子何の罰を施設して最も重しと爲し、惡を行ぜず惡業を作さざらしむるや。身罰・口罰と爲すや、意罰と爲すや』。長苦行[七]尼揵答へて曰く『瞿曇、この三罰是の如く相似たり。我が尊師、尼揵親子身罰を施設して最も重しと爲し惡を行ぜず惡業を作さざらしむ。口罰然らず。意罰最も下にして身罰の極大甚重なるに及ばず』。世尊又また問ひて曰はく『苦行、汝身罰を説きて最も重しと爲すや』。長苦行尼揵答へて曰く『瞿曇、身罰最も重し』。世尊また再び三たび問ひて曰はく『苦行、汝身罰を説きて最も重しと爲すや』。長苦行尼揵亦再び三たび答へて曰く『瞿曇、身罰最も重し』。ここに於て[八]世尊再び三たび長苦行尼揵にかくの如き事を審定し已りてすなはち默然として住したまひぬ。長苦行尼揵問ひて曰く『沙門瞿曇、幾ば

【一】M. 56. Upāli-sutta.
【二】那難陀(Nāḷandā)。
【三】波婆離捺林(Pāvārika-Ambavana)。
【四】長苦行尼揵(Dīghatapassin Nigaṇṭha)。
【五】尼揵親子(Nigaṇṭha Nātaputta)。三卷「和波經」本文及び註(六)參照。
【六】尼揵親子三罰を施設す。
【七】尼揵子曰く身罰最重。
【八】再三審定已(Yāvatatiyaṃ patiṭṭhāpetvā。)

き已りて慧念無し。死後財隨はず、妻子及び奴婢、貨富倶に共に同じく、愚智亦復然り。智者憂を懷かず、唯愚のみ悒感を抱く、この故に智慧勝れば正覺の道に逮り得。有有に深著し、愚癡にして惡行を作し、法に於て非法もて行じ、力を以て他を強奪す。智少きもの他を習効し、愚多く惡行を作し、胎に趣き後世に至りて、數數生死を受く。已に出を受けて世に生じ獨り衆の惡事を作し、財の他に縛せられ、自ら惡を作して害せらるるが如く、是の如くこの衆生、後世に至到し、己の所作業の爲に自ら惡を作して害せらる。果熟して自ら墮ちるが如く、老少亦斯の如し。莊美愛樂を欲し、心好惡の色に趣き、欲の爲に縛害せられ、欲に因りて恐怖生す。王、我これを見て覺り、この沙門の妙を知る。

尊者賴吒惒羅の所說是の如し。拘牢婆王尊者賴吒惒羅の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第三十一

大王、彼の國、その所の財物・人民・力役を得べしと」。彼の國を得てこれを整御せんと欲するや』。拘牢婆王答へて曰く『賴吒惒羅、若し我是の如き豐かなる國、その所の財物・人民・力役有り、彼の人民を得て整御し治め[得]と知らば、我必ずこれを取らん』。是の如く南方・西方・北方［亦然り]。『大海岸より若し人有りて來り、信ずべく任ずべくして世を欺誑せず。來りて王に語げて言はく「我大海の彼の岸より來る。彼の國土を見るに極大富樂にして多く人民有り。大王、彼の國、その所の財物・人民・力役を得べしと」。彼の國を得てこれを整御せんと欲するや』。拘牢婆王答へて曰く『賴吒惒羅、若し我是の如き豐かなる國その所の財物・人民・力役有りて彼の人民を得て整御し治め得と知らば、我必ずこれを取らん』。尊者賴吒惒羅語げて曰く『大王、ここを以ての故に世尊この世滿つること無く厭足有ること無く、愛の爲に走使すと說きたまふ。我これを欲し忍樂し、我これを知見聞す。この故に鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして學道す』。拘牢婆王語げて曰く『若し賴吒惒羅の說く所、大王、この世滿つること無く厭足有ること無く、愛の爲に走使すとならば、我亦これを欲しこれを忍樂せん。所以者何。この世眞實に滿つること無く厭足有ること無く、愛の爲に走使す』。尊者賴吒惒羅、語げて曰く「大王、世尊、知[者]、見[者]、如來・無所著・等正覺我が爲にこの四事を說きたまふ。我これを知り忍樂し、我これを知見聞す。この故に鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして學道す』。ここに於て尊者賴吒惒羅、この頌を說きて曰く、

我世間の人を見るに財有るも癡にして施さず、　財を得てまた更に求め、　慳貪にして物を積聚す。　王者天下を得て整御することその力に隨ひ、　海內厭足無く、　また海外を求む。
王及び諸の人民、　未だ欲を離れず、　命盡くれば髮を散らして妻子哭す、　「嗚呼、苦伏し難し」と。　衣もて被せて而も埋藏し、　或は薪を積みて火に燒ぐ。　行に緣りて後世に至り、　燒

に家を捨て家無くして學道す。拘牢婆王語げて曰く『若し賴吒惒羅の說く所、大王、この世の一切老法に趣向すとならば、我亦これを欲しこれを忍樂す。所以者何。この世眞實に一切老法に趣向す』。拘牢婆王また問ひて曰はく『若し賴吒惒羅の說く所、大王、(3)この世、無常にして要ず當に捨て去るべしとならば、賴吒惒羅の向に說く所、これまた何の義有りや』。尊者賴吒惒羅語げて曰く『大王、我今王に問はん。解する所に隨ひて答へよ。大王、豐かなる拘樓國、及び豐かなる後宮、豐かなる倉庫有りや』。拘牢婆王答へて曰く『是の如し』。尊者賴吒惒羅また問ひて曰く『大王、豐かなる拘樓國及び豐なる後宮、豐かなる倉庫有らば、若し時に有る法來りて、依りて忍樂すべからずして破壞し一切の世死に歸せざる者無くば、その時、豐かなる拘樓國及び豐かなる後宮、豐かなる倉庫は、この世より持ちて後世に至るを得べきや』。拘牢婆王答へて曰く『不なり。所以者何。我獨にして二無く亦伴侶無くしてこの世より後世に至る』。尊者賴吒惒羅語げて曰く『大王、ここを以ての故に世尊この世無常にして要ず當に捨て去るべしと說きたまふ。我これを欲し忍樂し、我これを知見聞す。この故に鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして學道す』。拘牢婆王語げて曰く『若し賴吒惒羅の說く所、大王、この世無常にして要ず當に捨て去るべしとならば、我亦これを欲しこれを忍樂せん。所以者何。この世眞實に無常にして要ず當に捨て去るべし』。拘牢婆王また問ひて曰く『若し賴吒惒羅の說く所、大王、(4)この世、滿つる無く厭足有る無く、愛の爲に走使すとならば、賴吒惒羅の向に說く所、これまた何の義有りや。尊者賴吒惒羅答へて曰く『大王、我今王に問はん。解する所に隨ひて答へよ。大王、豐かなる拘樓國及び豐かなる後宮、豐かなる倉庫有りや』。拘牢婆王答へて曰く『是の如し』。尊者賴吒惒羅、また問ひて曰く『大王、豐かなる拘樓國及び豐かなる後宮、豐かなる倉庫有らば、若し東方より一人有りて來り、信ずべく任ずべく世を欺誑せず。來りて王に語げて曰く「我東方より來る。彼の國土を見るに極大富樂にして多く人民有り。

(3)此世無常要當捨去(Assako loko sabbaṁ pahāya gamaniyaṁ)。

(4)此世無滿無有厭足(Ūno loko atitto taṇhādāso)。

者に隨ひて能くこれを制止す。若し賴吒惒羅の說く所、大王、この世、護無く依恃すべき無しとならば、賴吒惒羅、向に說く所これ何の義有りや』。尊者賴吒惒羅、答へて曰く『大王、我今王に問はん。解する所に隨ひて答へよ。大王、この身頗る病有りや』。拘牢婆王答へて曰く『賴吒惒羅、今我がこの身常に風病有り』。尊者賴吒惒羅問ひて曰く『大王、風病發する時、極重の甚だしき苦を生ぜば、大王、その時彼の兒孫・兄弟・象軍・車軍・馬軍・步軍の皆射御を能くするもの、嚴毅勇猛の王子力士鍮邏騫提・摩訶能伽、占相・策慮・計算・知書・善能談論・君臣・眷屬・持呪・知呪に、汝等共に來りて暫く我に代りて極重の甚だしき苦を受け、我をして病無くして安樂を得しめよと語ぐるを得べきや』。拘牢婆王答へて曰く『不なり。所以者何。我自ら業を作り、業に因り業に緣りて獨り極苦甚重の苦を受く』。尊者賴吒惒羅語げて曰く『大王、ここを以ての故に世尊、この世、護無く依恃すべき無しと說きたまふ。我これを欲し忍樂し、我これを知見聞す。この故に鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして學道す』。拘牢婆王語げて曰く『若し賴吒惒羅の說く所、大王、この世護無く依恃すべき無しとならば、我亦これを欲しこれを忍樂す。所以者何、この世眞實に護無く依恃すべき無し』。拘牢婆王また問ひて曰く『若し賴吒惒羅の說く所、大王、(2)この世の一切老法に趣向すとならば、賴吒惒羅の向に說く所、これまた何の義有りや』。尊者賴吒惒羅答へて曰く『大王、我今王に問はん。解する所に隨ひて答へよ。若し大王、年或は二十四或は二十五ならば、意に於て云何。その時速疾なること今より何如。その時筋力・形體顏色今より何如』。拘牢婆王答へて曰く『賴吒惒羅、若し我時に年或は二十四或は二十五ならば、自らその時を憶ふに、速疾筋力・形體顏色我に勝る者無かりき。賴吒惒羅、我今極めて老い、諸根衰熟し壽過ぎて訖るに垂んとし、年八十に滿ちてまた能く起たず』。尊者賴吒惒羅告げて曰く『大王、ここを以ての故に世尊この世の一切老法に趣向すと說きたまふ。我これを欲し忍樂し、我これを知見聞す。この故に鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至信

（2）此世一切趣向老法（Upaniyati loko addhuvo）。

て化し得ぬ。賴吒惒羅、病衰を以ての故に鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして學道せるに非ず。賴吒惒羅、(2)往昔時、年幼き童子髮黑く清淨にして身體盛壯なり。その時倡伎樂を作し極めて以て自ら娛しみその身を莊嚴し常に喜びて遊戲しぬ。彼の時親屬皆それをして學道せしめんと欲せず。父母啼泣し憂慼し懊惱し、亦汝の出家學道するを聽さざりき。然るに汝鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして學道す。賴吒惒羅、老衰を以ての故に鬚髮を剃り袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして學道せず。賴吒惒羅、(3)この鍮蘆吒第一の家、最大の家、最勝の家、最上の家なり、謂く財物なり。賴吒惒羅、財衰を以ての故に鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして學道せず。賴吒惒羅、(4)この鍮蘆吒林の間、大豪親族親皆存在す。賴吒惒羅、親衰を以ての故に鬚髮を剃除し、袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして學道せず。賴吒惒羅、この四種の衰、或は衰有る者、鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして學道す。我賴吒惒羅を見るに都てこの衰の賴吒惒羅をして鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして學道せしむべき無し。賴吒惒羅、何等を知見し何等を聞くが爲に鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして學道するや』。尊者賴吒惒羅答へて曰く『大王、世尊、知[者]、見[者]、如來・無所著・等正覺爲に[10]四事を說きたまふ。我これを欲し忍樂し、我これを知見聞し、この故に鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして學道す。云何が四と爲す。大王、(1)この世、護無く依恃すべき無し。(2)この世の一切老法に趣向す。(3)この世常に非ず、要ず當に捨て去るべし。(4)この世滿つる無く厭足有ること無く愛の爲に走使す』。拘牢婆王問ひて曰く『賴吒惒羅、向の說く所、大王、(1)この世、護無く依恃すべき無しと。賴吒惒羅、我兒孫・兄弟枝黨有り、象軍・車軍・馬軍・步軍皆射御を能くし、嚴毅勇猛の王子、力士鉢邏寨提摩訶能伽あり、占相有り策慮有り、計算有り、善く書を知る有り善く談論する有り、君臣有り眷屬有り、呪を持し呪を知る。彼[等]諸方の恐怖有る

【10】說四事(Cattāro dhammuddesā uddiṭṭhā)。(一)此世無護無可依恃(Attāṇo loko anabhissaro)。

不淨を以てするに非ず』。拘牢婆王聞き已りて語げて曰く『我今淨を以て賴吒惒羅を請せん。不淨を
以てするに非ず。我が國の人民安隱快樂にして恐怖無く鬪諍無く亦棘刺無く苦使役無し。米穀豐饒
にして乞食するに得易し。賴吒惒羅、我が國中に住せよ。我當に如法を護るべし。また次に賴吒惒
羅、四種の衰有り。謂く衰衰するが故に鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學
道す。云何が四と爲す。病衰・老衰・財衰・親衰なり。賴吒惒羅、(1)云何が病衰なる。或は一人有り、
長く病み、疾患極めて重くして甚だ苦し。彼この念を作す、我長く病み疾患極めて重くして甚だ苦
し。我實に欲有るも欲を行ふ能はず。我今寧ろ鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くし
て學道すべしと。彼後時に於て病衰を以ての故に鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て家無く
して學道す。これを病衰と爲す。賴吒惒羅、(2)云何が老衰なる。或は一人有り、年耆に根熟し、壽
過ぎて訖るに垂んとす。彼この念を作す。我年耆に根熟し、壽過ぎて訖るに垂んとす。我實に欲有
るも欲を行ふ能はず。我今寧ろ鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道すべし
と。彼後時に於て老衰を以ての故に鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして學道す。
これを老衰と謂ふ。賴吒惒羅、(3)云何が財衰なる。或は一人有り、貧窮にして力無し。彼この念を
作す、我貧窮にして力無し。我今寧ろ鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして學道す
べしと。彼後時に於て財衰を以ての故に鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして學道
す。これを財衰と謂ふ。賴吒惒羅、(4)云何が親衰なる。或は一人有り、親里種を斷じて死亡し沒し
盡く。彼この念を作す、我親里種を斷じて死亡し沒し盡く。我今寧ろ鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至
信に家を捨て家無くして學道すべしと。彼後時に於て親衰を以ての故に鬚髮を剃除し袈裟衣を著け
至信に家を捨て家無くして學道す。これを親衰と謂ふ。賴吒惒羅、(1)昔時無病安隱成就し、平等の
食道冷かならず熱からず、平正安樂にして次に順ひて諍はず。これに由るの故に食噉含消安隱にし

【九】四種の衰(Cattāri parijuññāni)。
(1)病衰(Vyādhiparijuñña)。
(2)老衰(Jarāparijuñña)。
(3)財衰(Bhogaparijuñña)。
(4)親衰(Ñātiparijuñña)。

鞞蘆恕林を案行し已りて還りて拘牢婆王の所に詣り白して曰く『大王、當に知りたまふべし。我已に鞞蘆吒林を案行しぬ。大王の意に隨ひたまへ。大王、本爲に諸の群臣と共に正殿に坐し尊者賴吒恕羅を咨嗟し稱歎して、若し我賴吒恕羅族姓子この鞞蘆林に來ると聞かば、我必ず往きて見ん「と宣ひし」所の尊者賴吒恕羅族姓子今鞞蘆吒林中に在り醉醯勒樹の下に尼師檀を敷きて結加趺坐す。大王、見んと欲せばすなはち往きたまふべし』。拘牢婆王聞き已りて御者に告げて曰く『汝速かに駕を嚴れ。我今往きて賴吒恕羅を見んと欲す』。御者教を受けて即ち速かに駕を嚴り訖り還りて白して曰く『大王當に知りたまふべし。嚴駕已に辨じぬ。大王の意に隨ひたまへ』。ここに於て拘牢婆王即ち車に乘りて出で、鞞蘆吒林に往至し、遙かに尊者賴吒恕羅を見て即便ち車を下りて歩み進みて尊者賴吒恕羅の所に往至しぬ。尊者賴吒恕羅、拘牢婆王の來るを見て而もこの說を作しぬ『大王、今來りて自ら坐せんと欲するや』。拘牢婆王曰く『今我自己の境界に到ると雖も然も我が意、賴吒恕羅族姓子をして我を請じて坐せしめんと欲す』。尊者賴吒恕羅即ち拘牢婆王を請じて曰く『今別座有り大王坐すべし』。ここに於て拘牢婆王尊者賴吒恕羅と共に相問訊し却きて一面に坐し、賴吒恕羅に告げぬ『若し家衰へしが爲の故に出家學道するや。若し財物無きが爲の故に學道を行ぜば、賴吒恕羅、拘牢婆王が家多く財物有り。我財物を出して賴吒恕羅に與へ、賴吒恕羅に、戒を捨て道行を罷め、布施して快く福業を修せんと欲せよと勸む。所以者何。賴吒恕羅、師の教は甚だ難く、出家學道も亦復甚だ難し』。尊者賴吒恕羅聞き已りて語げて曰く『大王、今不淨を以て我を請ず。清淨の請に非ず』。拘牢婆王聞き已りて問ひて曰く『我當に云何が清淨を以て賴吒恕羅を請じ、不淨を以てするに非ざるべきや』。尊者賴吒恕羅語げて曰く『大王、應に是の如く語ぐべし。賴吒恕羅、我が國の人民安隱快樂にして恐怖無く鬪諍無く亦棘刺無く苦使役無し。米穀豐饒にして乞食するに得易し。賴吒恕羅、我が國中に住せよ。我當に如法を護るべしと。大王、王、是の如く淨を以て我を請じ、

吒恕羅の諸の婦等抈き一面に住し啼泣して涙を垂れ、而もこの語を作しぬ『我〔等〕賢郎の妹に非ず。然るに賢郎我〔等〕を喚びて妹と爲す』。こゝに於て尊者賴吒恕羅、迴還顧視して父母に白して曰く『居士、若し食を施さばすなはち時を以て施せ。何ぞ相嬈るを爲すや』。その時父母卽ち坐より起ち自ら澡水を行じ上味の餚饌種種豐饒の食噉含消を以て手もて自ら斟酌し極めて飽滿せしめ、食し訖り器を收め澡水を行じ竟りて一小床を取りて別に坐し法を聽きぬ。尊者賴吒恕羅、父母の爲に法を說き勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、無量の方便もて彼の爲に法を說き、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りて卽ち坐より起立し頌を說きて曰く、

この嚴飾せる形を觀るに、　珍寶瓔珞等、　右髻、その髮を縈ひ、　紺黛の畫ける眉目、　これ愚癡の人を欺くも彼岸に度れるを誑さず。　衆の好綵色を以て臭穢の身を莊嚴す、　これ愚癡の人を欺くも彼岸に度れる〔者〕を誑さず。　衆の香もて遍く體を塗り、　雌黃もてその足を黃にす、　これ愚癡の人を欺くも彼岸に度れる〔者〕を誑さず。　身に淨妙の衣を服し、　莊嚴猶ほ幻化のごとし、　これ愚癡の人を欺くも彼岸に度れる〔者〕を誑さず、　鹿羂繩を斷絕し及び鹿門を破壞し、　我餌を捨離して去る、　誰か鹿縛を樂しまん。

尊者賴吒恕羅、この頌を說き已りて如意足を以て虛に乘じて而も去り、[八]蘆吒林に至り彼の林中に入りて鞞醯勒樹の下に於て尼師檀を敷きて結跏趺坐しぬ。その時　拘牢婆王及び諸の群臣前後圍遶して正殿に坐し尊者賴吒恕羅を咨嗟し稱歎しぬ『若し我賴吒恕羅族姓子この　蘆吒に來ると聞かば、我必ず往きて見ん』。ここに於て拘牢婆王獵師に告げて曰く『汝去りて蘆吒林を案行せよ。我出獵せんと欲す』。獵師敎を受けて卽便ち、蘆吒林に案行しぬ。ここに於て獵師蘆吒林に案行し、尊者賴吒恕羅の鞞醯勒樹の下に在り、尼師檀を敷きて結跏趺坐する見てすなはちこの念を作しぬ、爲に拘牢婆王及び諸の群臣共に正殿に坐して咨嗟し稱歎する所の者今已にここに在りと。その時獵師

【八】　拘牢婆(Koravya)。

く福業を修せんと欲すべし。所以者何。世尊の境界は甚だ難く甚だ難し。出家學道も亦復甚だ難し』。尊者賴吒惒羅その母に白して曰く『我今說く所有らんと欲す。能く聽かるゝや不や』。尊者賴吒惒羅の母語げて曰く『居士の子、汝說く所有らば我當にこれを聽くべし』。尊者賴吒惒羅その母に白して曰く『當に新らしき布囊を作りて用て錢を盛り滿し車を以てこれを載せ、恒伽江に至り深處に瀉ぎ著くべし。所以者何。この錢に因るが故に、人をして憂苦し愁慼し啼哭せしめて快樂を得ず』。こゝに於て尊者賴吒惒羅の母而もこの念を作しぬ『この方便を以ても子賴吒惒羅をして戒を捨て道を罷めしむること能はず。我寧ろその本の婦の所に至りて是の如き語を作すべし、諸の新婦等、汝先に著けし所の瓔珞を以てその身を嚴飾すべし。賴吒惒羅族姓子本家に在りし時極めて愛念せる所なり。この瓔珞を以て而かも身を嚴り已りて汝等共に賴吒惒羅族姓子の所に往至し各一足を抱きて而もこの語を作せ、不審速かにし、賢郎、何の天女の我[等]に勝る者有りて而も賢郎をして我を捨てて彼の爲に梵行を修せしむるやと』。こゝに於てその母卽ち尊者賴吒惒羅のその本の婦の所に至りて是の如き語を作しぬ『諸の新婦等、汝先に著けし所の瓔珞を以てその身を嚴飾すべし。賴吒惒羅族姓子本家に在りし時極めて愛念せる所なり。この瓔珞を以て速かに身を飾り已りて汝等共に賴吒惒羅族姓子の所に往至し各一足を抱きて而もこの語を作せ、不審し賢郎、何の天女の我[等]に勝る者有りて而も賢郎をして我を捨てゝ彼の爲に梵行を修せしむるやと』。彼の時尊者賴吒惒羅のその本の婦等卽ち各先に著けし所の瓔珞を以てその身を嚴飾し、尊者賴吒惒羅本家に在りし時極めて愛念せる所のこの瓔珞を以て身を嚴飾し已りて尊者賴吒惒羅の所に往詣し各一足を抱きて而もこの說を作しぬ『不審し賢郎、何の天女の我[等]に勝る者有りて而も賢郎をして我を捨てゝ彼の爲に梵行を修せしむるや』。尊者賴吒惒羅本の婦に語げて曰く『諸妹當に知るべし、我天女の爲の故に梵行を修せず。爲に梵行を修する所の者は、彼の義已に佛の敎を得、所作今已に成辦しぬ』。尊者賴

る飲食を以て鉢の中に瀉ぎ著くに、鉢の中に瀉ぎ著く時、その二相［即ち］その音聲とその手足を取りて識り、二相を取り已りて卽ち尊者賴吒惒羅の父の所に往至して而もこの語を作しぬ『尊今當に知るべし、尊の子賴吒惒羅還り來りてこの鍮蘆吒に至りぬ。往きてこれを見るべし』。尊者賴吒惒羅の父聞き已りて大いに歡喜踊躍し、左手に衣を攝り右手に鬚髪を摩抆し疾かに尊者賴吒惒羅の所に往詣しぬ。彼の時尊者賴吒惒羅壁に向ひてこの臭爛せる食を食しぬ。尊者賴吒惒羅の父、尊者賴吒惒羅壁に向ひてこの臭爛せる食を食ふを見て是の如き說を作しぬ『汝賴吒惒羅、汝至りて柔軟にして身體極めて好く常に好き食を食しぬ。賴吒惒羅、汝云何が乃ちこの臭爛せる食を食するや。賴吒惒羅、汝何の意を以てこの鍮蘆吒に來りて而も還りて父母の家に至る能はざるや』。尊者賴吒惒羅白して曰く『居士、我父の家に入りて布施を得ず、但嘖嗷を得ぬ、この禿沙門黑の爲に縛せられ種を斷じて子無く、我が家を破壞しぬ。我に唯子有り、至りて愛し憐念し、意常に愛樂し見るに厭足無かりき。彼將ゐ去りて度しぬ。當に食を與ふること莫るべしと。我これを聞き已りてすなはち速かに出で去りぬ』。尊者賴吒惒羅の父卽ち辭謝して曰く『賴吒惒羅忍ぶべし。賴吒惒羅忍ぶべし。我實に賴吒惒羅の父の家に入りしを知らざりき』。こゝに於て尊者賴吒惒羅の父敬心もて尊者賴吒惒羅を扶け抱き將ゐて內に入れ座を敷きて坐せしめぬ。尊者賴吒惒羅卽便ち坐に就きぬ。こゝに於てその父尊者賴吒惒羅の坐せるを見已りて婦の所に往至して而もこの語を作しぬ『卿今當に知るべし、賴吒惒羅族姓子今來りて家に還りぬ。速かに飲食を辦ずべし』。尊者賴吒惒羅の母聞き已りて大いに歡喜踊躍し速かに飲食を辦じ、飲食を辦じ已りて疾かに錢を輦び出して中庭の地に著き、聚めて大積を作り、彼の大錢積一面に立人、一面に坐人、各相見ず。大錢積を作り已りて尊者賴吒惒羅の所に往詣し是の如き語を作しぬ『賴吒惒羅、これ汝の母の分ち所有する錢財なり。汝の父の錢財無量百千にしてまた計すべからず。今盡く汝に付せん。賴吒惒羅、汝戒を捨て道行を罷めて布施し快

『世尊、我本要有り、出家學道し已れば還りて父母を見んと。世尊、我今辭し行き往きて父母を見、その本の要に赴かん』。その時世尊すなはちこの念を作したまひぬ、この賴吒恕羅族姓子若使戒を捨て道行を罷めて本の如くならんと欲せんは、必ずこの處り無しと。世尊知り已りて告げて曰はく『汝去りて未だ度せざる者は度し、未だ解脱せざる者は解脱を得しめ、未だ滅し訖るを得しめよ。賴吒恕羅、今汝の意に隨へ』。彼の時尊者賴吒恕羅、佛の所說を聞きて善く受け善く持し即ち坐より起ち佛足を稽首し遶三匝して而も去り、己の房中に至りて臥具を收擧し衣を著け鉢を持ち遊行し展轉して往きて鍮蘆吒に至り、鍮蘆吒村の北尸攝恕園に住しぬ。こゝに於て、尊者賴吒恕羅夜を過ぎて平旦、衣を著け鉢を持ち、鍮蘆吒に入りて而も乞食を行じぬ。尊者賴吒恕羅是の如き念を作しぬ、世尊次第乞食を稱歎したまふ。我今寧ろこの鍮蘆吒に於て次第に乞食すべしと。尊者賴吒恕羅すなはち鍮蘆吒に於て次第に乞食し展轉して本の家に至りぬ。彼の時尊者賴吒恕羅の父、中門に在りて住し鬚髮を修理しぬ。尊者賴吒恕羅の父遙かに尊者賴吒恕羅の來るを見てすなはちこの語を作しぬ『この禿沙門[六]黑の爲に縛せられ種を斷じて子無く我が家を破壞しぬ。[七]我一子有り、極めて愛し憐念し、意常に忍樂して見るに厭足無かりき。彼將ゐ去りて度しぬ。當に食を與ふること莫るべし』。尊者賴吒恕羅自ら父の家に於て布施を得ず、但嘖數を得ぬ、この禿沙門黑の爲に縛せられ種を斷じて子無く我が家を破壞しぬ。我一子有り、極めて愛し憐念し、意常に忍樂して見るに厭足無かりき。彼將ゐ去りて度しぬ。當に食を與ふること莫るべしと。尊者賴吒恕羅知り已りてすなはち速かに出で去りぬ。彼の時尊者賴吒恕羅の父の家の婢使箕を以て臭爛せる飲食を盛り糞聚中に棄著せんと欲しぬ。尊者賴吒恕羅、父の婢使箕を以て臭爛せる飲食を盛り糞聚中に棄著せんと欲するを見てすなはちこの語を作しぬ『汝、妹、若しこの爛れたる飲食の法、應に捨つべくば我が鉢の中に著くべし』。彼の時尊者賴吒恕羅の父の家の婢使箕中の臭爛せ

【六】黑。魔羅をいふ。上の「降魔經」を見よ。
【七】こは己の實子なることを知らざりしなり。

樂はざれば必ず自ら來りて父母の所に還歸せん。今若し聽さゞれば定んで死すること疑無けん。當に何の益する所なるべき』。こゝに於て賴吒惒羅居士の子の父母、聞き已りて賴吒惒羅居士の子の善知識の伴を同うし時を同うする[者]に語げて曰く『我今賴吒惒羅の正法律中に於て至信に家を捨て家無くして學道するを聽さん。若し學道し來りて還らば故のごとく見るべし』。賴吒惒羅居士の子の善知識の伴を同うし時を同うする[者]卽ち共に賴吒惒羅の所に往詣しすなはちこの語を作しぬ。『居士の子、父母汝の正法律中に於て至信に家を捨て家無くして學道するを聽したまひぬ。若し學道し已らば還りて父母を見よ』。賴吒惒羅居士の子この語を聞き已りてすなはち大いに歡喜し愛を生じ樂を生じ、地より而も起ち漸くその身を養ひ、身平復し已りて鍮蘆吒より出でて佛の所に往詣し、佛足を稽首し白して曰く『世尊、父母我の正法律中に於て至信に家を捨て家無くして學道するを聽したまひぬ。唯願はくは世尊、世尊に從ひて出家學道し而も具足[戒]を受け比丘と作るを得るを聽したまへ』。こゝに於て世尊、賴吒惒羅居士の子を度して出家學道せしめ、それに具足[戒]を授けたまひぬ。具足[戒]を授け已りて鍮蘆吒に於て隨住すること數時、後に於て則便ち衣を攝め鉢を持ち、遊行し展轉して舍衞國に往至し勝林給孤獨園に住したまひぬ。尊者賴吒惒羅出家學道し具足[戒]を受け已りて遠離獨住に在りて心放逸無く修行し精懃しぬ。彼遠離獨住に在りて心放逸無く修行し精懃し已りて族姓子の爲にする所のごとく鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道する者、唯無上の梵行訖り、現法中に於て自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊び、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ更に有を受けずと如眞を知りぬ。尊者賴吒惒羅法を知り已りて阿羅訶を得るに至りぬ。こゝに於て尊者賴吒惒羅阿羅訶を得已りて後、或は九年十年にして而もこの念を作しぬ、我本已に出家學道すれば還りて父母を見んと許しぬ。我今寧ろ還りて[五]本の要に赴くべしと。こゝに於て尊者賴吒惒羅、佛の所に往詣し佛足を稽首し卻きて一面に坐し白して曰く

【五】赴本要とは昔の約束を守るをいふ。

今より起きず飲まず食はず、［然れば］乃ち父母我の正法律中に於て至信に家を捨て家無くして學道するを聽すに至らんと。こゝに於て賴吒惒羅居士の子一日食はず、二・三・四・多日に至るも食はず。こゝに於て賴吒惒羅居士の子の父母子の所に往至し告げて曰く『賴吒惒羅、汝至りて柔軟にして身體極めて好く、常に好床に坐臥しぬ。汝今苦を知らざるや。汝速かに起き行きて布施して快く福業を修せんと欲すべし。所以者何。賴吒惒羅、世尊の境界は甚だ難く甚だ難し。出家學道も亦復甚だ難し』。その時賴吒惒羅居士の子默然として答へず。こゝに於て賴吒惒羅居士の子の父母、賴吒惒羅の親親及び諸臣の所に往至して而もこの語を作しぬ『汝等共に來りて賴吒惒羅の所に至り、勸めて地より起たしめよ』。賴吒惒羅居士の子の親親及び諸臣等卽便ち共に賴吒惒羅の所に至り語げて曰く『賴吒惒羅、汝至りて柔軟にして身體極めて好く、常に好床に坐臥しぬ。汝今苦を知らざるや。賴吒惒羅、汝速かに起き行きて布施して快く福業を修せんと欲すべし。所以者何。世尊の境界は甚だ難く甚だ難し。出家學道も亦復甚だ難し』。彼の時賴吒惒羅居士の子默然として答へず。こゝに於て賴吒惒羅居士の子の父母、賴吒惒羅居士の子の善知識の伴を同うし時を同うする［者］の所に至りて而もこの語を作しぬ『汝等共に來りて賴吒鏥羅の所に至り、勸めて地より起たしめよ』。こゝに於て賴吒惒羅居士の子の善知識の伴を同うし時を同うする［者］卽ち共に賴吒惒羅居士の子の所に往詣して而もこの語を作しぬ『賴吒惒羅、汝至りて柔軟にして身體極めて好く、常に好床に坐臥しぬ。汝今苦を知らざるや。賴吒惒羅、汝速かに起き行きて布施して快く福業を修せんと欲すべし。所以者何。賴吒惒羅、世尊の境界は甚だ難く、甚だ難し。出家學道も亦復甚だ難し』。彼の時賴吒惒羅居士の子默然として答へず。こゝに於て賴吒惒羅居士の子の善知識の伴を同うし時を同うする［者］賴吒惒羅居士の子の父母の所に往至し是の如き語を作しぬ『賴吒惒羅の正法律中に於て至信に家を捨て家無くして學道するを聽すべし。若しそれ樂へばこの生中に於て故のごとく相見るべし。若し

白して曰く『世尊、我佛の說きたまへる法を知る如くんば若し我家に在れば鎖の爲に鎖され、形壽を盡くして淸淨なる梵行を行ずるを得ず。世尊、願はくは我世尊に從ひて出家學道して而も具足[戒]を受くるを得、比丘と作りて梵行を淨修するを得ん』。世尊問ひて曰はく『居士の子、父母汝の正法律中に於て至信に家を捨て家無くして學道するを聽すや』。賴吒惒羅居士の子白して曰く『世尊、父母未だ我の正法律中に於て至信に家を捨て家無くして學道するを聽さず』。世尊告げて曰はく『居士の子、若し父母汝の正法律中に於て至信に家を捨て家無くして學道するを聽さざれば、我汝を度して出家學道せしむるを得ず、亦具足[我]を受けしむるを得ず』。賴吒惒羅居士の子白して曰く『世尊、我當に方便もて父母に從ひて求め、我の正法律中に於て至信に家を捨て家無くして學道するを聽さしむべし』。世尊告げて曰はく『居士の子、汝の欲する所に隨へ』。こゝに於て賴吒惒羅居士の子佛の所說を聞きて善く受け善へ持し、佛足を稽首し遶三匝して還り歸りて白して曰く『二尊、我佛の說きたまへる法を知る如くば若し我家に在れば鎖の爲に鎖され、形壽を盡くして淸淨なる梵行を行ずるを得ず。唯願はくは二尊、我の正法律中に於て至信に家を捨て家無くして學道するを聽したまへ』。賴吒惒羅の父母告げて曰く『賴吒惒羅、我[等]今唯汝一子有るのみ。極めて愛し憐念し、意常に愛樂し、見ること厭足無し。若し汝命終るも我[等]尙相棄捨するを欲せざらん。況や生きながら別離して汝を見ざるをや』。賴吒惒羅居士の子また再び三たびに至りて白して曰く『二尊、我佛の說きたまへる法を知る如くんば若し我家に在れば鎖の爲に鎖され、形壽を盡くして淸淨なる梵行を行ずるを得ず。唯願はくは二尊、我の正法律中に於て至信に家を捨て家無くして學道するを聽したまへ』。賴吒惒羅居士の子の父母亦再び三たびに至りて告げて曰く『賴吒惒羅、我今唯汝一子有るのみ。極めて愛し憐念し、意常に愛樂し見ること厭足無し。若し汝命終るも我尙相棄捨するを欲せざらん。況や生きながら別離して汝を見ざるをや』。こゝに於て賴吒惒羅居士の子卽時に地に臥し、

卷の第三十一

百三十二、[一]賴吒和羅經第十六

我が聞きしこと是の如し。ある時佛拘樓瘦に遊び大比丘衆と倶に[二]鍮蘆吒に往至し鍮蘆吒村の北[三]尸攝惒園中に住したまひぬ。その時鍮蘆吒の梵志・居士、沙門瞿曇なる釋種の子、釋の宗族を捨て出家學道し、拘樓瘦に遊び大比丘衆と倶にこの鍮蘆吒に來至し、鍮蘆吒村の北尸攝惒園中に住すと聞きぬ。彼の沙門瞿曇、大名稱有りて十方に周聞す、沙門瞿曇は如來・無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號す。彼この世に於て天及び魔・梵・沙門・梵志、人より天に至るまで、自ら知り自ら覺り、自ら作證し成就して遊ぶ。彼若し法を説けば、初め妙、中ごろ妙、竟り亦妙にして義有り文有り、具足し清淨にして梵行を顯現す。若し如來・無所著・等正覺を見て尊重し禮拜し供養し承事すれば快く善利を得「と聞く」。我等應に共に往きて沙門瞿曇を見て禮拜供養すべしと。鍮蘆吒の梵志・居士聞き已りて各與に等類眷屬相隨ひ、鍮蘆吒より出でて北行し尸攝惒園に至り、世尊を見て禮拜し供養せんと欲し、佛に往詣し已りて、彼の鍮蘆吒の梵志・居士[四]或は佛足を稽首し却きて一面に坐し、或は佛に問訊し却きて一面に坐し、或は叉手を佛に向け却きて一面に坐し、或は遙に佛を見已りて默然として而も坐しぬ。彼の時鍮蘆吒の梵志・居士各坐已に定まるや、佛爲に法を説き、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、無量の方便もて彼「等」の爲に法を説き、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りて默然として而も住したまひぬ。時に鍮蘆吒の梵志・居士、佛爲に法を説き勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りたまふや、各坐より起ち佛足を稽首し佛を遶ること三匝して而も去りぬ。彼の時賴吒惒羅居士の子故らに坐して起たず。こゝに於て賴吒惒羅居士の子、鍮蘆吒の梵志・居士の去りて後久しからずして卽ち坐より起ち偏に著衣を袒ぎ叉手を佛に向け

【一】M. 82. Raṭṭhapāla-sutta. 支謙譯「賴吒和羅經」、法賢譯「護國經」。
【二】鍮蘆吒(Thullakoṭṭhita)。
【三】尸攝惒園(Siṃsapāvana)。
【四】致敬の法に就ては三卷「伽藍經」註〔八〕を見よ。

る。　火は我愚癡の人を燒かんと、　思念有ること無し。　火然ゆ、若し愚觸るれば必ず自ら然えて燒くを得。　是の如く汝波旬、　如來を觸燒し、　久しく不善の行を作す。　報を受くること亦當に久しかるべし。　魔、汝佛を厭ふこと莫れ。　比丘を燒害すること莫れ。　一比丘魔を降して怖林に住在す、　彼の鬼愁へ憂慼し、　目連の訶する所「となり」　恐怖して智慧無く、　即ち彼處に於て沒す。

尊者大目犍連の所說是の如し。彼の魔波旬尊者大目犍連の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第三十

金色愛樂すべく、猶ほ火燄の晃昱たるがごとし　諸衆の妓樂を作し、帝釋の所に往詣す。本一屋舍を以て　善く覺了して施を爲し、若し〔一〕釋前に在りて行き、〔二〕毘闍延殿に昇れば、釋を見て大いに歡喜し、天女各々舞ふ。若し比丘衆を見れば、還り顧て慚愧有り。若し毘闍延殿に比丘を見れば義を問ふ、大仙頗る能く知る。愛盡きて解脫を得るやと。比丘卽ち爲に答ふ、問はその義の如し、〔三〕拘翼、我能く知る、愛盡きて解脫を得と。彼の答ふる所を聞きて、釋歡喜樂を得、比丘多く饒益し、所說その義の如し。若し毘闍延殿を、帝釋天王に、この殿何等と名づけ、汝釋、城を攝するやと問へば、釋大仙人に答ふ、毘闍延哆と名づけ、これを千世界と謂はゞ、千世界中に於て　この殿に勝るもの、毘闍延哆に如きもの有る無し。天王天帝釋、自在に隨所に遊び　〔四〕那遊哆を愛樂し、一を化作して百を行じ、毘闍延殿內、釋自在に遊ぶを得。毘闍延大殿、足指能く震動し、天王の眼の觀ずる所、釋自在に遊ぶを得。若し〔五〕鹿子母堂は築基極めて深く堅くして動かし難く震ふべからず。如意足能く搖す。彼に琉璃地有り、聖人の履む所、滑澤にして更に觸を樂ひ、柔軟の綿褥を布く。愛語もて共に和合し、天王常に歡喜し、善く能く妓樂を作し、音節善く諧和す。謂く天來り會聚して而も須陀洹を說く。若干無量千及び百諸那術、三十三天に至りて、慧眼者法を說き、彼の所說の法を聞きて歡喜し而も奉行す。我またこの法有り、仙人の所說の如し。謂く梵天上に至り、彼の梵天の事を問ふ、梵故この見有り、謂く昔時有りと見、我住して常に存する有り、恒有にして變易せずと、梵天爲に彼に答ふ、大仙、我見無し、謂く昔時有りと見、我恒常にして變ぜずと。我この境界を見るに諸梵皆過ぎ去る。我今何ぞ由りて、恒常にして變易せずと說かん。我この世間を見るに、正覺の說く所、因緣生ずる所に隨ひ、往く所而も轉た還

〔一〕釋。帝釋天。
〔二〕毘闍延殿(Vejayanta)。帝釋天の宮殿。
〔三〕拘翼(Kosiyo)、帝釋天の異名。
〔四〕那遊哆(Nahuta)。
〔五〕鹿子母堂(Migāramātu Pārāda)。

礫拘荀大如來・無所著・等正覺後に於て依る所の村邑に遊行す。彼平旦に於て衣を著け鉢を持ち村に入りて乞食す。尊者音後に在りて侍し從ふ。波旬、その時惡魔年少の形に化作し手に大杖を執り道の邊に住在し尊者音の頭を撃ち、破りて血流れ面を汚さ[しむ]。波旬、尊者音頭を破り血を流し已りて覺礫拘荀大如來・無所著・等正覺の後に隨從し猶ほ影の離れざるがごとし。波旬、覺礫拘荀大如來・無所著・等正覺村邑に至り已りてその身力を極めて右旋顧視し、猶ほ龍の視るが如く、恐れず怖ぢず驚かず懼れずして而も諸方を觀ず。波旬、覺礫拘荀大如來・無所著・等正覺尊者音の頭破れ血流れて面を汚し、佛の後に隨ひ行き、影の離れざるが如きを見てすなはちこの說を作す、この惡魔凶暴にして大いに威力有り。この惡魔厭足を知らずと。波旬、覺礫拘荀大如來・無所著・等正覺の說語未だ訖らざるに、彼の時惡魔すなはち彼の處に於てその身卽ち無缺大地獄に墮つ。波旬、この大地獄に而も[九]四名有り。一には無缺、二には百釘、三には逆刺、四には六更なり。彼の大地獄その中に[一〇]卒有りて惡魔の所に往至し惡魔に語げて曰く、汝今當に知るべし。若し釘釘等しく共に合する者は當に知るべし。滿百年と』。こゝに於て魔波旬これを說くを聞き已りて卽便ち心悸き恐怖し驚懼し身毛皆竪ちぬ。尊者大目犍連に向ひて卽ち頌を說きて曰く、

云何が彼の地獄、　惡魔昔その中に在りて　佛の梵行を燒害し　及び彼の比丘を犯せるや。

尊者大目犍連卽時に偈を以て魔波旬に答へて曰く、

地獄無缺と名づけ、　惡魔曾て中に在りて　佛の梵行を燒害し　及び彼の比丘を犯す、　彼の鐵釘百有り、　一切各逆刺なり、　地獄無缺と名づけ、　惡魔昔中に在り。　若し知らざる者有れば、　比丘佛弟子も、　必ず是の如き苦を得、　黑業の報を受けん。　若干種の園觀、人は地に在り、　自然の粳米を食し、　居止して北洲に在り、　大須彌山巖、　善修の熏ずる所、　解脫を修習し、　最後の身を受持す。　跱立して大泉に在り、　宮殿住して劫に至り、

【九】巴利文には三名を擧ぐ、Saḷikusamāhata(百釘)、Paccattavedaniya(逆刺)、Chaphassāyatana(六更)。此には無缺に當るものなし。多分 Avīci (阿毘、無間)か。
【一〇】卒(Nirayapāla)。獄卒。

梵志・居士髮を以て地に布きて而もこの說を作す、精進の沙門、上を行くべし。精進の沙門難行を而も行す。我をして長夜に利・饒益・安隱・快樂を得しめよと。梵志・居士手を以て種種の飲食を捧持し道の邊に住し待ちて而もこの說を作す、精進の沙門、これを受けこれを食し、これを持ち去りて意に隨ひて而も用ふべし。我をして長夜に利・饒益・安隱・快樂を得しめよと。諸の信ある梵志・居士、精進の沙門を見て敬心もて扶け抱き將ゐて內に入れ種種の財物を持ちて精進の沙門に與へ、是の如き說を作す、これを受けこれを用ひ、これを持ち去りて意に隨ふ所を用ふべしと。その時梵志・居士若し死する者有れば、これに因りこれに緣りて身壞れ命終りて必ず善處に至り天上に生ず。生じ已りてこの念を作す、我應にこの樂を受くべし。當にまた更に極樂を受くることこれに勝るべし。所以者何。我等精進の沙門に向ひて善行を行ぜるを以ての故にと。波旬、覺礫拘荀大如來・無所著・等正覺の所に往詣す。この時覺礫拘荀覺の弟子奉敬・供養・禮事を得已りて覺礫拘荀大如來・無所著・等正覺の弟子の奉敬・供養・禮事を得て而も來るを見、見已りて諸の比丘に告げたまはく、汝等大如來・無所著・等正覺無量百千の眷屬に圍遶せられて而も爲に法を說く。覺礫拘荀大如來・無所著・等正覺遙かに弟子の奉敬・供養・禮事を得て而も來るを見、見已りて諸の比丘に告げたまはく、汝等見るや不や。惡魔、梵志・居士に敎勅しぬ、汝等共に來りて精進の沙門を奉敬し供養し禮事せよ。或は精進の沙門を奉敬し供養し禮事するを以て儻し能く惡心を起して我をしてその便を得しめんと。比丘、汝等當に諸行の無常を觀じ興衰の法を觀じ、無欲を觀じ捨離を觀じ滅を觀じ斷を觀じ、惡魔をして便を求むるも而も得る能はさらしむべしと。波旬、覺礫拘荀大如來・無所著・等正覺この敎を以て諸の弟子を敎ふ。彼[等]卽ち敎を受けて、一切行の無常を觀じ興衰の法を觀じ無欲を觀じ捨離を觀じ滅を觀じ斷を觀じ、惡魔をして便を求むるも而も得る能はさらしむ。波旬、彼の時惡魔またこの念を作す、我この事を以て精進の沙門に便を求むるも而も得る能はず。我寧ろ年少の形を化作し手に大杖を執りてその道の邊に住し尊者音の頭を打ち破りて血流れ面を汚さしむべしと。波旬、覺

覺礫拘荀大如來・無所著・等正覺の弟子用てその頭を傷つけその衣を裂き壞りその應器を破り已りて覺礫拘荀大如來・無所著・等正覺の所に往詣す。その時覺礫拘荀大如來・無所著・等正覺無量百千の眷屬に圍遶せられて而も爲に法を說く。覺礫拘荀大如來・無所著・等正覺、遙かに弟子の頭傷づき衣裂け鉢破れて而も來るを見、見已りて諸の比丘に告げたまはく、『汝等見るや不や。惡魔、梵志居士に教勅しぬ、汝等共に來りて精進の沙門を罵詈し、打破し、嘖數せよ。所以者何。或は罵り打破し責數する時、儻し能く惡心を起して、我をしてその便を得しめんと。比丘、汝等當に以て心慈と倶にして一方に遍滿し成就して遊び、是の如く二・三・四方・四維・上下、一切に普周く、心慈と倶にして、結無く怨無く恚無く、諍無く極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊び、是の如く悲・喜「亦然り」。心捨と倶にして結無く怨無く恚無く諍無く極廣甚大無量にして善く修し一切世間に遍滿し成就して遊び、惡魔をして便を求むるも便を得る能はざらしむべしと。波旬、覺礫拘荀大如來・無所著・等正覺、この敎を以て諸の弟子を敎ふ。彼「等」即ち敎を受け、心慈と倶にして一方に遍滿し成就して遊び、是の如く二・三・四方・四維、上下一切に普周く、心慈と倶にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し一切世間に遍滿し成就して遊び、是の如く悲・喜「亦然り」。心捨と倶にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。ここを以ての故に彼の惡魔便を求むるも便を得る能はず。波旬、彼の時惡魔またこの念を作す、我この事を以て精進の沙門に便を求めて而も得る能はず。我寧ろ梵志・居士に教勅すべし、汝等共に來りて精進の沙門を奉敬し供養し禮事せよ。或は精進の沙門を奉敬し供養し禮事するを以て儻し能く惡心を起し我をしてその便を得しめんと。波旬、彼の梵志・居士、惡魔の爲に教勅せられ已りて即ち共に精進の沙門を奉敬し供養し禮事し、衣を以て地に敷きて而もこの說を作す、精進の沙門、上を行くべし。精進の沙門難行を而も行ず。我をして長夜に利・饒益・安隱・快樂を得しめよと。

りぬ。我等昨に已に燥樵草を拾ひ積みてその身を覆ひ、火を以てこれを燒き然し已りて而も去りぬ。然るにこの賢者更にまた想ふと。波旬、この義を以ての故に尊者想は想と名づく。波旬、彼の時惡魔すなはちこの念を作す、この禿沙門、黑の所縛を以て種を斷して子無し。彼禪を學びて伺ひ増す伺ひ數數伺ふ。猶ほ驢の竟日重きを負ひ櫪上に繋在して麥食を得ず、彼の麥の爲の故に伺ひ増す伺ひ數數伺ふが若如し。是の如くこの禿沙門黑の縛する所と爲り種を斷じて子無く、禪を學びて伺ひ増す伺ひ數數伺ふ。猶ほ猫子の鼠穴の邊に在りて鼠を捕へんと欲するが故に伺ひ増す伺ひ數數伺ふが如し。是の如くこの禿沙門黑の縛する所と爲り種を斷じて子無く、彼禪を學びて伺ひ増す伺ひ數數伺ふ。猶ほ鵂狐の燥樵積の間に在りて鼠を捕へんが爲の故に伺ひ増す伺ひ數數伺ふが如し。是の如くこの禿沙門黑の縛する所と爲り種を斷じて子無く、禪を學びて伺ひ増す伺ひ數數伺ふ。猶ほ鶴鳥の水岸の邊に在りて魚を捕へんが爲の故に、伺ひ増す伺ひ數數伺ふが如し。是の如くこの禿沙門黑の縛する所と爲り種を斷じて子無く、禪を學びて伺ひ増す伺ひ數數伺ふ。彼何の所もて伺ひ、何の義の爲に伺ひ、何等を求めて伺ふや。彼調亂狂發し敗壞す。我彼何の所より從來するを知らず、亦彼何の所に從去するを知らず、亦住止するを知らず、死を知らず生を知らず。我寧ろ梵志居士に教勅すべし、汝等共に來りて精進の沙門に罵詈し、打破し責數せよ。所以者何。或は罵り打破し責數する時は儻し能く惡心を起し、我をしてその便を得しめんと。波旬、彼の時惡魔すなはち梵志居士に教勅す。彼の梵志居士精進の沙門を罵詈し打破し責數す。彼の梵志居士或は木を以て打ち或は石を以て擲ち或は杖を以て撾ち、或は精進の沙門の頭を傷づけ、或は衣を裂き壞り、或は應器を破る。その時梵志居士若し死する者有ればこれに因りこれに緣りて身壞れ命終りて必ず惡處に至り地獄の中に生ず。彼生じ已りてこの念を作す、我應にこの苦を受くべし。當にまた更に極苦を受くることこれに過ぐべし。所以者何。我等精進の沙門に向ひて惡行を行ぜしを以ての故にと。波旬、

【八】 更復想（Patisañjīvita)? 「想」は原語の意より推すも、この文の意より推すも當らず、「活」とするを可とす。

く饒益無きこと莫れ。必ず惡處に生じて無量の苦を受けんと。汝の尊師大如意足有り、大威德有り、大福祐有り、大威神有るも、彼猶ほ是の如く速かに知り速かに見る能はず。況やまた弟子能く知見せんや』。彼の魔波旬またこの念を作しぬ、今この沙門我を知見するが故に而もこの說を作すのみと。ここに於て魔波旬細形を化作して口中より出で、尊者大目犍連の前に在りて立ちぬ。尊者大目犍連告げて曰く『波旬、昔如來有り。[三]覺礫拘荀大無所著・等正覺と名づく。我時に魔と作り名づけて[四]惡と曰ふ。我に妹有り、[五]黑と名づく。汝はこれ彼の子なり。波旬、この事に因るが故に汝はこれ我が㮏甥なり。波旬、覺礫拘荀大如來・無所著・等正覺に二大弟子有り。一は[六]音と名づけ二は[七]想と名づく。波旬、何の義を以ての故に尊者音は音と名づくるや。波旬、尊者音梵天の上に住し、常に音聲を以て千世界に滿ち、更に弟子の音聲彼と等しき者、相似たる者、勝れたる者有ること無し。波旬、この義を以ての故に尊者音は音と名づく。波旬、また何の義を以て尊者想は想と名づくるや。波旬、尊者想は依る所、村邑に遊行し、夜を過ぎて平旦衣を著け鉢を持ちて村に入り乞食し、善くその身を護り善く諸根を攝め正念を立す。彼乞食し已り食訖りて中後に衣鉢を收擧し手足を澡洗し尼師檀を以て肩上に著け無事處に至り、或は山林・樹下に至り或は閑居・靜處に至り、尼師檀を敷きて結跏趺坐し想知滅定に入る。彼の時若し放牛羊人・取樵草人或は行路人有れば、彼の山林に入り想知滅定に入るを見てすなはちこの念を作す。今この沙門無事處に於て坐して而も命終りぬ。我等寧ろ燥樵草を以て拾ひ已りて積聚してその身上に覆ひて而もこれを※耶維すべしと。即ち樵草を拾ひ積みてその身を覆ひ、火を以てこれを然し、すなはち捨てゝ而も去る。彼の尊者想、夜を過ぎて平旦、定より寤め起ちて衣服を抖擻し、依る所の村邑に遊行し、常の如く衣を著け鉢を持ち村に入りて乞食し、善くその身を護り善く諸根を攝め念を立す。彼の放牛羊人・取樵草人、或は行路人、彼の山林に入るを人の先に見し者は、すなはちこの念を作す、今この沙門無事處に在りて坐し、坐して而も命終

【三】覺礫拘荀大(Kakusanda)。拘留孫佛。
【四】惡(Dūsi)。
【五】黑(Kāli)。
【六】音(Vidhura)。
【七】想(Sañjīva)。活とするを正しとす。註〔八〕參照。

※荼毘、火葬すること。

信・精進・念處、正定及び正觀、是の如くこの苦を受け、前所にその殃を受け自らその殃を受け已りて後に於てすなはち他を害す。若し能く自ら護れば、彼能く外を護るを爲す。この故に當に自ら護るべし、慧者は無央の樂あり。

佛說是の如し。尊者曇彌及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百三十一、降魔經第十五[一]

我が聞きしこと是の如し。ある時佛婆奇瘦に遊び鼉山・怖林・鹿野園中に在しぬ。その時尊者大目犍連教授、佛の爲に而も禪屋を作り露地に經行しぬ。彼の時魔王細形を化作して尊者大目犍連の腹中に入りぬ。ここに於て尊者大目犍連即ちこの念を作しぬ、我今腹中猶ほ豆を食へるが如し。我寧ろ如其像定に入り如其像定を以て自らその腹を觀ずべしと。この時尊者大目犍連、經行道頭に至り尼師檀を敷きて結跏趺坐し、如其像定に入り如其像定を以て自らその腹を觀じぬ。尊者大目犍連すなはち魔王のその腹中に在るを知りぬ。尊者大目犍連即ち定より寤めて魔王に告げて曰く『汝波旬出でよ、汝波旬出でよ。如來を觸嬈すること莫れ。亦如來の弟子を觸嬈すること莫れ。長夜に於て義無く饒益無きこと莫れ。必ず惡處に生じて無量の苦を受けん』。彼の時魔王すなはちこの念を作しぬ、この沙門見ず知らずして而もこの說を作す、汝波旬出でよ、汝波旬出でよ。如來を觸嬈すること莫れ。亦如來の弟子を觸嬈すること莫れ。長夜に於て義無く饒益無きこと莫れ。必ず惡處に生じて無量の苦を受けんと。汝の尊師大如意足有り、大威德有り大福祐有り大威神有るも、彼猶ほ速かに知り速かに見る能はず。況やまた弟子能く知見せんやと。尊者大目犍連また魔王に語げらく『我また汝の意を知る。汝この念を作す、この沙門知らず見ずして而もこの說を作す、汝波旬出でよ、汝波旬出でよ。如來を觸嬈すること莫れ。亦如來の弟子を觸嬈すること莫れ。長夜に於て義無

【一】 M. 50. Māratajjaniya-sutta. 失譯「魔嬈亂經」、「弊魔試目連經」。
【二】 一八卷「八念經」註〔二〕以下。

曇彌、七富樓奚哆師諸の弟子の爲に梵世の法を說く。（若）七富樓奚哆師爲に梵世の法を說く時諸の弟子等「の中」法を具足し奉行せざる者有れば、彼命終し已りて、或は四王天に生れ、或は三十三天に生れ、或は燄摩天に生れ、或は兜率哆天に生れ、或は化樂天に生れ、或は他化樂天に生る。（若）七富樓奚哆師、爲に梵世の法を說く時諸の弟子等設し法を具足し奉行する者有れば、彼四梵室を修し欲を捨離し、彼命終し已りて梵天に生るることを得。曇彌、七富樓奚哆師而もこの念を作す、我應に弟子等と同じく倶に後世に至り共に一處に生ずべからず。我今寧ろ更に增上慈を修すべし。增上慈を修し已りて命終り晃昱天中に生ずるを得んと。曇彌、彼の時七富樓奚哆師則ち後時に於て更に增上慈を修し、增上慈を修し已り命終して晃昱天中に生るるを得。七富樓奚哆師及び諸の弟子學道虛からず大果報を得。曇彌、若し彼の七師及び無量百千の眷屬を罵り、打破し瞋恚し責數する者有れば必ず無量の罪を受く。若し一の正見を成就する佛の弟子比丘の小果を得る有るを、罵詈し打破し瞋恚し責數する者は、これ罪を受くること彼より多し。この故に曇彌、汝等各各更迭に相護れ。所以者何。この過を離れ已りて更に失有ること無し』。ここに於て世尊この偈を說きて曰はく、

　[一三]須涅・牟梨破群那・阿羅那遮婆羅門・瞿陀梨舍哆・害提婆羅摩納・儲提摩麗・橋鞞陀邏・薩哆富樓奚哆、これ過去世に在りし七師にして名德有り、愛縛樂悲無く、欲結盡く過ぎ去る。彼に諸の弟子無量百千の數有り、彼「等」亦欲結を離れ、須臾も究竟せず。若し彼の外仙人の善く護りて苦行を行ずるを、心中憎嫉を懷き、罵る者は罪を受くること多し。若し一「人」正見を得たる、佛子の小果に住するを罵詈し責め打破すれば罪を受くること彼より多し。この故に汝曇彌、各々更に相護れ。更に相護る所以は、重罪これに過ぐる無けん。是の如き甚重の苦、亦聖の惡む所爲り。必ず惡色を受くるを得、橫まに邪見處を取らん、これは最下の人。聖法の說く所、謂く未だ婬欲を離れず。微妙の五根を得、

【一三】須涅（Sunetta）。上の「善眼」に同じ。

らんと欲せば、樹天、應に瞋恚すべからず、應に憎嫉すべからず。心應に恨むべからず。樹天、意を捨て而も樹天に住せよ。是の如く樹天、樹天の法に住すと。天復白して曰く、拘翼、我樹天、樹天の法に住せず。今日より始めて樹天、樹天の法に住せん」願はくは善住尼拘類樹王還りてまた本の如くしたまへと。是に於て天帝釋如其像如意足を作し、如其像如意足を作し已りてまた大水暴風雨を化作し、大水暴風雨を化作し已りて善住尼拘類樹王即ちまた故の如し。是の如く曇彌、若し比丘罵る者有るも罵らず、瞋る者「あるも」瞋らず、破る者「あるも」破らず。打つ者「あるも」打たず。是の如く曇彌、沙門は沙門の法に住す』。ここに於て尊者曇彌即ち坐より起ち偏に著衣を袒ぎ叉手を佛に向け、啼泣して涙を垂れ白して曰く『世尊、我沙門に非ずして沙門の法に住せり。今日より始めて沙門にして沙門の法に住せん』。世尊告げて曰はく『曇彌、昔大師有り、名づけて〔九〕善眼と曰ひ、外道仙人の師宗する所と爲り、欲愛を捨離し如意足を得。曇彌、善眼大師無量百千の弟子有り。曇彌、善眼大師諸の弟子の爲に〔一〇〕梵世の法を說く。曇彌、（若）善眼大師爲に梵世の法を說く時、諸の弟子等法を具足し奉行せざる者有れば、彼命終し已りて或は〔一一〕四王天に生れ、或は三十三天に生れ、或は焰摩天に生れ或は兜率哆天に生れ、或は化樂天に生れ、或は他化樂天に生る。曇彌（若）善眼大師爲に梵世の法を說く時諸の弟子等、設し法を具足し奉行する者有れば、彼四梵室を修し欲を捨離し、彼命終し已りて梵天に生ずるを得。曇彌、彼の時善眼大師而もこの念を作す、我應に弟子等と同じく倶に後世に至りて共に一處に生ずべからず。我今寧ろ更に增上慈を修すべし。增上慈を修し已り命終して晃昱天中に生ずるを得んと。曇彌、彼の時善眼大師則ち後時に於て更に增上慈を修し、增上慈を修し已り命終して、晃昱天中に生るるを得。曇彌、善眼大師及び諸の弟子學道虛からず大果報を得ること善眼大師の如し。是の如く〔一二〕牟梨破群那・阿羅那遮婆羅門・瞿陀梨舍哆・害提婆羅摩納・儲提摩麗・橋尊陀邏及び薩哆富樓奚哆「亦然り」。曇彌、七富樓奚哆師亦無量百千の弟子有り。

【九】　二卷「七日經」にも出づ。

【一〇】　梵世法。二卷「七日經」註〔一八〕を見よ。

【一一】　四王天以下二卷「七日經」註〔一九〕以下を見よ。

【一二】　牟梨破群那(Mugapakkha)、阿羅那遮(Aranemi)、瞿陀梨舍哆(Kuddālaka)、害提婆羅摩納(Hatthipālamānavaka)、儲提摩麗(Jotipāla)、橋尊陀羅(Govinda)、薩哆富樓奚哆(Sattapurohita)。薩哆＝七。

善住尼拘類樹王の果大にして二升瓶の如く味淳蜜丸の如し。曇彌、善住尼拘類樹王の果、護者有ること無く亦更に相偸むこと無し。一人有り、來りて饑渇し極めて羸れ、顔色憔悴し果を食するを得んと欲し善住尼拘類樹王の所に往至し果を飽噉し已りてその枝を毀折し果を持ちて歸り去る。善住尼拘類樹王に一天有り、依りて而もこれに居る。彼この念を作す、閻浮洲の人異なる哉。恩無く反復有ること無し。所以者何。善住尼拘類樹王より果を飽噉し已りてその枝を毀折し、果を持ちて歸り去る。寧ろ善住尼拘類樹をして果無く果を生ぜざらしめんと。善住尼拘類樹王卽ち果無く亦果を生ぜず。また一人有り、來りて饑渇し極めて羸れ顔色憔悴し果を噉ふを得んと欲し、善住尼拘類樹王の所に往詣し、善住尼拘類樹王を見るに果無く亦果を生ぜず。卽便ち高羅婆王の所に往詣し白して曰く、天王、當に知りたまふべし。善住尼拘類樹王果無く亦果を生ぜずと。高羅婆王聞き已りて、猶ほ力士の臂を屈伸する頃の如く、是の如く高羅婆王拘樓瘦に於て沒し三十三天に至り、天帝釋の前に住まりて白して曰く、拘翼當に知るべし。善住尼拘類樹王果無く亦果を生ぜずと。ここに於て天帝釋及び高羅婆王猶ほ力士の臂を屈伸する頃の如く、是の如く天帝釋及び高羅婆王は三十三天中に於て沒し拘樓瘦に至り善住尼拘類樹王を去ること遠からずして住す。天帝釋 如其像如意足を作し如其像如意足を以て大水暴風雨を化作し、大水暴風雨を作し已りて善住尼拘類樹王の根を抜きて倒竪す。この善住尼拘類樹王に居止する樹天これに因るが故に憂苦愁慼し啼泣して涙を垂れ、天帝釋の前に立つ。天帝釋問ひて曰く、天、汝何の意もて憂苦愁慼し啼泣して涙を垂れ我が前に在りて立つやと。彼の天白して曰く、拘翼、當に知るべし、大水暴風雨ありて善住尼拘類樹王の根を抜き倒竪すと。時に天帝釋彼の樹天に告げて曰く、天、汝樹天、樹天の法に住するも、大水暴風雨ありて善住尼拘類樹王の根を抜きて倒竪せるやと。樹天白して曰く、拘翼、云何が樹天、樹天の法に住するやと。天帝釋告げて曰く、天、若使、人樹根を得、樹根を持ち去らんと欲し、樹莖・樹枝・樹葉・樹華・樹果を得て持ち去

【七】拘翼(Kosiyo)。帝釋天の一名。

【八】如其像如意足。八卷「侍者經」註を見よ。

して曰く『世尊、我生地の諸の優婆塞に於て所汚無く所說無く所犯無し。然るに生地の諸の優婆塞横まに我を驅逐し生地の諸の寺中を出で去らしめぬ』。世尊亦再び告げて曰はく『曇彌、往昔の時、この閻浮洲に諸の商人有り、船に乘りて海に入り【四】視岸鷹を持ちて行きぬ。彼[等]大海に入りて遠からずしてすなはち視岸鷹を放ち、若し視岸鷹大海の岸に至るを得れば終に船に還らず、若し視岸鷹大海の岸に至るを得ざればすなはち來りて船に還りぬ。是の如く曇彌、生地の優婆塞の爲に驅逐せられ、生地の諸寺を出でしめられしが故にすなはち還りて我が所に至る。止みね、止みね、曇彌、何ぞまたこれを說くを須ひん』。尊者曇彌また三たび白して曰く『世尊、我生地の諸の優婆塞に於て所汚無く所說無く所犯無し。然るに生地の諸の優婆塞横まに我を驅逐し、生地の諸の寺中を出で去らしめぬ』。世尊も亦復三たび告げて曰はく『曇彌、汝沙門の法に住して生地の諸の優婆塞の爲に驅逐せられ、生地の諸寺を出でしめられしや』。ここに於て尊者曇彌卽ち座より起ち、叉手を佛に向け白して曰く『世尊、云何が沙門、沙門の法に住するや』。世尊告げて曰はく『曇彌、昔時人壽八萬歲有りき。曇彌、人壽八萬歲の時、この閻浮洲極大富樂にして多く人民有り、村邑相近くして鷄の一飛の如し。曇彌、人壽八萬歲の時女年五百歲にして乃ち嫁す。曇彌、人壽八萬歲の時是の如き病有り。大便・小便・欲・不食・老なり。曇彌、人壽八萬歲の時、王有り、【五】高羅婆と名づけ聰明にして智慧有り、轉輪王と爲り四種の軍有りて天下を整御し、如法の法王にして七寶を成就す。彼の七寶は輪寶・象寶・馬寶・珠寶・女寶・居士寶・主兵臣寶これを七と爲す。千子を具足し、顏貌端正、勇猛無畏にして能く他の衆を伏す。彼必ずこの一切の地乃至大海を統領し、刀杖を以てせず、法を以て治化し安隱を得しむ。曇彌、高羅婆王に樹有り、【六】善住尼拘類王と名づく。曇彌、善住尼拘類樹王而も五枝有り。第一枝は王の食する所、及び皇后[の食する所]なり。第二枝は太子の食及び諸臣の[食]なり。第三枝は國の人民の食なり。第四枝は沙門・梵志の食なり。第五枝は禽獸の食する所なり。曇彌、

【四】視岸鷹(Tirdassi Su-kujja)。

【五】高羅婆(Koravya)。

【六】善住尼拘類王 (Suppati-ttha-nigrodharāja)。

れ死は恚に依る。彼彼一切斷じ、慧を用つて能く覺了す。小小の不善業も慧者は了じて能く除く。當にこの行に堪耐すべし。惡色無からしめんと欲せよ。恚無く亦憂無く、烟を除き貢高無く、調御して瞋恚を斷じ、滅し訖りて漏有ること無し。

佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百三十、[一] 敎曇彌經第十四

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時[二]尊者曇彌[三]生地の尊長たり、佛圖の主と作り人の爲に宗とせられ、凶暴急弊にして極めて麁惡たり、諸の比丘を罵詈し責數せり。これに因るが故に生地の諸の比丘皆捨離して去り、ここに住するを樂はず。ここに於て生地の諸の優婆塞、生地の諸の比丘皆捨離して去り、ここに住するを樂はざるを見て、便ちこの念を作しぬ、この生地の諸の比丘何の意を以ての故に皆捨離して去り、ここに住するを樂はざるやと。生地の諸の優婆塞、この生地の尊者曇彌、生地の尊長にして佛圖の主と作り人の爲に宗とせられ、凶暴急弊にして極めて麁惡爲り、諸の比丘を罵詈責數す。これに因るが故に生地の諸の比丘皆捨離して去り、ここに住するを樂はずと聞きぬ。生地の諸の優婆塞聞き已りて卽ち共に尊者曇彌の所に往詣し、曇彌を驅逐し生地の諸の寺中を出で去らしめぬ。ここに於て尊者曇彌生地の諸の優婆塞の爲に、驅りて生地の諸の寺中を出で去らしめられ、卽ち衣を攝り鉢を持ちて遊行し舍衞國に往詣し展轉して進みて舍衞國に至り勝林給孤獨園に住しぬ。ここに於て尊者曇彌佛の所に往詣し佛足を稽首し却きて一面に坐し白して曰く『世尊、我生地の諸の優婆塞に於て所汚無く所說無く所犯無し。然るに生地の諸の優婆塞橫まに我を驅逐し、生地の諸の寺中を出で去らしめぬ』。彼の時世尊告げて曰はく『止みぬ、止みね、曇彌。何ぞこれを說くを須ひん』。尊者曇彌叉手を佛に向け再び白

[一] A. iii. 366.

[二] 尊者曇彌(Āyasmā Dhammiko)。

[三] 生地尊長 (Jātibhūmiyaṁ āvāsiko)。巴利語によれば生れたる土地又は田舍に住めるものゝ意。

女の輩瞋恚時に來る。(7)また次に怨家は怨家をして身壞れ命終りて必ず善處に至り天上に生ぜしめんと欲せず。所以者何。怨家は怨家の善處に往至するを樂はず。人瞋恚有り瞋恚を習ひ瞋恚に覆はれ、心瞋恚を捨てず身・口・意に惡行あり。彼身・口・意に惡行あり已りて身壞れ命終りて必ず惡處に至り地獄の中に生ず。所以者何。瞋恚に覆はるゝに因りて心瞋恚を捨てざるが故に。これを第七怨家の法にして而も怨家を作すと謂ひ、謂く男女の輩瞋恚時に來る。この七怨家の法而も怨家を作し、謂く男女の輩瞋恚時に來る。ここに於て世尊この頌を說きて曰はく、

瞋者は惡色を得、眠臥するも苦しみて安からず　應に大賊を獲得すべくして反つて更に不利を得。　親親の善き朋友は瞋恚の人を遠離す、　數數瞋恚を習ひ、　惡名諸方に流る。　瞋は身口の業を作し、　恚纒はりて意業を行ず、　人恚の爲に覆はれ、　一切の財物を失ふ。　瞋恚は不利を生じ、　瞋恚は心穢を生ず、　恐怖內に生じ、　人の覺る能はざる所なり。　瞋者は義を知らず、　瞋者は法を曉らず、　目無く盲にして闇塞す。　謂く瞋恚を樂しむ人、　恚初めて惡色を發すこと猶ほ火の始めて烟を起すがごとし。　これに從ひて憎嫉を生じ、　これに緣りて諸人瞋る。　若し瞋れば所作、善行及び不善、　後に於て瞋恚止みて煩熱火の燒くが如し。　謂ふ所の煩熱の業及び諸法の纒ふ所、　彼彼我今說く、　汝等善く心に聽け。　瞋者は父及び諸の兄弟を逆害し、　亦姉と妹を殺す。　瞋者多く殘され　所生及び長養してこの世間を見ることを得、　彼に因りて存命を得、　この母瞋りて亦害す。　羞無く慚愧無く、　瞋纒はりて所言無し。　人恚の爲に覆はれ、　口說かざる所無し。　癡罪逆を造作して自らその命を夭す。　作す時自ら覺らず、　瞋に因りて恐怖を生じ　自ら己の身に繫著し、　愛樂極まり無くして已る。　己の身を愛念すと雖も、　瞋者亦自ら害し、　刀を以て而も自ら刺し、　或は巖より自ら投じ　或は繩を以て自ら絞め、　及び諸の毒藥を服す。　是の如き　像瞋恚、　こ

(7)生天。

【三】像瞋恚 (Kodharūpa)

にして而も怨家を作すと謂ひ、謂く男女の輩瞋恚時に來る。(2)また次に怨家は怨家をして安隱に眠らしむるを欲せず。所以者何。怨家は怨家の安隱に眠るを樂はず。人瞋恚有り瞋恚を習ひ、瞋恚に覆はれ、心瞋恚を捨てず。彼臥すに御床を以てし敷くに氍氀毾㲪を以てし覆ふに錦綺羅縠を以てし、儭體被・兩頭安枕・加陵伽波惒邏波遮悉多羅那有りと雖も、然も故らに憂へ苦しみて眠る。所以者何。瞋恚に覆はるるに因りて心瞋恚を捨てざるが故に。これを第二怨家の法にして而も怨家を作すと謂ひ、謂く男女の輩瞋恚時に來る。(3)また次に怨家は怨家をして大利を得しめんと欲せず。所以者何。怨家は怨家の大利を得るを樂はず。人瞋恚有り瞋恚を習ひ瞋恚に覆はれ、心瞋恚を捨てず。彼應に利を得べくして而も利を得ず、應に利を得ざるべくして而も利を得。彼この二法更互に相違ひ大いに不利を得。所以者何。瞋恚に覆はるゝに因りて心瞋恚を捨てざるが故に。これを第三怨家の法にして而も怨家を作すと謂ひ、謂く男女の輩瞋恚時に來る。(4)また次に怨家は怨家をして朋友有らしめんと欲せず。所以者何。怨家は怨家の朋友有るを樂はず。人瞋恚有り瞋恚を習ひ瞋恚に覆はれ、心瞋恚を捨てず。彼若し親しき朋友有れば捨離して避け去る。所以者何。瞋恚に覆はるゝに因りて心瞋恚を捨てざるが故に。これを第四怨家の法にして而も怨家を作すと謂ひ、謂く男女の輩瞋恚時に來る。(5)また次に怨家は怨家をして稱譽有らしめんと欲せず。所以者何。怨家は怨家の名稱有るを樂はず。人瞋恚有り瞋恚を習ひ瞋恚に覆はれ、心瞋恚を捨てず。彼惡名醜聲諸方に周聞す。所以者何。瞋恚に覆はるゝに因りて心瞋恚を捨てざるが故に。これを第五怨家の法にして而も怨家を作すと謂ひ、謂く男女の輩瞋恚時に來る。(6)また次に怨家は怨家をして極大に富ましめんと欲せず。所以者何。怨家は怨家の極大に富むを樂はず。人瞋恚有り瞋恚を習ひ瞋恚に覆はれ、心瞋恚を捨てず。彼是の如き身・口・意の行を作し、彼をして大いに財物を失せしむ。所以者何。瞋恚に覆はるゝに因りて心瞋恚を捨てざるが故に。これを第六怨家の法にして而も怨家を作すと謂ひ、謂く男

(2) 安眠。

【三】 一一卷「牛糞喩經」註〔七〕を見よ。

(3) 大利。

(4) 朋友。

(5) 稱譽。

(6) 大富。

殺害せず、知りて而も能く捨離し、眞諦にして妄言せず、他の財物を盗まず、自ら婦有りて足るを知り、他人の妻を樂はず、捨離して飲酒の心亂狂癡の本を斷ず。常に當に正覺を念じ、諸の善法を思惟し、衆を念じ尸賴を觀じ、これに從ひて歡喜を得べし。その布施を行ぜんと欲せば當に以てその福を望むべし。先に息心を施せ、是の如くして果報を成ぜん。我今息心を說く、舍梨[子]當に善く聽くべし。若し黑及び白・赤色、これと黃と、【10】尨色、愛樂色の牛及び諸の鴿鳥有れば、彼の所生の處に隨ひ、良御の牛前に在り、身力成りて具足し善く速く往來して快くば彼の能くする所を取り、色を以て非と爲すこと莫れ。是の如くこの人間、若し所生の處有れば、剎帝麗・梵志・居士・木工師、彼の所生の處に隨ひ、長老淨く戒を持ち世の無著・善逝、彼に施して大果を得。愚癡は所知無く、慧無く所聞無く、彼に施して果を得ること少く、光無く所照無し。若し光所照有り慧有り、佛弟子善逝に信向すれば、根生じ善く堅く住し、彼これ善處に生じ、意の如く人家に往き、最後に涅槃を得。是の如く各緣有り。

佛說是の如し。尊者舍梨子及び諸の比丘、給孤獨居士五百の優婆塞佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ

百二十九、【1】怨家經第十三

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『七怨家の法有りて而も怨家を作す、謂く男女の輩瞋恚の時來る。云何が七と爲す、(1)怨家は怨家をして好色有らしめんと欲せず。所以者何。怨家は怨家に好色有るを樂はず。人瞋恚有りて、瞋恚を習ひ瞋恚に覆はれ、心瞋恚を捨てず。彼好く沐浴し名香もて身に塗ると雖も、然も色故らに惡し。所以者何。瞋恚に覆はるゝに因りて心瞋恚を捨てざるが故に。これを第一怨家の法

【10】尨色(Kammāsa)。雜色なり。

【1】A. iv. 94.

(1)好色。

復滅するを得、白衣の聖弟子法に攀緣し心靖くして喜を得、若し惡欲有れば卽便ち滅するを得、心中、不善・穢汚・愁苦・憂慼有れば亦復滅するを得、白衣の聖弟子この第二の增上心を得。(3)また次に舍梨子、白衣の聖弟子衆を念じ、如來の聖衆は善く趣き正しく趣き、法に向ひ法に次し順行如法なり。彼の衆實に阿羅訶・趣阿羅訶有り、阿那含・趣阿那含有り、斯陀含・趣斯陀含有り、須陀洹・趣須陀洹有り。これを四雙八輩と謂ふ。謂く如來の衆尸賴を成就し三昧を成就し般若を成就し解脫を成就し解脫知見を成就し、敬ふべく重んずべく奉すべく供すべき世の良福田なりと。彼是の如く如來の衆を念じ若し惡欲有れば卽便ち滅するを得、心中、不善・穢汚・愁苦・憂慼有れば亦復滅するを得。白衣の聖弟子如來の衆に攀緣し心靖くして喜を得、若し惡欲有れば卽便ち滅するを得、心中、不善・穢汚・愁苦・憂慼有れば亦復滅するを得。白衣の聖弟子これを第三の增上心を得、現法に樂居し、易くして[得]、難からずして得と謂ふ。(4)また次に舍梨子、白衣の聖弟子自ら尸賴を念じ、この尸賴缺かず穿たず穢無く濁無く、如地に住し虛妄ならず、聖の稱譽する所、具さに善く受持せんと、彼是の如く自ら尸賴を念じ、若し惡欲有れば卽便ち滅するを得、心中、不善・穢汚・愁苦・憂慼有れは亦復滅するを得。白衣の聖弟子尸賴に攀緣し心靖くして喜を得、若し惡欲有れば卽便ち滅するを得、心中、不善・穢汚・愁苦・憂慼有れば亦復滅するを得。白衣の聖弟子これを第四の增上心を得、現法に樂居し、易くして[得]、難からずして得と謂ふ。舍梨子、若し汝白衣の聖弟子善くこの五法を護り行じこの四增上心を得、現法に樂居し、易くして[得]、難からずして得るを知らば、舍梨子、汝白衣の聖弟子地獄盡き畜生餓鬼及び諸の惡處亦盡き、須陀洹を得、惡法に墮せず、定んで正覺に趣き極めて七有を受け天上人間に七たび往來し已りて而も苦邊を得と記別せよ』。ここに於て世尊この頌を說きて曰はく

　慧者家に住在し、　地獄の恐怖を見、　聖法を受持するに因りて一切の惡を除去す。　衆生を

【九】尸賴(Sīla)、戒、三昧(Samādhi)、定、般若(Paññā)、慧、

殺を斷じ、刀杖を棄捨し、慚有り愧有り慈悲心有り一切乃至蜫蟲を饒益し、彼殺生に於てその心を淨除す。白衣の聖弟子善くこの第一の法を護り行ず。(2)また次に舍梨子、白衣の聖弟子不與取を離れ不與取を斷じ、與へられて後取り、與取を樂しみ、常に布施を好み歡喜して悋しむこと無くその報を望まず。偸を以て覆はれず常に自ら護り已り、彼不與取に於てその心を淨除す。白衣の聖弟子善くこの第二の法を護り行ず。(3)また次に舍梨子、白衣の聖弟子邪婬を離れ邪婬を斷じ、彼或は父の所護、或は母の所護、或は父母の所護、或は兄弟の所護、或は姉妹の所護、或は婦の父母の所護、或は親親の所護、或は同姓の所護有り、或は　他の婦女たり、鞭罰の恐怖有り、及び名雇債有り華鬘親に至り、是の如き女を犯さず、彼邪婬に於てその心を淨除す。白衣の聖弟子善くこの第三の法を護り行ず。(4)また次に舍梨子、白衣の聖弟子妄言を離れ妄言を斷じ眞諦言ありて眞諦を樂しみ眞諦に住し移動せず、一切信ずべくして世間を欺かず、彼妄言に於てその心を淨除す。白衣の聖弟子善くこの第四の法を護り行ず。(5)また次に舍梨子、白衣の聖弟子酒を離れ酒を斷じ、彼飮酒に於てその心を淨除す。白衣の聖弟子善くこの第五の法を護り行ず。舍梨子、白衣の聖弟子云何が四增上心を得、現法に樂居し、易くして[得]、難からずして得るや。(1)白衣の聖弟子如來を念じ、彼の如來・無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號したまふと、是の如く如來を念じ已りて若し惡欲有れば卽便ち滅するを得、心中、不善・穢汚・愁苦・憂慼有れば亦復滅するを得。白衣の聖弟子如來に攀緣し心靖くして喜を得、若し惡欲有れば卽便ち滅するを得、心中、不善・穢汚・愁苦・憂慼有れば亦復滅するを得、白衣の聖弟子第一の增上心を得、現法に樂居し、易くして[得]、難からずして得。(2)また次に舍梨子、白衣の聖弟子法を念じ、世尊善く法を說き必ず究竟に至り、煩無く熱無く常に有りて移動せずと、是の如く觀じ是の如く覺り是の如く知り、是の如く法を念じ已りて、若し惡欲有れば卽便ち滅するを得、心中、不善・穢汚・愁苦・憂慼有れば亦

【八】或爲他婦女以下、巴利文「夫あるもの、[侵せば]罰杖を加へらるゝもの、乃至[許嫁の]贈れる」華鬘に包まれたるもの、是の如きものと邪行を行ぜず」。

證・家家・一種・向須陀洹・得須陀洹・向斯陀含・得斯陀含・向阿那含・得阿那含・中般涅槃・生般涅槃・行般涅槃・無行般涅槃・上流色究竟、これを十八學人と謂ふ。居士、云何が九無學人なる。[六]思法・昇進法・不動法・退法・不退法・護法・[七]護れば則ち退かず、護らざれば、則ち退く、實住法・慧解脫・俱解脫、これを九無學人と謂ふ』。ここに於て世尊この頌を說きて曰はく

世中の學・無學、尊ぶべく奉敬すべし、　彼能くその身を正し、口意も亦復然り。　居士、これ良田なり、　彼に施して大福を得。

佛說是の如し。給孤獨居士及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百二十八、[一]優婆塞經第十二

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時給孤獨居士[二]大[三]優婆塞衆五百人と俱に尊者舍梨子の所に往詣し、稽首作禮し却きて一面に坐しぬ。五百の優婆塞も亦爲に禮を作し却きて一面に坐しぬ。給孤獨居士及び五百の優婆塞一面に坐し已りて、尊者舍梨子彼の爲に法を說き[四]勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、無量の方便もて彼の爲に法を說き、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りて卽ち座より起ち佛の所に往詣し佛足を稽首し却きて一面に坐しぬ。尊者舍梨子去りて後久しからずして、給孤獨居士及び五百の優婆塞も亦佛の所に往詣し佛足を稽首し却きて一面に坐しぬ。尊者舍梨子及び衆坐已に定まるや、世尊告げて曰はく『舍梨子、若し汝白衣の聖弟子の善く五法を護り行じ、及び[五]四增上心を得、現法に樂居し、易くして[得]、難からずして得るを知らば、舍梨子、汝當に聖弟子、地獄盡き、畜生・餓鬼及び諸の惡處亦盡き、須陀洹を得、惡法に墮せず、[六]定んで正覺に趣き、極めて七有を受け、天上・人間に七たび往來し已りて而も苦邊を得と記別すべし。舍梨子、云何が白衣の聖弟子善く五法を護り行ずるや。[七](1)白衣の聖弟子は殺を離れ

【六】思法(Cetanā-dhamma)、昇進法(Paṭivedha-dhamma)、不動法(Akoppa-)、退法(Parihāna-)、不退法(Aparihāna-)、護法(Anurakkhana-)、實住(Ṭhitakappa-)、慧解脫(Paññāvimutta)、俱解脫(Ubhatovimutta)。

【七】護則不退、不護則退の八字は護法を註せる文句の如し。

【一】A. iii. 211.

【二】居士(Gahapati)。在家の意を表はす巴利語は(1)Gihin(家を有てるもの)、(2)Gahaṭṭha(家に立てるもの)、(3)Agārika(家あるもの)、(4)Gahapati(家の主)の四語あり、「居士」の原語としては(2)最も適當なるが如し、但通常これを(4)の譯語となす。

【三】大優婆塞(Mahā-upāsaka)。

【四】勸發渴仰成就歡喜。二卷「七車經」註[七]參照。

【五】四增上心法(Ābhicetasika)。

【六】定趣正覺(Niyato sambodhiparāyaṇo)。

【七】五戒(Pañca sīlā)に就ては一二卷「鞞婆陵耆經」註[六]參照。

諸の行欲の人に於て最上と爲す。居士、(10)若し一行欲の人有りて如法に道を以て財物を求索し、彼如法に道を以て財物を求め已りて自ら養ひ、及び父母・妻子・奴婢・作使を安隱にし、亦沙門梵志を供養し昇上與樂倶にして而も樂報を受け天に生じ長壽ならしめ、財物を得已りて染せず著せず縛せず繳せず、繳せずし已りて染著に災患を見、出要を知りて而も用ふれば、この行欲の人諸の行欲の人に於て最第一、最大・最上・最勝・最尊と爲し、最妙と爲す。猶ほ牛に因りて乳有り、乳に因りて酪有り、酪に因りて生酥有り、生酥に因りて熟酥有り、熟酥に因りて酥精有り。酥精は最第一・最大・最上・最勝・最尊と爲し、最妙と爲すが如し。是の如く居士、この行欲の人諸の行欲の人に於て最第一・最大・最上・最勝・最尊と爲し、最妙と爲す』。ここに於て世尊この頌を說きて曰はく、

若し非法もて財を求め、　及び法・非法もて求め、　供せず自ら用ひず、　亦施して福を爲さざれば　二倶に皆惡有り、　行欲に於て最下たり。　若し如法に財を求め、　自身懃めて得る所、
他に供し及び自ら用ひ、　亦施を以て福を爲さば　二倶に皆德有り、　行欲に於て最上たり。
若し出要の慧を得、　欲を行じて家に住在し、　災患を見て足るを知り、　節儉して財物を用ふれば、　彼出欲の慧を得、　行欲に於て最上たり。

佛說是の如し。給孤獨居士及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百二十七、福田經第十一

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時給孤獨居士佛所に往詣し佛足を稽首し却きて一面に坐し白して曰く『世尊、世中幾ばくの福田人有りと爲すや』。世尊告げて曰はく『居士、世中凡そ二種の福田人有り。云何が二と爲す。一は學人、二は無學人なり。學人に十八有り、無學人に九有り。居士、云何が十八學人なる。信行・法行・信解脫・見到・身

【一】 A. 1. 62. 「雜阿含」三五經の二三。
【二】 福田人(Dakkhiṇeyya)。供養を受くるに價する人、阿羅漢その他をいふ。
【三】 學人(Sekha)。尙ほ學ぶべきことを有する人の意、四向四果の中初の七をいふ。
【四】 無學人(Asekha)。學ぶべきことなき人の意、四向四果の中最後の阿羅漢果の人。
【五】 信行(Saddhānusārin)、法行(Dhammānusārin)、信解(Saddhāvimutta)、見到(Diṭṭhippatta)、身證(Kāyasakkhin)、家家(Kolaṅkola)、一種(Ekabījin)、向須陀洹—得阿那含の三向三得(通常果といふ)に就ては一卷「水喩經」註(四)を見よ。中般涅槃以下五種の涅槃に就ては二卷「善人往經」註(五)を見よ。

求索す。彼法非法もて財物を求め已りて能く自ら養ひ、及び父母・妻子・奴婢・作使を安隱にし、亦沙門梵志を供養し昇上與樂俱にして而も樂報を受け天に生じ長壽ならしむ。是の如く一行欲の人有り。(7)また次に一行欲の人有り。如法に道を以て財物を求索す。彼如法に道を以て財物を求め已りて自ら養はず、及び父母・妻子・奴婢・作使を安隱に[せず]、亦沙門梵志を供養し昇上與樂俱にして而も樂報を受け天に生じ長壽ならしめ[ず]。是の如く一行欲の人有り。(8)また次に居士、一行欲の人有り。如法に道を以て財物を求索す。彼如法に道を以て財物を求め已りて能く自ら養ひ、及び父母・妻子・奴婢・作使を安隱にし而も沙門梵志を供養せず、昇上與樂俱にして而も樂報を受け天に生じ長壽ならしめ[ず]。是の如く一行欲の行人有り。(9)また次に居士、一行欲の人有り。如法に道を以て財物を求索す。彼如法に道を以て財物を求め已りて能く自ら養ひ及び父母・妻子・奴婢・作使を安隱にし、亦沙門梵志を供養し昇上與樂俱にして而も樂報を受け、天に生じ長壽ならしめ、財物を得已りて染著縛繳し、繳ひ已りて染著に災患を見ず、出要を知らずして而も用ふ。是の如く一行欲の人有り。(10)また次に居士、一行欲の人有り。如法に道を以て財物を求索す。彼如法に道を以て財物を求め已りて能く自ら養ひ及び父母・妻子・奴婢・作使を安隱にし亦沙門梵志を供養し昇上與樂俱にして而も樂報を受け天に生じ長壽ならしめ、財物を得已りて染せず著せず縛せず繳せず、繳せずし已りて染著に災患を見、出要を知りて而も用ふ。是の如く一行欲の人有り。居士、(1)若し一行欲の人有りて非法無道にして財物を求索し、彼非法無道にして財物を求め已りて自ら養はず、及び父母・妻子・奴婢・作使を安隱に[せず]、亦沙門梵志を供養せず、昇上與樂俱にして而も樂報を受け天に生じ長壽ならしめ[ざれ]ば、この行欲の人、諸の行欲の人に於て最下と爲す。居士、(4)若し一行欲の人有り、法非法もて財物を求索し、彼法非法もて財物を求め已りて自ら養ひ及び父母・妻子・奴婢・作使を安隱にし、亦沙門梵志を供養し、昇上與樂俱にして而も樂報を受け天に生じ長壽ならしむれば、この行欲の人、

卷の第三十

百二十六、行欲經第十

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衛國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時給孤獨居士佛の所に往詣し佛足を稽首し却きて一面に坐し白して曰く『世尊、世中幾人の欲を行ずる[者]有りと爲すや』。世尊告げて曰はく『居士、世中凡そ十人欲を行ずる[者]有り。云何が十と爲す。(1)居士、一行欲の人有り。非法無道にして財物を求索す。彼非法無道にして財物を求め已りて、自ら養はず、及び父母妻子・奴婢・作使を安隱に[せず]亦沙門梵志を供養せず、昇上與樂俱にして而も樂報を受け天に生じ長壽ならしめ[ず]。是の如く一行欲の人有り。(2)また次に居士、一行欲の人有り。非法無道にして財物を求索す。彼非法無道にして財物を求め已りて能く自ら養ひ及び父母・妻子・奴婢・作使を安隱にし、而も沙門梵志を供養せず、昇上與樂俱にして而も樂報を受け天に生じ長壽ならしめ[ず]。是の如く一行欲の人有り。(3)また次に居士、一行欲の人有り。非法無道にして、財物を求索す。彼非法無道にして財物を求め已りて能く自ら養ひ、及び父母・妻子・奴婢・作使を安隱にし、亦沙門梵志を供養し、昇上與樂俱にして而も樂報を受け天に生じ長壽ならしむ。是の如く一行欲の人有り。(4)また次に居士、一行欲の人有り。法非法もて財物を求索す。彼法非法もて財物を求め已りて自ら養はず、及び父母・妻子・奴婢・作使を安隱に[せず]、亦沙門梵志を供養せず、昇上與樂俱にして而も樂報を受け天に生じ長壽ならしめ[ず]。是の如く一行欲の人有り。(5)また次に居士、一行欲の人有り。法非法もて財物を求索す。彼法非法もて財物を求め已りて能く自ら養ひ、及び父母・妻子・奴婢・作使を安隱にし、而も沙門梵志を供養せず、昇上與樂俱にして而も樂報を受け天に生じ長壽ならしめ[ず]。是の如く一行欲の人有り。(6)また次に居士、一行欲の人有り。法非法もて財物を

【一】A. v. 176. 法炬譯「伏婬經」。

【二】行欲(Kāmabhogī)。二九卷「貧窮經」の「有欲人」と同じ。

【三】作使(Kammakarapo-rian)。仕事をする男の意。

これに緣りて、身壞れ命終りて必ず惡處に至り地獄の中に生ず。これ我が聖法中不善の收縛と說く
なり。我縛の更に是の如く苦にして、是の如く重く、是の如く麁にして、是の如く樂しむべからざ
ること、地獄・畜生・餓鬼の縛の如き有るを見ざるなり。この三苦縛、漏盡の阿羅訶比丘已に知りて
滅盡し、その根本を拔き永く來り生ずる無し』。ここに於て世尊この頌を說きて曰はく

　世間貧窮は苦なり。　他の錢財を舉貸し、　錢財を舉貸し已り、　他に責め[られ]て苦惱と爲
る。　財主往きて求索し、　これに因りて收めて繫縛す、　この縛甚だ重く苦なり。　世間は
欲を樂しむ。　聖法に於ても亦然り。　若し正信有る無ければ　慚無く及び愧無く、　惡不善
の行を作し、　身不善の行を作し、　口意倶に亦然り、　覆藏して說くを欲せず、　正に教訶
を樂はず。　若し數數行ずる有れば意念則ち苦と爲る。　或は村或は靜處、　これに因りて必ず
悔有り。　身口に諸の行を習ひ、　及び意の念ずる所、　惡業轉た增して多く、　數數作して
また作す。　彼惡業にして慧無く、　多く不善を作し已りて　所生に隨ひ畢訖りて、　必ず地
獄の縛に往く。　この縛最も甚だ苦なり。　[五]雄猛の離るゝ所。　如法に財利を得、　負はずし
て安隱を得、　施與して歡喜を得、　二倶に皆利を獲。　是の如く諸の居士、　施に因りて福
增して多し。　是の如く聖法中、　若し好き誠信有れば　具足して慚愧を成じ　庶幾くは慳貪
無けん。　已に五蓋を捨離し、　常に樂しみて精進を行じ　諸の禪定を成就し、　[六]滿具して常
に樂を棄つ。　已に無食の樂を得て、　猶ほ水浴淨の如し。　不動心解脫し、　一切の有結盡
く。　病無きを涅槃と爲し、　これを無上の燈と謂ふ。　憂無く塵無くして安きを、　これを
移動せずと說く。

佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第二十九

【五】雄猛(Dhira)。堅固にして勇敢なる人。

【六】滿具常棄樂(Ekodi nipako sato)。「專心にして巧妙、正念なり」。

世尊また諸の比丘に告げて曰はく『(5)若し有欲の人、財主責索するも償ふを得ること能はず。財主數ば往きて彼に至りて求索す。世中財主數ば往きて、彼に至りて求索するは大苦と爲すや』。諸の比丘白して曰く『爾なり世尊』。世尊また諸の比丘に告げて曰はく『(6)若し有欲の人、財主數ば往きて彼に至りて求索するも彼故らに還さず。すなはち財主の收縛する所と爲る。世中財主の爲に收縛せらるゝは大苦と爲すや』。諸の比丘白して曰く『爾なり世尊』。『これを世中有欲の人貧窮するはこれ大苦なり、世中有欲の人財物を擧貸するはこれ大苦なり、世中有欲の人擧貸し息長するはこれ大苦なり。世中有欲の人、財主責索するはこれ大苦なり、世中有欲の人、財主數ば往きて彼に至りて求索するはこれ大苦なり、世中有欲の人、財主の爲に收縛せらるゝはこれ大苦なりと爲す。(1)是の如く若しこの聖法の中に於て善法を信ずること無く禁戒無く博聞無く、布施無く善法に智慧無き有れば、彼多く金・銀・琉璃・水精・摩尼・白珂・螺璧・珊瑚・琥珀・瑪瑙・瑇瑁・硨渠・碧玉・赤石・琁珠有りと雖も、彼故らに貧窮して力勢有ること無し。これ我が聖法中不善の貧窮と說くなり。(2)彼身惡行・口・意惡行あり。これ我が聖法中不善の擧貸と說くなり。(3)彼身の惡行を覆藏せんと欲し自ら發露せず道說を欲せず、人をして訶責せしむるを欲せず順求せず。口、意の惡行を覆藏せんと欲し自ら發露せず道說を欲せず、人をして訶責せしむるを欲せず順求せず。これ我が聖法中不善の長息と說くなり。(4)彼或は村邑及び村邑の外に行く。諸の梵行者見已りてすなはちこの說を作す、諸賢、この人是の如く作し是の如く行じ是の如く惡にして是の如く不淨なり。これ村邑の刺なりと。彼この說を作す、諸賢、我是の如く作さず是の如く行ぜず、是の如く惡ならず、是の如く不淨ならず、亦村邑の刺に非ずと。これ我が聖法中不善の責索と說くなり。(5)彼或は無事處に在り或は山林・樹下に在り、或は空閑居に在りて三不善の念を念ず。欲念・恚念・害念なり。これ我が聖法中不善の數往求索と說くなり。(6)彼身惡行・口・意惡行を作す。彼身惡行・口・意惡行を作し已りて、これに因り

(1)貧窮(Dalidda)。
(2)擧貸(Iṇādāna)。
(3)長息(Vaḍḍhi)。
(4)責索(Codana)。
(5)數往求索(Anucariya)。
(6)收縛(Bandhana)。

若し人身を得れば、最も微妙の法を説く、若し果を得ざる有れば、必ずその時に遇はず。多く梵行の難を説き、人後世に在り、若しその時に遇ふを得るは、これ世中甚だ難し。また人身を得、及び微妙の法を聞かんと欲せば、當に精勤を以て學すべし。人自ら哀愍するが故に。談説に善法を聞き、その時を失せしむること莫れ。若しこの時を失すれば、必ず地獄に墮すを憂ふ。若しその時に遇はず、善法を説くを聞かざるは、商人の財を失ふが如くにして、生死を受くること無量なり。若し人身を得る有りて正善法を説くを聞き、世尊の教を遵奉すれば、必ずその時に遭遇す。若しこの時に遭遇し、正梵行に堪任すれば、無上眼を成就し、日親の所説、彼爲に常に自ら護り、進行して諸の使を離れ、一切の結を斷滅し、魔と魔の眷屬とを降す。彼世間を度し、謂く諸漏を盡すを得。

佛説是の如し。彼の諸の比丘佛の所説を聞きて歡喜奉行しぬ。

百二十五、[一]貧窮經第九

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衛國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『(1)世の[二]有欲の人貧窮なるは大苦と爲すや』。諸の比丘白して曰く『爾なり世尊』。世尊また諸の比丘に告げて曰はく『(2)若し有欲の人貧窮なれば他家の財物を擧貸す。世中他家の財物を[三]擧貸するは大苦と爲すや』。諸の比丘白して曰く『爾なり世尊』。世尊また諸の比丘に告げて曰はく『(3)若し有欲の人財物を擧貸して時に還すを得ず、日日に[四]息長ず。世中息長するは大苦と爲すや』。諸の比丘白して曰く『爾なり世尊』。世尊また諸の比丘に告げて曰はく『(4)若し有欲の人息長じて還さず、財主責索す。世中財主責索するは大苦と爲すや』。諸の比丘白して曰く『爾なり世尊』。

【一】 A. iii. 351.

【二】 世有欲人(Lokasmiṃ kāmabhogī)。この世に於て欲を享くる人。

【三】 擧貸他家財物、他人より財物を借用するをいふ。

【四】 日日長息。一本「白目長息」に作るといふ、この方正しきが如し。巴利文「vaḍḍhiṃ paṭisuṇāti」「増加を聞く」。利息の殖えることなり。

向せしめ、覺道に趣向せしめ、善逝の所演たるを說く。彼の人その時中國に生じ聾ならず瘂ならず、羊の鳴くが如くならず、手を以て語らず、又能く善惡の義を知說すと雖も然も邪見及び顚倒の見有りて是の如く見、是の如く說く、施無く齋無く呪說有ること無く、善惡の業無く善惡の業報無く、この世彼の世無く父無く母無く、世に眞人の善處に往至しこの世彼の世に善く去り善く向ひ、自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊ぶこと無しと。これを人梵行を行ずるに第七難・第七非時と謂ふ。(8)また次に若し時に如來・無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師・號佛衆祐、世に出でず、亦法の止息に趣向せしめ、滅訖に趣向せしめ、覺道に趣向せしめ、善逝の所演たるを說かず。彼の人その時中國に生じ聾ならず瘂ならず、羊の鳴くが如くならず、手を以て語らず、又能く善惡の義を知說し而も正見不顚倒見有りて是の如く見、是の如く說く、施有り齋有り亦呪說有り、善惡の業有り善惡の業報有り、この世彼の世有り父有り母有り、世に眞人の善處に往至しこの世彼の世に善く去り善く向ひ、自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊ぶこと有りと。これを人梵行を行ずるに第八難・第八非時と謂ふ。人梵行を行ずるに一不難有り一是時有り。云何が人梵行を行ずるに一不難有り一是時有りや。若し時に如來・無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師・號佛衆祐、世に出で法の止息に趣向せしめ、滅訖に趣向せしめ、覺道に趣向せしめ、善逝の所演たるを說けば、彼の人その時中國に生じ聾ならず瘂ならず、羊の鳴くが如くならず、手を以て語らず、又能く善惡の義を知說し而も正見不顚倒見有りて、是の如く見、是の如く說く、施有り齋有り亦呪說有り、善惡の業有り善惡の業報有り、この世彼の世有り父有り母有り、世に眞人の善處に往至し、この世彼の世に善く去り善く向ひ、自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊ぶこと有りと。これを人梵行を行ずるに一不難有り、一是時有りと謂ふ』。こゝに於て世尊この頌を說きて曰はく、

說得し自ら譽めず、他を慢ぜず、義を說きて現法に諸の處に隨ふなり。癡増上慢に纏はるゝ[者]の如く我が前に來りて究竟智を說得せしむること莫れ。彼は義を得ず。但大いに煩勞す。沙門二十億我が前に來りて究竟智を說得し、自ら譽めず他を慢ぜず、義を說きて現法に諸の處に隨ふ』。佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百二十四、[一]八難經第八

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『人梵行を行ずるに而も[二]八難八非時有り。云何が八と爲す。(1)若し時に[三]如來・無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師・號佛衆祐、世に出で法の[四]止息に趣向せしめ、[五]滅訖に趣向せしめ、[六]覺道に趣向せしめ、[七]善逝の所演たるを說く。彼の人その時地獄の中に生ず。これを人梵行を行ずるに第一難・第一非時と謂ふ。(2)また次に若し時に如來・無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師・號佛衆祐、世に出で法の止息に趣向せしめ、滅訖に趣向せしめ、覺道に趣向せしめ、善逝の所演たるを說く。彼の人その時畜生の中に生じ、(3)餓鬼の中に生じ、(4)長壽天の中に生じ、(5)在邊國夷狄の中に生じ、信無く恩無く反覆有ること無く、若しは比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷無し。これを人梵行を行ずるに第五難・第五非時と謂ふ。(6)また次に若し時に如來・無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師・號佛衆祐、世に出で法の止息に趣向せしめ、滅訖に趣向せしめ、覺道に趣向せしめ、善逝の所演たるを說く。彼の人その時中國に生ずと雖も而も聾啞にして、羊の鳴くが如く常に手を以て語り善惡の義を知說すること能はず。これを人梵行を行ずるに第六難・第六非時と謂ふ。(7)また次に若し時に如來・無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師・號佛衆祐、世に出で法の止息に趣向せしめ、滅訖に趣

【一】A. iv. 225.「增一阿含」四二品の一。

【二】八難、八非時(Akkhaṇa, asamaya)。時ならず、時に適せず。

【三】如來・無所著以下十號の解釋は二卷「七日經」註〔二六―三五〕を見よ。

【四】趣向止息(Opasamika)、止息(Upasama)に趣かしむるもの。

【五】趣向滅訖(Parinibbāyika)。般涅槃卽ち圓寂(Parinibbāna)に趣かしむるもの。

【六】趣向覺道(Sambodhagāmi)。三菩提卽ち正覺に趣かしむるもの。

【七】爲善逝所演(Sugatappaveditā)。佛の演說したまふ所のものたりの意。

對する有れば、この心解脱・慧解脱を失せしむること能はず、心內に在りて住し善く制し守持して興衰の法を觀ず。若し耳所知の聲、鼻所知の香、舌所知の味、身所知の觸、「乃至」、意所知の法、意と對する有れば、この心解脱・慧解脱を失せしむること能はず、心內に在りて住し善く制し守持して興衰の法を觀ず。世尊、猶ほ村を去ること遠からずして大石山有るがごとし。破れず缺けず脆からず堅く住し空ならずして合一す。若し東方より大風雨の來る有るも搖れしむること能はず、動き轉移せず。亦東方風に非ずして移りて南方に至る。若し南方より大風雨の來る有るも搖れしむること能はず動き轉移せず。亦南方風に非ずして移りて西方に至る。若し西方より大風雨の來る有るも搖れしむること能はず動き轉移せず。亦西方風に非ずして移りて北方に至る。若し北方より大風雨の來る有るも搖れしむること能はず動き轉移せず。亦北方風に非ずして移りて諸方に至る。是の如く彼若し眼所知の色、眼と對する有れば、この心解脱・慧解脱を失せしむること能はず、心內に在りて住し善く制し守持して興衰の法を觀ず。若し耳所知の聲、鼻所知の香、舌所知の味、身所知の觸、意所知の「乃至」、法と意と對する有れば、この心解脱・慧解脱を失せしむること能はず、心內に在りて住し善く制し守護して興衰の法を觀ず』。こゝに於て尊者沙門二十億この頌を說きて曰く、

樂は無欲に在り、　心遠離に存し、　無諍を喜び、　受盡きて欣悅す。　亦受盡くるを樂しみ、　心移動せず、　如眞を知るを得、　これより心解く。　心解くるを得已りて比丘根を息む。　作已に觀ぜず、　求作する所無し。　猶ほ石山の、　風も動かす能はざるが如し、　色聲香味、　身觸も亦然り、　愛不愛の法も心を動かすこと能はず。

尊者沙門二十億佛前に於て究竟智を說得し已りて、卽ち坐より起ち佛足を稽首し遶三匝して去りぬ。その時世尊、尊者沙門二十億の去りて後久しからずして諸の比丘に告げたまはく『諸の族姓子、應に是の如く來りて我が前に於て究竟智を說得すべし。沙門二十億の如く我が前に來りて究竟智を

し稽首して禮を作し却きて一面に坐し白して曰く『世尊、若し比丘有りて無所著を得、諸漏已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ、重擔已に捨て有結已に解き、自ら善義を得、正に解脱を知れば、彼その時に於てこの六處を樂しみ、無欲を樂しみ、遠離を樂しみ、無諍を樂しみ、愛盡を樂しみ、受盡を樂しみ、心移動せざるを樂しむ。世尊、或は一人有りて而もこの念を作す、この賢者信に依るを以ての故に無欲を樂しむとは、應に是の如く觀ずべからず。但欲盡・恚盡・癡盡、これ無欲を樂しむと。世尊、或は一人有りて而もこの念を作す、この賢者、利稱譽を貪り供養を求むるを以て故に遠離を樂しむとは、應に是の如く觀ずべからず。但欲盡・恚盡・癡盡、これ遠離を樂しむと。世尊、或は一人有りて而もこの念を作す、この賢者戒に依るを以ての故に無諍を樂しむとは、應に是の如く觀ずべからず。但欲盡・恚盡・癡盡、これ無諍を樂しみ、愛盡を樂しみ、受盡を樂しみ、心移動せざるを樂しむと。世尊、若し比丘有りて無所著を得、諸漏已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ、重擔已に捨て有結已に解き、自ら善義を得、正智にして正解脱すれば、彼その時に於てこの六處を樂しむ。世尊、若し比丘有りて學未だ得ず意、無上の安隱涅槃を求願すれば、彼その時に於て學根及び學戒を成就す。彼後時に於て諸漏已に盡きて而も無漏を得、心解脱し慧解脱し、現法中に於て自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊び、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ更に有を受けずと如眞を知れば、彼その時に於て無學根及び無學戒を成就す。世尊、猶ほ幼少の童子のごとし。彼その時に於て小根及び小戒を成就す。彼後時に於て學根を具足すれば、彼その時に於て學根及び學戒を成就す。是の如く世尊、若し比丘有りて學未だ得ず意、無上の安隱涅槃を求願すれば、彼その時に於て學根及び學戒を成就す。彼後時に於て諸漏已に盡きて而も無漏を得、心解脱し慧解脱し、現法中に於て自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊び、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ更に有を受けずと如眞を知れば、彼その時に於て無學根及び無學戒を成就す。彼若し眼所知の色、眼と

思惟して心にこの念を作すや、若し世尊の弟子精勤して正法律を學習する者有れば、我を第一と爲す。然るに諸の漏より[我が]心解脫するを得ず。我が父母の家極大富樂にして多く錢財有り。我今寧ろ戒を捨て道行を罷め、布施して諸の福業を修せんと欲すべきやと』。彼の時尊者沙門二十億羞恥慚愧し則ち無畏無し。『世尊我が心の念ずる所を知りたまふと』。[彼]叉手を佛に向け白して曰く『實に爾り』。世尊告げて曰はく『沙門、我今汝に問はん。解する所に隨ひて答へよ。意に於て云何。汝家に在りし時善く[四]琴を調彈しぬ。琴歌音に隨ひ、歌琴音に隨ひしや』。尊者沙門二十億白して曰く『是の如し世尊』。世尊また問ひたまはく『意に於て云何。若し琴を彈ずるに絃急なれば、和音の愛樂すべき有りと爲すや』。沙門答へて曰く『不なり世尊』。世尊また問ひたまはく『意に於て云何。若し琴を彈ずるに絃緩なれば、和音の愛樂すべき有りと爲すや』。沙門答へて曰く『不なり世尊』。世尊また問ひたまはく『意に於て云何。若し琴を彈ずるに調ひ、絃急ならず緩ならず適してその中を得れば、和音の愛樂すべき有りと爲すや』。沙門答へて曰く『是の如し世尊』。世尊告げて曰はく『是の如く沙門、極大に精進すれば心をして調亂せしめ、極めて精進せざれば心をして懈怠せしむ。この故に汝當にこの時を分別しこの相を觀察し放逸なるを得ること莫るべし』。その時尊者沙門二十億、佛の所說を聞きて善く受け善く持し、卽ち坐より起ち佛足に稽首し遶三匝して去り、佛の彈琴の喩敎を受け遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤しぬ。彼遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤し已りて、族姓子の爲にする所、鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道する者、唯無上の梵行訖り、現法中にかて自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊び、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ更に有を受けずと如眞を知りぬ。尊者沙門二十億法を知り已りて阿羅訶を得るに至りぬ。彼の時尊者沙門二十億阿羅訶を得已りて而もこの念を作しぬ、今正にこれ時なり。我寧ろ世尊の所に往詣し究竟智を說得すべきやと。こゝに於て尊者沙門二十億佛の所に往詣

【四】 琴(Viṇa) Indian lute, Mandoline.

諸の梵行者を汚染せしむること莫れ』。こゝに於て世尊この頌を說きて曰はく、

共に會し集まりて當に知るべし、　惡・欲・憎・嫉・恚、　不語・結・恨・慳、　嫉妬・諂・欺誑し、
衆に在りて詐言息み、　屛處には沙門と稱し、　陰に諸の惡行を作し、　惡見にして守護せず、　欺誑し妄語言すれば、　是の如く當に彼を知るべし、　往集して與に會せず、　擯棄して共に止まらず。　欺詐誑說多く、　息に非ずして息と稱說し、　知る時淨行を具するは、擯棄して彼を遠離せよ。　淸淨は淸淨と共に、　常に當に共に和合すべし。　和合は安隱を得、　是の如くして苦邊を得。

佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百二十三、沙門二十億經第七[一]

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時尊者沙門[二]二十億も亦舍衞國に遊び[三]闇林に在りて、前夜にも後夜にも學習して眠らず、精勤して正に住して道品を修習しぬ。こゝに於て尊者沙門二十億安靜に獨り住し宴坐し思惟して心にこの念を作しぬ、若し世尊の弟子精勤して正法律を學習する者有れば、我を第一と爲す。然るに諸の漏より[我が]心解脫するを得ず。我が父母の家極大富樂にして多く錢財有り。我今寧ろ戒を捨て道行を罷め、布施して諸の福業を修せんと欲すべきやと。その時世尊他心智を以て尊者沙門二十億の心の念ずる所を知り、すなはち一比丘に告げたまはく『汝彼に往至し、沙門二十億を呼び來れ』。こゝに於て一比丘白して曰く『唯然り』。卽ち坐より起ち稽首して足を禮し遶三匝して去り、尊者沙門二十億の所に往至して而も彼に語げて曰く『世尊汝を呼びたまふ』。尊者沙門二十億、比丘の語を聞きて卽ち佛の所に詣り稽首して禮を作し却きて一面に坐しぬ。世尊告げて曰はく『沙門、汝實に安靜に獨り住し宴坐し

【一】 A. iii. 374; Vin. i. 179. 「雜阿含」九經の三〇、「增一阿含」二三品の三、「四分律」三九卷、「五分律」二一卷。
【二】 二十億(Soṇa Koḷivisa)。「五分」、「四分」は「億耳」と譯し「雜」、「增一」は「二十億耳」と譯す。soṇa は「耳」、koḷi は「億」(koṭi 倶胝)の千萬と混淆したるなり、visa は「二十」(visati と混淆したるなり)。
【三】 闇林(Sītavana)。寒林とも呼ぶ。墓地なり。

の眞の好き麥を汚穢せしむること莫れ。是の如く大目揵連、或は癡人有り、正に出入を知り、善觀分別し屈申・低仰・儀容・庠序あり。善く僧伽梨及び諸の衣鉢を著け、行住坐臥・眠寤・語默皆正にこれを知り、眞の梵行[者]に似如し、諸の眞の梵行[者]の所に至るも彼[等]或は知らず。大目揵連、若し諸の梵行[者]知ればすなはちこの念を作す、これ沙門の汚なり、これ沙門の辱なり、これ沙門の憎なり、これ沙門の刺なりと。知り已りてすなはち當に共にこれを擯棄すべし。所以者何。諸の梵行者を汚染せしむること莫れ。大目揵連、猶ほ居士、秋時穀を揚げ、穀聚の中に若し成實有れば、揚ぐるもすなはち止住し、若し不成實及び粃糠はすなはち風に隨ひて去るが如し。居士見已りて即ち掃箒を持つて掃治して淨ならしむ。所以者何。餘の淨き好き稻を汚雜せしむること莫れ。是の如く大目揵連、或は癡人有り、正に出入を知り、善觀分別し、屈伸・低仰・儀容・庠序あり。善く僧伽梨及び諸の衣鉢を著け、行住坐臥・眠寤・語默皆正にこれを知り、眞の梵行[者]に似如し、諸の眞の梵行[者]の所に至るも彼[等]或は知らず。大目揵連、若し諸の梵行[者]知ればすなはちこの念を作す、これ沙門の汚なり、これ沙門の辱なり、これ沙門の憎なり、これ沙門の刺なりと。知り已りてすなはち當に共にこれを擯棄すべし。所以者何。諸の梵行者を汚染せしむること莫れ。大目揵連、猶ほ居士泉水を過ぐるが爲の故に通水槽を作らんとし、斧を持ちて林に入り諸の樹を扣打し、若し堅實なればその聲すなはち小なり、若し空中なればその聲すなはち大なり。居士知り已りてすなはち斫りて節を治し擬して通水槽を作るが如し。是の如く大目揵連、或は癡人有り、正に出入を知り、善觀分別し、屈伸・低仰・儀容・庠序あり。善く僧伽梨及び諸の衣鉢を著け、行住坐臥・眠寤・語默皆正にこれを知り、眞の梵行[者]に似如し、諸の眞の梵行[者]の所に至るも彼[等]或は知らず。大目揵連、若し諸の梵行[者]知ればすなはちこの念を作す、これ沙門の汚なり、これ沙門の辱なり、これ沙門の憎なり、これ沙門の刺なりと。知り已りてすなはち當に共にこれを擯棄すべし。所以者何。

比丘有り、已に不淨爲りと說きたまふや。我寧ろ[五]如其像定に入り如其像定他心の智を以て衆の心を觀察すべしと』。尊者大目揵連即ち如其像定に入り如其像定他心の智を以て衆の心を觀察しぬ。尊者大目揵連すなはち世尊の比丘の爲に、この衆中に一比丘有り、已に不淨爲りと說きたまひし所を知りぬ。こゝに於て尊者大目揵連卽ち定より起ち、彼の比丘の前に至り臂を牽き、將ゐ出して門を開きて外に置き、『癡人、遠く去り、こゝに於て住すること莫れ。また比丘衆と會ふことを得ざれ。今より已去、[汝は]これ比丘に非ず』とて、門を閉ぢ鑰を下し還りて佛の所に詣り佛足を稽首し却きて一面に坐し白して曰く『世尊比丘の爲に、この衆中に一比丘有り、已に不淨爲りと說きたまひし所の者、我已に逐ひ出しぬ。世尊、初夜既に過ぎ中夜また訖り、後夜盡くるに垂んとし、將に欲明に向んとし、明出ること久しからざらん。佛及び比丘衆集坐すること極めて久し。唯願はくは世尊、從解脫を說きたまへ』。世尊告げて曰はく『大目揵連、彼の愚癡の人當に大罪を得べし。世尊及び比丘衆を觸嬈せり。大目揵連、若し、如來をして不淨の衆に在りて從解脫を說かしめば、彼の人則便ち頭破れて七分せん。この故に大目揵連、汝等今より已後從解脫を說け。如來また從解脫を說かず。[六]所以者何。是の如く大目揵連、或は癡人有りて正に出入を知り、善觀分別し、屈申・低仰・儀容・庠序あり。善く僧伽梨及び諸の衣鉢を著け、行住坐臥・眠寤・語默皆正にこれを知り、眞の梵行[者]に似如し、諸の眞の梵行[者]の所に至るも彼[等]或は知らず。大目揵連、若し諸の梵行[者]知ればすなはちこの念を作す、これ沙門の汚なり、これ沙門の辱なり、これ沙門の憎なり。これ沙門の刺なりと。知り已りてすなはち當に共にこれを擯棄すべし。所以者何。諸の梵行者を汚染せしむること莫れ。大目揵連、猶ほ居士、良稻田有り或は麥田有りて草を生じ、[七]穢麥と名づくるが如し。その根相似、莖節・葉花皆亦麥に似たり。後實を生じ已りて、居士これを見て、すなはちこの念を作す、これ麥の汚辱なり、これ麥の刺なりと。知り已りてすなはち拔きて外に擲棄す。所以者何。餘

【五】如其像定、八卷「侍者經」註「一九」を見よ。

【六】以上九卷「瞻波經」前半と同じ。

【七】穢麥(Yavakāraṇḍava)。

切の地を領じ乃ち大海に至るが如く、是の如く勇猛にして伏し、無上の商人の主、弟子樂しみて恭敬し、三達して死の怖を離る。一切これ佛の子にして永く枝莖節を除き、無上の法輪を轉じ、第一尊を稽首したてまつる。

佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百二十二、瞻波經第六[一]

我が聞きしこと是の如し。ある時佛瞻波[二]に遊び恒伽池の邊に在しぬ。その時世尊月の十五日に從解脫[三]を說きたまふ時、比丘衆の前に於て座を敷きて而も坐したまひぬ。世尊坐し已りて卽便ち定に入り、他心智を以て衆の心を觀察し、衆の心を觀じ已りて初夜に至り竟るも默然として而も坐したまひぬ。こゝに於て一比丘有り、卽ち坐より起ち偏に著衣を袒き、叉手を佛に向け白して曰く『世尊、初夜已に訖りぬ。佛及び比丘衆集坐して來た久し。唯願はくは世尊、從解脫を說きたまへ』。その時世尊默然として答へたまはず。こゝに於て世尊また中夜に至るも默然として而も坐したまひぬ。彼の一比丘再び坐より起ち偏に著衣を袒き、叉手を佛に向け白して曰く『世尊、初夜已に過ぎ、中夜將に訖らんとす。佛及び比丘衆集坐して來た久し。唯願はくは世尊、從解脫を說きたまへ』。世尊亦再び默然として答へたまはず。こゝに於て世尊また後夜に至るも默然として而も坐したまひぬ。彼の一比丘三たび坐より起ち偏に著衣を袒き、叉手を佛に向け白して曰く『世尊、初夜既に過ぎ中夜また訖り後夜竟くるに垂んとし、將に欲明[四]に向んとし、明出づること久しからざらん。佛及び比丘衆集坐すること極めて久し。唯願はくは世尊、從解脫を說きたまへ』。その時世尊彼の比丘に告げたまはく『この衆中に於て一比丘有り、已に不淨爲り』。彼の時尊者大目揵連も亦衆中に在りき。こゝに於て尊者大目揵連すなはちこの念を爲しぬ『世尊何れの比丘の爲に而もこの衆中に一

【一】A. iv. 168. 法炬譯「瞻波比丘經」。
【二】瞻波、恒伽池、九卷「瞻波經」註〔二〕、〔三〕參照。
【三】九卷「瞻波經」註〔四〕。
【四】欲明、明出、九卷「瞻波經」〔六―八〕參照。

子、我が轉ずる所の法輪汝また能く轉ず。舍梨子、この故に我汝が身口意の行を嫌はず』。尊者舍梨子また再び叉手を佛に向け白して曰く『唯然り世尊、我が身口意の行を嫌ひたまはず。世尊、五百の比丘の身口意の行を嫌ひたまはざるや』。世尊告げて曰はく『舍梨子、我亦この五百の比丘の身口意の行を嫌はず。所以者何。舍梨子、この五百の比丘盡く無著を得、諸漏已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ重擔已に捨て、有結已に盡きて而も善義・正智・正解脫を得。唯一比丘を除いて、我亦本已に現法中に於て究竟智を得、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ更に有を受けずと如眞を知らんと記せり。舍梨子、この故に我この五百の比丘の身口意の行を嫌はず』。尊者舍梨子、また三たび叉手を佛に向け白して曰く『唯然り世尊。我が身口意の行を嫌ひたまはず、亦この五百の比丘の身口意の行を嫌ひたまはず。世尊、この五百の比丘、幾ばくの比丘か[六]三明達を得、幾ばくの比丘か[七]俱解脫を得、幾ばくの比丘か[八]慧解脫を得るや』。世尊告げて曰はく『舍梨子、この五百の比丘、九十の比丘三明達を得、九十の比丘俱解脫を得、餘の比丘慧解脫を得ん。舍梨子、この衆枝無く葉無く亦節戾無く、淸淨眞實にして正に住立するを得』。その時[九]尊者傍耆舍も亦衆中に在りき。こゝに於て尊者傍耆舍卽ち坐より起ち偏に著衣を袒き、叉手を佛に向け白して曰く『唯然り世尊、我に威力を加へたまへ。唯願はくは善逝、我に威力を加へたまへ。我をして佛及び比丘衆の前に在りて[一〇]如義相應を以て而も讃頌を作さしめたまへ』。世尊告げて曰はく『傍耆舍、汝の欲する所に隨へ』。こゝに於て尊者傍耆舍佛及び比丘衆の前に在りて如義相應を以て而も讃頌して曰く

[一一]今十五[一二]請日、　集坐する五百の衆、　諸の結縛を斷除し、　無礙有盡の仙なり。　淸淨の
光明照して一切の有を解脫し、　生老病死盡き、　漏滅し所作辨じ、　調悔と疑結、　慢有
漏已に盡き　愛結の刺を拔斷し、　上醫また有ること無し。　勇猛師子の如く、　一切の恐畏
除く、　已に生死を度り、　諸漏已に滅し訖る。　猶ほ轉輪王の群臣に圍遶せられ、　悉く一

【六】三明(Tevijjā)とは宿命・天眼・漏盡の三智明をいふ。
【七】俱解脫(Ubhatobhāga-vimutta)。定と慧その障を除くことをいふ。
【八】慧解脫(Paññāvimutta)智慧の障を除くことをいふ。
【九】尊者傍耆舍(Āyasmā Vaṅgīsa)。
【一〇】「以如義相應、而作讃頌」Sāruppāhi gāthāhi abhitthavi)。適當の頌を以て讃稱せしめたまへ。
【一一】Theragāthā, 1234—1237.
【一二】請日=請請日。卽ち上にいふ自恣日。

我が聞きしこと是の如し。ある時佛王舍城に遊び竹林迦蘭哆園に在して大比丘衆五百人と俱に共に夏坐を受けたまひぬ。その時世尊月十五日に[二]從解脫を說き[三]相請請したまふ時比丘衆の前に在りて座を敷きて而して坐し、諸の比丘に告げたまはく『我はこれ梵志にして而も滅を得訖り、無上の醫王たり。我今身を受くるは[四]最もこれ後の邊なり。我はこれ梵志にして滅を得訖りて後、無上の醫王たり。我今身を受くるは最もこれ後の邊なり。謂く汝等輩はこれ我が眞の子なり。口より而も生ぜる法にして法に化せらる。謂く汝等輩はこれ我が眞の子なり。口より而も生ぜる法にして法に化せらる。汝[等]當に敎化して轉た相敎訶すべし』。その時尊者舍梨子も亦衆中に在りき。こゝに於て尊者舍梨子卽ち坐より起ち偏に著衣を袒き、叉手を佛に向け白して曰く『世尊、嚮の說きたまふ所、我はこれ梵志にして而も滅を得訖りて無上の醫王たり。我今身を受くるは最もこれ後の邊なり。我はこれ梵志にして滅を得訖りて後、無上の醫王たり。我今身を受くるは最もこれ後の邊なり。謂く汝等輩はこれ我が眞の子なり。口より而も生ぜる法にして法に化せらる。謂く汝等輩はこれ我が眞の子なり。口より而も生ぜる法にして法に化せらる。汝當に敎化して轉た相敎訶すべしと。[これ]世尊、諸の不調者に調御を得しめ、諸の不息者に止息を得しめ、諸の不度者に而も度を得しめ、諸の不解脫者に解脫を得しめ、諸の不滅訖者に滅訖を得しめ、未得道者にそをして道を得しめ、梵行を施說せざる[者]に梵行を施設せしめ、道を知り道を覺り道を識り道を說かしむ。世尊の弟子後に於て法を得、敎を受け訶を受け、敎訶を受け已りて世尊の語に隨ひて卽便ち行その意の如きを得、善く正法を知らん。唯然も世尊、我が身口意の行を嫌ひたまはざるや』。彼の時世尊告げて曰はく『舍梨子、我汝の身口意の行を嫌はず。所以者何。舍梨子、汝[五]聰慧・大慧・速慧・捷慧・利慧・廣慧・深慧・出要慧・明達慧有り。舍梨子、汝實慧を成就す。舍梨子、猶ほ轉輪王而も太子有り、敎を越えず、已りて則便ち父王の傳ふる所を受拜して而も能くまた傳ふるがごとく、是の如く舍梨

【二】五巻「等心經」註【一一】。九巻「瞻波經」註【四】を見よ。

【三】相請請（Pavāraṇā）自恣。

【四】これ最後身にして再び生を受くることなしといふ意。

【五】聰慧（Paṇḍita）。大慧（Mahāpañña、原典に puñña とあり誤なるか）、速慧（Hāsapañña）、廣慧（Puthupañña）、捷慧（Javanapañña）、利慧（Tikkhapañña）、明達慧 Nibbedhikapañña）。深慧・出要慧の二、巴利文に缺く。

苦、苦は則ち神に非ず。想も亦無常なり。無常は則ち苦、苦は則ち神に非ず。行も亦無常なり。無常は則ち苦、苦は則ち神に非ず。識も亦無常なり。無常は則ち苦、苦は則ち神に非ず。これを色無常・覺・想・行・識無常にして、無常は則ち苦、苦は則ち神に非ずと爲す。多聞の聖弟子は是の如き觀を作し、七道品を修習し無礙にして正思正念なり。彼是の如く知り是の如く見て、欲漏心解脱し、有漏・無明漏心解脱し、解脱し已りてすなはち解脱を知り、我生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辨じ更に有を受けずと如眞を知る。若し衆生、及び九の衆生居より乃ち有想無想處行餘の第一有に至る有れば、その中間に於て、これ第一なり、これ大これ勝これ最これ尊これ妙なり。謂く、世中の阿羅訶なり。所以者何。世中の阿羅訶、安隱快樂を得』。こゝに於て世尊この頌を說きて曰はく

無著は第一の樂にして、欲を斷じ愛有る無し、永く我慢を捨離し、無明の網を裂き壞る。彼不移動を得、心中穢濁無く、世間に染著せず、梵行もて無漏を得。五陰を了知し、七善法を境界とす、[四]大雄の遊行處なり、一切の恐怖を離る。七覺寶を成就し、具さに三種の學を學し、[五]妙に上朋友を稱し、佛の最上の眞子なり。十支道を成就し、大龍極めて心を定む。これ世中第一なり、彼則ち愛有ること無し。衆事移動せず、當來の有を解脱し、生老病死を斷じ、所作辨じ漏を滅す。無學の智を興起し、身の最後邊を得、梵行第一に具はり、彼の心他に由らず。上下及び諸方、彼喜樂有ること無く、能く師子吼を爲し、世間無上の覺たり。

佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百二十一、[一]請請經第五

【四、五】巴利文によればこの二偈は入れ代るべし。

【一】S. i. 190.「雜阿含」四五の一五、「別譯雜阿含」一二の一五、「增一阿含」三二品の五、法賢譯「解夏經」、竺曇無蘭譯「新歲經」、「受新歲經」、法賢譯「佛說解夏經」。

是の如きこの賢者、共に說くべからず、亦共に論ずべからず。若しこの賢者處非處に於て住する者、所知に住する者、說喩に住する者、道跡に住する者、是の如きこの賢者共に說くを得べく、亦共に論ずるを得べし。所說の時に因りて口行を止息し、已所見を捨て怨結の意を捨て、欲を捨て恚を捨て癡を捨て慢を捨て不語を捨て慳嫉を捨て、勝を求めず、他を伏せず、所失を取る莫く、義を說き法を說き、義を說き法を說き已りて敎へ、また敎止みて自ら歡喜し彼をして歡喜せしむ。是の如く義を說き是の如く事を說く。これ聖說義、これ聖說事なり。謂く至竟の漏盡くと』。こゝに於てこの頌を說きて曰はく、

若し諍ひて論議する有り、雜意もて貢高を懷き、聖に非ずして德を毀呰し、各々相便を求め、但他の過失を求め、意彼を降伏せんと欲し、更に互に而も勝るを求む。聖は是の如く說かず。若し論議するを得んと欲せば慧者當に時を知るべし。法有り亦義有り。諸聖の論是の如し。慧者是の如く說き、諍無く貢高無く、意に厭足有ること無く、結無く漏有ること無し。隨順して顚倒せず、正知にして而も說を爲す。善く說けば則ち然も可とし、自ら終に惡を說かず。諍を以て論議せず、亦他の諍を受けず。知處と說處と、これ彼の論ずる所。是の如く聖人說き、慧者倶に義を得、現法に樂を得と爲し、亦後世安しと爲す。當に知るべし、聰達者は倒に非ず常に非ずして說く。

佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百二十、[一]說無常經第四

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『色は無常なり。無常は則ち苦、苦は則ち神に非ず。覺も亦無常なり。無常は則ち

【一】S. iii. 82.
【二】色(Rūpa)、覺(Vedanā)、想(Saññā)、行(Saṅkhārā)、識(Viññāna)。
【三】非神(N'etaṃ mama, n'eso aham asmi na meso attā)。「こはわれの〔もの〕に非ず、こはわれに非ず、このものは我(が)に非ず」。

百十九、[一]説處經第三

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『こゝに[二]三説處有りて四無く五無し。若し比丘見已りて彼に因るが故に説きて而も我見聞識知すと説き、比丘説きて而もこれ我の知る所なりと説く。云何が三と爲す。比丘、過去世に因りて説きて而も是の如き過去世の時有りと説く。比丘、未來世に因りて説きて而も是の如き未來世の時有りと説く。比丘、現在世に因りて説きて而も是の如き現在世の時有りと説く。これを三説處と謂ひ四無く五無し。若し比丘見已りて彼に因るが故に説きて而も我見聞識知すと説き、比丘説きてこれ我の知る所なりと説く。所説に因りて善く義を習得し、不説に因りて善く習得せず。賢聖の弟子兩耳もて一心に法を聽く。彼兩耳もて一心に法を聽き已りて、一法を斷じ一法を修し一法を作證す。彼一法を斷じ一法を修し一法を作證し已りてすなはち正定を得。賢聖の弟子心正定を得已りてすなはち一切の婬怒癡を斷ず。賢聖の弟子是の如くして心解脱を得、解脱し已りてすなはち解脱を知り、我生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ更に有を受けずと如眞を知る。その所説に因りて四處有り。當に以て人を觀ずべし、この賢者共に説くべし、共に説くべからずと。若使この賢者[三]一向論に一向もて答へざる者、[四]分別論に分別もて答へざる者、[五]詰論に詰もて答へざる者、[六]止論に止もて答へざる者、是の如きこの賢者共に説くを得ず、亦共に論ずるを得ず。若使この賢者一向論にはすなはち一向もて答ふる者、分別論には分別もて答ふる者、詰論には詰もて答ふる者、止論には止もて答ふる者、是の如きこの賢者共に説くを得、亦共に論ずるを得。また次にその所説に因りて更に四處有り、當に以て人を觀ずべし、この賢者共に説くべし、共に説くべからずと。若使この賢者[七]處非處に住せざる者、[八]所知に住せざる者、[九]説喩に住せざる者、[一〇]道跡に住せざる者、

【一】A. i. 197.
【二】説處(Kathāvatthu)。
【三】一向論(Ekaṃsa-vyākaraṇīya)。
【四】分別論(Vibhajja-vy)。
【五】詰論(Paṭipucchā-vy)。
【六】止論(Ṭhapaniya)。
【七】處非處(Ṭhānaṭṭhāna)。
【八】所知(Parikappe)。
【九】説喩(Aññavāda)。
【一〇】道跡(Paṭipadā)。

正覺人間に生じて自ら御して正定を得、修習して梵跡を行じ、意を息めて能く自ら樂しむ。人の敬重する所にして一切の法を越超す。亦天の爲めに敬せられ、無著至眞の人。

一切の結を越え渡り、林に於て林を離れて去り、欲を捨て無欲を樂しむこと石の眞金より出づるが如し。普く聞き正に盡して覺ること、日の虛空に昇るが如く、一切の龍中に高きこと衆山の嶽に有るが如し。稱說して大龍と名づけ而も傷害する所無く、一切の龍中の龍、眞諦にして無上の龍なり、溫潤にして害有ること無し。この二はこれ龍の足なり。苦行と梵行とはこれを龍の所行と謂ふ。大龍は信を手と爲し、二功德を牙と爲す、念は項、智慧は頭にして法を思惟分別し、諸法を受持するは腹にして、遠離を樂しむは雙臂なり。善く息の出入に住し內心至善に定まり、龍行止俱に定、坐も定、臥も亦定、

龍の一切時は定にしてこれを龍の常法と謂ふ。無穢の家に食を受け、穢有れば則ち受けず、惡不淨の食を得てはこれを捨つること師子の如く、所得の供養は他の爲に慈愍して受く。龍は他の信施を食し、存命著する所無し。大小の結を斷除し、一切の縛を解脫し、彼の遊行する所に隨ひて心繫著有ること無し。猶ほ白蓮花の水に生じ水に長養し、泥水も著する能はず、妙香・愛樂の色あるが如く是の如く最上の覺は世に生じて世間を行き、欲の爲に染められざること華の水に著せざるが如し。猶ほ然火の熾なるが如し。薪を益さざれば則ち止み、薪無ければ火傳はらず。この火これが爲に滅す。慧者この喩を說きてその義を解せしめんと欲す。これ龍の知る所、龍中の龍の說く所。淫欲恚を遠離し、

癡を斷じて無漏を得、龍はその身を捨離す。この龍これ滅すと謂ふ。

佛說是の如し。尊者烏陀夷佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百十八、龍象經第二[一]

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び[二]東園鹿子母堂に在しぬ。その時世尊則ち晡時に於て宴坐より起ち堂より來下して告げて曰はく、『[三]烏陀夷、汝と共に往きて東河に至り澡浴せん』。尊者烏陀夷白して曰く『唯然り』。こゝに於て世尊、尊者烏陀夷を將ゐ往きて東河に至り衣を岸上に脫ぎてすなはち水に入りて浴し、浴し已り還り出でて體を拭き衣を著けたまひぬ。その時、[四]波斯匿王に龍象有り。名づけて[五]念と曰ひ一切の妓樂を作し、東河を歷度す。衆人見已りてすなはちこの說を作しぬ、『これ龍中の龍にして大龍王爲り。これ誰と爲すや』。[六]尊者烏陀夷叉手を佛に向け白して曰く『世尊、象大身を受く。衆人見已りて、すなはちこの說を作す、これ龍中の龍にして大龍王爲り。これ誰と爲すやと』。世尊告げて曰はく『是の如し烏陀夷、是の如し烏陀夷。象大身を受く。衆人見已りて、すなはちこの說を作す。これ龍中の龍にして大龍王爲り。これ誰と爲すやと。烏陀夷、馬・駱駝・牛・驢・[七]胸行・人・樹、大形を生ず。烏陀夷、衆人見已りてすなはちこの說を作す、これ龍中の龍にして大龍王爲り。これ誰と爲すやと。烏陀夷、若し世間・天及び魔・梵・沙門・梵志有りて人より天に至るまで身口意を以て害せざれば、我は彼これ龍なりと說く。烏陀夷、如來は世間・天及び魔・梵・沙門・梵志に於て人より天に至るまで身口意を以て害せず。この故に我を龍と名づく』。こゝに於て尊者烏陀夷叉手を佛に向け白して曰く『世尊、唯願はくは世尊、我に威力を加へたまへ。善逝、我に威力を加へたまへ。我をして佛の前に在りて龍相應の頌を以て世尊を頌讚せしめたまへ』。世尊告げて曰はく『汝の欲する所に隨へ』。こゝに於て尊者烏陀夷佛の前に在りて龍相應の頌を以て世尊を讃じて曰く

【一】 A. iii. 344; Theragāthā, 689—704.
【二】 東園、鹿子母堂（Pubbārāma, Migāramātu-pāsāda）。舍衞城の東方にあり、ミガーラの母毘舍佉優婆夷の建立して佛に供養せしもの故この名あり。
【三】 烏陀夷（Udāyi）。巴利文にては、こは烏陀夷に非ずして阿難陀なり。
【四】 波斯匿王（Pasenadi）。
【五】 巴利文にては白（Seta）なり。
【六】 巴利文、烏陀夷は突然此處に現はる。
【七】 胸行とは蛇のこと（ura+ga）。

ぬ。我昔時父悅の頭檀家を憶ふに、夏四月に於て正殿上に昇り、男子有ること無く唯女妓のみ有りて而も自ら娛樂し、初めて來下せず。我出でて園觀に至らんと欲する時、三十名騎の上乘を簡選し、鹵簿の前後に侍從導引せり。況やまたその餘をや。我この如意足有り。これ最も柔軟なり。我また昔時を憶ふに、田作の人田上に止息するを看て閻浮樹の下に往詣して結跏趺坐し、欲を離れ惡不善の法を離れ、覺有り觀有り、離より生ずる喜と樂と[あり]、初禪を得、成就して遊びぬ。[九]我この念を作しぬ、不多聞愚癡の凡夫自ら病法有り病を離れずして、他人の病を見て憎惡薄賤し愛せず喜ばず、自ら己を觀ぜずと。我またこの念を作しぬ、我自ら病法有り病を離れず。若し我他の病を見て而も憎惡薄賤し愛せず喜ばずんば、我宜しく然るべからず。我亦この法有るが故にと。是の如く觀じ已りて不病に因りて貢高を起すは卽便ち自ら滅しぬ。我またこの念を作しぬ、不多聞愚癡の凡夫自ら老法有りて老を離れず。他人の老を見て憎惡薄賤し愛せず喜ばず、自ら己を觀ぜずと。我またこの念を作しぬ。我自ら老法有り老を離れずして、若し我他の老を見て而して憎惡薄賤し、愛せず喜ばずんば、我宜しく然るべからず。我亦この法有るが故にと。是の如く觀じ已りて若し壽に因るが故に貢高を起すは卽便ち自ら滅しぬ。不多聞愚癡の凡夫は不病の爲に貢高豪貴にして放逸なり、欲に因りて癡を生じ梵行を行ぜず。不多聞愚癡の凡夫は少壯の爲に貢高豪貴にして放逸なり、欲に因りて癡を生じ梵行を行ぜず。不多聞愚癡の凡夫は壽の爲に貢高豪貴にして放逸なり、欲に因りて癡を生じ梵行を行ぜず』。ここに於て世尊卽ち頌を說きて曰はく、

　病法老法及び死亡の法、　如法にして自ら有り。　凡夫見て惡む。　若し我憎惡してこの法を度せざらんは　我宜しく然るべからず。　亦この法有り。　彼是の如く行ぜば法を知り生を離る。　無病少壯は壽の爲に貢高す。　諸の貢高を斷ずれば無欲の安きを見る。　彼是の如く覺り、　欲を怖るゝこと無く、想有ること無きを得、　淨き梵行を行ず。

【八】　一卷「普度樹經」註【八】を見よ。

【九】　以下 A. i. 145, 以下參照。

(1)病法。

(2)老法。

卷の第二十九

大品第一（二十五經あり）

柔軟・龍象・〔說〕處・〔說〕無常・〔請〕々・瞻波・〔沙門〕二十億・八難・貧窮・〔行〕欲・福田・優婆塞・怨家・教曇彌・降魔・賴吒〔和羅〕・優婆離・釋問及び善生・商人〔求財〕・世間・福、息止〔道〕・至邊・喩なり。

百十七、[一]柔軟經第一[二]

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『我昔日出家學道してより、從に優遊し從容閑樂極めて柔輭を爲し來れり。我父王、[三]悅頭檀の家に在りし時、我が爲に種々の[四]宮殿、春殿・夏殿及び冬殿を造作しぬ。我遊戲を好むが爲の故なり。殿を去ること遠からずしてまた種々若干の華池、〔即ち〕青蓮華池・紅蓮華池・赤蓮華池・白蓮華池を造り、彼の池中に於て種々の水華、〔即ち〕青蓮華・紅蓮華・赤蓮華・白蓮華を殖え、常に水あり常に華あり、人をして守護せしめ一切を通さず。我遊戲を好むが爲の故なり。その池岸に於て種々の陸華、〔即ち〕[五]修摩那華・婆師華・瞻蔔華・修揵提華・摩頭揵提華・阿提牟多華・波羅頭華を殖えぬ。我遊戲を好むが爲の故なり。而も四人をして我を沐浴せしめ、我を沐浴し已りて赤旃檀香もて用て我が身に塗り、香もて身を塗り已りて新繒衣を著け、上下・內外・表裏皆新なり。晝夜常に繖蓋を以て我を覆ふ、太子をして夜は露の沾す所と爲り、晝は日の炙く所と爲らしむること莫れとて。常に他家の麁穬・麥飯・豆羹・薑菜を第一の食と爲すが如く、是の如く我が父悅頭檀の家の最下の使人も粳糧餚饌を第一の食と爲せり。また次に若しは野田の禽獸、最美の禽獸有り。[六]提帝邏和吒・[七]劫賓闍邏・奚米何犁泥奢施羅米、是の如き野田の禽獸、最美の禽獸、常に我が爲に是の如きの食を設け

【一】A. i. 145.
【二】柔軟(Sukhumāla)。
【三】悅頭檀 Suddhodana)。淨飯王。
【四】所謂三時殿なり。
【五】二八卷「瞿曇彌經」註〔一三〕以下を見よ。
【六】提帝邏(Tittira)。雉。
【七】劫賓闍羅(Kapiñjala)。鷓鴣の一種。

さん、諸尊、これを受けてこれを持ち去り意の用ふる所に隨ひ、我をして長夜に利・饒益・安隱快樂を得しむべしと。阿難、(5)若し女人この正法律中に於て至信に家を捨て家無くして學道するを得ざれば、この日月大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神有るも、然も精進の沙門の威神の德に猶ほ相及ばず。況やまた死瘦の異學をや。阿難、(6)若し女人この正法律中に於て至信に家を捨て家無くして學道するを得ざれば、正法當に千年住まるべし。今五百歳を失ふ。餘五百年有り。阿難、當に知るべし。女人は[一八]五事を行ずるを得ず。若し女人如來・無所著・等正覺及び轉輪王・天帝釋・魔王・大梵天と作らんは、終にこの處り無し。當に知るべし。男子は五事を行ずるを得。若し男子如來・無所著・等正覺及び轉輪王・天帝釋・魔王・大梵天と作らんは、必ずこの處り有り」。佛說是の如し。尊者阿難及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第二十八

【一八】五事。女人の五障といふもの。女人は(一)佛、(二)轉輪王、(三)帝釋天、(四)魔王、(五)大梵天と、この五のものたることを得ず。

事し叉手問訊せしめよ』。こゝに於て尊者阿難語げて曰く『瞿曇彌今且らくこゝに住まれ。我佛に往詣して是の如き事を白さん』。瞿曇彌大愛白して曰く『唯然り尊者阿難』。こゝに於て尊者阿難佛所に往詣し佛足を稽首し却きて一面に住し叉手を佛に向け白して曰く『世尊、今日瞿曇彌大愛、諸の比丘尼の長老上尊にして王者の識る所と爲り久しく梵行を修する[者]と俱に我が所に來詣し、我が足を稽首し却きて一面に住し叉手して我に告げて曰く、『尊者阿難、この諸の比丘尼、長老上尊にして王者の識る所と爲り久しく梵行を修す。彼の諸の比丘、年少新學にして晩後に出家し、この正法律に入りて甫めにして久しからず。願はくはこの諸の比丘をして諸の比丘尼の爲にその大小に隨ひて稽首して禮を作し恭敬し承事し叉手問訊せしめよと』。世尊告げて曰はく『止みね止みね、阿難。この言を守護せよ。愼みてこれを說くこと莫れ。阿難、若使汝知ること我が知るが如くならば、應に一句を說くべからず。況やまた是の如く說くをや。阿難、(1)若使女人正法律中に於て至信に家を捨て家無くして學道するを得ざれば、諸の梵志・居士當に衣を以て地に布きて而もこの說を作すべし、精進の沙門上行を可とし、精進の沙門難行を而も行じ、我をして長夜に利・饒益・安隱快樂を得しめよと。阿難、(2)若し女人この正法律中に於て至信に家を捨て家無くして學道するを得ざれば、諸の梵志、居士當に頭髮を以て地に布きて而もこの說を作すべし。精進の沙門上行を可とし、精進の沙門難行を而も行じ、我をして長夜に利・饒益・安隱快樂を得しめよと。阿難、(3)若し女人この正法律中に於て至信に家を捨て家無くして學道するを得ざれば、諸の梵志・居士若し沙門を見れば當に手を以て種々の飮食を奉り、道邊に住まり待ちて而もこの說を作すべし。諸尊、これを受け、これを食し、これを持ち去りて意の用ふる所に隨ひ、我をして長夜に利・饒益・安隱快樂を得しむべしと。阿難、(4)若し女人この正法律中に於て至信に家を捨て家無くして學道するを得ざれば、諸の信ある梵志、精進の沙門を見て敬心もて扶け抱き將ゐて內に入り種種の財物を持つて精進の沙門に與へて而もこの說を作

し僧伽婆尸沙を犯せば當に兩部の衆中に於て十五日不慢を行ずべし。瞿曇彌、世尊女人の爲にこの第七尊師の法を施設したまふ。謂く女人當に犯すべからず、女人［當に］奉持してその形壽を盡すべし。瞿曇彌、(8)比丘尼具足を受け百歲の故きに至ると雖も、當に始めて具足を受くる比丘に向ひて、極めて意を下し稽首して、禮を作し恭敬し承事し叉手問訊すべし。瞿曇彌、世尊女人の爲にこの第八尊師の法を施設したまふ。謂く女人當に犯すべからず、女人［當に］奉持してその形壽を盡すべし。瞿曇彌、世尊女人の爲にこの八尊師の法を施設したまふ。謂く女人當に犯すべからず、女人［當に］奉持してその形壽を盡すべし。瞿曇彌、世尊是の如く說きたまふ、若し瞿曇彌大愛、この八尊師の法を奉持すれば、これこの正法律中に出家學道し具足を受けて比丘尼と作るを得んと』。こゝに於て瞿曇彌大愛、白して曰く『尊者阿難、我が喩を說くを聽け。智者は喩を聞けば則ちその義を解せん。尊者阿難、猶ほ刹利の女、梵志・居士・工師の女のごとし、端正姝好極めて淨くして沐浴し、香を以て身に塗り明淨の衣を著け、種々の瓔珞もてその容を嚴飾す。或はまた人有りて彼の女を念ずるが爲に利及び饒益を求め安隱快樂を求め、青蓮華鬘、或は[一三]瞻蔔華鬘、或は[一四]修摩那華鬘、或は[一五]婆師華鬘、或は[一六]阿提牟多華鬘を以て持つて彼の女に與ふ。彼の女歡喜し兩手もてこれを受け、以てその頭を嚴る。是の如く尊者阿難、世尊女人の爲にこの八尊師の法を施設したまふ。我形壽を盡して頂受奉持せん』。その時瞿曇彌大愛正法律中に於て出家學道し具足を受けて比丘尼と作るを得ぬ。彼の時瞿曇彌大愛後に於て轉じて大比丘尼衆を成じ、諸の長老上尊比丘尼の王者の識る所と爲り久しく梵行を修する［者］と共に倶に尊者阿難の所に往詣し、稽首して禮を作し却きて一面に住して白して曰く『尊者阿難、當に知るべし。この諸の比丘尼、長老上尊にして王者の識る所と爲り久しく梵行を修す。彼の諸の比丘年少新學にして晚後に出家し、この正法律に入りて甫めてそれ久しからず。願はくはこの諸の比丘をして諸の比丘尼の爲に[一七]その大小に隨ひて稽首して禮を作し恭敬し承

【一三】瞻蔔(Campaka)樹の香よき花を以て作りたる花環。
【一四】修摩那(Sumanā)も香氣ある灌木。素馨。
【一五】婆師(Vassika)。婆利師迦。
【一六】阿提牟多(Atimuttaka)。
【一七】巴利文「世尊の比丘・比丘尼のその年齢に准じて敬禮・起迎・合掌禮・應待をなすことを許したまはんことを」。上の(8)に比丘尼はたとへ法臘百歲にても、その日に戒を受けしのみなる比丘を尊敬せよとは片手落なり、比丘も比丘尼をその齢に准じて尊敬すべしといふ意。

からず、女人[當に]奉持してその形壽を盡すべし。阿難、我女人の爲にこの八尊師の法を施設す。謂く女人當に犯すべからず、女人[當に]奉持してその形壽を盡すべし。阿難、若し瞿曇彌大愛この八尊師の法を奉持すれば、これこの正法律中に出家學道し、具足を受けて比丘尼と作るを得ん』。ここに於て尊者阿難佛の所說を聞きて善く受け善く持し佛足を稽首し遶三匝して去り、瞿曇彌大愛の所に往詣し、語げて曰く『瞿曇彌、女人この正法律中に於て至信に家を捨て出家學道するを得。瞿曇彌大愛、世尊女人の爲にこの八尊師の法を施設したまふ。謂く女人當に犯すべからず、女人[當に]奉持してその形壽を盡すべし。云何が八と爲す。瞿曇彌、(1)比丘尼は當に比丘に從ひて具足を求受すべし。瞿曇彌、世尊女人の爲にこの第一尊師の法を施設したまふ。謂く女人當に犯すべからず、女人[當に]奉持してその形壽を盡すべし。瞿曇彌、(2)比丘尼は半月半月に往きて比丘に從ひて教を受く。瞿曇彌、世尊女人の爲にこの第二尊師の法を施設したまふ。謂く女人當に犯すべからず、女人[當に]奉持してその形壽を盡すべし。瞿曇彌、(3)若し住止する處に比丘無ければ、比丘尼は夏坐を受くるを得ず。瞿曇彌、世尊女人の爲にこの第三尊師の法を施設したまふ。謂く女人當に犯すべからず、女人[當に]奉持してその形壽を盡すべし。瞿曇彌、(4)比丘尼は夏坐を受け訖りて兩部の衆中に於て當に三事を請ひ、見聞疑を求むべし。瞿曇彌、世尊女人の爲にこの第四尊師の法を施設したまふ。謂く女人當に犯すべからず、女人[當に]奉持してその形壽を盡すべし。瞿曇彌、(5)若し比丘、比丘尼の問を聽(ゆる)さざれば比丘尼は比丘に經・律・阿毘曇を問ふを得ず。若し問を聽(ゆる)せば比丘尼は經・律・阿毘曇を問ふを得、瞿曇彌、世尊女人の爲にこの第五尊師の法を施設したまふ。謂く女人當に犯すべからず、女人[當に]奉持してその形壽を盡すべし。瞿曇彌、(6)比丘尼は比丘の犯す所を說くを得ず、比丘は比丘尼の犯す所を說くを得。瞿曇彌、世尊女人の爲にこの第六尊師の法を施設したまふ。謂く女人當に犯すべからず、女人[當に]奉持してその形壽を盡すべし。瞿曇彌、(7)比丘尼若

すべからず。女人[當に]奉持してその形壽を盡すべし。阿難、猶ほ魚師及び魚師の弟子の深水に塢を作るが如し、水を守護して流出せしめざらんが爲に。是の如く阿難我今女人の爲に八尊師の法を說く、謂く女人當に犯すべからず、女人[當に]奉持してその形壽を盡すべし。云何が八と爲す。阿難、(1)比丘尼は當に比丘に從ひて具足を求受すべし。阿難、我女人の爲にこの第一尊師の法を施設す。謂く女人當に犯すべからず、女人[當に]奉持してその形壽を盡すべし。阿難、(2)比丘尼は半月半月に往きて比丘に從ひて敎を受く。阿難、我女人の爲にこの第二尊師の法を施設す。謂く女人當に犯すべからず、女人[當に]奉持してその形壽を盡すべし。阿難、(3)若し住止する處に設し比丘無ければ、比丘尼すなはち夏坐を受くるを得ず。阿難、我女人の爲にこの第三尊師の法を施設す。謂く女人當に犯すべからず、女人[當に]奉持してその形壽を盡すべし、阿難、(4)比丘尼は夏坐を受け訖り、[一〇]兩部衆中に於て當に三事を請ひ見聞疑を求むべし。阿難、我女人の爲にこの第四尊師の法を施設す。謂く女人當に犯すべからず、女人[當に]奉持してその形壽を盡すべし。阿難、(5)若し比丘、比丘尼の問を聽さざれば比丘尼は則ち比丘に經・律・阿毘曇を問ふを得ず。若し問を聽さば比丘尼、經・律・阿毘曇を問ふを得。阿難、我女人の爲にこの第五尊師の法を施設す。謂く女人當に犯すべからず、女人[當に]奉持してその形壽を盡すべし。阿難、(6)比丘尼は比丘の犯す所を說くを得ず、比丘は比丘尼の犯す所を說くを得。阿難、我女人の爲にこの第六尊師の法を施設す。謂く女人當に犯すべからず、女人[當に]奉持してその形壽を盡すべし、阿難、(7)比丘尼若し[一一]僧伽婆尸沙を犯せば、當に兩部の衆中に於て[一二]十五日不慢を行ずべし。阿難、我女人の爲にこの第七尊師の法を施設す。謂く女人當に犯すべからず、女人[當に]奉持してその形壽を盡すべし。(8)阿難、比丘尼具足を受け百歲の故きに至ると雖も、當に始めて具足を受くる比丘に向ひて極めて意を下し稽首して禮を作し恭敬し承事し叉手問訊すべし。阿難、我女人の爲にこの第八尊師の法を施設す。謂く女人當に犯すべ

---

(1)巴利(六)に當る。

(2)巴利(三)に當る。

(3)巴利(二)に當る。

(4)巴利(四)に當る。

【一〇】兩部衆。比丘衆、比丘尼衆をいふ。「見・聞・疑の三事を請ふ」とは一夏三月の間、自己の行狀に就て不相應の廉を見、聞き又は疑ひしことはなきやと問ふなり。

(5)巴利(七)に當る筈なれど文意大に異れり。曰く「如何なる事情あらんも比丘尼は比丘を罵詈譏誹すべからず」。

(6)巴利(八)に當る。

(7)巴利(五)に當る。

【一一】僧伽婆尸沙(Saṅghādisesa)。僧殘ともいふ。比丘・比丘尼の大戒中四波羅夷罪に次ぐ重罪にして、比丘に十三、比丘尼に十七あり。

【一二】巴利文「重罪を犯したる比丘尼は「比丘・比丘尼」兩部衆の間に於て半月摩那埵を受くべきものなり」。

(8)巴利(一)に當る。

く『世尊、女人第四沙門果を得べきや。これに因るが故に女人この正法律中に於て至信に家を捨て家無くして學道するを得るや』。世尊告げて曰はく『止みね、止みね阿難、汝この念を作すこと莫れ、女人この正法律中に於て至信に家を捨て家無くして學道するを得んと。阿難、若し女人をしてこの正法律中に於て至信に家を捨て家無くして學道するを得しむれば、この梵行をしてすなはち久しく住するを得ざらしめん。阿難、猶ほ人家の女多く男少き者の如し。この家轉た興盛なるを得と爲すや』。尊者阿難白して曰く『不なり世尊』。『是の如く阿難、若し女人をしてこの正法律中に於て至信に家を捨て、家無くして學道するを得しむれば、この梵行をして久しく住するを得ざらしめん。阿難、猶ほ稻田及び麥田中[八]穢生ずる有れば必ず彼の田を壞るが如し。是の如く阿難、若し女人をしてこの正法律中に於て至信に家を捨て家無くして學道するを得しむれば、この梵行をして久しく住するを得ざらしむ』。尊者阿難また白して曰く『世尊、瞿曇彌大愛は世尊の爲に饒益する所多し。所以者何。世尊の母亡き後、瞿曇彌大愛は世尊を鞠養しぬ』。世尊告げて曰はく『是の如し阿難、是の如し阿難。瞿曇彌大愛は多く我を饒益しぬ。謂く母亡き後我を鞠養しぬ。阿難、我亦多く瞿曇彌大愛を饒益しぬ。所以者何。阿難、瞿曇彌大愛我に因るが故に佛に歸し法に歸し比丘僧に歸するを得、三尊及び苦習滅道を疑はず、信を成就し禁戒を奉持し修學博聞し、布施を成就して智慧を得、殺を離れ殺を斷じ、不與取を離れ不與取を斷じ、邪婬を離れ邪婬を斷じ、妄言を離れ妄言を斷じ、酒を離れ酒を斷じぬ。阿難、若し人有り、人に因るが故に佛に歸し法に歸し比丘僧に歸するを得、三尊及び苦習滅道を疑はず、信を成就し禁戒を奉持し修學博聞し、布施を成就して智慧を得、殺を離れ殺を斷じ、不與取を離れ不與取を斷じ、邪婬を離れ邪婬を斷じ、妄言を離れ妄言を斷じ、酒を離れ酒を斷じ、阿難、設使この人彼の人に衣被・飮食・臥具・湯藥諸の生活の具を供養するを爲し形壽を盡すに至るも恩を報ずるを得ず。阿難、我今女人の爲に[九]八尊師の法を施設す。謂く女人當に犯

【八】穢(Setaṭṭhikā)。白疸又は禾病と稱し、菌の作用にて植物に生じ、植物を枯すもの。

【九】八尊師法(Aṭṭha Garu-dhammā)。慧觀譯には「八重法」。以下國譯大藏經、論部一四卷二七〇頁以下參照。

人第四沙門果を得べきや。これに因るが故に、女人この正法律中に於て、至信に家を捨て家無くして學道するや』。世尊亦再び告げて曰はく『止みね、止みね瞿曇彌。汝この念を作すこと莫れ。女人この正法律中に於て至信に家を捨て家無くして學道せんと。瞿曇彌、是の如く汝頭髪を剃除し、袈裟衣を著け、その形壽を盡して梵行を淨修せんと』。こゝに於て瞿曇彌大愛再び佛の爲に制せられ佛足を稽首し遶三匝して而して去りぬ。彼の時世尊釋羇瘦に於て夏坐を受け竟り、衣を補治し訖り、三月を過ぎ已りて、衣を攝り鉢を持して人間に遊行したまひぬ。瞿曇彌大愛世尊釋羇瘦に於て夏坐を受け竟り、衣を補治し訖り、三月を過ぎ已りて、衣を攝り鉢を持して人間に遊行したまふと聞きぬ。瞿曇彌大愛卽ち舍夷の諸の老母と倶に佛の後を隨逐し展轉して那摩提に往至し那摩提の揵尼精舍に住しぬ。こゝに於て瞿曇彌大愛また佛所に詣り佛足を稽首し却きて一面に住し白して曰く『世尊、女人第四沙門果を得べきや。これに因るが故に女人この正法律中に於て至信に家を捨て家無くして學道するや』。世尊三たびに至りて告げて曰はく『止みね、止みね瞿曇彌、汝この念を作すこと莫れ。女人この正法律中に於て至信に家を捨て家無くして學道せんと。瞿曇彌大愛、是の如く汝頭髪を剃除し袈裟衣を著けその形壽を盡して梵行を淨修せんと』。こゝに於て瞿曇彌大愛三たび世尊の爲に制せられ佛足を稽首し遶三匝して而して去りぬ。彼の時瞿曇彌大愛、塗跣にて足を汚し塵土體に坌り、疲極まり、悲泣して門外に住立しぬ。尊者阿難瞿曇彌大愛、塗跣にて足を汚し、塵土體に坌り、疲極まり、悲泣して門外に住立するを見、見已りて問ひて曰く『瞿曇彌、何等を以ての故に塗跣にて足を汚し、塵土體に坌り疲極まり、悲泣して門外に住立するや』。瞿曇彌大愛答へて曰く『尊者阿難、女人この正法律中に於て至信に家を捨て家無くして學道するを得ず』。尊者阿難語げて曰く『瞿曇彌、今且らくこゝに住まれ。我佛に往詣し是の如き事を白さん』。瞿曇彌大愛白して曰く『唯然り尊者阿難』。こゝに於て尊者阿難佛所に往詣し佛足を稽首し叉手を佛に向けて白して曰

【六】舍夷（Sakiyānī）。
【七】那摩提、慧觀譯には「那婆提」に作る。揵尼精舍は同譯には「耆尼舍」に作る。共に考へ得ず。巴利文にては二本とも毘舍離の大林重閣講堂となす。

意を觀じて味を得』。その時尊者阿難拂を執りて佛に侍しぬ。こゝに於て尊者阿難叉手を佛に向け白して曰く『世尊、この法何等と名づけ、我當に云何が奉持すべきや』。世尊告げて曰はく『阿難、この法名づけて〔九〕蜜丸喩と爲し汝當に受持すべし』。こゝに於て世尊諸の比丘に告げたまはく『汝等この蜜丸喩の法を受け當に諷誦讀すべし。所以者何。この蜜丸喩、法有り義有り、梵行の本にして通に趣き覺に趣き涅槃に趣く。若し族姓子鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道する者、當に善くこの蜜丸喩を受持すべし』。佛說是の如し。尊者阿難及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百十六、〔一〕瞿曇彌經第十

我が聞きしこと是の如し。ある時佛〔二〕釋羇瘦に遊び迦維羅衞、尼拘類樹園に在して大比丘衆と倶に〔三〕夏坐を受けたまひぬ。その時〔四〕瞿曇彌大愛佛所に往詣し佛足を稽首し却きて一面に住し白して曰く『世尊、女人〔五〕第四沙門果を得べきや。これに因るが故に女人この正法律中に於て、至信に家を捨て家無くして學道するや』。世尊告げて曰はく『止みね、止みね瞿曇彌。汝この念を作すこと莫れ。女人この正法律中に於て至信に家を捨て家無くして學道せんと。瞿曇彌、是の如く汝頭髮を剃除し袈裟衣を著けその形壽を盡して梵行を淨修せんと』。こゝに於て瞿曇彌大愛佛の爲に制せられ佛足を稽首し遶三匝して而して去りぬ。その時諸の比丘佛の爲に衣を治しぬ、「世尊久しからずして釋羇瘦に於て夏坐を受け竟り衣を補治し訖り三月を過ぎ已りて、衣を攝り鉢を持し當に人間に遊びたまふべしとて」。瞿曇彌大愛諸の比丘佛の爲に衣を治し、世尊久しからずして釋羇瘦に於て夏坐を受け竟り、衣を補治し訖り、三月を過ぎ已りて、衣を攝り鉢を持し、當に人間に遊びたまふべしと聞きぬ。瞿曇彌大愛聞き已りてまた佛所に詣り佛足を稽首し却きて一面に住し白して曰く『世尊、女

〔九〕蜜丸喩（Madhupiṇḍi-kapariyāya）。

〔一〕A. iv. 274. Vin. ii. 253. 慧簡譯「瞿曇彌記果經」、「四分律」四八卷、「五分律」二九卷。

〔二〕三卷「柅波經」註〔二〕を見よ。

〔三〕受夏坐。慧簡譯には「受歲」とす、雨安居をすること。

〔四〕瞿曇彌大愛（Mahāpajāpati Gotamī）。佛の母摩訶摩耶夫人の妹、佛の姨母といふ。佛の幼時養育せし人。

〔五〕阿羅漢果をいふ。

施設するは、必ずこの處り有り、更觸を施設するに因りて覺有りと覺を施設するは、必ずこの處り有り、覺を施設するに因りて念を施設する有り、出家學道し思想し修習するは必ずこの處り有り。是の如く耳鼻舌身[亦然り]。意に因り法に因り意識に因りて更觸有りと更觸を施設するは、必ずこの處り有り、更觸を施設するに因りて覺有りと覺を施設するは、必ずこの處り有り、覺を施設するに因りて念を施設する有り、出家學道し思想し修習するは、必ずこの處り有り。諸賢、謂く世尊略してこの義を說き、廣く分別せずして卽ち坐より起ち室に入りて燕坐したまひぬ。比丘、若し人念に因る所、出家學道し思想し修習し、及び過去・未來・今現在の法に、愛せず樂しまず著せず住まらず、これ苦邊と說き、欲使・恚使・有使・慢使・無明使・見使・疑使・鬪諍・憎嫉・諛諂・欺誑・妄言・兩舌及び無量の惡不善の法これ苦邊と說くと。この世尊の略說し廣く義を分別したまはざるを、我この句を以てこの文を以て廣說すること是の如し。諸賢、往きて佛に向ひて具さに陳ぶべし。若し世尊の所說の義の如んば諸賢等、すなはち受持すべし』。こゝに於て諸の比丘、尊者大迦旃延の所說を聞きて善く受持し誦して卽ち坐より起ち尊者大迦旃延を遶ること三匝して去り、佛所に往詣し稽首して禮を作し却きて一面に坐し白して曰く『世尊、向に世尊略してこの義を說き、廣く分別せずして卽ち坐より起ち、室に入りて宴坐したまひぬ。尊者大迦旃延この句を以てこの文を以て而も廣くこれを說きぬ』。世尊聞き已りて歎じて曰はく『善き哉、善き哉。我が弟子の中[彼]眼有り智有り法有り義有り。所以者何。謂く師、弟子の爲に略してこの義を說き廣く分別せず。彼の弟子この句を以てこの文を以て而も廣くこれを說くこと迦旃延比丘の所說の如し。汝等應當に是の如く受持すべし。所以者何。義を說き觀ずるは應に是の如くすべきを以てなり。比丘、猶ほ人有り因に無事處・山林・樹間に行きて忽ち蜜丸を得、彼の食する所に隨ひて而もその味を得るが如し。是の如く族姓子、我がこの正法律に於て彼の觀ずる所に隨ひて而もその味を得、眼を觀じて味を得、耳鼻舌身を觀じ、

もこの義を問ふべし。世尊、こは云何、こは何の義ぞやと。如し世尊說きたまはゞ、我等當に善く受持すべし。然も尊者大迦旃延は常に世尊の稱譽したまふ所爲り、及び諸智梵行人の「稱譽する所たり」。尊者大迦旃延は能く世尊の向に略說したまひし所の義を分別せん。唯願はくは尊者大迦旃延、慈愍の爲の故に而も廣くこれを說きたまへ』。尊者大迦旃延諸の比丘に告ぐ『諸賢等共に我が所說を聽け。諸賢、眼と色に緣りて眼識を生じ、三事共に會してすなはち更觸有り、更觸に緣りてすなはち所覺有り、若し所覺「あれば」すなはち想ひ、若し所想「あれば」すなはち思ひ、若し所思「あれば」すなはち念じ、若し所念「あれば」すなはち分別す。比丘はこの念に因りて出家學道し思想し修習す。この中過去・未來・今現在の法に、愛せず樂しまず著せず住まらず、これ苦邊と說き、欲使・恚使・有使・慢使・無明使・見使・疑使・鬪諍・憎嫉・諛諂・欺誑・妄言・兩舌及び無量の惡不善の法、これ苦邊と說く。是の如く耳鼻舌身「亦然り」。意と法に緣りて意識を生じ、三事共に會してすなはち更觸有り、更觸に緣りてすなはち所覺有り、若し所覺「あれば」すなはち想ひ、若し所想「あれば」すなはち思ひ、若し所思「あれば」すなはち念じ、若し所念「あれば」すなはち分別す。比丘はこの念に因りて、出家學道し思想し修習し、この中過去・未來・今現在の法に、愛せず樂しまず著せず住まらず、これ苦邊と說き、欲使・恚使・有使・慢使・無明使・見使・疑使・鬪諍・憎嫉・諛諂・欺誑・妄言・兩舌及び無量の惡不善の法これ苦邊と說く。諸賢、比丘は眼を除き色を除き眼識を除きて更觸有りと更觸を施設するは、この處り然らず、若し覺を施設せず、念を施設する有り、出家學道し、思想し修習するは、この處り然らず。是の如く耳鼻舌身「亦然り」、意を除き法を除き意識を除き更觸有りと更觸を施設するは、この處り然らず。若し更觸を施設せず覺有りと覺を施設するは、この處り然らず、若し覺を施設せず、念を施設する有り、出家學道し思想し修習するは、この處り然らず。諸賢、比丘は眼に因り色に因り眼識に因りて更觸有りと更觸を

【八】更觸(Samphassa)。根・境・識の三相觸ることをいふ。

世尊の稱譽したまふ所と爲り及び諸智梵行人の[稱譽する所と爲る]。尊者大迦旃延能く廣く世尊の向に略說したまひし所の義を分別せん。諸賢、共に尊者大迦旃延の所に往詣し、この義を說かんことを請ひ、若し尊者大迦旃延分別を爲さば、我等當に善く受持すべしと』。こゝに於て諸の比丘、尊者大迦旃延の所に往詣し共に相問訊し却きて一面に坐し白して曰く『尊者大迦旃延、當に知るべし。世尊略してこの義を說き廣く分別せず、卽ち坐より起ち室に入りて燕坐したまひぬ。[謂く]比丘、若し人念に因る所、出家學道し思想し修習し、及び過去・未來・今現在の法に、愛せず樂しまず著せず住せず、これ苦邊と說く。欲使・恚使・有使・慢使・無明使・見使・疑使・鬪諍・憎嫉・諛諂・欺誑・妄言・兩舌及び無量の惡不善の法、これ苦邊と說くと。我等すなはちこの念を作しぬ、諸賢、誰か能く廣く世尊の向に略說したまひし所の義を分別せんと。我等またこの念を作しぬ、尊者大迦旃延は常に世尊の稱譽したまふ所と爲り、及び諸智梵行人の[稱譽する所となる]。尊者大迦旃延能く廣く世尊の向に略說したまふ所の義を分別せんと。唯願はくは尊者大迦旃延、慈愍の爲の故に而も廣くこれを說きたまへ』。その時尊者大迦旃延告げて曰く『諸賢、我が喩を說くを聽け。慧者は喩を聞けば則ちその義を解す。諸賢、猶ほ人有りて[七]實を求むるを得んと欲し、實を求むるが爲の故に斧を持ちて林に入り、彼大樹の根莖・節・枝葉・華實を伐すを見るに、彼の人、根莖・節・實に觸れず、但枝葉に觸るゝが如し。諸賢の所說亦復是の如し。世尊を現在捨て來りて我に就きて而もこの義を問ふ。所以者何。諸賢、當に知るべし、世尊はこれ眼これ智これ義これ法なり。法主・法將にして、眞諦の義を說き、一切の義を現ずるは彼の世尊に由る。諸賢、應に世尊の所に往詣して而もこの義を問ふべし。世尊、こは云何、こは何の義ぞやと。如し世尊說きたまはゞ、諸賢等當に善く受持すべし』。時に諸の比丘白して曰く『唯然り、尊者大迦旃延、世尊はこれ眼これ智これ義これ法なり。法主・法將にして、眞諦の義を說き、一切の義を現ずるは、彼の世尊に由る。我等應に世尊の所に往詣して而

【七】實(Sāra)。Lord Chalmers は Choice timber と英譯す、樹精、樹の心なり。

て燕坐より起ち、講堂に往詣じ比丘衆の前に座を敷きて坐し、諸の比丘に告げたまはく『我今[日]平旦、衣を著け鉢を持し、乞食の爲の故に迦維羅衞に入り食し已りて、中後に衣鉢を收擧し、手足を澡洗し、尼師檀を以て肩上に著け、竹林釋迦寺中に往詣し、彼の大林に入りて一樹下に至り、尼師檀を敷きて結加趺坐しぬ。こゝに於て執杖釋枝を拄へて而も行き、中後に彷徉して我が所に來詣し、共に相問訊し杖を拄へて我が前に立ち我に問ひて曰く、沙門瞿曇、何を以て宗本と爲し何等の法を說くやと。我答へて曰く、釋、若し一切世間・天及び魔・梵・沙門・梵志、人より天に至るまで、鬪諍せざらしめ、離欲、清淨の梵行を修習し諂曲を捨離し、悔を除き有非有に著せず、亦想なし。これ我が宗本にして說くこと亦是の如しと。彼の執杖釋我が所說を聞きて是とせず非とせず、執杖釋頭を奮つて而も去りぬ』。こゝに於て一比丘有り、卽ち坐より起ち偏に著衣を袒き叉手を佛に向け白して曰く『世尊、云何が一切世間・天及び魔・梵・沙門・梵志、人より天に至るまで鬪諍せざらしめ、云何が離欲、清淨の梵行を修習し、云何が諂曲を捨離し、悔を除き、有非有に著せず、亦想無きや』。世尊告げて曰はく『比丘、若し人念に因る所、出家學道し思想し修習し及び過去・未來・今現在の法に、愛せず樂しまず著せず住まらず、これ苦邊と說く。欲使・恚使・有使・慢使・無明使・見使・疑使・鬪諍・憎嫉・諛諂・欺誑・妄言・兩舌及び無量の惡不善の法これ苦邊と說く』。佛是の如きを說き、卽ち坐より起ち室に入りて燕坐したまひぬ。こゝに於て諸の比丘すなはちこの念を作しぬ『諸賢當に知るべし。世尊略してこの義を說き廣く分別せず、卽ち坐より起ち室に入りて燕坐したまふ、[謂く]若し人念に因る所、出家學道し思想し修習し、及び過去・未來・今現在の法に、愛せず樂しまず著せず住まらず。これ苦邊と說く。欲使・恚使・有使・慢使・無明使・見使・疑使・鬪諍・憎嫉・諛諂・欺誑・妄言・兩舌及び無量の惡不善の法、これ苦邊と說くと』。彼[等]またこの念を作しぬ、『諸賢、誰か能く廣く世尊の向に略說したまひし所の義を分別せんと』。彼[等]またこの念を作しぬ、[六]尊者大迦旃延は常に

【六】尊者大迦旃延（Āyusmant Mahākaccāyana）。

ると謂ふ。癰は謂くこの身なり。色麁四大父母より生じ、飲食・長養・衣被・按摩・澡浴・强忍、これ無常法・壞法、散法なり。これを癰と謂ふ。癰の本は謂く三愛なり。欲愛・色愛・無色愛、これを癰の本と謂ふ。癰の一切漏は謂く六更觸處なり。眼漏は色を視、耳漏は聲を聞き、鼻漏は香を嗅ぎ、舌漏は味を嘗め、身漏は觸を覺り、意漏は諸法を知る。これを癰の一切漏と謂ふ。比丘、我已に汝が爲に癰を說き癰の本を說き、尊師の弟子の爲にする所の如く大慈哀を起し憐念愍傷し、義及び饒益を求め、安隱・快樂を求むるは我今已に作しぬ。汝等亦當にまた自ら作すべし。無事處・山林・樹下空安靜處に至り、燕坐思惟し放逸を得しむること勿れ。勤めて精進を加へ後悔せしむること莫れ。これ我の敎勅なり、これ我の訓誨なり』。佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百十五、[一]蜜丸喩經第九

我が聞きしこと是の如し。ある時佛[二]釋羈瘦に遊び迦維羅衞に在しぬ。その時世尊夜を過ぎて平旦、衣を著け鉢を持し、乞食の爲の故に迦維羅衞に入り、食し訖りて中後に衣鉢を收擧し手足を澡洗し、尼師檀を以て肩上に著け、[三]竹林釋迦寺中に往詣し彼の大林に入りて一樹下に至り、尼師檀を敷きて結加趺坐したまひぬ。こゝに於て[四]執杖釋杖を拄へて而も行き、中後に彷徉して佛所に往詣し共に相問訊し、杖を拄へて佛前に立ち世尊に問ひて曰く『沙門瞿曇は[五]何を以て宗本と爲し何等の法を說くや』。世尊答へて曰はく『釋、若し一切世間・天及び魔・梵・沙門梵志、人より天に至るまで鬪諍せざらしめ、離欲・淸淨の梵行を修習し、諂曲を捨離し、悔を除き、有・非有に著せず、亦想なし。これ我が宗本にして說くこと亦是の如し』。こゝに於て執杖釋佛の所說を聞きて是せず非せず。執杖釋頭を奮つて而も去りぬ。こゝに於て世尊執杖釋去りて後久しからずして則ち晡時に於

【一】M. 18. Madhupiṇḍika-sutta.「增一阿含」四〇品の一〇經。
【二】釋羈瘦。三卷「穢破經」註を見よ。
【三】竹林釋迦寺(Beluvalaṭṭhikā)。
【四】執杖釋(Daṇḍapāṇi Sakka)。「杖を手にせる釋族」の意。
【五】Kiṃvādī kimakkhāyī 何を說き何を宣ぶるものぞ。

を得、苦無我想を習ふを得、不淨想を習ふを得、惡食想を習ふを得、一切世間不可樂想を習ふを得、死想を習ふを得、世間の好惡を知りて是の如き想心を習ふを得、世間の習の有を知りて是の如き想心を習ふを得。世間の習の滅・味・患・出要の如眞を知りて是の如き想心を習ふを得れば、これを比丘愛を斷じ結を除き、諸の法を正に知り正に觀じ已りてすなはち苦邊を得と謂ふ』。佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百十四、[一]優陀羅經第八

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衛國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『[二]優陀羅羅摩子、彼衆中に在りて數ば是の如く說く「[三]この生中に於てこれを觀、これを覺り、癰の本を知らず。然る後具さに癰の本を知ると」。優陀羅羅摩子一切知無くして自ら一切知なりと稱し、實に所覺無くして自ら覺有りと稱す。優陀羅羅摩子是の如く見、是の如く說く、「有はこれ病これ癰これ刺なり。設し無想はこれ愚癡なり。若し所覺有ればこれ止息、これ最妙なり。謂く乃至非有想非無想處〔亦然りと〕」。彼自ら身を樂しみ自ら身に著し、已に乃至非有想非無想處を修習し、身壞れ命終りて非有想非無想天中に生ず。彼壽盡き已りてまたこの間に來りて狸中に生ず。この比丘正說すれば、この生中に於てこれを觀、これを覺りて癰の本を知らず。然る後具さに癰の本を知る。云何が比丘正觀するや。比丘は[四]六更觸を知り、習を知り滅を知り味を知り患を知り出要を知り、慧を以て如眞を知る。これを比丘正觀すと謂ふ。云何が比丘覺るや。比丘は[五]三覺を知り習を知り、滅を知り、味を知り、患を知り、出要を知り、慧を以て如眞を知る。これを比丘覺ると謂ふ。云何が比丘[六]癰の本を知らず然る後具さに癰の本を知るや。比丘は有愛の滅を知りその根本を拔き、至竟にまた生ぜず。これを比丘癰の本を知らず、然る後具さに癰の本を知

【一】 S. iv. 83.

【二】 優陀羅羅摩子（Uddaka Rāmaputta）。

【三】 巴利文は Idaṃ jātu vedagū, idaṃ jātu sabbaji, idaṃ jātu apalikhitaṃ gaṇḍamūlaṃ palikhaniti.「必ずやこれ得明〔の人〕、必ずやこれ一切勝者、必ずやこの堀られざる癰の本を堀れり」。原典には palikhitaṃ と出せど、こは一本にあるが如く apalikhitaṃ とするを正しとす。「得明の人」とは如實の人、「一切勝者」とは如實智を得て解脫したる人、「癰」とは肉身にして、「その本」とは渴愛なりと解す。下文參照。

【四】 六種の觸處の生起（習）・滅盡・味・患・出要を如實に知るをいふ。

【五】 三覺。苦・樂・不苦不樂なるべし。巴利文にては上の如く如實に知りたる上、取著なくして解脫したるをいふ。

【六】 癰。巴利文にては、四大に造られ、父母より生れ、飯粥に養はれ、消耗・磨滅・分解・崩壞を免れざるこの身體の別名と解す。

卷の第二十八

百十三、[一]諸法本經第七

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『若し諸の[二]異學來りて汝等に、一切諸法何を以て[三]本と爲すやと問はゞ、汝等應當に是の如く彼に答ふべし、一切諸法欲を以て本と爲すと。彼若しまた何を以て[四]和と爲すやと問はば、當に是の如く答ふべし、更樂を以て和と爲すと。彼若しまた何を以て[五]來と爲すやと問はゞ、當に是の如く答ふべし、覺を以て來と爲すと。彼若しまた何を以て[六]有と爲すやと問はゞ、當に是の如く答ふべし、思想を以て有と爲すと。彼若しまた何を以て[七]上主と爲すやと問はゞ、當に是の如く答ふべし、念を以て上主と爲すと。彼若しまた何を以て[八]前と爲すやと問はゞ、當に是の如く答ふべし、定を以て前と爲すと。彼若しまた何を以て[九]上と爲すやと問はゞ、當に是の如く答ふべし、慧を以て上と爲すと。彼若しまた何を以て[一〇]眞と爲すやと問はゞ、當に是の如く答ふべし、解脫を以て眞と爲すと。彼若しまた何を以て[一一]訖りと爲すやと問はゞ、當に是の如く答ふべし、涅槃を以て訖りと爲すと。これを比丘、欲を諸の法の本と爲し、更樂を諸の法の和と爲し、覺を諸の法の來と爲し、思想を諸の法の有と爲し、念を諸の法の上主と爲し、定を諸の法の前と爲し、慧を諸の法の上と爲し、解脫を諸の法の眞と爲し、涅槃を諸の法の訖りと爲すと爲す。[一二]この故に比丘當に是の如く學すべし。出家學道心を習ひ、無常想を習ひ、無常苦想を習ひ、苦無我想を習ひ、不淨想を習ひ、惡食想を習ひ、一切世間不可樂想を習ひ、死想を習ひ、世間の好惡を知りて是の如き想心を習ひ、世間の習の有を知りて是の如き想心を習ひ、世間の習の滅・味・患・出要の如眞を知りて是の如き想心を習ふべし。若し比丘出家學道心を習ふを得れば[また]無常想を習ふを得、無常苦想を習ふ

【一】 A. iv. 338; v. 103.
【二】 異學(Aññatitthiya)。外道といふに同じ。邪教徒なり。
【三】 本(Mūla)、欲(Chanda)。
【四】 和(Samudaya)、更樂(Phassa)。
【五】 來(Samosaraṇa)、覺(Vedanā)。「和」と「來」とにあてたる巴利語は入れ替ふるを正しとするかと思はる。
【六】 有(Sambhava)、思想(Manasikāra)。
【七】 上主(Adhipateyya)、念(Sati)。
【八】 前(Pamukha)、定(Samādhi)。
【九】 上(Uttara)、慧(Paññā)。
【一〇】 眞(Sāra)、解脫(Vimutti)。
【一一】 訖(Pariyosāna)、涅槃(Nibbāna)。巴利文 A. iv. 338 にてはこの中「訖」のを除き、A. v. 106 にては「眞」と「訖」との中間に「堅住」(Ogādha)、「甘露」(Amata)の二を加ふ。
【一二】 以下 A. v. 108. 參照。

涅槃するを得。阿難、これを如來大人の根智と謂ふ。是の如く如來正に諸の法の本を知る。阿難、前に説く三人は、第一の人は清淨の法を得、第二の人は衰退の法を得、第三の人は身壞れ命終りて必ず惡處に至り地獄の中に生ず。後に説く三人は、第一の人は衰退の法を得、第二の人は清淨の法を得、第三の人は、卽ち現世に於て般涅槃するを得。阿難、我已に汝が爲に大人の根智を説く。尊師の弟子の爲にする所の如く大慈哀を起し、憐念・愍傷し、義及び饒益を求め安隱・快樂を求むるは、我今已に作しぬ。汝等當にまた自ら作すべし。無事處山林樹下空安靜處に至り、宴坐思惟して放逸を得しむること勿れ。勤加精進して後悔せしむること莫れ。こは これ我の敎勅なり。これ我が訓誨なり』。

佛説是の如し。彼の諸の比丘佛の所説を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷二十七

（卷二十七）阿奴波經第六

し、亦善法を成就するを知る。如來後時に他心智を以てまたこの人の心を觀じ、この人不善法を滅して而も善法を生じ、この人不善法已に滅し善法已に生じ、餘の不善根有りて而も斷絶せず、この不善根に從ひて當にまた更に不善を生ずべく、是の如くこの人衰退の法を得るを知る。阿難、これを如來大人の根智と謂ふ。是の如く如來正に諸の法の本を知る。また次に阿難、如來他心智を以て他人の心を觀じ、不善法を成就し、亦善法を成就するを[知る]。如來後時に他心智を以てまたこの人の心を觀じ、この人不善法を滅して而も善法を生じ、この人不善法已に滅し、善法已に生じ、餘の不善根有りて未だ斷絶せず、必ず當に斷絶すべく、是の如くこの人清淨の法を得るを知る。阿難、猶ほ火を燃すが如し。熾に然ゆる時盡く然えて一燄なり。彼に或は人有りてこの盛火より、平淨地に置き或は石上に著く。阿難、意に於て云何。彼の火寧ろ轉た增して熾盛なるや』。尊者阿難白して曰く『不なり世尊』。『是の如く阿難、如來他心智を以て他人の心を觀じ、この人不善法を成就し、亦善法を成就するを知る。如來後時に他心智を以てまたこの人の心を觀じ、この人不善法を滅して而も善法を生じ、この人不善法已に滅し善法已に生じ、餘の不善根有りて而も未だ斷絶せず、必ず當に斷絶すべく、是の如くこの人清淨の法を得るを知る。阿難、これを如來大人の根智と謂ふ。是の如く如來正に諸の法の本を知る。また次に阿難、如來他心智を以て他人の心を觀じ、我この人黑業の一毛許りの如き有るを見ず、この人善法一向に充滿し樂樂報を與へ、必ず樂處に生じて長壽を得。是の如くこの人卽ち現世に於て必ず般涅槃するを得。阿難、猶ほ火炭久しく滅し已りて冷なるが如し。彼に或は人有りて益すに燥草を以てし足すに槁木を以てすと雖も、阿難、意に於て云何。彼の死せる火炭寧ろまたこれを熾然するを得べきや』。尊者阿難白して曰く『不なり世尊』。『是の如く阿難、如來他心智を以て他人の心を觀じ、我この人黑業の一毛許りの如き有るを見ず、この人善法一向に充滿し樂樂報を與へ、必ず樂處に生じて而も長壽を得。是の如くこの人卽ち現世に於て必ず般

てまたこの人の心を觀じ、この人善法を滅して不善法を生じ、この人善法已に滅し不善法已に生じ、餘の善根有りて而も未だ斷絕せず、必ず當に斷絕すべく、是の如くこの人衰退の法を得るを知る。阿難、これを如來大人の根智と謂ふ。是の如く如來正に諸の法の本を知る。また次に阿難、如來他心智を以て他人の心を觀じ、我この人白淨の法の一毛許りの如き有るを見ず、この人惡不善の法一向に充滿して穢汚し、當來の有の本、煩熱の苦報あり、生老病死の因爲り。是の如くこの人身壞れ命終りて必ず惡處に至り地獄の中に生ず。阿離、猶ほ種子の如し。腐れ壞れ破れ剖け風熱の爲に傷られ、秋時密藏せず。若し彼の居士これ良田に非ず、又善く治せずしてすなはち種子を下し雨時に隨はざれば、阿難、意に於て云何。この種寧ろ轉た增長するを得るや』。尊者阿難白して曰く『不なり世尊』。『是の如く阿難、如來他心智を以て他人の心を觀じ、我この人白淨の法の一毛許りの如き有るを見ず、この人惡不善の法一向に充滿して穢汚し、當來の有の本、煩熱の苦報あり、生老病死の因爲り。是の如くこの人身壞れ命終りて必ず惡處に至り地獄の中に生ず。阿難、これを如來大人の根智と謂ふ。是の如く如來正に諸の法の本を知る』。ここに於て尊者阿難、叉手を佛に向け白して曰く『世尊、已に此の如き三種の人を說きたまへり。寧ろ更に異なる三種の人を說きたまふべきや』。世尊告げて曰はく『說くべきなり、阿難。如來他心智を以て他人の心を觀じ、この人不善法を成就し、亦善法を成就するを知る。如來後時に他心智を以てまたこの人の心を觀じ、この人不善法を滅して而も善法を生ずるを知る。この人不善法已に滅し善法已に生じ、餘の不善根有りて而も斷絕せず、この不善根に從ひて當にまた更に不善を生ずべく、是の如くこの人衰退の法を得るを知る。阿難、猶ほ火を燃すが如し。始め然ゆるの時盡く然え一燄なり。彼に或は人有りて益すに燥草を以てし、足すに槁木を以てす。阿難、意に於て云何。彼の火寧ろ轉た增して熾盛なるや』。尊者阿難白して曰く『爾なり世尊』。『是の如く阿難、如來他心智を以て他人の心を觀じ、この人不善法を成就

根に從ひて當にまた更に善を生ずべく、是の如くこの人清淨の法を得るを知る。阿難、猶ほ穀種の如し。壞れず破れず腐れず剖けず、風熱の爲に傷られずして、秋時密藏し、若し彼の居士善く良田を治し種を以て中に灑ぎ時に隨ひて雨溉げば、阿難、意に於て云何。この種寧ろ轉た增長するを得るや不や』。尊者阿難白して曰く『爾なり世尊』。『是の如く阿難、如來他心智を以て他人の心を觀じ、この人善法を成就し、亦不善法を成就するを知る。如來後時に他心智を以てまたこの人の心を觀じ、この人善法を滅して不善法を生じ、この人善法已に滅し不善法已に生じ、餘の善根有りて而も斷絕せず、この善根に從ひて當にまた更に善を生ずべく、是の如くこの人清淨の法を得るを知る。阿難、これを如來大人の根智と謂ふ。是の如く如來正に諸の法の本を知る。また次に阿難、如來他心智を以て他人の心を觀じ、この人善法を成就し、亦不善法を成就するを知る。如來後時に他心智を以てまたこの人の心を觀じ、この人善法を滅して不善法を生じ、この人善法已に滅し不善法已に生じ、餘の善根有りて而も未だ斷絕せず、必ず當に斷絕すべく、是の如くこの人衰退の法を得るを知る。阿難、猶ほ下晡日沒するに垂んとする時明滅して闇生ずるが如し。阿難、意に於て云何。彼の日已に沒し明已に滅し闇已に生ずるや』。尊者阿難白して曰く『爾なり世尊』。『是の如く阿難、如來他心智を以て他人の心を觀じ、この人善法を成就し、亦不善法を成就するを知る。如來後時に他心智を以てまたこの人の心を觀じ、この人善法を滅して不善法を生じ、この人善法已に滅し不善法已に生じ、餘の善根有りて而も未だ斷絕せず、必ず當に斷絕すべく、是の如くこの人衰退の法を得るを知る。阿難、猶ほ穀種の如し。壞れず破れず腐れず剖けず、風熱の爲に傷られず、秋時密藏し、若し彼の居士善く良田を治し、種を以て中に灑ぎ、雨時に隨はず。阿難、意に於て云何。この種寧ろ轉た增長するを得るや』。尊者阿難白して曰く『不なり世尊』。『是の如く阿難、如來他心智を以て他人の心を觀じ、この人善法を成就し、亦不善法を成就するを知る。如來後時に他心智を以

得べきを見ず。是の如く阿難、若し我提惒達哆白淨の法の一毛の如き有るを見れば、我一向に提惒達哆必ず惡處に至り地獄の中に生じ、住すること一劫に至り救濟すべからざらんと記せず。阿難、我提惒達哆白淨の法の一毛許りの如きも有るを見ざるを以て、この故に我一向に提惒達哆必ず惡處に至り地獄の中に生じ、住すること一劫に至り救濟すべからざらんと記す』。ここに於て尊者阿難啼泣して手を以て淚を拭ひ白して曰く『世尊、甚奇甚特なり。謂く世尊一向に提惒達哆必ず惡處に至り地獄の中に生じ、住すること一劫に至り救濟すべからざらんと記したまふ』。世尊告げて曰はく『是の如し阿難、是の如し阿難。我一向に提惒達哆必ず惡處に至り地獄の中に生じ、住すること一劫に至り救濟すべからざらんと記す。阿難、若し汝如來に從ひて大人の[5]根智分別を聞かば、必ず如來を上信するを得て而も歡喜を懷かん。』ここに於て尊者阿難叉手を佛に向け白して曰く『世尊、今正にこの時なり。善逝、今正にこの時なり。若し世尊諸の比丘の爲に大人の根智分別を說きたまへば、諸の比丘世尊より聞きて當に善く受持すべし』。世尊告げて曰はく『阿難、諦かに聽け、善くこれを思念せよ。我今汝が爲に大人の根智分別を說かん』。尊者阿難敎を受けて聽きぬ。世尊告げて曰はく『阿難、如來他心智を以て他人の心を觀じ、この人善法を成就し、亦不善法を成就するを知る、如來後時に他心智を以てまたこの人の心を觀じ、この人善法を滅して不善法を生じ、この人善法已に滅し不善法已に生じ、餘の善根有りて而も斷絕せず、この善根に從ひて當にまた更に善を生ずべく、是の如くこの人清淨の法を得るを知る。阿難、猶ほ平旦日初めて出づる時闇滅して明生ずるが如し。阿難、意に於て云何。日轉た昇上し食時に至りて闇已に滅し明已に生ずるや』。尊者阿難白して曰く『爾なり世尊』。『是の如く阿難、如來他心智を以て他人の心を觀じ、この人善法を成就し、亦不善法を成就するを知る。如來後時に他心智を以てまたこの人の心を觀じ、この人善法を滅して不善法を生じ、この人善法已に滅し不善法已に生じ、餘の善根有りて而も斷絕せず、この善

【五】根智（Purisindriyañāṇa）。

に往至して浴せん』。尊者阿難白して曰く『唯然り』。ここに於て世尊、尊者阿難を將ゐて阿夷羅恕帝河に往至し、衣を岸上に脫ぎてすなはち水に入りて浴し、浴し已りて還り出で、體を拭きて衣を著けたまひぬ。その時尊者阿難扇を執りて佛を扇ぎぬ。ここに於て世尊迴顧して告げて曰はく『阿難、[三]提恕達哆放逸を以ての故に極めて苦難に墮し必ず惡處に至り地獄の中に生じ、住すること一劫に至り救濟すべからざらん。阿難、汝曾て諸の比丘より、我一向に提恕達哆必ず惡處に至り地獄の中に生じ住すること一劫に至り救濟すべからざらんと記せりと謂ふを聞かざるや』。尊者阿難白して曰く『唯然り』。その時一比丘有りて尊者阿難に語ぐ『世尊他心智を以て提恕達哆の心を知るが故に一向に提恕達哆必ず惡處に至り地獄の中に生じ住すること一劫に至り救濟すべからざらんと記したまふや』。世尊告げて曰はく『阿難、彼の比丘或は小有り或は中有り或は大有り。或は年少にして自ら知らず。所以者何。如來已に一向に彼を記すが故に疑惑有り。阿難、我この世天及び魔・梵・沙門・梵志人より天に至り謂く我一向に記して提恕達哆の如きを見ず。所以者何。阿難、我一向に提恕達哆必ず惡處に至り地獄の中に生じ、住すること一劫に至り救濟すべからざらんと記す。阿難、若し我提恕達哆を見るに[四]白淨の法の一毛許りの如き有れば、我すなはち一向に提恕達哆必ず惡處に至り地獄の中に生じ住すること一劫に至り救濟すべからざらんと記せず。阿難、我提恕達哆白淨の法の一毛許りの如き有るを見ざるを以て、この故に我一向に提恕達哆必ず惡處に至り地獄の中に生じ、住すること一劫に至り救濟すべからざらんと記す。阿難、猶ほ村を去ること遠からずして大深廁有り。或人中に墮し沒してその底に在るがごとし。若し人來り爲に大慈哀を起し憐念・愍傷し義及び饒益を求め安隱快樂を求め、彼の人來り已りて旋轉してこれを見て而もこの說を作す、「この人一處の毛髮許りの如く糞の汚さざる所を得、我をして捉へてこれを挽き出すを得しむべきやと。」彼遍く觀視しこの人一淨處の毛髮許りの如く糞の汚さざる所有りて、手もて捉へてこれを挽き出すを

【三】提恕達多(Devadatta)。提婆達多、調達。天與と意譯す。

【四】少しにても淨白の法、善行あればの意。

ふ。若し比丘是の如く業を知り、業の因りて生ずる所を知り、業の報有るを知り、業の勝如を知り、業の滅盡を知り、業滅の道を知れば、これを達梵行能く一切の業を盡くすと謂ふ。(6)云何が苦を知るや。謂く生は苦なり老は苦なり病は苦なり死は苦なり、怨憎に會ふは苦なり愛するものに別離するは苦なり、求むる所得ざるは苦なり、略して五盛陰は苦なり。これを苦を知ると謂ふ。云何が苦の因りて生ずる所を知るや。謂く愛なり。愛に因りて苦を生ず。これを苦の因りて生ずる所を知ると謂ふ。云何が苦の報有るを知るや。謂く或は苦有りて微にして遲く滅し或は苦有りて微にして疾く滅し、或は苦有りて盛にして遲く滅し、或は苦有りて盛にして疾く滅し、苦苦盡く。これを苦の報有るを知ると謂ふ。云何が苦の勝如を知るや。謂く不多聞・愚癡の凡夫、善知識に遇はず、聖法を御せず、身覺を生じ極めて苦にして甚だ重く苦しみ、命將に絶えんと欲し、ここを出でて外より更に彼を求む。或は沙門梵志有りて一句呪を持し或は二・三・四・多句呪[を持し]或は百句呪を持して、彼我が苦を治す。是の如く求に因りて苦を生じ習に因りて苦を生じ苦滅す。これを苦の勝如を知ると謂ふ。云何が苦の滅盡を知るや。謂く愛滅すれば苦すなはち滅す。これを苦の滅盡を知ると謂ふ。云何が苦滅の道を知るや。謂く八支聖道なり。正見乃至正定を八と爲す。これを苦滅の道を知ると謂ふ。若し比丘是の如く苦を知り苦の因りて生ずる所を知り苦の報有るを知り苦の勝如を知り苦の滅盡を知り苦滅の道を知れば、これを達梵行能く一切の苦を盡くすと謂ふ』。佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百十二、[一]阿奴波經第六

我が聞きしこと是の如し。ある時佛、跋耆痩に遊び阿奴波なる跋耆の都邑に在しぬ。その時世尊則ち晡時に於て宴坐より起ち堂上より來り下りて告げて曰はく『阿難、汝と共に[二]阿夷羅和帝河

【一】 A. iii. 402.

【二】 阿夷羅和帝河 (Aciravati)。

道を知れば、これを達梵行能く一切の想を盡くすと謂ふ。(4)云何が欲を知るや。謂く[16]五欲の功徳有りて[17]愛すべく喜ぶべく美色にして欲想應に甚だ樂しむべし。云何が五と爲す。眼に色を知り耳に聲を知り鼻に香を知り舌に味を知り身に觸を知る。これを欲を知ると謂ふ。云何が欲の因りて生ずる所を知るや。謂く更樂なり。更樂に因りて則便ち欲有り。これを欲の因りて生ずる所を知ると謂ふ。云何が欲の報有るを知るや。謂く欲種に隨ひ愛樂し著して而も彼に住す。これに因りて報を受け、[18]有福處・無福處・不動處なり。これを欲の報有るを知ると謂ふ。云何が欲の勝如を知るや。謂く或は欲有りて色を欲し、或は欲有りて聲を欲し或は欲有りて香を欲し或は欲有りて味を欲し或は欲有りて觸を欲す。これを欲の勝如を知ると謂ふ。云何が欲の滅盡を知るや。謂く更樂滅すれば欲すなはち滅す。これを欲の滅盡を知ると謂ふ。云何が欲滅の道を知るや。謂く八支聖道なり。正見乃至正定を八と爲す。これを欲滅の道を知ると謂ふ。若し比丘是の如く欲を知り、欲の因りて生ずる所を知り、欲の報を受くるを知り、欲の勝如を知り、欲の滅盡を知り、欲滅の道を知れば、これを達梵行能く一切の欲を盡くすと謂ふ。(6)云何が業を知るや。謂く二業有り。思已「業」思業なり。これを業を知ると謂ふ。云何が業の因りて生ずる所を知るや。謂く更樂なり。更樂に因りて則便ち業有り。これを業の因りて生ずる所を知ると謂ふ。云何が業の報有るを知るや。謂く或は業有りて[19]黑きは黑報有り、或は業有りて白きは白報有り、或は業有りて、黑白は黑白報[有り]、或は業有りて黑からず白からざるは報無く、業業盡く。これを業の報有るを知ると謂ふ。云何が業の勝如を知るや。謂く或は業有りて地獄の中に生じ、或は業有りて畜生の中に生じ、或は業有りて餓鬼の中に生じ、或は業有りて天上に生じ、或は業有りて人間に生ず。これを業の勝如を知ると謂ふ。云何が業の滅盡を知るや。謂く更樂滅すれば業すなはち滅す。これを業の滅盡を知ると謂ふ。云何が業滅の道を知るや。謂く八支聖道なり。正見乃至正定を八と爲す。これを業滅の道を知ると謂

【一六】　五欲功徳(Pañca kāmaguṇā)。五種の欲、即ち五欲の意。guṇa には功徳、種類と二種の意あるよりして五種の欲といふべきを五欲功德といふこと多し。

【一七】　可愛(Iṭṭha)、可喜(Kanta)、(可意)(Manāpa)、美色(Piyarūpa)、欲相應(Kāmūpasaṃhita)、甚可樂(Rajanīya)。原漢文には「欲想應」とあれど、これは「欲相應」なるべし。斯く殆ど同意義の語を列擧する時、他の阿含にては正しく譯せるは一二語にて他は何れが何れに當るや解し得られざる場合多けれど、中阿含にては六語中「可意」の一を省けるのみにて他は悉く擧げ、而もその順序も巴利文と符合せり。

【一八】　有福處(Puññabhāgiya)、無福處(Apuññabhāgiya)、不動處とは有福無福の中性なるべし。

【一九】　黑業(Kaṇha)、邪業。白業(Sukka)正業。

二覺有り。[一二]樂覺・苦覺・不苦不樂覺なり。これを覺を知ると謂ふ。云何が覺の因りて生ずる所を知るや。謂く[一三]更樂なり。更樂に因りて則便ち覺有り。これを覺の因りて生ずる所を知ると謂ふ。云何が覺の報有るを知るや。謂く[一四]愛なり。愛は覺の報爲り。これを覺の報有るを知ると謂ふ。云何が覺の勝如を知るや。謂く比丘は樂覺を覺ゆる時すなはち樂覺を覺ゆるを知り、苦覺を覺ゆる時すなはち苦覺を覺ゆるを知り、不苦不樂覺を覺ゆる時、すなはち不苦不樂覺を覺ゆるを知り、樂身・苦身・不苦不樂身・樂心・苦心・不苦不樂心・樂食・苦食・不苦不樂食・樂無食・苦無食・不苦不樂無食・樂欲・苦欲・不苦不樂欲・樂無欲・苦無欲・不苦不樂無欲覺を覺ゆる時すなはち不苦不樂無欲覺を覺ゆるを知る。これを覺の勝如を知ると謂ふ。云何が覺の滅盡を知るや。謂く更樂滅すれば覺すなはち滅す。これを覺の滅盡を知ると謂ふ。云何が覺滅の道を知るや。謂く八支聖道なり。正見乃至正定を八と爲す。これを覺滅の道を知ると謂ふ。若し比丘是の如く覺を知り、覺の因りて生ずる所を知り、覺の報有るを知り、覺の勝如を知り、覺の滅盡を知り、覺滅の道を知れば、これを達梵行能く一切の覺を盡くすと謂ふ。(3)云何が想を知るや。謂く四想有り。比丘は小想亦知り大想亦知り、無量想亦知り、無所有處想亦知る。これを想を知ると謂ふ。云何が想の因りて生ずる所を知るや。謂く更樂なり。更樂に因りて則ち想有り。これを想の因りて生ずる所を知ると謂ふ。云何が想の報有るを知るや。謂く[一五]説なり。その想に隨ひてすなはち説く。これを想の報有るを知ると謂ふ。云何が想の勝如を知るや。謂く或は想有りて色を想ひ、或は想有りて聲を想ひ、或は想有りて香を想ひ、或は想有りて味を想ひ、或は想有りて觸を想ふ。これを想の勝如を知ると謂ふ。云何が想の滅盡を知るや。謂く更樂滅すれば想すなはち滅す。これを想の滅盡を知ると謂ふ。云何が想滅の道を知るや。謂く八支聖道なり。正見乃至正定を八と爲す。これを想滅の道を知ると謂ふ。若し比丘是の如く想を知り、想の因りて生ずる所を知り、想の報有るを知り、想の勝如を知り、想の滅盡を知り想滅の

【一二】樂覺(Sukhavedanā)、苦覺(Dukkhavedanā)、不苦不樂覺(Adukkhamasukha-vedanā)。
【一三】更樂(Phassa)。觸なり。
【一四】愛(Taṇhā)。
【一五】巴利文「比丘等よ、余は想には説話の果報ありといふ」。

り亦妙にして文有り義有り、具足清淨にして梵行を顯現し、謂く〔三〕達梵行と名づけ能く諸の漏を盡す。汝等諦かに聽け、善くこれを思念せよ』。時に諸の比丘教を受けて而も聽きぬ。世尊告げて曰はく『汝等當に〔四〕漏を知り、漏の因りて生ずる所を知り、漏の報有るを知り、漏の〔五〕勝如を知り、漏の滅盡を知り、漏滅の道を知るべし。汝等當に〔六〕覺を知り、覺の因りて生ずる所を知り、覺の報有るを知り、覺の勝如を知り、覺の滅盡を知り、覺滅の道を知るべし。汝等當に〔七〕想を知り、想の因りて生ずる所を知り、想の報有るを知り、想の勝如を知り、想の滅盡を知り、想滅の道を知るべし。汝等當に〔八〕欲を知り、欲の因りて生ずる所を知り、欲の報有るを知り、欲の勝如を知り、欲の滅盡を知り、欲滅の道を知るべし。汝等當に〔九〕業を知り、業の因りて生ずる所を知り、業の報有るを知り、業の勝如を知り、業の滅盡を知り、業滅の道を知るべし。汝等當に〔一〇〕苦を知り、苦の因りて生ずる所を知り、苦の報有るを知り、苦の勝如を知り、苦の滅盡を知り、苦滅の道を知るべし。(1)云何が漏を知るや。謂く三漏有り。〔一一〕欲漏・有漏・無明漏なり。これを漏を知ると謂ふ。云何が漏の因りて生ずる所を知るや。謂く無明なり。無明に因りて則便ち漏有り。これ漏の因りて生ずる所を知ると謂ふ。云何が漏の報有るを知るや。謂く無明纒へば諸の漏の漬す所と爲る。彼これに因りて報を受け、或は善處を得、或は惡處を得。これを漏の報有るを知ると謂ふ。云何が漏の勝如を知るや。謂く或は漏有りて地獄の中に生じ、或は漏有りて畜生の中に生じ、或は漏有りて餓鬼の中に生じ、或は漏有りて天上に生じ、或は漏有りて人間に生ず。これ漏の勝如を知ると謂ふ。云何が漏の滅盡を知るや。謂く無明滅すれば漏すなはち滅す。これを漏の滅盡を知ると謂ふ。云何が漏滅の道を知るや。謂く八支聖道なり。正見乃至正定を八と爲す。これを漏滅の道を知ると謂ふ。若し比丘是の如く漏を知り、漏の因りて生ずる所を知り、漏の報を受くるを知り、漏の勝如を知り、漏の滅盡を知り、漏滅の道を知れば、これを達梵行能く一切の漏を盡くすと謂ふ。(2)云何が覺を知るや。謂く

【三】達梵行（Nibbedhika-pariyāya）。「増一部」註Mano-rathapūraṇi には、これに Ni-bbijjhanakāraṇa と註す、分割、破析の原の意。
【四】(1)漏(Āsava)。
【五】勝如(Vemattatā)。差別、相違の意。
【六】(2)覺(Vedanā)。通常受といふもの。
【七】(3)想(Saññā)。
【八】(4)欲(Kāma)。
【九】(5)業(Kamma)。
【一〇】(6)苦(Dukkha)。
【一一】欲漏(Kāmāsava)、有漏(Bhavāsava)、無明漏(Avijjāsava)。

比丘この惡不善の法を滅せんと欲するが故にすなはち以て速かに方便を求め、學極めて精勤し、正念正智にして忍びて退かしめず。若し比丘觀ずる時則ち我多く無增伺・無瞋恚心・無睡眠纏・無調貢高・無疑惑・無身諍・無穢汚心・有信・有進・有念・有定を行じ、多く無惡慧を行ずと知れば、彼の比丘この善法に住し已りて當に漏盡・智通・作證を求むべし。所以者何。我一切の衣を畜ふるを得ずと說き、亦一切の衣を畜ふるを得と說く。云何なる衣を我畜ふるを得ずと說くや。若し衣を畜へてすなはち惡不善の法を增長し善法を衰退すれば、是の如き衣、我畜ふるを得ずと說く。云何なる衣を我畜ふるを得と說くや。若し衣を畜へてすなはち善法を增長し惡不善の法を衰退すれば、是の如き衣、我畜ふるを得と說く。衣の如く飲食・床榻・村邑、亦復是の如し。我一切の人に狎習するを得ずと說き、亦一切の人に狎習するを得と說く。云何なる人に我狎習するを得ずと說くや。若し人に狎習してすなはち惡不善の法を增長し善法を衰退すれば、是の如き人、我狎習するを得ずと說く。云何なる人に我與に狎習するを得と說くや。若し人に狎習してすなはち善法を增長し惡不善の法を衰退すれば、是の如き人、我與に狎習するを得と說く。彼可習法の如眞を知り、不可習法亦如眞を知る。彼可習法・不可習法の如眞を知り已りて不可習法はすなはち習はず、可習法はすなはち習ふ。彼不可習法は習はず、可習法は習ひ已りてすなはち善法を增長し惡不善の法を衰退す。これを比丘善く自ら心を觀じ善く自ら心を知り善く取り善く捨つと謂ふ』。佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百十一、[一] 達梵行經第五

我が聞きしこと是の如し。ある時佛　拘樓瘦[二]に遊び劍磨瑟曇なる拘樓の都邑に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『我當に汝[等]が爲に法を說くべし。[その法は]初め妙、中ごろ妙、竟

【一】A. iii. 110. 安世高譯「漏分布經」。
【二】拘樓瘦、劍磨瑟曇。二卷「漏盡經」註を見よ。

不可習法の如眞を知り已りて不可習法はすなはち習はず、可習法はすなはち習ふ。彼不可習は習はず、可習法は習ひ已りてすなはち善法を增長し惡不善の法を衰退す。これを比丘善く自ら心を觀じ善く自ら心を知り善く取り善く捨つと謂ふ』。佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百十、[一]自觀心經〔下〕第四

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『若し比丘有りて善く他心を觀ずること能はざれば、當に自ら善く己心を觀察すべし。應に是の如きを學すべし。云何が比丘善く自ら心を觀ずるや。比丘は若しこの觀有れば必ず饒益する所多し」我多く[二]增伺を行ずと爲すや、多く無增伺を行ずと爲すや。我多く瞋恚心を行ずと爲すや、多く無瞋恚心を行ずと爲すや。我多く睡眠纏を行ずと爲すや、多く無睡眠纏を行ずと爲すや。我多く調貢高を行ずと爲すや、多く無調貢高を行ずと爲すや。我多く疑惑を行ずと爲すや、多く無疑惑を行ずと爲すや。我多く身諍を行ずと爲すや、多く無身諍を行ずと爲すや。我多く穢汚心を行ずと爲すや、多く無穢汚心を行ずと爲すや。我多く信を行ずと爲すや、多く不信を行ずと爲すや。我多く精進を行ずと爲すや、多く懈怠を行ずと爲すや。我多く念を行ずと爲すや、多く無念を行ずと爲すや。我多く定を行ずと爲すや、多く無定を行ずと爲すや。我多く惡慧を行ずと爲すや、多く無惡慧を行ずと爲すやと。若し比丘觀ずる時、則ち我多く增伺・瞋恚心・睡眠纏・調貢高・疑惑・身諍・穢汚心・不信・懈怠・無念・無定を行じ、多く惡慧を行ずと知れば、彼の比丘この惡不善の法を滅せんと欲するが故に、すなはち以て速かに方便を求め學極めて精勤し、正念正智にして忍びて退かしめず。猶ほ人火の爲に頭を燒き衣を燒くに、急に方便を求めて頭を救ひ衣を救ふがごとし。是の如く

【一】 A. v. 93.

【二】「我增伺(=貪欲)あること多くして住するや、無增伺なること多くして住するや」。行增伺(Abhijjhālu)、行瞋恚心(Vyāpanna citta)、行睡眠纏(Thīnamiddhapariyuṭṭhita)、行調貢高(Uddhata)、行疑惑(Vicikiccha)、行身諍(Sāraddhakāya)、行穢汚心(Saṅkiliṭṭhacitta)、行信(——)、行精心(Āraddhaviriya)、行念(——)、定(Samāhita)、行惡慧(——)。以上のうち漢譯のみを擧げて巴利語を記せざるは巴利文になき分なり。

る所多し。我內止[二]を得て最上慧觀法[三]を得ずと爲すや。我最上慧觀法を得て內止を得ずと爲すや。我內止を得ず亦最上慧觀法を得ずと爲すや。我內止を得、亦最上慧觀法を得と爲すやと。(1)若し比丘觀じ已りて則ち我內止を得て最上慧觀法を得ずと知れば彼の比丘內止を得已りて當に最上慧觀法を求むべし。彼後時に於て內止を得亦最上慧觀法を得ん。(2)若し比丘觀じ已りて則ち我最上慧觀法を得て內止を得ずと知れば彼の比丘最上慧觀法に住し已りて當に內止を求むべし。彼後時に於て最上慧觀法を得亦內止を得ん。(3)若し比丘觀じ已りて則ち我內止を得ず亦最上慧觀法を得ずと知れば、是の如き比丘この善法を得ずして得んと欲するが爲の故にすなはち以て速かに方便を求め、學極めて精勤し、正念正智にして、忍びて退かしめず。猶ほ人火の爲に頭を燒き衣を燒くに、急に方便を求めて頭を救ひ衣を救ふがごとし。是の如く比丘この善法を得ずして得んと欲するが爲の故にすなはち以て速に方便を求め、學極めて精勤し、正念正智にして、忍びて退かしめず。彼後時に於て卽ち內止を得亦最上慧觀法を得ん。(4)若し比丘觀じ已りて則ち我內止を得亦最上慧觀法を得と知れば[四]彼の比丘この善法に住し已りて當に漏盡・智通・作證を求むべし。所以者何。我一切の衣を畜ふるを得ずと說き、亦一切の衣を畜ふるを得と說く。云何が衣、我畜ふるを得ずと說くや。若し衣を畜へてすなはち惡不善の法を增長し善法を衰退すれば、是の如き衣、我畜ふるを得ずと說く。云何が衣、我畜ふるを得と說くや。若し衣を畜へてすなはち善法を增長し惡不善の法を衰退すれば、是の如き衣、我畜ふるを得と說く。衣の如く飮食・床榻・村邑亦復是の如し。我一切の人に狎習するを得ずと說き、亦一切の人に狎習するを得と說く。云何が人、我狎習するを得ずと說くや。若し人に狎習してすなはち惡不善の法を增長し善法を衰退すれば、是の如き人、我狎習するを得ずと說く。云何が人、我與に狎習するを得と說くや。若し人に狎習してすなはち善法を增長し惡不善の法を衰退すれば、是の如き人、我與に狎習するを得と說く。彼可習法の如眞を知り不可習法亦如眞を知る。彼可習法・

【二】內止(Ajjhattacetosamatha)。內心止。
【三】最上慧觀(Adhipaññā-dhammavipassana)。勝智法觀。
【四】巴利文「その比丘はそれ等諸の善法に於て住立し、更に諸漏を盡さんがために努力すべきなり」。

りて住し、この林に依りて住し已りて、「その」爲に出家學道し沙門の義を得んと欲する所の、この義我に於て得ず、學道者の須ふる所の衣被・飲食・牀榻・湯藥・諸の生活の具、彼一切求索するも甚だ得ること難し。彼の比丘應にこの觀を作すべし、「我この林に依りて住し、「その」爲に出家學道し沙門の義を得んと欲する所の、この義我に於て得ず、學道者の須ふる所の衣被・飲食・牀榻・湯藥・諸の生活の具、彼一切求索するも甚だ得べきこと難しと。彼の比丘是の如く觀じ已りて卽ち[四]この林を捨て夜半に而も去り、彼と別るゝこと莫し。(4)比丘は一林に依りて住す。我この林に依りて住し、或は「その」爲に出家學道し沙門の義を得んと欲する所の、この義我に於て得、學道者の須ふる所の衣被・飲食・牀榻・湯藥・諸の生活の具、彼一切求索し、易くして「得」、難からずして得。彼の比丘この林に依りて住し、この林に依りて住し已りて、「その」爲に出家學道し沙門の義を得んと欲する所の、この義我に於て得、學道者の須ふる所の衣被・飲食・牀榻・湯藥・諸の生活の具、彼一切求索し、易くして「得」、難からずして得。彼の比丘應にこの觀を作すべし、「我この林に依りて住し、「その」爲に出家學道し沙門の義を得んと欲する所の、この義我に於て得、學道者の須ふる所の衣被・飲食・牀榻・湯藥・諸の生活の具、彼一切求索し、易くして「得」、難からずして得と」。彼の比丘この觀を作し已りてこの林に依りて住し、乃ち終身その命盡くるに至るべし。林に依りて住する如く、塚間・村邑・人に依りて住することも亦復是の如し』。佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百九、[一]自觀心經〔上〕第三

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『若し比丘有りて善く他心を觀ずること能はざれば、當に自ら善く己心を觀察すべし。應に是の如きを學すべし。云何が比丘善く自ら心を觀ずるや。比丘は若しこの觀有れば必ず饒益す

【四】 林經〔上〕註を見よ。

【一】 A. v. 98.

沙門の義を得んと欲する所の、[三]この義我に於て得、學道者の須ふる所の衣被・飲食・床榻・湯藥・諸の生活の具、彼一切求索し、易くして「得」、難からずして得。彼の比丘この林に依りて住し、この林に依りて住し已りて、「その」爲に出家學道し沙門の義を得んと欲する所の、この義我に於て得ず、學道者の須ふる所の衣被・飲食・床榻・湯藥・諸の生活の具、彼一切求索し、易くして「得」、難からずして得。彼の比丘應にこの觀を作すべし、「我出家學道するは衣被の爲の故にあらず、飲食・床榻・湯藥の爲の故にあらず、亦諸の生活の具の爲の故にあらず。然るに我この林に依りて住し、「その」爲に出家學道し沙門の義を得んと欲する所の、この義我に於て得ず、學道者の須ふる所の衣被・飲食・床榻・湯藥、諸の生活の具、彼一切求索し、易くして「得」、難からずして得と」。彼の比丘是の如く觀じ已りて、この林を捨て去るべし。(2)比丘は一林に依りて住す。我この林に依りて住し、或は「その」爲に出家學道し沙門の義を得んと欲する所の、この義我に於て得、學道者の須ふる所の衣被・飲食・床榻・湯藥・諸の生活の具、彼一切求索し、易くして「得」、難からずして得。彼の比丘この林に依りて住し、この林に依りて住し已りて、「その」爲に出家學道し沙門の義を得んと欲する所の、この義我に於て得、學道者の須ふる所の衣被・飲食・床榻・湯藥、諸の生活の具、彼一切求索するも甚だ得べきこと難し。彼の比丘應にこの觀を作すべし、「我出家學道するは衣被の爲の故にあらず、飲食・床榻・湯藥の爲の故にあらず、亦諸の生活の具の爲の故にあらず、然るに我この林に依りて住し、「その」爲に出家學道し沙門の義を得んと欲する所の、この義我に於て得、學道者の須ふる所の衣被・飲食・床榻・湯藥・諸の生活の具、彼一切求索するも甚だ得べきこと難しと」。彼の比丘是の如く觀じ已りてこの林に住すべし。(3)比丘は一林に依りて住す。我この林に依りて住し、或は「その」爲に出家學道し沙門の義を得んと欲する所の、この義我に於て得、學道者の須ふる所の衣被・飲食・床榻・湯藥・諸の生活の具、彼一切求索し、易くして「得」、難からずして得。彼の比丘この林に依

【三】「この義」の語に當るもの巴利文になけれど「その利益」の意なること明かなり。それを己の身に得ての意。

槃を得ざるは然も涅槃を得ず、學道者の須ふる所の衣被・飲食・床榻・湯藥・諸の生活の具、彼一切求索するも甚だ得べきこと難しと。」彼の比丘是の如く觀じ已りて卽ち[四]この林を捨て夜半に而も去る、彼と別るゝこと莫し。(4)比丘は一林に依りて住す。我この林に依りて住し或は正念無きはすなはち正念を得、その心不定なるは而も定心を得。若し解脫せざるはすなはち解脫を得、諸の漏盡きざるは而も漏盡を得、無上安隱の涅槃を得ざるは則ち涅槃を得、學道者の須ふる所の衣被・飲食・床榻・湯藥・諸の生活の具、彼一切求索し易くして〔得〕、難からずして得。彼の比丘この林に依りて住し、この林に依りて住し已りて或は正念無きはすなはち正念を得、その心不定なるは而も定心を得、若し解脫せざるはすなはち解脫を得、諸の漏盡きざるは而も漏盡を得、無上安隱の涅槃を得ざるは則ち涅槃を得、學道者の須ふる所の衣被・飲食・床榻・湯藥・諸の生活の具、彼の一切求索して易くして〔得〕難からずして得。彼の比丘應にこの觀を作すべし、「我この林に依りて住し、或は正念無きはすなはち正念を得、その心不定なるは而も定心を得、若し解脫せざるはすなはち解脫を得、諸の漏盡きざるは而も漏盡を得、無上安隱の涅槃を得ざるは則ち涅槃を得、學道者の須ふる所の衣被・飲食・床榻・湯藥・諸の生活の具、彼一切求索し、易くして〔得〕、難からずして得と」。彼の比丘是の如く觀じ已りてこの林に依りて住し乃ち終身、その命盡くるに至るべし。林に依りて住するが如く、[五]塚間・村邑・人に依りて住するも亦復是の如し』。佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百八、林[一]經〔下〕第二

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『(1)比丘は一林に依りて住す。[二]我この林に依りて住し、或は〔その〕爲に出家學道し、

【四】巴利文「その比丘は或は夜分に或は日中に、その林間を去るべく、住まることなかるべし」。

【五】上には唯林に依りて住することのみを擧げたれど、塚間・村邑・人に依りて住する場合も同樣なりの意。巴利文には林・村・邑・都・地方・人の六を擧ぐ。

【一】M. 17. Vanapattha-sutta.

【二】「我」字を「彼」と變へて讀めば解し易し、以下同斷。

無きはすなはち正念を得、その心不定なるは而も定心を得、若し解脱せざるはすなはち解脱を得、諸の漏盡きざるは而も漏盡を得、無上安隱の涅槃を得ざるは則ち涅槃を得、學道者の須ふる所の衣被・飮食・床榻・湯藥・諸の生活の具、彼一切求索し、易くして「得」、難からずして得。彼の比丘この林に依りて住し、この林に依りて住し已りて或は正念無きはすなはち正念を得、その心不定なるは而も定心を得、若し解脱を得ざるはすなはち解脱を得、諸の漏盡きざるは而も漏盡を得、無上安隱の涅槃を得ざるは則ち涅槃を得、學道者の須ふる所の衣被・飮食・床榻・湯藥・諸の生活の具、彼一切求索するも甚だ得べきこと難し。彼の比丘應にこの觀を作すべし。「我出家學道するは衣被の爲の故にあらず、飮食・床榻・湯藥の爲の故にあらず。亦諸の生活の具の爲の故にあらず。然るにこの林に依りて住し、或は正念無きはすなはち正念を得、その心不定なるは而も定心を得、若し解脱せざるはすなはち解脱を得、諸の漏盡きざるは而も漏盡を得、無上安隱の涅槃を得ざるは則ち涅槃を得、學道者の須ふる所の衣被・飮食・床榻・湯藥・諸の生活の具、彼一切求索するも甚だ得べきこと難しと。」彼の比丘是の如く觀じ已りてこの林に住すべし。(3)比丘は一林に依りて住す。我この林に依りて住し、或は正念無きはすなはち正念を得、その心不定なるは而も定心を得、若し解脱せざるはすなはち解脱を得、諸の漏盡きざるは而も漏盡を得、無上安隱の涅槃を得ざるは則ち涅槃を得、學道者の須ふる所の衣被・飮食・床榻・湯藥・諸の生活の具、彼一切求索し、易くして「得」難からずして得。彼の比丘この林に依りて住し、この林に依りて住し已りて、或は正念無きは正念を得ず、その心不定なるは定心を得ず、若し解脱せざるは解脱を得ず、諸の漏盡きざるは漏盡を得ず、無上安隱の涅槃を得ざるは、然も涅槃を得ず、學道者の須ふる所の衣被・飮食・床榻・湯藥・諸の生活の具、彼一切求索するも甚だ得べきこと難し。彼の比丘應にこの觀を作すべし、「我この林に依りて住し、或は正念無きは正念を得ず、その心不定なるは定心を得ず、若し解脱せざるは解脱を得ず、諸の漏盡きざるは漏盡を得ず、無上安隱の涅

卷の第二十七

林品第五

二林・〔自〕觀心二、達〔梵行〕・〔阿〕奴波・〔諸〕法本　優陀羅、蜜丸〔喩〕、瞿曇彌は後に在り。

百七、林經〔上〕第一

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく、「[一](1)比丘は一林に依りて住す。我この林に依りて住し、或は正念無きはすなはち正念を得、その心不定なるは而も定心を得、若し解脱せざるはすなはち解脱を得、諸の漏盡きざるは而も漏盡を得、無上安隱の涅槃を得ざるは則ち涅槃を得、學道者の須ふる所の[二]衣被・飮食・床榻・湯藥・諸の生活の具、彼一切、[三]求索し、易くして〔得〕、難からずして得。彼の比丘この林に依りて住し、この林に依りて住し已りて、若し正念無きは正念を得ず、その心不定なるは定心を得ず、若し解脱せざるは解脱を得ず。諸の漏盡きざるは漏盡を得ず、無上安隱の涅槃を得ざるは、然も涅槃を得ず、學道者の須ふる所の衣被・飮食・床榻・湯藥・諸の生活の具、彼一切、求索し、易くして〔得〕、難からずして得。彼の比丘應にこの觀を作すべし、「我出家學道するは衣被の爲の故にあらず、飮食・床榻・湯藥の爲の故にあらず、亦諸の生活の具の爲の故にあらず。然るに、我この林に依りて住し、或は正念無きは正念を得ず、その心不定なるは定心を得ず、若し解脱せざるは解脱を得ず、諸の漏盡きざるは漏盡を得ず、無上安隱の涅槃を得ざるは然も涅槃を得ず。學道者の須ふる所の衣被・飮食・床榻・湯藥・諸の生活の具、彼一切求索し、易くして〔得〕難からずして得と」。彼の比丘是の如く觀じ已りてこの林を捨て去るべし。(2)比丘は一林に依りて住す。我はこの林に依りて住し、或は正念

【一】M. 17. Vanapattha-sutta.

【二】衣服・臥具・飮食・醫藥の四を四事供養又は沙門生活の四要具といふ。

【三】彼それ等を求むるに容易く得、難なく得るの意。

神に非ずと計し已りて、我すなはち淨を知る。無量空處・無量識處・無所有處・非有想非無想處、一・別・若干・見・聞・識・知して意の所念、意の所思を觀ずるを得、この世より彼の世に至り、彼の世よりこの世に至る。我一切に於て則ち一切を知り、一切これ神に非ず、一切神所に非ず、神一切所に非ずと「計し」、我一切卽ちこれ神に非ずと計し已りて、我すなはち一切を知る』佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第二十六

百六、想經第十[一]

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『若し沙門梵志有り、地に於て地想有り[二]、地即ちこれ神、地これ神所、神これ地所なりと[計し]、彼地即ちこれ神なりと計し已りてすなはち地を知らず。是の如く水・火・風・神・天・生主・梵天・無煩・無熱[亦然り]。彼淨に於て淨想有り、淨即ちこれ神、淨これ神所、神これ淨所なりと[計し]、彼淨即ちこれ神なりと計し已りてすなはち淨を知らず。無量空處・無量識處・無所有處・非有想非無想處、一・別・若干・見・聞・識・知して意の所念・意の所思を觀ずるを得、この世より彼の世に至り、彼の世よりこの世に至る。彼一切に於て一切想有り、一切即ちこれ神、一切これ神所、神これ一切所なりと[計し]、彼一切即ちこれ神なりと計し已りてすなはち一切を知らず。若し沙門梵志有り、地に於て則ち地を知り、地これ神に非ず、地神所に非ず、神地所に非ずと[計し]、彼地即ちこれ神[三]に非ずと計し已りて彼すなはち地を知る。是の如く水・火・風・神・天・生主・梵天・無煩・無熱[亦然り]。彼淨に於て則ち淨を知り、淨これ神に非ず、淨神所に非ず、神淨所に非ずと[計し]、彼淨すなはちこれ神に非ずと計し已りて、彼すなはち淨を知る。無量空處・無量識處・無所有處・非有想非無想處、一・別・若干・見・聞・識・知し、意の所念・意の所思を觀ずるを得、この世より彼の世に至り、彼の世よりこの世に至る。彼一切に於て則ち一切を知り、一切これ神に非ず、一切神所に非ず、神一切所に非ずと[計し]、彼一切即ちこれ神に非ずと計し已りて、彼すなはち一切を知る。我地に於て則ち地を知り、地これ神に非ず、地神所に非ず、神地所に非ずと[計し]、我地即ちこれ神に非ずと計し已りて、我すなはち地を知る。是の如く水・火・風・神・天・生主・梵天・無煩・無熱[亦然り]。我淨に於て則ち淨を知り、淨これ神に非ず、淨神所に非ず、神淨所に非ずと[計し]、我淨即ちこれ

【一】 M. 1. Mūlapariyāya-sutta. 「佛說樂想經」(竺法護譯)。

【二】 巴利文「地を地として知り、地を地として知りて地を想ひ、地に於て想ひ、地として想ひ、「我が地なり」と想ひ、地を悦ぶ。これ何に因るぞ。彼未だよく識らずと吾は言ふ」。巴利文には地・水・火・風・神・天・生主・梵天・光音・遍淨・廣果・勝者・空無邊處・識無邊處・無所有處・非想非非想處・見・聞・覺・知・唯一性・種種性・一切・涅槃の二十四を擧げ、本經には二十三を擧ぐ。

【三】 原文「不ㇾ計二地即是神一已」。「地即ちこれ神なりと計らず已りて」なるを多少作り變へたるなり。

し。(8)比丘、當に、我欲を離れ惡不善の法を離れ、「乃至」第四禪を得るに至り成就して遊び、具足戒を得て而も禪を廢せず、觀行を成就して空靜處に於てせんと願ふべし。(9)比丘、當に、我[二]三結已に盡きて須陀洹を得、惡法に墮せず定んで正覺に趣き、極めて七有を天上人間に受け、七たび往來し已りてすなはち苦邊を得、具足戒を得て而も禪を廢せず、觀行を成就して空靜處に於てせんと願ふべし。(10)比丘、當に、我三結已に盡きて婬怒癡薄く、一たび天上人間に往來するを得、一たび往來し已りてすなはち苦邊を得、具足戒を得て而も禪を廢せず、觀行を成就して空靜處に於てせんと願ふべし。(11)比丘、當に、我五下分結盡き、彼の間に生じてすなはち般涅槃し、不退法を得てこの世に還らず、具足戒を得て而も禪を廢せず、觀行を成就して空靜處に於てせんと願ふべし。(12)比丘當に、我息解脫し、色を離れて無色を得、如其像定を身に作證し成就して遊び、慧を以て而も觀じ漏を斷じ漏を知り、具足戒を得て而も禪を廢せず、觀行を成就して空靜處に於てせんと願ふべし。(13)比丘、當に、我如意足・天耳智・他心智・宿命智・生死智あり、諸漏已に盡きて而も無漏を得、心解脫し慧解脫し、現法中に於て自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊び、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ更に有を受けずと如眞を知り、具足戒を得て而も禪を廢せず、觀行を成就して空靜處に於てせんと願ふべし』。ここに於て彼の比丘佛の所說を聞きて善く受け善く持し卽ち坐より起ち佛足を稽首し遶三匝して去りぬ。彼の比丘佛のこの教を受け、閑居靜處に宴坐思惟し、修行精勤して心放逸無し。閑居靜處に宴坐思惟し、修行精勤し心放逸無きに因るが故に、若し族姓子の所爲「の如く」、鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして學道すれば、唯無上の梵行訖り現法中に於て自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊び、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ更に有を受けずと如眞を知る。彼の尊者法を知り已りて阿羅訶を得るに至る。佛說是の如し。彼の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

【二】三結及び四果に就ては一卷「水喩經」及び、註〔三〕以下を見よ。

百五、願經第九[一]

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衛國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時一比丘有り、遠離・獨住・閑居・靜處に在りて宴坐思惟し心にこの念を作しぬ「世尊[我を]慰勞し我と共に語言し我が爲に法を說きたまひ、具足戒を得て而も禪を廢せず、觀行を成就し空靜處に於てせよと[宣ふ]と」。こゝに於て比丘この念を作し已りて則ち晡時に於て宴坐より起ち、佛所に往詣しぬ。世尊遙に彼の比丘の來るを見、彼の比丘に因るが故に諸の比丘に告げたまはく『(1)汝等、當に世尊[我を]慰勞して我と共に語言し、我が爲に法を說きたまひ、[我]具足戒を得て而も禪を廢せず、觀行を成就して空靜處に於てせんと願ふべし。(2)比丘、當に、我親族有り、彼をして我に因りて身壞れ命終りて必ず善處に昇り乃ち天上に生ぜしめ、[我]具足戒を得て而も禪を廢せず、觀行を成就して空靜處に於てせんと、願ふべし。(3)比丘、當に、諸の我に衣被・飲食・床榻・湯藥、諸の生活の具を施すもの、彼のこの施をして大功德有り大光明有り大果報[あること]を得しめ、[我]具足戒を得て而も禪を廢せず、觀行を成就して空靜處に於てせんと願ふべし。(4)比丘當に、我能く飢渴・寒熱・蚊虻・蠅蚤・風日に逼らるゝを忍び惡聲捶杖亦能くこれを忍び、身諸の疾に遇ひ極めて苦痛を爲し命絕えんと欲するに至るも、諸の不可樂皆能く堪耐し、具足戒を得て而も禪を廢せず、觀行を成就して空靜處に於てせんと願ふべし。(5)比丘、當に、我不樂を堪耐し、若し不樂を生ずるも心終に著せず、具足戒を得て而も禪を廢せず、觀行を成就して空靜處に於てせんと願ふべし。(6)比丘當に、我恐怖を堪耐し、若し恐怖を生ずるも心終に著せず、具足戒を得て而も禪を廢せず、觀行を成就して空靜處に於てせんと願ふべし。(7)比丘當に、我若し三惡不善の念[卽ち]欲念・恚念・害念を生ずるも、この三惡不善の念の爲に心終に著せず、具足戒を得て而も禪を廢せず、觀行を成就して空靜處に於てせんと願ふべ

【一】M. 6. Ākaṅkheyya-sutta.

學無恚答へて曰く『瞿曇、我若し知らば、何に由りて當に是の如き說を作すべきや、「一論もてすなはち滅すること空瓶を弄ぶが如く、瞎牛邊地に在りて食すと說かん」と。世尊語げて曰はく『無恚、我今法有り、善にして善と相應し、彼々解脫の句にして能く以て作證す。如來これを以て自ら無畏と稱す。諸の比丘我が弟子となりて來た諛諂無く欺誑せず質直にして虛無く、我訓へ隨ひて敎へ已れば必ず究竟智を得。無恚、若し汝、沙門瞿曇師を貪るが故に法を說くと、この念を作さば、汝この念を作すこと莫れ。師を以て汝に還さん。我それ汝が爲に法を說く。無恚、若し汝、沙門瞿曇弟子を貪るが故に法を說くと、この念を作さば、汝この念を作すこと莫れ。弟子「を以て」汝に還さん。我それ汝が爲に法を說く。無恚 若し汝、沙門瞿曇供養を貪るが故に法を說くと、この念を作さば、汝この念を作すこと莫れ。供養「を以て」汝に還さん。我それ汝が爲に法を說く。無恚、若し汝、沙門瞿曇、稱譽を貪るが故に法を說くと、この念を作さば、汝この念を作すこと莫れ。稱譽「を以て」汝に還さん。我それ汝が爲に法を說く。無恚、若し汝、我若し法有り、善にして善と相應し、彼々解脫の句、能く以て作證すれば、彼の沙門瞿曇我を奪ひ我を滅すと、この念を作さば、汝この念を作すこと莫れ。法を以て汝に還さん。我それ汝が爲に法を說く』。こゝに於て大衆默然として而も住しぬ。所以者何。彼魔王の爲に制持せらるゝが故に。彼の時世尊、實意居士に告げて曰はく『汝、この大衆默然として而も住するを看よ。所以者何。彼魔王の爲に制持せらるゝが故に。彼異學衆をして一異學のこの念を作すもの有ること無からしむ。「即ち」、我沙門瞿曇の修行する所の梵行を試みんと』。世尊知り已りて實意居士の爲に法を說き、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、無量の方便もて彼の爲に法を說き、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りて即ち坐より起ち、すなはち實意居士の臂に接して神足を以て飛びて虛に乘りて而も去りたまひぬ。佛說是の如し。實意居士佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

の苦の習を知り、この苦の滅を知り、この苦滅道の如眞を知り、亦この漏を知りこの漏の習を知りこの漏の滅を知りこの漏滅道の如眞を知る。彼是の如く知り是の如く見、欲漏心解脫し有漏・無明漏心解脫し、解脫し已りてすなはち解脫を知り、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ更に有を受けずと如眞を知る。無恚、これを更に異なる最上・最妙・最勝有り、彼の證の爲の故に、我が弟子我に依り梵行を行ずと謂ふ』。こゝに於て實意居士語げて曰く『無恚、世尊此に在す。汝今一論を以て滅すること空瓶を挊ぶが如く、瞎牛の邊地に在りて食するが如しと說くべし』。世尊聞き已りて異學無恚に語げて曰く『汝實に是の如く說けるや』。異學無恚答へて曰く『實に是の如し、瞿曇』。世尊また問ひて曰はく『無恚、汝頗し曾て長老舊學より聞きし所是の如きや、「卽ち」過去の如來・無所著・等正覺、若しは無事處・山林・樹下に有り、或は高巖に有り寂として音聲無く遠離して惡無く人民有ること無きに隨順して宴坐し、諸の佛世尊無事處・山林・樹下に在し、或は高巖に住し寂として音聲無く遠離して惡無く人民有ること無きに、隨順して宴坐したまふ。彼遠離の處に在りて常に樂しみて宴坐し安隱快樂なり。彼初めより一日一夜も共に聚まり集會すること、汝今日及び眷屬の如くならずと』。異學無恚答へて曰く『瞿曇、我曾て長老舊學より聞きし所是の如し。「卽ち」過去の如來・無所著・等正覺、若しは無事處・山林・樹下に有り、或は高巖に有り寂として音聲無く遠離して惡無く人民有ること無きに隨順して宴坐したまひ、諸の佛世尊無事處・山林・樹下に在し、或は高巖に住し寂として音聲無く遠離して惡無く人民有ること無きに隨順して宴坐したまふ。彼遠離の處に在りて常に樂しみて宴坐し安隱快樂なり。初めより一日一夜も共に聚まり集會すること、我が今日及び眷屬の如くならずと』。『無恚、汝この念を作さざるや、「卽ち」彼の世尊の如く無事處・山林・樹下に在し、或は高巖に住し寂として音聲無く遠離して惡無く、人民有ること無きに隨順して宴坐したまはん。彼遠離の處に在して常に樂しみて宴坐し安隱快樂なり。彼の沙門瞿曇正覺道を學す、と』。異

を得るなり。瞿曇、云何がこの不了可憎行第一を得、眞實を得るや』。世尊答へて曰はく『無恚、或は一沙門梵志有りて四行を行じ、殺生せず殺さしめず殺すに同ぜず、偸まず偸ましめず偸むに同ぜず、他の女を取らず他の女を取らしめず他の女を取るに同ぜず、妄言せず妄言せしめず妄言するに同ぜず。彼この四行を行じ樂しみて而も進まず、彼清淨なる天眼の人「眼」を出過せるを以て、この衆生の死時・生時、好色・惡色、妙と不妙、善處及び不善處に往來するを見、この衆生の所作業に隨ひてその如眞を見る。「若しこの衆生身惡行・口・意惡行を成就し、聖人を誹謗し邪見にして邪見業を成就すれば、彼これに因縁して身壞れ命終りて必ず惡處に至り地獄の中に生ず。若しこの衆生身妙行・口・意妙行を成就し、聖人を誹謗せず、正見にして正見業を成就すれば、彼これに因縁して身壞れ命終りて必ず善處に昇り乃ち天上に生ずと。」無恚、意に於て云何。是の如くしてこの不了可憎行第一を得、眞實を得るや』。無恚答へて曰く『瞿曇、是の如く不了可憎行第一を得、眞實を得るなり。瞿曇、云何がこの不了可憎行作證するが故に、沙門瞿曇の弟子沙門に依り梵行を行ずるや』。世尊答へて曰はく『無恚、この不了可憎行に因りて作證するに非ざるが故に我が弟子我に依り梵行を行ずるなり、無恚、更に異なる最上・最妙・最勝有り。彼の證の爲の故に我が弟子我に依り梵行を行ず』。こゝに於て調亂の異學衆等高大聲を發し『是の如し、是の如し、彼の證の爲の故に、沙門瞿曇の弟子沙門瞿曇に依り梵行を行ずと』。こゝに於て異學無恚、自ら己の衆に勅して默然ならしめ已りて白して曰く『瞿曇、何者か更に異なる最上・最妙・最勝有り、彼の證の爲の故に沙門瞿曇の弟子沙門瞿曇に依り梵行を行ずるや』。こゝに於て世尊答へて曰はく『無恚、若し如來・無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號するもの世間を出で、彼五蓋・心穢慧羸を捨て、欲を離れ惡不善の法を離れ、「乃至」第四禪を得るに至り成就して遊び、彼已に是の如く定心淸淨にして穢無く煩無く柔軟にして善く住し不動心を得、漏盡智通作證に趣向し、彼この苦の如眞を知り、こ

（3）天眼通。

（4）漏盡通。

【一八】四禪に就ては一卷「婆度樹經」註を見よ。

ずと說く』。異學無恚問ひて曰く『瞿曇、この不了可憎行、これ[一六]第一を得、眞實を得るや』。世尊答へて曰はく『無恚、この不了可憎行第一を得ず眞實を得ず。然も二種有りて皮を得、節を得』。異學無恚また問ひて曰く『瞿曇、云何がこの不了可憎行表皮を得るや』。世尊答へて曰はく『無恚、ここに或は一沙門梵志有りて[一七]四行を行じ、殺生せず殺さしめず殺すに同ぜず、偸まず偸ましめず偸むに同ぜず、他の女を取らず他の女を取らしめず、他の女を取るに同ぜず、妄言せず妄言せしめず、妄言するに同ぜず。彼この四行を行じ樂しみて而も進まず、心慈と倶にして一方に遍滿し成就して遊ぶ。是の如く二・三・四方・四維・上下、一切に普周く、心慈と倶にして、結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。是の如く悲喜[亦然り]。心捨と倶にして、結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。無恚、意に於て云何。是の如くこの不了可憎行表皮を得るや』。無恚答へて曰く『瞿曇、是の如くこの不了可憎行表皮を得るなり。瞿曇、云何がこの不了可憎行節を得るや』。世尊答へて曰はく『無恚、或は一沙門梵志有りて四行を行じ、殺生せず殺さしめず殺すに同ぜず、偸まず偸ましめず偸むに同ぜず、他の女を取らず他の女を取らしめず他の女を取るに同ぜず、妄言せず妄言せしめず妄言するに同ぜず。彼この四行を行じ樂しみて而も進まず、彼行有り相貌有り、本無量の昔經歷せる所を憶ふ「或は一生・二生・百生・千生・成劫・敗劫・無量の成敗劫、彼の衆生名は某、彼昔更に歷、我曾て彼に生じ、是の如き姓、是の如き字にして是の如く生じ是の如く飮食し、是の如く苦樂を受け、是の如く長壽し、是の如く久しく住し、是の如く壽命訖り、此に死して彼に生じ、彼に死して此に生ず。我生じて此に在り、是の如き姓是の如き字にして是の如く生じ是の如く飮食し、是の如く苦樂を受け、是の如く長壽し、是の如く久しく住し、是の如く壽命訖ると」。無恚、意に於て云何。是の如くしてこの不了可憎行、節を得るや』。無恚答へて曰く『瞿曇、是の如くこの不了可憎行、節

【一六】得第一(Aggappatta)、得眞實(Sārappatta)。

【一七】行四行(Catuyāmasaṃvara-saṃvuta)。

(1)四無量心。

(2)宿住通。

爲して食す。猶ほ暴雨の五穀種子を傷害する所多く、畜生及び人民を嬈亂するが如し。是の如く彼の沙門梵志數ば他家に入るも亦復是の如し」と言はざれば、これを無恚、苦行を行ずる者穢無しと謂ふ。(8)また次に無恚、或は一清苦行[者]有りて苦行し、この清苦行苦行に因りて、愁癡・恐怖せず恐懼密行せず、疑恐失名せず増伺・放逸ならず。無恚、若し一清苦行[者]有りて苦行し、この清苦行苦行に因りて、愁癡・恐怖せず恐懼密行せず、疑恐失名せず増伺・放逸ならざれば、これを無恚、苦行を行ずる者穢無しと謂ふ。(9)また次に無恚、或は一清苦行[者]有りて苦行し、この清苦行苦行に因りて、身見・邊見・邪見・見取・を生ぜず、難爲せず、意に節限無く、諸の沙門梵志法に通ずべくして而も通ずと爲す。無恚、若し一清苦行[者]有りて苦行し、この清苦行苦行に因りて、身見・邊見・邪見・見取を生ぜず、難爲せず、意に節限無く、諸の沙門梵志法に通ずべくして而も通ずと爲せば、これを無恚、苦行を行ずる者穢無しと謂ふ。(10)また次に無恚、或は一清苦行[者]有りて苦行し、この清苦行苦行に因りて瞋・纒・不語・結・慳・嫉・諛・諂・欺誑・無慚・無愧無し。無恚、若し一清苦行[者]有りて苦行し、この清苦行苦行に因りて、瞋・纒・不語・結・慳・嫉・諛・諂・欺誑・無慚・無愧無くば、これを無恚、苦行を行ずる者穢無しと謂ふ。(11)また次に無恚、或は一清苦行[者]有りて苦行し、この清苦行苦行に因りて、妄言・兩舌・麁言・綺語せず、惡戒を具せず。無恚、若し一清苦行[者]有りて苦行し、この清苦行苦行に因りて、妄言・兩舌・麁言・綺語せず、惡戒を具せざれば、これを無恚、苦行を行ずる者穢無しと謂ふ。(12)また次に無恚、或は一清苦行[者]有りて苦行し、この清苦行苦行に因りて不信・懈怠無く正念・正智有り惡慧有ること無し。無恚、若し一清苦行[者]有りて苦行し、この清苦行苦行に因りて不信・懈怠無く、正念・正智有り、惡慧無ければ、これを無恚、苦行を行ずる者穢無しと謂ふ。無恚、我汝が爲にこの不了可憎具足の行、無量の穢の汚す所と爲らずと說かざるや』。異學無恚答へて曰く『是の如し雀曇、我が爲にこの不了可憎具足の行、無量の穢の汚す所と爲ら

も貢高ならず、淸苦行苦行を得已りて心繫著せざれば、これを無恚、苦行を行ずる者穢無しと謂ふ。(4)また次に無恚、或は一淸苦行「者」有りて苦行し、この淸苦行苦行に因りて自ら貴くせず他を賤しめず。無恚、若し一淸苦行「者」有りて苦行し、この淸苦行苦行に因りて自ら貴くせず他を賤しめざれば、これを無恚、苦行を行ずる者穢無しと謂ふ。(5)また次に無恚、或は一淸苦行「者」有りて苦行し、この淸苦行苦行に因りて家々に至りて而も自ら、我が行淸苦行にして我が行甚だ難しと稱說せず。無恚、若し一淸苦行「者」有りて苦行し、この淸苦行苦行に因りて家々に至りて而も自ら、我が行淸苦行にして我が行甚だ難しと稱說せざれば、これを無恚、苦行を行ずる者穢無しと謂ふ。(6)また次に無恚、或は一淸苦行「者」有りて苦行し、この淸苦行苦行に因りて、若し沙門梵志他の爲に敬重・供養・禮事せらるゝを見れば、嫉妬を起し、「何すれぞ彼の沙門梵志を敬重し供養し禮事するや。應に我を敬重し供養し禮事すべし。所以者何。我苦行を行ず」と言はず。無恚、若し一淸苦行「者」有りて苦行し、この淸苦行苦行に因りて、若し沙門梵志他の爲に敬重・供養・禮事せらるゝを見れば、嫉妬を起し、「何すれぞ彼の沙門梵志を敬重し供養し禮事するや。應に我を敬重し供養し禮事すべし。所以者何。我苦行を行ず」と言はざれば、これを無恚、苦行を行ずる者穢無しと謂ふ。(7)また次に無恚、或は一淸苦行「者」有りて苦行し、この淸苦行苦行に因りて、若し沙門梵志他の爲に敬重・供養・禮事せらるゝを見れば、この沙門梵志を面訶して、「何すれぞ敬重・供養・禮事「せらる」るや。汝多欲多求にして常に食し、根種子・樹種子・果種子・節種子・種子子を五と爲して食す。猶ほ暴雨の五穀種子を傷害する所多く畜生及び人民を嬈亂するが如し。是の如く彼の沙門梵志數ば他家に入るも亦復是の如し」と言はず。無恚、若し一淸苦行「者」有りて苦行し、この淸苦行苦行に因りて、若し沙門梵志他の爲に敬重・供養・禮事せらるゝを見れば、この沙門梵志を面訶して、「何すれぞ敬重・供養・禮事「せらる」るや。汝多欲多求にして常に食し、根種子・樹種子・果種子・節種子・種子子を五と

く、沙門梵志法に通ずべくして而も通ぜずと爲せば、これを無恚、苦行を行ずる者の穢と謂ふ。(10)また次に無恚、或は一淸苦行［者］有りて苦行し、この淸苦行苦行に因り、瞋[一五]・纒・不語・結・慳・嫉・諛・諂・欺誑・無慚・無愧なり。無恚、若し一淸苦行［者］有りて苦行し、この淸苦行苦行に因りて瞋・纒・不語・結・慳・嫉・諛・諂・欺誑・無慚・無愧なれば、これを無恚、苦行を行ずる者の穢と謂ふ。(11)また次に無恚、或は一淸苦行［者］有りて苦行し、この淸苦行苦行に因りて妄言・兩舌・麁言・綺語し惡戒を具す。無恚、若し一淸苦行［者］有りて苦行し、この淸苦行苦行に因りて妄言・兩舌・麁言・綺語し、惡戒を具すれば、これを無恚、苦行を行ずる者の穢と謂ふ。(12)また次に無恚、或は一淸苦行［者］有りて苦行し、この淸苦行苦行に因りて不信・懈怠し、正念・正智無く惡慧有り。無恚、若し一淸苦行［者］有りて苦行し、この淸苦行苦行に因りて不信・懈怠し、正念・正智無く惡慧有れば、これを無恚、苦行を行ずる者の穢と謂ふ。我汝が爲にこの不了可憎具足の行、無量の穢に汚さると說かざるや』。異學無恚答へて曰く『是の如し瞿曇。我が爲にこの不了可憎具足の行、無量の穢に汚さると說く』。『無恚、我また汝が爲にこの不了可憎具足の行、無量の穢の汚す所と爲らずと說く』。異學無恚また問ひて曰く『云何が瞿曇、我が爲にこの不了可憎具足の行、無量の穢の汚す所と爲らずと說くや』。世尊答へて曰はく『(1)無恚、或は一淸苦行［者］有りて苦行し、この淸苦行苦行に因りて、惡欲せず念欲せず。無恚、若し一淸苦行［者］有りて苦行し、この淸苦行苦行に因りて惡欲せず念欲せざれば、これを無恚、苦行を行ずる者穢無しと謂ふ。(2)また次に無恚、或は一淸苦行［者］有りて苦行し、この淸苦行苦行に因りて日光を視ず、日氣を服せず。無恚、若し一淸苦行［者］有りて苦行し、この淸苦行苦行に因りて日光を視ず、日氣を服せざれば、これを無恚、苦行を行ずる者穢無しと謂ふ。(3)また次に無恚、或は一淸苦行［者］有りて苦行し、この淸苦行苦行に因りて而も貢高ならず、淸苦行苦行を得已りて心、繫著せず。無恚、若し一淸苦行［者］有りて苦行し、この淸苦行苦行に因りて而

【一五】これ等の名目は二二卷『求法經』以下諸經に出づ。

禮事せらるゝを見れば、すなはち嫉妬を起して言はく、何すれぞ彼の沙門梵志を敬重し供養し禮事するや。應に我を敬重し供養し禮事すべし。所以者何。我苦行を行ずと。無恚、若し一清苦行[者]有りて苦行し、この清苦行、苦行に因りて、若し沙門梵志、他の爲に敬重・供養・禮事せらるゝを見ればすなはち嫉妬を起し、何すれぞ彼の沙門梵志を敬重し供養し禮事するや。應に我を敬重し供養し禮事すべし。所以者何。我苦行を行ずと言はゞ、これを無恚、苦行を行ずる者の穢と謂ふ。(7)また次に無恚、或は一清苦行[者]有りて苦行し、この清苦行、苦行に因り、若し沙門梵志、他の爲に敬重・供養・禮事せらるゝを見れば、すなはちこの沙門梵志を面訶して言く「何すれぞ敬重・供養・禮事[せらる]るや。汝多欲多求にして常に食し、[三]根種子・樹種子・果種子・節種子・種子子を五と爲して食す。猶ほ暴雨の五穀種子を傷害する所多く、畜生及び人民を嬈亂するが如し。是の如く彼の沙門梵志數ば他家に入るも亦復是の如しと」。無恚、若し一清苦行[者]有りて苦行し、この清苦行、苦行に因りて、若し沙門梵志、他の爲に敬重・供養・禮事せらるゝを見れば、すなはちこの沙門梵志を面訶して「何すれぞ敬重・供養・禮事[せらる]るや。汝多欲多求にして常に食し、根種子・樹種子・果種子・節種子・種子子を五と爲して食す。猶ほ暴雨の五穀種子を傷害する所多く、畜生及び人民を嬈亂するが如し。是の如く彼の沙門梵志數ば他家に入るも亦復是の如し」と言はゞ、これを無恚、苦行を行ずる者の穢と謂ふ。(8)また次に無恚、或は一清苦行[者]有りて苦行し、この清苦行苦行に因り、愁癡・恐怖・恐懼・密行・疑恐・失名・増伺・放逸有り。若し一清苦行[者]有りて苦行し、この清苦行苦行に因り愁癡・恐怖・恐懼・密行・疑恐・失名・増伺・放逸有れば、これを無恚、苦行を行ずる者の穢と謂ふ。(9)また次に無恚、或は一清苦行[者]有りて苦行し、この清苦行苦行に因り、[四]身見・邊見・邪見・見受 難爲を生じ、意に節限無ければ、諸の沙門梵志法に通ずべくして而も通ぜずと爲す。無恚、若し一清苦行[者]有りて苦行し、この清苦行、苦行に因り、身見・邊見・邪見・見取・難爲を生じ、意に節限無

【三】 根種子 (Mūla-bīja)、樹(Khandha-)、果(Phala-)、節(Agga-)、種子子(Bīja-bīja)。

【四】 身見(Sakkāya-diṭṭhi)、邊見 (Antaggāhika-)、邪見(Micchā-)、見取(Sandiṭṭhi-parāmāsa)、難爲 (Dukkha-dukkhatā)。

祐大德とし叉手を彼に向く。かくの如き比の無量の苦を受け煩熱の行を學す。無恚、意に於て云何。不了可憎の行是の如くして具足すと爲すや、具足せずと爲すや』。異學無恚答へて曰く『瞿曇、是の如し。不了可憎の行、具足すと爲し具足せざるに非ず』。世尊また語げて曰く『無恚、我汝が爲にこの不了可憎具足の行無量の穢の汚す所と爲ると說く』。異學無恚問ひて曰く『瞿曇、云何が我が爲にこの不了可憎具足の行無量の穢の汚す所と爲ると說くや』。世尊答へて曰く『(1)無恚、或は一淸苦行[者]有りて苦行す、この淸苦行、苦行に因りて惡欲念欲す。無恚、若し一淸苦行[者]有りて苦行し、この淸苦行、苦行に因りて惡欲念欲すれば、これを無恚、苦行を行ずる者の穢と謂ふ。(2)また次に無恚、或は一淸苦行[者]有りて苦行す。この淸苦行、苦行に因りて仰ぎて日光を視、日氣を吸服す。無恚、若し一淸苦行[者]有りて苦行し、この淸苦行、苦行に因りて仰ぎて日光を視、日氣を吸服すれば、これを無恚、苦行を行ずる者の穢と謂ふ。(3)また次に無恚、或は一淸苦行[者]有りて苦行し、この淸苦行、苦行に因りて而も自ら貢高なり、淸苦行[者]、苦行を得已りて心すなはち繋著す。無恚、若し一淸苦行[者]有りて苦行し、この淸苦行、苦行に因りて自ら貢高なり、淸苦行[者]、苦行を得已りて心すなはち繋著すれば、これを無恚、苦行を行ずる者の穢と謂ふ。(4)また次に無恚、或は一淸苦行[者]有りて苦行し、この淸苦行、苦行に因りて自ら貴くし他を賤しむ。無恚、若し一淸苦行[者]有りて苦行し、この淸苦行、苦行に因りて自ら貴くし他を賤しめば、これを無恚、苦行を行ずる者の穢と謂ふ。(5)また次に無恚、或は一淸苦行[者]有りて苦行し、この淸苦行、苦行に因りて家々に往至して、而も自ら我が行淸苦にして、我が行甚だ難しと稱說す。無恚、若し一淸苦行[者]有りて苦行し、この淸苦行、苦行に因りて家々に往至して、而も自ら我が行淸苦にして我が行甚だ難しと稱說すれば、これを無恚、苦行を行ずる者の穢と謂ふ。(6)また次に無恚、或は一淸苦行[者]有りて苦行し、この淸苦行、苦行に因りて、若し沙門梵志、他の爲に敬重・供養・

に問へ。我必ず能く答へて汝の意を可ならしめん』。こゝに於て調亂の異學の衆等、同音に共に高大聲に唱へて曰く『沙門瞿曇、甚奇甚特なり、大如意足有り、大威德有り、大福祐有り大威神有り。所以者何。乃ち能く自ら己の宗を捨て而も他宗を以て人の所問に隨ふ』。こゝに於て異學無恚自ら己の衆に勅して嘿然たらしめ已りて問ひて曰く『瞿曇、不了可憎の行、云何が具足するを得、云何が具足するを得ざるや』。こゝに於て世尊答へて曰はく『無恚、[二]或は沙門梵志有りて倮形にして衣無く、或は手を以て衣と爲し或は葉を以て衣と爲し或は珠を以て衣と爲し、或は瓶を以て水を取らず、或は[三]槐を以て水を取らず、刀杖劫抄の食を食せず、欺妄の食を食せず、自ら往かず遣信せず、來尊を求めず、善尊せず住尊せず、若し二人食する有れば中に在りて食せず、懷妊の家に食せず、狗を畜ふ家に食せず、設使家に糞蠅有りて飛來せば而も食せず、魚を噉はず肉を食はず酒を飲まず、惡水を飲まず。或は都べて所飲無く無飲の行を學し、或は一口を噉ひ一口を以て足れりと爲し、或は二・三・四・乃至七口「を噉ひ」、七口を以て足れりと爲し、或は一得を食し一得を以て足れりと爲し、或は二・三・四・乃至七得「を食し」、七得を以て足れりと爲し、或は日に一食し一食を以て足れりと爲し、或は二・三・四・五・六・七日・半月・一月に一食し、一食を以て足れりと爲し、或は菜茹を食し或は稗子を食し、或は穄米を食し、或は雜𪎊を食し、或は頭々邏食を食し或は麤食を食し、或は無事處に至りて無事に依り、或は根を食し或は果を食し或は自落果を食し、或は連合衣を持し、或は毛衣を持し、或は頭舍衣を持し、或は毛頭舍衣を持し、或は全皮を持し、或は穿皮を持し、或は全穿皮を持し、或は散髮を持し、或は編髮を持し或は散編髮を持し、或は髮を剃る有り或は鬚を剃る有り或は鬚髮を剃る有り、或は髮を拔く有り或は鬚を拔く有り或は鬚髮を拔き、或は住立して坐を斷じ、或は蹲行を修し、或は刺に臥し、刺を以て床と爲す有り、或は果に臥し果を以て床と爲す有り、或は水に事ふる有りて晝夜に手抒べ、或は火に事ふる有りて竟昔よりこれを然し、或は日月に事へて尊

【二】 以下 A. i. 241, 295; ii. 206, 中阿含四卷「師子經」及び註〔一七―三二〕參照。

【三】 槐。水を容れ又は量る器なるが如し。

瞿曇、邊を行きて邊に至り、邊を樂みて邊に至り、邊に住して邊に至る。猶ほ瞎牛の邊地に在りて食し、邊を行きて邊に至り邊を樂みて邊に至り邊に住して邊に至るが如し。彼の沙門瞿曇も亦復是の如し。居士、若し彼の沙門瞿曇この衆に來らば、我一論を以て彼を滅して空瓶を弄するが如くし、亦當に彼が爲に瞎牛の喩を說くべし』と。こゝに於て異學無恚已の衆に告げて曰く『諸賢、沙門瞿曇儻しこの衆に至り、若し必ず來らば、汝等敬して坐より而も起ち〔一〇〕叉手を彼に向くること莫れ。請じて坐せしむること莫れ。豫め一座に留め、彼こゝに到り已らば、是の如き語を作せ、瞿曇、座有り。坐せんと欲せば意に隨へと』。その時世尊宴坐に在し、淨き天耳の人[耳]を出過せるを以て實意居士の異學無恚と共に是の如きを論ぜるを聞き、すなはち晡時に於て宴坐より起ち、優曇婆邏林の異學の園中に往詣したまひぬ。異學無恚遙に世尊の來るを見、卽ち坐より起ち偏に著衣を袒ぎ、叉手を佛に向け讃して曰く『善く來れり、沙門瞿曇、久しくこゝに來らず。願はくばこの座に坐せよ』。後の時世尊是の如き念を作したまひぬ「この愚癡の人自らその要に違ふと」。世尊知り已りて卽ちその床に坐したまひぬ。異學無恚すなはち世尊と共に相問訊し却きて一面に坐しぬ。世尊問ひて曰はく『無恚、向に實意居士と共に何事を論じ、何等を以ての故にこの坐に集在せるや』。異學無恚答へて曰く『瞿曇、我等この念を作す「沙門瞿曇何等の法有りて、謂く弟子を教訓し、弟子教訓を受け已りて安隱を得（令）、その形壽を盡して梵行を淨修し、及び他の爲に說くやと」。瞿曇、向に實意居士と共に論ずること是の如し。こゝを以ての故にこの坐に集在す』。實意居士彼の語を聞き已りてすなはちこの念を作しぬ「この異學無恚、異なるかな妄語す。所以者何。佛の面前に在りて世尊を欺誑すと」。世尊知り已りて語げて曰はく『無恚、我が法、甚深甚奇甚特にして覺り難く知り難く、見難く得難し。謂く我弟子を教訓し、弟子教訓を受け已りてその形壽を盡して梵行を淨修し、亦他の爲に說く。無恚、若し汝が師宗の可とする所を了ぜず行を憎惡せば、汝以て我

【九】一目又は盲目の牛。

【一〇】こゝにては合掌の意。

づけて[二]實意と曰ふ。彼平旦に於て王舍城より出で佛に往詣して供養禮事せんと欲しぬ。こゝに於て實意居士是の如き念を作しぬ『且らく[三]佛世尊は或は能く宴坐したまふ、[佛]及び諸尊比丘に詣るを置き、我寧ろ[四]優曇婆邏林に往き異學の園に詣るべしと』。こゝに於て實意居士即ち優曇婆邏林に往き、異學の園に詣りぬ。彼の時優曇婆邏林の異學の園中に一異學有り、名づけて[五]無恚と曰ひ、彼の中に在りて尊ばれて異學の師と爲り、衆人の敬ふ所、多く降伏する所にして五百の異學の推して宗とする所爲り、衆に在りて調亂し音聲高大にして、[六]種々の鳥論・語論・王論・賊論・鬪諍論・飮食論・衣被論・婦女論・童女論・婬女論・世俗論・非道論・海論・國論を說き、是の如き比の種々の鳥論を說き、皆彼の坐に集在しぬ。こゝに於て異學無恚遙に實意居士の來るを見、即ち己の衆に勅して皆嘿然ならしむ『諸賢、汝等語ること莫れ、嘿然として樂しみ、嘿然として各自ら斂攝せよ。所以者何。實意居士來る。これ沙門瞿曇の弟子なり。若し沙門瞿曇の弟子にして名德高遠、宗重すべき所にして家に在りて住止し王舍城に居る者有れば、彼を第一と爲す。彼語らずして樂しみ、嘿然として自ら收斂す。若し彼この衆嘿然として住するを知れば、彼或は能く來らん』。こゝに於て異學無恚衆をして嘿然らしめ、自らも亦嘿然たり。こゝに於て實意居士異學無恚の所に往詣し、共に相問訊し卻きて一面に坐しぬ。實意居士語げて曰く『無恚、我が佛世尊若しは[七]無事處・山林・樹下に在し、或は高巖に住し、寂として音聲無く遠離して惡無く、人民有ること無きに、隨順して宴坐したまふ。この佛世尊斯の如きの比、無事處・山林・樹下に在し、或は高巖に住し、寂として音聲無く、遠離して惡無く、人民有ること無きに隨順して宴坐したまふ。彼遠離處に在し常に宴坐を樂しみて安隱快樂なり。彼の佛世尊初め一日一夜も共に聚まり集會したまふこと、汝今日及び眷屬の如くならず』。こゝに於て異學無恚語げて曰く『居士、止みね、止みね。汝何に由りて知るを得るや。[八]沙門瞿曇は空慧解脫にしてこれ說くに足らず。或は相應し或は相應せず、或は順じ或は順ぜず。彼の沙門

【二】實意(Sandhāna)。長阿含にては「散陀那」、施護譯にては「和合」。

【三】佛はよく獨坐禪想に入りたまふ、故に時あしく詣すればそれを妨ぐる虞あり、故に今佛の所へも比丘たちの所へと詣ぜずしての意。

【四】優曇婆邏(Udumbara)。烏曇、瑞應。ウドンゲといふはこの樹の花なり。

【五】無恚(Nigrodha)。尼倶陀、尼拘陀。

【六】巴利文にては二十七種の論を擧ぐ。

【七】巴利文「世尊或は深林の稠茂り、閑かにして音少く聲少く、人の嗅ひなく人の氣はひなくして臥するに堪へ、靜思に適する坐臥處を用ひたまふ」。

【八】巴利文「沙門瞿曇の智慧は空屋のために壞はれ、沙門瞿曇は衆中にありて動かず、會話するに堪へず、彼は極と極とのみを事とす」。

何。彼の沙門梵志一處の如眞を知らず。この故に彼受を斷ずるを施設すと雖も然も一切の受を斷ずるを施設せず。是の如き[二〇]法律[にて]若し尊師を信ずれば、彼正しきに非ず、第一に非ず。若し法を信ずれば、亦正しきに非ず第一に非ず。若し戒德を具足すれば、亦正しきに非ず第一に非ず。若し同道を愛敬し恭恪奉事すれば、亦正しきに非ず第一に非ず。若し如來有りて出世したまへば、[二二]無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人の師にして佛衆祐と號したてまつる。[二三]彼受を斷ずるを施設し、現法中に於て一切の受を斷ずるを施設し、欲受・戒受・見受・我受を斷ずるを施設す。この四受何の因あり何の習あり、何に從りして而も生じ何を以て本と爲すや。この四受無明に因り無明を習とし無明より生じ無明を以て本と爲す。若し比丘有りて無明已に盡きて明已に生ずれば、彼すなはちこれよりまた更に欲受・戒受・見受・我受を受けず。彼受けず已りて則ち恐怖せず。恐怖せず已りてすなはち因緣を斷じて必ず般涅槃し、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ更に有を受けずと如眞を知る。是の如き正法律、若し尊師を信ずればこれ正しくこれ第一なり。若し法を信ずれば、これ正しくこれ第一なり。若し戒德を具足すれば、これ正しくこれ第一なり。若し同道を愛敬し恭恪奉事すれば、これ正しくこれ第一なり。諸賢、我等この行有りこの力有りこの智有り。これに因るが故に我等をして、こゝに第一の沙門・第二・第三・第四の沙門有り。この外更に沙門梵志無し。異道は一切空にして沙門梵志無しと、是の如き說を作さしむ。こゝを以ての故に我等衆中に隨在し是の如く正師子吼を作すと』。佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百四、[一]優曇婆邏經第八

我が聞きしこと是の如し。ある時佛王舍城に遊び竹林伽蘭哆園に在しぬ。その時一居士有り、名

【二〇】法律(Dhammavinaya)は、「敎」といふほどの意。普通佛敎を指せど、こゝにては他の敎を指す。下に「正法律」といふは佛敎なり。
【二二】佛十號に就ては二卷「七日經」註二七―三五を見よ。
【二三】彼とは佛を指す。
【一】D. 25, Udumbarika-sīhanāda-suttanta. 長阿含八卷「散陀那經」、施護譯「尼拘陀梵志經」。

欲無き者究竟を得るは是なり、欲有る者究竟を得るに非ざるは是なり。恚無き者究竟を得るは是なり、恚有る者究竟を得るに非ざるは是なり。癡無き者究竟を得るは是なり、癡有る者究竟を得るに非ざるは是なり。愛無く受無き者究竟を得るは是なり、愛有り受有る者究竟を得るに非ざるは是なり。慧有り慧を說く者究竟を得るは是なり、慧無く慧を說かざる者究竟を得るに非ざるは是なり。惛無く諍無き者究竟を得るは是なり。惛有り諍有る者究竟を得るに非ざるは是なり。若し沙門梵志有れば無量見に依り、彼の一切は[一五]二見に依猗す。[一六]有見及び[一七]無見なり。若し有見に依れば、彼すなはち有見に著し有見に依猗し有見に猗住し無見を惛諍す。若し無見に依れば、彼すなはち無見に著し無見に依猗し無見に猗住し有見を惛諍す。若し沙門梵志有りて因を知らず習を知らず滅を知らず盡を知らず、味を知らず患を知らず出要の如眞を知らざれば、彼の一切、欲恚有り癡有り愛あり受有り慧無く慧を說くに非ず惛有り諍有り。彼則ち生老病死を離れず、亦愁慼・啼哭・憂苦・懊惱を脫する能はず、苦邊を得ず。若し沙門梵志有り、この二見に於て因を知り習を知り滅を知り盡を知り、味を知り患を知り出要の如眞を知れば、彼の一切欲無く恚無く癡無く愛無く受無く、慧有り慧を說き惛無く諍無し。彼則ち生老病死を離るゝを得、亦愁慼・啼哭・憂苦・懊惱を脫するを得、則ち苦邊を得。(1)或は沙門梵志有りて[一八]受を斷ずるを施設し、然も一切の受を斷ずるを施設せず。欲受を斷ずるを施設して戒受・見受・我受を斷ずるを施設せず。所以者何。彼の沙門梵志[一九]三處の如眞を知らず。この故に彼受を斷ずるを施設すと雖も然も一切の受を斷ずるを施設せず。(2)また沙門梵志有りて受を斷ずるを施設し、然も一切の受を斷ずるを施設せず。欲受・戒受を斷ずるを施設して見受・我受を斷ずるを施設せず。所以者何。彼の沙門梵志二處の如眞を知らず。この故に彼受を斷ずるを施設すと雖も、然も一切の受を斷ずるを施設せず。(3)また沙門梵志有りて受を斷ずるを施設して、然も一切の受を斷ずるを施設せず。欲受・戒受・見受を斷ずるを施設して我受を斷ずるを施設せず。所以者

【一五】依猗二見(Dve 'mā bhikkhave diṭṭhiyo)。「比丘等よ、こゝにこの二見あり」。

【一六】有見(Bhavadiṭṭhi)。

【一七】無見(Vibhavadiṭṭhi)。

【一八】四取。巴利文「比丘等よ、こゝに四の取あり、何をか四となす。欲取(Kāmupādāna)、見取(Diṭṭhupādāna)、戒禁取(Sīlabbatupādāna)、我語取(Attavādupādāna)(これなり)」。(一)欲取とは色・聲・香・味・觸の五塵の境に取著するをいふ、(二)見取とは五蘊の假和合身に我見を懷くをいふ、(三)戒禁取とは外道の牛戒狗戒の如き禁戒に取著するをいふ、(四)我語取とは我見我慢等、我見の言語に取著するをいふ。

【一九】三處(Tiṇi ṭhānāni)は、戒受・見受・我受をいふ、以下準じて知れ。

謂く我が同道は出家及び在家者なり。諸賢、沙門瞿曇[一一]及び我等と、この二種の說、何の勝る有り、何の意有り、何の差別有りやと」。比丘、汝等應に是の如く異學に問ふべし「諸賢、一の究竟[一二]ありと爲すや、衆多の究竟ありと爲すやと」。比丘、若し異學是の如く答へて「諸賢、一究竟有りて衆多の究竟無し」[と言はゞ]、比丘、汝等また異學に問へ「諸賢、欲有る者究竟を得と爲すは是なりや、欲無き者究竟を得と爲すは是なりやと」比丘、若し異學是の如く答へて「欲無き者究竟を得るは是なり。欲有る者究竟を得るに非るは是なり」[と言はゞ]、汝等また異學に問へ「諸賢、恚有る者、究竟を得と爲すは是なりや、恚無き者、究竟を得と爲すは是なりやと」。比丘、若し異學是の如く答へて「恚無き者究竟を得るは是なり。恚有る者究竟を得るに非ざるは是をりと」[言はゞ]、比丘、汝等また異學に問へ「諸賢、癡有る者究竟を得と爲すは是なりや、癡無き者究竟を得と爲すは是なりやと」。比丘、若し異學是の如く答へて「諸賢、癡無き者究竟を得るは是なり。癡有る者究竟を得るに非ざるは是なり」[と言はゞ]、比丘、汝等また異學に問へ「諸賢、愛有り受有る者究竟を得と爲すは是なりや」。愛無く受無き者究竟を得と爲すは是なりやと」。比丘、若し異學是の如く答へて「諸賢、愛無く受無き者究竟を得るは是なり。愛有り受有る者究竟を得るに非ざるは是なり」[と言はゞ]、比丘、汝等また異學に問へ「慧無く慧を說かざる[一三]者究竟を得と爲すは是なりや、慧有り慧を說く者究竟を得と爲すは是なりやと」。比丘、若し異學是の如く答へて「諸賢、慧有り慧を說く者究竟を得るは是なり。慧無く慧を說かざる者究竟を得るに非ざるは是なり」[と言はゞ]、比丘、汝等、また異學に問へ「諸賢、憎有り諍有る[一四]者究竟を得と爲すは是なりや、憎無く諍無き者究竟を得と爲すは是なりやと」。比丘、若し異學是の如く答へて「諸賢、憎無く諍無き者究竟を得るは是なり。憎有り諍有る者究竟を得るに非ざるは是なり」[と言はゞ]、比丘、汝等、異學の爲に應に是の如く說くべし「諸賢、これ汝等の說の如く一の究竟有りと爲すは是なり、衆多の究竟に非ざるは是なり。

【一一】沙門瞿曇(Samaṇo Gotamo)。外道の徒の佛を呼ぶに用ひたる語。

【一二】究竟(Niṭṭhā)。

【一三】無慧(Aviddasu)。

【一四】有憎有諍(Anuruddha-paṭiviruddha)。

卷の第二十六

*因品

百三、師子吼經第七

我が聞きしこと是の如し。ある時佛　拘樓瘦に遊び　劍磨瑟曇なる拘樓の都邑に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『この中第一の沙門・第二・第三・第四の沙門有り。この外更に　沙門梵志無し。異道一切空にして沙門梵志無し。汝等衆中に隨在し是の如く正師子吼を作せ。比丘、或は異學有り來りて汝等に問ふ「諸賢、汝何の行有り何の力有り何の智有りて、汝等をして、こゝに第一の沙門・第二・第三・第四の沙門有り。この外更に沙門梵志無し。異道一切空にして沙門梵志無しと、是の如き說を作さしむるや。汝等［云何が］衆中に隨在し是の如く正師子吼を作す［や］と」。比丘、汝等應に是の如く異學に答ふべし「諸賢、我が世尊知有り見有り。如來・無所著・等正覺四法を說きたまふ。この四法に因るが故に我等をして是の如き說を作さしむ、［謂く］こゝに第一の沙門・第二・第三・第四の沙門有り。この外更に沙門梵志無し。異道一切空にして沙門梵志無し。我等衆中に隨在し是の如く正師子吼を作す。云何が四と爲す。諸賢、我等　尊師を信じ法を信じ　戒德具足を信じ、同道を愛敬し、恭恪奉事す。諸賢、我が世尊知有り見有り。如來・無所著・等正覺この四法を說きたまふ。この四法に因るが故に我等をして是の如き說を作さしむ、［謂く］こゝに第一の沙門・第二・第三・第四の沙門有り、この外更に沙門梵志無し。異道一切空にして沙門梵志無し、我等衆中に隨在し是の如く正師子吼を作すと」。比丘、異學、或はまたこの說を作す「諸賢、我等亦尊師を信ず。謂く我が尊師なり。法を信ず。謂く我が法なり。戒德具足は我が戒なり。同道を愛敬し恭恪奉事す。

※「因品」の二字削るべきを誤りて存したり。

【一】 M. 11. Cūla-Sīhanāda-sutta.

【二】 拘樓瘦(Kuru)。拘流・拘留・拘類に作ることあり、國名。民族の人といふ方更に適切なり。「瘦」は文法上於格複數を表はす語尾なり。二卷「漏盡經」註〔二〕參照。

【三】 劍磨瑟曇(Kammāssa-dhamma)と呼べる拘樓人の都邑の意。

【四】 沙門婆羅門の意。佛法の內外に拘らず、精神生活に從事し、修行をなし、敎を說きて四方を周遊したる一群の人々を指して沙門婆羅門と呼びたり。

【五】 異道(Parappavāda)。外敎の意。

【六】 異學(Aññatitthiya)。外道といふに同じ。

【七】 二卷「七日經」註〔二六〕以下を見よ。

【八】 信尊師(Satthari pasādo)。

【九】 信戒德具足(Sīlesu paripūrakāritā)。戒德を完全に具備するものたることを信ず。

【一〇】 同道。在家出家の別なく法を同じくするもの。

爲に義及び饒益を求[めず]、安隱快樂を求めず、平正路を塞ぎて一惡道を開き大坑壍を作り人をして守視せしむ。是の如くして群鹿一切死盡す。また一人有りて來りて彼の群鹿の爲に義及び饒益を求め、安隱快樂を求め、平正路を開きて惡道を閉塞し守視人を却く。是の如くして群鹿普く安濟を得。比丘當に知るべし。我この喩を說きて義を知らしめんと欲す。慧者は喩を聞けば則ちその趣を解す。この說義有り。大泉水は謂くこれ五欲の愛念歡樂なり。云何が五と爲す。眼に色を知り耳に聲を知り鼻に香を知り舌に味を知り身に觸を知る。大泉水は、當に知るべし、これ五欲なり。大群鹿は、當に知るべし、これ沙門梵志なり。一人有り來りて彼の爲に義及び饒益を求[めず]、安隱快樂を求めずとは、當に知るべし。これ[三]魔波旬なり。平正路を塞ぎて一惡道を開くとは、これ三惡不善の念[卽ち]欲念・恚念・害念なり。惡道は、當に知るべし、これ三惡不善の念なり。また更に惡道有り。謂く八邪道なり。邪見乃至邪定これを八と爲す。大坑壍を作るとは、當に知るべし、これ無明なり。人をして守らしむとは、當に知るべし、これ魔波旬の眷屬なり。また一人有り來りて彼の爲に義及び饒益を求め安隱快樂を求むとは、當に知るべし、これ如來・無所著・等正覺なり。惡道を閉塞して平正路を開くとは、三善念[卽ち]無欲念・無恚念・無害念なり。道とは、當に知るべし、これ三善念なり。また更に道有り。謂く八正道なり。正見乃至正定これを八と爲す。比丘、我汝等が爲に平正路を開きて惡道を閉塞し、坑壍を塡平し守人を除却し、尊師の弟子の爲にする所の如く大慈哀を起し憐念愍傷し義及び饒益を求め安隱快樂を求むるは、我今已に作す。汝等亦當にまた自ら作すべし。無事處・山林・樹下・空・安靜處に至り、宴坐思惟して放逸を得ること勿れ。勤加精進して後悔せしむること無かれ。こはこれ我の敎勅なり。これ我が訓誨なり』。佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第二十五

【三】 魔波旬(Māro pāpimā)。

りてまた念を生じて法に向ひ法に次し、無恚念・無害念を生じ已りてまた念を生じて法に向ひ法に次す。所以者何。我これに因りて無量の惡不善の法を生ずるを見ず。猶ほ秋後の月の如し。一切の穀を收め訖りて、牧牛兒、牛を野田に放つ時この念を作す、我が牛、群中に在りと、所以者何。牧牛兒、これに因るが故に當に罵詈を得、打を得、縛を得、過失有るべきを見ざるなり。この故に彼この念を作す、我が牛、群中に在りと。我亦是の如し。無欲念を生じ已りてまた念を生じて法に向ひ、法に次し、無恚念、無害念を生じ已りてまた念を生じて法に向ひ法に次す。所以者何。我これに因りて無量の惡不善の法を生ずるを見ず。比丘は所思に隨ひ所念に隨ひ心すなはち中に樂しむ。若し比丘多く無欲念を念ずれば則ち欲念を捨て、多く無欲念を念ずるを以ての故に心すなはち中に樂しむ。若し比丘多く無恚念・無害念を念ずれば則ち恚念・害念を捨て、多く無恚念・無害念を念ずるを以ての故に心すなはち中に樂しむ。彼覺觀已に息み內靜、一心にして覺無く觀無く、定より生ずる喜と樂とあり、第二禪を得、成就して遊ぶ。彼喜欲を離れ、捨・無求にして遊び、正念・正智にして而も身に樂を覺ふ、謂く「彼の」聖「者」の說く所（聖）、所捨・念・樂住・空あり、第三禪を得、成就して遊ぶ。彼樂滅し苦滅し、喜憂本已に滅して不苦不樂にして捨あり、念あり清淨にして第四禪を得、成就して遊ぶ。彼是の如く定心清淨にして穢無く煩無く柔軟にして善く住し不動心を得、漏盡通智に趣向して作證し、すなはちこの苦の如眞を知り、この苦の習を知り、この苦の滅を知り、この苦滅道の如眞を知り、亦この漏の如眞を知り、この漏の習を知り、この漏の滅を知り、この漏滅道の如眞を知る。彼是の如く知り是の如く見已りて則ち欲漏心解脫し、有漏・無明漏心解脫し、解脫し已りてすなはち解脫を知り、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ更に有を受けずと如眞を知る。この比丘欲念を離れ恚念を離れ、害念を離れ、則ち生老病死・愁憂・啼哭を解脫するを得、一切の苦を離る。猶ほ一無事處に大泉水有るが如し。彼に群鹿有りてその中に遊び住す。一人有り來りて彼の群鹿の

なはち速に滅す。我欲念を生ずるも受けず斷除し吐し、恚念・害念を生ずるも受けず斷除し吐す。所以者何。我これに因るが故に必ず無量の惡不善の法を生ずるを見る。猶ほ春後の月の如し。田を種うるを以ての故に、牧地に放てば則ち廣からず。牧牛の兒、牛を野澤に放つ。牛他の田に入る。牧牛の兒卽ち杖を執りて往きて遮る。所以者何。牧牛の兒これに因るが故に必ず當に罵る有り打つ有り縛る有り。過失有るを知る。この故に牧牛の兒杖を執りて往きて遮る。我亦是の如し。欲念を生ずるも受けず斷除し吐し、恚念・害念を生ずるも受けず斷除し吐す。所以者何。我これに因るが故に必ず無量の惡不善の法を生ずるを見る。比丘は所思に隨ひ所念に隨ひ、心すなはち中に樂しむ。若し比丘多く欲念を念ずれば則ち無欲念を捨て、多く欲念を念ずるを以ての故に心すなはち中に樂しむ。若し比丘多く恚念・害念を念ずれば則ち無恚念・無害念を捨て、多く恚念・害念を念ずるを以ての故に心すなはち中に樂しむ。是の如く比丘、欲念を離れず、恚念を離れず、害念を離れざれば、則ち生老病死・愁憂・啼哭を脱する能はず、亦一切の苦を離るゝ能はず。我是の如く行じて遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤して無欲念を生ず。我卽ち無欲念を生ぜるを覺り、自ら害せず、他を害せず亦「自他」倶に害せず、慧を修し煩勞せずして而も涅槃を得。自ら害せず他を害せず亦倶に害せざるを覺り、慧を修し煩勞せずして而も涅槃を得て、すなはち速に修習し廣布す。また無恚念・無害念を生ず。我卽ち無恚念・無害念を生ぜるを覺り、自ら害せず他を害せず亦「自他」倶に害せず、慧を修し煩勞せずして而も涅槃を得。自ら害せず他を害せず亦倶に害せざるを覺り、慧を修し煩勞せずして而も涅槃を得て、すなはち速に修習し廣布す、我無欲念・多思念を生じ、無恚念・無害念・多思念を生ず。我またこの念を作す、多く思念すれば身定まり意忘じ則便ち心を損す。我寧ろ內心を治し常に住して內に在りて止息し意一にして定を得、心を損せざらしむべしと。我後時に於てすなはち內心を治し、常に住して內に在りて止息し、意一にして定を得て而も心を損せず。我無欲念を生じ已

の念は即便ち滅するを得、惡念滅し已りて心すなはち常に住し、內に在りて止息し意一にして定を得。若し比丘增上心を得んと欲せば、當に以て數々この五相を念ずべし。數ば五相を念ずれば、已生の不善の念は即便ち滅するを得、惡念滅し已りて心すなはち常に住し、內に在りて止息し意一にして定を得。若し比丘、相の善と相應せるを念ずる時、惡念を生ぜず、念の惡患を觀ずる時亦惡念を生ぜず、念を念ぜざる時亦惡念を生ぜず、若し思行を以て漸く念を滅ずる時亦惡念を生ぜず、心を以て心を修し、受持し降伏する時亦惡念を生ぜざれば、すなはち自在を得、念を欲すれば則ち念じ、念[を欲]せざれば則ち念ぜず。若し比丘念を欲すれば則ち念じ、念を欲せざれば則ち念ぜざれば、これを比丘、隨意諸念・自在諸念の跡と謂ふ』。佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百二、[一]念經第六

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『我本未だ無上正覺を覺らざりし時是の如き念を作しぬ、「我寧ろ諸の念を別ちて二分と作し、欲念・恚念・害念を一分と作し、無欲念・無恚念・無害念をまた一分と作すべしと」。我後時に於てすなはち諸の念を別ちて二分と作し、欲念・恚念・害念を一分と作し、無欲念・無恚念・無害念をまた一分と作す。我是の如く行じて遠離獨住に在り、心放逸無く修行精勤するも欲念を生ず。我即ち欲念を生ぜるを覺り、自ら害し他を害し二俱に害し、慧を滅し多く煩勞して涅槃を得ず。自ら害し他を害し二俱に害し、慧を滅し多く煩勞して涅槃を得ずと覺りてすなはち速に滅す。また恚念・害念を生ず。我即ち恚念・害念を生ぜるを覺り、自ら害し他を害し二俱に害し、慧を滅し、多く煩勞して涅槃を得ず。自ら害し他を害し二俱に害し、慧を滅し、多く煩勞して涅槃を得ずと覺り、す

【一】 M. 19. Dvedhāvitakka-sutta.

【二】 欲念(Kāma-vitakka)、恚念(Vyāpāda-v.)、害念(Vihiṃsā-v.)。

惡念滅し已りて心すなはち常に住し、内に在りて止息し意一にして定を得。猶ほ人道を行きて進路急速なるがごとし。彼この念を作す、我何ぞ速きを爲す。我今寧ろ徐々に行くべきやと。彼卽ち徐ろに行く。またこの念を作す、我何ぞ徐ろに行くを爲す。寧ろ住まるべきやと。彼卽便ち住まる。またこの念を作す、我何ぞ住まるを爲す。寧ろ坐すべきやと。彼卽便ち坐す。またこの念を作す、我何ぞ坐するを爲す。寧ろ臥すべきやと。彼卽便ち臥す。是の如く彼の人漸々に身の麁行を息む。當に知るべし。比丘も亦復是の如し、彼當に思行を以て漸くその念を滅すべしと、この念を爲し惡不善の念を生ぜざらしむ。彼當に思行を以て漸々に念を滅すべしと、この念を爲せば、已生の不善の念は卽便ち滅するを得、惡念滅し已りて心すなはち常に住し、内に在りて止息し意一にして定を得。若し比丘、增上心を得んと欲せば、當に以て數々この第四相を念ずべし。この相を念ずれば、已生の不善の念は卽便ち滅するを得、惡念滅し已りて心すなはち常に住し、内に在りて止息し意一にして定を得。(5)また次に比丘、相の善と相應せるを念ずる時、不善の念を生じ、念の惡患を觀ずる時亦不善の念を生じ、念を念ぜざる時亦不善の念を生じ、當に思行を以て漸く念を滅ずべき時また不善の念を生ずれば、彼の比丘應に是の如く觀ずべし。比丘はこの念に因るが故に不善の念を生ずと。彼の比丘すなはち齒々相著けて舌上の齶に逼り、心を以て心を修め受持し降伏し、惡不善の念を生ぜざらしむ。彼心を以て心を修し受持し降伏すれば、已生の不善の念は卽便ち滅するを得、惡念滅し已りて心すなはち常に住し、内に在りて止息し意一にして定を得。猶ほ二力士一羸人を捉へて受持し降伏するがごとし。是の如く比丘、齒々相著けて舌上の齶に逼り、心を以て心を修し受持し降伏し、惡不善の念を生ぜざらしむ。彼心を以て心を修し受持し降伏すれば已生の不善の念は卽便ち滅するを得、惡念滅し已りて心すなはち常に住し、内に在りて止息し意一にして定を得。若し比丘增上心を得んと欲せば、當に以て數々この第五相を念ずべし。この相を念ずれば、已生の不善

は死蛇・死狗・死人の[四]餘牛の青色に膖脹し臭爛し、不淨流出するを以て彼の頸に繫著すれば、彼すなはち惡穢して喜ばず樂しまざるがごとし。是の如く比丘、彼この念惡にして災患有り、この念不善なり、この念これ惡なり、この念は智者の惡む所なり。この念若し滿ち具すれば則ち通を得ず、道を覺るを得ず、涅槃を得ず。惡不善の念を生ぜしむるが故にと觀ず。彼是の如く惡を觀ずれば、已生の不善の念は即便ち滅するを得、惡念滅し已りて心すなはち常に住し、內に在りて止息し意一にして定を得。若し比丘增上心を得んと欲せば、當に以て數々この第二相を念ずべし。この相を念ずれば、已生の不善の念は即便ち滅するを得、惡念滅し已りて心すなはち常に住し、內に在りて止息し意一にして定を得。(3)また次に比丘、相の善と相應せるを念ずる時、不善の念生じ、念の惡患を觀ずる時また不善の念を生ずれば、彼の比丘應にこの念を念ずべからず。惡不善の念を生ぜしむるが故に。彼この念を念ぜざれば、已生の不善の念は即便ち滅するを得、惡念滅し已りて心すなはち常に住し、內に在りて止息し意一にして定を得。[五]猶ほ目有る人色光明に有りて而も見るを用ひざるがごとし。彼或は目を閉ぢ、或は身避け去る。汝等の意に於て云何。色光明に在るも彼の人色相を受くるを得べきや』。答へて曰く『不なり』。『是の如く比丘、應にこの念を念ずべからず。惡不善の念を生ぜしむるが故に。彼この念を念ぜざれば、已生の不善の念は即便ち滅するを得、惡念滅し已りて心すなはち常に住し、內に在りて止息し意一にして定を得。若し比丘增上心を得んと欲せば當に以て數々この第三相を念ずべし。この相を念ずれば、已生の不善の念は即便ち滅するを得、惡念滅し已りて心すなはち常に住し、內に在りて止息し意一にして定を得。(4)また次に比丘、相の善と相應せるを念ずる時、不善の念を生じ、念の惡患を觀ずる時亦不善の念を生じ、念を念ぜざる時また不善の念を生ずれば、彼當に思行を以て漸くその念を滅ずべしと、この念を爲し惡不善の念を生ぜさらしむ。彼當に思行を以て漸く念を滅ずべしと、この念を爲せば已生の不善の念は即便ち滅するを得。

【四】三本「餘牛」に作り、麗本「食牛」に作る。死屍を牛ば食ひ盡したるの意か。二四卷「念處經」註〔七〕を見よ。

【五】眼を有つた人は色相(即ち有形物)の光明裏(即ち明るい所)にあるのを見たいと思はぬやうなものである。

百一、增上心經第五

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『若し比丘增上心を得んと欲せば、當に以て數々五相を念ずべし。數ば五相を念ずれば、已生の不善の念は卽便ち滅するを得、惡念滅し已りて心すなはち常住し、內に在りて止息し意一にして定を得。云何が五と爲す。(1)比丘、相の善と相應せるを念じ若し不善の念を生ずれば、彼この相に因りてまた更に異相の善と相應せるを念じて惡不善の念を生ぜざらしむ。彼この相に因りて更に異相の善と相應せるを念ずれば、已生の不善の念は卽便ち滅するを得、惡念滅し已りて心すなはち常に住し、內に在りて止息し意一にして定を得。猶ほ木工師と木工の弟子のごとし。彼墨繩を持ちて用て木に拼へば則ち利斧を以て斫治して直からしむ。是の如く比丘、この相に因りてまた更に異相の善と相應せるを念じて惡不善の念を生ぜざらしむ。彼この相に因りて更に異相の善と相應せるを念ずれば、已生の不善の念は卽便ち滅するを得、惡念滅し已りて心すなはち常に住し、內に在りて止息し意一にして定を得。若し比丘增上心を得んと欲せば、當に以て數々この第一の相を念ずべし。この相を念ずれば、已生の不善の念は卽便ち滅するを得、惡念滅し已りて心すなはち常に住し、內に在りて止息し意一にして定を得。(2)また次に比丘、相の善と相應せるを念じ、若し不善の念を生ずれば、彼この念惡にして災患有り、この念不善なり、この念これ惡なり、この念は智者の惡む所なり。この念若し滿ち具すれば則ち通を得ず、道を覺るを得ず、涅槃を得ず。惡不善の念を生ぜしむるが故にと觀ず。彼是の如く惡を觀ずれば、已生の不善の念は卽便ち滅するを得、惡念滅し已りて心すなはち常に住し、內に在りて止息し意一にして定を得。猶ほ人年少端政にして愛すべく、沐浴澡洗し、明淨衣を著け、香を以て身に塗り、鬚髮を修治し、極めて淨潔ならしめ、或

【一】M. 20, Vitakkasanthāna-sutta.
【二】增上心(Adhicitta)。Lord Chalmers: The higher mind. 高き程度の定心。
【三】五相(Pañca Nimittāni)。

た我に語げて曰く「瞿曇、樂は樂に因らず、要ず苦に因りて得。頻鞞娑羅王[九]の樂の如き、沙門瞿曇、如かざるなりと」。我また語げて曰く、「汝等癡狂にして所説義無し。所以者何。汝等不善にして曉了する所無く而も時を知らず。謂く汝この說を作す、頻鞞娑羅王の樂の如き、沙門瞿曇如かざるなりと」。尼揵、汝等本應に是の如く問ふべし、誰か樂勝るや、頻鞞娑羅王と爲すや、沙門瞿曇と爲すやと。尼揵、若し我是の如く、我樂勝り、頻鞞娑羅王如かずと說かば、尼揵、汝等この語を作すを得べきや、頻鞞娑羅王の樂の如き、沙門瞿曇如かざるなりと」。彼の諸の尼揵卽ち是の如く說きぬ、「瞿曇、我等今沙門瞿曇に問ふ。誰か樂勝るや、頻鞞娑羅王と爲すや、沙門瞿曇と爲すやと」。我また語げて曰く「尼揵、我今汝に問ふ。解する所に隨ひて答へよ。諸の尼揵等意に於て云何。頻鞞娑羅王、意の如く靜默無言なるを得、これによりて七日七夜歡喜快樂するを得べきやと」。尼揵答へて曰く、「不なり瞿曇」と。「六・五・四・三・二・一日一夜歡喜快樂するを得るやと」。尼揵答へて曰く、「不なり瞿曇」。また問ひて曰く、「尼揵、我意の如く靜默無言なるを得、これに因りて一日一夜歡喜快樂するを得べきや」。尼揵答へて曰く、「是の如し瞿曇」。「二・三・四・五・六・七日七夜歡喜快樂するを得るや」。尼揵答へて曰く、「是の如し瞿曇」。我また問ひて曰く、「諸の尼揵等、意に於て云何。誰か樂勝るや、頻鞞娑羅王と爲すや、この我と爲すやと」。尼揵答へて曰く、「瞿曇、我等沙門瞿曇の所說を受解する如くば、瞿曇の樂勝り、頻鞞娑羅王如かざるなりと」。摩訶男、これに因るが故に欲は樂無く無量の苦患有りと知る。若し多聞の聖弟子、如眞を見ざれば、彼欲の爲に覆はれ惡不善に纏はれ、捨、樂及び無上息を得ず。摩訶男、是の如く彼の多門の聖弟子欲の爲に退轉す。摩訶男、我欲は樂無く無量の苦患有るを知る。我如眞を知り已りて欲の爲に覆はれず、亦惡不善の法の爲に纏はれず、すなはち捨・樂及び無上の息を得。摩訶男、この故に我欲の爲に退轉せず」。佛說是の如し。釋摩訶男及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

【九】頻鞞娑羅王（Bimbisāra-rājā）。

罪を爲し福を作さず善を行ぜず、畏るゝ所無く依る所無く歸する所無く、生處に隨へば、我必ず彼に生ぜんと」。これより悔有り。悔ゆれば不善にして死し福無くして命終る。摩訶男、これを現法の苦陰と謂ひ、欲に因り欲に緣り欲を以て本と爲す。(viii)摩訶男、また次に衆生欲に因り欲に緣り欲を以て本と爲すが故に、身惡行を行じ、口・意惡行を行ず。彼身・口・意の惡行に因るが故に、これに因りこれに緣りて身壞れ命終れば必ず惡處に至り地獄の中に生ず。摩訶男、これを後世の苦陰と謂ひ、欲に因り欲に緣り欲を以て本と爲す。摩訶男、この故に當に知るべし、欲は一向に樂無く無量の苦患ありと。多聞の聖弟子如眞を見ざれば、彼欲の爲に覆はれ、捨樂及び無上息を得ず。摩訶男、是の如く彼の多聞の聖弟子欲に因りて退轉す。摩訶男、我、欲は樂無く無量の苦患ありと知り、我如眞を知り已りて、摩訶男、欲の爲に覆はれず、亦惡の爲に纒はれず、すなはち捨樂及び無上息を得。摩訶男、この故に我欲に因りて退轉せず。摩訶男、ある時我王舍城に遊び　(六)鞞哆邏山、仙人七葉屋に住しぬ。摩訶男、我晡時に於て宴坐より起ちて、(七)廣山に往至し、則ち彼の中に於て衆多の尼揵不坐行を行じ、常に立ちて坐せず極重の苦を受くるを見き。我往きて問ひて曰く、「諸の尼揵、汝等何の故にこの不坐行を行じ、常に立ちて坐せず、是の如き苦を受くるやと」。彼[等]是の如く說きぬ、「瞿曇、我[等]に尊師尼揵有り、名づけて　(八)親子と曰ふ。彼則ち我[等]を敎へて是の如き說を作す、諸の尼揵等、汝若し宿命に不善業有らば、この苦行に因が故に必ず當に盡を得べし。若し今身妙行にして護り、口・意妙行にして護れば、これに因緣するが故に、また惡不善の業を作さずと」。摩訶男、我また問ひて曰く「諸の尼揵、汝等尊師を信じ、疑有ること無きやと」。彼また我に答へぬ「是の如し瞿曇、我等尊師を信じて疑惑有ること無しと」。我また問ひて曰く「尼揵、若し爾らば汝等の尊師尼揵、本重ねて惡不善の業を作し、彼本尼揵と作り死して人間に生じ出家して尼揵と作り、不坐行を行じ、常に立ちて坐せず是の如き苦を受くること汝等が輩及び弟子の如きやと」。彼[等]ま

【六】鞞哆邏山(Vebhāra)。巴利文にては(Gijjhakūṭa)靈鷲山、(Isigilipassa)イシギリパッサ、(Kālasilā)黑巖なり。

【七】多分上の黑巖を指す。

【八】親子(Nāthaputta)。

鎧を著け袍を被、矟・弓・箭を持ち、或は刀・楯を執り、往きて他の國を奪ひ、城を攻め塢を破り共に相格戰し、鼓を打ち角を吹き高聲に喚呼し、或は槌を以て打ち或は鉾戟を以てし、或は利輪を以てし或は箭射を以てし、或は石を亂下し或は大弩を以てし、或は融銅珠子を以てこれに灑ぐ。彼[等]鬪ふ時に當り或は死し或は怖れ極重の苦を受く。摩訶男、これを現法の苦陰と謂ひ、欲に因り欲に緣り欲を以て本と爲す。(vi)摩訶男、また次に衆生欲に因り欲に緣り欲を以て本と爲すが故に、鎧を著け袍を被、矟・弓・箭を持ち、或は刀・楯を執りて村に入り邑に入り國に入り城に入り、牆を穿ち藏を發き財物を劫奪し、王路を斷截し、或は他の巷に至り、村を壞し邑を害ひ國を滅し城を破り、中に於て王人の捉ふる所と爲り種々考治し、手を截り足を截り或は手足を截り、耳を截り鼻を截り或は耳鼻を截り、或は臠々に割き、鬚を拔き髮を拔き、或は鬚髮を拔き、或は檻中に著け衣に火を裹みて燒き、或は沙を以て壅ぎ草に纏ひて火に爇き、或は鐵驢の腹中に內れ、或は鐵猪の口中に著け、或は鐵虎の口中に置きて燒き、或は銅釜中に安じ、或は鐵釜中に置きて煮、或は段々に截り、或は利叉もて刺し、或は鐵鉤もて鉤り、或は鐵床に臥せしめ、沸油を以て澆ぐ。或は鐵臼に坐せしめて鐵杵を以て擣き、或は龍蛇蜇し、或は鞭を以て鞭ち、或は杖を以て撾ち、或は棒を以て打ち、或は生きながら高標の上に貫き、或はその首を梟す。彼[等]その中に在りて或は死し或は怖れ極重の苦を受く。摩訶男、これを現法の苦陰と謂ひ、欲に因り欲に緣り欲を以て本と爲す。(vii)摩訶男、また次に衆生欲に因り欲に緣り欲を以て本と爲すが故に、身惡行を行じ、口・意惡行を行ず。後時に於て疾病ありて床に著き或は地に坐臥し、苦身に逼るを以て極重の苦を受け愛樂すべからず。彼若し身惡行・口・意惡行有れば、彼臨終の時前に在りて覆障す。猶は日將に沒せんとし大山巖側の影障地を覆ふがごとし。是の如く彼若し身惡行・口・意惡行有れば前に在りて覆障す。彼この念を作す、「我が本の惡行前に在りて我を覆ふ。我本福業を作さず、多く惡業を作しぬ。若使人有りて惡兇暴を作し唯

姓子、是の如き方便もて是の如き行を作し是の如き求を作し、若し錢財を得ざれば、すなはち憂苦・愁慼・懊惱を生じ、心則ち癡を生じ是の如き說を作す、「唐じく作し唐じく苦しみ求むる所果無しと」。摩訶男、彼の族姓子是の如き方便もて是の如き行を作し、是の如き求を作し、若し錢財を得れば、彼すなはち愛惜し守護し密藏す。所以者何。我がこの財物、王奪ひ賊劫め火燒き腐壞し亡失せしむること莫れ。財を出すも利無く、或は諸業を作して而も成就せずと。彼是の如く守護し密藏するを作す。若し王奪ひ賊劫め火燒き腐壞し亡失せしむれば、彼すなはち憂苦・愁慼・懊惱を生じ、心則ち癡を生じ是の如き說を作す「若し長夜に愛念すべき所の者有れば、彼則ち亡失すと」。摩訶男、是の如く現法の苦陰は欲に因り欲に緣り欲を以て本と爲す。(ii)摩訶男、また次に衆生欲に因り欲に緣り欲を以て本と爲すが故に、母は子と共に諍ひ子は母と共に諍ひ、父子・兄弟・姉妹・親族展轉して共に諍ふ。彼既に是の如く共に鬪諍し已りて、母は子の惡を說き子は母の惡を說き、父子・兄弟・姉妹・親族更に惡を相說く。況やまた他人をや。摩訶男、これを現法の苦陰と謂ひ、欲に因り欲に緣り欲を以て本と爲す。(iii)摩訶男、また次に衆生欲に因り欲に緣り欲を以て本と爲すが故に、王と王と共に諍ひ、梵志と梵志と共に諍ひ、居士と居士と共に諍ひ、民と民と共に諍ひ、國と國と共に諍ふ。彼[等]鬪諍して共に相憎むに因るが故に、種々の器仗を以て轉た害を相加へ、或は拳扠石擲を以てし、或は杖打刀斫を以てす。彼[等]鬪ふ時に當りて或は死し或は怖れ極重の苦を受く。摩訶男、これを現法の苦陰と謂ひ、欲に因り欲に緣り欲を以て本と爲す。(iv)摩訶男、また次に衆生欲に因り欲に緣り欲を以て本と爲すが故に、鎧を著け袍を被、矟・弓・箭を持ち、或は刀・楯を執り、入りて軍陣に在り、或は象を以て鬪ひ、或は馬、或は車、或は步軍を以て、或は男女を以て鬪ふ。彼[等]鬪ふ時に當りて或は死し或は怖れ極重の苦を受く。摩訶男、これを現法の苦陰と謂ひ、欲に因り欲に緣り欲を以て本と爲す。(v)摩訶男、また次に衆生欲に因り欲に緣り欲を以て本と爲すが故に、

丘佛の所説を聞きて歡喜奉行しぬ。

百、苦陰經［下］第四[一]

我が聞きしこと是の如し。ある時佛釋羈瘦[二]に遊び加維羅衞の尼拘類園に在しぬ。その時釋摩訶男[三]中後に彷徉して佛所に往詣し佛足を稽首し却きて一面に坐して白して曰く『世尊、我是の如く世尊の法を知る、「我が心中をして三穢、染心穢・恚心穢・癡心穢を滅するを得しむ」と」。世尊、我是の如くこの法を知る。然るに我が心中また染法・恚法・癡法を生ず。世尊、我この念を作す、「我何の法有りて滅せず、我が心中をして復染法・恚法・癡法を生ぜしむるや」と』。世尊告げて曰はく『摩訶男、汝一法有りて滅せず。謂く汝在家に住して至信に家を捨て家無くして學道せず。摩訶男、若し汝この一法を滅せば汝必ず在家に住せず、必ず至信に家を捨て家無くして學道せん。汝一法滅せざるに因るが故に、在家に住して至信に家を捨て家無くして學道せず』。こゝに於て釋摩訶男即ち坐より起ちて偏に著衣を袒ぎ、叉手を佛に向け世尊に白して曰く『唯願くは世尊、我が爲に法を説き、我をして心淨く疑を除き道を得しめたまへ』。世尊告げて曰く『[四](1)摩訶男、五欲の功德の愛すべく念ずべく」歡喜すべく、欲相應して而も人をして樂しましむるあり。云何が五と爲す。謂く眼色を知り耳聲を知り鼻香を知り舌味を知り身觸を知る。これに由りて王及び王の眷屬をして安樂歡喜を得しむ。摩訶男、極めてこれ欲の味にしてまたこれに過ぐる無く、所患甚だ多し。(2)摩訶男、云何が欲の患なる。[五](i)摩訶男、族姓子はその技術に隨ひて以て自ら存活し、或は田業を作し、或は治生を行じ、或は以て書を學し、或は算術を明かにし、或は工數を知り、或は刻印を巧にし、或は文章を作り、或は手筆を造り、或は經書を曉り、或は勇將と作り、或は王に奉事す。彼寒時は則ち寒く、熱時は則ち熱く、飢渴疲勞し蚊虻に蜇され、是の如き業を作して錢財を求め圖る。摩訶男、此の族

【一】M. 14. Cūla-Dukkhakkhandha-sutta.「佛說釋摩男本四子經」、「佛說苦陰因事經」。「增一阿含」四一品の一。

【二】釋仙瘦、迦維羅衞。尼拘類園に就ては二卷「梵波經」註(三)以下を見よ。

【三】釋摩訶男（Mahānāma Sakka）。摩訶那摩、摩訶南。大名と譯す、この名の人至つて多し。釋氏摩訶男は甘露飯王の子、阿那律の兄なれば釋尊の從弟なり。

【四】欲の味。

【五】欲の患。以下「苦陰經」［上］參照。

答へて曰く『是の如し』。『[七](iv)また次に若し彼の姝の息道の骸骨青色に爛腐し餘半の骨璅地に在るを見るに、汝等の意に於て云何。若し本美色有りしもの、彼滅して患を生ずるや』。答へて曰く『是の如し』。『[八](v)また次に若し彼の姝の息道の皮・肉・血を離れ唯筋のみ相連るを見るに、汝等の意に於て云何。若し本美色有りしもの、彼滅して患を生ずるや』。答へて曰く『是の如し』。『[九](vi)また次に若し彼の姝の息道の骨節解散し諸方に散在し、足骨・髆骨・髀骨・髖骨・脊骨・肩骨・頸骨・髑髏骨 各 異處に在るを見るに、汝等の意に於て云何。若し本美色有りしもの、彼滅して患を生ずるや』。答へて曰く『是の如し』。『[一〇](vii)また次に若し彼の姝の息道の骨白きは螺の如く、青きは猶ほ鴿の色の如く、赤きは血塗れるが若く、腐壞碎末するを見るに、汝等の意に於て云何。若し本美色有りしもの、彼滅して患を生ずるや』。答へて曰く『是の如し』。『これを色の患と謂ふ。(3)云何が色の出要なる。若し色を斷除し色を捨離し色を滅し色盡き色を度るは出要なり。これを色の出要と謂ふ。若し沙門梵志有りて色の味、色の患、色の出要の如眞を知らざれば、彼終に自らその色を斷ずる能はず。況やまた能く他の色を斷ずるをや。若し沙門梵志有りて色の味、色の患、色の出要の如眞を知れば、彼既に自ら能く除き、亦能く他の色を斷ず。(1)云何が覺の味なる。比丘は欲を離れ惡不善の法を離れ[乃至]第四禪を得るに至り成就して遊ぶ。彼その時に於て自ら害するを念ぜず、亦他を害するを念ぜず。若し害を念ぜざれば、これを覺の樂味と謂ふ。所以者何。害を念ぜざればこの樂を成就す。これを覺の味と謂ふ。(2)云何が覺の患なる。覺はこれ無常の法、苦の法、滅の法なり。これを覺の患と謂ふ。(3)云何が覺の出要なる。若し覺を斷除し、覺を捨離し、覺を滅し、覺盡き、覺を度るは出要なり。これを覺の出要と謂ふ。若し沙門梵志有りて覺の味、覺の患、覺の出要の如眞を知らざれば、彼終に自らその覺を斷ずる能はず。況やまた能く他の覺を斷ずるをや。若し沙門梵志有りて覺の味、覺の患、覺の出要の如眞を知れば、彼既に自ら能く除き、亦能く他の覺を斷ず』。佛説是の如し。彼の諸の比

【七】 十八念身の十五。
【八】 十八念身の十六。
【九】 十八念身の十七。
【一〇】 十八念身の十八。
（3）色出要。
（1）覺味。
（2）覺患。
（3）覺出要。

この念を作す、「我が本の惡行前に在りて我を覆ふ。我本福業を作さず、多く惡行を作しぬ。若使人有りて惡凶暴を作し、唯罪を爲し、福を作さず善を行ぜず、畏るゝ所無く、依る所無く、歸する所無く、生處に隨はゞ、我必ず彼に生ぜんと」。これより悔有り。悔ゆれば不善にして死し福無くして命終る。これを現法の苦陰と謂ひ、欲に因り欲に緣り欲を以て本と爲す。また次に衆生欲に因り欲に緣り欲を以て本と爲すが故に、身惡行を行じ、口意惡行を行ず。身口意の惡行に因るが故に、これに因りこれに緣りて身壞れ命終りて必ず惡處に至り地獄の中に生ず。これを後世の苦陰と謂ひ、欲に因り欲に緣り欲を以て本と爲す。これ欲の患と謂ふ。(3)云何が欲の出要なる。若し欲を斷除し欲を捨離し欲を滅し、欲盡き、欲を度るは出要なり。これを欲の出要と謂ふ。若し沙門梵志有りて欲の味、欲の患、欲の出要の如眞を知らざれば、彼終に自らその欲を斷ずる能はず、況やまた能く他の欲を斷ずるをや。若し沙門梵志有りて欲の味、欲の患、欲の出要の如眞を知れば、彼既に自ら能く除き亦能く他の欲を斷ず。(1)云何が色の味なる。若し刹利の女、梵志・居士・工師の女、年十四五なり。彼その時に於て美色最も妙なり。若し彼の美色に因り、彼の美色に緣るが故に樂を生じ喜を生ず。極めてこれ色の味にしてまたこれに過ぐる無く、所患甚だ多し。(2)云何が色の患なる。(i)若し彼の【五】姝而も後時に於て極めて大いに衰老し、頭白く齒落ち背僂み脚戻り杖を拄へて行き、盛壯日に衰へ壽命盡くるに垂とし、身體震動し諸根毀熟するを見るに、汝等の意に於て云何。若し本美色有りしもの、彼滅して患を生ずるや』。答へて曰く『是の如し』。『(ii)また次に若し彼の姝、疾病ありて床に著き或は地に坐臥し、苦身に逼るを以て極重の苦を受くるを見るに、汝等の意に於て云何。若し本美色有りしもの、彼滅して患を生ずるや』。答へて曰く『是の如し』。『【六】(iii)また次に若し彼の姝、死して或は一二日、六七日に至りて烏鵄に啄まれ豺狼に食はれ、火に燒かれ地に埋められ悉く爛腐し壞るゝを見るに、汝等の意に於て云何。若し本美色有りしもの、彼滅して患を生ずるや』。

---

(3)欲出要。

(1)色味。

(2)色患。

【五】美貌の女。

【六】十八念身の十四。二〇巻「念身經」、二四巻「四念處經」を見よ。

に當り、或は死し或は怖れ極重の苦を受く。これを現法の苦陰と謂ひ、欲に因り欲に緣り欲を以て本と爲す。(v)また次に衆生欲に因り欲に緣り欲を以て本と爲すが故に、鎧を著け袍を被、矟・弓・箭を持ち或は刀・楯を執りて往きて他の國を奪ひ、城を攻め塢を破り共に相格戰し、鼓を打ち角を吹き高聲に喚呼し、或は槌を以て打ち或は鉾戟を以てし或は利輪を以てし或は箭射を以てし、或は石を亂下し或は大弩を以てし、或は融銅珠子を以てこれに灑ぐ。彼鬪ふ時に當り、或は死し或は怖れ極重の苦を受く。これを現法の苦陰と謂ひ欲に因り欲に緣り欲を以て本と爲す。(vi)また次に衆生欲に因り欲に緣り欲を以て本と爲が故に鎧を著け袍を被、矟・弓・箭を持ち、或は刀・楯を執り、村に入り邑に入り國に入り城に入り、牆を穿ち藏を發き財物を劫奪し、王路を斷截し、或は他の巷に至り村を壞し邑を害ひ國を滅し城を破り、中に於て或は王人の捉ふる所と爲り種々考治し、手を截り足を截り或は手足を截り、耳を截り鼻を截り或は耳鼻を截り、或は臠々に割き、鬚を拔き髮を拔き或は鬚髮を拔き、或は檻中に著け、衣に火を裹みて燒き、或は沙を以て壅ぎ、或は草に纏ひて火に焫き、或は鐵驢の腹中に內れ、或は鐵猪の口中に著け、或は鐵虎の口中に置きて燒き、或は銅釜中に安じ、或は鐵釜中に著けて煮、或は段々に截り、或は利叉もて刺し或は鐵鈎もて鈎り、或は鐵床に臥せしめ沸油を以て澆ぎ、或は鐵臼に坐せしめて鐵杵を以て擣き、或は龍蛇蜇し、或は鞭を以て鞭ち、或は杖を以て撾ち、或は棒を以て打ち、或は生きながら高標上に貫き、或はその首を梟す。彼その中に於て或は死し或は怖れ極重の苦を受く。これを現法の苦陰と謂ひ、欲に因り欲に緣り欲を以て本と爲す。(vii)また次に衆生欲に因り欲に緣り欲を以て本と爲すが故に、身惡行を行じ口意惡行を行ず。彼後時に於て疾病ありて床に著き或は地に坐臥し、苦身に逼るを以て極重の苦を受け愛樂すべからず。彼若し身惡行・口意惡行有れば、彼臨終の時前に在りて覆障す。猶ほ日將に沒せんとし大山崗側の影障地を覆ふがごとし。是の如く彼若し身惡行・口意惡行有れば前に在りて覆障す。彼

或は算術を明かにし、或は工數を知り、或は刻印を巧にし、或は文章を作り、或は手筆を造り、或は經書を曉り、或は勇將と作り、或は王に奉事す。彼寒時は則ち寒く、熱時は則ち熱く、飢渴疲勞し虻蚊に蜇され、是の如き業を作して錢財を求め圖る。彼の族姓子是の如き方便もて是の如き行を作し是の如き求を作し、若し錢財を得ざれば、すなはち憂苦愁慼懊惱を生じ、心則ち癡を生じて是の如き說を作す、「唐じく作し唐じく苦しみて求むる所果無しと」。彼の族姓子是の如き方便もて是の如き行を作し是の如き求を作し、若し錢財を得れば、彼すなはち愛惜し守護し密藏す。所以者何。「我がこの財物、王奪ひ賊劫め火燒き腐壞し妄失せしむること莫れ。財を出すも利無く、或は諸業を作すも而も成就せずと」。彼是の如く守護し密藏するを作し、若し王奪ひ賊劫め火燒き腐壞し亡失する有れば、すなはち憂苦愁慼懊惱を生じ、心則ち癡を生じて是の如き說を作す、「若し長夜に愛念すべき所の者有れば、彼則ち亡失すと」。これを現法の苦陰と謂ひ、欲に因り欲に緣り欲を以て本と爲す。(ii)また次に衆生欲に因り欲に緣り欲を以て本と爲すが故に、母は子と共に諍ひ、子は母と共に諍ひ、父子・兄弟・姉妹・親族展轉して共に諍ふ。彼既に是の如く共に鬪諍し已りて、母は子の惡を說き、子は母の惡を說き、父子・兄弟・姉妹・親族更に惡を相說く。況やまた他人をや。これを現法の苦陰と謂ひ、欲に因り欲に緣り欲を以て本と爲す。(iii)また次に衆生欲に因り欲に緣り欲を以て本と爲すが故に、王と王と共に諍ひ、梵志と梵志と共に諍ひ、居士と居士と共に諍ひ、民と民と共に諍ひ、國と國と共に諍ひ、彼[等]鬪諍して共に相憎むに因るが故に種々の器仗を以て轉た害を相加へ或は拳扠石擲を以てし、或は杖打刀斫を以てす。彼[等]鬪ふ時に當り、或は死し或は怖れ極重の苦を受く。これを現法の苦陰と謂ひ、欲に因り欲に緣り欲を以て本と爲す。(iv)また次に衆生欲に因り欲に緣り欲を以て本と爲すが故に鎧を著け袍を被、矟・弓・箭を持ち、或は刀・楯を執りて入りて軍陣に在り、或は象を以て鬪ひ、或は馬、或は車、或は步軍を以てし或は男女を以て鬪ふ。彼鬪ふ時

【四】象馬車步の四軍を擧ぐ。

巻の第二十五

九十九、苦陰經〔上〕第三

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時諸の比丘中食後に於て少しく所爲有りて講堂に集まり坐しぬ。ここに於て衆多の異學中後に彷徉して諸の比丘の所に往詣し共に相問訊し却きて一面に坐し、諸の比丘に語ぐ『諸賢、沙門瞿曇は　欲を知斷するを施設し、色を知斷するを施設し、覺を知斷するを施設す。諸賢、我等亦欲を知斷するを施設し、色を知斷するを施設し、覺を知斷するを施設す。沙門瞿曇と我等のこの二知二斷、何の勝る有り、何の差別有りと爲すや』。こゝに於て諸の比丘彼の衆多の異學の所說を聞きて是とせず亦非とせず、默然として起ち去り並にこの念を作しぬ『かくの如き所說は我等當に世尊に從ひて知るを得べしと』。すなはち佛所に詣り稽首して禮を作し却きて一面に坐し、謂ゆる衆多の異學と共に論ずべき所盡く佛に向ひて說きぬ。彼の時世尊諸の比丘に告げたまはく『汝等、即時に應に是の如く衆多の異學に問ふべし、「諸賢、云何が　欲の味なる、云何が欲の患なる、云何が欲の出要なる、云何が色の味なる、云何が色の患なる、云何が色の出要なる。云何が覺の味なる、云何が覺の患なる、云何が覺の出要なると」。諸の比丘、若し汝等是の如き問を作さば、彼等聞き已りてすなはち更に互に相難じ、外の餘事を說き、瞋諍轉た增し、必ず座より起ち默然として退かん。所以者何。我この世・天及び魔・梵・沙門・梵志一切の餘の衆能くこの義を知りて而も發遣する者を見ず。唯、如來と如來の弟子のみ有り或はこれより聞くもの』。佛言はく『(1)云何が欲の味なる。謂く五欲の功德に因りて樂を生じ喜を生ず。極めてこれ欲の味にしてまたこれに過ぐる無く、所患甚だ多し。(2)云何が欲の患なる。(i)族姓子はその伎術に隨ひて以て自ら存活す。或は田業を作し、或は治生を行し、或は以て書を學し、

【一】M. 13. Mahā-Dukkhakkhandha-sutta.「佛說苦陰經」、「增一阿含」二一品の九。

【二】施設知斷欲。「欲を斷ずるを知ることを施設す」、或は「知りて欲を斷ずることを施設す」。巴利文「諸欲を識知することを教ふ」。

【三】欲味(Kāmānaṁ assādo)、患(Ādīnava)、出要(Nissaraṇa)。

(1) 欲味。

(2) 欲患。

尼有りて七日七夜心を立して正に四念處に住すれば、彼必ず二果を得、或は現法に究竟智を得、或は餘有りて阿那含を得。七日七夜・六・五・四・三・二を置き、一日一夜を置き、若し比丘・比丘尼有りて少々須臾の頃心を立して正に四念處に住すれば、彼朝に行じて是の如くなれば暮に必ず昇進するを得、暮に行じて是の如くなれば朝に必ず昇進するを得』。佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第二十四

在り、知有り見有り明有り達有り。これを比丘、法を觀ずること法の如く、謂く內の六處なりと謂ふ。(ii)また次に比丘、法を觀ずること法の如し、比丘は內實に欲有れば欲有りと如眞を知り、內實に欲無ければ欲無しと如眞を知り、若し未だ生ぜざる欲滅し而も生ずれば如眞を知り、若し已に生ぜる欲滅してまた生ぜざれば如眞を知る。是の如く瞋恚・睡眠・調悔［亦然り］。內實に疑有れば疑有りと如眞を知り、內實に疑無ければ疑無しと如眞を知り、若し未だ生ぜざる疑而も生ずれば如眞を知り、若し已に生ぜる疑滅してまた生ぜざれば如眞を知る。是の如く比丘、內法を觀じて法の如く外法を觀じて法の如く、念を立して法に在り、知有り見有り明有り達有り。これを比丘、法を觀ずること法の如く、謂く五蓋なりと謂ふ。(iii)また次に比丘、法を觀ずること法の如し。比丘は[一]內實に念覺支有れば、念覺支有りと如眞を知り、內實に念覺支無ければ念覺支無しと如眞を知り、若し未だ生ぜざる念覺支而も生ずれば如眞を知り、若し已に生ぜる念覺支はすなはち住して忘れず而も衰退せず、轉た修して增廣すれば如眞を知る。是の如く［擇］法・精進・喜・息・定・［亦然り。］比丘は內實に捨覺支有れば捨覺支有りと如眞を知り。內實に捨覺支無ければ捨覺支無しと如眞を知り、若し未だ生ぜざる捨覺支而も生ずれば如眞を知り、若し已に生ぜる捨覺支はすなはち住して忘れず而も衰退せず、轉た修して增廣すれば如眞を知る。是の如く比丘、內法を觀じて法の如く外法を觀じて法の如く、念を立して法に在り、知有り見有り明有り達有り。これを比丘、法を觀ずること法の如く、謂く七覺支なりと謂ふ。若し比丘・比丘尼有りて是の如く少々法を觀ずること法の如くなれば、これを觀法如法念處と謂ふ。[二]若し比丘・比丘尼有りて七年心を立して正に四念處に住すれば、彼必ず二果を得、或は現法に究竟智を得、或は餘有りて阿那含を得。七年・六・五・四・三・二・一年を置き、若し比丘・比丘尼有りて七月心を立して正に四念處に住すれば、彼必ず二果を得、或は現法に究竟智を得、或は餘有りて阿那含を得。七月・六・五・四・三・二・一月を置き、若し比丘・比丘

【一】七覺支に就ては二卷「漏盡經」、八卷「阿修羅經」本文及び註を見よ。

【二】Mi. 62; D. ii. 314.

り見有り明有り達有り。これを比丘、身を觀ずること身の如しと謂ふ。若し比丘・比丘尼、是の如く少々身を觀ずること身の如くなれば、これを觀身如身念處と謂ふ。(2)云何が觀覺如覺念處なる。比丘は樂覺を覺る時すなはち樂覺を覺るを知り、苦覺を覺る時すなはち苦覺を覺るを知り、不苦不樂覺を覺る時すなはち不苦不樂覺を覺るを知り、樂身・苦身・不苦不樂身、樂心・苦心・不苦不樂心、樂食・苦食・不苦不樂食、樂無食・苦無食・不苦不樂無食、樂欲・苦欲・不苦不樂欲、樂無欲［覺］・苦無欲覺［亦然り］・不苦不樂無欲覺を覺る時すなはち不苦不樂無欲覺を覺るを知る。是の如く比丘、內覺を觀じて覺の如く、外覺を觀じて覺の如く、念を立して覺に在り、知有り見有り明有り達有り。これを比丘、覺を觀ずること覺の如しと謂ふ。若し比丘・比丘尼、是の如く少々覺を觀ずること覺の如くなれば、これを觀覺如覺念處と謂ふ。(3)云何が觀心如心念處なる。比丘は〔〇〕欲心有れば欲心有りと如眞を知り、欲心無ければ欲心無しと如眞を知り、有恚・無恚、有癡・無癡、有穢汚・無穢汚、有合・有散、有下・有高、有小・有大、修・不修、定・不定［亦然り］。不解脫心有れば不解脫心の如眞を知り、解脫心有れば解脫心の如眞を知る。是の如く比丘、內心を觀じて心の如く、外心を觀じて心の如く、念を立して心に在り、知有り見有り明有り達有り。これを比丘心を觀ずること心の如しと謂ふ。若し比丘・比丘尼有りて是の如く少々心を觀ずること心の如くなれば、これを觀心如心念處と謂ふ。(4)云何が觀法如法念處なる。(i)眼色に緣りて內結を生ず。比丘は內實に結有れば內結有りと如眞を知り、內實に結無ければ內結無しと如眞を知り、若し未だ生ぜざる內結而も生ずれば如眞を知り、若し已に生ぜる內結滅してまた生ぜざれば如眞を知る。是の如く耳・鼻・舌・身［亦然り］。意法に緣りて內結を生ず。比丘は內實に結有れば內結有りと如眞を知り、內實に結無ければ內結無しと如眞を知り、若し未だ生ぜざる內結而も生ずれば如眞を知り、若し已に生ぜる內結滅してまた生ぜざれば如眞を知る。是の如く比丘、內法を觀じて法の如く外法を觀じて法の如く、念を立して法に

---

(2)　受念處。

(3)　心念處。

【〇】　巴利文「こゝに比丘等よ、比丘もしは染欲ある心は染欲ある心なりと知り、もしは染欲を厭したる心は染欲を厭したる心なりと知る云々」。

(4)　法念處。巴利文は(イ)五蓋(ii)、(ロ)五蘊の四諦、(ハ)十二處(i)、(ニ)七覺支(iii)、(ホ)四聖諦の五を擧ぐ。

有り。これを比丘、身を觀ずること身の如しと謂ふ。(カ)また次に比丘、身を觀ずること身の如し。比丘は彼の死屍、或は一二日、六七日に至り、烏鵄に啄まれ、豺狼に食はれ、火に燒かれ、地に埋められ、悉く腐爛して壞るゝを觀じ、見已りて自ら比す、今我がこの身も亦復是の如く、倶にこの法有りて終に離るゝを得ずと。是の如く比丘、內身を觀じて身の如く外身を觀じて身の如く、念を立して身に在り、知有り見有り明有り達有り。これを比丘、身を觀ずること身の如しと謂ふ。(ヨ)また次に比丘、身を觀ずること身の如し。比丘は本息道の骸骨青色に爛腐し餘半の骨璅地に在るを見るが如し。見已りて自ら比す。今我がこの身も亦復是の如く、倶にこの法有りて終に離るゝを得ずと。是の如く比丘、內身を觀じて身の如く外身を觀じて身の如く、念を立して身に在り、知有り見有り明有り達有り。これを比丘身を觀ずること身の如しと謂ふ。(タ)また次に比丘、身を觀ずること身の如し。比丘は本息道の皮肉血を離れ唯筋のみ相連るを見るが如く、見已りて自ら比す、今我がこの身も亦復是の如く、倶にこの法有りて終に離るゝを得ずと。是の如く比丘內身を觀じて身の如く外身を觀じて身の如く、念を立して身に在り、知有り見有り明有り達有り。これを比丘、身を觀ずること身の如しと謂ふ。(レ)また次に比丘、身を觀ずること身の如し。比丘は本息道の骨節解散して諸方に散在し、足骨・髆骨・髀骨・髖骨・脊骨・肩骨・頸骨・髑髏骨各々異處に在るを見るが如く、見已りて自ら比す、今我がこの身も亦復是の如く、倶にこの法有りて終に離るゝを得ずと。是の如く比丘、內身を觀じて身の如く外身を觀じて身の如く、念を立して身に在り、知有り見有り明有り達有り。これを比丘、身を觀ずること身の如しと謂ふ。(ソ)また次に比丘、身を觀ずること身の如し。比丘は本息道の骨白きは螺の如く青きは猶ほ鴿のごとく、赤きは血塗れるが若く、腐壞し碎粖するを見るが如く、見已りて自ら比す、今我がこの身も亦復是の如く、倶にこの法有りて終に離るゝを得ずと。是の如く比丘、內身を觀じて身の如く外身を觀じて身の如く、念を立して身に在り、知有

【七】息道に就ては、二〇卷「念身經」註〔六〕を見よ。
【八】髀骨は、腿の骨。
【九】髖骨は、腰の骨。

ること身の如し。比丘は光明想を念じ善く受け善く持し善く所念を憶ひ、前の如く後亦然り、後の如く前亦然り、晝の如く夜亦然り、夜の如く晝亦然り、下の如く上亦然り、上の如く下亦然り。是の如く顚倒せず、心纏有ること無く、光明心を修し心終に闇の覆ふ所と爲らず。是の如く比丘、內身を觀じて身の如く外身を觀じて身の如く、念を立して身に在り、知有り見有り明有り達有り。これを比丘、身を觀ずること身の如しと謂ふ。(ル)また次に比丘、身を觀ずること身の如し。善く觀相を受け善く所念を憶ふ。猶ほ人有りて坐して臥人を觀じ、臥して坐人を觀ずるが如し。是の如く比丘善く觀相を受け善く所念を憶ふ。是の如く比丘內身を觀じて身の如く外身を觀じて身の如く、念を立して身に在り、知有り見有り明有り達有り。これ比丘身を觀ずること身の如しと謂ふ。(ヲ)また次に比丘、身を觀ずること身の如し。比丘はこの身住するに隨ひその好惡に隨ひ、頭より足に至るまで種々の不淨充滿するを觀見す、我がこの身中、[五]髮・髦・爪・齒・麁細薄膚・皮・肉・筋・骨・心・腎・肝・肺・大腸・小腸・脾・胃・摶糞・腦及び腦根・淚・汗・涕・唾・膿・血・肪・髓・涎・膽・小便有りと。猶ほ器に若干の種子を盛るが如し。有目の士悉く見て分明す、謂く稻粟種蔓菁芥子なり。是の如く比丘、この身住するに隨ひ、その好惡に隨ひ、頭より足に至るまで種々の不淨充滿するを觀見す、我がこの身中、髮・髦・爪・齒・麁細薄膚・皮・肉・筋・骨・心・腎・肝・肺・大腸・小腸・脾・胃・摶糞・腦及び腦根・淚・汗・涕・唾・膿・血・肪・髓・涎・膽・小便有りと。是の如く比丘內身を觀じて身の如く外身を觀じて身の如く、念を立して身に在り、知有り見有り明有り達有り。これ比丘、身を觀ずること身の如しと謂ふ。(ワ)また次に比丘、身を觀ずること身の如し。比丘は身の諸の[六]界を觀ず、我がこの身中、地界・水界・火界・風界・空界・識界有りと。猶ほ屠兒牛を殺し皮を剝ぎて地に布き上に於て分ちて六段と作すが如し。是の如く比丘、身の諸の界を觀ず、我がこの身中、地界・水界・火界・風界・空界・識界ありと。是の如く比丘、內身を觀じて身の如く外身を觀じて身の如く、念を立して身に在り、知有り見有り明有り達

【五】三十二分身に就て二〇卷、念身經註〔五〕を見よ。

【六】界(Dhātu)。大、卽ち元素なり。

く充滿し、この身中に於て離より生ずる喜樂、處として遍からざる無し。是の如く比丘內身を觀じて身の如く外身を觀じて身の如く、念を立して身に在り、知有り見有り明有り達有り。これを比丘身を觀ずること身の如しと謂ふ。(ト)また次に比丘、身を觀ずること身の如し。比丘は定より生ずる喜樂身に漬り潤澤普遍く充滿し、この身中に於て定より生ずる喜樂、處として遍からざる無し。猶ほ山泉の如し。淸淨にして濁らず、充滿流溢し、四方より水來るも、緣より入るを得る無く、卽ち彼の泉底水自ら涌出し、外に流溢し、山を漬し潤澤普遍く充滿し處として周からざる無し。是の如く比丘、定より生ずる喜樂身に漬り潤澤普遍く充滿し、この身中に於て定より生ずる喜樂處として遍からざる無し。是の如く比丘、內身を觀じて身の如く外身を觀じて身の如く、念を立して身に在り、知有り見有り明有り達有り。これを比丘身を觀ずること身の如しと謂ふ。(チ)また次に比丘身を觀ずること身の如し。比丘は無喜より生ずる樂身を漬し潤澤普遍く充滿し、この身中に於て無喜より生ずる樂、處として遍からざる無し。猶ほ青蓮華・紅・赤・白蓮水に生じ水に長じ水底に有りて、彼の根莖・華葉悉く漬り潤澤普遍く充滿し處として周からざる無きがごとし。是の如く比丘無喜より生ずる樂身を漬し潤澤普遍く充滿し、この身中に於て無喜より生ずる樂、處として遍からざる無し。是の如く比丘、內身を觀じて身の如く外身を觀じて身の如く、念を立して身に在り、知有り見有り明有り達有り。これを比丘身を觀ずること身の如しと謂ふ。(リ)また次に比丘、身を觀ずること身の如し。比丘はこの身中に於て淸淨心を以て意解遍滿し成就して遊ぶ。この身中に於て淸淨心を以て處として遍からざる無し。猶ほ一人有りて七肘衣或は八肘衣を被、頭より足に至るまでその身體に於て處として覆はざる無きがごとし。是の如く比丘この身中に於て淸淨心を以て處として遍からざる無し。是の如く比丘、內身を觀じて身の如く外身を觀じて身の如く、念を立して身に在り、知有り見有り明有り達有り。これを比丘、身を觀ずること身の如しと謂ふ。(ヌ)また次に比丘、身を觀ず

入を知り、善く觀じ分別し、屈伸・低昂儀容庠序たり、善く僧伽梨及び諸の衣鉢を著け、行住・坐臥・眠寤・語默皆正にこれを知る。是の如く比丘、內身を觀じて身の如く外身を觀じて身の如く、念を立して身に在り、知有り見有り明有り達有り。これを比丘身を觀ずること身の如しと謂ふ。(ハ)また次に比丘、身を觀ずること身の如し。比丘は惡不善の念を生ぜば善法念を以て治斷滅止す。猶ほ木工師・木工弟子・彼墨繩を持ちて用て木に拼へば則ち利斧を以て斫治して直ならしむるがごとし。是くの如く比丘惡不善の念を生ぜば善法念を以て治斷滅止す。是の如く比丘、內身を觀ずること身の如く、外身を觀ずること身の如く、念を立して身に在り、知有り見有り明有り達有り、これを比丘身を觀ずること身の如しと謂ふ。(ニ)また次に比丘、身を觀ずること身の如し。比丘は齒々相著け舌上齶に逼り、心を以て心を治め治斷滅止す。猶ほ二力士一羸人を捉へ、處々捉旋し自在に打ち鍛ふるがごとし。是の如く比丘、齒々相著け舌上齶に逼り、心を以て心を治め治斷滅止す。是の如く比丘內身を觀じて身の如く外身を觀じて身の如く、念を立して身に在り、知有り見有り明有り達有り。これを比丘身を觀ずること身の如しと謂ふ。(ホ)また次に比丘、身を觀ずること身の如し。比丘は入息を念じて卽ち入息を念ずるを知り、出息を念じて卽ち出息を念ずるを知り、入息長ければ卽ち入息長しと知り、出息長ければ卽ち出息長しと知り、入息短ければ卽ち入息短しと知り、出息短ければ卽ち出息短しと知り、一切の身息入を覺り一切の身息出を覺り、(四)止身行息入を學し、止口行息出を學す。是の如く比丘、內身を觀じて身の如く、外身を觀じて身の如く、念を立して身に在り、知有り見有り明有り達有り。これを比丘身を觀ずること身の如しと謂ふ。(ヘ)また次に比丘、身を觀ずること身の如し。比丘は離より生ずる喜樂、身を漬し潤澤普遍く充滿す。この身中に於て離より生ずる喜樂處として遍からざる無し。猶ほ工浴の人器に澡豆を盛るに水和して摶を成し水漬り潤澤普遍く充滿し處として周からざる無きがごとし。是の如く比丘は離より生ずる喜樂身を漬し潤澤普遍

【四】學止身行息入、學止口行息出とは、身行を止めて息を吸ふことを習ひ、口行を止めて息を吐くことを習ふなり。

に成就して遊ぶ。これを第六解脱と謂ふ。また次に一切無所有處を度り、非有想非無想處、この非有想非無想處に成就して遊ぶ。これを第七解脱と謂ふ。また次に一切非有想非無想處想を度り、滅解脱身に作證し成就して遊ぶと知り、及び慧もて觀じ諸漏盡くと知る。これを第八解脱と謂ふ。阿難、若し比丘有り、彼七識住及び二處［に於て］如眞を知り、心染著せず解脱を得、及びこの八解脱、順に逆に身に作證し成就して遊び、亦慧もて觀じ諸漏盡くれば、これを比丘阿羅訶にして[五〇]倶解脱と名づくと謂ふ』。佛說是の如し。尊者阿難及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

九十八、念處經第二

我が聞きしこと是の如し。ある時佛拘樓瘦に遊び劒磨瑟曇なる拘樓の都邑に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『[一]一道[二]有りて衆生を淨め憂畏を度し苦惱を滅し啼哭を斷じ正法を得しむ。謂く四念處なり。若し過去の諸の如來・無所著・等正覺有れば、悉く[三]五蓋・心穢・慧羸を斷じ、心を立して正に四念處に住し、七覺支を修し、無上正盡の覺を覺るを得き。若し未來の諸の如來・無所著・等正覺有れば、悉く五蓋・心穢・慧羸を斷じ、心を立して正に四念處に住し、七覺支を修し、無上正盡の覺を覺るを得ん。我今現在、如來・無所著・等正覺たり。我亦五蓋・心穢・慧羸を斷じ、心を立し正に四念處に住し、七覺支を修し、無上正盡の覺を覺るを得き。云何が四と爲す。觀身如身念處、是の如く觀覺・心・法如法念處なり。(1)云何が觀身如身念處なる。(イ)比丘は行けば則ち行くを知り、住まれば則ち住まるを知り、坐すれば則ち坐するを知り、臥すれば則ち臥するを知り、眠れば則ち眠るを知り、寤むれば則ち寤むるを知り、眠寤むれば則ち眠寤むるを知る。是の如く比丘內身を觀じて身の如く、外身を觀じて身の如く、念を立して身に在り、知有り見有り明有り達有り。これを比丘身を觀ずること身の如しと謂ふ。(ロ)また次に比丘、身を觀ずること身の如し。比丘は正に出

【五〇】 倶解脱（Ubhato bhāgavimutta）。

【一】 M. 10, Satipaṭṭhāna-sutta, D. 22, Mahā-satipaṭṭhāna-suttanta. 「增一阿含」一二品の一。

【二】 巴利文「比丘等よ、この唯一趣向の道、卽ち四の念處は衆生を淨くするため、悲哀を越ゆるため、憂苦を盡くすため、智慧を獲るため、涅槃を實證するためのものなり」。eka+āyana+magga 一條の道、一筋路又は唯一のものへ趣くべき道。『增一』にては「一入道」、『雜阿含』（一九卷の三二經等）にては「一乘道」、これは eka+yāna+magga と解したるなり。

【三】 五蓋は、貪欲・瞋恚・睡眠・掉悔・疑の五にて、心性を蓋うて善法を生ぜざらしむるもの。

(1) 身念處。十八念身、以下二〇卷「念身經」と同じ。巴利文はこの十八念身の中（ホ）、（イ）、（ロ）、（ヲ）、（ワ）、（カ）、（レ）、（ソ）、の八のみを擧ぐ。

知り識住の習を知り滅を知り味を知り患を知り出要の如眞を知れば、阿難、この比丘寧ろ彼の識住に計著し彼の識住に住するを樂ふべきや』。答へて曰く『不なり』。『阿難、第六識住は無色衆生、一切無量空處を度り、無量識處、この識處に成就して遊ぶ。謂く無量識處天なり。若し比丘有りて彼の識住を知り識住の習を知り滅を知り味を知り患を知り出要の如眞を知れば、阿難、この比丘寧ろ彼の識住に計著し彼の識住に住するを樂ふべきや』。答へて曰く『不なり』。『阿難、第七識住は無色衆生にして一切無量識處を度り、無所有處、この無所有處に成就して遊ぶ。謂く無所有處天なり。若し比丘彼の識住を知り識住の習を知り滅を知り味を知り患を知り出要の如眞を知れば、阿難、この比丘寧ろ彼の識住に計著し彼の識住に住するを樂ふべきや』。答へて曰く『不なり』。『阿難、第一處は有色衆生、無想無覺なり。謂く無想天なり。若し比丘有りて彼の處を知り彼の處の習を知り滅を知り味を知り患を知り出要の如眞を知れば、阿難、この比丘寧ろ彼の處に計著し彼の處に住するを樂ふべきや』。答へて曰く『不なり』。阿難、第二處は無色衆生、一切無所有處を度り、非有想非無想處、この非有想非無想處に成就して遊ぶ。謂く非有想非無想處天なり。若し比丘有りて彼の處を知り彼の處の習を知り滅を知り味を知り患を知り出要の如眞を知れば、阿難、この比丘寧ろ彼の處に計著し彼の處に住するを樂ふべきや』。答へて曰く『不なり』。『阿難、若し比丘有りて彼の七識住及び二處〔に於て〕如眞を知り心染著せずして解脱を得れば、これを比丘阿羅訶にして慧解脱と名づくと謂ふ。[四八] また次に阿難、八解脱有り。云何が八と爲す。[四九]色色を觀る。これを第一解脱と謂ふ。また次に內色想無くして外色を觀る。これを第二解脱と謂ふ。また次に淨解脱身に作證し成就して遊ぶ。これを第三解脱と謂ふ。また次に一切色想を度り有對想を滅し、若干想を念ぜず、無量空處、この無量空處に成就して遊ぶ。これを第四解脱と謂ふ。また次に一切無量空處を度り、無量識處、この無量識處に成就して遊ぶ。これを第五解脱と謂ふ。また次に一切無量識處を度り、無所有處、この無所有處

〔四八〕 D. ii. 70—71 (§35)。
〔四九〕 色觀色(Rūpī rūpāni passati)。

これを第四識住と謂ふ。また次に阿難、無色衆生有りて一切色想を度り、[四〇]有對想を滅し若干想を念ぜず、無量空處、この空處に成就して遊ぶ。謂く[四一]無量空處天なり。これを第五識住と謂ふ。また次に阿難、無色衆生有りて一切無量空處を度り、無量識處、この識處に成就して遊ぶ。謂く[四二]無量識處天なり。これを第六識住と謂ふ。また次に阿難、無色衆生有りて一切無量識處を度り無所有處、この無所有處に成就して遊ぶ。謂く[四三]無所有處天なり。これを第七識住と謂ふ。阿難、云何が二處有りや。色衆生有りて無想無覺なり。謂く[四四]無想天なり。これを第一處と謂ふ。また次に阿難、無色衆生有りて一切無所有處を度り、[四五]非有想非無想處、この非有想非無想處に成就して遊ぶ。謂く非有想非無相處天なり。これを第二處と謂ふ。[四六]阿難、第一識住は色衆生有り、若干身若干想にして謂く人及び欲天なり。若し比丘有りて彼の識住を知り、識住の[四七]習を知り、滅を知り、味を知り、患を知り、出要の如眞を知れば、阿難、この比丘寧ろ彼の識住に計著し彼の識住に住するを樂ふべきや』。答へて曰く『不なり』。『阿難、第二識住は色衆生有り若干身一想なり。謂く梵天初めて生じて夭壽ならず。若し比丘有りて彼の識住を知り識住の習を知り滅を知り味を知り患を知り出要の如眞を知れば、阿難、この比丘寧ろ彼の識住に計著し彼の識住に住するを樂ふべきや』。答へて曰く『不なり』。『阿難、第三識住は色衆生有り一身若干想なり。謂く晃昱天なり。若し比丘有りて彼の識住を知り識住の習を知り滅を知り味を知り患を知り出要の如眞を知れば、阿難、この比丘寧ろ彼の識住に計著し彼の識住に住するを樂ふべきや』。答へて曰く『不なり』。『阿難、第四識住は色衆生有り一身一想なり。謂く遍淨天なり。若し比丘有りて彼の識住を知り識住の習を知り滅を知り味を知り患を知り出要の如眞を知れば、阿難、この比丘寧ろ彼の識住に計著し彼の識住に住するを樂ふべきや』。答へて曰く『不なり』。『阿難、第五識住は無色衆生、一切色想を度り、有對想を滅し、若干想を念ぜず、無量空處、この空處に成就して遊ぶ。謂く無量空處天なり。若し比丘有りて彼の識住を

【四〇】有對想(Paṭighasaññā)。
【四一】無量空處(Ākāsānañcāyatana)。空無邊處。
【四二】無量識處(Viññāṇañcāyatana)。識無邊處。
【四三】無所有處(Ākiñcaññāyatana)。
【四四】無想天(Asaññasattā)。
【四五】非有想非無想處(Nevasaññānāsaññāyatana)。
【四六】D. ii. 69—70 (§34)。
【四七】習(Samudaya)、滅(Atthaṅgama)、味(Assāda)、患(Ādīnava)、出要(Nissaraṇa)。

も施設し、身壞れ命終りて亦是の如く說かず、亦是の如く見ず。有神若し少色を離るる時、亦是の如く思はず。亦是の如き念を作さず。阿難、是の如く一有りて非少色これ神なりと施設して而も施設す。是の如く一有りて非少色これ神なりと見ずして著して而も著す。(2)阿難、若しまた一有りて非無量色これ神なりと施設して而も施設すれば、彼今無量色に非ずしてこれ神なりと施設して而も施設し、身壞れ命終りて亦是の如く說かず、亦是の如く見ず。有神若し無量色を離るゝ時、亦是の如く是の如く思はず。亦是の如き念を作さず。阿難、是の如く一有りて非無量色これ神なりと施設して而も施設す。是の如く一有りて非無量色これ神なりと見ずして著して而も著す。(3)阿難、若しまた一有りて非少無色これ神なりと施設して而も施設すれば、彼今少無色に非ずしてこれ神なりと施設して而も施設し、身壞れ命終りて亦是の如く說かず、亦是の如く見ず。有神若し少無色を離るる時、亦是の如く是の如く思はず。亦是の如き念を作さず。阿難、是の如く一有りて非少無色これ神なりと施設して而も施設す。是の如く一有りて非少無色これ神なりと見ずして著して而も著す。(4)阿難、若しまた一有りて非無量無色これ神なりと施設して而も施設すれば、彼今無量無色に非ずしてこれ神なりと施設して而も施設し、身壞れ命終りて亦是の如く說かず、亦是の如く見ず。有神若し無量無色を離るゝ時、亦是の如く是の如く思はず。亦是の如き念を作さず。阿難、是の如く一有りて非無量無色これ神なりと施設して而も施設す。是の如く一有りて非無量無色これ神なりと見ずして著して而も著す。阿難、これを一有りて神無しと施設して而も施設すと謂ふ。[三四]また次に阿難、[三五]七識住及び[三六]二處有り。云何が七識住なる。色衆生有りて若干身、若干想なり、謂く[三七]人及び欲天なり。これを第一識住と謂ふ。また次に阿難、色衆生有りて若干身一想なり。謂く梵天初めて生じて夭壽ならず。これを第二識住と謂ふ。また次に阿難、色衆生有りて一身若干想なり、謂く[三八]晃昱天なり。これを第三識住と謂ふ。また次に阿難、色衆生有りて一身一想なり。謂く[三九]遍淨天なり。

【三四】D. ii. 68—70 (§§33, 34)。
【三五】七識住(Satta viññāṇa-ṭṭhiyo)。
【三六】二處(Dve āyatanāni)。
【三七】巴利文にては「人・ある天・ある墮惡趣者」。
【三八】晃昱天(Ābhassarā devā)。光音天なり。
【三九】遍淨天(Subhakiṇhā devā)。

の如く說き亦是の如く見る。有神若し無量色を離るる時亦是の如く是の如く思ふ。彼是の如き念を作す。阿難、是の如く一有りて無量色これ神なりと施設して而も施設す。是の如く無量色これ神なりと見て著して而も著す。(3)阿難、若しまた一有りて非少色これ神なりと施設して而も施設し、亦非無量色これ神なりと施設して而も施設し、少無色これ神なりと施設して而も施設すれば、彼今少無色にしてこれ神なりと施設して而も施設し、身壞れ命終りて亦是の如く說き是の如く見る。有神若し少無色を離るゝ時、亦是の如く是の如く思ふ。彼是の如き念を作す。阿難、是の如く一有りて少無色これ神なりと施設して而も施設す。是の如く一有りて少無色これ神なりと見て著して而も著す。(4)阿難、若しまた一有りて非少色これ神なりと施設して而も施設し、亦非無量色これ神なりと施設して而も施設し、亦非少無色これ神なりと施設して而も施設し、無量無色これ神なりと施設して而も施設すれば、彼今無量無色にしてこれ神なりと施設して而も施設し、身壞れ命終りて亦是の如く說き亦是の如く見る。有神若し無量無色を離るゝ時亦是の如く是の如く思ふ。彼是の如き念を作す。阿難、是の如く一有りて無量無色これ神なりと施設して而も施設す。是の如く一有りて無量無色これ神なりと見て著して而も著す。これを一有りて神有りと施設して而も施設すと謂ふ。阿難、云何が一有りて神無しと施設して而も施設するや』。尊者阿難世尊に白して曰く『世尊を法本と爲し、世尊を法主と爲し、法は世尊に由る。唯願はくはこれを說きたまへ。我今聞き已りて廣く義を知るを得ん』。佛すなはち告げて曰はく『阿難、諦かに聽き、善くこれを思念せよ。我當に汝が爲にその義を分別せん』。尊者阿難敎を受けて而も聽きぬ。佛言はく[三]『阿難、(1)或は一有りて非少色これ神なりと施設して而も施設し、(2)亦非無量色これ神なりと施設して而も施設し、(3)亦非少無色これ神なりと施設して而も施設し、(4)亦非無量無色これ神なりと施設して而も施設す。(1)阿難、若し一有りて非少色これ神なりと施設して而も施設すれば、彼今少色に非ずしてこれ神なりと施設して而

【三】 D. ii. 65—66 (§§25, 26)。

覺無しと見ず。彼是の如く見ず已りて則ちこの世間を受けず。彼受けず、已りて則ち疲勞せず。疲勞せず已りてすなはち般涅槃し、我生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ更に有を受けずと如眞を知る。阿難、これを增す語り、增す語り說き傳へ、傳へ說きて有を施設すべしと謂ふ。これを知れば則ち所受無けん。阿難、若し比丘是の如く正解脫すれば、これまた(1)如來終ると見、(2)如來終らずと見、(3)如來終り終らずと見、(4)如來亦終るに非ず亦終らざるに非ずと見ること有らず。これを一有りて神有りと見ずと謂ふ。阿難、云何が一有りて神有りと施設して而も施設するや』。尊者阿難世尊に白して曰く『世尊を法本と爲し、世尊を法主と爲し、法は世尊に由る。唯願はくはこれを說きたまへ。我今聞き已りて廣く義を知るを得ん。』佛すなはち告げて曰はく『阿難、諦かに聽け、善くこれを思念せよ。我當に汝が爲にその義を分別すべし』。尊者阿難教を受けて而も聽きぬ。佛言はく『[三]阿難、(1)或は一有りて少色、これ神なりと施設して而も施設す。(2)或はまた一有りて非少色、これ神なりと施設して而も施設す。無量色、これ神なりと施設して而も施設す。(3)或はまた一有りて非少色これ神なりと施設して而も施設し、亦非無量色これ神なりと施設して而も施設し、少無色これ神なりと施設して而も施設す。(4)或はまた一有りて非少色これ神なりと施設して而も施設し、亦非無量色これ神なりと施設して而も施設し、亦非少無色これ神なりと施設して而も施設し、無量無色これ神なりと施設して而も施設す。(1)阿難、若し一有りて少色これ神なりと施設して而も施設すれば、彼今少色にしてこれ神なりと施設して而も施設し、身壞れ命終りて亦是の如く說き亦是の如く見る。有神若し少色を離るゝ時亦是の如く是の如く思ふ。彼是の如き念を作す。阿難、是の如く一有りて少色これ神なりと施設して而も施設す。是の如く一有りて少色これ神なりと見て著して而も著す。(2)阿難、若しまた一有りて非少色これ神なりと施設し而も施設し、無量色これ神なりと施設して而も施設すれば、彼今無量色にしてこれ神なりと施設して而も施設し、身壞れ命終りて亦是

【三】 D. ii. 64 65(§23, 24)。

於て唯苦覺を覺る。苦覺はこれ無常の法、苦の法、滅の法なり。若し苦覺已に滅すれば、彼、その時に於て、神滅すと爲すに非ずと、この念を作さざるや。(iii)阿難、若しまた一覺不苦不樂覺有れば、彼その時に於て二覺〔即ち〕樂覺苦覺滅す。彼その時に於て唯不苦不樂覺を覺る。不苦不樂覺はこれ無常の法、苦の法、滅の法なり。若し不苦不樂覺已に滅すれば、彼、神滅すと爲すに非ずと、この念を作さざるやと。阿難、彼の是の如き無常の法但苦樂を離る。當にまた覺はこれ神なりと見るべきや』。答へて曰く『不なり』。『阿難、この故に彼の是の如き無常の法、但苦樂を離る。應にまた覺はこれ神なりと見るべからず。(2)阿難、若しまた一有りて覺これ神なりと見ず、然も神能く覺り神法能く覺ると見れば、應當に彼に語ぐべし、汝若し覺無くば、覺得べからず、應にこれ我が所有なりと說くべからずと。阿難、彼當にまた是の如く覺これ神ならずと見、然も神能く覺り、神法能く覺るを見るべきや』。答へて曰く『不なり』。『阿難、この故に彼應に是の如く覺は神に非ずと見、神能く覺り、神法能く覺ると見るべからず。(3)阿難、若しまた一有りて覺これ神なりと見ず、亦神能く覺り然も神法能く覺ると見ず、但神に所覺無しと見れば、應當に彼に語ぐべし、汝若し覺無くば都て得べからず。神覺を離るれば、應に神淸淨なるべからずと。阿難、彼當にまた覺は神に非ずと見、亦神能く覺り、神法能く覺ると見ず、但神に所覺無しと見るべきや』と答へて曰く『不なり』。『阿難、この故に彼應に是の如く覺は神に非ずと見、亦神能く覺り神法能く覺ると見ず、但神に所覺無しと見るべからず。これを一有りて神有りと見ると謂ふ。阿難、云何が一有りて神有りと見ざるや』。尊者阿難世尊に白して曰く『世尊を法本と爲し、世尊を法主と爲し、法は世尊に由る。唯願はくはこれを說きたまへ。我今聞き已りて廣く義を知るを得ん』。佛すなはち告げて曰はく『阿難、諦かに聽け、善くこれを思念せよ。我當に汝が爲にその義を分別すべし』。尊者阿難教を受けて而も聽きぬ。佛言はく『[三]阿難、或は一有りて覺はこれ神なりと見ず、亦神能く覺り然も神法能く覺ると見ず、亦神に所

〔三〕 D. ii. 68 (§32)。

へて曰く『不なり』。『阿難、この故に當に知るべし、この名色の因、名色の習、名色の本、名色の緣は、謂くこれ識なりと。所以者何。識に緣るが故に則ち名色有り。(4)阿難、若し問者有りて識に緣有りやと[問はゞ]、當に是の如く答ふべし、識に亦緣有りと。若し問者有りて識に何の緣有りやと[問はゞ]、當に是の如く答ふべし、名色に緣ると。當に知るべし、所謂名色に緣りて識有りと。阿難、若し識名色を得ず、若し識名色に立たず倚らざれば、識寧ろ生有り老有り病有り死有り苦有りや』。答へて曰く『無きなり』。阿難、この故に當に知るべし、この識の因、識の習、識の本、識の緣は、謂くこれ名色なりと。所以者何。名色に緣るが故に則ち識有り。阿難、これ名色に緣りて識有り、識に緣りて亦名色有りと爲す。これに由りて增す語り、增す語りて說き傳へ、傳へ說きて、謂く識、名色共に倶に有りと施設すべし。阿難、云何が一有りて[二九]神有りと見るや』。尊者阿難世尊に白して曰く『世尊を法本と爲し、世尊を法主と爲し、法は世尊に由る。唯願はくはこれを說きたまへ。我今聞き已りて廣く義を知るを得ん』。佛すなはち告げて曰はく『阿難、諦かに聽け、善くこれを思念せよ。我當に汝が爲にその義を分別すべし』。尊者阿難、教を受けて而も聽きぬ。佛言はく[三〇]『阿難、(1)或は一有りて覺これ神なりと見、(2)或はまた一有りて覺これ神なりと見ず、神能く覺り、然も神法能く覺ると見、(3)或はまた一有りて覺はこれ神なりと見ず、亦神能く覺り然も神法能く覺ると見ず、但神覺る所無しと說く。(1)阿難、若し一有りて覺はこれ神なりと見ば應當に彼に問ふべし、汝、三覺、樂覺・苦覺・不苦不樂覺有り、汝この三覺、何れの覺これ神なりと見ると爲すやと。阿難、當にまた彼に語ぐべし。(i)若し樂覺を覺る有れば、彼その時に於て二覺[卽ち]苦覺・不苦不樂覺滅す。彼その時に於て唯樂覺を覺る。樂覺はこれ無常の法なり、苦の法なり滅の法なり。若し樂覺已に滅すれば、彼、神滅すと爲すに非ずと、この念を作さざるや。(ii)阿難、若しまた一覺苦覺有れば、彼その時に於て二覺[卽ち]樂覺・不苦不樂覺滅す。彼その時に

【二九】神(Attā)。

【三〇】D. ii. 66—68 (§§27—31)。

阿難、欲愛[二二]及び有愛、この二法は覺に因り覺に緣りて致來す。(1)阿難、若し問者有りて覺に緣有りやと[問はゞ]、當に是の如く答ふべし、覺に亦緣有りと。若し問者有りて覺に何の緣有りやと[問はゞ]、當に是の如く答ふべし、更樂に緣ると。當に知るべし、所謂更樂に緣りて覺有りと。阿難、若し眼更樂[二三]有ること無く各々眼更樂無くば、設使眼更樂を離るゝも當に眼更樂に緣りて樂覺・苦覺・不苦不樂覺を生ずること有るべきや』。答へて曰く『無きなり』。『阿難、若し耳・鼻・舌・身・意更樂無く、各々[二四] 意更樂無くば設使意更樂を離るゝも當に意更樂に緣りて樂覺・苦覺・不苦不樂覺を生ずること有るべきや』。答へて曰く『無きなり』。『阿難、この故に當に知るべし、この覺の因、覺の習、覺の本、覺の緣は謂くこれ更樂なりと。所以者何。更樂に緣るが故に則ち覺有り。(2)阿難、若し問者有りて更樂に緣有りやと[問はゞ]、當に是の如く答ふべし、更樂に緣有りと。若し問者有りて更樂に何の緣有りやと[問はゞ]、當に是の如く答ふべし、名色[二五]に緣ると。當に知るべし、所謂名色に緣りて更樂有りと。[二六]阿難、所行所緣に名身有り。この行を離れこの緣を離るゝも有對の更樂有りや』。答へて曰く『無きなり』。『阿難、所行所緣に色身有り。この行を離れこの緣を離るゝも 增語[二七]更樂有りや』。答へて曰く『無きなり』。『設使名身及び色身を離るゝも、當に更樂有り、更樂を施設すべきや』。答へて曰く『無きなり』。『阿難、この故に當に知るべし、この更樂の因、更樂の習、更樂の本、更樂の緣は、謂くこれ名色なりと。所以者何、名色に緣るが故に則ち更樂有り。(3)阿難、若し問者有りて名色に緣有りやと[問はゞ]、當に是の如く答ふべし、名色に緣有りと。若し問者有りて名色に何の緣有りやと[問はゞ]、當に是の如く答ふべし、識[二八]に緣ると。當に知るべし、所謂識に緣りて名色有りと。阿難、若し識母胎に入らざれば、名色有り、この身を成すや』。答へて曰く『無きなり』。『阿難、若し識胎に入りて卽ち出づれば、名色精に會すや』。答へて曰く『會せず』。『阿難、若し幼き童男童女の識、初めて斷壞して有らざれば、名色轉た增長するや』。答

【二二】 欲愛(Kāma-taṇhā)、有愛(Bhava-taṇhā)。前者は感官の欲望、卽ち目に見、耳に聞くものに對して起すもの。後者は生存に對する欲望。巴利文「斯くして阿難陀よ、これ等二の法は二ながら受よりして一となりて起り出るものなり」。漢文に「覺」とあるは「受」に當り、「更樂」とあるは「觸」に當る。

【二三】 眼更樂(Cakkhu-samphassa)。卽ち眼觸なり。

【二四】 「各々」の次に「耳・鼻・舌・身」の四字ある心持にて讀むべし、以下これに倣ひて知れ。

【二五】 名色(Nāma-rūpa)。

【二六】 巴利文「阿難陀よ、或方法により、相印により、特徵により、指摘によりて名身の施設あり。若しこれ等の方法・相印・特徵・指摘なくば名身の上に指名の觸あるきべきや」。

【二七】 增語更樂(Adhivacana-samphassa)。リス・デビヅ教授は Any manifestation of a corresponding verbal impression とす。

【二八】 識(Viññāṇa)。

に知るべし、所謂著に緣りて慳有りと。阿難、若し著無く各々著無くば、設使著を離るゝも當に慳有るべきや』。答へて曰く『無きなり』。『阿難、この故に當に知るべし、この慳の因、慳の習、慳の本、慳の緣は、謂くこれ著なりと。所以者何。著に緣るが故に則ち慳有り。(4)阿難、欲に緣りて著有りとはこれ欲に緣りて著有りと說く。當に知るべし、所謂欲に緣りて著有りと。阿難、若し欲無く各各欲無くば、設使欲を離るゝも當に著有るべきや』。答へて曰く『無きなり』。『阿難、この故に當に知るべし、この著の因、著の習、著の本、著の緣は、謂くこれ欲なりと。所以者何。欲に緣るが故に則ち著有り。(5)阿難、分に緣りて染欲有りとはこれ分に緣りて染欲有りと說く。當に知るべし、所謂分に緣りて染欲有りと。阿難、若し分無く各々分無くば、設使分を離るゝも當に染欲有るべきや』。答へて曰く『無きなり』。『阿難、この故に當に知るべし、この染欲の因、染欲の習、染欲の本、染欲の緣は謂くこれ分なりと。所以者何。分に緣るが故に則ち染欲有り。(6)阿難、利に緣りて分有りとはこれ利に緣りて分有りと說く。當に知るべし、所謂利に緣りて分有りと。阿難、若し利無く各々利無くば、設使利を離るゝも當に分有るべきや』。答へて曰く『無きなり』。『阿難、この故に當に知るべし、この分の因、分の習、分の本、分の緣は、謂くこれ利なりと。所以者何。利に緣るが故に則ち分有り。(7)阿難、求に緣りて利有りとはこれ求に緣りて利有りと說く。當に知るべし、所謂求に緣りて利有りと。阿難、若し求無く各々求無くば、設使求を離るゝも當に利有るべきや』。答へて曰く『無きなり』。『阿難、この故に當に知るべし、この利の因、利の習、利の本、利の緣は、謂くこれ求なりと。所以者何。求に緣るが故に則ち利有り。(8)阿難、愛に緣りて求有りとは、これ愛に緣りて求有りと說く。當に知るべし、所謂愛に緣りて求有りと。阿難、若し愛無く各々愛無くば、設使愛を離るゝも當に求有るべきや』。答へて曰く『無きなり』。『阿難、この故に當に知るべし、この求の因、求の習、求の本、求の緣は、謂くこれ愛なりと。所以者何。愛に緣るが故に則ち求有り。

習、有の本、有の緣は謂くこれ受なりと。所以者何。受に緣るが故に則ち有有り。(4)阿難、愛に緣りて受有りとは、これ愛に緣りて受有りと說く。當に知るべし、所謂愛に緣りて受有りと。阿難、若し愛無く各々愛無くば、設使愛を離るゝも當にまた受有り、受を立つべきや』。答へて曰く『無きなり』。『阿難、この故に當に知るべし、この受の因・受の習・受の本・受の緣は、謂くこれ愛なりと。所以者何。愛に緣るが故に則ち受有り。阿難、これを愛に緣りて[13]求有り、求に緣りて[14]利有り、利に緣りて[15]分有り、分に緣りて[16]染欲有り、染欲に緣りて[17]著有り、著に緣りて[18]慳有り、慳に緣りて[19]家有り、家に緣りて[20]守有りと爲す。阿難、守に緣るが故にすなはち[21]刀杖・鬪諍・諛諂・欺誑・妄言・兩舌有り、無量の惡不善の法を起す。是の如く具足する有れば純ら大苦陰を生ず。阿難、若し守無く各々守無くば、設使守を離るゝも當に刀杖・鬪諍・諛諂・欺誑・妄言・兩舌有り、無量の惡不善の法を起すべきや。』答へて曰く『無きなり』。『阿難、この故に當に知るべし、この刀杖・鬪諍・諛諂・欺誑・妄言・兩舌あり無量の惡不善の法を起すの因、この習、この本、この緣は、謂くこれ守なりと。所以者何。守に緣るが故に則ち刀杖・鬪諍・諛諂・欺誑・妄言・兩舌有り、無量の惡不善の法を起す。是の如く具足する有れば純ら大苦陰を生ず。(1)阿難、家に緣りて守有りとはこれ家に緣りて守有りと說く。當に知るべし、所謂家に緣りて守有りと。阿難、若し家無く各々家無くば、設使家を離るゝも當に守有るべきや』。答へて曰く『無きなり』。『阿難、この故に當に知るべし、この守の因、守の習、守の本、守の緣は謂くこれ家なりと。所以者何。家に緣るが故に則ち守有り。(2)阿難、慳に緣りて家有りとは、これ慳に緣りて家有りと說く。當に知るべし、所謂慳に緣りて家有りと。阿難、若し慳無く各々慳無くば、設使慳を離るゝも當に家有るべきや』。答へて曰く『無きなり』。『阿難、この故に當に知るべし、この家の因、家の習、家の本、家の緣は、謂くこれ慳なりと。所以者何。慳に緣るが故に則ち家有り。(3)阿難、著に緣りて慳有りとはこれ著に緣りて慳有りと說く。當

【一三】求(Pariyesanā)。
【一四】利(Lābha)。
【一五】分(Vinicchaya)。分別、決定の意。
【一六】染欲(Chanda-rāga)。
【一七】著(Pariggaha)。巴利文「著」と「家」との位置を顚倒す。
【一八】慳(Macchariya)、
【一九】家(Ajjhosāna)。
【二〇】守(Ārakkha)。
【二一】刀杖・鬪諍・諛諂・欺誑・妄言・兩舌 (Daṇḍādāna-satthādāna-kalaha-viggaha-vivāda-tuvantuvā-pesuñña-musāvāda)。「杖を取ること・刄物を取ること・喧嘩・口論・諍論・爭鬪・兩舌・妄言」なり。

て生に何の縁有りやと[問はば]當に是の如く答ふべし、【八】有に縁るなりと。(3)阿難、若し問者有りて有に縁有りやと[問はば]、當に是の如く答ふべし、有に亦縁有りと。若し問者有りて有に何の縁有りやと[問はば]、當に是の如く答ふべし、【九】受に縁るなりと。(4)阿難、若し問者有りて受に縁有りやと[問はば]、當に是の如く答ふべし、受に亦縁有りと。若し問者有りて受に何の縁有りやと[問はば]、當に是の如く答ふべし、【一〇】愛に縁るなりと。阿難、これを愛に縁りて受有り、受に縁りて有有り、有に縁りて生有り、生に縁りて老死あり、老死に縁りて【一一】愁感有り、【一二】啼哭・憂苦・懊惱皆老死に縁りて有りと爲す。是の如く具足して純ら大苦陰を生ず。(1)阿難、生に縁りて老死有りとはこれ生に縁りて老死有りと説く。當に知るべし、所謂生に縁りて老死有りと。阿難、若し生無くば魚の魚種たり、鳥の鳥種たり、蚊の蚊種たり、龍の龍種たり、神の神種たり、鬼の鬼種たり、天の天種たり、人の人種たる、阿難、彼彼の衆生彼々の處に隨ひて生無く、各生無くば、設使生を離るるも當に老死有るべきや』。答へて曰く『無きなり』。『阿難、この故に當に知るべし、この老死の因、老死の習、老死の本、老死の縁は、謂くこれ生なりと。所以者何。生に縁るが故に則ち老死有り。(2)阿難、有に縁りて生有りとは、これ有に縁りて生有りと説く。當に知るべし、所謂有に縁りて生有りと。阿難、若し有無くば、魚の魚種たり、鳥の鳥種たり、蚊の蚊種たり、龍の龍種たり、神の神種たり、鬼の鬼種たり、天の天種たり、人の人種たる、阿難、彼々の衆生彼々の處に隨ひて有無く、各々有無くば設使有を離るゝも當に生有るべきや』。答へて曰く『無きなり』。『阿難、この故に當に知るべし、この生の因、生の習、生の本、生の縁は謂くこれ有なりと。所以者何。有に縁るが故に則ち生有り。(3)阿難、受に縁りて有有りとは、これ受に縁りて有有りと説く。當に知るべし、所謂受に縁りて有有りと。阿難、若し受無く各々受無くば、設使受を離るゝも當にまた有有るべく、有有りと施設するや』。答へて曰く『無きなり』。『阿難、この故に當に知るべし、この有の因、有の

【八】有(Bhava)。

【九】受(Upādāna)。

【一〇】愛(Taṇhā)。

【一一】愁感(Soka)。

【一二】啼哭・憂苦・懊惱(Parideva-dukkha-domanassa-upāyāsa)。余は常にこの四語を譯して「悲・苦・哀・絶望」となせり。

巻の第二十四

因品第四[一]（十經あり）

〔大〕因・〔念處〕・二苦陰・增上心及び念、
師子吼・優曇〔婆邏〕・願・想最も後に在り。

九十七、大因經第一

我が聞きしこと是の如し。ある時佛[二]拘樓瘦に遊び劍磨瑟曇なる拘樓の都邑に在しぬ。その時尊者阿難閑居獨處し宴坐し思惟して心にこの念を作しぬ「この[三]緣起甚奇にして極めて甚深に、[四]明亦甚深なり。然るに我が觀見は至淺にして至淺なりと」。こゝに於て尊者阿難則ち晡時に於て宴坐より起ちて佛所に往詣し佛足に稽首し、却きて一面に住して白して曰く『世尊、我今閑居獨處し宴坐し思惟して心にこの念を生じぬ「この緣起甚奇にして極めて甚深に、明亦甚深なり。然るに我が觀見は至淺にして至淺なり」と。』世尊告げて曰はく『阿難、汝この念を作すこと莫れ「この緣起は至淺にして至淺なりと」。所以者何。この緣起は極めて甚深にして明亦甚深なり。[五]阿難、この緣起に於て如眞を知らず如實を見ず覺らず達せざるが故に、彼の衆生を念ずるに、織機相鎖すが如く、蘊蔓草多くして調亂有るが如く、怱怱喧鬧しこの世より彼の世に至り、彼の世よりこの世に至り、往來して生死を出過すること能はず。阿難、この故にこの緣起は極めて甚深にして明亦甚深なるを知る。(1)阿難、若し問者有りて[六]老死に緣有りやと「問はば」、當に是の如く答ふべし、老死に緣有りと。若し問者有りて老死に何の緣有りやと「問はば」、當に是の如く答ふべし、[七]生に緣るなりと。(2)阿難、若し問者有りて生に緣有りやと「問はば」、當に是の如く答ふべし、生に亦緣有りと。若し問者有り

【一】 D. 15. Mahā-nidāna-suttanta.「長阿含」一〇卷「大緣方便經」、「人本欲生經」、「佛說大生義經」。

【二】 拘樓瘦。劍磨瑟曇に就ては二卷「漏盡經」註を見よ。

【三】 「大生義經」にては「緣生法」。Paṭicca-samuppāda.

【四】 明（Vijjā）。

【五】 巴利文「阿難陀よ、この法を識らず曉らざることよりして、是の如くこの衆生は纏れたる絲の如く、瘤腫に掩はれたるが如く、ムンヂヤ・パッバヂヤ草の如く、地獄・惡趣・墮落・輪廻を超ゆることなし」。『飜譯名義大集』第二二四には「如亂髮、如亂絲（如堅麴）、如們叉草與波羅波草（如鉤藤刺羅）」。

【六】 老死（Jarā-maraṇa）。

【七】 生（Jāti）。

退かず修行廣布するが故に、すなはち以て速に方便を求め學すること、極めて精勤、正念正智にして忍びて退かしめず』。尊者舍梨子の所說是の如し。彼の諸の比丘尊者舍梨子の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第二十三

知らず。諸賢、これを比丘・比丘尼浄法衰退すと謂ふ。諸賢、若し比丘・比丘尼有り、未だ聞かざる法はすなはち聞くを得、已に聞きし法は忘失せず、若使法有り、本修行する所、廣布誦習して慧の解する所なるを、彼常に憶念して知り、而もまた知る。これを比丘・比丘尼浄法轉た増すと謂ふ。諸賢、比丘は當に是の如き觀を作すべし、我増伺有りと爲すや、増伺有ること無しと爲すや。我瞋恚心有りと爲すや、瞋恚心有ること無しと爲すや。我睡眠纒有りと爲すや、睡眠纒有ること無しと爲すや。我調貢高有りと爲すや、調貢高有ること無しと爲すや。我疑惑有りと爲すや、疑惑有ること無しと爲すや。我身諍有りと爲すや、身諍有ること無しと爲すや。我穢汚心有りと爲すや、穢汚心有ること無しと爲すや。我信有りと爲すや、信有ること無しと爲すや。我進有りと爲すや、進有ること無しと爲すや。我念有りと爲すや、念有ること無しと爲すや。我定有りと爲すや、定有ること無しと爲すや。我惡慧有りと爲すや、惡慧有ること無しと爲すやと。諸賢、若し比丘觀ずる時則ち、我増伺有り瞋恚心有り睡眠纒有り調貢高有り疑惑有り身諍有り穢汚心有り、信無く進無く念無く定無く、惡慧有りと知れば、諸賢、彼の比丘この惡不善の法を滅せんと欲するが故に、すなはち以て速に方便を求め學すること、極めて精勤、正念正智にして忍びて退かしめず。諸賢、猶ほ人火の爲に頭を燒き衣を燒けば、急に方便を求めて頭を救ひ衣を救ふがごとし。諸賢、是の如く比丘、この惡不善の法を滅せんと欲するが故に、すなはち以て速に方便を求め學すること極めて精勤、正念正智にして忍びて退かしめず。諸賢、若し比丘觀ずる時、則ち我増伺無く瞋恚心無く睡眠纒無く調貢高無く疑惑有ること無く身諍有ること無く穢汚心無く、信有り進有り念有り定有り、惡慧無しと知れば、彼の比丘、この善法に住せんと欲して忘れず退かず修行廣布するが故に、すなはち以て速に方便を求め學すること極めて精勤、正念正智にして忍びて退かしめず。猶ほ人火の爲に頭を燒き衣を燒けば、急に方便を求めて頭を救ひ衣を救ふがごとし。諸賢、是の如く比丘、この善法に住せんと欲して忘れず

爲すや。我多く行じて精進ありと爲すや、多く行じて懈怠ありと爲すや。我多く行じて念ありと爲すや、多く行じて念無しと爲すや。我多く行じて定ありと爲すや、多く行じて定無しと爲すや。我多く行じて惡慧ありと爲すや、多く行じて惡慧無しと爲すやと。若し比丘觀ずる時則ち、我多く行じて増伺・瞋恚心・睡眠纒・調貢高・疑惑・身諍・穢汚心・不信・懈怠あり、念無く定無く、多く行じて惡慧ありと知れば、彼の比丘この惡不善の法を滅せんと欲するが故に、すなはち以て速に方便を求めて學し、極めて精勤、正念正智にして忍びて退かしめず。猶ほ人火の爲に頭を燒き衣を燒けば、急に方便を求めて頭を救ひ衣を救ふがごとし。是の如く比丘、この惡不善の法を滅せんと欲するが故に、すなはち以て速に方便を求めて學し、極めて精勤、正念正智にして忍びて退かしめず。若し比丘觀ずる時則ち、我多く行じて〔五〕貪伺無く、若しは瞋恚心無く睡眠纒無く調貢高無く疑惑無く身諍無く穢汚心無く、信有り進有り念有り定有り、多く行じて惡慧無しと知れば、彼の比丘この善法に住せんと欲し、忘れず退かずして修行廣布するが故に、すなはち以て速に方便を求めて學し、極めて精勤、正念正智にして忍びて退かしめず。猶ほ人火の爲に頭を燒き衣を燒けば、急に方便を求めて頭を救ひ衣を救ふがごとし。是の如く比丘、この善法に住せんと欲し、忘れず退かずして修行廣布するが故に、すなはち以て速かに方便を求め學すること極めて精勤、正念正智にして忍びて退かしめず』。佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

九十六、無經第十

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時尊者舍梨子諸の比丘に告ぐ『諸賢、若し比丘・比丘尼有り、未だ聞かざる法は聞くを得ず、已に聞きし法はすなはち忘失し、若使法有り、本修行する所、廣布誦習して慧の解する所なるを、彼また憶知せずして而も

【五】貪伺（Abhijjhā）。上に「増伺」といへるに同じ。二二巻「知法經」註〔六〕を見よ。

く極めて溫良なるが故に、人をして繋ぎて安隱處に著かしめ、好き飲食を與へ好くこれを看視せしむ。是の如くこの人、「諸の[同]梵行者をして我を供養し恭敬し禮事せしめんと」、この念を作さずと雖も、然も諸の[同]梵行者、彼を供養し恭敬し禮事す』。佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

九十五、住法經第九[一]

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく、『我退善法は住まらず增さずと說く。我住善法は退かず增さずと說く。我增善法は退かず住まらずと說く。[二]云何が退善法は住まらず增さゞる。比丘若し篤く禁戒を信じ、博聞・布施・智慧・辯才・阿含及びその所得有れば、彼の人この法に於て退きて住まらず增さず。これを退善法は住まらず增さずと謂ふ。[三]云何が住善法は退かず增さゞる。比丘若し篤く禁戒を信じ博聞・布施・智慧・辯才・阿含及びその所得有れば、彼の人この法に於て住まりて退かず增さず。これを住善法は退かず增さずと謂ふ。[四]云何が增善法は退かず住まらざる。比丘若し篤く禁戒を信じ、博聞・布施・智慧・辯才・阿含及びその所得有れば、彼の人この法に於て增して退かず住まらず。これを增善法は退かず住まらずと謂ふ。比丘是の如き觀を作さば必ず饒益する所多し。[即ち]我多く行じて增伺ありと爲すや、多く行じて增伺無しと爲すや。我多く行じて瞋恚心ありと爲すや、多く行じて瞋恚心無しと爲すや。我多く行じて睡眠纏ありと爲すや。多く行じて睡眠纏無しと爲すや。我多く行じて調貢高ありと爲すや、多く行じて調貢高無しと爲すや。我多く行じて疑惑ありと爲すや、多く行じて疑惑無しと爲すや。我多く行じて身諍ありと爲すや、多く行じて身諍無しと爲すや。我多く行じて穢汚心ありと爲すや、多く行じて穢汚心無しと爲すや。我多く行じて信ありと爲すや、多く行じて信ならずと

【一】A. v. 96.
【二】退善法。
【三】住善法。
【四】增善法。

く喜ぶべく、能く愛念せしめ、能く敬重せしめ、能く修習せしめ、能く攝持せしめ、能く沙門たるを得しめ、能く一意を得しめ、能く涅槃を得しむ。(4)或は一人有り、瞋纏無く不語結無く、慳・嫉無く、諛・諂・欺誑無く、無慚・無愧無く、慚・愧を稱譽す。若し一人有りて瞋纏無く、不語結無く、慳・嫉無く、諛・諂・欺誑無く、無慚・無愧無く、慚・愧を稱譽すれば、この法樂しむべく愛すべく憙ぶべく、能く愛念せしめ、能く敬重せしめ、能く修習せしめ、能く攝持せしめ、能く沙門たるを得しめ、能く一意を得しめ、能く涅槃を得しむ。(5)或は一人有り、諸の[同]梵行[者]を經勞し、諸の[同]梵行[者]を經勞するを稱譽す。若し一人有りて諸の[同]梵行[者]を經勞し、諸の[同]梵行[者]を經勞するを稱譽すれば、この法樂しむべく愛すべく憙ぶべく、能く愛念せしめ、能く敬重せしめ、能く修習せしめ、能く攝持せしめ、能く沙門たるを得しめ、能く一意を得しめ、能く涅槃を得しむ。(6)或は一人有り、諸の法を觀じ諸の法を觀ずるを稱譽す。若し一人有りて諸の法を觀じ諸の法を觀ずるを稱譽すれば、この法樂しむべく愛すべく憙ぶべく、能く愛念せしめ、能く敬重せしめ、能く修習せしめ、能く攝持せしめ、能く沙門たるを得しめ、能く一意を得しめ、能く涅槃を得しむ。(7)或は一人有り、宴坐し宴坐を稱譽す。若し一人有りて宴坐し宴坐を稱譽すれば、この法樂しむべく愛すべく憙ぶべく、能く愛念せしめ、能く敬重せしめ、能く修習せしめ、能く攝持せしめ、能く沙門たるを得しめ、能く一意を得しめ、能く涅槃を得しむ。この人「諸の[同]梵行者をして我を供養し恭敬し禮事せしめんと」、この念を作さずと雖も、然も諸の[同]梵行者、彼を供養し恭敬し禮事す。所以者何。彼の人この無量の善法有り。彼この無量の善法有るに因るが故に、諸の[同]梵行者をして彼を供養し恭敬し禮事せしむ。猶ほ良馬の繫がれ櫪に在りて養はるゝが如し。「人をして我を繫ぎて安隱處に著き、我に好き飲食を與へ好く我を看視せしめんと」、この念を作さずと雖も、然も人彼を繫ぎて安隱處に著き、好き飲食を與へ好くこれを看視す。所以者何。彼の馬善法有り、謂く軟調にして好

宴坐を稱せず。若し一人有りて宴坐せず宴坐を稱せざれば、この法樂しむべからず、愛喜すべからず、愛念せしむる能はず、敬重せしむる能はず、修習せしむる能はず、攝持せしむる能はず、沙門たるを得しむる能はず、一意を得しむる能はず、涅槃を得しむる能はず。この人、「諸の「同」梵行者をして我を供養し恭敬し禮事せしめんと」、是の念を作すと雖も、然も諸の「同」梵行者彼を供養し恭敬し禮事せず。所以者何。彼の人この無量の惡法有り。彼この無量の惡法有るに因るが故に、諸の「同」梵行者をして彼を供養し恭敬し禮事せざらしむ。猶ほ惡馬の繋がれ櫪に在りて養はるゝが如し。「人をして我を繋ぎて安隱處に著き、我に好き飲食を與へ好く我を看視せしめんと、」この念を作すと雖も、然も人繋ぎて安隱處に著かず、好き飲食を與へず、好く看視せず。所以者何、彼の馬惡法有り、謂く極めて麁弊にして溫良ならざるが故に、人をして繋ぎて安隱處に著かず、好き飲食を與へず、好く看視せざらしむ。是の如くこの人、「諸の「同」梵行者をして我を供養し恭敬し禮事せしめんと」、この念を作すと雖も、然も諸の「同」梵行者彼を供養し恭敬し禮事せず。所以者何。彼の人この無量の惡法有り。彼この無量の惡法有るに因るが故に諸の「同」梵行者をして彼を供養し恭敬し禮事せざらしむ。(1)或は一人有り、鬪諍を喜ばず止諍を稱譽す。若し一人有りて鬪諍を喜ばず止諍を稱譽すれば、この法樂しむべく愛すべく喜ぶべく、能く愛念せしめ、能く敬重せしめ、能く修習せしめ、能く攝持せしめ、能く沙門たるを得しめ、能く一意を得しめ、能く涅槃を得しむ。(2)或は一人有り、惡欲ならず、惡欲を止むるを稱譽す。若し一人有りて惡欲ならず惡欲を止むるを稱譽すれば、この法樂しむべく愛すべく喜ぶべく、能く愛念せしめ、能く敬重せしめ、能く修習せしめ、能く攝持せしめ、能く沙門たるを得しめ、能く一意を得しめ、能く涅槃を得しむ。(3)或は一人有り、戒を犯さず戒を越えず戒を缺かず戒を穿たず戒を汚さず、戒を持つを稱譽す。若し一人有りて戒を犯さず戒を越えず戒を缺かず戒を穿たず戒を汚さず戒を持つを稱譽すれば、この法樂しむべく愛すべ

しむる能はず、修習せしむる能はず攝持せしむる能はず、沙門たるを得しむる能はず、一意を得しむる能はず、涅槃を得しむる能はず。(2)或は一人有り、惡欲にして惡欲を止むるを稱せず。若し一人有りて惡欲にして惡欲を止むるを稱せざれば、この法愛すべからず、愛憙すべからず、愛念せしむる能はず、敬重せしむる能はず、修習せしむるを得ず、攝持せしむる能はず、沙門たるを得しむる能はず、一意を得しむる能はず、涅槃を得しむる能はず。(3)或は一人有り、戒を犯し戒を越え戒を缺き戒を穿ち戒を汚して戒を持つを稱せず。若し一人有りて戒を犯し戒を越え戒を缺き戒を穿ち戒を汚して戒を持つを稱せざれば、この法樂しむべからず、愛憙すべからず、愛念せしむる能はず、敬重せしむる能はず、修習せしむる能はず、攝持せしむる能はず、沙門たるを得しむる能はず、一意を得しむる能はず、涅槃を得しむる能はず。[五](4)或は一人有り、瞋纏有り不語結有り慳・嫉有り諛諂・欺誑有り無慚・無愧有りて慚愧を稱せず。若し一人有りて瞋纏有り不語結有り慳嫉有り諛諂・欺誑有り無慚・無愧有りて慚・愧を稱せざれば、この法樂しむべからず、愛憙すべからず、愛念せしむる能はず、敬重せしむる能はず、修習せしむる能はず、攝持せしむる能はず、沙門たるを得しむる能はず、一意を得しむる能はず　涅槃を得しむる能はず。(5)或は一人有り、諸の[同]梵行[者]を經勞せず諸の[同]梵行[者]を經勞するを稱せず。若し一人有りて諸の[同]梵行[者]を經勞せず。諸の[同]梵行[者]を經勞するを稱せざれば、この法樂しむべからず、愛憙すべからず、愛念せしむる能はず、敬重せしむる能はず、修習せしむる能はず、攝持せしむる能はず、沙門たるを得しむる能はず、一意を得しむる能はず、涅槃を得しむる能はず。(6)或は一人有り、諸の法を觀ぜず諸の法を觀ずるを稱せず。若し一人有りて諸の法を觀ぜず諸の法を觀ずるを稱せざれば、この法樂しむべからず愛憙すべからず。愛念せしむる能はず、敬重せしむる能はず、修習せしむる能はず、攝持せしむる能はず、沙門たるを得しむる能はず、一意を得しむる能はず、涅槃を得しむる能はず。(7)或は一人有り、宴坐せず、

【五】 正確には(4)—(12)

ば彼何等を得るや』。梵志答へて曰く『瞿曇、彼の水多き河はこはこれ世間齋潔の相・度相・福相なり。瞿曇、若し水多き河に詣りて浴すれば、彼則ち一切の惡を淨除せん』。その時世尊彼の梵志の爲に而も頌を說きて曰はく、

『[六]妙好首梵志よ、　若し水多き河に入るは、　これ愚、常の遊戲にして黑業を淨むること能はず。好首よ、何ぞ泉に往かん。　何の義か水多き河なる。　人不善業を作すに、　清水何の益する所ぞ、　淨者は垢穢無く、　淨者は常に戒を說く。　淨者は清白の業ありて常に清淨の行を得。若し汝殺生せず、　常に與へられざるを取らず、眞諦にして妄語せず、　常に正念正知なれば、梵志、是の如く學べ、　一切衆生安しと。　梵志、何ぞ家に還るや。　家泉所淨無きに。　梵志、汝當に學すべし。　淨洗は善法を以てす。　何ぞ弊惡水を須ひん。　但身體の垢を去ると』。梵志佛に白して曰く『我亦この念を作す、淨洗は善法を以てす、何ぞ弊惡の水を須ひんと』。梵志佛の教を聞きて心中大いに歡喜し　即時に佛足を禮し佛・法・衆に歸命しぬ。

梵志白して曰く『世尊、我已に知る。善逝、我已に解す。我今自ら佛・法及び比丘衆に歸す。唯願はくは世尊、我を受けて優婆塞と爲したまへ。今日より始めて終身自ら歸し乃ち命盡くるに至らん』。佛說是の如し。好首水淨梵志及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

九十四、[一]黑比丘經第八

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び[二]東園[三]鹿母堂に在しぬ。この時[四]黑比丘なる鹿母の子、常に鬪諍を憙び、佛所に往詣しぬ。世尊遙に黑比丘の來るを見、黑比丘に因るが故に諸の比丘に告げたまはく『(1)或は一人有り、常に鬪諍を喜びて止諍を稱せず。若し一人有りて常に鬪諍を喜び止諍を稱せざれば、この法樂しむべからず、愛喜すべからず、愛念せしむる能はず、敬重せ

【六】妙好首。好首(Sundarika-bhāradvāja)。

【一】A. v. 164.
【二】東園(Pubbārāma)。
【三】鹿母堂(Migāramātu-pāsāda)。この優婆夷の名を毘舍佉(Visākhā)と呼ぶ、ミガーラといふ人の母なり。東園はこの信女の喜捨によりて建てられたる大精舍にして、舍衞城の東にありたり。
【四】黑比丘(Kāḷaka bhikkhu)。

れば、必ず悪處に至り、地獄中に生ず。若し二十一穢の心を汚さゞる者有れば、必ず善處に至り、天上に生ず。云何が二十一穢なる。邪見心穢・非法欲心穢・悪貪心穢・邪法心穢・貪心穢・恚心穢・睡眠心穢・調悔心穢・疑惑心穢・瞋纒心穢・不語結心穢・慳心穢・嫉心穢・欺誑心穢・諛諂心穢・無慚心穢・無愧心穢・慢心穢・大慢心穢・憍慠心穢・放逸心穢なり。若しこの二十一穢の心を汚さゞる者有れば、必ず善處に至り、天上に生ず。猶ほ白淨の波羅奈衣を持ちて染家に與ふるに、彼の染家得て或は淳灰を以て或は澡豆を以て或は土漬を以て極めて浣ひて淨からしむるがごとし。この白淨の波羅奈衣、染家治するに或は淳灰を以て或は澡豆を以て或は土漬を以て極めて浣ひて淨からしむと雖も、然もこの白淨波羅奈衣本已に淨にして而もまた淨なり。是の如く若し二十一穢の心を汚さゞる者有れば、必ず善處に至りて天上に生ず。云何が二十一穢なる。邪見心穢・非法欲心穢・悪貪心穢・邪法心穢・貪心穢・恚心穢・睡眠心穢・調悔心穢・疑惑心穢・瞋纒心穢・不語結心穢・慳心穢・嫉心穢・欺誑心穢・諛諂心穢・無慚心穢・無愧心穢・慢心穢・大慢心穢・憍慠心穢・放逸心穢なり。若しこの二十一穢の心を汚さゞる者有れば、必ず善處に至りて天上に生ず。若し邪見これ心穢なりと知れば、知り已りてすなち斷ず。是の如く非法欲心穢・悪貪心穢・邪法心穢・貪心穢・恚心穢・睡眠心穢・調悔心穢・疑惑心穢・瞋纒心穢・不語結心穢・慳心穢・嫉心穢・欺誑心穢・諛諂心穢・無慚心穢・無愧心穢・慢心穢・大慢心穢・憍慠心穢・[亦然り]。若し放逸これ心穢なりと知れば、知り已りてすなはち斷ず。彼心慈と倶にして十方に遍滿し成就して遊ぶ。是の如く二・三・四方・四維・上下一切に普周く、慈と倶にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。是の如く悲・喜[亦然り]。心捨と倶にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。梵志、これを内心を洗浴し外身を浴するに非ずと謂ふ』。その時梵志世尊に語げて曰く『瞿曇、水多き河に詣りて浴すべし』。世尊問ひて曰はく『梵志、若し水多き河に詣りて浴すれ

如く善く受持して誦すべし』。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『汝等當に共にこの青白蓮華喩經を受けて誦習し守持すべし。所以者何。この青白蓮華喩經は如法にして義有り、これ梵行の本にして通を致し覺を致し亦涅槃を致す。若し族姓子鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道する者は應當にこの青白蓮華喩經を受け善く諷誦し持すべし。佛說是の如し。尊者阿難及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

九十三、[一]水淨梵志經第七

我が聞きしこと是の如し。ある時佛[二]欝鞞羅[三]尼連河岸に遊び[四]阿耶惒羅尼拘類樹の下に在しぬ、初めて道を得たまひし時。こゝに於て一水淨梵志有り、中後に仿佯して佛所に往詣しぬ。世尊遙に水淨梵志の來るを見、水淨梵志に因るが故に諸の比丘に告げたまはく『若し二十一[五]穢の心を汚すもの有れば必ず惡處に至りて地獄の中に生ず。云何が二十一穢なる。邪見心穢・非法欲心穢・惡貪心穢・邪法心穢・貪心穢・恚心穢・睡眠心穢・調悔心穢・疑惑心穢・瞋纒心穢・不語結心穢・慳心穢・嫉心穢・欺誑心穢・諛諂心穢・無慚心穢・無愧心穢・慢心穢・大慢心穢・慢傲心穢・放逸心穢なり。若しこの二十一穢の心を汚す者有れば必ず惡處に至りて地獄中に生ず。猶ほ垢膩衣持ちて染家に與ふるに、彼の染家得て或は淳灰を以て、或は澡豆を以て、或は土漬を以て極めて浣ひてこの垢膩衣を淨からしむるがごとし。染家治するに或は淳灰を以てし或は澡豆を以てし或は土漬を以てし極めて浣ひて淨からしむと雖も、然もこの汚衣故のごとく穢色有り。是の如く若し二十一穢の心を汚す者有れば、必ず惡處に至り、地獄中に生ず。云何が二十一穢なる。邪見心穢・非法欲心穢・惡貪心穢・邪法心穢・貪心穢・恚心穢・睡眠心穢・調悔心穢・疑惑心穢・瞋纒心穢・不語結心穢・慳心穢・嫉心穢・欺誑心穢・諛諂心穢・無慚心穢・無愧心穢・慢心穢・大慢心穢・慢傲心穢・放逸心穢なり。若しこの二十一穢の心を汚すもの有

【一】 M. 7. Vatthūpama-sutta.「佛說梵志計水淨經」、「雜阿含」四四卷の八經、「別譯雜阿含」五卷の六經、「增一阿含」一三品の五。
【二】 欝鞞羅 (Uruvelā)。
【三】 尼連禪 (Nerañjarā)。
【四】 阿耶惒羅尼拘類 (Ajapāla-nigrodha)。
【五】 穢 (Upakkilesa)。

善の身行を捨て善の身行を修習すべしと」。彼後時に於て不善の身行を捨て善の身行を修習す。これを法、身に從ひて滅し、口に從ひて滅せずと謂ふ。(2)云何が法、口に從ひて滅し身に從ひて滅せざる。比丘は不善の口行充滿し具足し受持して口に著す。諸の比丘見已りて彼の比丘を訶す、「賢者、不善の口行充滿し具足し受持す。何すれぞ口に著するや。賢者、不善の口行を捨て善の口行を修習すべしと」。彼後時に於て不善の口行を捨て善の口行を修習す。これを法、口に從ひて滅し身に從ひて滅せずと謂ふ。(3)云何が法、身口に從ひて滅せず、但慧見を以て滅するや。增伺は身口に從ひて滅せず。但慧見を以て滅す。是の如く諍訟・恚・恨・瞋・纒・不語・結・慳・嫉・欺誑・諛諂・無慚・無愧・惡欲・惡見[亦]身口に從ひて滅せず、但慧見を以て滅す。これを法、身口に從ひて滅せず、但慧見を以て滅すと謂ふ。如來或は觀有り、他人の心を觀じてこの人是の如く身を修し戒を修し心を修し慧を修せずと知る。如し身を修し戒を修し心を修し慧を修すれば增伺を滅するを得。所以者何。この人心に惡增伺を生じて而も住するを以てなり。是の如く諍訟・恚・恨・瞋・纒・不語・結・慳・嫉・欺誑・諛諂・無慚・無愧[亦然り]。惡欲・惡見を滅するを得。所以者何。この人心に惡欲・惡見を生じて而も住するを以てなり。この人是の如く身を修し戒を修し心を修し慧を修すと知る。如し身を修し戒を修し心を修し慧を修すれば增伺を滅するを得。所以者何。この人心に惡增伺を生ぜずして而も住するを以てなり。是の如く諍訟・恚・恨・瞋・纒・不語・結・慳・欺誑・諛諂・無慚・無愧[亦然り]。惡欲・惡見を滅するを得。所以者何。この人惡欲・惡見を生ぜずして而も住するを以てなり。猶ほ青蓮華・紅・赤・白蓮花の水に生じ水に長じて水上に出で水に著せざるが如し。是の如く如來は世間に生じ世間に長じて世間を出で、行世間の法に著せず。所以者何、如來・無所著・等正覺は一切世間を出づ』。その時尊者阿難拂を執りて佛に侍しぬ。こゝに於て尊者阿難、叉手を佛に向けて白して曰く『世尊、この經當に何と名づけ云何が受持すべき』。こゝに於て世尊告げて曰はく『阿難、この經名づけて青白蓮華喩と爲し、汝當に是の

溺するを拔出せんと欲せんは必ずこの處り有り。自ら般涅槃して他の般涅槃せざるを般涅槃せしめんは必ずこの處り有り。是の如く周那、惡欲は非惡欲を以て[二]般涅槃と爲し、害意瞋は不害意瞋を以て般涅槃と爲し、殺生・不與取・非梵行は梵行を以て般涅槃と爲し、增伺・諍意・睡眠・調貢高・疑惑は不疑惑を以て般涅槃と爲し、瞋・結・諛諂・欺誑・無慚・無愧は慚愧を以て般涅槃と爲し、慢は不慢を以て般涅槃と爲し、增慢は不增慢を以て般涅槃と爲し、不多聞は多聞を以て般涅槃と爲し、諸の善法を觀ぜざるは諸の善法を觀ずるを以て般涅槃と爲し、非法惡行を行ずるは是法妙行を行ずるを以て般涅槃と爲し、妄言・兩舌・麁言・綺語・惡戒は善戒を以て般涅槃と爲し、不信・懈怠・無念・無定・惡慧は善慧を以て般涅槃と爲す。これ周那が爲なり。我已に汝が爲に漸損の法を說き、已に發心の法を說き、已に對の法を說き、已に昇上の法を說き、已に般涅槃の法を說く。尊師の弟子の爲にする所の如く、大慈哀を起し、憐念愍傷し、義及び饒益を求め、安隱快樂を求むるもの、我今已に作しぬ。汝等亦當にまた自ら作すべし。無事處・山林・樹下・空・安靜處に至り、坐禪思惟して放逸を得ること勿れ。勤加精進して後悔せしむること莫れ。こはこれ我の教勅なり、これ我が訓誨なり』。佛說是の如し。尊者大周那及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

九十二、青白蓮華喩經第六

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『(1)或は法有り身に從ひて滅し、口に從ひて滅せず。(2)或は法有り口に從ひて滅し、身に從ひて滅せず。(3)或は法有り身口に從ひて滅せず、但慧見を以て滅す。(1)云何が法、身に從ひて滅し口に從ひて滅せざる。比丘は不善の身行有りて充滿し具足し受持して身に著す。諸の比丘見已りて彼の比丘を訶す、「賢者、不善の身行充滿し具足し受持す。何すれぞ身に著するや。賢者、不

【二】(4)「般涅槃のためとなす」。

周那、他增慢有り我增慢無し。當に發心すべし。周那、他多聞ならず我多聞有り、當に發心すべし。周那、他諸の善法を見ず我諸の善法を觀る。當に發心すべし。周那、他非法惡行を行ず我是法妙行を行ず。當に發心すべし。周那、他妄言・兩舌・麁言・綺語・惡戒有り、我惡戒無し。當に發心すべし。周那、他不信・懈怠・無念・無定有り、而して惡慧有り我惡慧無し。當に發心すべし。周那、猶ほ[七]惡道と正道と對するが如し。猶ほ[八]惡度と正度と對するが如し。是の如く周那、惡欲は非惡欲と對を爲し、害意瞋は不害意瞋と對を爲し、[九]殺生・不與取・非梵行は梵行と對を爲し、增伺・諍意・睡眠・調貢高・疑惑は不疑惑と對を爲し、瞋・結・諛諂・欺誑・無慚・無愧は慚愧と對を爲し、慢は不慢と對を爲し、增慢は不增慢と對を爲し、不多聞は多聞と對を爲し、諸の善法を觀ざるは諸の善法を觀ると對を爲し、非法惡行を行ずるは是法妙行を行ずると對を爲し、妄言・兩舌・麁言・綺語・惡戒は善戒と對を爲し、不信・懈怠・無念無定・惡慧は善慧と對を爲す。周那、或は法有りて黑ければ黑報有りて惡處に趣き至る。或は法有りて白ければ白報有りて[一〇]昇上するを得。是の如く周那、惡欲は非惡欲を以て昇上と爲し、害意瞋は不害意瞋を以て昇上と爲し、殺生・不與取・非梵行は梵行を以て昇上と爲し、增伺・諍意・睡眠・調貢高・疑惑は不疑惑を以て昇上と爲し、瞋・結・諛諂・欺誑・無慚・無愧は慚愧を以て昇上と爲し、慢は不慢を以て昇上と爲し、增慢は不增慢を以て昇上と爲し、不多聞は多聞を以て昇上と爲し、諸の善法を觀ざるは諸の善法を觀るを以て昇上と爲し、非法・惡行を行ずるは是法・妙行を行ずるを以て昇上と爲し、妄言・兩舌・麁言・綺語・惡戒は善戒を以て昇上と爲し、不信・懈怠・無念・無定・惡慧は善慧を以て昇上と爲す。周那、若し自ら調御せざる有りて他の調御せざるを調御せんと欲せんは終にこの處り無し。自ら沒溺して他の沒溺するを拔出せんと欲せんは終にこの處り無し。自ら般涅槃せずして他の般涅槃せざるを般涅槃せしめんは終にこの處り無し。周那、若し自ら調御する有りて他の調御せざるを調御せんと欲せんは必ずこの處り有り。自ら沒溺せずして他の沒

【七】惡道、正道(Visamamagga, samamagga)。

【八】惡度、正度(Visamatittha, samatittha)。度とは渡場、水浴場、河に上下する場所をいふ。

【九】殺生は不殺生と、不與取は與取と、非梵行は梵行と對をなすの意なることを知るべし。

【一〇】(3)昇上(Uparibhāva)。

[四]欲を離れ惡不善の法を離れ、[乃至]第四禪を得るに至り成就して遊ぶ。彼この念を作す、「我漸損を行ぜんと」。周那、聖法律中に於て但この漸損のみならず、四增上心・現法樂居有り。行者これより起ちて而もまた還り入る。彼この念を作す、「我漸損を行ぜんと」。周那、聖法律中に於て但この漸損のみならず、比丘は一切の[五]色想を度し、非有想・非無想處を得るに至り成就して遊ぶ。彼この念を作す、「我漸損を行ぜんと」。周那、聖法律中に於て但この漸損のみならず、四息解脫有りて色を離れて無色を得。行者これより起ちて當に他の爲に說くべし。彼この念を作す、「我漸損を行ぜんと」。周那、聖法律中に於て但この漸損のみならず。周那、他惡欲念欲有り我惡欲念欲無し。當に漸損を學すべし。周那、他害意瞋有り我害意瞋無し。當に漸損を學すべし。周那、他殺生・不與取・非梵行有り我非梵行無し。當に漸損を學すべし。周那、他增伺・諍意・睡眠・所纒・調貢高有り、而して疑惑有り我疑惑無し。當に漸損を學すべし。周那、他瞋・結・諛諂・欺誑・無慚・無愧有り我慚愧有り。當に漸損を學すべし。周那、他慢有り我慢無し。當に漸損を學すべし。周那、他增慢有り我增慢無し。當に漸損を學すべし。周那、他多聞ならず我多聞有り。當に漸損を學すべし。周那、他諸の善法を觀ず、我諸の善法を見る。當に漸損を學すべし。周那、他非法惡行を行じ、我是法妙行を行ず。當に漸損を學すべし。周那、他妄言・兩舌・麁言・綺語・惡戒有り我惡戒無し。當に漸損を學すべし。周那、他不信・懈怠・無念・無定有り、而して惡慧有り我惡慧無し。當に漸損を學すべし。周那、若し[六]但發心して諸の善法を念欲し、求學すれば則ち饒益する所多し。況やまた身口に善法を行ずるをや。周那、他惡欲・念欲有り我惡欲・念欲無し。當に發心すべし。周那、他害意瞋有り我害意瞋無し。當に發心すべし。他殺生・不與取・非梵行有り我非梵行無し。當に發心すべし。周那、他增伺・諍意・睡眠・所纒・調貢高有り、而して疑惑有り我疑惑無し。當に發心すべし。周那、他瞋・結・諛諂・欺誑・無慚・無愧有り我慚愧有り。當に發心すべし。周那、他慢有り我慢無し。當に發心すべし。

【四】初禪乃至四禪。
【五】四無色定。
【六】(2)發心(Cittuppāda)。

諸の親しき朋友彼の所に往詣し是の如き說を作す。汝實に大に富むも自ら富まずと說き、亦國封有るも國封無しと說き、又畜牧有るも畜牧無しと說く。然るに用ひんと欲する時は則ち金・銀・眞珠・琉璃・水精・琥珀有り、畜牧・米穀有り亦奴婢有りと。是の如く諸賢、若しは比丘有りて この說を作さず、「我諸の法を知り知るべき所の法而も增伺無きを知ると」。然るに彼の賢者心に惡增伺を生ぜずして而も住す。是の如く諍訟・恚・恨・瞋・纏・不語・結・慳・嫉・欺誑・諛諂・無慚・無愧「亦然り」。惡欲・惡見無し「と說かず」。然るに彼の賢者心に惡欲・惡見を生ぜずして而も住す。諸の梵行人、彼の賢者諸の法を知り、知るべき所の法而も增伺無きを知る。所以者何。彼の賢者心增伺に向ひ盡く無餘涅槃するを以てなり。是の如く諍訟・恚・恨・瞋・纏・不語・結・慳・嫉・欺誑・諛諂・無慚・無愧「亦然り」。惡欲・惡見無き「を知る」。所以者何。彼の賢者心惡見法に向ひ盡く無餘涅槃するを以てなり』。尊者周那の所說是の如し。彼の諸の比丘、尊者周那の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

九十一、周那問見經第五

我が聞きしこと是の如し。ある時佛拘舍彌に遊び瞿師羅園に在しぬ。こゝに於て 尊者大周那則ち晡時に於て宴坐より起ちて佛所に往詣し佛足に稽首し、却きて一面に坐し白して曰く『世尊、世中諸の見生じて而も生ず。謂く、神有りと計し、衆生有り人有り壽有り命有り世有りと計す。世尊、云何が知り云何が見て、この見をして滅するを得、捨離するを得しめて而も餘の見をして續かず受けざらしめんや』彼の時世尊告げて曰はく『周那、世中諸の見生じて而も生ず。謂く神有りと計し、衆生有り人有り壽有り命有り世有りと計す。周那、若し諸の法をして滅盡して餘り無からしむれば、是の如く知り是の如く見、この見をして滅するを得、捨離するを得しめて而も餘の見をして續かず受けざらしめん。當に 漸損を學すべし。周那、聖法律中に於て何者か漸損なる。比丘は

【一】M. 8, Sallekha-sutta.

【二】尊者大周那(Āyasmant Mahā-Cunda)。

【三】(1)漸損(Sallekha,)。Lord Chalmers は expunging と譯し、Bhikkhu Sīlācāra は effacement と譯す。

惡見を生じて而も住するを以てなり。諸賢、猶ほ人富まずして自ら稱して富めりと說き、亦國封無くして國封有りと說き、又畜牧無くして畜牧有りと說くがごとし。若し用ひんと欲する時は則ち、金・銀・眞珠・琉璃・水精・琥珀無く、畜牧・米穀無く、亦奴婢無し。諸の親しき朋友彼の所に往詣してこの說を作す、「汝實に富まずして自ら稱して富めりと說き、亦國封無くして國封有りと說き、又畜牧無くして畜牧有りと說き、然も用ひんと欲する時は則ち金・銀・眞珠・琉璃・水精・琥珀無く、畜牧・米穀無く亦奴婢無しと」。是の如く諸賢、若しは比丘有りて是の如き說を作す、「我諸の法を知り知るべき所の法而も增伺無しと」。然るに彼の賢者心に惡增伺を生じて而も住す。是の如く諍訟・恚・恨・瞋・纏・不語・結・慳・嫉・欺誑・諛諂・無慚・無愧[亦然り]。惡欲・惡見無しと。然るに彼の賢者心に惡欲・惡見を生じて而も住す。諸の梵行人、彼の賢者諸の法を知り知るべき所の法而も增伺無きにあらずと知る。所以者何、彼の賢者心增伺に向ひ、盡く無餘涅槃せざるを以てなり。是の如く諍訟・恚・恨・瞋・纏・不語・結・慳・嫉・欺誑・諛諂・無慚・無愧[亦然り]。惡欲・惡見無きに[あらずと知る]。所以者何。彼の賢者心惡見法に向ひ、盡く無餘涅槃せざるを以てなり。諸賢、或は比丘有りてこの說を作さず、「我諸の法を知り、知るべき所の法而も增伺無しと」。然るに彼の賢者心に惡增伺を生ぜずして住す。是の如く諍訟・恚・恨・瞋・纏・不語・結・慳・嫉・欺誑・諛諂・無慚・無愧[亦然り]。惡欲・惡見無し[と說かず]。然るに彼の賢者、心に惡欲・惡見を生ぜずして而も住す。諸の梵行人、彼の賢者實に諸の法を知り、知るべき所の法而も增伺無きを知る。所以者何。彼の賢者心に惡增伺を生ぜずして而も住するを以てなり。是の如く諍訟・恚・恨・瞋・纏・不語・結・慳・嫉・欺誑・諛諂・無慚・無愧[亦然り]。惡欲・惡見無き[を知る]。所以者何。彼の賢者、心に惡欲・惡見を生ぜずして而も住するを以てなり。諸賢、猶ほ人大いに富むも自ら富まずと說き、亦國封有るも國封無しと說き、又畜牧有るも畜牧無しと說くがごとし。若し用ひんと欲する時は則ち金・銀・眞珠・琉璃・水精・琥珀有り、畜牧・米穀有り亦奴婢有り。

の面の淨及び不淨を見るがごとし。諸賢、若し目有る人面に垢有るを見れば則ち歡悅せず、すなはち求めて洗はんと欲す。諸賢、若し目有る人面に垢無きを見れば卽便ち歡悅す。「我が面清淨なりとて」この故に歡悅す。諸賢、是の如く若し比丘觀ずる時則ち我恩無く恩を知らずと知れば則ち歡悅せず、すなはち求めて斷ぜんと欲す。諸賢、若し比丘觀ずる時則ち我恩無く恩を知らざるにあらずと知れば、卽便ち歡悅す、「我自ら清淨にして尊法を求學すとて」この故に歡悅す。歡悅に因るが故にすなはち歡喜を得、歡喜に因るが故にすなはち止身を得、止身に因るが故にすなはち覺樂を得、覺樂に因るが故にすなはち定心を得。諸賢、多聞の聖弟子定心に因るが故にすなはち如實を見、如眞を知る。如實を見、如眞を知るに因るが故にすなはち厭を得、厭に因るが故にすなはち無欲を得、無欲に因るが故にすなはち解脫を得、解脫に因るが故にすなはち解脫を知るを得、生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辨じ、更に有を受けずと如眞を知る』。尊者大目揵連の所說是の如し。彼の諸の比丘尊者大目揵連の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

九十、知法經第四[一]

我が聞きしこと是の如し。ある時、佛拘舍彌[二]に遊び瞿師羅園[三]に在しぬ。その時尊者周那[四]諸の比丘に告ぐ『若しは[五]比丘有りて是の如き說を作す、「我諸の法を知り、知るべき所の法而も增伺無しと」。然るに[六]彼の賢者心に惡增伺を生じて而も住す。是の如く「諍訟・恚・恨・瞋・纏・不語・結・慳・嫉・欺誑・諛諂・無慚・無愧「亦然り」。惡欲・惡見無しと」。然るに彼の賢者心に惡欲惡見を生じて而も住す。諸の梵行人、彼の賢者諸の法を知り、知るべき所の法而も增伺無きにあらざるを知る。所以者何。彼の賢者心に增伺を生じて而も住するを以てなり。是の如く諍訟・恚・恨・瞋・纏・不語・結・慳・嫉・欺誑・諛諂・無慚・無愧「亦然り」。惡欲・惡見無きに「あらずと知る」所以者何。彼の賢者、心に惡欲

【一】A. v. 41.
【二】拘舍彌(Kosambi)。憍賞彌。阿槃提國の首都。
【三】瞿師羅(Ghosita)。
【四】周那(Cunda)。淳、淳陀。
【五】「諸賢、比丘あり、智談(=最上智に關する談話)を談じて、我この法を知り、我この法を見るといふ」。
【六】「貪欲この尊者を制服して住す」。「增伺」、「惡增伺」は共に Abhijjhā の譯なるが如し卽ち貪欲なり。

く觀ずれば必ず饒益する所多し。我惡欲念欲すと爲すや、惡欲念欲せずと爲すやと」。諸賢、若し比丘觀ずる時則ち我これ惡欲念欲すと知れば、則ち歡悅せず、すなはち求めて斷ぜんと欲す。諸賢、若し比丘觀ずる時則ち我惡欲無く念欲せずと知れば卽便ち歡悅す、「我自ら清淨にして、尊法を求學すとて」。この故に歡悅す。諸賢、猶ほ目有る人鏡を以て自ら照し則ちその面の淨及び不淨を見るがごとし。諸賢、若し目有る人、面に垢有るを見れば則ち歡悅せず、すなはち求めて洗はんと欲す。諸賢、若し目有る人、面に垢無きを見れば卽便ち歡悅す「我が面清淨なりとて」。この故に歡悅す。諸賢、若し比丘觀ずる時則ち我惡欲念欲を行ずと知れば則ち歡悅せず、すなはち求めて斷ぜんと欲す。諸賢、若し比丘觀ずる時則ち我惡欲を行ぜず念欲せずと知れば、卽便ち歡悅す、「我自ら清淨にして尊法を求學すとて」。この故に歡悅す。是の如く「我行染に染むと爲すや行染に染まずと爲すや、不語・結住すと爲すや、不語・結住せずと爲すや、欺誑・諛諂すと爲すや、欺誑・諛諂せずと爲すや、慳貪・嫉妬すと爲すや慳貪・嫉妬せずと爲すや、無慚・無愧なりと爲すや、無慚・無愧ならずと爲すや、瞋弊・惡意なりと爲すや、瞋弊・惡意ならずと爲すや、瞋瞋・語言すと爲すや、瞋瞋・語言せずと爲すや、比丘の訶するを訶すと爲すや、比丘の訶するを訶せずと爲すや、比丘の輕慢を訶すと爲すや、比丘の輕慢を訶せずと爲すや、比丘の發露を訶すと爲すや、比丘の發露を訶せずと爲すや、更に互に相避くと爲すや、更に互に相避けずと爲すや、外事を說くと爲すや、外事を說かずと爲すや、不語・瞋恚・憎嫉熾盛なりと爲すや不語・瞋恚・憎嫉熾盛ならずと爲すや、惡朋友・惡伴侶なりと爲すや、惡朋友・惡伴侶ならずと爲すや、恩無く恩を知らずと爲すや、恩無く恩を知らざるにあらずと爲すやと」。諸賢、若し比丘觀ずる時則ち、我恩無く恩を知らずと知れば、則ち歡悅せず、すなはち求めて斷ぜんと欲す。諸賢、若し比丘觀ずる時則ち我恩無く恩を知らざるにあらずと知れば、卽便ち歡悅す、「我自ら清淨にして尊法を求學すとて」。この故に歡悅す。諸賢、猶ほ目有る人鏡を以て自ら照し、則ちそ

し我恩無く恩を知らざれば、彼亦我を愛せずと」。比丘是の如く觀じ、恩無く恩を知らざるを行ぜざれば、當に是の如きを學すべし、「諸賢、若しは比丘諸の比丘に請はず、諸尊、我に語り我を教へ我を訶し我を難ずること莫れと」。所以者何。諸賢、或は一人有りて[四]善く語り、善語法を成就す。善語法を成就するが故に、諸の梵行者彼に善く語り、「彼を」善く教へ善く訶し彼の人を難ぜず。諸賢、何者か善語法にして、若し善語法を成就する者有れば諸の梵行者彼に善く語り、「彼を」善く教へ善く訶し彼の人を難ぜざるや。諸賢、或は一人有りて惡欲せず念欲せず。諸賢、若し人有りて惡欲せず念欲せざれば、これを善語法と謂ふ。是の如く染行染・不語・結住せず、欺誑・諛諂せず、慳貪・嫉妬せず、無慚・無愧ならず、瞋弊・惡意ならず、瞋瞋・語言せず、比丘の訶するを訶せず、比丘の輕慢を訶せず、比丘の發露を訶せず。更に互に相避けて而も外事を說かず。不語・瞋恚・憎嫉熾盛ならず、惡朋友・惡伴侶あらず、恩無く恩を知らざるにあらざるも「亦然り」。諸賢、若し人有りて恩無く恩を知らざるにあらざれば、これを善語法と謂ふ。諸賢、これを諸の善語法と謂ひ、若し善語法を成就する者有れば、諸の梵行者彼に善く語り、「彼を」善く教へ善く訶し彼の人を難ぜず。諸賢、比丘は當に自ら思量すべし。「諸賢、若し人有りて惡欲せず念欲せざれば我彼の人を愛す。若し我惡欲せず念欲せざれば彼亦我を愛すと」。比丘是の如く觀じ、惡欲を行ぜず念欲せざれば、當に是の如きを學すべし。是の如く行染に染まず、不語・結住せず、欺誑・諛諂せず、慳貪・嫉妬せず、無慚・無愧ならず、瞋弊・惡意ならず、瞋瞋・語言せず、比丘の訶するを訶せず、比丘の輕慢を訶せず、比丘の發露を訶せず、更に互に相避けて而も外事を說かず、不語・瞋恚・憎嫉熾盛ならず、惡朋友・惡伴侶あらず、恩無く恩を知らざるにあらざるも「亦然り」。「諸賢、若し人有りて恩無く恩を知らざるにあらざれば、我彼の人を愛す。若し我恩無く恩を知らざるにあらざれば彼亦我を愛すと」。比丘是の如く觀じ、恩無く恩を知らざるにあらざれば、當に是の如きを學すべし。「諸賢、若し比丘是の如

【四】「彼善語者たり、善語〔家〕たらしむるの法を具備す」。

卷の第二十三

八十九、比丘請經第三

我が聞きしこと是の如し。ある時佛王舍城に遊び竹林迦蘭哆園に在し、大比丘衆と俱に夏坐を受けたまひぬ。その時尊者大目揵連諸の比丘に告ぐ『諸賢、若しは比丘有りて諸の比丘に請ふ、「諸尊、我に語り我を教へ我を訶して我を難ずること莫れと」。所以者何。諸賢、或は一人有りて戾語に〔於て〕成就し、戾語法に〔於いて〕成就す。戾語法に〔よる〕が故に諸の梵行者をして彼に語らず、〔彼を〕教へず訶せずして而も彼の人を難ぜしむ。諸賢、何者か戾語法にして、若し戾語法を成就する者有れば諸の梵行者彼に語らず〔彼を〕教へず訶せずして而も彼の人を難ずるや。諸賢、或は一人有りて惡欲念欲す。諸賢、若し人有りて惡欲念欲れすば、これを戾語法と謂ふ。是の如く染行染・不語・結住・欺誑・諛諂・慳貪・嫉妬・無慚・無愧・瞋弊・惡意・瞋恚・語言・比丘の訶するを訶し、比丘の輕慢を訶し、比丘の發露を訶し、更に互に相避けて而も外事を說き、不語・瞋恚・憎嫉熾盛に、惡朋友・惡伴侶あり、恩無く恩を知らざるも〔亦然り〕。諸賢、若し人有りて恩無く恩を知らざればこれを戾語法と謂ふ。諸賢、これを諸の戾語法と謂ひ、若し戾語法を成就する者有れば、諸の梵行者彼に語らず、〔彼を〕教へず訶せずして而も彼の人を難ず。諸賢、比丘は當に自ら思量すべし、「諸賢、若し人有りて惡欲念欲すれば、我彼を愛せず。若し、我惡欲念欲すれば、彼亦我を愛せずと」。比丘是の如く觀じ、惡欲を行ぜず、念欲せざれば當に是の如きを學すべし。是の如く染行染・不語・結住・欺誑 諛諂・慳貪・嫉妬・無慚・無愧・瞋弊・惡意・瞋恚・語言・比丘の訶するを訶し、比丘の輕慢を訶し、比丘の發露を訶し、更に互に相避けて而も外事を說き、不語・瞋恚・憎嫉熾盛に、惡朋友・惡伴侶あり、恩無く恩を知らざるも〔亦然り〕。「諸賢、若し人有りて恩無く恩を知らざれば、我彼を愛せず。若

【一】 M. 15. Anumāna-sutta. 「佛說受歲經」。

【二】 Dubbaca.「彼麤詰家たり、麤詰〔家〕たらしむるの法を具備す」。

【三】 巴利文
(1)邪欲あり、邪欲に囚へられたる、
(2)己を讃め他を毀る、
(3)忿ありて忿に制せられたる、
(4)忿あり〔且つ〕忿に因りて恨ある、
(5)忿あり〔且つ〕忿に因りて執著ある、
(6)忿ありて忿に近き語を發する、
(7)訶せられて訶者を却け、
(8)訶せられて却て訶者を難じ、
(9)訶せられて訶者を訶し、
(10)問はるゝに異れる答をなし、
(11)教へらるゝに和せず、
(12)覆藏・惡意・嫉妬・慳貪・欺誑・諛諂・剛愎・過慢あり、
(13)現世の事を專ら宗とし、利得の心堅くして、〔物を〕捨つるを難かる。
國譯大藏論部一四卷「小品」九五頁參照。

覺を得、亦涅槃を得るや諸賢、念欲は惡しく惡念欲亦惡し。彼念欲を斷じ亦惡念欲を斷ず。是の如く恚・怨結・慳嫉・欺誑・諛諂・無慚・無愧・慢・最上慢・貢高・放逸・豪貴・憎諍「亦斷ず。」諸賢、貪惡しく著亦惡し。彼貪を斷じ亦著を斷ず。諸賢、これを中道能く心住を得、定を得、樂を得、法に順ひ法に次ぎ、通を得、覺を得、亦涅槃を得と謂ふ。諸賢、また中道有りて能く心住を得、定を得、樂を得、法に順ひ法に次ぎ、通を得、覺を得、亦涅槃を得。諸賢、云何がまた中道有りて能く心住を得、定を得、樂を得、法に順ひ法に次ぎ、通を得、覺を得、亦涅槃を得るや。謂く八支聖道なり。正見乃至正定これを八と爲す。諸賢、これをまた中道有りて能く心住を得、定を得、樂を得、法に順ひ法に次ぎ、通を得、覺を得、亦涅槃を得と謂ふ』。こゝに於て世尊所患即ち除きて而も安隱を得、臥より寤め起ちて結跏趺坐し、尊者舍梨子を歎じたまひぬ『善き哉、善き哉、舍梨子。諸の比丘の爲に法を說きて如法なり。舍梨子、汝當にまた諸の比丘の爲に法を說きて如法なるべし。舍梨子、汝當に數々諸の比丘の爲に法を說きて如法なるべし』その時世尊諸の比丘に告げたまはく『汝等當に共に法を受くること如法にして誦習執持すべし。所以者何。この法は如法にして法有り義有りて、梵行の本爲り、通を得、覺を得、亦涅槃を得。諸の族姓子、鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道する者、この法如法なるを當に善く受持すべし』。佛說是の如し。尊者舍梨子及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第二十二

師有りて遠離に住するを樂しむも、上弟子遠離に住するを樂しまざれば、上弟子この三事の毀るべき有り。諸賢、若し法律の尊師有りて遠離に住するを樂しむも、中下の弟子遠離に住するを樂しまざれば、中下の弟子三事の毀るべき有り。云何が三と爲す。尊師遠離に住するを樂しむも中下の弟子捨離を學せざれば、中下の弟子こゝを以て毀るべし。尊師可斷の法を說くも、中下の弟子彼の法を斷ぜざれば、中下の弟子こゝを以て毀るべし。證を受くべき所、中下の弟子而も方便を捨つれば、中下の弟子こゝを以て毀るべし、若し法律の尊師有りて遠離に住するを樂しむも、中下の弟子遠離に住するを樂しまざれば、中下の弟子この三事の毀るべき有り。諸賢、若し法律の尊師有りて遠離に住するを樂しみ、上弟子も亦遠離に住するを樂しまば、上弟子三事の稱すべき有り。云何が三と爲す。尊師遠離に住するを樂しみ、上弟子亦捨離を學せば、上弟子こゝを以て稱すべし。尊師若し可斷の法を說き、上弟子すなはち彼の法を斷ぜば、上弟子こゝを以て稱すべし。證を受くべき所、上弟子精進勤學して方便を捨てざれば、上弟子こゝを以て稱すべし。諸賢、若し法律の尊師有りて遠離に住するを樂しみ、上弟子も亦遠離に住するを樂しまば、上弟子この三事の稱すべき有り。諸賢、若し法律の尊師有りて遠離に住するを樂しみ、中下の弟子亦遠離に住するを樂しまば、中下の弟子三事の稱すべき有り。云何が三と爲す。尊師遠離に住するを樂しみ、中下の弟子亦捨離を學せば、中下の弟子こゝを以て稱すべし。尊師若し可斷の法を說き中下の弟子すなはち彼の法を斷ぜば、中下の弟子こゝを以て稱すべし。證を受くべき所、中下の弟子精進勤學して方便を捨てざれば、中下の弟子こゝを以て稱すべし。諸賢、若し法律の尊師有りて遠離に住するを樂しみ、中下の弟子も亦遠離に住するを樂しまば、中下の弟子この三事の稱すべき有り。』尊者舍梨子また諸の比丘に告ぐ『〔二〕諸賢、中道有りて能く心住を得、定を得、樂を得、法に順ひ法に次ぎ、通を得、覺を得、亦涅槃を得。諸賢、云何が中道有りて能く心住を得、定を得、樂を得、法に順ひ、法に次ぎ、通を得、

〔二〕 巴利文「こゝに諸賢、欲は惡なり、恚は惡なり、欲の捨棄のため、恚の捨棄のため、中道あり、眼を生じ智を生じ、安息・上智・正覺・涅槃〔を成むん〕がためのものなり」。

し。世尊向に略して法を說きたまふ「若し法律の尊師有りて遠離に住するを樂しむも、上弟子遠離に住するを樂しまざれば、彼の法律多人を饒益せず、多人樂を得ず、世間を愍傷するを爲さず、亦天の爲、人の爲、義及び饒益を求め安隱快樂を求むるに非ず。若し法律の尊師有りて遠離に住するを樂しむも、中下の弟子遠離に住するを樂しまざれば、彼の法律多人を饒益せず、多人樂を得ず、世間を愍傷するを爲さず、亦天の爲、人の爲、義及び饒益を求め、安隱快樂を求むるに非ず。若し法律の尊師有りて遠離に住するを樂しみ、上弟子も亦遠離に住するを樂しまば、彼の法律多人を饒益し、多人樂を得、世間を愍傷するを爲し、亦天の爲、人の爲、義及び饒益を求め、安隱快樂を求む。若し法律の尊師有りて遠離に住するを樂しみ、中下の弟子も亦遠離に住するを樂しまば、彼の法律多人を饒益し、多人樂を得、世間を愍傷するを爲し、亦天の爲、人の爲、義及び饒益を求め、安隱快樂を求むと。」然るに世尊この法を說くに極めて略したまふ。汝等云何が義を解し、云何が廣く分別するや』。彼の時衆中に或は比丘有りて是の如き說を作しぬ、『尊者舍梨子、若し諸の長老上尊自ら「我究竟智を得、我生已に盡き梵行已に立ち、所作已に辨じ更に有を受けずと如眞を知る」と說かば、諸の梵行者、彼の比丘自ら、我究竟智を得と說くを聞きて、すなはち歡喜を得ん』。また比丘有りて是の如き說を作しぬ、『尊者舍梨子、若し中下の弟子、無上涅槃を求願せば、諸の梵行者彼の行を見已りてすなはち歡喜を得ん』。是の如く彼の比丘[等]而もこの義を說くも尊者舍梨子の意なるべからず。尊者舍梨子、彼の比丘[等]に告ぐ『諸賢等、我が汝[等]が爲に說くを聽け。若し法律の尊師有りて遠離に住するを樂しむも、上弟子遠離に住するを樂しまざれば、上弟子三事の毀るべき有り。云何が三と爲す。尊師遠離に住するを樂しむも、上弟子捨離を學せざれば、上弟子こを以て毀るべし。尊師若し可斷の法を說くも、上弟子彼の法を斷ぜざれば、上弟子こゝを以て毀るべし。證を受くべき所、上弟子而も方便を捨つれば、上弟子こゝを以て毀るべし。若し法律の尊

り。我今寧ろこの食を取るべからずと』。この念を作し已りて卽便ち取らず。彼の比丘この食を取らずして已り、一日一夜苦しみて而も安隱ならずと雖も、但彼の比丘この食を取らざるに因るが故に佛意たるべきを得。所以者何。彼の比丘この食を取らざるに因るが故に、少欲を得、知足を得、養ひ易きを得、滿し易きを得、時を知るを得、節限を得、精進を得、宴坐を得、淨行を得、遠離を得、一心を得、精勤を得、亦涅槃を得。こゝを以て彼の比丘この食を取らざるに因るが故に佛意たるべきを得。これを諸の弟子法を求むるを行ずるが爲の故に而も佛に依りて行じ、飮食を求むるが爲に非ずと謂ふ』。こゝに於て世尊諸の弟子に告げたまはく『若し[九]法律の尊師有りて遠離に住するを樂しむも、[一〇]上弟子遠離に住するを樂しまざれば、彼の法律多人を饒益せず、多人樂を得ず、世間を愍傷するを爲すに非ず、亦天の爲、人の爲、義及び饒益を求め、安隱快樂を求むるに非ず。若し法律の尊師有りて遠離に住するを樂しむも、中下の弟子遠離に住するを樂しまざれば、彼の法律多人を饒益せず、多人樂を得ず、世間を愍傷するを爲すに非ず、亦天の爲、人の爲、義及び饒益を求め、安隱快樂を求むるに非ず。若し法律の尊師有りて遠離に住するを樂しみ、上弟子も亦遠離に住するを樂しまば、彼の法律多人を饒益し、多人樂を得、世間を愍傷するを爲し、亦天の爲、人の爲、義及び饒益を求め安隱快樂を求む。若し法律の尊師有りて遠離に住するを樂しみ、中下の弟子も亦遠離に住するを樂しまば、彼の法律多人を饒益し、多人樂を得、世間を愍傷するを爲し、亦天の爲、人の爲、義及び饒益を求め、安隱快樂を求む』。この時尊者舍梨子亦衆中に在りき。彼の時世尊告げて曰はく『舍梨子、汝諸の比丘の爲に法を說きて如法なるべし。我背痛を患ふ。今小しく息まんと欲す』。尊者舍梨子卽ち佛の敎を受けぬ『唯然り世尊と』。こゝに於て世尊優多羅僧を四疊して以て床上に敷き、僧伽梨を卷きて枕と作し右脇にして臥し、足と足と相累ね光明想を作し、正念正智にして常に念じて起きんと欲したまひぬ。この時尊者舍梨子諸の比丘に告ぐ『諸賢、當に知るべ

【九】法律尊師。巴利文にては單に「師」(Satthā)とす。
【一〇】上弟子（Therā bhikkhū）、中弟子（Majjhimā bhikkhū）、下弟子（Navā bhikkhū）。「增一阿含」にては長老比丘、中比丘、年少比丘となす。

等亦五娑羅村に在りて並びに皆佛の葉屋の邊に近くして住しき。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『汝等當に法を(六)求むるを行ずべし。飲食を求むるを行ずること莫れ。所以者何。我弟子を慈愍するが故に、法を求むるを行じ飲食を求むるを行ぜざらしめんと欲す。若し汝等飲食を求むるを行じて法を求むるを行ぜざれば、汝等既に自ら我を惡み亦名稱無けん。若し汝等法を求むるを行じ飲食を求むるを行ぜざれば、汝等旣に自ら我を好み亦名稱有らん。云何が諸の弟子、飲食を求めんが爲の故に而も佛に依りて行じ、法を求むるが爲に非ざる。我飽食し訖り食事已に辨ずるも猶ほ殘食有り。後に於て二比丘有り、來りて飢渇して力羸る。我彼に語げて曰く「我飽食し訖り食事已に辨ずるも猶ほ殘食有り。汝等食せんと欲せば、すなはち取りてこれを食せ。若し汝[等]取らされば我すなはち取りて以て(八)淨地に瀉著し、或はまた蟲無き水中に瀉著せんと」。彼の二比丘の[うち]第一の比丘すなはちこの念を作す「世尊食し訖り食事已に辨じたまふも猶ほ殘食有り。若し我取らざれば世尊必ず取りて淨地に瀉著し或はまた蟲無き水中に瀉著したまはん。我今寧ろ取りてこれを食すべしと」。即便ち取りて食す。彼の比丘この食を取り已りて一日一夜樂しみて而も安隱を得と雖も、但彼の比丘この食を取るに因るが故に佛意たるべからず。所以者何。彼の比丘この食を取るに因るが故に、少欲を得ず、厭足を知らず、養ひ易きを得ず、滿し易きを得ず、時を知るを得ず、節限を知らず、精進を得ず、宴坐を得ず、淨行を得ず、遠離を得ず、一心を得ず、精勤を得ず、亦涅槃を得ず。こゝを以て彼の比丘、この食を取るに因るが故に佛意たるべからず。これを諸の弟子飲食を求むるを行ずるが爲の故に而も佛に依りて行じ、法を求むるが爲に非ずと謂ふ。云何が諸の弟子、法を求むるを行じ飲食を求むるを行ぜざる。彼の二比丘の[うち]第二の比丘すなはちこの念を作す「世尊食し訖り食事已に辨じたまふも猶ほ殘食有り。若し我取らされば、世尊必ず取りて淨地に瀉著し或は蟲無き水中に瀉著したまはん。又世尊食中の下極を說きたまふもの、謂く殘餘食な

【六】求法(Dhammadāyāda)。
【七】求飲食(Āmisadāyāda)。
【八】「青草なき[地]に棄てん、或は生物棲まざる水に沈めん」。

欺誑嫉妬有り、信無くして懈怠し、正念正智無く定無く慧無く、心狂惑して諸根を護らず沙門を修せず分別する所無し。尊者舍梨子の心彼の心を知るが爲の故に而もこの法を說く。尊者舍梨子、若し人有りて諛諂せず欺誑せず嫉妬無く、信有り精進して而も懈怠無く、正念正智有り、定を修し慧を修し、心狂惑せず諸根を守護し、廣く沙門を修して而も善く分別し、彼、尊者舍梨子の所說の法を聞けば、猶ほ飢ゑては食を得んと欲し、渴しては口及び意を飮するを得んと欲するがごとし。尊者舍梨子、猶ほ刹利の女・梵志・居士・工師の女のごとし。端正姝好、極めて淨く沐浴し、香を以て身に塗り明淨衣を著け、種種の瓔珞もてその容を嚴飾し、或はまた人有り彼の女を念ずるが爲に、利及び饒益を求め、安隱快樂を求め、青蓮華鬘、或は薝蔔華鬘、或は修摩那華鬘、或は婆師華鬘、或は阿提牟哆華鬘を以て持ちて彼の女に與へ、彼の女歡喜し兩手もてこれを受け以てその頭を嚴るがごとし。尊者舍梨子、是の如く若し人有りて諛諂せず欺誑せず、嫉妬無く信有り精進して而も懈怠せず、正念正智有り、定を修し慧を修し、心狂惑せず諸根を守護し、廣く沙門を修して而も善く分別し、彼、尊者舍梨子の所說の法を聞けば猶ほ飢ゑては食を欲し、渴しては口及び意を飮するを得んと欲するがごとし。尊者舍梨子、甚奇甚特なり。尊者舍梨子、常に諸の梵行者を拔濟し、不善を離れ善處に安立せしむ』と。是の如く二尊更に相稱說し座より起ちて去りぬ。尊者舍梨子の所說是の如し。尊者大目揵連及び諸の比丘、尊者舍梨子の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

八十八、求法經第二[一]

我が聞きしこと是の如し。ある時[二]佛拘娑羅國に遊び、大比丘衆と倶に[三]五娑羅村の北、尸攝惒林中に往詣したまひぬ。及び諸の名德・上尊・長老大弟子等、謂く尊者舍梨子・尊者大目揵連・尊者大迦葉・尊者[四]大迦旃延・尊者阿那律陀・[五]尊者麗越・尊者阿難、是の如き比の餘の名德・上尊・長老大弟子

【一】M. 3. Dhammadāyāda-sutta.「增一阿含」一八品の三。
【二】拘娑羅(Kosala)。
【三】五娑羅(Pañcasālā)。
【四】大迦旃延(Mahā-kaccāyana)。
【五】麗越(Revata)。舊曰、離婆多。

則ち淨想を生ず。彼若し本食を用ひざる者見已りて食せんと欲す。況やまたその本食を得んと欲するをや。賢者、是の如く彼の人若し諸の智[者]、梵行者有り、彼是の如き無量の善なる心欲を生ずと知らされば、是の如くして彼沙門なるを沙門に非ずと想ひ、智沙門なるを智沙門に非ずと想ひ、正智なるを正智に非ずと想ひ、正念なるを正念に非ずと想ひ、清淨なるを清淨に非ずと想ふ。賢者、是の如く彼の人若し諸の智[者]、梵行者有り、彼是の如き無量の善なる心欲を生ずと知れば、是の如くして彼沙門なるを沙門と想ひ、智沙門なるを智沙門と想ひ、正智なるを正智と想ひ、正念なるを正念と想ひ、清淨なるを清淨と想ふ。賢者、當に知るべし、是の如き人應にこれに親近して恭敬禮事すべし。若し比丘應に親近すべくばすなはち親近し、應に恭敬禮事すべくばすなはち恭敬禮事せよ。是の如くして彼すなはち長夜に利を得、義を得、則ち饒益・安隱・快樂を得、亦苦無く憂愁慼無きを得』。その時尊者大目揵連彼の衆中に在りき。こゝに於て尊者大目揵連白して曰く『尊者舍梨子、我今この事の爲に喩を說かんと欲す。我が說くを聽すや』。尊者舍梨子告げて曰く『賢者大目揵連、喩を說かんと欲せばすなはちこれを說くべし』。尊者大目揵連則便ち白して曰く『尊者舍梨子、我憶ふにある時王舍城に遊び巖山中に在りき。我その時に於て夜を過ぎて平旦、衣を著け鉢を持して王舍城に入りて乞食を行じ、[一八]舊の車師無衣滿子の家に詣る。時に彼の[一九]比舍に更に車師有りて車軸を斫治す。この時舊の車師無衣滿子彼の家に往至す。こゝに於て舊の車師無衣滿子、彼の軸を治するを見て心にこの念を生ず「若し彼の車師斧を執りて軸を治し彼彼の惡處を斫らば、是の如くして彼の軸すなはち當に極めて好かるべしと」。時に彼の車師即ち舊の車師無衣滿子の心中に念ずる所の如くすなはち斧を持ちて彼彼の惡處を斫る。こゝに於て舊の車師無衣滿子極めて大いに歡喜してこの說を作す「車師子、汝が心是の如くなれば、則ち我が心を知る。所以者何。汝斧を持ちて車軸の彼彼の惡處を斫治すること、我が意の如くなるを以ての故にと」。是の如く尊者舍梨子、若し諛諂

【一八】舊車師無衣滿子（Paṇḍuputta ājīvaka purāṇayānakāraputta）。パンツ（滿）の子にして、もと車大工の子たり、今は裸形外道となれるもの。

【一九】「比舍」の意不明、隣家の意か。彼（か）の比（ころほひ）、舍（いへ）に、と讀むべきか。

臣・梵志・居士・國中の人民の知り重んずる所と爲るに因るが故に、心惡を生ぜず。若し彼心に惡無く心に欲を生ぜざれば、この二俱に善なり。賢者、(10)或は一人有り、心に是の如き欲を生ぜず「我をして四衆、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆私の敬重する所爲らしめ、餘の比丘をして四衆、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆私の敬重する所爲らしむること莫れと」。賢者、或は餘の比丘有り、四衆、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆私の敬重する所と爲る。彼、餘の比丘四衆、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆私の敬重する所と爲るに因るが故に、心惡を生ぜず。若し彼心に惡無く心に欲を生ぜざれば、この二俱に善なり。賢者、(11)或は一人有り、心に是の如き欲を生ぜず「我をして衣被・飲食・床褥・湯藥、諸の生活の具を得しめ、餘の比丘をして衣被・飲食・床褥・湯藥、諸の生活の具を得しむること莫れと」。賢者、或は餘の比丘有り、衣被・飲食・床褥・湯藥、諸の生活の具を得。彼、餘の比丘、衣被・飲食・床褥・湯藥、諸の生活の具を得るに因るが故に心惡を生ぜず、若し彼心に惡無く心に欲を生ぜざれば、この二俱に善なり。賢者、是の如く彼の人若し諸の智[者]、梵行者有り、彼是の如き無量の善なる心欲を生ずるを知らざれば、是の如くして彼沙門なるを沙門に非ずと想ひ、智沙門なるを智沙門に非ずと想ひ、正智なるを正智に非ずと想ひ、正念なるを正念に非ずと想ひ、清淨なるを清淨に非ずと想ふ。賢者、是の如く彼の人若し諸の智[者]、梵行者有り、彼是の如き無量の善なる心欲を生ずと知れば、是の如くして彼沙門なるを沙門と想ひ、智沙門なるを智沙門と想ひ、正智なるを正智と想ひ、正念なるを正念と想ひ、清淨なるを清淨と想ふ。賢者、猶ほ人有り、或は市肆より或は銅作家より銅合槃を買ひ來り、種々の淨美の飲食を盛滿してその上を蓋覆し、すなはち持ちて去り店肆を經過し衆人に近づきて行くが如し。彼の衆見已りて皆食するを欲せず愛樂の意無く、甚だこれを憎惡し不淨想を生じ、すなはちこの說を作す「即ち彼の糞去れ、即ち彼の糞去れと」。彼持ち去り已りて一處に住まりすなはちこれを開示す。衆人見已りて則ち皆食するを得んと欲し、意甚だ愛樂して而も憎惡せず、

一の座、第一の澡水を得、第一の食を得しむること莫れと」。賢者、或は餘の比丘有り、諸の比丘已に內に入りし時、最も上坐に在りて第一の座、第一の澡水を得、第一の食を得。彼、餘の比丘、諸の比丘已に內に入りし時、最も上坐に在りて第一の座、第一の澡水を得、第一の食を得るに因るが故に、心惡を生ぜず。若し彼心に惡無く欲を生ぜざれば、この二倶に善なり。賢者、(7)或は一人有り、心に是の如き欲を生ぜず「諸の比丘食し竟り食器を收攝し澡水を行じ已りて我、諸の居士の爲に法を說き、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、餘の比丘、諸の比丘食し竟り食器を收攝し澡水を行じ已りて諸の居士の爲に法を說き、勸發・渴仰・成就・歡喜せしむること莫れと。」賢者、或は餘の比丘有り、諸の比丘食し竟り食器を收攝し澡水を行じ已りて諸の居士の爲に法を說き、勸發・渴仰・成就・歡喜せしむ。彼、餘の比丘、諸の比丘食し竟り食器を收攝し澡水を行じ已りて諸の居士の爲に法を說き勸發・渴仰・成就・歡喜せしむるに因るが故に、心惡を生ぜず。若し彼心に惡無く欲を生ぜざれば、この二倶に善なり。賢者、(8)或は一人有り、心に是の如き欲を生ぜず「諸の居士、衆の園に往詣する時、我をして「彼等と」與に共に會し共に集まり共に坐し共に論ぜしめ、餘の比丘をして諸の居士、衆の園に往詣する時、「彼等と」與に共に會し共に集まり共に坐し共に論ぜしむること莫れと」。賢者、或は餘の比丘有り、諸の居士、衆の園に往詣する時、「彼等と」與に共に會し共に集まり共に坐し共に論ず。彼、餘の比丘諸の居士、衆の園に往詣する時、「彼等と」與に共に會し共に集まり共に坐し共に論ずるに因るが故に、心惡を生ぜず。若し彼心に惡無く心に欲を生ぜざれば、この二倶に善なり。賢者、(9)或は一人有り、心に是の如き欲を生ぜず「我をして王者の識る所及び王・大臣・梵志・居士・國中の人民の知り重んずる所爲らしめ、餘の比丘をして王者の識る所及び王・大臣・梵志・居士・國中の人民の知り重んずる所爲らしむること莫れと」。賢者、或は餘の比丘有り、王者の識る所及び王・大臣・梵志・居士・國中の人民の知り重んずる所と爲る。彼、餘の比丘、王者の識る所及び王・大

く心に欲を生ぜざれば、この二俱に善なり。賢者、(2)或は一人有り、心に是の如き欲を生ぜず「我が犯す所の戒、當に他人をして屛處に於て訶せしむべく、衆に在りて我が戒を犯すを訶せしむること莫れと」。賢者、或は他人有り、衆の中に於て訶し屛處在りて「せず」。彼衆の中に在りて訶し屛處に在りて「せざる」に因るが故に、心惡を生ぜず。若し彼心に惡無く心に欲を生ぜざれば、この二俱に善なり。賢者、(3)或は一人有り、心に是の如き欲を生ぜず「我が犯す所の戒、勝人をして訶せしめ、不如人をして我が戒を犯すを訶せしむること莫れと」。賢者、或は不如人有り、彼の戒を犯すを訶し、これ勝人に非ず。彼、不如人訶し、勝人に非ざるに因るが故に、心すなはち惡を生ぜず。若し彼心に惡無く心に欲を生ぜざれば、この二俱に善なり。賢者、(4)或は一人有り、心に是の如き欲を生ぜず「我をして佛の前に在りて坐し、世尊に法を問ひ、諸の比丘の爲に說かしめ、餘の比丘をして佛の前に在りて坐し、世尊に法を問ひ、諸の比丘の爲に說かしむること莫れと」。賢者、或は餘の比丘有り、佛の前に在りて坐し、世尊に法を問ひ、諸の比丘の爲に說く。彼、餘の比丘佛の前に在りて坐し、世尊に法を問ひ、諸の比丘の爲に說くに因るが故に、心惡を生ぜず。若し彼心に惡無く心に欲を生ぜざれば、この二俱に善なり。賢者、(5)或は一人有り、心に是の如き欲を生ぜず「諸の比丘內に入る時、我をして最もその前に在らしめ、諸の比丘侍し從ひ、我將ゐて內に入り、餘の比丘をして諸の比丘內に入る時、最もその前に在りて諸の比丘侍し從ひ、彼將ゐて內に入らしむること莫れと」。賢者、或は餘の比丘有り、諸の比丘內に入る時最もその前に在り、諸の比丘侍し從ひ彼將ゐて內に入る。彼、餘の比丘諸の比丘內に入る時最もその前に在り、諸の比丘侍し從ひ彼將ゐて內に入るに因るが故に、心惡を生ぜず。若し彼心に惡無く欲を生ぜざれば、この二俱に善なり。賢者、(6)或は一人有り、心に是の如き欲を生ぜず「諸の比丘已に內に入りし時、我をして最も上坐に在りて第一の座、第一の澡水を得、第一の食を得しめ、餘の比丘をして諸の比丘已に內に入りし時、最も上坐に在りて第

非ざるを正智と想ひ、正念に非ざるを正念と想ひ、清淨に非ざるを清淨と想ふ。賢者、是の如く彼の人若し諸の智[者]梵行者有り、彼是の如き、無量の惡不善の心欲を生ずるを知れば、是の如くして彼沙門に非ざるを沙門に非ずと想ひ、智沙門に非ざるを智沙門に非ずと想ひ、正智に非ざるを正智に非ずと想ひ、正念に非ざるを正念に非ずと想ひ、清淨に非ざるを清淨に非ずと想ふ。賢者、猶ほ人有り、或は市肆より或は銅作家より銅合槃を買ひ來りて中に糞を盛滿してその上を蓋覆し、すなはち持ちて去り、店肆を經過し衆人に近づきて行くが如し。彼の衆見已りて皆食するを得んと欲し、意甚だ愛樂して而も憎惡せず、則ち淨想を生ず。彼持ち去り已り住まりて一處に在り、すなはちこれを開示す。衆人見已りて皆食するを欲せず愛樂の意無く、甚だこれを憎惡し不淨想を生ず。若し食するを欲する者は則ちまた用ひず。況やその本自ら食するを欲せざるをや。賢者、是の如く彼の人若し諸の智[者]、梵行者有り、彼是の如き無量の惡不善の心欲を生ずるを知らざれば、是の如くして彼沙門に非ざるを沙門と想ひ、智沙門に非ざるを智沙門と想ひ、正智に非ざるを正智と想ひ、正念に非ざるを正念と想ひ、清淨に非ざるを淨清と想ふ。賢者、是の如く彼の人若し諸の智[者]梵行者有り、彼是の如き無量の惡不善の心に欲を生ずるを知れば、是の如くして彼沙門に非ざるを沙門に非ずと想ひ、智沙門に非ざるを智沙門に非ずと想ひ、正智に非ざるを正智に非ずと想ひ、正念に非ざるを正念に非ずと想ひ、清淨に非ざるを清淨に非ずと想ふ。賢者、當に知るべし、是の如き人、親近するを得ること莫れ、恭敬禮事すること莫れ。若し比丘應に親近すべからずしてすなはち親近し、應に恭敬禮事すべからずして恭敬禮事すれば、是の如くして彼すなはち長夜に利無く義無きを得、則ち饒益せず、安隱快樂ならず、苦を生じ憂慼す。賢者、(1)或は一人有り、心に是の如き欲を生ぜず「我が犯す所の戒、他人をして我が戒を犯すを知らしむること莫れと」。賢者、或は他人有り、彼の戒を犯すを知る。彼、他人戒を犯すを知るに因るが故に心惡を生ぜず。若し彼心に惡無

る時、[彼等と]與に共に會し、共に集まり共に坐し共に論ぜしむること莫れと」。賢者、或は餘の比丘有り、諸の居士、衆の園に往詣する時、[彼等と]與に共に會し共に集まり共に坐し共に論ず。彼、餘の比丘、諸の居士、衆の園に往詣する時、[彼等と]與に共に會し共に集まり共に坐し共に論ずるに因るが故に、心すなはち惡を生ず。若し彼心に惡を生じ及び心に欲を生ぜば倶にこれ不善なり。賢者、(9)或は一人有り、心に是の如き欲を生ず「我をして王者の識る所、及び王・大臣・梵志・居士・國中の人民の知り重んずる所爲らしめ、餘の比丘をして王者の識る所、及び王・大臣・梵志・居士・國中の人民の知り重んずる所爲らしむること莫れと」。賢者、或は餘の比丘有り、王者の識る所、及び王・大臣・梵志・居士・國中の人民の知り重んずる所と爲る。彼、餘の比丘、王者の識る所、及び王・大臣・梵志・居士・國中の人民の知り重んずる所と爲るに因るが故に、心すなはち惡を生ず。若し彼心に惡を生じ及び心に欲を生ぜば倶にこれ不善なり。賢者、(10)或は一人有り、心に是の如き欲を生ず「我をして四衆、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆私の敬重する所爲らしめ、餘の比丘をして四衆、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆私の敬重する所爲らしむること莫れと」。賢者、或は餘の比丘有り、四衆、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆私の敬重する所と爲る。彼、餘の比丘、四衆、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆私の敬重する所と爲るに因るが故に、心すなはち惡を生ず。若し彼心に惡を生じ及び心に欲を生ぜば倶にこれ不善なり。賢者、(11)或は一人有り、心に是の如き欲を生ず「我をして衣被・飲食・床褥・湯藥・諸の生活の具を得しめ、餘の比丘をして衣被・飲食・床褥・湯藥・諸の生活の具を得しむること莫れと」。賢者、或は餘の比丘有り、衣被・飲食・床褥・湯藥・諸の生活の具を得。彼、餘の比丘、衣被・飲食・床褥・湯藥・諸の生活の具を得るに因るが故に、心すなはち惡を生ず、若し彼心に惡を生じ及び心に欲を生ぜば倶にこれ不善なり。賢者、是の如く彼の人若し諸の智[者]梵行者有り、彼是の如き無量の惡不善の心欲を生ずるを知らざれば、是の如くして彼沙門に非ざるを沙門と想ひ、智沙門に非ざるを智沙門と想ひ、正智に

如き欲を生ず「諸の比丘内に入る時、我をして最も前に在らしめ、諸の比丘侍し從ひ我將ゐて內に入り、餘の比丘をして諸の比丘内に入る時、最も前にありて諸の比丘侍し從ひ、彼將ゐて內に入らしむること莫れと」。賢者、或は餘の比丘有り、諸の比丘内に入る時、最もその前に在り、諸の比丘侍し從ひ、彼[一四]將ゐて內に入る。彼、餘の比丘、諸の比丘內に入る時、最もその前に在り、諸の比丘侍し從ひ、彼將ゐて內に入るに因るが故に、心すなはち惡を生ず。若し彼心に惡を生じ及び心に欲を生ぜば倶にこれ不善なり。賢者、(6)或は一人有り、心に是の如き欲を生ず「諸の比丘已に內に入りし時、我をして最も上坐に在りて第一の座、第一の澡水を得、第一の食を得しめ、餘の比丘をして諸の比丘已に內に入りし時、最も上坐に在りて第一の座、第一の澡水を得、第一の食を得しむること莫れと」。賢者、或は餘の比丘有り、諸の比丘已に內に入りし時、最も上坐に在りて第一の座、第一の澡水を得、第一の食を得。彼、餘の比丘、諸の比丘已に內に入りし時、最も上坐に在りて第一の座、第一の澡水を得、第一の食を得るに因るが故に、心すなはち惡を生ず。若し彼心に惡を生じ及び心に欲を生ぜば倶にこれ不善なり。賢者、(7)或は一人有り、心に是の如き欲を生ず「諸の比丘、食し竟り、食器を收攝し澡水を行じ已りて、我、[一五]諸の居士の爲に法を說き、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、餘の[一六]比丘、諸の比丘食し竟り、食器を收攝し澡水を行じ已りて、諸の居士の爲に法を說き、勸發・渴仰・成就・歡喜せしむること莫れと」。賢者、或は餘の比丘有り、諸の比丘食し竟り、食器を收攝し澡水を行じ已りて、諸の居士の爲に法を說き、勸發・渴仰・成就・歡喜せしむ。彼、餘の比丘、諸の比丘食し竟り、食器を收攝し澡水を行じ已りて、諸の居士の爲に法を說き、勸發・渴仰・成就・歡喜せしむるに因るが故に、心すなはち惡を生ず。若し彼心に惡を生じ及び心に欲を生ぜば倶にこれ不善なり。賢者、(8)或は一人有り、心に是の如き欲を生ず「諸の居士、[一七]衆の園に往詣する時、我をして「彼等と」與に共に會し、共に集まり共に坐し共に論ぜしめ、餘の比丘をして諸の居士、衆の園に往詣す

【一四】卽ち餘他の比丘。

【一五】原漢文「令我爲諸居士云々」の令を除きたり。

【一六】原漢文「莫令餘比丘諸比丘食竟云々」の令字を除きたり。

【一七】比丘衆の住める精舍、所謂僧伽藍なり。

るに因るが故に。賢者、これに因りこれに緣りて前の[九]二人倶に穢有り穢汚心なるに、一は下賤にして一は最も勝ると說き、これに因りこれに緣りて後の[一〇]二人倶に[一一]穢無く、穢汚心[ならざる]に、一は下賤にして一は最も勝ると說く。ここに於てまた比丘有り、卽ち坐より起ち偏に著衣を袒ぎ叉手を尊者舍梨子に向け白して曰く『尊者舍梨子、說く所の穢は何等を穢と爲すや』。尊者舍梨子比丘に答へて曰く、『賢者、[一二]無量の惡不善の法は欲より生ず。これを穢と謂ふ。所以者何。(1)或は一人有り、心に是の如き欲を生ず「我が犯す所の戒、他人をして我が戒を犯すを知らしむること莫れと」。賢者、或は他人有り、彼の戒を犯すを知る。彼、他人戒を犯すを知るに因るが故に心すなはち惡を生ず。若し彼心に惡を生じ及び心に欲を生ぜば倶にこれ不善なり。賢者、(2)或は一人有り、心に是の如き欲を生ず「我が犯す所の戒、當に他人をして屛處に於て訶せしむべく、衆に在りて我が戒を犯すを訶せしむること莫れと」。賢者或は他人有り、衆の中に於て訶し、屛處に在らず。彼、他人衆の中に在りて訶し、屛處に在らざるに因るが故に、心すなはち惡を生ず。若し彼心に惡を生じ及び心に欲を生ぜば倶にこれ不善なり。賢者、(3)或は一人有り、心に是の如き欲を生ず「我が犯す所の戒、[一三]勝人をして訶せしめ、不如人をして我が戒を犯すを訶せしむること莫れと」。賢者、或は不如人有り、彼の戒を犯すを訶し、これ勝人に非ず。彼、不如人訶し勝人に非ざるに因るが故に、心すなはち惡を生ず。若し彼心に惡を生じ及び心に欲を生ぜば倶にこれ不善なり。賢者、(4)或は一人有り、心に是の如き欲を生ず「我をして佛の前に在りて坐し、世尊に法を問ひ、諸の比丘の爲に說かしめ、餘の比丘をして佛の前に在りて坐し、世尊に法を問ひ、諸の比丘の爲に說かしむること莫れと」。賢者或は餘の比丘有り、佛の前に在りて坐し、世尊に法を問ひ、諸の比丘の爲に說く。彼、餘の比丘佛の前に在りて坐し世尊に法を問ひ、諸の比丘の爲に說くに因るが故に、心すなはち惡を生ず。若し彼心に惡を生じ及び心に欲を生ぜば倶にこれ不善なり。賢者、(5)或は一人有り、心に是の

【九】(1)と(2)。

【一〇】(3)と(4)。

【一一】原本「無穢穢汚心」なれど、「無穢」の次に「不」を脫せるか。

【一二】「增一」には「惡不善の法は諸の邪見を起すが故に名けて穢となす」。

【一三】「增一」にては清淨比丘、不清淨比丘。巴利文にては同級の人(Sappatipuggala)、劣級の人(Appatipuggala)。

るべし、彼の人眼耳に由る所知法を護らず。彼眼耳に由る所知法を護らざるに因るが故に、則ち欲心の纒と爲る。彼すなはち欲有り、穢有り穢汚心にして命終る。所以者何。彼欲有り穢有り穢汚心にして命終るに因るが故に、すなはち不賢にして死し不善處に生ず。所以者何。彼欲有り穢有り穢汚心にして命終るに因るが故に。賢者、猶ほ人有り、或は市肆より或は銅作家より銅槃を買ひ來るに、無垢淨潔なり。彼持ち來り已りて數ば洗塵せず數ば揩拭せず、數ば日に炙らず塵穢き處に著き、是の如くして銅槃必ず塵垢を受くるが如し。賢者、是の如く若し一人有り、我が內に穢無くして、我が內實にこの穢無しと如眞を知らざれば、當に知るべし、彼の人眼耳に由る所知法を護らず。彼眼耳に由る所知法を護らざるに因るが故に、則ち欲心の纒と爲り、彼すなはち欲有り穢有り穢汚心にして命終る。彼欲有り穢有り穢汚心にして命終るに因るが故にすなはち不賢にして死し不善處に生ず。所以者何。彼欲有り穢有り穢汚心にして命終るに因るが故に。(4)賢者、若し一人有り、我が內に穢無くして、我が內實にこの穢無しと如眞を知れば、當に知るべし、彼の人眼耳に由る所知法を護る。彼眼耳に因る所知法を護るに因るが故に、則ち欲心の纒と爲らず、彼すなはち欲無く穢無く穢汚心ならずして命終る。彼欲無く穢無く穢汚心ならずして命終るに因るが故に、すなはち賢にして死し善處に生ず。所以者何。彼欲無く穢無く穢汚心ならずして命終るに因るが故に。賢者、猶ほ人有り、或は市肆より或は銅作家より銅槃を買ひ來るに無垢淨潔なり。彼持ち來り已りて數數洗磨し數數揩拭し、數數日に炙り塵穢き處に著かず、是の如くして銅槃すなはち極めて淨潔なるが如し。賢者、是の如く若し一人有り、我が內に穢無くして、我が內實にこの穢無しと如眞を知れば、當に知るべし、彼の人眼耳に由る所知法を護る。彼眼耳に由る所知法を護るに因るが故に則ち欲心の纒と爲らず、彼すなはち欲無く穢無く穢汚心ならずして命終る。彼欲無く穢無く穢汚心ならずして命終るに因るが故に、すなはち賢にして死し善處に生ず。所以者何。彼欲無く穢無く穢汚心ならずして命終

て尊者舍梨子彼の比丘に答へて曰く『(1)賢者、若し一人有り、內實に穢有るも自ら知らず、內に穢有りと如眞を知らざれば、當に知るべし、彼の人穢を斷ぜんと欲せず、方便を求めず、精勤して學せず、彼すなはち[七]穢有り穢汚心にして命終る。彼穢有り穢汚心にして命終るに因るが故にすなはち不賢にして死し不善處に生ず。所以者何。彼穢有り穢汚心にして命終るに因るが故に。賢者、猶ほ人有り、或は市肆より或は銅作家より[八]銅槃を買ひ來るに塵垢に汚さる。彼持ち來り已りて數ば洗磨せず、數ば揩拭せず、亦日に炙らず、又塵饒き處に著くに、是の如くして銅槃增す塵垢を受くるが如し。賢者、是の如く若し一人有り、內實に穢有るも自ら知らず、內に穢有りと如眞を知らざれば、當に知るべし、彼の人穢を斷ぜんと欲せず、方便を求めず、精勤して學せず、彼すなはち穢有り穢汚心にして命終る。彼穢有り穢汚心にして命終るに因るが故にすなはち不賢にして死し不善處に生ず。所以者何。彼穢有り穢汚心にして命終るに因るが故に。(2)賢者、若し一人有り、我が內に穢有りて、我が內實にこの穢有りと如眞を知れば、當に知るべし、彼の人この穢を斷ぜんと欲し、方便を求め、精勤して學し、彼すなはち穢無く穢汚心ならずして命終る。彼穢無く穢汚心ならずして命終るに因るが故に、すなはち賢にして死し善處に生ず。所以者何。彼穢無く穢汚心ならずして命終るに因るが故に。賢者、猶ほ人有り、或は市肆より或は銅作家より銅槃を買ひ來るに塵垢に汚さる。彼持ち來り已りて數數洗塵し數數揩拭し、數數日に炙り、塵饒き處に著かず、是の如くして銅槃すなはち極めて淨潔なるが如し。賢者、是の如く若し一人有り、我が內に穢有りて、我が內實にこの穢有りと如眞を知れば、當に知るべし、彼の人この穢を斷ぜんと欲し、方便を求め、精勤して學し、彼すなはち穢無く穢汚心ならずして命終る。彼穢無く穢汚心ならずして命終るに因るが故にすなはち賢にして死し善處に生ず。所以者何。彼穢無く穢汚心ならずして命終るに因るが故に。(3)賢者、若し一人有り、我が內に穢無くして、我が內實にこの穢無しと如眞を知らざれば、當に知

【七】。有穢(Sāṅgaṇa)、穢汚心(Sāṅkiliṭṭhacitta)。

【八】 巴利文によれば銅製の鉢、こゝにては銅の槃、たらひの類か。

卷の第二十二

穢品第三（十經あり）

穢〔品〕・求〔法〕・比丘請・知〔法〕・周那問見、〔青白蓮〕華喩・水淨梵〔志〕・黑〔比丘〕・住法・無は後に在り。

八十七、穢品經第一[一]

我が聞きしこと是の如し。ある時佛　婆奇瘦に遊び、鼉山・怖林・鹿野園中に在しぬ。その時尊者舍梨子諸の比丘に告ぐ『諸賢、世に四種の人有り。云何が四と爲す。(1)或は一人有り、內實に[三]穢有るも自ら知らず、內に穢有りと如眞を知らず。(2)或は一人有り、內實に穢有りて自ら知り、內に穢有りと如眞を知る。(3)或は一人有り、內實に穢無きも自ら知らず、內に穢無しと如眞を知らず。(4)或は一人有り、內實に穢無くして自ら知り、內に穢無しと如眞を知る。(1)諸賢、若し一人有り、內實に穢有るも自ら知らず、內に穢有りと如眞を知らざれば、この人諸の人の中に於て最も下賤と爲す。(2)若し一人有り、內實に穢有りて自ら知り、內に穢有りと如眞を知れば、この人諸の人の中に於て最も勝ると爲す。(3)若し一人有り、內實に穢無きも自ら知らず、內に穢無しと如眞を知らざれば、この人諸の人の中に於て最も下賤と爲す。(4)若し一人有り、內實に穢無くして自ら知り、內に穢無しと如眞を知れば、この人諸の人の中に於て最も勝ると爲す。』こゝに於て[四]一比丘有り、即ち坐より起ち偏に著衣を袒ぎ叉手を尊者舍梨子に向け白して曰く『尊者舍梨子、何に因り何に緣りて前の[五]二人倶に穢有り穢汚心なるに、一は下賤にして一は最も勝ると說き、また何に因り何に緣りて後の[六]二人倶に穢無く穢汚心ならざるに、一は下賤にして一は最も勝ると說くや』。ここに於

【一】 M. 5. Anaṅgaṇa-sutta.「求欲經」、「增一阿含」二五品の六。
【二】 これ等名詞の巴利名及び註は一八卷「八念經」註を見よ。巴利文アナンガナスッタは祇園精舍に於て說かれたりとなし、「增一」は迦蘭陀竹園となす。
【三】 穢(Aṅgaṇa)。「增一」にては結とす。「第一人は結と相隨ふ、然るに內に結ありて而も知らず」。
【四】 巴利文及「增一」にては尊者大目犍連この問を提起す。
【五】 (1)と(2)。(1)は下賤、(2)は最勝。
【六】 (3)と(4)。(3)は下賤、(4)は最勝。

爲に處を說き及び處を教へ、頂法及び頂法退[を教ふ]。尊師の弟子の爲にする所の如く大慈哀を起し、憐念愍傷し、義及び饒益を求め安隱快樂を求むるは我今已に作しぬ。汝等當にまた自ら作すべし。無事處・山林・樹下・空・安靜處に至り宴坐思惟し放逸を得ること勿れ。勤加精進して後悔せしむること莫れ。こはこれ我の教勅なり。これ我が訓誨なり』。佛說是の如し。尊者阿難及び諸の年少の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

陰・內・外・識・更[樂]・覺・想・思・愛・界・因緣・念[處]・正斷・如意[足]・禪・[聖]諦・想・無量・無色・[聖]種・沙門果・[熟]解脫・[解脫]處・根・力・出要[界]・財・力・覺[支]・[聖]道・頂[法]・

中阿含經卷第二十一

（槃二十一）說處經第十五

【三】攝頌なり。上の三十頂悉く擧ぐ。

て彼「等」を教ふべし。若し諸の年少の比丘の爲にこの八支聖道を說き教ふれば、彼「等」すなはち安隱を得、力を得、樂を得、身心煩熱せず終身梵行を行ぜん』。こゝに於て尊者阿難、叉手を佛に向け白して曰く『世尊、甚奇甚特なり。世尊諸の年少の比丘の爲に處を說き及び處を教へたまふ』。世尊、告げて曰はく『阿難、是の如し、是の如し、甚奇甚特なり。我諸の年少の比丘の爲に處を說き及び處を教ふ。阿難、若し汝如來よりまた頂法及び頂法退を問はゞ汝すなはち如來に於て極信歡喜せん』。こゝに於て尊者阿難叉手を佛に向け白して曰く『世尊、今正にこの時なり。善逝、今正にこの時なり。若し世尊、諸の年少の比丘の爲に頂法及び頂法退の說を說き及び教へたまはば我及び諸の年少の比丘、世尊より聞き已りて當に善く受持せん』。世尊告げて曰はく『(31)阿難、汝等諦かに聽け、善くこれを思念せよ。我當に汝及び諸の年少の比丘の爲に頂法及び頂法退を說くべし』。尊者阿難等教を受けて聽きぬ。世尊告げて曰はく『阿難、多聞の聖弟子、眞實に心に因りて無常・苦・空・非我を思念し稱量し善觀し分別す。彼是の如く思念し是の如く稱量し是の如く善觀し分別し、すなはち忍を生じ樂を生じ欲を生じ、聞を欲し念を欲し觀を欲す。阿難、これを頂法と謂ふ。阿難、若しこの頂法を得るもまた失ひて衰退し、守護を修せず、精勤を習はざれば、阿難、これを頂法退と謂ふ。是の如く內・外・識・更樂・覺・想・思・愛・界・因緣起「亦然り」阿難、多聞の聖弟子、この因緣起及び因緣起法「に於て」無常・苦・空・非我を思念し、稱量し善觀し分別す。彼是の如く思念し、是の如く稱量し、是の如く善觀し分別し、すなはち忍を生じ樂を生じ欲を生じ、聞を欲し念を欲し觀を欲す。阿難、これを頂法と謂ふ。阿難、若しこの頂法を得るもまた失ひて衰退し、守護を修せず、精勤を習はざれば、阿難、これを頂法退と謂ふ。阿難、この頂法及び頂法退、汝當に諸の年少の比丘の爲に說きて以て彼「等」を教ふべし。若し諸の年少の比丘の爲にこの頂法及び頂法退を說き教ふれば、彼「等」すなはち安隱を得、力を得、樂を得、身心煩熱せず、終身梵行を行ぜん。阿難、我汝等が

たまた舒張するを得ざるが如し。阿難、多聞の聖弟子亦復是の如く極めて重く善く己身を觀ず。彼極めて重く善く己身を觀ずるに因るが故に、心すなはち己身に向はず、己身を樂しまず、己身に近づかず、己身を信解せず。若し己身心生ずれば、卽時に融消し燋縮し、轉たまた舒張するを得ず。捨離して己身に住せず、己身を穢惡し厭患し、己身無きを觀じ、心己身無きに向ひ、己身無きを樂しみ己身無きに近づき己身無きを信解し、心礙無く心濁無く心樂を得、能く樂を致す。一切の己身及び己身に因りて生ずる諸の漏・煩熱・憂慼を遠離し、彼を解き彼を脫し、また彼を解脫す。彼またこの覺を受けず、謂く覺は己身に因りて生ずと。是の如きは己身の出要なり。阿難、これを第五出要界と謂ふ。阿難、この五出要界、汝當に諸の年少の比丘の爲に說きて以て彼[等]を敎ふべし。若し諸の年少の比丘の爲にこの五出要界を說き敎ふれば、彼[等]すなはち安隱を得、力を得、樂を得、身心煩熱せず、終身梵行を行ぜん。(27)阿難、我本汝が爲に七[二九]財を說きぬ。信財・戒・慚・愧・聞・施・慧財なり。阿難、この七財、汝當に諸の年少の比丘の爲に說きて以て彼[等]を敎ふべし。若し諸の年少の比丘の爲にこの七財を說き敎ふれば彼[等]すなはち安隱を得、力を得、樂を得、身心煩熱せず、終身梵行を行ぜん。(28)阿難、我本汝が爲に[三〇]七力を說きぬ。信力・精進・慚・愧・念・定・慧力なり。阿難、この七力、汝當に諸の年少の比丘の爲に說きて以て彼[等]を敎ふべし。若し諸の年少の比丘の爲にこの七力を說き敎ふれば、彼[等]すなはち安隱を得、力を得、樂を得、身心煩熱せず、終身梵行を行ぜん。(29)阿難、我本汝が爲に[三一]七覺支を說きぬ。念覺支・擇法・精進・喜・息・定・捨覺支なり。阿難、この七覺支、汝當に諸の年少の比丘の爲に說きて以て彼[等]を敎ふべし。若し諸の年少の比丘の爲にこの七覺支を說き敎ふれば、彼[等]すなはち安隱を得、力を得、樂を得、身心煩熱せず、終身梵行を行ぜん。(30)阿難、我本汝が爲に[三二]八支聖道を說きぬ。正見・正志・正語・正業・正命・正方便・正念・正定、これを謂ひて八と爲す。阿難、この八支聖道、汝當に諸の年少の比丘の爲に說きて以

[二九] 七財(Satta dhanāni)。A. iv. 4, 5. 信(Saddhā)、戒(Sīla)、慚(Hiri)、愧(Ottappa)聞(Suta)、施(Cāga)、慧(Paññā)。

[三〇] 七力(Satta balāni)。精進(Viriya)、念(Sati)、定(Samādhi)。A. iv, 3.

[三一] 七覺支(Satta bojjhaṅgāni)。擇法(Dhammavicaya)喜(Pīti)、息(Passaddhi)、捨(Upekkhā)。A. iv. 23.

[三二] 八支聖道。

聖弟子も亦復是の如く、極めて重く善く害を觀ずるに因るが故に、心すなはち害に向はず、害を樂しまず、害に近づかず、害を信解せず。若し害心生ずれば卽時に融消し燋縮し、轉たまた舒張するを得ず。捨離して害に住せず、害を穢惡し厭患し、無害を觀じ無害に向ひ、無害を樂しみ無害に近づき無害を信解し、心凝無く心濁無く、心樂を得、能く樂を致し、一切の害及び害に因りて生ずる諸の漏・煩熱・憂慼を遠離し、彼を解き彼を脫し、また彼を解脫す。彼またこの覺を受けず、謂く覺は害に因りて生ずと。是の如きは害の出要なり。阿難、これを第三出要界と謂ふ。(iv)また次に阿難、多聞の聖弟子極めて重く善く色を觀ず。彼極めて重く善く色を觀ずるに因るが故に心すなはち色に向はず、色を樂しまず、色に近づかず、色を信解せず。若し色心生ずれば、卽時に融消し燋縮し、轉たまた舒張するを得ず、捨離して色に住せず、色を穢惡し厭患す。阿難、猶ほ雞毛及び筋を火中に持著するに卽時に融消し燋縮し、轉たまた舒張するを得ざるが如し。阿難、多聞の聖弟子亦復是の如く、極めて重く善く色を觀ず。彼は極めて重く善く色を觀ずるに因るが故に心すなはち色に向はず、色を樂しまず色に近づかず色を信解せず。若し色心生ずれば卽時に融消し燋縮し、轉たまた舒張するを得ず、捨離して色に住せず。色を穢惡し厭患し、無色を觀じて心無色に向ひ無色を樂しみ、無色に近づき無色を信解し、心凝無く心濁無く心樂を得、能く樂を致す。一切の色及び色に因りて生ずる諸の漏・煩熱・憂慼を遠離し、彼を解き彼を脫し、また彼を解脫し、彼またこの覺を受けず、謂く覺は色に因りて生ずと。是の如きは色の出要なり。阿難、これを第四出要界と謂ふ。(v)また次に阿難、多聞の聖弟子極めて重く善く己身を觀ず。彼極めて重く善く己身を觀ずるに因るが故に心すなはち己身に向はず、己身を樂しまず己身に近づかず己身を信解せず。若し己身心生ずれば、卽時に融消し燋消し、轉たまた舒張するを得ず、捨離して己身に住せず、己身を穢惡し厭患す。阿難、猶ほ鷄毛及び筋を火中に持著するに、卽時に融消し燋縮し、轉

(iv) 色(Rūpa)。

(v) 己身(Sakkāya)。

阿難、多聞の聖弟子も亦復是の如し。極めて重く善く欲を觀ず。彼極めて重く善く欲を觀ずるに因るが故に、心すなはち欲に向はず、欲を樂しまず、欲に近づかず、欲に住せず、欲を信解せず。若し欲心生ずれば即時に融消し燋縮し、轉たまた舒張するを得ず。捨離して欲に住せず、欲を穢惡し厭患し、無欲を觀じ、心無欲に向ひ、無欲を樂しみ、無欲に近づき、無欲を信解し、心礙無く心濁無く、心樂を得、能く樂を致し、一切の欲及び欲に因りて生ずる諸の漏・煩熱・憂慼を遠離し、彼を解き彼を脫し、また彼を解脫し、彼またこの覺を受けず、謂く覺は欲に因りて生ずと。是の如きは欲の出要なり。阿難、これを第一出要界と謂ふ。(ii)また次に阿難、多聞の聖弟子極めて重く善く恚を觀ず。彼極めて重く善く恚を觀ずるに因るが故に心すなはち恚に向はず、恚を樂しまず、恚に近づかず、恚を信解せず。若し恚心生ずれば、即時に融消し燋縮し、轉たまた舒張するを得ず、捨離して恚に住せず、恚を穢惡し厭患す。阿難、猶雞毛及び筋を火中に持著するに即時に融消し燋縮し、轉たまた舒張するを得ざるが如し。阿難、多聞の聖弟子も亦復是の如し。極めて重く善く恚を觀ず。彼極めて重く善く恚を觀ずるに因るが故に心すなはち恚に向はず、恚を樂しまず、恚に近づかず、恚を信解せず、若し恚心生ずれば、即時に融消し燋縮し、轉たまた舒張するを得ず、捨離して恚に住せず、恚を穢惡し厭患し、無恚心を觀じ、心礙無く心濁無く心樂を得、能く樂を致し、一切の恚及び恚に因りて生ずる諸の漏・煩熱・憂慼を遠離し、彼を解き彼を脫し、また彼を解脫し、彼またこの覺を受けず、謂く覺は恚に因りて生ずと。是の如きは恚の出要なり。これを第二出要界と謂ふ。(iii)また次に阿難、多聞の聖弟子、極めて重く善く害を觀ず。彼極めて重く善く害を觀ずるに因るが故に、心すなはち害に向はず、害を樂しまず、害に近づかず、害を信解せず。若し害心生ずれば、即時に融消し燋縮し、轉たまた舒張するを得ず。捨離して害に住せず、害を穢惡し厭患す。阿難、猶雞毛及び筋を火中に持著するに即時に融消し燋縮し、轉たまた舒張するを得ざるが如し。阿難、多聞の

(ii) 恚(Vyāpāda)。

(iii) 害(Vihesa)。

の三昧相を受持すればすなはち法を知り義を解す、彼法を知り義を解するに因るが故にすなはち歡悅を得、歡悅に因るが故にすなはち歡喜を得、歡喜に因るが故にすなはち止身を得、止身に因るが故にすなはち覺樂を得、覺樂に因るが故にすなはち心定を得。阿難、比丘・比丘尼心定に因るが故にすなはち如實を見、如眞を知るを得、如實を見、如眞を知るに因るが故にすなはち厭を得、厭に因るが故にすなはち無欲を得、無欲に因るが故にすなはち解脫を得、解脫に因るが故にすなはち解脫を知るを得、生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じ、更に有を受けずと如眞を知る。阿難、これを第五解脫處と謂ひ、これに因るが故に比丘・比丘尼未だ解脫せざるは心解脫を得、未だ諸漏を盡さざるは盡して餘無きを得、未だ無上涅槃を得ざるは無上涅槃を得。阿難、この五解脫處、汝當に諸の年少の比丘の爲に說きて以て彼「等」を敎ふべし。若し諸の年少の比丘の爲にこの五解脫處を說き敎ふれば、彼「等」すなはち安隱を得、力を得、樂を得、身心煩熱せず、終身梵行を行ぜん。(24)阿難、我本汝が爲に[二六]五根を說きぬ、信根・精進・念・定・慧根なり。阿難、この五根、汝當に諸の年少の比丘の爲に說きて以て彼「等」を敎ふべし。若し諸の年少の比丘の爲にこの五根を說き敎ふれば、彼「等」すなはち安隱を得、力を得、樂を得、身心煩熱せず、終身梵行を行ぜん。(25)阿難、我本汝が爲に[二七]五力を說きぬ、信力・精進・念・定・慧力なり。阿難、この五力、汝當に諸の年少の比丘の爲に說きて以て彼「等」を敎ふべし、若し諸の年少の比丘の爲にこの五力を說き敎ふれば、彼「等」すなはち安隱を得、力を得、樂を得、身心煩熱せず、終身梵行を行ぜん。(26)阿難、我本汝が爲に、[二八]五出要界を說きぬ。云何が五と爲す。(i)阿難、多聞の聖弟子極めて重く善く※欲を觀ず。彼極めて重く善く欲を觀ずるに因るが故に、心すなはち欲に向はず、欲を樂しまず、欲に近づかず、欲を信解せず。若し欲心生ずれば卽時に融消し燋縮し、轉たまた舒張するを得ず、捨離して欲に住せず、欲を穢惡し厭患す。阿難、猶雞毛及び筋を火中に持著するに、卽時に融消し燋縮し、轉たまた舒張するを得ざるが如し。

【二六】　五根(Pañca indriyāni)。

【二七】　五力(Pañca balāni)。

【二八】　五出要界(Pañca nissaraṇiyā dhātuyo), A. iii. 245.
※　欲(Kāma)。

〔二三〕五熟解脱想を説きぬ、無常想・無常苦想・苦無我想・不淨惡露想、一切世間不可樂想なり。阿難、この五熟解脱想、汝當に諸の年少の比丘の爲に説きて以て彼[等]を教ふべし。若し諸の年少の比丘の爲にこの五熟解脱想を説き敎ふれば、彼[等]すなはち安隱を得、力を得、樂を得、身心煩熱せず、終身梵行を行ぜん。(23)阿難、我本汝が爲に〔二四〕五解脱處を説きぬ。若し比丘・比丘尼これに因るが故に未だ解脱せざるは心解脱を得、未だ諸漏を盡さざるは盡して餘無きを得、未だ無上涅槃を得ざるは無上涅槃を得。云何が五と爲す。(i)阿難、世尊比丘・比丘尼の爲に法を説き諸の智[者]・梵行者亦比丘・比丘尼の爲に法を説く。阿難、若し世尊比丘・比丘尼の爲に法を説き、諸の智[者]・梵行者亦比丘・比丘尼の爲に法を説かば、彼[等]聞き已りてすなはち法を知り義を解す、彼[等]法を知り義を解すに因るが故にすなはち〔二五〕歡悦を得、歡悦に因るが故にすなはち歡喜を得、歡喜に因るが故にすなはち止身を得、止身に因るが故にすなはち心定を得、阿難、比丘・比丘尼心定に因るが故にすなはち如實を見、如眞を知るを得、如實を見、如眞を知るに因るが故にすなはち厭を得、厭に因るが故にすなはち無欲を得、無欲に因るが故にすなはち解脱を得、解脱に因るが故にすなはち解脱を知るを得、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ、更に有を受けずと如眞を知る。阿難、これを第一解脱處と謂ひ、これに因るが故に比丘・比丘尼未だ解脱せざるは心解脱を得、未だ諸漏を盡さゞるは盡して餘無きを得、未だ無上涅槃を得ざるは無上涅槃を得。(ii)また次に阿難、世尊比丘・比丘尼の爲に法を説かず、諸の智[者]・梵行者亦比丘・比丘尼の爲に法を説かず。但本聞きし所、誦習せし所の法の如くに而も廣くこれを讀む。(iii)若し廣く本聞きし所、誦習せし所の法を讀まざれば、但本聞きし所、誦習せし所の法に隨ひて他の爲に廣く説く。(iv)若し他の爲に廣く本聞きし所、誦習せし所の法を説かざれば、但本聞きし所、誦習せし所の法に隨ひて心に思惟し分別す。(v)若し心に本聞きし所、誦習せし所の法を思惟し分別せざれば、但善く諸の三昧相を受持す。阿難、若し比丘・比丘尼善く諸

【二三】 五熟解脱想(Pañca vimuttiparipācaniyā saññā)。解脱を熟せしむべき五種の想。(1)無常想(Anicca-saññā)。(2)無常苦想(Anicce dukkha-s.)(3)苦無我想(Dukkhe anatta-s.)、(4)不淨惡露想(Asubha-s.)(5)一切世間不可樂想(Sabbaloke anabhirata-s.)。

【二四】 五解脱處(Pañca vimuttitthānāni)。

【二五】 十卷「何義經」乃至「恭敬經」參照。

甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。是の如く悲喜[亦然り]。心捨と俱にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶと。阿難、この四無量、汝當に諸の年少の比丘の爲に說きて以て彼[等]を敎ふべし。若し諸の年少の比丘の爲にこの四無量を說き敎ふれば、彼[等]すなはち安隱を得、力を得、樂を得、身心煩熱せず、終身梵行を行ぜん。(19)阿難、我本汝が爲に〔二〇〕四無色を說きぬ。比丘は一切の色想を斷じ、乃至非有想非無想處を得、成就して遊ぶと。阿難、この四無色、汝當に諸の年少の比丘の爲に說きて以て彼[等]を敎ふべし。若し諸の年少の比丘の爲にこの四無色を說き敎ふれば、彼[等]すなはち安隱を得、力を得、樂を得、身心煩熱せず、終身梵行を行ぜん。(20)阿難、我本汝が爲に〔二一〕四聖種を說きぬ、比丘・比丘尼は麁素衣を得て而も止足を知り、衣の爲の故にその意を滿すを求むるに非ず。若し未だ衣を得ざるも、憂悒せず、啼泣せず、胸を搥たず、癡惑せず、若し衣を得れば染まず、著せず、欲せず、貪らず、觸れず、計らず、災患を見、出要を知りて而も衣を用ふ。かくの如く事利に、懈怠せずして而も正知なればこれを比丘・比丘尼正に舊聖種に住すと謂ふ。是の如く食・住處[亦然り]。斷を欲し斷を樂しみ、修を欲し修を樂しむ。彼斷を欲し斷を樂しみ、修を欲し修を樂しむに因るが故に自ら貴くせず、他を賤しめず。かくの如く事利に、懈怠せずして而も正知なれば、これを比丘・比丘尼正に舊聖種に住すと謂ふと。阿難、この四聖種、汝當に諸の年少の比丘の爲に說きて以て彼[等]を敎ふべし。若し諸の年少の比丘の爲にこの四聖種を說き敎ふれば、彼[等]すなはち安隱を得、力を得、樂を得、身心煩熱せず終身梵行を行ぜん。(21)阿難、我本汝が爲に〔二二〕四沙門果を說きぬ、[これ]須陀洹・斯陀含・阿那含・最上の阿羅漢果なり。阿難、この四沙門果、汝當に諸の年少の比丘の爲に說きて以て彼[等]を敎ふべし。若し諸の年少の比丘の爲にこの四沙門果を說き敎ふれば、彼[等]すなはち安隱を得、力を得、樂を得、身心煩熱せず終身梵行を行ぜん。(22)阿難、我本汝が爲に

【二〇】四無色。

【二一】四聖種とは(1)衣服、(2)飮食、(3)住處に於て足ることを知り、(4)惡を斷じ、善を修するを樂しむ。

【二二】四沙門果とは(1)須陀洹(預流)、(2)斯陀含(一來)、(3)阿那含(不還)、(4)阿羅漢(應供)の沙門道の四果をいふ。

に廣く布か[しめ]んが爲の故に、滿ち具足せ[しめ]んが[爲の]故に、欲を起し方便行を求め、精勤して心を擧げて斷ずと。阿難、この四正斷、汝當に諸の年少の比丘の爲に說きて以て彼[等]に敎ふべし。若し諸の年少の比丘の爲にこの四正斷を說き敎ふれば、彼すなはち安隱を得、力を得、樂を得、身心煩熱せず、終身梵行を行ぜん。(14)阿難、我本汝が爲に[一五]四如意足を說きぬ、比丘は欲定を成就し諸の行を燒き如意足を修習し、無欲に依り、離に依り、滅に依り、非品に至るを願ふ。是の如く精進定、心定[亦然り]。觀定を成就し諸の行を燒き、如意足を修習し、無欲に依り、離に依り、滅に依り、非品に至るを願ふと。阿難、この四如意足、汝當に諸の年少の比丘の爲に說きて以て彼[等]を敎ふべし。若し諸の年少の比丘の爲にこの四如意足を說き敎ふれば、彼[等]すなはち安隱を得、力を得、樂を得、身心煩熱せず、終身梵行を行ぜん。(15)阿難、我本汝が爲に[一六]四禪を說きぬ。比丘は欲を離れ、惡不善の法を離れ、[乃至]第四禪を得るに至り成就して遊ぶと。阿難、この四禪、汝當に諸の年少の比丘の爲に說きて以て彼[等]を敎ふべし。若し諸の年少の比丘の爲にこの四禪を說き敎ふれば、彼[等]すなはち安隱を得、力を得、樂を得、身心煩熱せず、終身梵行を行ぜん。(16)阿難、我本汝が爲に[一七]四聖諦を說きぬ、苦聖諦・苦習・苦滅・苦滅道聖諦なり。阿難、この四聖諦、汝當に諸の年少の比丘の爲に說きて以て彼[等]を敎ふべし。若し諸の年少の比丘の爲にこの四聖諦を說き敎ふれば彼[等]すなはち安隱を得、力を得、樂を得、身心煩熱せず終身梵行を行ぜん。(17)阿難、我本汝が爲に[一八]四想を說きぬ、比丘は小想有り、大想有り、無量想有り、無所有想有りと。阿難、この四想、汝當に諸の年少の比丘の爲に說きて以て彼[等]を敎ふべし。若し諸の年少の比丘の爲にこの四想を說き敎ふれば、彼[等]すなはち安隱を得、力を得、樂を得、身心煩熱せず、終身梵行を行ぜん。(18)阿難、我本汝が爲に[一九]四無量を說きぬ、比丘は心慈と倶にして一方に遍滿し成就して遊ぶ。是の如く二・三・四方・四維・上下一切に普遍く、心慈と倶にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣

【一五】四如意足(Iddhipāda)。欲定(Chanda-samādhi)、精進定(Viriya-s.)、心定(Citta-s.)、觀定(Vīmaṃsa-s.)。

【一六】四禪(Cattāri jhānāni)。

【一七】四聖諦(Cattāri ariya-saccāni)。

【一八】四想(Catasso saññā)。

【一九】四無量心。

火・風・空・識界なり。阿難、この六界、汝當に諸の年少の比丘の爲に說き以て彼「等」に敎ふべし。若し諸の年少の比丘の爲にこの六界を說き敎ふれば、彼「等」すなはち安隱を得、力を得、樂を得、身心煩熱せず終身梵行を行ぜん。(11)阿難、我本汝が爲に〔一二〕因緣起及び因緣起所生法を說きぬ。若しこれ有れば則ち彼有り、若しこれ無ければ則ち彼無し、若しこれ生ずれば則ち彼生ず、若しこれ滅すれば卽ち彼滅す。無明に緣りて行、行に緣りて識、識に依りて名色、名色に緣りて六處、六處に緣りて更樂、更樂に緣りて覺、覺に緣りて愛、愛に緣りて受、受に緣りて有、有に緣りて生、生に緣りて老死あり。若し無明滅すれば則ち行滅し、行滅すれば則ち識滅し、識滅すれば則ち名色滅し、名色滅すれば則ち六處滅し、六處滅すれば則ち更樂滅し、更樂滅すれば則ち覺滅し、覺滅すれば則ち愛滅し、愛滅すれば則ち受滅し、受滅すれば則ち有滅し、有滅すれば則ち生滅し、生滅すれば則ち老死滅すと。阿難、この因緣起及び因緣起所生の法、汝當に諸の年少の比丘の爲に說きて以て彼「等」に敎ふべし。若し諸の年少の比丘の爲にこの因緣起及び因緣起所生法を說き敎ふれば、彼「等」すなはち安隱を得、力を得、樂を得、身心煩熱せず、終身梵行を行ぜん。(12)阿難、我もと汝が爲に〔一三〕四念處を說きぬ、身を觀じて身の如くし、覺・心・法を觀じて「覺・心・」法の如すくと。阿難、この四念處、汝當に諸の年少の比丘の爲に說きて以て彼「等」に敎ふべし。若し諸の年少の比丘の爲にこの四念處を說き敎ふれば、彼「等」すなはち安隱を得、力を得、樂を得、身心煩熱せず、終身梵行を行ぜん。(13)阿難、我本汝が爲に〔一四〕四正斷を說きぬ、比丘は已に生ぜる惡不善の法を斷ずるが爲の故に欲を起し、方便行を求め、精勤して心を擧げて斷じ、未だ生ぜざる惡不善の法を生ぜざら「しめ」んが爲の故に欲を起し方便行を求め、精勤して心を擧げて斷ず。未だ生ぜざる善法を生ぜ「しめ」んが爲の故に欲を起し方便行を求め、精勤にして心を擧げて斷じ、已に生ぜる善法を住めんが爲の故に、忘れざらんが「爲の」故に、退かざら「しめ」んが「爲の」故に、轉た增して多から「しめ」んが「爲の」故

〔一二〕因緣起(Paṭiccasamuppāda)。

〔一三〕念處(Satipaṭṭhāna)。

〔一四〕正斷(Sammappadhāna)。正勤とするを正しとす。

の六外處、汝當に諸の年少の比丘の爲に說き以て彼[等]に敎ふべし。若し諸の年少の比丘の爲にこの六外處を說き敎ふれば彼[等]すなはち安隱を得、力を得、樂を得、身心煩熱せず、終身梵行を行ぜん。(4)阿難、我本汝が爲に六[六]識身を說きぬ、眼識・耳・鼻・舌・身・意識なり。阿難、この六識身、汝當に諸の年少の比丘の爲に說き、以て彼[等]に敎ふべし。若し諸の年少の比丘の爲にこの六識身を說き敎ふれば、彼[等]すなはち安隱を得、力を得、樂を得、身心煩熱せず、終身梵行を行ぜん。(5)阿難、我本汝が爲に六[七]更樂身を說きぬ、眼更樂・耳・鼻・舌・身・意更樂なり。阿難、この六更樂身、汝當に諸の年少の比丘の爲に說き以て彼[等]に敎ふべし。若し諸の年少の比丘の爲にこの六更樂身を說き敎ふれば、彼[等]すなはち安隱を得、力を得、樂を得、身心煩熱せず、終身梵行を行ぜん。(6)阿難、我本汝が爲に六[八]覺身を說きぬ。眼覺・耳・鼻・舌・身・意覺なり。阿難、この六覺身、汝當に諸の年少の比丘の爲に說き以て彼[等]に敎ふべし。若し諸の年少の比丘の爲にこの六覺身を說き敎ふれば、彼[等]すなはち安隱を得、力を得、樂を得、身心煩熱せず、終身梵行を行ぜん。(7)阿難、我本汝が爲に六想身を說きぬ。眼想・耳・鼻・舌・身・意想なり。阿難、この六想身、汝當に諸の年少の比丘の爲に說き以て彼[等]に敎ふべし。若し諸の年少の比丘の爲にこの六想身を說き敎ふれば、彼[等]すなはち安隱を得、力を得、樂を得、身心煩熱せず、終身梵行を行ぜん。(8)阿難、我本汝が爲に六[九]思身を說きぬ、眼思・耳・鼻・舌・身・意思なり。阿難。この六思身、汝當に諸の年少の比丘の爲に說き以て彼[等]に敎ふべし。若し諸の年少の比丘の爲にこの六思身を說き敎ふれば、彼[等]すなはち安隱を得、力を得、樂を得、身心煩熱せず、終身梵行を行ぜん。(9)阿難、我本汝が爲に六[一〇]愛身を說きぬ、眼愛・耳・鼻・舌・身・意愛なり。阿難、この六愛身、汝當に諸の年少の比丘の爲に說き以て彼[等]に敎ふべし。若し諸の年少の比丘の爲にこの六愛身を說き敎ふれば、彼[等]すなはち安隱を得、力を得、樂を得、身心煩熱せず、終身梵行を行ぜん。(10)阿難、我本汝が爲に六[一一]界を說きぬ、地界・

【六】識身(Viññāṇakāya)。

【七】更樂身(Phassakāya)、觸身なり。

【八】覺身(Vedanākāya)、受身なり。

【九】六思身。

【一〇】愛身(Taṇhākāya)。

【一一】界(Dhātu)。

衣・食・無事・〔四〕禪・四無色は後に在り。

八十六、[一]説處經第十五

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び、勝林給孤獨園に在しぬ。その時尊者阿難則ち晡時に於て安坐より起ち、諸の年少の比丘を將ゐて佛所に往詣し、佛足に稽首し却きて一面に住しぬ。諸の年少の比丘も亦佛足に稽首し却きて一面に坐しぬ。尊者阿難白して曰く『世尊、この諸の年少の比丘、我當に云何が教訶し、云何が訓誨し、云何が彼[等]の爲に法を説くべきや』。世尊告げて曰はく『阿難、汝當に諸の年少の比丘の爲に [二]處を説き及び處を教ふべし。若し諸の年少の比丘の爲に處を説き及び處を教ふれば、彼[等]すなはち安隱を得、力を得、樂を得、身心煩熱せず、終身梵行を行ぜん。』尊者阿難叉手を佛に向け白して曰く『世尊、今正にこの時なり。善逝、今正にこの時なり。若し世尊、諸の年少の比丘の爲に處を説き及び處を教へたまはゞ、我諸の年少の比丘と、世尊より聞き已りて當に善く受持すべし』。世尊告げて曰はく『阿難、汝等諦かに聽け、善くこれを思念せよ。我當に汝及び諸の年少の比丘の爲に廣く分別して説くべし。』尊者阿難等教を受けて聽きぬ。世尊告げて曰く『(1)阿難、我本汝が爲に [三]五盛陰を説きぬ、色盛陰・覺・想・行・識盛陰なり。阿難、この五盛陰、汝當に諸の年少の比丘の爲に説き、以て彼[等]を教ふべし。若し諸の年少の比丘の爲にこの五盛陰を説き教ふれば、彼[等]すなはち安隱を得、力を得、樂を得、身心煩熱せず、終身梵行を行ぜん。(2)阿難、我本汝が爲に [四]六內處を説きぬ、眼處・耳・鼻・舌・身・意處なり。阿難、この六內處、汝當に諸の年少の比丘の爲に、この六內處を説き教ふべし、若し諸の年少の比丘のために、この六內處を説き教ふれば、彼[等]すなはち安隱を得、力を得、樂を得、身心煩熱せず、終身梵行を行ぜん。(3)阿難、我本汝が爲に [五]六外處を説きぬ、色處・聲・香・味・觸・法處なり。阿難、こ

【一】 M. 148. Chachakka-sutta.

【二】 處(Āyatana)。內の六處、外の六處、合して十二處あり。

【三】 五盛陰(Pañcupādānakkhandha)。新譯に「五取蘊」といふに同じ。生有即ち生存に取著する要素五種あるをいふ。尙ほ新譯にては覺を受となす。

【四】 六內處(Cha ajjhattikāni āyatanāni)。

【五】 六外處(Cha bāhirāni āyatanāni)。

彼法を行じて法の如くし、法に隨順し法に向ひ法に次ぐ。彼これに因るが故に、供養恭敬を得、是の如く趣向して眞諦の法を得れば、自ら貴くせず他を賤しめず。これを眞人の法と謂ふ。(8)また次に或は一人有りて無事處・山林・樹下に在り、或は高巖に住し或は露地に止まり、或は塚間に處り或は能く時を知り、餘の者は然らず。彼この時を知るに因るが故に自ら貴くして他を賤しむ。これを不眞人の法と謂ふ。眞人の法とは是の如き觀を作す、「我この時を知るに因るが故に婬怒癡を斷ぜずと」。或は一人有りて時を知らず。彼法を行じて法の如くし、法に隨順し法に向ひ法に次ぐ。彼これに因るが故に供養恭敬を得、是の如く趣向して眞諦を得れば自ら貴くせず、他を賤しめず。これを眞人の法と謂ふ。(9)また次に或は一人有りて初禪に逮り得。彼初禪を得るに因るが故に自ら貴くして他を賤しむ。これを不眞人の法と謂ふ。眞人の法とは是の如き觀を作す「初禪は[九]世尊無量種なりと說きたまふ。若し計る有ればこれを愛と謂ふと」。彼これに因るが故に供養恭敬を得、是の如く趣向して眞諦の法を得れば、自ら貴くせず他を賤しめず。これを眞人の法と謂ふ。(10)(16)また次に或は一人有りて第二・第三・第四禪を得、空處・識處・無所有處・非有想非無想處を得、餘の者は然らず。彼非有想非無想處を得るに因るが故に自ら貴くし他を賤しむ。これを不眞人の法と謂ふ。眞人の法とは是の如き觀を作す、「非有想非無想處、世尊無量種なりと說きたまふ。若し計る有ればこれを愛と謂ふと」。彼これに因るが故に供養恭敬を得、是の如く趣向して眞諦の法を得れば、自ら貴くせず、他を賤しめず。これを眞人の法と謂ふ。諸の比丘、これを眞人の法、不眞人の法と謂ふ。汝等當に眞人の法、不眞人の法を知り、眞人の法、不眞人の法を知り已りて不眞人の法を捨離し、眞人の法を學すべし。汝等當に是の如きを學すべし」。佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

[一〇]豪貴・端正・談・長老・諸經を誦すと、

【九】この一句至つて重要なるものなれど、意味明瞭ならず、巴利文は「初禪に逹することにも愛念ながるべきことを世尊は宣へり、是れ、これそれによりて〔斯くなるべしと〕期するに、それよりそは異りて來るが故なり」。Lord Chalmers 'The Lord counselled avoidance of satisfaction in the First Ecstasy, in as much as, imagine as they may, it turns out quite otherwise.' (The Sacred Books of the Buddhists, vol. vi. p. 179).

【一〇】これ攝頌(Uddāna)といふものなり。次なる「說處經」にもこれあり。

す。彼、これ長老にして王者の識る所及び衆人の知る所と爲り而も大福有るに因るが故に自ら貴くして他を賤しむ。これを不眞人の法と謂ふ。眞人の法とは是の如き觀を作す「我(此)これ長老にして王者の識る所及び衆人の知る所と爲り而も大福有るに因るが故に婬怒癡を斷ぜずと」。或は一人有り。これ長老に非ずして王者の識る所及び衆人の知る所と爲らず、亦大福無し。彼法を行じて法の如くし、法に隨順し法に向ひ法に次ぐ。彼これに因るが故に供養恭敬を得、是の如く趣向して眞諦の法を得れば、自ら貴くせず、他を賤しめず。これを眞人の法と謂ふ。(5)また次に或は一人有りて經を誦し律を持し、[五]阿毘曇を學し、[六]阿含慕を誦じ、多く經書を學し、餘の者は然らず。彼阿含慕を誦じ、多く經書を學するが故に、自ら貴くして他を賤しむ。これを不眞人の法と謂ふ。眞人の法とは是の如き觀を作す「我この阿含慕を誦じ多く經書を學するに因るが故に婬怒癡を斷ぜずと」。或は一人有りて阿含慕を誦ぜず、亦多く經書を學せず。彼法を行じて法の如くし、法に隨順し法に向ひ法に次ぐ。彼これに因るが故に、供養恭敬を得、是の如く趣向して眞諦の法を得れば、自ら貴くせず、他を賤しめず。これを眞人の法と謂ふ。(6)また次に或は一人有りて糞掃衣を著け三法服を攝め[七]不慢衣を持し、餘の者は然らず。彼不慢衣を持するに因るが故に自ら貴くし他を賤しむ。これを不眞人の法と謂ふ。眞人の法とは是の如き觀を作す「我この不慢衣を持するに因るが故に、婬怒癡を斷ぜずと」。或は一人有りて不慢衣を持せず。彼法を行じて法の如くし、法に隨順し法に向ひ法に次ぐ。彼これに因るが故に、供養恭敬を得、是の如く趣向して眞諦の法を得れば、自ら貴くせず、他を賤しめず。これを眞人の法と謂ふ。(7)また次に一人有りて常に乞食を行じ、飯齊しく五升、七家食に限り、或はまた一食にして[八]過中に飲槳せず、餘の者は然らず。彼過中に飲槳せさるに因るが故に、自ら貴くして他を賤しむ。これを不眞人の法と謂ふ。眞人の法とは是の如き觀を作す「我この過中に飲槳せざるに因るが故に婬怒癡を斷ぜずと」。或は一人有りて過中に飲槳するを斷ぜず。

【五】六卷「瞿尼師經」註を見よ。

【六】「誦阿含慕」(Āgama-adhigama)。一卷「善法經」の「阿含及所得」にあたる。聖典に精通するの意。

【七】不慢衣。憍慢心を制するための法衣。

【八】中食後、午後の意。

八十五、眞人經第十四

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衛國に遊び、勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊、諸の比丘に告げたまはく『我今汝が爲に　眞人の法及び不眞人の法を說かん。諦かに聽け、諦かに聽け、善くこれを思念せよ』。時に諸の比丘教を受けて聽きぬ。佛言はく『云何が不眞人の法なる。(1)或は一人有り、これ豪貴族にして出家學道し、餘の者は然らず。彼これ豪貴族なるに因るが故に自ら貴くして他を賤しむ。これを不眞人の法と謂ふ。眞人の法は是の如き觀を作す、「我、(此)これ豪貴族なるに因るが故に婬怒癡を斷ぜずと」。或は一人有り、これ豪貴にあらずして出家學道す。彼法を行じ法の如くし法に隨順し法に向ひ法に次ぐ。彼これに因るが故に供養恭敬を得。是の如く趣向して眞諦法を得れば、自ら貴くせず他を賤しめず。これを眞人の法と謂ふ。(2)また次に或は一人有り。端正にして愛すべく、餘の者は然らず。彼端正にして愛すべきに因るが故に自ら貴くして他を賤しむ。これを不眞人の法と謂ふ。眞人の法は是の如き觀を作す、「我この端正にして愛すべきに因るが故に婬怒癡を斷ぜずと」。或は一人有り端正[ならず]愛すべからず。彼法を行じ法の如くし法に隨順し法に向ひ法に次ぐ。彼これに因るが故に供養恭敬を得。是の如く趣向して眞諦法を得れば、自ら貴くせず他を賤しめず。これを眞人の法と謂ふ。(3)また次に或は一人有り。才辯工談あり餘の者は然らず。彼才辯工談に因るが故に自ら貴くして他を賤しむ。これを不眞人の法と謂ふ。眞人の法とは是の如き觀を作す、「我この才辯工談に因るが故に婬怒癡を斷ぜずと」。或は一人有りて才辯工談無し。彼法を行じて法の如くし、法に隨順し法に向ひ法に次ぐ。彼これに因るが故に供養恭敬を得、是の如く趣向して眞諦の法を得れば自ら貴くせず、他を賤しめず。これを眞人の法と謂ふ。(4)また次に或は一人有り。これ長老にして王者の識る所及び衆人の知る所と爲り而も大福有り。餘の者は然ら

【一】M. 113. Sappurisa-sutta.)「佛說是法非法經」。
【二】眞人法(Sappurisadhamma)。不眞人法（Asappurisa-dhamma)。
【三】この人獨り貴族出身の出家にして他のものは貴族出にあらずの意。
【四】我が婬怒癡(＝貪瞋癡)を斷じて阿羅漢となるは我が貴族出身なるが故に非ず(2)以下類推せよ。

渇仰・成就・歡喜せしめて已りて默然として住したまひぬ。こゝに於て衆多の鞞舍離の麗掣、世尊彼[等]の爲に法を說き、勸發・渇仰・成就・歡喜せしめ已りたまひ[ければ、彼等]卽ち坐より起ち佛足に稽首し繞三匝して去りぬ。鞞舍離の麗掣去りて後久しからず、こゝに於て世尊諸の比丘に問ひたまはく『諸の長老上尊大弟子等何許に至れりと爲すや』。諸の比丘白して曰く『世尊、諸の長老上尊大弟子等、諸の鞞舍離の麗掣大如意足を作し、王の威德を作し、高聲に唱傳して鞞舍離を出で佛所に來詣し供養禮事するを聞き、すなはちこの念を作す、「禪は聲を以て刺と爲す。世尊亦禪は聲を以て刺と爲すと說きたまふ。我等寧ろ牛角娑羅林に往詣し、彼に在りて亂無く遠離獨住し閑居し靜處に宴坐し思惟すべしと」。世尊、諸の長老上尊大弟子等共に彼に往詣しぬ』。こゝに於て世尊聞き已りて嘆じて曰はく『善き哉、善き哉。若し長老上尊、大弟子等應に是の如く說くべし、「禪は聲を刺と爲す。世尊亦禪は聲を以て刺と爲すと」。所以者何。我實に是の如く說く、禪は刺有り。持戒は犯戒を以て刺と爲し、諸根を護るは、身を嚴[一四]飾するを以て刺と爲し、惡露[一五]を修習するは淨相を以て刺と爲し、慈心[一六]を修習するは恚を以て刺と爲し、酒を離るゝは飲酒を以て刺と爲し、梵行は女色を見るを以て刺と爲し、初禪[一七]に入るは聲を以て刺と爲し、第二禪に入るは覺觀を以て刺と爲し、第三禪に入るは喜を以て刺と爲し、第四禪に入るは入息出息を以て刺と爲し、空處[一八]に入るは色想を以て刺と爲し、識處に入るは空處想を以て刺と爲し、無所有處に入るは識處想を以て刺と爲し、無想處に入るは無所有處想を以て刺と爲し、想知滅定に入るは想知を以て刺と爲す。また次に三刺有り、欲刺・恚刺・愚癡刺[これ]なり。この三刺は漏盡[一九]の阿羅訶已に斷じ已に知り根本を拔絕す。滅してまた生ぜず。これを阿羅訶無刺・阿羅訶離刺・阿羅訶無刺離刺と爲す』。佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

には音聲は邪魔となると世尊は說きたまへり」。

【一一】牛角娑羅林(Gosiṅga-sālavanadāya)。

【一二】凡そ致敬の法五種あり、こゝには四種を擧げ、「或は[己の]名と姓とを告げて而して一方に坐する有り」の一を省けり。

【一三】二卷「七車經」註[九]を見よ。

【一四】巴利文「諸根を護れるものには見世物を見るは障害なり」。或は「どんじきしん」と讀むを可とするか。

【一五】「不淨想に專念なるものには淨想專念は障害なり」。

【一六】巴利文には「慈心」と「酒」と二條を省く。

【一七】四禪の諸支に就ては一卷「晝度樹經」本文及び註[八]以下を見よ。

【一八】巴利文は四無色定を省き、直に想知滅定(Saññā-vedayita-nirodha)に入る。四無色定は空[無邊]處(Ākāsānañcāyatana)、識[無邊]處(Viññāṇañcāyatana)、無所有處(Ākiñcaññāyatana)、非想非非想處(Nevasaññānāsaññāyatana)なり。想知滅定に就ては五卷「成就戒經」註を見よ。

【一九】漏卽ち煩惱を斷じ盡したる阿羅漢なり。

卷の第二十一

長壽王品第二（續き）

八十四、[一]無刺經第十三

我が聞きしこと是の如し。ある時佛[二]鞞舍離に遊び、[三]獼猴江邊の高樓臺觀に在しぬ。この[四]諸の名德[五]長老上尊、大弟子等、謂く[六]遮羅・優鉢遮羅・賢善・賢患・無患・耶舍・上稱、是の如き比の諸の名德長老上尊大弟子等、亦鞞舍離の獼猴江邊の高樓臺觀に遊び、並に皆佛の[七]葉屋の邊に近くして住しぬ。諸の鞞舍離の[八]麗掣、世尊鞞舍離の獼猴江邊の高樓臺觀に遊びたまふと聞き、すなはちこの念を作しぬ『我等むしろ大如意足を作し、王の威德を作し、高聲に唱傳して鞞舍離を出で佛所に往詣し供養禮事すべしと』。時に諸の名德長老上尊大弟子等、諸の鞞舍離の麗掣大如意足を作し、王の威德を作し、高聲に唱傳して鞞舍離を出で、來りて佛所に詣り供養禮事すと聞き、すなはちこの念を作しぬ「禪は聲を以て[九]刺と爲す。[一〇]世尊亦禪は聲を以て刺と爲すと說きたまふ。我等寧ろ[一一]牛角娑羅林に往詣し、彼に在りて亂無く遠離獨住し閑居し、靜處に宴坐し思惟すべしと」。是に於て諸の名德長老上尊大弟子等、牛角娑羅林に往詣し、彼に在りて亂無く遠離獨住し閑居し靜處に宴坐思惟しぬ。その時衆多の鞞舍離の麗掣大如意足を作し、王の威德を作し、高聲に唱傳して、鞞舍離を出で佛所に往詣して供養禮事しぬ。或は鞞舍離の麗掣[一二]佛足に稽首し卻きて一面に坐する有り、或は佛と共に相問訊し卻きて一面に坐する有り、或は叉手を佛に向け卻きて一面に坐する有り、或は遙に佛を見已りて默然として坐する有りき。彼の時衆多の鞞舍離の麗掣各坐已に定まりて、世尊彼[等]の爲に法を說き、[一三]勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、無量の方便もて彼[等]の爲に法を說き、勸發・

【一】A. v. 133.
【二】鞞舍離(Vesālī)。
【三】四卷「師子經」註〔三〕を見よ。
【四】諸名德(Abhiññātā abhiññātā)。「衆所知識」、德高く望み重く名天下に滿つ。
【五】長老上尊(Therā)。上座。十夏以上、卽ち比丘戒を受けてより十年以上經ちたる比丘をいふ。
【六】巴利文には Cāla, Upacāla, Kakkaṭa, Kaḷimbha, Nikaṭa, Kaṭissaha の六人の名を擧ぐ。されど初の二を除くの外、何れが何れに當るやを定むること難し。
【七】葉屋(Paṇṇa-sālā)。「木の葉ぶきの家」の義。寺院精舍、特に一時的の建物の意。
【八】麗掣(Licchavi)。離車、栗呫毘、民族の名。毘舍離城を中心として住みたり。
【九】刺(Kaṇṭ[h]aka)。障り、障害、邪魔もの、意。
【一〇】「世尊亦說、禪以聲爲刺」(Saddakaṇṭakā kho pana jhānā vuttā Bhagavatā)。「禪

の『長者梨師達多：』に當るであらう。後者の勤は恐く雖の誤で、これは(一)の同名の經と同じいことは云ふまでもない。これには又支謙譯として『申日經』、『弗加沙王經』の二を擧げ、法炬譯として『息恚經』、『惡道經』の二經を擧げてある。共に『中阿含』に出づといつてあるけれども、本經中の何れに當るやは不明である。

五　各經大意(後出)

六　索引(後出)

昭和五年二月廿五日

譯者立花俊道識

一八四、牛角娑羅林經
生經二卷比丘各言志經
增三七品の三經
一九三、牟犁破群那經
增五〇品ノ八經
一九四、跋陀和利經
增四九品の七經
一九六、周那經
一九七、優波利經
息諍因緣經　（施　護）
四分律四四卷
一九九、癡慧地經
泥犁經　（竺曇無蘭）
二〇〇、阿黎吒經
增四三品の五經
二〇二、持齋經
齋經　（支　謙）
優波夷隨舍迦經　（失　譯）
八關齋經　（沮渠京聲）
二〇四、羅摩經
本事經四卷
二〇六、心穢經
增五一品の四經
二〇九、鞞摩那修經
鞞摩肅經　（求那跋陀羅）
二一一、大拘絺羅經
雜九卷の二七經
二一三、法莊嚴經
增三八品の一〇經
二一六、愛生經
婆羅門子命終愛念不離經　（安世高）
生經二卷子命過經
增一三　の三經
二一七、八城經
十支居士八城人經　（安世高）
二二〇、見經
邪見經　（失　譯）
二二一、箭喩經
箭喩經　（失　譯）

以上の外（一）『出三藏記集』、（二）『歷代三寶紀』、（三）『開元釋敎目錄』、（四）『貞元新定釋敎目錄』等の重なる經錄によれば、『中阿含』各經の單譯が未だ多少あつたやうに思はれるが、譯された經そのものが存在しないので、唯名目だけによつては何れの異譯であるかを判斷することは不可能である。しかしこれも序に記するとして、先づ（一）の古異經錄中に

中阿含本文一卷

とあり、註に「一本云中阿含經六十卷」といつてあるが、これは又別に全部譯された六十卷の『中阿含』があつたものとも思へず、多分その一部のことであつたらうと思ふが、それがどの一部であつたかは全く不明である。

『佛有五百比丘經』、『凡人有三事愚癡不足經』、『佛誡諸比丘言我以天眼視天下人生死好醜尊者卑者經』

の三經も『中阿含』に出づとあるが、それが何れなるやは不明である。共に「一事を摘んで卷名を立てた」ものであらうが、內容の上から、これ等の題名の適用し得られる經は幾らもある。更に

『申日經』、『梵志孫陀耶致經』、『阿難念彌經』、『四蚖喩經』、『弗迦沙王經』、『比丘問佛多優婆塞命終經』、『長者梨師達多兄弟二人詣世尊經』、『㮈女經』、『修行勸意經』、『父母恩難報經』

の名も出て居るが、これも何れが何れか全く不明に屬する。次に（二）には安世高譯として

『長者兄弟詣佛經』、『父母恩勤報經』

の二經が擧げられて居るが、前者は（一）

解夏經　（法　賢）
雜四五卷の一五經
別雜一二卷の一五經
增三二品の五經
一二二、瞻波經
瞻婆比丘經　（法　炬）
一二三、沙門二十億經
五分律二一卷
四分律三九卷
雜九卷の三〇經
增二三品の三經
一二四、八難經
增四二品の一經
一二六、行欲經
伏婬經　（法　炬）
一二七、福田經
雜三五卷の二三經
一三一、降魔經
魔嬈亂經　（失　譯）
弊魔試目連經　（支　謙）
魔王入目揵蘭腹經（缺）　（失　譯）
一三二、賴吒和羅經
賴吒和羅經　（支　謙）
護國經　（法　賢）
賴吒和羅經（缺）　（支　曜）
一三四、釋問經
長阿含一〇卷釋提桓因問經
帝釋所問經　（法　賢）
雜寶藏經
一三五、善生經

長阿含一一卷善生經
尸迦羅越六方禮經　（安世高）
善生子經　（支法度）
善生子經（缺）　（慧　簡）
威革長者六向拜經（缺）　（祇多蜜）
威革長者六向拜經（缺）　（竺難提）
大六向拜經（缺）　（竺法護）
一三六、商人求財經
增四五品の一經
一三八、福經
雜一〇卷の九經
一四〇、至邊經
本事經四卷
雜一〇卷の一七經
一四一、喻經
雜四六卷の一八經
別雜四卷の四
本事經一卷
一四二、雨勢經
長阿含二卷遊行經
增四〇品の二經
一四四、算數目揵連經
數經　（法　炬）
一四八、何苦經
參照增一七品の八經
一四九、何欲經
增三七品の八經
一五一、阿攝惒經
梵志頞波羅延問種尊經　（竺曇無蘭）
一五二、鸚鵡經

鸚鵡經　（求那跋陀羅）
一五四、婆羅婆堂經
白衣金堂二婆羅門緣起經　（施　護）
長阿含六卷小緣經
一五五、須達哆經
三歸五戒慈心厭離功德經　（失　譯）
須達經　（求那毘地）
長者施報經　（法　天）
增二七品の三經
一五六、梵波羅延經
婆羅門行經（缺）　（安世高）
一五七、黃蘆園經
佛爲黃竹園老婆羅門說學經　（失　譯）
一六一、梵摩經
梵摩渝經　（支　謙）
一六六、釋中禪室尊經
尊上經　（竺法護）
一七〇、鸚鵡經
兜調經　（失　譯）
鸚鵡經　（求那跋陀羅）
佛爲首迦長者說業報差別經　（瞿曇法智）
分別善惡報應經　（天息災）
一七二、心經
意經　（竺法護）
一七五、受法經
應法經　（竺法護）
一八〇、瞿曇彌經
分別布施經　（施　護）
一八二、馬邑經
增四九品の八經

頂生王故事經　（法　炬）
文陀竭王經　（曇無讖）
六一、牛糞喩經
雜一〇卷の九經
六二、頻鞞娑邏王迎佛經
頻婆娑羅王經　（法　賢）
十誦律二四卷
五分律一六卷
四分律三三卷
撰集百緣經 19
六四、天使經
鐵城泥犁經　（竺曇無蘭）
閻羅王五天使者經　（慧　簡）
泥犁經（の後半）　（竺曇無蘭）
增三二品の四經
六六、說本經
古來世時經　（失　譯）
六七、大天捺林經
六度集經 87
法句譬喩經四卷
增序品及五〇品の四經
六八、大善見王經
長阿含二卷遊行經
七〇、轉輪王經
長阿含七卷轉輪聖王修行經
七一、蜱肆經
長阿含七卷弊宿經
大正句王經　（法　賢）
鳩摩迦葉經（缺）　（失　譯）
僮迦葉解難經（缺）　（失　譯）

七二、長壽王本起經
六度集經 10
五分律二四卷
四分律四三卷
增二四品の八經
七四、八念經
阿那律八念經　（支　曜）
增四二品の六經
八三、長老上尊睡眠經
離睡經　（竺法護）
八五、眞人經
是法非法經　（安世高）
八七、穢品經
求欲經　（法　炬）
增二五品の六經
八八、求法經
增一八品の三經
八九、比丘請經
受歲經　（竺法護）
九三、水淨梵志經
梵志計水淨經　（失　譯）
雜四四卷の八經
別雜五卷の一五經
增一三品の五經
九七、大因經
大生義經　（施　護）
參照長阿含一三卷大緣方便經
參照人本欲生經　（安世高）
緣起經　（玄　奘）
阿難惑經（缺）．

人從所成經（缺）
九八、念處經
增一二品の一經
九九、苦陰經
苦陰經　（失　譯）
增二一品の九經
一〇〇、苦陰經
釋摩男本四子經　（支　謙）
苦陰因事經　（法　炬）
增四一品の一經
一〇四、優曇婆邏經
長阿含八卷散陀那經
尼拘陀梵志經　（施　護）
一〇六、想經
樂想經　（竺法護）
一一一、達梵行經
漏分布經　（安世高）
一一二、阿奴波經
阿耨風經　（竺曇無蘭）
一一三、諸法本經
諸法本經　（支　謙）
一一五、蜜丸喩經
增四〇品の一〇經
一一六、瞿曇彌經
瞿曇彌記果經　（慧　簡）
一二一、請請經
五分律二九卷
四分律四八卷
受新歲經　（竺法護）
新歲經　（曇無蘭）

146. Nandakovāda
雜一一巻の四經
147. Cūḷa-Rāhulovāda
S. 35, 121 參
雜八巻の一八經
148. Chachakka
說處經(中八六)
雜一三巻の二二—二九經
149. Mahāsaḷāyatana
雜一三巻の二經
150. Nagaravindeyya
雜一一巻の八經
151. Piṇḍapātapārisuddhi
雜九巻の八經
增四五品の六經
152. Indriyabhāvanā
雜一一巻の一〇經

四　中阿含各經の異譯

以上漢譯『中阿含』、巴利『中部』の相互對照を擧げたからして、以下『中阿含』二百二十二經の中、種々の譯者によりて單譯されたもの、並に他の三阿含その他に攝含されてゐるものを擧げることゝする。表に上と重複する箇所の多きことは相互の關係を明にする上に於て止むを得ざることかと思ふ。

一、善法經
七知經　（支　謙）
增三九品の一經
二、晝度樹經
園生樹經　（施　護）
增三九品の二經
三、城喩經
增三九品の四經
四、水喩經
鹹水喩經　（失　譯）
增三九品の三經
五、木積喩經
增三三品の一〇經
七、世間福經
增四〇品の七經
八、七日經
薩鉢多酥哩踰捺野經　（法　賢）
增四〇品の一經
九、七車經
增三九品の一〇經
一〇、漏盡經
一切流攝守因經　（安世高）
增四〇品の六經
一二、羅云經
戒羅云經(缺)　（竺法護）
一八、師子經
五分律二二巻
四分律四二巻

二四、師子吼經
增三七品の六經
二八、敎化病經
增五一品の八經
三一、分別聖諦經
四諦經　（安世高）
四諦經(缺)　（康孟祥）
增二七品の一經
三四、薄拘羅經
尊者薄拘羅經(缺)　（安世高）
三五、阿修羅經
增四二品の四經
三六、地動經
增四二品の五經
三七、瞻波經
恒水經　（法　炬）
法海經　（失　譯）
海八德經　（鳩摩羅什）
五分律二八巻
增四八品の二經
四八、戒經
雜一八巻の六經
五一、本際經
本相猗致經　（安世高）
緣本致經　（失　譯）
五八、七寶經
輪王七寶經　（施　護）
雜二七巻の一〇經
增三九品の七經
六〇、四洲經

116. Isigiri
　増三八品の七經
　Mtu. p. 357 ff參
117. Mahā-Cattārīsaka
　聖道經(中一八九)
118. Ānāpānasati
　治意經(失譯)
119. Kāyagatāsati
　念身經(中八一)
120. Saṅkhāruppatti
　意行經(中一六八)
　A. IV. 123, 124
121. Cūḷa-Suññatā
　小空經(中一九〇)
122. Mahā-Suññatā
　大空經(中一九一)
123. Acchariyabbhutadhamma
　未曾有法經(中三二)
124. Bakkula
　薄拘羅經(中三四)
125. Dantabhūmi
　調御地經(中一九八)
126. Bhūmija
　浮彌經(中一七三)
127. Anuruddha
　有勝天經(中七九)
128. Upakkilesa
　長壽王本起經(中七二)
　Mv. X. 2. 2—20
　Jāt. 428
　四分律四三卷
　五分律二四卷
　増二四品の八經
　六度集經 10 長壽王
129. Bālapaṇḍita
　癡慧地經(中一九九)
　泥犁經(竺曇無蘭)
130. Devadūta
　天使經(中六四)
　鐵城泥犁經(竺曇無蘭)
　泥犁經の後半
　閻羅王五天子者經(慧簡)
　A. III. 35
　増三二品の四經
　五苦章句經三
131. Bhaddekaratta
132. Ānanda-Bhaddekaratta
　阿難說經(中一六七)
133. Mahā-Kaccāna-Bhaddekaratta
　溫泉林天經(中一六五)
134. Lomasakaṅgiya-Bhaddekaratta
　釋中禪室尊經(中一六六)
　尊上經(竺法護)
135. Cūḷa-Kammavibhaṅga
　鸚鵡經(中一七〇)
　分別善惡報應經(天息災)
　兜調經(失譯)
　鸚鵡經(求那跋陀羅)
　佛爲首迦長者說業報差別經(瞿曇法智)
　淨意優婆塞所問經(施護)
136. Mahā-Kammavibhaṅga
　分別大業經(中一七一)
137. Saḷāyatanavibhaṅga
　分別六處經(中一六三)
138. Uddesavibhaṅga
　分別觀法經(中一六四)
139. Araṇavibhaṅga
　拘樓瘦無諍經(中一六九)
140. Dhātuvibhaṅga
　分別六界經 中一六二)
141. Saccavibhaṅga
　分別聖諦經(中三一)
　四諦經(安世高)
　増二七品の一經
　D. 22, Mahāsatipaṭṭhāna 參
142. Dakkhiṇāvibhaṅga
　瞿曇彌經(中一八〇)
　分別布施經(施護)
143. Anāthapiṇḍikovāda
　敎化病經(中二八)
　増五一品の八經
144. Channovāda
　雜四七卷の二六經參
　S. 35, 87 參
145. Puṇṇovāda
　雜一三卷の八經
　S. 35, 88
　雜八卷の三五經
　滿願子經(失譯)

法句譬喩經四卷南王
Bharhut 24, Maghā-deviya; Jāt. 9

84. Madhuriya
雜二〇卷の一二經

85. Bodhirājakumāra
五分律一〇卷

86. Aṅgulimāla
雜三八卷の一六經
別雜一卷の一六經
鴦崛髻經(法炬)
鴦掘摩經(竺法護)
增三八品の六經
央掘魔羅經(求那跋陀羅)
初三偈、Dhp. 172, 173, 382; Thera. 871—3

87. Piyajātika
愛生經(中二一六)
增一三品の三經

88. Bāhitika
生經二卷子命過經
婆羅門子命終愛念不離經(安世高)

89. Dhammacetiya
鞞訶提經(中二一四)

90. Kaṇṇakatthala
法莊嚴經(中二一三)
增三八品の一〇經

91. Brahmāyu
一切智經(中二一二)
梵摩經(中一六一)
梵摩渝經(支謙)

偈(Pubbenivāsaṁ)、A. i. 165, 167

92. Sela
增四九品の六經
Sn. Selasutta; Mv. VI. 35 參
偈(初二〇)、Thera 818 37; (終四)、Thera 838—41

93. Assalāyana
阿攝和經(中一五一)
頞波羅延問種尊經(竺曇無蘭)

94. Ghoṭamukha

95. Caṅki

96. Esukāri
鬱瘦歌邏經(中一五〇)

97. Dhānañjāni
梵志陀然經(中二七)

98. Vāseṭṭha
Sn. Vāseṭṭhasutta

99. Subha
鸚鵡經(中一五二)
鸚鵡經(求那跋陀羅)

100. Saṅgārava

101. Devadaha
尼乾經(中一九)

102. Pañcattaya

103. Kinti

104. Sāmagāma
周那經(中一九六)
息諍因緣經(施護)

105. Sunakkhatta

106. Āṇañjasappāya
淨不動道經(中七五)

107. Gaṇaka-Moggallāna
算數目犍連經(中一四四)
數經(法炬)

108. Gopaka-Moggallāna
瞿默目犍連經(中一四五)

109. Mahā-Puṇṇama
雜二卷の二六經
S. 22, 82

110. Cūḷa-Puṇṇama
同上

111. Anupada

112. Chabbisodhana
說智經(中一八七)

113. Sappurisa
眞人經(中八五)
是法非法經(安世高)

114. Sevitabbāsevitabba
A. IX. 6
A. X. 54

115. Bahudhātuka
多界經(中一八一)
四品法門經(法賢)

五分律二四卷

49. Brahmanimantaṇika
梵天請佛經(中七八)

50. Māratajjaniya
降魔經(中一三一)
弊魔試目連經(支謙)
魔嬈亂經(失譯)

51. Kandaraka

52. Aṭṭhakanāgara
八城經(中二一七)
十支居士八城人經(安世高)
A. XI. 17

53. Sekha
雜四三卷の一三經參照

54. Potaliya
晡多利經(中二〇三)

55. Jīvaka

56. Upāli
優婆利經(中一三三)

57. Kukkuravatika

58. Abhayarājakumāra

59. Bahuvedaniya
雜一七卷の三二經
S. 36. 19

60. Apaṇṇaka

61. Ambaṭṭhikā-Rāhulovāda
羅云經(中一四)

62. Mahā-Rāhulovāda
增一七品の一經

63. Cūḷa-Māluṅkya
箭喩經(中二二一)
箭喩經(失譯)

64. Mahā-Māluṅkya
五下分結經(中二〇五)

65. Bhaddāli
跋陀和利經(中一九四)
增四九品の七經

66. Laṭukikopama
迦樓烏陀夷經(中一九二)

67. Cātumā
增四五品の二經
舍利弗摩訶目連遊四衢經(康孟詳)

68. Naḷakapāna
娑鷄帝三族姓子經(中七七)

69. Gulissāni
瞿尼師經(中二六)

70. Kiṭāgiri
阿濕貝經(中一九五)

71. Tevijja-Vacchagotta

72. Aggi-Vacchagotta
雜三四卷の二四經
別雜一〇卷の七經

73. Mahā-Vacchagotta
雜三四卷の二六經

別雜一〇卷の九經

74. Dīghanakha
雜三四卷の三一經
別雜一一卷の五經

75. Māgandiya
鬚閑提經(中一五三)
偈、Dhp. 204

76. Sandaka
雜三五卷の四經
別雜一一卷の九經

77. Mahā-Sakuludāyi
箭毛經(中二〇七)

78. Samaṇamaṇḍika
五支物主經(中一七九)

79. Cūḷa-Sakuludāyi
箭毛經(中二〇八)

80. Vekhanassa
鞞摩那修經(中二〇九)
鞞摩肅經(求那跋陀羅)

81. Ghaṭikāra
鞞婆陵耆經(中六三)

82. Raṭṭhapāla
賴吒和羅經(中一三二)
賴吒和羅經(支謙)
護國經(法賢)
初偈、Dhp. 147; Thera. 769

83. Makhādeva
大天捺林經(中六七)
增序品、五〇品の四經
六度集經 87 摩調王

16. Cetokhila
心穢經(中二〇六)
増五一品の四經
17. Vanapattha
林經(中一〇七、八)
18. Madhupiṇḍika
蜜丸喩經(中一一五)
増四〇品の一〇經
19. Dvedhāvitakka
念經(中一〇二)
20. Vitakkasanthāna
増上心經(中一〇一)
21. Kakacūpama
牟犁破群那經(中一九三)
増五〇品の八經
22. Alagaddūpama
阿黎吒經(中二〇〇)
増四三品の五經
23. Vammika
蟻喩經(施護)
雑三八巻の一八經
増三九品の九經
別雑一巻の一七經
同一九巻の一、二經
24. Rathavinīta
七車經(中九)
増三九品の一〇經
25. Nivāpa
獵師經(中一七八)
26. Ariyapariyesana
羅摩經(中二〇四)
本事經四巻
偈, D. 14; Mv. I. 6. 8
27. Cūḷa-Hatthipadopama
象跡喩經(中一四六)
28. Mahā-Hatthipadopama
象跡喩經(中三〇)
29. Mahā-Sāropama
増四三品の四經
30. Cūḷa-Sāropama
31. Cūḷa-Gosiṅga
牛角娑羅林經(中一八五)
32. Mahā-Gosiṅga
牛角娑羅林經(中一八四)
生經二巻比丘各言志經
増三七品の三經
33. Mahā-Gopālaka
雑四七巻の九經
増四九品の一經
A. XI. 18
放牛經(鳩摩羅什)
34. Cūḷa-Gopālaka
雑四七巻の八經
増四三品の六經
35. Cūḷa-Saccaka
雑五巻の八經
増三七品の一〇經
36. Mahā-Saccaka
37. Cūḷa-Taṇhāsaṅkhaya
増一九品の三經
雑一九巻の一、二經參照
38. Mahā-Taṇhāsaṅkhaya
嗏帝經(中二〇一)
39. Mahā-Assapura
馬邑經(中一八二)
増四九品の八經
40. Cūḷa-Assapura
馬邑經(中一八三)
41. Sāleyyaka
42. Velañjaka
43. Mahā-Vedalla
大拘絺羅經(中二一一)
雑九巻の二七經
44. Cūḷa-Vedalla
法樂比丘尼經(中二一〇)
45. Cūḷa-Dhammasamādāna
受法經(中一七四)
46. Mahā-Dhammasamādāna
受法經(中一七五)
應法經(竺法護)
47. Vīmaṁsaka
求解經(中一八六)
48. Kosambiya
増二四品の八經
Mv. Kosambī 1-2; Jāt. 428
四分律四三巻

Buddho の初巻を出したといふことである。しかしこれは恐くこの初の五十經限りで後の百二經には及ばなかつたらうと思ふ。英文では Bhikkhu Sīlacāla は一九一二年に The First Fifty Discourses from the Collection of the Medium Length Discourses (Majjhima-Nikāya) of Gotama the Buddha といふ名目で初め五十經の英譯を公にした。これもこの五十經限りで後は續かなかつたやうである。然るに一九二五―七年に至り、Lord Chalmers は Sacred Books of the Buddhists の五巻六巻として、Further Dialogues of the Buddha の名目の下に巴利『中部』の全譯を公にした。此處にこれを『佛陀の續對話篇』と呼ぶのは同じ「佛教徒聖書」の二、三、四巻として T. W. Rhys Davids 教授及び夫人が巴利『長部』を Dialogues of the Buddha の名目で譯出したからである。即ち Lord Chalmers は長、中兩部を共に佛の對話集なりと見るに於て Rhys Davids 教授と同意見だといふのである。(括弧中の數字は中阿含の番號)

1. Mūlapariyāya
   - 想經(中一〇六)
   - 樂想經(竺法護)
2. Sabbāsava
   - 漏盡經(中一〇)
   - 一切流攝守因經(安世高)
   - 增四〇品の六經
3. Dhammadāyāda
   - 求法經(中八八)
   - 增一八品の三經
4. Bhayabherava
   - 增三一品の一經
5. Anaṅgaṇa
   - 穢品經(中八七)
   - 求欲經
   - 增二五品の六經
6. Ākaṅkheyya
   - 願經(中一〇五)
   - A. X. 71
7. Vatthūpama
   - 水淨梵志經(中九三)
   - 梵志計水淨經(失譯)
   - 增一三品の五經
   - 後半、雜四四卷の八經、別雜五卷の一六經
8. Sallekha
   - 周那問見經(中九一)
9. Sammādiṭṭhi
   - 後半、增四九品の五經
10. Satipaṭṭhāna
    - 念處經(中九八)
    - 增一二品の一經
    - D. 22, Mahāsatipaṭṭhāna
11. Cūḷa-Sīhanāda
    - 師子吼經(中一〇三)
12. Mahā-Sīhanāda
    - 身毛喜豎經(惟淨等)
    - 增四六品の四經
    - 增五〇品の六經
    - 雜二六卷の四七經
    - A. X. 21
    - 後半、增三一品の八經
    - 信解智力經(法賢)
13. Mahā-Dukkhakkhandha
    - 苦陰經(中九九)
    - 增二一品の九經
    - 苦陰經(失譯)
14. Cūḷa-Dukkhakkhandha
    - 苦陰經(中一〇〇)
    - 增四一品の一經
    - 苦陰因事經(法炬)
    - 釋摩男本四子經(支謙)
15. Anumāna
    - 比丘請經(中八九)
    - 受歲經(竺法護)

中阿含經解題（一二）

一　飜譯次第（既出）

二　漢巴兩中阿含の對照（既出）

三　巴利「中部」と漢譯「中阿含經」

巴利『中部』Majjhima-Nikāya は百五十二經を含み、漢譯『中阿含經』は二百二十二經を含めること、この兩者を對照すると、互に一致するのは百經弱であることは前回既に述べたところである。巴利『中部』百五十二經は Mūla-paṇṇāsa（根本五十）、Majjhima-paṇṇāsa（中部五十）、Upari-paṇṇāsa（過餘五十）の三篇に分たれ、各篇は又一々、五の Vagga（品）に分たれて居る。而して各品は何れも十經を有し、唯最後の一品のみが十二經を有する。これは漢譯でも各品の經數に七、九、十一、十五、十六、二十五などゝいふ不規律の例外もないではないが、その多數は各品十經を含むを原則とせることゝ併せ考ふれば、左の表に見える通り、經の題目、順序、品の分類などの上、兩者の間に多大の相違あるにも拘らず、その間に共通の原則もあつたといふことを知り得るかと思ふ。前回吾人が「漢巴兩中阿含の對照」を書いた後、大谷大學の赤沼智善氏が『漢巴四部四阿含互照錄』を公にせられたので、巴漢四部四阿含の關係は益々明瞭になつて來た。左に掲ぐる二種の對照表は全體同書より抜き書きせるもので、余自ら追加せるは僅々十數の例に止まる。序ながらこの苦心多大にして而も餘り世に認められざる名篇を出された同氏に對して滿腔の謝意を表して置きたいと思ふ。

巴利『中部』には錫、緬、暹の版本があり、巴利原典刊行會からはローマ字の本が出版されて居る。卽ち一八八八年に V. Trenckner は初巻（七十六經を含む）を、一八九八―九年に R. Chalmers は中巻と後巻（兩巻七十六經を含む）とを出版した。Buddhaghosa の作なるその註釋書 Papañca-sūdanī も亦一巻は一九二二年に既に同會から刊行された。

この經の歐文譯はといへば、先づ獨文としては K. E. Neumann は一八九五年 Die Reden Gotamo Buddhos の第一巻を、一八九九年と一九〇一年とに、その第二巻、三巻を出して全部完結せしめた。驚くべきことはこのノイマン博士は以太利 Lorenzo の Giuseppe 教授と共力して、その以譯 I Discorsi di Gotamo

卷の第三十

卷の第三十一

目次

（本丁）（通頁）

(36)

阿含部 五

立花俊道譯

國譯一切經

大東出版社藏版